

2015 年度

東洋大学審査学位論文

アルダナーリーシュヴァラ研究
—プラーナ聖典における創造神話の構造分析—

文学研究科仏教学専攻博士後期課程

4120090001 澤田 容子

はじめに

人間は古来より、自らが存在する世界というものに対し、様々な角度から理解しようと努めてきた。科学という手段によって数値化し具体化することで世界を把握しようとする者、冒険という手段によって自らの五感で世界を認識しようとする者、哲学という手段によって世界の真理を突き止めようとする者など、様々な人が様々な方法で未知なるものである世界と向き合ってきた。彼らの行動の根底にあったものは、恐らくただの知識欲だけではなかっただろう。無知から来る未知なるものへの恐怖を乗り越え、自らが存在する世界の安寧への希求ではなかっただろうか。

これらを理解するにあたって、古代インド人たちは神という存在を考え出した。この世は神々のリーラー（遊戯）である。この言葉に集約されるように、ありとあらゆるものを神々と結び付けて考えた。人々に恵みをもたらす太陽や大地、水、火など、人々に害を与える天災や疫病など、ありとあらゆるものが神であり、神を崇め鎮めることで安寧が得られると考えた。さらに、世界は神が創り、維持し、壊し、また創り直し、維持し、壊し、また創り直し…という無始無終の循環によって世界に秩序が与えられ、安寧がもたらされるとも考えた。

本論文では、そのような世界の循環の一端を担うアルダナーリーシュヴァラの生類創造神話について論じる。アルダナーリーシュヴァラは、インド三大神¹の一柱であるシヴァ神の化身とされている。シヴァ神の前身であるとされるルドラは稲妻や暴風などを司る神であるが、ルドラが発展して人々の信仰を得るようになった姿であるシヴァ神は、ブラフマー神やヴィシュヌ神が創造神の役割を持つとされるのと同様に、創造神として描かれる多くの神話を持つ。その中の1つが創造神としてのアルダナーリーシュヴァラである。アルダナーリーシュヴァラの姿は、世界の他地域の神話に述べられる神々の多くと同じように人間に似た形をしているが、しかし1つだけ非常な特異性を持つ。それは、「右半身が男性（シヴァ神）であり、左半身が女性（シヴァ神の配偶神）である」という特徴である。この姿は、世界の神々の中でも類を見ない実に独特な姿であろう。このような男女両性を具有する体を左右二分し、それぞれの半身によって原始の父と原始の母になることで生類を生み出していくというのが、アルダナーリーシュヴァラの生類創造神話である。現在インドの人口の8割を占めるヒンドゥー教には創造の役割を持つ神が何柱か存在するが、男女両性を併せ持つがゆえに生類を創造できるという、直接的で分かりやすい姿をした神はアルダナーリーシュヴァラだけであり²、現在でも人気の高い神である。そのため、アルダナーリーシュヴァラの役割や性格は現在に至るまで

¹ ブラフマー神、シヴァ神、ヴィシュヌ神のことである。

² 男女に分裂する創造者にはブラフマー神もいる。しかし、神格として確立しているのは、アルダナーリーシュヴァラのみである。

に、男女両性を持つ創造者という役割を超えて発展し続け、夫婦愛や性愛、世界との一体化までもを表す存在と考えられるようになった。

このように本論文は、アルダナーリーシュヴァラによる生類創造神話を研究することによって、インド思想やヒンドゥー文化の一端を解明するだけでなく、世界中に見られる創造神話や神観念、現代社会におけるジェンダー理解や性の問題、そして人間が長きに渡り理解しようと努めてきた「世界とは何か」という疑問に対し、何らかの気づきを提言しようとするものである。

本論文における序論第1節では、アルダナーリーシュヴァラの役割や図像、異名などを説明し、アルダナーリーシュヴァラに関する先行研究と本論文で取り扱う男女に分裂し創造を行なうアルダナーリーシュヴァラの創造神話について概説する。第2節では、プラーナ聖典について説明する。プラーナ聖典とは、様々な人々によって様々な時代に様々な内容について、語られたり書かれたりした、膨大な量の文献群のことである。ここでは、成立年代に関する問題と使用言語、プラーナパンチャラクシャナの問題、18マハープラーナ、宗派性について説明した後、本論文で引用するプラーナ聖典の概略を述べる。第3節では、本論文の趣旨を示すため、まずアルダナーリーシュヴァラが登場する以前の時代に描かれていた男女に分裂する創造者たちに関して、プラーナ聖典より古いとされている文献や先行研究書を用いて説明する。そして、本論文で取り扱うアルダナーリーシュヴァラが男女に分裂し創造を行なう神話（以下、アルダナーリーシュヴァラ創造神話と略す）とブラフマー神が男女に分裂して創造を行なう神話（以下、ブラフマー創造神話と略す）についての説明、アルダナーリーシュヴァラの定義、本論文の目的を述べる。

第1章では、プラーナ聖典と『マヌ法典』に見られる17のブラフマー創造神話の構造を、構成要素別の分析と神話全体の流れのパターン化によって考察する。第1節では、初めに神話を構成する記述を神話素のようなまとまった内容ごとに分割したものを構成要素とし、全ての神話を構成要素毎に分類する。それから構成要素別の分析によって各構成要素に含まれる記述の同一性を明確にする。第2節では、まず第1節において分類した構成要素を神話の流れに沿って配置することで、神話全体の構造の共通性を明らかにする。その後、神話の流れの形を考察する。第3節において小結を述べる。

第2章第1節と第2節では、第1章で行なったのと同様の方法を用いて、プラーナ聖典に見られる16のアルダナーリーシュヴァラ創造神話の構造を明らかにする。第1節では、各構成要素に含まれる記述の同一性を明確にし、第2節では、神話全体の構造の共通性を明らかにした後、パターン化する。その後、アルダナーリーシュヴァラという神格の成立について考察する。第3節では小結を述べる。

第3章では、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の構造を比較する。第1節では、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話に共通する構成要素を比較し、それらに共通性があるかどうかを検討する。第2節では、まずブ

ラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の全体的な流れのパターンを比較し、同一の神話のヴァリエーションかどうかを考察する。そして双方の神話のパターンを比較し、それらが作られた順序、すなわち「男女に分裂し創造を行なう創造者」の神話の変遷を考察する。第 3 節では小結を述べる。

結論では、本論文において行なった研究全体を総括し、結論する。

以上のように、本論文ではアルダナーリーシュヴァラ創造神話の構造と変遷について論じる。また、巻末にはこれらの考察に用いたプラーナ聖典のサンスクリット原典と試訳を第 2 部資料編として掲載する。

目次

はじめに.....	I
目次.....	V
図表目次.....	IX
略号.....	XI
第1部 本編.....	1
序論.....	3
第1節 アルダナーリーシュヴァラについて.....	3
第1項 役割と概念.....	3
第2項 図像.....	4
第3項 アルダナーリーシュヴァラの異名.....	6
第4項 先行研究.....	7
第5項 分裂する創造者としてのアルダナーリーシュヴァラ.....	8
第2節 プラーナ聖典について.....	8
第1項 成立年代に関する問題.....	9
第2項 使用言語.....	9
第3項 プラーナパンチャラクシャナ (purāṇa-pañcalakṣaṇa).....	9
第4項 18 マハープラナー.....	10
第5項 宗派性.....	11
第6項 本論文で引用するプラナー聖典.....	12
第3節 本論文の趣旨.....	14
第1項 男女に分裂する創造者たち.....	15
第2項 ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話.....	23
第1章 ブラフマー創造神話.....	27
第1節 ブラフマー創造神話の構成要素.....	29
第1項 構成要素別分類.....	29
第2項 構成要素 A の分析.....	33
第3項 構成要素 B の分析.....	38
第4項 構成要素 C の分析.....	50
第5項 構成要素 D の分析.....	52
第6項 構成要素 E の分析.....	57
第7項 構成要素 F の分析.....	60
第8項 構成要素 G の分析.....	73
第2節 神話全体の流れ.....	80
第3節 小結.....	84

第2章 アルダナーリーシュヴァラ創造神話.....	87
第1節 アルダナーリーシュヴァラ創造神話の構成要素.....	89
第1項 構成要素別分類	89
第2項 構成要素 A の分析	93
第3項 構成要素 C の分析	105
第4項 構成要素 D の分析	106
第5項 構成要素 E の分析	107
第6項 構成要素 F の分析	108
第7項 構成要素 G の分析	113
第8項 構成要素 H の分析	115
第9項 構成要素 I の分析	118
第10項 構成要素 J の分析	125
第11項 構成要素 K の分析	131
第12項 構成要素 L の分析	134
第13項 構成要素 M の分析	139
第14項 構成要素 N の分析	140
第15項 構成要素 O の分析	144
第16項 構成要素 P の分析	145
第2節 神話全体の流れ	147
第3節 小結	155
第3章 ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の比較	159
第1節 構成要素	159
第1項 構成要素の有無	159
第2項 構成要素 A の比較	161
第3項 構成要素 C の比較	168
第4項 構成要素 D1 の比較	170
第5項 構成要素 E1 の比較	172
第6項 構成要素 F1、I1 の分析	175
第7項 構成要素 F1、P1 の分析	179
第8項 構成要素 F2 の分析	180
第9項 構成要素 G1 の分析	187
第10項 構成要素 F3 の分析と G3 の分析	190
第2節 神話全体の流れの比較	193
第1項 神話の流れから見る共通性	193
第2項 神話の変遷	194
第3節 小結	197

結論.....	199
文献一覧.....	203
第2部 資料編.....	209
<i>Agni-purāṇa</i> :Ā 版（底本）、N 版、AITM 版（英訳）	211
<i>Bhāgavata-purāṇa</i> :N 版（底本）、AITM 版（英訳）	216
<i>Brahma-purāṇa</i> :N 版（底本）、AITM 版（英訳）	219
<i>Brahmāṇḍa-purāṇa</i> :M 版（底本）、AITM 版（英訳）	225
<i>Kālikā-purāṇa</i> :C 版（底本）、N 版（サンスクリット、英訳）	234
<i>Kūrma-purāṇa</i> :N 版（底本）、AITM 版（英訳）	266
<i>Līṅga-purāṇa</i> :N 版（底本）、AITM 版（英訳）	273
<i>Mārkaṇḍeya-purāṇa</i> :E 版（底本）、B 版、B 版（英訳）	286
<i>Matsya-purāṇa</i> :Ā 版（底本）、H 版（サンスクリット、英訳）	289
<i>Nārada-purāṇa</i> :N 版（底本）、AITM 版（英訳）	294
<i>Padma-purāṇa</i> :N 版（底本）、AITM 版（英訳）	298
<i>Śiva-purāṇa</i> :P 版（底本）、N 版、AITM 版（英訳）	305
<i>Skanda-purāṇa</i> :C 版（底本）、N 版、AITM 版（英訳）	333
<i>Vāmana-purāṇa</i> :A 版（底本、英訳）	362
<i>Varāha-purāṇa</i> :B 版（底本）、AITM 版（英訳）	364
<i>Vāyu-purāṇa</i> :Ā 版（底本）、N 版、AITM 版（英訳）	367
<i>Viṣṇu-purāṇa</i> :N 版（底本）、H 版、AITM 版（英訳）	373

図表目次

表 1 アルダナーリーシュヴァラの図像の一例	4
表 2 アルダナーリーシュヴァラと同じ姿を取る神の左右の者の名前一覧	6
表 3 プラーナ聖典において見つけられた表 2 以外の組み合わせの名前一覧	6
表 4 神話の構成要素と当該箇所を対応させた表（ブラフマー創造神話）	32
表 5 構成要素 F2 における聖者の名（ブラフマー創造神話）	62
表 6 構成要素 G1 におけるトリグナの記述の流れ（ブラフマー創造神話）	74
表 7 神話の構成要素と神話の流れを対応した表（ブラフマー創造神話）	81
表 8 神話の構成要素から F、G を除いた神話の流れを対応した表（ブラフマー創造神話）	82
表 9 神話全体の流れ【ブラフマー基本形】	83
表 10 神話の構成要素と当該箇所を対応させた表（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）	92
表 11 構成要素 F2 における聖者の名（アルダナーリーシュヴァラ創造神話） ...	108
表 12 構成要素 I におけるアルダナーリーシュヴァラの描写	119
表 13 神話の構成要素と神話の流れを対応した表（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）	148
表 14 神話の構成要素から F、G、H、M2、O、P を除いた神話の流れを対応した表（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）	149
表 15 神話全体の流れ【アルダナーリーシュヴァラ基本形】	151
表 16 神話全体の流れ【アルダナーリーシュヴァラ変化形 1】	152
表 17 神話全体の流れ【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-1】	153
表 18 神話全体の流れ【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-2】	155
表 19 ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話における各構成要素の有無	160
表 20 構成要素 F1①、②と I1①、②、⑦におけるルドラ（アルダナーリーシュヴァラ）の描写	176
表 21 構成要素 F2 における聖者の名	181
表 22 構成要素 F2 における聖者たちの人数の描写	182

略号

Agni-p.	<i>Agni-purāṇa</i> (Ā 版)
Bhāgavata-p.	<i>Bhāgavata-purāṇa</i> (N 版)
Brahma-p.	<i>Brahma-purāṇa</i> (N 版)
Brahmāṇḍa-p.	<i>Brahmāṇḍa-purāṇa</i> (M 版)
Kālikā-p.	<i>Kālikā-purāṇa</i> (C 版)
Kūrma-p.	<i>Kūrma-purāṇa</i> (N 版)
Liṅga-p.	<i>Liṅga-purāṇa</i> (N 版)
Mārkaṇḍeya-p.	<i>Mārkaṇḍeya-purāṇa</i> (E 版)
Matsya-p.	<i>Matsya-purāṇa</i> (Ā 版)
Nārada-p.	<i>Nārada-purāṇa</i> (N 版)
Padma-p.	<i>Padma-purāṇa</i> (N 版)
Śiva-p.	<i>Śiva-purāṇa</i> (P 版)
Skanda-p.	<i>Skanda-purāṇa</i> (C 版)
Vāmana-p.	<i>Vāmana-purāṇa</i> (A 版)
Varāha-p.	<i>Varāha-purāṇa</i> (B 版)
Vāyu-p.	<i>Vāyu-purāṇa</i> (Ā 版)
Viṣṇu-p.	<i>Viṣṇu-purāṇa</i> (N 版)
AITM	<i>Ancient Indian Tradition and Mythology</i> 所収のサンスクリット原典
A 版	All India Kashiraj Trust 出版のサンスクリット原典
Ā 版	Ānandāśrama Saṃskṛt Series 所収のサンスクリット原典
B 版	<i>Bibliotheca Indica</i> 所収のサンスクリット原典
C 版	Chowkhanba Series 所収のサンスクリット原典
E 版	Eastern Book Linkers 出版のサンスクリット原典と英訳
H 版	Horace Hayman Wilson によるサンスクリット原典と英訳
M 版	Motilal Banarsidass 出版のサンスクリット原典と英訳
N 版	Nag Publishers 出版のサンスクリット原典
P 版	Paṇḍita-pustakālaya 出版のサンスクリット原典

上記における（ ）の版は、各プラーナで使用した底本を示す。本文中に特別な註記がない場合は、底本を使用している。

第 1 部 本編

序論

第1節 アルダナーリーシュヴァラについて

第1項 役割と概念

アルダナーリーシュヴァラ (ardha-nārī-iśvara) は、サンスクリット語で ardha「半分」、nārī「女性」、īśvara「シヴァ神」の3語から成る複合語で、「半身が女性であるシヴァ神³⁾」を意味する。

その役割は創造や生産が主である。1つの身体に男性と女性を持っていることから、男女からなされること、すなわち子をもうけることがその役割の根底にある概念と考えられる。先行研究では、アルダナーリーシュヴァラは男女という対極にある二者の合一したものゆえに、完全なるもの、全体であるものであると述べられている⁴⁾。ミルチャ・エリアーデによる両性具有の概念も「その中に一切の可能性が結合されて存在する始源の全体性の明白な徴⁵⁾」を持つ者、すなわち統一性、全体性を持つ者であるとされ、光と影、神と悪魔、天と地、善と悪などと同様に2つの対立するものであり、それらの融合体ゆえに全てであり完全であると述べている⁶⁾。他にも J. N. Banerjea はアルダナーリーシュヴァラを「原始の宇宙の両親」と呼び、宗派的に見るとシヴァ派とシャークタ派を象徴していると述べている⁷⁾。このようにアルダナーリーシュヴァラは、男性と女性の結合体ゆえに世界を生み出す者としての役割を担っており、シヴァ神とシヴァ神の配偶者である女神であることにより宗派の習合をも象徴する存在であるとされる。さらに男女の結合から創造を行なうという役割が転じて、結婚や男女間の愛情を象徴するという役割も付加されるようになっていった。

³⁾ 「半身に女性を持つシヴァ神」という訳もあるが、意味が不明瞭になる可能性があるので本論文ではこのように訳した。

⁴⁾ [Kinsley 1986 p. 52][Stutley 2006 p. 9]

⁵⁾ [エリアーデ 1973 p. 143]

⁶⁾ [エリアーデ 1973 pp. 102-167]

⁷⁾ [Banerjea 1956 pp. 540-552]による。シヴァ派とシャークタ派があると指摘する研究者は他にも Donaldson[Donaldson 2007 p. 1103]や Stutley[Stutley 2006 p. 9]がいる。

第2項 図像

図像学的には、身体を中心から縦に二分し一方をシヴァ神、他方を女神（シヴァ神の配偶神）とする形を基本としている。体の左右が男女であること以外の特徴、例えば手足の本数や持物、装飾品などには定まった形式はなく、むしろそれぞれの図像や文献が作られた時代や場所における文化の影響を色濃く残す姿となっている。以下に、プラナー聖典のいくつかの記述に見られるアルダナーリーシュヴァラの図像的特徴についてまとめた表を示す（表1）。

表 1 アルダナーリーシュヴァラの図像の一例

文献	頭部の特徴		手足の特徴	身体全体の特徴	その他
Brahmāṇḍa-p. Lm. 44.48			2つの索綱、腕輪、 与願印	紅色と金色の肌	パールヴァティー とシヴァの特徴
Kālikā-p. 45.158-174	右 (シヴァ)	蓬髪束、雄牛のよう な目、大きな鼻、 長い顎鬚、白く大き な唇、長い歯、ヘビ の耳飾り、首の半分 まで青黒い	活動的な美しい腕、 ヘビの腕輪、腿から 蓮のような足にか けて粗くつながっ ているしっかりと した尻	恐ろしいトラ皮の 布を着る、灰が塗ら れている	
	左 (パールヴァティー)	飾られた編髪を頭の 周りに巻きつけてい る、小鹿のような目、 胡麻の花のような 鼻、赤味がかった美 しい歯、染められた 唇、金の飾りの耳飾 り、真珠の首飾り	ゾウの鼻のような 腕、手首と上腕の腕 輪、指輪、バナナの 木の幹のような腿、 美しい踵、柔らかな 足、非常に魅力的で 美しく柔らかく大 きな尻	金色がかった白色 の肌、ローマーヴァ リー、柔らかい腰布 を巻く、白檀が塗ら れている	
Liṅga-p. 2.19.6-8	蓬髪冠、4つの顔、12の 目		8本の腕、大きな腕	沢山の飾り、赤い花 輪、塗香、赤い服	創造維持破壊の原 因
Nārada-p. 3.91.160-162	三つ目、三日月を付けた冠		三叉戟、索縄、カバ ーラ、赤い睡蓮、蓮 のような手	青い宝石のように 輝く、美しく飾り立 てている	
Śiva-p. 3.15.44-47	額に三つ目、黒い首、頭に 月、輝く蓬髪		三叉戟、アジャガヴ アの弓	吉祥な印、左半身が 山の娘、樟脳のよう に輝く白い肢体、ゾ ウ皮の着衣	

Śiva-p. 6.4.26-31	4つの顔		8本の腕、大きな腕	半身が女性、全ての驚愕すべき特徴、あらゆる装飾で飾られた体	聖音オーム、太陽の円の中心に立つ、全ての輝きから成る、最高者、不可思議
Śiva-p. 6.6.21-24	ルドラクシャの首飾り、4つの顔、12の目		索縄、こん棒、カパーラ、鉤棒、睡蓮、ほら貝、チャクラ（輪）	辰砂のように赤い体、左半身が妻	マンダラに立つ輝く者
Skanda-p. 5.3.83.19-25	不可思議な目、編髪を冠としている		三叉戟	へびの聖紐、全身に灰が塗られている、ウマーの半身	供物を与えることにおいて公平な神、ダマルーの音を響かせる、寂静、雄牛に座る者
Skanda-p. 6.254.85cd-104	右（シヴァ）	首の半分に毒を持つ、頭のない体の首飾り、蓬髪で飾られた頭	カパーラ、へびの腕輪	白く輝く体、白く煌めく三日月型の宝石の美しさに輝く体、ゾウ皮の衣裳	何千万のブラフマーンダを生み出した、雄牛の旗印を持つ、パールシャダたちに仕えられている
	左（パールヴァティー）			金の装飾品、絹の衣裳	魚の乗り物と女性従者を従える

表中の文献については、本論文第2部資料編を参照のこと。

以上のように、シヴァ神側の手には三叉戟や索縄、カパーラなどの持物を携え、三日月やへび、動物の皮を身に着け、灰を塗っており、反対側（女神側）には蓮などの優美な持物をそなえ、たくさんの装飾品に飾られ、絹などの衣裳を着ている。このように、それぞれにシヴァ神の特徴と女神の特徴を明確に示している。

アルダナーリーシュヴァラはシヴァ神とその配偶神の結合体であるが、それ以外に、アルダナーリーシュヴァラ同様に2神が結合した姿を取る神々が存在する。それらの神々の組み合わせはO'Flahertyによると、次のとおりである（表2）。

表 2 アルダナーリーシュヴァラと同じ姿を取る神の左右の者の名前一覧

左	右
Pārvatī	Śiva
Viṣṇu	Śiva
Lakṣmī	Śiva
Pārvatī	Lakṣmī
Lakṣmī	Viṣṇu
Viṣṇu	Kṛṣṇa
Lakṣmī	Rādhā
Rādhā	Kṛṣṇa

[O'Flaherty 1980 p. 330]より引用。

その他に、プラーナ聖典において以下のような組み合わせも見られた（表 3）。

表 3 プラーナ聖典において見つけれられた表 2 以外の組み合わせの名前一覧

左	右	文献
Lakṣmī	Nārāyaṇa	Nārada-p. 1.16.40cd-43
Mṛḍānikā	Mṛḍa	Skanda-p. 4.1.49.54

表中の文献については、本論文第 2 部資料編を参照のこと。

これらは全てアルダナーリーシュヴァラを基本とし、そこから派生した神々と考えられる⁸。

第 3 項 アルダナーリーシュヴァラの異名

アルダナーリーシュヴァラという名前として固有名詞化しているが、異なる名で呼んでいる文献もある。以下に、プラーナ聖典において見られる異名を数例挙げる。

- ・ Arddhanārīśa（半身が女性であるイーシャ神、Agni-p. 313.24cd⁹）
- ・ Śivaśakti（シヴァ・シャクティ、Brahma-p. Gm. 59.81c）
- ・ Umāmaheśvara（ウマーを持つマヘーシュヴァラ、Padma-p. 1.25.5）

⁸ O'Flaherty は、この姿を取る全ての結合体は、シヴァ神の位置（シヴァ神が登場しない場合は男性神の位置）を中心に考えて作られており、シヴァ神が右側、その配偶神（パールヴァティー）が左側に置かれる形、すなわちアルダナーリーシュヴァラが原型であると考えている。[O'Flaherty 1980 p. 330]

⁹ 本項における文献については、本論文第 2 部資料編を参照のこと。

- ・ Arddhanārīka (半分女性の身体を持つ者、Śiva-p. 7.2.8.29)
- ・ Strīsaṅgavāmasubhaga (左側が女性である徳の高い者、Skanda-p. 1.3.Pūrvārdha9.13cd)
- ・ Vāmārdhadhārīṇ (半〔身〕に美しい女性を持つ者、Skanda-p. 4.2.63.52)
- ・ Vāmāṅgavāsaka (女性たちを左の身体に居させる者、Skanda-p. 5.1.63.112cd)
- ・ Umārdhāśarīradhṛk (ウマーを半身として持つ者、Skanda-p. 5.3.26.17ab)
- ・ Naranārīśarīra (男女の身体を持つ者、Vāyu-p. 24.141)
- ・ Śaṅkarārdhāṅgadhārīṇī (シャンカラを半身として持つ女性、Skanda-p. 5.3.76.3)

第4項 先行研究

アルダナーリーシュヴァラについての先行研究は非常に少ない。先に述べた先行研究¹⁰であっても、1 ページに満たない量の言及しかされていない場合が多い。その中でアルダナーリーシュヴァラについて多くの論述をなしてきたのが、Wendy Doniger O'Flaherty と Stella Kramrisch である。

O'Flaherty は、アルダナーリーシュヴァラのみでの研究書を残してはいないものの、*Śiva: The Erotic Ascetic* [O'Flaherty 1973] 中の創造に関する神話や性的な神話を扱った記述において、多くのサンスクリット文献を用いてアルダナーリーシュヴァラの生産性について言及し、また *Women, Androgynes, and Other Mythical Beasts* [O'Flaherty 1980] では世界中の様々な両性具有者を比較、分類し、アルダナーリーシュヴァラがどの分類に属するか言及している。

Kramrisch は *The Presence of Śiva* [Kramrisch 1981]において、多くのサンスクリット文献を用い、アルダナーリーシュヴァラがそなえている女神やシャクティの重要性を説き、1 章を使って論じている。

その他の研究者は 2000 年以降に多く、Neeta Yadav はアルダナーリーシュヴァラについて歴史的な解釈を交えながら総括的にまとめ上げた研究書¹¹を 2001 年に出版した。また Ellen Goldberg¹²は図像学的に、Alka Pande¹³はヒジュラーとの関連について、Prem Saran¹⁴はタントラとの関連において述べた研究書をそれぞれ 2002 年、2007 年、2008 年に出版している。このように近年になって様々な角度からのアルダナーリーシュヴァラ研究が活発になりつつあるが、しかしプラーナ聖典に基づく研究は進んでいるとは言えないのが実情である。

¹⁰ 本節第 1 項にて言及した先行研究などである。

¹¹ [Yadav 2001]

¹² [Goldberg 2002]

¹³ [Pande 2004]

¹⁴ [Saran 2008]

第5項 分裂する創造者としてのアルダナーリーシュヴァラ

本論文で論じるアルダナーリーシュヴァラの神話は、アルダナーリーシュヴァラの状態にある者が男性半身と女性半身に分裂し、それぞれが独立した男女となり、その2人から創造が起こるというものである。男性半身と女性半身に分裂する創造者という役割は、アルダナーリーシュヴァラという神が形成された創生期のものとされる¹⁵。そのため、アルダナーリーシュヴァラの神話の中でも特に重要な神話といえる。

第2節 プラーナ聖典について

本論文では、プラーナ聖典¹⁶と呼ばれる文献群に見られるアルダナーリーシュヴァラの神話について論じる。プラーナ聖典とは、古代から長い間をかけて作られ、インド各地において伝わってきた神話や哲学、風俗、地理、歴史、儀礼など様々な内容を収めている百科事典¹⁷とも呼べる膨大な量の文献群、もしくはそれに含まれる1つの文献のことで、1つの文献を指す場合、『シヴァプラーナ』や『ヴィシュヌプラーナ』などのように「〇〇プラーナ」と称される。ヴェーダ聖典の引用をしている箇所や『マハーバーラタ』にも描かれている神話¹⁸など古代に述べられたことを収めていながら、紀元後数世紀に現実に起こった出来事¹⁹も記述しており、内容的にも時代や場所的にも多岐にわたる。話の進め方は基本的に対話形式となっており、難解な言葉や議論なども物語中の聞き手によって質問されるという形を取って易しく説明される。このように理解しやすいため、一般の人々の間でも愛され、伝えられてきた文献であると考えられている。ただし、プラーナ聖典はヴェーダ聖典と並ぶ重要な宗教文献であるとも考えられており、宗教的なバラモン教的イデオロギーを世間に浸透させる役割を果たしていると考えられる²⁰。

¹⁵ 詳細は本章第3節にて説明する。

¹⁶ プラーナ聖典という言葉は複数の文献群にも1冊の文献にも用いられる。本論文では適宜使用することとする。

¹⁷ [ルヌー 1996 p. 26]

¹⁸ 乳海攪拌神話やブラフマーナダ（宇宙卵）からの創造神話などである。

¹⁹ 新しい寺院の讃歌や、周辺の仏教徒の動向、ヒンドゥー教の様々な宗派の動向などである。

²⁰ [Flood 2003 pp. 130-131]

第 1 項 成立年代に関する問題

ここまでプラーナ聖典を「文献群」や「文献」と述べてきたが、そのように断言するのは問題かもしれない。F.Matchett²¹によるとプラーナ聖典は本来、見たり聞いたりして楽しむことを意図されたパフォーマンスという形式のものであり、何世紀にも渡って口伝で伝えられてきたものだからである。その中で新しい情報を組み込んだり何らかの情報を省いたりしながら、絶えず変化し続けている。いつ文字媒体へと変化したのかについても、プラーナ聖典自体が問題視していないため明確にされていない。さらに文書化された後も内容の変化が起こっていたであろうことも推測できる。そのため、現存するプラーナ聖典の成立年代に関しては非常に曖昧となってくる。口伝の最初期に語られていた内容がそのまま現在まで伝わっている可能性もあるし、途中で変化した可能性もあるからである。年代特定を試みた L.Rocher は、どのプラーナ聖典にも全体的な年代特定は不可能であると考えている²²。ただし Rocher は *The Purāṇas* の中で、他の学者たちが唱える年代の説を明記しており大まかな年代特定はなされているようである。

第 2 項 使用言語

プラーナ聖典はサンスクリット語で書かれたヒンドゥー教の聖典であると言われる。確かに「多くの」「有名な」プラーナ聖典はサンスクリット語で書かれたヒンドゥー教の聖典であるが、ジャイナ教の聖典²³や土着の言語で書かれた文献²⁴もある。土着の言語で書かれた文献の多くは、サンスクリット語からの翻訳だが、それ以外にその土地で生まれまとめられていったものもある。

第 3 項 プラーナパンチャラクシャナ (purāṇa-pañcalakṣaṇa)

プラーナ聖典には、パンチャラクシャナ（5 つの特徴）と呼ばれる定義²⁵がある。それはプラーナ聖典が含むべき 5 つの題材のことである。以下にパンチャラクシャナを示す。

²¹ [Flood 2003 pp. 129-143]

²² [Rocher 1986 pp. 100-103]

²³ [Wendy Doniger 1993]

²⁴ テルグ語やタミル語などがある。[同上]

²⁵ パンチャラクシャナに関する記述は *Amarakośa*（紀元後 6 世紀頃）に記されており、その時代には既に確立されていたものであることがわかる。[Rocher 1986 p. 24-25]

1. sarga : 第一の創造、宇宙創造
2. visarga : 第二の創造、もしくは年代記を含む世界の破壊と創造
3. vaṃśa : 神々や聖仙の系譜
4. manuvamśa : マヌヴァンタラ (manuvantara) と呼ばれる人間の祖マヌの時代の記録
5. vaṃśānucarita : スーリヤヴァンシャとチャンドラヴァンシャに属する諸王朝の系譜

プラナー聖典は上記の 5 つの題材を含んでいると定義付けられている。しかし、Kane によるとパンチャラクシャナはマハープラナーの 3%以下の分量しかない²⁶。そしてパンチャラクシャナを部分的に欠いているものさえある。それでもこのパンチャラクシャナは、プラナー聖典の世界観を示していると考えられており、プラナー聖典の重要な特徴とみなされている。

第 4 項 18 マハープラナー

プラナー聖典は、代表的なものとして 18 あるとされている。Haraprasad Shastri は代表的な 18 の聖典 (マハープラナー) と副次的な 36 (ウパプラナー) の 54 に加え、100 近くのプラナー聖典がある²⁷としている。その中で、プラナー聖典自体が、代表的なものとして 18 マハープラナーを述べている。以下にその 18 マハープラナーを示す。

【Viṣṇu-p. 3.6.20-24 に書かれる 18 マハープラナー】

1. Brahma-purāṇa
2. Padma-purāṇa
3. Viṣṇu-purāṇa
4. Śiva-purāṇa
5. Bhāgavata-purāṇa
6. Nārada-purāṇa
7. Mārkaṇḍeya-purāṇa
8. Agni-purāṇa
9. Bhaviṣya-purāṇa
10. Brahmavaivarta-purāṇa
11. Liṅga-purāṇa

²⁶ [Kane 1962 p. 841]

²⁷ [Shastri 1928 p. 324]

12. Varāha-purāṇa
13. Skanda-purāṇa
14. Vāmana-purāṇa
15. Kūrma-purāṇa
16. Matsya-purāṇa
17. Garuḍa-purāṇa
18. Brahmāṇḍa-purāṇa

他の文献を見てみると、Vāyu-p. 104.3-10 では 18 を列挙すると言いながら 16 マハープラナーナを述べており、上記の Viṣṇu-p. 3.6.20-24 から Liṅga-p. と Viṣṇu-p. と Agni-p. が省かれ、かわりに *Ādi-purāṇa* が入っている。Skanda-p. 7.1.2.5-7 では、上記の Viṣṇu-p. 3.6.20-24 から Brahmāṇḍa-p. が省かれ、かわりに *Vāyaviya-purāṇa* が入っている。

以上のように、18 マハープラナーナは完全に確定しているのではなく、文献により若干の差異があることが分かる。

第5項 宗派性

プラナーナ聖典は、様々な分類によって分けられる。Rocher²⁸によると、トリグナの性質 (sāttvika, tāmasa, rājasa) によって分類する方法²⁹や、五神（ブラフマー、スーリヤ、アグニ、シヴァ、ヴィシュヌ）に分類する方法がある。様々な分類法の中で、最も一般的になされる分類がシヴァ派³⁰ (Śaiva) とヴィシュヌ派 (Vaiṣṇava) に分けるというものである。全てのプラナーナ聖典がどちらかの派に属するという訳ではないが、シヴァ神に関連する名前を持つ文献、例えば Śiva-p. や Liṅga-p. などシヴァ派であり、ヴィシュヌ神に関連する名前を持つ文献、Viṣṇu-p. や Varāha-p. などヴィシュヌ派である。シヴァ派の文献では、シヴァ神やその化身や配偶神を最高神とし、ヴィシュヌ派の文献でも同様に、ヴィシュヌ神やその化身や配偶神を最高神として扱う。

²⁸ [Rocher 1986 pp. 20-21]

²⁹ Matsya-p. 53.68-69 や Padma-p. 6.263.81-84 に述べられている。

³⁰ 研究書によっては「シヴァ派」でなく「シヴァ教」や「シヴァ系」と呼んでいるものもある。本論文では、基本的に「シヴァ派」を使用するが、例えば「パーシュパタ派」と述べる際などには「シヴァ系パーシュパタ派」と呼ぶように、分かりやすさを優先し、適宜使用することとする。「ヴィシュヌ派」に関しても同様である。

第 6 項 本論文で引用するプラーナ聖典

本論文では、前述の 18 マハープラーナと宗派性をふまえ、アルダナーリーシュヴァラに関する記述があることと文献として信頼性³¹がおけるテキストであることを考慮し、15 のプラーナ聖典の記述を引用、翻訳した。以下に、*The Purāṇas*[Rocher 1986]の説明をもとに、その 15 のプラーナ聖典の概説を述べる³²。

Agni-purāṇa

典型的な百科事典的プラーナ聖典の 1 つである。あらゆる事柄を取り扱っており (Winternitz)、テキストの様々な章で図像学的内容を述べている。年代としては、紀元後 9 世紀前後 (Haraprasad Shastri, Wilson, Kane, Hazra) が有力である。

Bhāgavata-purāṇa

南インドのタミルナードゥで編纂されたという見解は研究者の間でほぼ一致しているが、年代は紀元後 500～550 年 (Hazra)、紀元後 800 前半～900 年 (Kane)、紀元後 1200～1300 年 (Wilson, Burnouf, Macdonell, Colebrooke など) 等、研究者の見解に開きがあり、不確かである。その理由としては、様々な文献に記述されている内容が *Bhāgavata-p.* に対してなのか *Devībhāgavata-purāṇa* に対してなのか判断がつかないためである。

Brahma-purāṇa

多くの神についての記述があり、シヴァ派とヴィシュヌ派の相互関係に基づいた自由な立場をとる文献である。最近の研究では、様々な時代に様々な人々によって書かれたものを集めた文献だと考えられている。

Brahmāṇḍa-purāṇa

起源は *Vāyu-p.* と同じとされ、多くの部分で *Vāyu-p.* との一致がある。紀元前 4 世紀から (Dikshitar)、紀元後 5～7 世紀頃まで (Kane) に成立し、紀元後 11 世紀頃に現在の形になった (S. N. Roy) とされる。

Kālikā-purāṇa

カーマルーパやその周辺であるベンガルに起源があるとされる。Hazra によると、現

³¹ クリティカルエディションであることや Ā 版、B 版などシリーズとして出版されているものであること、英訳がなされていること、*The Purāṇas*[Rocher 1986]に記述があることなどを基準とした。

³² 便宜的にアルファベット順に述べた。

存の Kālikā-p. は紀元後 10～11 世紀前半に編纂されたとする。初期の Kālikā-p. は現存するものとは異なり、タントラの要素がほとんどなく、紀元後 7 世紀にベンガルで編纂されたと考えられている。

Kūrma-purāṇa

Hazra によると、紀元後 8 世紀前半に編纂された。元々、ヴィシュヌ系パーンチャラートラ派に属していたが、後に、シヴァ系パーシュパタ派になり多くの新しい神話や伝説が付け加えられた。そのため、シヴァ派とヴィシュヌ派が入り混じっている。

Līṅga-purāṇa

シヴァ派のプラーナ聖典であり、リンガの姿をしたシヴァ神への信仰を示す文献である。紀元後 5 世紀から、7 世紀初めを経て、8～9 世紀に変化しており、遅くとも 800～1000 年の間には成立していると推定されている。

Mārkaṇḍeya-purāṇa

パンチャラクシャナの定義に従っており、宗派はなく、前半の章で『マハーバーラタ』の補遺をなしているので、古いプラーナ聖典と考えられている。本論文で扱った章は、この聖典の最古の部分の一部と考えられている。Pargiter はこの最古の部分を紀元後 3 世紀以前と推定している。全体的な年代としては、紀元後 4～6 世紀 (Kane)、Hazra と Mehendale は特定はせず最古のプラーナ聖典と 1 つと言及している。

Matsya-purāṇa

典型的な百科事典的プラーナ聖典の 1 つである。最も保存が良い最古のプラーナの 1 つとされる (Kane, Winternitz による)。年代は、紀元前 4 世紀～紀元後 3 世紀の間に発達したという見解 (Kilfel, Ramachandra Dikshitar) や、紀元後 200～400 年の間という見解 (Kane) がある。

Padma-purāṇa

ベンガル版と西方版の 2 つの校訂版があり、多くの刊本は西方版に従っている。しかし、研究者の間では、ベンガル版の方が古くオリジナルではないかと考えられている。Hazra によると、紀元後 9 世紀後半～10 世紀初めに、ベンガル地方の東方で書かれたものと推測されている。

Śiva-purāṇa

オリジナルの Śiva-p. は 12 のサンヒターから成っており、様々な人の手によって、様々な時代と場所で書かれたとされる。Hazra によると、今回扱った 2.1. Rudra-saṃhitā:

Srṣṭi-khaṇḍa は、Jñāna-saṃhitā³³の引用であり、3.Śatarudra-saṃhitā は、Jñāna-saṃhitā と Vayavīya-saṃhitā（紀元後 800～1000 年）と Liṅga-p.の引用であり、5.Umā-saṃhitā は、Jñāna-saṃhitā から多くの部分を取り入れたものであり、7.Vayavīya-saṃhitā は、南インドで紀元後 800～1000 年の間に書かれたものとしている。

Skanda-purāṇa

Kane によると、プラーナ聖典の中で最も長いとされる。一般的には、単一の文献ではなく 1 つの名称を持つ多数の作品群であると考えられている。

Varāha-purāṇa

パンチャラクシャナの要素をほとんど含んでおらず、プラーナ聖典というよりもむしろ儀礼の手引書に近い。記述の多くが、ヴィシュヌ崇拝の規則や方法に費やされている。成立年代は、Wilson によると紀元後 12 世紀後半だが、一般的には紀元後 10 世紀以前の比較的遅い時代とされる。

Vāyu-purāṇa

古いプラーナ聖典の 1 つであり、紀元後 4～5 世紀に成立したと推測されている。

Viṣṇu-purāṇa

ヴィシュヌ系パーンチャラートラ派の文献とされており、全てがヴィシュヌ系の記述である。パンチャラクシャナを完全に具えている。研究者によると、アーンドラ地方で編纂されたと推定される。

第 3 節 本論文の趣旨

本論文では、生類の創造をする過程において、1 つの身体に男女両性を持つ状態にある者が男性半身と女性半身に分裂し、それぞれの半身が独立した男女となり、その男女から生類の創造が起こるという神話を取り扱う。この神話は、アルダナーリーシュヴァラという神の形成に関わる重要な神話と考えられる。というのも、元来シヴァ神には「男

³³ Hazra によると、紀元後 950 年以降にヴァーラーナシーで編集され成立したサンヒターとされる。Śiva-p.の他のサンヒターに多く取り入れられており、ヴェーダ聖典を自称している。

女に分裂し創造を行なう」という役割は付加されていなかった³⁴ので、インド神話が発展、変容していく過程で、シヴァ神が「男女に分裂し創造を行なう」という役割を新たに得て、アルダナーリーシュヴァラというシヴァ神の化身が成立したと考えられるからである。さらにもう 1 つ重要なポイントがある。それは、この「男女に分裂し創造を行なう」役割を持つ者にはブラフマー神もいるということである。ブラフマー神も男女両性を持つ状態から男性半身と女性半身に分裂し、それぞれの半身が独立した男女となり、その男女から生類創造を行なうという神話を持っている。両者のこの神話は非常に類似しているため、同じ神話のヴァリエーションである可能性がある。本論文では、その部分に焦点を当て、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の詳細な分析と比較を行うことで、アルダナーリーシュヴァラという神の形成過程を明らかにすることを目的としている。

第 1 項 男女に分裂する創造者たち

まずはじめにアルダナーリーシュヴァラへと受け継がれていった「男女に分裂し創造を行なう者」の起源について述べたい。

男女に分裂する創造者という存在は、プラーナ聖典よりもさらに古い時代にすでに登場している。O'Flaherty、Kramrisch、Yadav の 3 人の先行研究者は、『リグ・ヴェーダ』の中に分裂する創造者の萌芽があると述べている。O'Flaherty は、天 (dyaus) と地 (prthivī) が最古の分裂する創造者であると述べる³⁵。その後ウパニシャッド聖典の時代にはより明確な両性具有的創造者ブラジャーパティが描かれ、さらに時代を経てブラフマー神へと受け継がれ、ブラフマー神からシヴァ神へと受け継がれたとする。Kramrisch は、ルドラはアグニであり、牝牛でもある牡牛であり、原初の創造主ヴィシュヴァループのイメージでもありとし、生類創造を望むブラフマー神からアルダナーリーシュヴァラとして出現した³⁶と述べている。Yadav はヴェーダ聖典における天と地という世界の両親がプラーナ聖典においてはシヴァ神とパールヴァティー女神になるとしている³⁷。

以下に、それぞれの研究者の言及部分の翻訳を示す。

³⁴ しかしシヴァ神は元来「世界を創造する者」という役割は持っている。[バンダルカル 1984 pp. 295-338]

³⁵ [O'Flaherty 1980 pp. 310-312]

³⁶ [Kramrisch 1981 pp. 200-201]

³⁷ [Yadav 2001 pp. 113-114]

【W.D.O'Flaherty の見解³⁸】

分裂型：分裂する両性具有者としてのプラジャーパティとシヴァ

全てのインドの両性具有者の最初のものである天地（dyāvāprthivī）は、分裂する両性具有者である。世界開闢の行為（ヴィシュヌやインドラ、あるいはヴァルナなど様々なものに帰する—原註）は、半分ずつに分けることである。ブラーフマナ聖典³⁹では、その行為の擬人化のニュアンスは明瞭になり、分裂したもの（ここでは、第3の基本的単位〔である天・地のあいだの空間〕を描く別の世界創造説における3つ〔を取り上げるが〕—原註）は、別離（ヴィラハ）の愛を経験する。

これら三界は結合していた。神々がそれらを3つに分けた。世界は自分たちが3つに分けられてしまったことを深く悲しんだ。そして神々は「これらの三界から3つの悲しみを取り除こう」と言った。インドラは彼らの悲しみを取り除き、彼がこの地上から取り除いた悲しみは娼婦(whore)に入り、空間から取り除いた悲嘆は中性者(eunuch)に入り、天界から取り除いた悲嘆は罪人あるいは悪党に入った。

〔ここでは〕極端に性的な女性や男性と、非性的な創造者—それによって神話が始まる—ところの両性具有者と対立する存在—へと悲しみが移転されることによって、世界の分裂という性的な性質が強調されている。

父なる天と母なる大地はともに種を持つ太古の両親であるので、擬人化されたレベルでの彼らの分裂は、原初の出来事に割り込んだ子供（世界開闢神）の例である。Melanie Klein⁴⁰は、幼子が「結合した親」つまり両親的な両性具有者（両親の性を具有する者）のイメージを持つと指摘している。宇宙レベルでは、分裂は混沌（ここでは非創造的とみなされる—原註）を一掃し、秩序を確立する必要性を反映しているのである。

ブラーフマナ聖典では、プラジャーパティは『リグ・ヴェーダ』のソーマやパルジャーニヤのような存在によって予示されていた妊娠する男性の役割を引き受ける。ウパニシャッド聖典の時代までには、プラジャーパティはより明瞭な両性具有者になる。

太初に、この世にはただ人間（プルシャ）の形をしたアートマンのみが存在していた。彼はあたりを見まわしたが、自分以外のものを見出さなかった。……彼は、実に、すこしも愉しくなかった。それ故に、〔現在でも〕独りでいる人は愉しくないのである。彼は第二の者がほしいと思った。彼は女と男が抱擁し

³⁸ [O'Flaherty 1980 pp. 310-312]

³⁹ 紀元前 800 年頃に成立した。（筆者註）

⁴⁰ Melanie Klein（1882～1960 年）は、遊戯療法、対象関係論を提唱した精神分析学者である。（筆者註）

たほどの大きさであった。彼はまさしくこの自分の身体を二つに切り離した (apātayat < pat)。こうして夫 (pati) と妻 (patnī) とが生じた。それ故にヤージュニャヴァルキヤは、「この身体は、自分自身のいわば片われである」と語ったといわれる。そういうわけで、[半身の分離によって生じた] 空間は、[分離した] 女によってまさしく充たされるのである。彼 (アートマン) はその女と交わった。その結果、人類が生じた。ところで、彼女は考えた。「いったい、どうして、彼は私を自分自身から生んでおいて、私と交わったりするのでしょうか。そうだ、隠れてやりましょう」と。彼女は牝牛となった。[すると] 他方 (アートマン) は牝牛となって、彼女とまさしく交わった。そうして牛族が生まれた。彼女は牝牛／牝驢馬となった。……単蹄族が生まれた。……山羊・羊族が生まれた。このようにして、彼は配偶関係にあるものは何でも、蟻に至るまで、すべて創造した。(『ブリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド』 1.4.1-5、服部正明訳[服部 2005 pp. 130-131])

〔この文章によると〕プラジャーパティ〔であること〕は彼の振る舞いから判断できるが、彼は実際にはプルシャと呼ばれている。このように、両性具有者の分裂は、より普遍的で非性的な太古のプルシャの分裂に直接結び付けられている。〔中略〕

しかしながら、初期プラナ聖典の大部分では、両性具有者はプラジャーパティ自身であり、彼の両半身への分裂〔と分裂した者の結合〕による創造においては、近親婚を暗示させるものは無い。これらの文献では、太古の両性具有者はしばしば、父親であり母親であるとみなされる。そして、しばしば、その両性具有者は創造への欲望ゆえに分かれるということが明瞭に述べられる。ヴァリエーションの 1 つでは、ブラフマーは宇宙を人々で満たすために、分裂する両性具有者を創造する。そして、この創造に対する彼の不変の命令は「自身を分けよ」である。この 2 番目のモデル―〔すなわち〕創造者と分裂した両性具有者―は、シヴァがブラフマーに取って代わった両性具有の次の段階において、変容された形で用いられる。というのも、プラジャーパティはインドラと同じく、後代の多くのシヴァ神話の源であり、シヴァの両性具有性がプラジャーパティのそれと連携して発展するからである。

【S.Kramrisch の見解⁴¹】

ルドラはアグニである。アグニ、すなわち火は、最高の象徴として“牝牛でもある牝牛”を持つ。この火のイメージは、ヴェーダの聖者の心が、究極的なものの探求において到達することのできた最終的な領域に立ち現れた。そこで、それ（火）は創造主の心の中に灯されたのだと思える。牛の形をとった力の中にある全体性の擬獣化されたイメージは、思想や想像力や言葉が入り込めない封印や番人である。この全体性のイメージ

⁴¹ [Kramrisch 1981 pp. 200-201]

の先は創造以前の状態である。両性具有の牛は、太古の時代においては、原初の創造主ヴィシュヴァルーパーのイメージでもある。

死すべき者たち（生類）の創造を欲する創造主の心にある、アグニの擬獣化されたイメージである両性具有の牛は、アグニであるルドラという擬人化された姿をとり、ブラフマーの頭から半男半女の姿のアルダナーリーシュヴァラとして出現する。“半身が女性である”アルダナーリーシュヴァラのイメージが創造主の熟考する心の中に形作られたとき、死すべき者たちを創る手段としての性交の記憶は新たな力を持って彼（ブラフマー神）に戻ってきた。

【N.Yadav の見解⁴²】

シヴァ神に対する信仰と関連して、プラーナ聖典においてしばしば述べられるアルダナーリーシュヴァラの姿は、『リグ・ヴェーダ』の男性と女性の結合によって生じた創造の神話の概念を示している。1つの創造的原理が2つになるという分裂の過程は、『リグ・ヴェーダ』やプラーナ聖典の宇宙論の基礎となっている。それは、男性と女性や夫婦、父と母など多くの方法で表現される。『リグ・ヴェーダ』の聖仙たちは、この象徴的意味を、世界の両親であるディヤーヴァー・プリティヴィー（dyāvapṛthivī）として表した。ディヤウス（dyaus）は父であり、プリティヴィーは母である。『リグ・ヴェーダ』では、彼らはほとんど1人では登場しない。讃歌のほとんどで、彼らは密接に結びつけられる。彼らは、全ての生き物を創り、それらを支える責任があると言われる。彼らは『リグ・ヴェーダ』において最も多く名前が挙げられる一対の神である。

広く拡がり、偉大にして尽くることなき父と母と（天地）は、万物を保護す。天地両界はいと奔放なり、美しき婦女のごとく。父〔なる神〕が色美しき形をもって彼らを装いたれば。（『リグ・ヴェーダ讃歌』1.160.2、辻直四郎訳[辻 1970 p. 77]）

彼らは神の両親でもある。彼らはお互いから離れることができない。『リグ・ヴェーダ』の別の部分においても、ヤマとヤミーの対話やプルーラヴァースとウルヴァシーの物語など、創造に関する同様の概念が示される。

後代、プラーナ聖典において、アルダナーリーシュヴァラ概念は『リグ・ヴェーダ』の思想を基礎として発展した。男性と女性は、常に創造行為において相伴う。創造の種は、心の欲望の中に潜んでいる。これについての最古の言及は『リグ・ヴェーダ』自体の中にある。

最初に意欲はかの唯一物に現ぜり。こは意（思考力）の第一の種子なりき。詩

⁴² [Yadav 2001 pp. 113-114]

人ら（靈感ある聖仙たち）は熟慮して心に求め、有の親縁（起源）を無に発見せり。（『リグ・ヴェーダ讃歌』 10.129.4、辻直四郎訳[辻 1970 p. 323]）

ルドラの力（能力）は、同一の広がりを持ち、この範囲内では、生命が両親の結合なしに生み出されることはあり得ない。シヴァとパールヴァティーは、世界の両親であり、この親という概念が、ディヤーヴァー・プリティヴィーにも当てはまる。ヴェーダ聖典の“*rodasi*⁴³（天と地）”という概念は、プラナ聖典での表現においてアルダナーリーシュヴァラになる。

この型の文学上の典拠は、ヴェーダ聖典の象徴に由来する。それらはいくつかの名前のもとに描写される。すなわち、ピター・マター（*pitā-mātā*）、パラールダ・アヴァラーアルダ（上半分と下半分、*parārdha-avarārdha*）、カタマールダ・ヴィシュヴァールダ（未知の部分である半分と全ての部分である半分、*katamardha-viśvardha*⁴⁴）、プラナ・アパーナ（*prāṇa-apāna*）、ユヴァン・ユヴァティー（*yuvan-yuvatī*）、ミトラヴァルナ・ウルヴァシー（*mitravaruṇa-urvaśī*）、プールナクンバ・クンビニー（*pūrṇakumbha-kumbhinī*）、ナラ・ナーリー（*nara-nārī*）、デーヴァ・デーヴィー（*deva-devī*）、ダシャ・アディティ（*daśa-aditi*）、マナス・カーマ（*manas-kāma*）、ウパリスヴィット・アダハスヴィット（*uparīsvit-adhaṣvit*）、プラヤティ・スヴァダ（活動物質⁴⁵、*prayati-svadha*）、パラスタット・アヴァスタット（*parastat-avastat*）、ヴィシュヴァスリツジュ・ヴィシュヴァスリシュティ（*visvasṛj-visvasṛṣṭi*⁴⁶）、スパルナ・スパルニー（*suparṇa-suparṇī*）や、その他数多くの宇宙開闢の創造の図式における相伴う一対の男女である。

以上のように、3人の研究者の見解を取り上げたが、それ以外に『リグ・ヴェーダ』の中からアルダナーリーシュヴァラにつながる可能性のある神話を取り上げたい。

まず『プルシャのうた』である。これは、巨人解体神話の一種である。男女という二者に分裂するのではないが、自身の身体を分けて創造を進めるという役割は一致している。さらに、ヴィラージュという名はブラフマー創造神話において分裂後の男性半身の名称としてあげられている⁴⁷。以下に『プルシャのうた』を示す⁴⁸。

プルシャのうた（『リグ・ヴェーダ』 10・90・2~14）

2. プルシャは、過去および未来にわたるこの一切（万有）なり。また不死界（神々）を支配す、食物によって成長するもの（生物界、人間）をも。

⁴³ 辞書によると「天と地」は *rodasī* となっている。

⁴⁴ 原文に準じる。

⁴⁵ スヴァタを指す。

⁴⁶ 原文に準じる。

⁴⁷ *Kūrma-p.* 1.8.6, *Śiva-p.* 7.1.17.3.など。

⁴⁸ [辻 1970 pp. 314-315]

3. 彼の偉大はかくのごとし。されどプルシャはさらに強大なり。一切万物は彼の四分の一にして、四分の三は天界における不死なり。
4. プルシャは四分の三を備えて上方に昇れり。彼の四分の一はここ（下界）に再び発生せり（現象界の展開）。これ（四分の一）より彼はあらゆる方向に進展せり、食するもの（生物）・食せざるもの（無生物）に向かって。
5. 彼よりヴィラージュ生まれたり。ヴィラージュよりプルシャ〔生まれたり〕。彼生まるるや地界を凌駕せり、後方においても、また前方においても。
6. 神々がプルシャを祭供（供物）として祭祀を執行したるとき、春はそのアージア（グリタ）なりき、夏は薪、秋は供物〔なりき〕。
7. 祭祀そのものたる彼を、バルヒス（敷草）の上に、彼らは灌ぎ清めたり、太初に生まれいでたるプルシャを。神々は彼をもって祭祀を行えり、サーディア神群も聖仙らもまた。
8. この完全に行われたる祭祀より、プリシャッド・アージアは集められたり。これより彼ら（神々）は、空飛ぶもの、森に住むもの、また村に飼わるる獣を作ったり。
9. この完全に行われたる祭祀より、詩節（賛歌）と旋律と生じたり。韻律もそれより生じたり。祭詞もそれより生じたり。
10. それ（祭祀）より馬生まれたり。両顎に歯あるすべての獣〔生まれたり〕。牛も実にそれより生まれたり。それより山羊・羊生まれたり。
11. 彼らがプルシャを〔切り〕分かちたるとき、いくばくの部分に分割したりや。彼（プルシャ）の口は何になれるや。両腕は何に。両腿は何と、両足は』何と呼べるや。
12. 彼の口はブラーフマナ（バラモン、祭官階級）なりき。両腕はラージャニア（王族・武人階級）となされたり。彼の両腿はすなわちヴァイシア（庶民階級）なり。両足よりシュードラ（奴隸階級）生じたり。
13. 月は意（思考器官）より生じたり。眼より太陽生じたり。口よりインドラとアグニ（火神）と、氣息より風生じたり。
14. 臍より空界生じたり。頭より天界は転現せり、両足より地界、耳より方処は。かく彼ら（神々）はもろもろの世界を形成せり。

続いて『ナーサディーヤ讃歌』であるが、世界創造の過程において男性と女性に分かれるという役割は、アルダナーリーシュヴァラに共通する。さらに、前述の3人の研究者の見解とも一致するところがある。以下に『ナーサディーヤ讃歌』を示す⁴⁹。

⁴⁹ [辻 1970 pp. 322-323]

ナーサディーヤ讃歌（『リグ・ヴェーダ』10・129・1~5）

1. そのとき（太初において）無もなかりき、有もなかりき。空界もなかりき、その上の天もなかりき。何ものか発動せし、いずこに、誰の庇護の下に。深くして測るべからざる水は存在せりや。
2. そのとき、死もなかりき、不死もなかりき。夜と昼との標識（日月・星辰）もなかりき。かの唯一物（中性の根本原理）は、自力により風なく呼吸せり（生存の徴候）。これよりほかに何ものも存在せざりき。
3. 太初において、暗黒は暗黒に蔽われたりき。この一切は標識なき水波なりき。空虚に蔽われ発現しつつあるもの、かの唯一物は、熱の力により出生せり（生命の開始）。
4. 最初に意欲はかの唯一物に現ぜり。こは意（思考力）の第一の種子なりき。詩人ら（靈感ある聖仙たち）は熟慮して心に求め、有の親縁（起源）を無に発見せり。
5. 彼ら（詩人たち）の縄尺は横に張られたり。下方ありしや、上方ありしや。射精者（能動的男性力）ありき、能力（受動的女性力）ありき。自存力（本能、女性力）は下に、許容力（男性力）は上に。

このように「分裂して創造を行なう」という役割を持つ者は、『リグ・ヴェーダ』の時代には既に存在しており、アルダナーリーシュヴァラもその役割を引き継いでいったと考えられる。具体的に男女に分裂する存在としては O'Flaherty も言及した『ブリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド』1.4.1-5 に登場するアートマンが最古と考えられる。以下、確認のためにその神話を再度示そう⁵⁰。

太初に、この世にはただ人間（プルシャ）の形をしたアートマンのみが存在していた。彼はあたりを見まわしたが、自分以外のものを見出さなかった。彼は、実に、すこしも愉しくなかった。それ故に、〔現在でも〕独りでいる人は愉しくないのである。彼は第二の者がほしいと思った。彼は女と男が抱擁したほどの大きさであった。彼はまさしくこの自分の身体を二つに切り離した（apātayat < pat）。こうして夫（pati）と妻（patnī）とが生じた。それ故にヤージュニャヴァルキヤは、「この身体は、自分自身のいわば片われである」と語ったといわれる。そういうわけで、〔半身の分離によって生じた〕空間は、〔分離した〕女によってまさしく充たされるのである。彼（アートマン）はその女と交わった。その結果、人類が生じた。ところで、彼女は考えた。「いったい、どうして、彼は私を自分自身から生んでおいて、私と交わったりするのでしょうか。

⁵⁰ [服部 2005 pp. 130-131]

そうだ、隠れてやりましょう」と。彼女は牝牛となった。〔すると〕他方（アートマン）は牡牛となって、彼女とまさしく交わった。そうして牛族が生まれた。彼女は牝牛／牝驢馬となった。……単蹄族が生まれた。……山羊・羊族が生まれた。このようにして、彼は配偶関係にあるものは何でも、蟻に至るまで、すべて創造した。

このアートマンは、男女に分裂し創造を行なう者であるが、分裂前の姿が「男と女が抱擁したほどの大きさ」であり、1人の人の形ではない。そのため「分裂前も分裂後も1人の人の形を取る人型の存在」としては、やはりアルダナーリーシュヴァラになって初めて成立したと考えても良いのかもしれない。

アルダナーリーシュヴァラのように「分裂前も分裂後も1人の人の形を取る人型の存在」の記述は『マヌ法典 (*Manu-smṛti*)』に見られる。『マヌ法典』は、紀元前2世紀から紀元後2世紀の間に成立したとされる社会体制や行動規範に関する文献である。その第1章は、社会体制や行動を規範を定めるためにヴァルナを宇宙の秩序と位置付ける世界創造神話に充てられている。初めにブラフマンが世界を創造する様子が描かれる。その後、人類の創造に移るのであるが、その人類創造においてアルダナーリーシュヴァラと同様の概念の存在が示される。以下にその当該部分を示す⁵¹。

- 1.32. かの主（ブラフマン⁵²）は、自らの身体を二分して、半分によって男となり、半分で女となり、彼女の中にヴィラージュを生み出した。
- 1.33. ブラフマナのなかの最も優れた者たちよ！かの男子ヴィラージュが苦行を行なって自ら創造した者がこのいっさいの創造者である私（マヌ）であるとしるべし。

これはブラフマー創造神話と類似した内容⁵³であり、アルダナーリーシュヴァラ同様「分裂前も分裂後も1人の人の形を取る人型の存在」である。プラナ聖典の年代特定が困難なため、この『マヌ法典』の記述がプラナ聖典に先んじるかどうかは分からないが、遅くとも紀元前2世紀から紀元後2世紀には、このような存在が認識されていたということが言える。

⁵¹ [渡瀬 1990 p. 26]

⁵² 原文を見ると「ブラフマン」は男性形であるため「ブラフマー」と訳すこともできる。

⁵³ 第2章においても、この記述を取り扱う。

第2項 ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話

「男女に分裂し創造を行なう者」の神話には、ブラフマー神によるものとシヴァ神によるものがあると先に述べた。それらは内容が類似しており、同一の神話のヴァリエーションである可能性がある。本論文は、アルダナーリーシュヴァラという神が形成される過程を明らかにするために、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話が同一の神話のヴァリエーション⁵⁴であることと、それらの神話が作られていった順番、すなわち神話の変遷を明確にすることを目的としている。

まず、本論文ではアルダナーリーシュヴァラという神を「シヴァ神とその配偶神による男女両性具有の状態」と定義することとする。イーシュヴァラという言葉が入っていることからシヴァ神であることは必須と考えられる。一方、「アルダナーリー（半身が女性）」という修飾語を伴っているため、言葉上では、半身部分は女神である必要はないと言える。しかし、現在、一般的に信仰されているアルダナーリーシュヴァラはシヴァ神とその配偶者としての女神⁵⁵であるため「半身はシヴァ神の配偶者である女神」と定義する。

続いて、ブラフマー創造神話の定義は「世界創造の場面においてブラフマー神が男性半身と女性半身に分裂する⁵⁶」という内容が含まれていることとした。この定義に基づいてブラフマー創造神話を抜粋したところ、17種類のヴァリエーション⁵⁷があった。それらの記述箇所は以下の通りである。

- ・『マヌ法典』 1.1-51
- ・ Agni-p. 17.15-18.1
- ・ Bhāgavata-p. 3.12.51-56
- ・ Brahma-p. 1.41-59
- ・ Brahma-p. 43.30-38
- ・ Brahma-p. Gm. 91.33cd-35ab
- ・ Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.8cd-42
- ・ Kālikā-p. 25.44-55

⁵⁴ 本論文では、同一の神話のヴァリエーションであることを決定する定義として、内容の類似性が高いことと一方が他方の内容を否定するような記述がないことという2つの条件を満たしているものとする。

⁵⁵ この配偶神をパールヴァティー女神であると断定することも可能だが、図像や記述、現地の人々の言動などから判断し、ガウリー女神やサティー女神、ウマー女神、カーリー女神などシヴァ神との夫婦関係が示される女神は全て含むことがより良いと考え、「配偶者としての女神」とした。

⁵⁶ 前後の文脈が類似しているため「左右の親指から男性と女性を創る」という神話(Varāha-p. 2.13-20)も含めた。

⁵⁷ 前述の『マヌ法典』も含む。

- Kūrma-p. 1.8.1-12ab
- Liṅga-p. 1.70.260cd-276
- Matsya-p. 3.30-32
- Padma-p. 1.40.67-72
- Śiva-p. 2.1.16.3-15ab
- Śiva-p. 5.29.16-30.5
- Śiva-p. 7.1.17.1-6
- Varāha-p. 2.13-20
- Vāyu-p. 10.1-17

一方、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の定義についても同様に「世界創造の場面においてシヴァ神が男性半身と女性半身に分裂する」という内容が含まれていることとした。アルダナーリーシュヴァラ創造神話には 16 種類のヴァリエーションがあった。それらの記述箇所は以下の通りである。

- Kūrma-p. 1.10.88-11.14ab
- Liṅga-p. 1.5.28-33
- Liṅga-p. 1.41.7-13ab
- Liṅga-p. 1.41.37-48
- Liṅga-p. 1.70.314-329ab
- Liṅga-p. 1.99.6cd-14ab
- Mārkaṇḍeya-p. 47.3-16ab
- Padma-p. 1.3.166-179ab
- Śiva-p. 2.1.15.49-59
- Śiva-p. 3.3.1-30
- Śiva-p. 7.1.16.4-26
- Skanda-p. 1.2.22.35cd-38ab
- Skanda-p. 7.2.9.1-17
- Varāha-p. 2.42-51
- Vāyu-p. 9.67-84
- Viṣṇu-p. 1.7.1-17ab

これら 33 の神話の構造を詳細に分析したり神話全体の流れを分類することで、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話が同じ神話のヴァリエーションであることを明確にし、それらの神話が作られた順番、すなわち神話の変遷を推察し、アルダナーリーシュヴァラという神の成立過程について論じて行こうと思う。

第1章 ブラフマー創造神話

本章ではブラフマー創造神話の構造について論じる。本論文では、ブラフマー創造神話の定義を「世界創造の場面においてブラフマー神が男性半身と女性半身に分裂する⁵⁸」という内容が含まれていることとした。15のプラーナ聖典、および『マヌ法典⁵⁹』の中から、この定義に基づいたブラフマー創造神話を抜粋すると、『マヌ法典』1.1-51、Agni-p. 17.15-18.1、Bhāgavata-p. 3.12.51-56、Brahma-p. 1.41-59、Brahma-p. 43.30-38、Brahma-p. Gm. 91.33cd-35ab、Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.8cd-42、Kālikā-p. 25.44-55、Kūrma-p. 1.8.1-12ab、Linga-p. 1.70.260cd-276、Matsya-p. 3.30-32、Padma-p. 1.40.67-72、Śiva-p. 2.1.16.3-15ab、Śiva-p. 5.29.16-30.5、Śiva-p. 7.1.17.1-6、Varāha-p. 2.13-20、Vāyu-p.10.1-17 という17の神話⁶⁰があった。それらに共通する構成要素⁶¹や特徴的な構成要素、物語の流れに関わる構成要素を取り出すと、以下の通りであった。

A⁶². 発端：ブラフマー神による創造行為⁶³

B. 分裂：ブラフマー神が半身により女性に、半身により男性へと分裂する⁶⁴

C. シャタルーパーによる苦行⁶⁵

D. マヌとシャタルーパーに関する記述：マヌとシャタルーパーが夫婦関係になる⁶⁶

⁵⁸ 前後の文脈が類似しているため「左右の親指から男性と女性を創る」という神話(Varāha-p. 2.13-20)も含めた。

⁵⁹ 『マヌ法典』にもブラフマー創造神話が述べられているため、本章で取り扱う。

⁶⁰ 本論文では、筆者がひとまとまりとして捉えた1つの物語、すなわちそれぞれの構成要素(「構成要素」の定義は後述する)を含んだ一連の流れを持つ物語のことを「神話」と呼び、それぞれの神話にあるひとまとまりの文章や1つ、もしくはいくつかの構成要素を含んだ文章を「記述」と呼ぶこととする。

⁶¹ 本論文において定義する「構成要素」は、物語中にある神話素の機能や意味などを抜粋もしくは要約したもののことを指す。神話素とは、C・レヴィ＝ストロースによって提唱された概念であり、神話(物語)中において、何かしらの機能やテーマなどの意味を持っている、最小単位の文章のことである。この神話素と本論文における構成要素が、一致している場合もあるが、いくつかの連続的な神話素を1つの構成要素として扱っている場合もあるため、本論文では「構成要素」と呼ぶこととする。

⁶² ここでは、便宜的にアルファベットによって分類した。

⁶³ 構成要素Aは、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の起点となるものであり、ブラフマー神による創造の過程において男女に分裂する存在が必要な理由や状況を示している。

⁶⁴ 構成要素Bは、ブラフマー神が自分自身の身体を男性半身と女性半身の2つに分けるという内容である。

⁶⁵ 構成要素Cは、女性半身シャタルーパーが困難な苦行をするという内容である。

⁶⁶ 構成要素Dは、Bにおいて分裂した半身同士が夫婦になるという構成要素である。

- E. マヌとシャタルーパーの子供たち⁶⁷
- F. その他の者たちの創造⁶⁸
- G. サーンキヤ・ヨーガ哲学に関する記述⁶⁹

この中で、構成要素 A、B、C、D、E は神話の流れに関わる構成要素であり、F、G は神話の流れに関わりのない構成要素である⁷⁰。つまり、構成要素 A→B→C→D→E へと物語が進んでいく前後や途中で構成要素 F、G が混在しているという形となっている。

本章では、第 1 節において構成要素ごとの細部における分析をし、第 2 節において神話の流れという全体的な分析を行なう。

第 1 節では、まず 17 のブラフマー創造神話の中から抜粋したそれぞれの構成要素に該当する記述を内容別に詳細に分類する。例えば、構成要素 A（発端：ブラフマー神による創造行為）を分類する場合、「ブラフマー神が創造を行なったが、創造された者たちが繁栄しない」という内容を含む記述を A1 と名付け、1 つのヴァリエーションとした。A1 においては更なる詳細な分類が可能と考え、A1 において創造された者たちが、生類の場合に A1①⁷¹とし、聖仙の場合に A1②とした。次に「ブラフマー神が創造のために苦行する」という内容を含む記述を A2 というヴァリエーションとした。そして「創造を進めている過程」にある記述を A3 とし、「ヴィシュヌ神やヴィシュヌ神の化身により、創造を促される」という内容の記述を A4 とした。このように A から G までの全ての構成要素を分類し、そのヴァリエーションから見られる一致や相違について分析する。一致点があることにより、17 のブラフマー創造神話が同じ物語を述べていることが明らかになり、相違点があることにより、それがいくつものヴァリエーションを持つことが明らかになる。

第 2 節では、17 のブラフマー創造神話全体の流れについて論じる。第 1 節において分類した構成要素を、それぞれの神話の流れに沿って並べ、17 のブラフマー創造神話がどのような構成要素の順番から成り立っているかを分析する。このように神話全体の流れをパターン化することで、ブラフマー創造神話という 1 つの物語の基本的な形態を導き出そうと試みる。

⁶⁷ 構成要素 E は、構成要素 D の夫婦から生まれる次世代に関するものである。

⁶⁸ 構成要素 F は、ブラフマー神が創造の過程において創り出した様々な者たちに関する記述を集めたものである。

⁶⁹ 構成要素 G は、サーンキヤ哲学やヨーガ哲学の思想を取り入れていると思われる記述の構成要素である。

⁷⁰ 物語の流れに関わりのない構成要素と判断した理由は、他の構成要素との強い関連性がなく、仮にこの構成要素が欠如したとしても、物語のつじつまが合わないなどの問題が生じない故である。

⁷¹ ①、②、③とした理由は、A1、A2、A3、A4 ほどの相違がなく、第 2 節において神話全体の流れを見る際に、その相違がさほど重要視されなくても問題がないと筆者が判断したためである。

第1節 ブラフマー創造神話の構成要素

第1項 構成要素別分類

まず、ブラフマー創造神話を構成要素別に分類すると、以下のようになる。

A. 発端：ブラフマー神による創造行為

A1. ブラフマー神が創造を行なったが、創造された者たちが繁栄しない

①創造された者たち：生類

②創造された者たち：聖仙

A2. ブラフマー神が創造のために苦行する

A3. 創造を進めている過程

A4. ヴィシュヌ神やヴィシュヌ神の化身により、創造を促される

B. 分裂：ブラフマー神が半身により女性に、半身により男性へと分裂する

B1. ブラフマー神が自分の意志で分裂する

①分裂した男性：ヴィラージュでもありスヴァーヤンブヴァでもあり男性でもあるマヌ

分裂した女性：シャタルーパー

②分裂した男性：ヴァイラージャ（ヴィラージュの息子）でもありスヴァーヤンブヴァでもあり男性でもあるマヌ

分裂した女性：シャタルーパー

③分裂した男性：スヴァーヤンブヴァでもあるマヌ

分裂した女性：シャタルーパー

④分裂した男性：記述なし

分裂した女性：シャタルーパー

⑤男性半身マヌと女性半身シャタルーパーに分裂するという記述に他の構成要素が混在している

⑥正しく行いをし、運命を観察しているとブラフマー神の身体が男性半身マヌと女性半身シャタルーパーに二分される

⑦分裂した男女がヴィラージュを創造し、そのヴィラージュがマヌを創造する

⑧シヴァ神に促され、ブラフマー神が男性スヴァーヤンブヴァと女性シャタルーパーに分裂する

⑨男女に分裂する

⑩男女に分裂し、それが夫と妻になる

⑪親指から男性と女性を創る

B2. ブラフマー神が自身の半身から妻を生み出す

C. シャタルーパーによる苦行

①構成要素 B において分裂した女性半身シャタルーパーが苦行する

D. マヌとシャタルーパーに関する記述：マヌとシャタルーパーが夫婦関係になる

D1. マヌとシャタルーパーが夫婦になる

①マヌがシャタルーパーを妻にする

②シャタルーパーがマヌを夫にする

③マヌがシャタルーパーを妻とし、さらにラティという名前の起源が語られる

④シャタルーパーがマヌを夫とし、さらにラティという名前の起源が語られる

D2. その他の記述

①maithuna（性行為）と vivāha（結婚）という表現

②mithuna（夫婦）という表現

③maithuna（性行為）という表現

E. マヌとシャタルーパーの子供たち

E1. 息子や娘を生み出した

①息子：プリヤヴラタとウッターナパーダ、娘：アークーティとプラスーティ

②息子：プリヤヴラタとウッターナパーダ、娘：アークーティとデーヴァフーティとプラスーティ

③息子：プリヤヴラタとウッターナパーダ、娘：名前は不明

④息子：プリヤヴラタとウッターナパーダのみ

E2. 生類たちを生み出した

F. その他の者たちの創造

F1. ルドラの創造

①怒りから生まれる。「泣く」ので「ルドラ」と名付けられる

②怒りから生まれる

③「泣く」ので「ルドラ」と名付けられる

④ニーラローヒタ（赤みがかった青色）であるルドラが生まれる

F2. 聖者たちの創造

F3. その他の者たちの創造

G. サーンキヤ・ヨーガ哲学に関する記述

G1. トリグナ⁷²に関する記述

G2. プルシャとプラクリティという記述

① プルシャとプラクリティ

② プラクリティ

G3. ヨーガに関する記述

続いて、上記の構成要素を神話の流れに沿って配置する（表 4）。この表 4 は、それぞれのブラフマー創造神話の中で、どの構成要素がどの偈で述べられているかを示したものである。『マヌ法典』を例に取ると、『マヌ法典』第 1 章 1 偈から 31 偈において構成要素 A3（創造を進めている過程）を述べており、32 偈で構成要素 B1⑦（分裂：ブラフマー神が半身により女性に、半身により男性へと分裂する：ブラフマー神が自分の意志で分裂する：分裂した男女がヴィラージュを創造し、そのヴィラージュがマヌを創造する⁷³）を述べ、34-35 偈で構成要素 F2（聖者たちの創造）を述べ、36-51 偈で構成要素 F3（その他の者たちの創造）を述べているということである。この表 4 を見ると、17 のブラフマー創造神話の中で各構成要素が複雑に配置され、それぞれの神話が様々なヴァリエーションを持って描かれていることが分かる。

⁷² サットヴァ、ラジャス、タマスの 3 要素のことである。

⁷³ B（分裂：ブラフマー神が半身により女性に、半身により男性へと分裂する）における B1（ブラフマー神が自分の意志で分裂する）の中の⑦（分裂した男女がヴィラージュを創造し、そのヴィラージュがマヌを創造する）という構成要素であるため、B1⑦（分裂：ブラフマー神が半身により女性に、半身により男性へと分裂する：ブラフマー神が自分の意志で分裂する：分裂した男女がヴィラージュを創造し、そのヴィラージュがマヌを創造する）と表記した。以下、同様の表記を行なう。

表 4 神話の構成要素と当該箇所を対応させた表（ブラフマー創造神話）

文献名	各構成要素の配置（上段：構成要素、下段：対応する偈）							
マヌ法典 1.1-51	A3 1-31	B1⑦ 32	F2 34-35	F3 36-51				
Agni-p. 17.15-18.1	F2 15	A3 15-17	B1③ 17.16-17,18.1	C① 18.1	E1③ 18.1			
Bhāgavata-p. 3.12.51-56	A1② 51-52	B1⑥ 53-55	D2② 54-55	E1② 56				
Brahma-p. 1.41-59	F2 44-50	F1② 46	F3 47-51	A1① 52	B1⑤ 53-58	D1① 58	E2 59	
Brahma-p. 43.30-38	A3 30	F3 31-36	F2 33-34	B1⑨ 37-38ab	D2③ 37-38ab	E2 37-38ab		
Brahma-p.Gm. 91.33cd-35ab	B1⑩ 33cd-35ab							
Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.8cd-42	A1① 8cd-9	G1 10-13	B1④ 13-15	G2② 15	F2 16-29	F1④ 23	A1① 28-29	
	B1② 31-36,39	G1 28-32	G2① 33-38	C① 35-36	D1③ 37-38	E1① 40-42		
Kālikā-p. 25.44-55	F1③ 44-46	A3 1-43	B1⑦ 50-52	F2 51-54				
Kūrma-p. 1.8.1-12ab	G1 2-5	A3 5-6	B1① 6-11	G3 7-8	C① 9-11	D1② 9-11	E1① 9-11	
Liṅga-p. 1.70. 260cd-276	A1① 261	G1 261-266	B1① 267-273	G2② 268	C① 269-270	D1④ 269-273	E1① 275-276	
Matsya-p. 3.30-32	A3 30-31	B1④ 30-32						
Padma-p. 1.40.67-72	A2 67	B2 68	F2 69-72					
Śiva-p. 2.1. 16.3-15ab	A3 3-9	F2 4-8	F3 9	B1⑧ 10-12	C① 12	G3 12	D2① 11-13	E1② 14-15ab

Śiva-p. 5. 29.16-30.5	F2 29.16-19 D1② 30.3	F1② 29.17 E1④ 30.5	F3 29.23	A1① 29.24	B1⑤ 29.24-27,30.1-2	C① 30.3
Śiva-p. 7.1.17.1-6	A3 7.1.16.4-16	B1① 1-3	C① 4	D1② 4	E1① 5-6	
Varāha-p. 2.13-20	A4 13	F1① 14-16	B1① 18-19			
Vāyu-p. 10.1-17	A1① 1	G1 2-5	B1① 7-11,14	C① 10-11	D1④ 10-13	E1① 15-17

以下、原文と和訳を示してこれらの構成要素を詳細に分析していく。

第2項 構成要素 A の分析

構成要素 A（発端：ブラフマー神による創造行為）は、本章で扱うブラフマー創造神話と次章で論じるアルダナーリーシュヴァラ創造神話の起点となる構成要素である。基本的には、ブラフマー神による創造の過程において男女に分裂する存在が必要な理由や状況を示している。A1 では、創造された者たちが繁栄しないため、創造が進まないことを示しており、A2 では、苦行をしている。A3 においても、自身の身体を捨てたり、女神を念想したり、様々な者たちを創造している。A4 は、Varāha-p. がヴィシュヌ神を最高神とするヴィシュヌ派に属するプラーナ聖典であるため、ヴァラーハ（ヴィシュヌ神の化身）がブラフマー神に対し、創造を促していると考えられる。

このように、多くの記述において創造が容易ではないことが示されている。その中で、ブラフマー神が男女に分裂し、新しい形の創造を始めるという要素は、創造を進展させる上で、重要な役割を担っていると考えられる。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す⁷⁴。

A1. ブラフマー神が創造を行なったが、創造された者たちが繁栄しない

①創造された者たち：生類

【Brahma-p. 1.52】

āyatam⁷⁵ ca prajāśargam sṛjato 'pi prajāpateḥ /

⁷⁴ 他の構成要素の記述と重複することがあるが、分かりやすくするため、省略せず全てを載せることとする。

srjyamānāḥ prajā naiva vivardhante yadā tadā //52//

ブラジャーパティ（創造主、ブラフマー）からのたくさんの生類の創造がなされた時でも、創造された生類は、全く繁栄しなかった。

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.8cd-9】

athāsya srjataḥ sargaṃ prajānāṃ parivṛddhaye//8cd//

na vyavarddhamta tāḥ sṛṣṭāḥ prajāḥ kenāpi hetunā/

tataḥ sa vidadhe buddhim arthaniścayagāminim//9//

そして生類の創造を促進させるためにこの者（ブラフマー）が創造している間、それらの創造された生類はいかなる理由によっても繁栄しなかった。そこで彼（ブラフマー）は原因に近づくための知性を働かせた。

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.28-29】

kriyāvaṃtaḥ prajāvaṃto maharṣibhir alaṃkṛtāḥ/

yadā tair iha sṛṣṭais tu dharmmādyais ca maharṣibhiḥ//28//

srjyamānāḥ prajāś caiva na vyavarddhamta dhīmataḥ/

tamomātrāvṛtaḥ so 'bhūc chokapratihataś ca vai//29//

〔彼らは〕儀礼を行い生産（生殖）を行なう者たちであり、偉大なりシたちによって讃えられている。この世界で、これらの創造されたダルマをはじめとする偉大なりシたちによって、生類たちが知者（ブラフマー）から創造されたが、繁栄しなかった時、彼（ブラフマー）はタマスの要素に覆われ、そして悲しみに打ちひしがれた。

【Līṅga-p. 1.70.261】

yadāsya tāḥ prajāḥ sṛṣṭā na vyavarddhamta sattamāḥ /

tamomātrāvṛto brahmā tadā śokena duḥkhitāḥ // 261 //

彼に創造されたこれらの素晴らしい生類が繁栄しなかったので、タマスの要素に覆われたブラフマー神は、悲しみによって落ち込んだ。

【Śiva-p. 5.29.24】

srjyamānāḥ prajāś caiva nāvarddhanta yadā tadā⁷⁶ /

⁷⁵ 原文（N版）では āya taṃ（分書）となっているが、英訳を参照し、単語の有無を考慮し、āyatam（連書）とした。

⁷⁶ K版では yadā となっている。この場合、「何度も何度も創造された生類たちが増えなかった」ことになり、意味的に不可解な点があるので、N版を採用した。ほぼ平行句である Brahma-p. 1.52 でも tadā となっている。

dvidhā kṛtvātmano dehaṃ strī caiva puruṣo 'bhavat //24//

創造された生類たちが繁栄しなかったの、〔ブラフマーは〕自身の体を 2 つにしてまさに男と女になった。

【Vāyu-p. 10.1】

evaṃ bhūteṣu lokeṣu brahmaṇā lokakartṛṇā /

yadā tā na pravarttante prajāḥ kenāpi hetunā // 1 //

このように、世界の創造者ブラフマーによって世界〔の生類〕が創られたが、それらの生類はいかなる原因によっても増えなかった。

②創造された者たち：聖仙

【Bhāgavata-p. 3.12.51-52】

ṛṣiṇāṃ bhūrivīryāṇāṃ api sargam avistṛtam /

jñātvā tad vṛddhaye bhūyaś cintayāmāsa kaurava // 51 //

聖仙たちの偉大な力によってでさえも発展しない創造を知って、彼（ブラフマー）は、再びその増大⁷⁷のために熟考した。カウラヴァ⁷⁸よ。

aho adbhutam etan me vyāpṛtasyāpi nityadā /

na hy edhante prajā nūnaṃ daivam atra vighātakam // 52 //

おお。これは驚くべきことだ。私が常に従事しているにもかかわらず、生類が全く繁栄しない。この場合、確実に運命が邪魔をしている。

A2. ブラフマー神が創造のために苦行する

【Padma-p. 1.40.67】

yaṃ kālāṃ te gatā brahmabrahmā taṃ kālāṃ eva ca /

tapo ghorataraṃ bhūyaḥ saṃśritaḥ paramaṃ padaṃ // 67 //

彼ら苦行をするバラモンたちが去ったまさにその時、〔ブラフマーは〕さらに非常に厳しい最高の状態の段階の苦行をしていた。

A3. 創造を進めている過程

【Agni-p. 17.15-17】

marīcim atryangirasam pulastyam pulahaṃ kratum/

⁷⁷ 前文に tato parām upādāya sa sargāya mano dadhe //50cd//（そして最高の者（女性）を得て、彼は創造のために専心した。）とあるので、「その増大」とは創造が進むことを指していると考えられる。

⁷⁸ ヴィドゥラのこと。ヴィドゥラとは、マハーバーラタの主要な登場人物の 1 人で、「ヴィヤーサとアンバーリカーの召使い女の息子。ドリタラーシトラとパーンドウの異母弟[上村 2002 p. 38]」である。

vasiṣṭhaṃ mānasān sapta brahmāṇān iti niścitam//15//

ブラフマーの心から生まれた 7 人と言われるマリーチ、アトリ、アンギラス、
プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタを〔創った〕。

saptaite janayanti sma prajā rudrās ca sattama/

dvidhā kṛtvātmo⁷⁹ deham arddhena puruṣo 'bhavat// 16//

arddhena nārī tasyāṃ sa brahmā vai cāsṛjat prajāḥ//17//

最高の者よ。この 7 人は生き物やルドラたちを生み出した。自身を 2 つにして、
半身によって男性に、半身によって女性になった。そして、かのブラフマーは
彼女の中に生き物たちを創造した。

【Brahma-p. 43.30】

tādṛgbhūtas tato brahmā sarvalokamaheśvaraḥ/

pañcabhūtasamāyuktaṃ sṛjate ca śanaiḥ śanaiḥ⁸⁰//30//

それから、そのような存在である全世界の偉大な神ブラフマーは、五大要素⁸¹を
合わせた〔世界〕を徐々に創っていった。

【Kūrma-p. 1.8.5-6】

adharmācaraṇo viprā hiṃsā cāsubhalakṣaṇā /

svāṃ tanuṃ sa tato brahmā tām apohata bhāsvarām // 5 //

バラモンたちよ。〔その一対は〕アダルマーチャラナ（非法な行い）と不吉な
性格のヒンサー（暴力）である。そこで、かのブラフマー神は自分のその輝く
体を捨てた。

dvidhākarot punard deham arddhena puruṣo 'bhavat /

arddhena nārī puruṣo virājam asṛjat prabuh // 6 //

さらに身体を 2 つにし、半分が男性に、半分が女性になった。男性神はヴィラ
ージュ（主）を創った。

【Matsya-p. 3.30-31】

sāvitṛiṃ⁸² lokasṛṣṭyartham hṛdi kṛtvā samāsthitaḥ /

⁷⁹ Ā 版では kṛtvā 'tsano となっている。これは、kṛtvā ātsano の連声を分かりやすくしたもの
と思われる。語に関しては、Ā 版の ātsano ではなく、英訳を参照し、N 版の ātmano を採用
した。よって、表記は kṛtvātmano を採用した。

⁸⁰ śanaiḥ śanaiḥ に関して、英訳では slowly となっているが、創造を進めていくという状況
から判断し、徐々にと訳した。

⁸¹ 地水火風空のことと考えられる。

⁸² 原文（Ā 版）は sāvitṛī となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、sāvitṛiṃ とし
た。

tataḥ saṃjapatas tasya bhittvā deham akalmaṣam // 30 //

strīrūpam ardhham akarod ardhmaṃ puruṣarūpavat /

śatarūpā ca sā khyātā sāvitrī ca nigadyate // 31 //

〔ブラフマー神は〕世界創造のために、心の中でサーヴィットリーを念想し、そして唱える者（ブラフマー）は、汚れのない体を自分から分けて、半身を女性の姿にし、半身を男性の姿にした。そして彼女はシャタルーパーと呼ばれ、サーヴィットリーとも呼ばれた。

【Śiva-p. 2.1.16.3-9】

sṛṣṭyaṃ tāt aparāṃś cāpi nāhaṃ tuṣṭo 'bhavaṃ mune⁸³ /

tato dhyātvā śivaṃ sām̐baṃ sādhaḥkān asṛjaṃ mune // 3 //

そして私は他の者たちを創造しても満足しなかった。聖者よ。そこで、アンバーを共なるシヴァを瞑想し、私はサーダカ（修行者）たちを創造した。聖者よ。

marīciṃ ca svanetrābhyāṃ hṛdayād bhṛgum eva ca /

śirasō 'gīrasaṃ vyānāt pulahaṃ munisattamaṃ // 4 //

udānāc ca pulastyaṃ hi vasiṣṭhañ ca samānataḥ /

kratuṃ tv apānāc chrotrābhyāṃ atrīṃ dakṣaṃ ca prāṇataḥ // 5 //

asṛjaṃ tvāṃ tadotsaṃgāc chāyāyāḥ kardamaṃ munim /

saṃkalpād asṛjaṃ dharmāṃ sarvasādhanaśādhanaṃ // 6 //

マリーチを私の両目から、ブリグを心から、アンギラスを頭から、聖者の最高者プラハをヴィヤーナ（氣）から、プラスティヤをウダーナ（氣）から、ヴァスィシュタをサマーナ（氣）から、クラトゥをアパーナ（氣）から、アトリを耳から、ダクシャをプラーナ⁸⁴（氣）から、あなた（ナーラダ）を膝から、カルダマ仙を影から、私は創った。〔さらに〕私は、全てを成就させる手段であるダルマをサンカルパ（誓願）から創った。

evam etān ahaṃ sṛṣṭvā kṛtārthaḥ⁸⁵ sādhaḥkottamān /

abhavaṃ muniśārdūla mahādevaprasādataḥ // 7 //

このように私はこれらの最高のサーダカたちを創り、マハーデーヴァの恩恵によって、満足した。聖者の最高者よ。

tato mad ājñayā tāta dharmāḥ saṃkalpasambhavaḥ /

mānavaṃ rūpam āpannaḥ⁸⁶ sādhaḥkais tu pravartitaḥ // 8 //

⁸³ N 版では 'bhavamune となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、K 版の 'bhavaṃ mune を採用した。

⁸⁴ プラーナは風あるいは気を意味し、体内を巡って体調を整えるものである。五風（氣）や十風（氣）として知られる。前述の気も全てプラーナに含まれる。

⁸⁵ N 版では kṛtārthas となっている。

そして、私の命令によって、サンカルパから生まれたダルマは、人間の姿を得て、サーダカたちと共に動き始めた。愛しき者よ。

tato 'srjaṃ svagātrebhyo vividhebhya 'mitān sutān /

surāsurādikāṃs tebhya dattvā tām tām tanuṃ mune // 9 //

そして、私は自分の肢体の様々な部分から、神からアスラまでの無数の息子たちを、彼らにそれぞれの体を与えて創った。聖仙よ。

【Kālikā-p. 25.1-43】

ブラフマー神が原子レベルの創造をし、その維持のためにヴィシュヌ神になり、更に地球を水から持ち上げて世界像創造をするためにヴァラーハになる⁸⁷。

【Śiva-p. 7.1.16.4-26】

ブラフマー神による創造の過程でアルダナーリーシュヴァラが創造を行なう⁸⁸。

【『マヌ法典』 1.1-31[渡瀬 1990 pp. 21-26]】

ブラフマンが世界創造と生類創造をする。

A4. ヴィシュヌ神やヴィシュヌ神の化身により、創造を促される

【Varāha-p. 2.13】

evambhūtasya me devi nābhipadme⁸⁹ caturmukhaḥ /

uttasthau sa mayā proktaḥ prajāḥ srja mahāmate //13//

このようになっている私（ヴァラーハ）の臍の蓮の上に四面〔のブラフマー〕が現れ出た。女神よ。マハーマティー（思慮深き者）よ。私は彼（ブラフマー）に「生類を創造せよ」と言った。

第3項 構成要素 B の分析

構成要素 B(分裂:ブラフマー神が半身により女性に、半身により男性へと分裂する)では、ブラフマー神が自分自身の身体を男性半身と女性半身の2つに分けるという形が基本となっている。

多くの記述で女性半身の名前をシャタルーパーとしている。B1④Matsya-p. 3.30-32 に

⁸⁶ N 版では āpannas となっている。

⁸⁷ 原文および翻訳は省略する。

⁸⁸ 第2章にて取り扱っている神話なので、詳細は第2章を参照のこと。

⁸⁹ 原文（B 版）は nāmbhipadme だが、英訳を参照し、nābhipadme とした。

もある通り、シャタルーパーという名はブラフマー神の配偶神サラスヴァティー女神の別名であり、半身同士の関係性が夫婦関係である可能性が高い。B2 の記述も半身の女性を妻として生み出しており、夫婦関係がある。他の記述も、多くが後に女性半身を妻にする⁹⁰ことから、この半身同士には夫婦関係が強くイメージ付けられていると言える。

B1①と B1②、B1③に関しては、スヴァーヤンブヴァ（ブラフマー神の息子）という名とマヌ（男性、人間）という名が述べられ、ブラフマー神から生まれた最初の男性であることが主張されていると言える。反対に B1④では、男性半身の特徴が示されていない。女性半身に関しては、B1①～④では、シャタルーパーという名を確実に述べている。B1⑤では、ヴィシュヌ神とナーラーヤナ神、アーパヴァが登場している。それぞれの記述内容に差異はあるが、ヴィラージュを創った者がヴィシュヌ神であること、ナーラーヤナ神の創造は子宮から生まれたものではないこと、アーパヴァがシャタルーパーと夫婦になることという構成要素が述べられている。これらの構成要素は B1①～④には見られないため、他の神話の構成要素が混在した可能性がある。B1⑥では、男性半身がスヴァーヤンブヴァ、マヌ、女性半身がシャタルーパーという名前であり、これは B1①～③と一致している。B1⑦では、分裂した 2 人がヴィラージュを創り、さらにそのヴィラージュからマヌが創られており、前章で述べた『マヌ法典』の内容と一致している。B1⑧では、分裂をシャンカラ（シヴァ神）が指示する。この場面でのシヴァ神の登場はこの文献だけである。Śiva-p. が、シヴァ神を最高神とするシヴァ派に属するプラーナ聖典であることが、シヴァ神登場の一因と考えられる。B1⑨では、男性と女性に二分したことのみで、男女の名が述べられていないが、特筆すべきは「右半身が男性になり、左半身が女性になる」ことであろう。右半身が男性、左半身が女性という形は、現在のアルダナーリーシュヴァラの姿と同様である⁹¹。B1⑩でも同様に右から男性が創られ、左から女性が創られている。しかし親指という他には見られない構成要素を持っている。これは、他の神話の構成要素が混入したものと考えられる。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

B1. ブラフマー神が自分の意志で分裂する

①分裂した男性：ヴィラージュであり、スヴァーヤンブヴァであり、男性マヌ

分裂した女性：シャタルーパー

【Kūrma-p. 1.8.6-11】

dvidhākarot punard deham arddhena puruṣo 'bhavat /

arddhena nārī puruṣo virājam asrjat prabuh //6//

さらに身体を 2 つにし、半分が男性に、半分が女性になった。男性神はヴィラ

⁹⁰ 本節第 5 項を参照のこと。

⁹¹ 序論第 1 節第 2 項を参照のこと。

ージュを創った。

nārīm ca śatarūpākhyāṃ yoginīm sasrje śubhām /

sā divaṃ pṛthivīm caiva mahimnā vyāpya samsthitā //7//

そして、彼は〔女性半身によって〕シャタルーパーという名の吉祥なるヨーギニーの女性を創った。彼女は偉大さによって、天と地に満ちてとどまった。

yogaiśvaryaśabalopetā jñānavijñānasamyutā /

yo 'bhavat puruṣāt putro virāḍavyaktajanmanaḥ //8//

ヨーガの超能力を授けられた者（シャタルーパー）は、〔高い〕知識と判断力を持っていた。未顕現から生まれた男性（ブラフマー）から生まれた息子がヴィラージュである。

svāyaṃbhuvo manurd devaḥ so 'bhavat puruṣo munīḥ /

sā devī śatarūpākhyā tapaḥ kṛtvā suduścaram //9//

bharttāraṃ diptayaśasaṃ manum evānvapadyata /

tasmāc ca śatarūpā sā putradvayam asūyata //10//

priyavratottānapādau kanyādvayam anuttamam /

tayoḥ prasūtiṃ dakṣāya manuḥ kanyāṃ dade punaḥ //11//

その男性（息子）は、スヴァーヤンブヴァ（自生者スヴァヤンブーの息子）であるマヌ神であり、聖者であった。かのシャタルーパーという名の女神は非常に困難な苦行をし、輝かしい名声のマヌを夫として得た。そして彼とそのシャタルーパーは2人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダ、そして2人の素晴らしい娘をもうけた。彼女たちのうち、プラスーティという娘をマヌはダクシヤに与えた。

【Liṅga-p. 1.70.267-273】

dvidhā kṛtvā svakaṃ deham ardhena puruṣo 'bhavat⁹² /

ardhena nārī sā tasya śatarūpā vyajāyata // 267 //

〔ブラフマーは〕自身の体を2つにし、半身によって男性になった。彼（ブラフマー）の〔もう一方の〕半身がシャタルーパーという女性として生まれた。

prakṛtiṃ bhūtaḥkṛtiṃ tām kāmād vai sṛṣṭavān prabhuḥ /

sā divaṃ pṛthivīm caiva mahimnā vyāpyadhiṣṭhitā // 268 //

〔ブラフマー〕神は意欲（kāma）から、かの〔全〕存在を支えるプラクリティを創った。それ（プラクリティ）は、偉大さによって天と地に満ちて、とどまった。

brahmaṇaḥ sā tanuḥ pūrvā divam āvṛtya tiṣṭhati /

⁹² 原文（N版）では puruṣobhavat となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、puruṣo 'bhavat とした。

yā tv ardhāt sṛjato nārī śatarūpā vyajāyata // 269 //

sā devī niyutaṃ taptvā tapaḥ paramaduścaram /

bhartāraṃ dīptayaśasaṃ puruṣaṃ pratyapadyata // 270 //

ブラフマーのかの最初の体（男性の半身）は、天を覆ってとどまった。半身から創られたシャタルーパーという女神は、1 億年の間、最高に困難な苦行をし、夫として輝く名声の男性を得た。

sa vai svāyaṃbhavaḥ pūrvaṃ puruṣo manur ucyate /

tasyaiva saptatiyugaṃ manvaṃtaram ihocyate // 271 //

彼こそ、最初のスヴァーヤンブヴァという男性（人間）マヌであると言われる。その 70 の〔大〕ユガ期を、この世界では、マヌヴァンタラと言う。

lebhe sa puruṣaḥ patnīm śatarūpām ayonijām /

tayā sārdhaṃ sa ramate tasmāt sā ratir ucyate // 272 //

かの男性は子宮から生まれたのではないシャタルーパーを妻にした。彼は彼女と共に楽しんだ。それゆえ、彼女はラティ⁹³と呼ばれる。

prathamaḥ saṃprayogātmā kalpādaḥ samapadyata /

virājam asṛjad brahmā so 'bhavat⁹⁴ puruṣo virāt // 273 //

最初の自身の〔半身同士の〕結合が、カルパの初めに起こった。ブラフマーはヴィラージュを創り、かの男性ヴィラージュが出来た。

【Śiva-p. 7.1.17.1-3】

evaṃ labdhvā parāṃ śaktim īśvarād eva śāśvatīm /

maithunaprabhavāṃ sṛṣṭiṃ kartṛkāmaḥ prajāpatiḥ // 1 //

svayam apy adbhuto nārī cārddhena puruṣo 'bhavat /

yārdhena nārī sā tasmāc chatarūpā vyajāyata // 2 //

このように、神から、永遠であり最高であるシャクティを得て、性交による生殖という創造を欲する創造主（ブラフマー神）は、自身で、半身によって女性、〔半身によって〕男性という驚異的な姿になった。半身によって女性に〔なった〕彼女は、それゆえシャタルーパーとして生まれた。

virājam asṛjad brahmā so 'rddhena⁹⁵ puruṣo 'bhavat /

sa vai svāyaṃbhavaḥ pūrvaṃ puruṣo manur ucyate // 3 //

ブラフマーは半身によって男性になりヴィラージュを創った。彼は、スヴァーヤンブヴァという最初の男性であり、マヌであると言われる。

⁹³ rati（楽しみ、悦楽）は動詞√ram（楽しむ）からの派生語である。

⁹⁴ 原文（N 版）では sobhavat となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、so 'bhavat とした。

⁹⁵ N 版では 'ddhana となっているが、英訳を参照し、K 版の 'rddhena を採用した。

【Vāyu-p. 10.7-11,14】

svāṃ tanuṃ sa tato brahmā tām apohad abhāsvarām /

dvidhākarot⁹⁶ sa taṃ deham arddhena puruṣo 'bhavat // 7 //

そこで、かのブラフマーは輝かない自身の体を捨てた。彼はその体を2つに分け、〔体の〕半身が男性になった。

arddhena nārī sā tasya śatarūpā vyajāyata /

prākṛtām bhūtadhātṛīm tām kāmān vai sṛṣṭavān vibhuḥ // 8 //

彼の半身がシャタルーパーという女性として生まれた。〔その後〕遍在する者（ブラフマー）は生類を支えるかの大地と欲望を創造した。

sā divaṃ pṛthivīm⁹⁷ caiva mahimnā vyāpya dhiṣṭhitā /

brahmaṇaḥ sā tanuḥ pūrvā divam⁹⁸ āvṛtya⁹⁹ tiṣṭhati // 9 //

彼女は偉大さによって天と地に満ちた。ブラフマーのかの以前の体は天を包んでいた。

yā tv ardhāt¹⁰⁰ sṛjate nārī śatarūpā vyajāyata /

sā devī niyutaṃ taptvā tapaḥ paramaduṣcaram // 10 //

bhartāraṃ¹⁰¹ dīptayaśasaṃ puruṣaṃ pratyapadyata /

sa vai svāyambhuvaḥ¹⁰² pūrvam puruṣo manur ucyate // 11 //

半身から創られた女性であるシャタルーパー女神は、1億年の間、最高に困難な苦行をし、〔彼女は〕夫として輝く名声の男性を得た。彼こそ最初のスヴァーヤンブヴァという男性マヌであると言われる。

virājam asṛjat brahmā so 'bhavat puruṣo virāt /

samrāṇ mānasarūpāt¹⁰³ tu vairājas tu manuḥ smṛtaḥ // 14 //

ブラフマーはヴィラージュを創った。そのヴィラージュは男性になった。支配者の精神的な姿であるために、ヴァイラージャ・マヌと言われる。

⁹⁶ Ā 版では dvidhā 'karot となっている。これは dvidhā akarot の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

⁹⁷ N 版では pṛthivīṃ となっている。

⁹⁸ Ā 版では didam となっているが、英訳を参照し、N 版の divam を採用した。

⁹⁹ N 版では āvṛtṭya となっている。

¹⁰⁰ N 版では arddhāt となっている。

¹⁰¹ N 版では bhartāraṃ となっている。

¹⁰² N 版では svāyambhuvaḥ となっている。

¹⁰³ Ā 版では sa samrāt sāsarūpāt となっている。英訳を参照し、N 版を採用したが、Ā 版の場合の訳は「彼は支配者の曲げられた（弓の、お辞儀した）姿であるために、ヴァイラージャ・マヌと言われる。」

②分裂した男性：ヴィラージュであり、ヴァイラージャ（ヴィラージュの息子）であり、スヴァーヤンブヴァであり、男性マヌ

分裂した女性：シャタルーパー

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.31-36,39】

pratisrotātmako 'dharmo hiṃsā caivāśubhātmikā /

tataḥ pratihate tasya pratīte varaṇātmake //31//

svāṃ tanuṃ sa tadā brahmā samapohata bhāsvarām /

dvidhā kṛtvā svakaṃ deham arddhena puruṣo 'bhavat //32//

アダルマ（非法）は流れに逆らう性質であり、そしてヒンサー（暴力）はまさに不吉な性質である。そして彼（ブラフマー）が打ちひしがれて〔タマスに〕覆われるようになった時、かのブラフマーは自分の輝く体を捨てた。自分の体を二分した後、半身によって男性になった。

ardhena nārī sā tasya śatarūpā vyajāyata /

prakṛtir bhūtaḥtrī sā kāmād vai sṛjataḥ prabhoḥ //33//

彼の半身によってかの女性シャタルーパーが生じた。彼女は、創造する者である神がカーマから〔創られたので〕、プラクリティであり生類の母である。

sā divaṃ pṛthivīm caiva mahimnā vyāpya susthitā /

brahmaṇaḥ sā tanuḥ pūrvā divaṃ āvṛtya tiṣṭhataḥ //34//

彼女は偉大さによって天と地に満ち、確立した。それは天を覆って留まっているブラフマーの以前の体であった。

yā tv arddhā sṛjyate nārī śatarūpā vyajāyata /

sā devī niyutaṃ taptvā tapaḥ paramaduścaram¹⁰⁴ //35//

bharttāraṃ diptayaśasaṃ puruṣaṃ pratyapadyata /

sa vai svāyaṃbhavaḥ pūrvāṃ puruṣo manur ucyate //36//

女性として創造された半身はシャタルーパーになった。その女神は、1 億年の間、最高に困難な苦行を行ない、夫として輝かしい名声の男性を得た。そしてまさに彼は以前にスヴァーヤンブヴァであり、プルシャであり、マヌと呼ばれた。

virājam asṛjad brahmā so 'bhavat puruṣo virāt /

samrāt saśatarūpas tu vairājas tu manuḥ smṛtaḥ //39//

ブラフマーはヴィラージャ（輝く者）を創った。彼はプルシャであり、ヴィラージュであり、サムラージュ（最高の主）であり、シャタルーパーを伴った者であり、ヴァイラージャ（ヴィラージュの息子）であり、マヌと呼ばれる者に

¹⁰⁴ 原文（M 版）では parama duścaram（分書）となっているが、ほぼ平行句となっている Śiva-p. 5.30.3 を参照し、paramaduścaram（連書）とした。

なった。

③分裂した男性：スヴァーヤンブヴァであり、マヌ

分裂した女性：シャタルーパー

【Agni-p. 17.16-17, 18.1】

saptaite janayanti sma prajā rudrās ca sattama /

dvidhā kṛtvātmo¹⁰⁵ deham arddhena puruṣo 'bhavat // 16//

arddhena nārī tasyāṃ sa brahmā vai cāsṛjat prajāḥ //17//

最高の者よ。この7人は生き物やルドラたちを生み出した。自身を2つにして、半身によって男性に、半身によって女性になった。そして、かのブラフマーは彼女の中に生き物たちを創造した。

priyavratottānapādaḥ manuḥ svāyambhuvaḥ sutau /

ajījanat sutāṃ ramyāṃ śatarūpāṃ tapo 'nvitām //1//

スヴァーヤンブヴァであるマヌは苦行に従事しているシャタルーパーにプリヤヴラタとウッターナパーダという2人の息子と美しい娘を産ませた。

④分裂した男性：記述なし

分裂した女性：シャタルーパー

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.13-15】

tatas tasmin samudbhūte mithune varaṇātmake /

tataḥ sa bhagavān āsīt prītaś caitaṃ hi śīśriye //13//

そこで、かの覆う性質を持った双子が生まれた時、かの神（ブラフマー）は喜んだ。そしてそれに依拠した。

evaṃ prītātmanas tasya svadehārdhdhād viniḥśṛtā /

nārī paramakalyāṇī sarvabhūtamanoḥarā //14//

このように喜んだ彼自身の半身から全存在の心を奪う最高に吉祥な女性が現れた。

sā hi kāmātmanā sṛṣṭā prakṛteḥ sā surūpiṇī /

śatarūpeti sā proktā sā proktaiva punaḥ punaḥ //15//

かの美しい姿の女性は、まさにカーマートマン（欲望¹⁰⁶を持つ者、ブラフマー）によってプラクリティから創られた。彼女はシャタルーパーとよばれた。彼女は何度も何度も〔そう〕呼ばれた。

¹⁰⁵ Ā 版では kṛtvā 'tsano となっているが、英訳を参照し、N 版の kṛtvātmano を採用した。

¹⁰⁶ 繁栄に対する欲望を意味する。

【Matsya-p. 3.30-32】

sāvitṛiṃ¹⁰⁷ lokasṛṣṭyartham hṛdi kṛtvā samāsthitaḥ /
tataḥ saṃjapatas tasya bhittvā deham akalmaṣam // 30 //
strīrūpam ardhham akarod ardhmaṃ puruṣarūpavat /
śatarūpā ca sā khyātā sāvitṛi ca nigadyate // 31 //

〔ブラフマー神は〕世界創造のために、心の中でサーヴィットリーを念想し、そして唱える者（ブラフマー）は、汚れのない体を自分から分けて、半身を女性の姿にし、半身を男性の姿にした。そして彼女はシャタルーパーと呼ばれ、サーヴィットリーとも呼ばれた。

sarasvaty atha gāyatrī brahmānī ca paraṃtapa /
tataḥ svadehasaṃsūtām ātmajām ity akalpayat // 32 //

さらにサラスヴァティー、ガーヤットリー、ブラフマーニーとも〔呼ばれた〕。最高の苦行者よ。そして、自身の体から生み出した娘と考えた。

⑤男性半身マヌと女性半身シャタルーパーに分裂するという記述に他の構成要素が混在している

【Brahma-p. 1.53-58】

dvidhā kṛtvātmano¹⁰⁸ deham ardhena puruṣo 'bhavat /
ardhena narī tasyāṃ tu so 'srjad vividhāḥ prajāḥ //53//

彼（ブラフマー）は、自身の身体を2つにし、半身によって男性に、半身によって女性になった。彼は彼女に様々な種類の生類を創った。

divaṃ ca pṛthivīm caiva mahimnā vyāpya tiṣṭhati /
virājam asrjad viṣṇuḥ so 'srjat puruṣaṃ virāt //54//

彼（半身の男性）は、天や地に、偉大さによって満ち、とどまった。ヴィシュヌはヴィラージュを創り、かのヴィラージュはプルシャを創った。

puruṣaṃ taṃ manuṃ vidyāt tasya manvantaraṃ smṛtam /
dviṭīyaṃ mānasasyaitan manor antaram ucyate //55//

そのプルシャをマヌであるとするべきである。彼のマヌヴァンタラとして知られており、彼（ブラフマー）の心から生まれたマヌの2つ目の時代であると言われている。

sa vairājaḥ prajāśarge sasarja puruṣaḥ prabhuḥ /
nārāyaṇavisargasya prajāś tasyāpy ayonijāḥ //56//

¹⁰⁷ 原文（Ā版）は sāvitṛi となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、sāvitṛiṃ とした。

¹⁰⁸ 原文（N版）では kṛtvā 'tmano となっているが、これは kṛtvā ātmano の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは kṛtvātmano とした。

かのヴァイラージャであり、プルシャである神は、生類の創造〔の段階〕において創った。ナーラーヤナ(ヴィシュヌ)に創られた生類とマヌの生類もまた、子宮から生まれたものではなかった。

āyusmān kīrtimān dhanyaḥ prajāvāṁś ca bhaven naraḥ /
ādisargaṁ viditvemaṁ yatheṣṭāṁ cāpnuyād¹⁰⁹ gatim //57//

この最初の創造を知ったならば、人は、長寿で、名声を持ち、富を持ち、子を持つだろう。そして彼は望んだ目的を得るだろう。

sisṛkṣus tu prajāś tv evam āpavo vai prajāpatiḥ /
lebhe sa puruṣaḥ patnīm śatarūpām ayonijām //58//

このように、ブラジャーパティであるアーパヴァ¹¹⁰は、生類を創造することを望んだ。かの男性は、子宮から生まれたものではないシャタルーパーを妻として娶った。

【Śiva-p. 5.29.24-27, 30.1-2】

srjyamānāḥ prajāś caiva nāvarddhanta yadā tadā¹¹¹ /
dvidhā kṛtvātmano dehaṁ strī caiva puruṣo 'bhavat //24//

創造された生類たちが繁栄しなかったので、〔ブラフマーは〕自身の体を 2 つにしてまさに男と女になった。

sasṛje 'tha prajāḥ¹¹² sarvā mahimnā vyāpya viśvataḥ /
virājam asṛjad viṣṇuḥ¹¹³ sa sṛṣṭaḥ puruṣo virāt //25//

それから〔ブラフマーは〕全ての生類を創った。偉大さによってあらゆるところに満ちて、ヴィシュヌはヴィラージュを創った。ヴィラージュはかの創られたプルシャである。

dvitīyaṁ taṁ manuṁ viddhi manor antaram eva ca /
sa vairājaḥ prajāḥ¹¹⁴ sarvāḥ¹¹⁵ sasarja puruṣaḥ prabhuḥ //26//

¹⁰⁹ 原文 (N 版) では cā 'pnuyād となっているが、これは cā āpnuyād の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは cāpnuyād とした。

¹¹⁰ *Purāṇic Encyclopaedia* や主要な辞書では、アーパヴァはヴァスィシュタとされている。45 偈においてヴァスィシュタが創造されているので、そのようにとらえることは不可能ではないが、文脈から判断すると、ブラフマー神、もしくはブラフマー神から分かれた半身の男性を指す可能性が高いと考える。

¹¹¹ K 版では yadā となっている。この場合、「何度も何度も創造された生類たちが増えなかった」ことになり、意味的に不可解な点があるので、N 版を採用した。ほぼ平行句である *Brahma-p.1.52* でも tadā となっている。

¹¹² N 版では prajāś となっている。

¹¹³ N 版では viṣṇus となっている。

¹¹⁴ N 版では prajāś となっている。

次のかの〔者〕を、まさにマヌの他のマヌであると知るべきである。かのヴァイラージャであるプルシャ神は、全ての生類を創った。

nārāyaṇavisargasya prajāś tasyāpy ayonijāḥ /

āyusmān kīrtimān dhanyaḥ prajāvāṁś cābhavat tataḥ //27//

かのナーラーヤナの創造においては、生類たちは子宮から生まれたのではなかった。そこから〔創造されたものは〕長寿であり、有名であり、祝福された者であり、子たくさんになった。

saṁśṛṣṭāsu prajāsv eva āpavo 'tha prajāpatiḥ /

leme vai puruṣaḥ patnīm śatarūpām¹¹⁶ ayonijām //1//

そして生類が創造された時、アーパヴァ¹¹⁷である創造主プルシャは、子宮から生まれたのではない妻シャタルーパーを楽しんだ。

āpavasya mahimnā tu divam āvṛtya tiṣṭhataḥ /

dharmenaiva mahātmā sa śatarūpāpy¹¹⁸ ajāyata //2//

偉大さによって天を覆い、アーパヴァが留まっている時に、かのマハートマン（偉大な魂¹¹⁹）はまさにダルマによってシャタルーパーになった。

⑥正しく行いをし、運命を観察しているとブラフマー神の身体が男性マヌと女性シャタルーパーに二分される

【Bhāgavata-p. 3.12.53-55】

evaṁ yuktakṛtas tasya daivaṁ cāvekṣatas tadā /

kasya rūpam abhūd dvedhā yat kāyam abhicakṣate // 53 //

このように正しく行いをし、彼（ブラフマー）が運命を観察している時、体の形が2つになった。それを kāya（身体）と呼ぶ。

tābhyāṁ rūpavibhāgābhyāṁ mithunaṁ samapadyata /

yas tu tatra pumān so 'bhūn manuḥ svāyaṁbhūvaḥ svarāt // 54 //

これらの姿が分裂した2人によって、夫婦を生み出した。そして、そのうちの男性〔部分〕は、スヴァーヤンブヴァであり、スヴァラート（自己支配者）であるマヌになった。

¹¹⁵ N版では sarvās となっている。

¹¹⁶ K版では śatarūpam となっているが、語形変化と性の一致を考慮し、N版の śatarūpām を採用した。

¹¹⁷ このアーパヴァはマヌであり、ヴァスィシュタとは別人である可能性が高い。

¹¹⁸ K版では śatarūpā 'py となっている。これは śatarūpā apy の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここではN版の表記を採用した。

¹¹⁹ ここではアーパヴァのことを指すと思われる。

strī yāsīc¹²⁰ chatarūpākhyā mahiṣyasya hamātmanah /

tadā mithunadharmeṇa prajā hy edhāmbabhūvire // 55 //

力強いマハートマン〔を持つ者〕（ブラフマー）の女性〔部分〕は、シャタルーパーという名前になった。その時、夫婦関係によって生類は実に繁栄した。

⑦分裂した男女がヴィラージュを創造し、そのヴィラージュがマヌを創造する

【Kālikā-p. 25.50-52】

tato brahmā dvidhā bhūtvā puruṣo 'rdhena so 'bhavat /

ardhena nārī tasyāṃ tu virājam asṛjat prabhuh //50//

それからブラフマーは2つになって、半身によって彼は男性となった。そしてもう半身によって女性になった。神と彼女はヴィラージュを創造した。

tam¹²¹ āha bhagavān brahmā kuru sṛṣṭim prajāpate /

tapas taptvā virāt so 'pi manuṃ svāyambhuvaṃ tataḥ //51//

sasarja so 'pi tapasā¹²² brahmāṇaṃ paryatoṣayat /

toṣitas tena manasā dakṣaṃ sṛṣṭyai sasarja saḥ //52//

ブラフマー神は彼に言った。「創造をなせ。創造主よ。」かのヴィラージュも、苦行をし、スヴァーヤンブヴァであるマヌを創った。彼はまた、苦行によってブラフマーを満足させた。満足した彼（ブラフマー）は、彼（ブラフマー）の心によって、〔さらなる〕創造のためにダクシャを創った。

【『マヌ法典』 1.32[渡瀬 1990 p. 26]】

かの主（ブラフマン¹²³）は、自らの身体を二分して、半分によって男となり、半分で女となり、彼女の中にヴィラージュを生み出した。

⑧シヴァ神に促され、ブラフマー神が男性スヴァーヤンブヴァと女性シャタルーパーに分裂する

¹²⁰ 原文（N版）では yā 'śīc となっている。これは yā āśīc の連声を分かりやすく記述したものである。ここでは yāsīc と表記した。

¹²¹ C版とN版、双方の註釈には tad という解釈もあるとしているが、いずれも tam を採用している。

¹²² C版とN版、双方の註釈には manasā という解釈もあるとしているが、いずれも tapasā を採用している。

¹²³ 原文を見ると、この「ブラフマン」は男性形であるため「ブラフマー」と訳すこともできる。

【Śiva-p. 2.1.16.10-12】

tato 'haṃ śaṃkareṇātha prerito 'ṃtar gatena hi¹²⁴ /

dvidhā kṛtvātmano dehaṃ dvirūpaś cābhavaṃ mune // 10 //

そして、それから、私は、私の中にいるシャンカラ（シヴァ）に促され、自身の体を2つにして、2人の姿になった。聖者よ。

arddhena nārī puruṣaś cārdhena saṃtato mune /

sa tasyām asṛjad dvaṃdvaṃ sarvasādhanaṃ uttamam // 11 //

続けて、半身によって女性になり、半身によって男性になった。聖者よ。彼（男性半身）は、彼女（女性半身）において、全て〔を生み出す〕手段として最高の2人を創った。

svāyaṃbhavo manus tatra puruṣaḥ parasādhanaṃ /

śatarūpābhidhā nārī yoginī sā tapasvinī // 12 //

そこで、男性は最高の〔創造の〕手段であるスヴァーヤンブヴァになった。かの女性はシャタルーパーと呼ばれるヨーギニー（ヨーガ行者）であり、苦行者である。

⑨男女に分裂する

【Brahma-p. 43.37-38ab】

dakṣiṇāṃge tathātmānaṃ¹²⁵ saṃcintya puruṣaṃ svayaṃ/

vāme caiva tu nārīṃ sa dvidhā bhūtaṃ akalpayat//37//

tataḥ prabhṛti loke 'smin prajā maithunasambhavāḥ/38ab//

彼は、自分で考えてから、右半身で自分自身である男性を、左半身で女性を〔と
いうように〕、生類を二様に創った。そしてそれ以来、この世界では性行為に
よって生まれた生類が〔繁栄するようになった〕。

⑩男女に分裂し、それが夫と妻になる

【Brahma-p. Gm. 43.33cd-35ab】

vinā patnyā na sidhyeta yajñāḥ śrutinidarśanāt //33cd//

śarīraṃ ātmano 'haṃ vai dvedhā cākaravaṃ mune /

pūrvārdhena tataḥ patnī mamābhūd yajñasiddhaye //34//

uttareṇa tv ahaṃ tadvad ardho jāyā iti śruteḥ /35ab

天啓聖典が示すところによると、妻なしではヤジュニャは成就しない。そこで
私（ブラフマー）は自身の体を2つにした。聖仙よ。それからヤジュニャを成

¹²⁴ N版では ha となっている。

¹²⁵ 原文（N版）では tathā 'tmānaṃ となっている。これは tathā ātmānaṃ の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは tathātmānaṃ とした。

就させるために最初の半身で私の妻となった。残りの半身で私[になった]。「半身は妻である」と天啓聖典に「言われている」。

⑪親指から男性と女性を創る

【Varāha-p. 2.18-19】

tasmin salilamagne tu punar anyam prajāpatim /

brahmā sasarija bhūteṣu dakṣiṇāṅguṣṭhataḥ param //18//

しかし彼（ルドラ）が水に沈んでいる間に、ブラフマーは再び、生類たちの間に、他の最高のプラジャーパティを、右の親指から、創った。

vāme caiva tathāṅguṣṭhe tasya patnīm athāsrjat /

sa tasyām janayāmāsa manuṁ svāyambhuvaṁ prabhuḥ //19//

その後、まさに同様に、左の親指において彼（プラジャーパティ）の妻を創った。かの神（プラジャーパティ）は彼女（妻）の中にスヴァーヤンブヴァ・マヌを創り出した。

B2. ブラフマー神が自分の半身から妻を生み出す

【Padma-p. 1.40.68】

na ca śaktas tato brahmā prabhur ekas tapaś caran /

śarīrārdhāt tato bhāryām utpādayati tac chubhām // 68 //

そして、ブラフマー神は1人では苦行できなかったもので、体の半身から、吉祥な妻を生み出した。

第4項 構成要素 C の分析

構成要素 C①（シャタルーパーによる苦行：構成要素 B において分裂した女性半身シャタルーパーが苦行する）は、シャタルーパーが困難な苦行をする¹²⁶というものであり、ほとんどの記述で一致している。一方で、マヌが苦行をするという構成要素は Śiva-p. 5.30.3 においてのみ見られた。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

①構成要素 B において分裂した女性半身シャタルーパーが苦行する

【Agni-p. 18.1】

priyavratottānapādaḥ manuḥ svāyambhuvaḥ sutau/

ajījanat sutām ramyām śatarūpām tapo 'nvitām//1//

¹²⁶ この苦行の結果、シャタルーパーがマヌを夫にする（構成要素 D）。

スヴァーヤンブヴァであるマヌは苦行に従事しているシャタルーパーにプリヤヴラタとウッターナパーダという 2 人の息子と美しい娘を産ませた。

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.35-36】

yā tv arddhā sṛjyate nārī śatarūpā vyajāyata/

sā devī niyutaṁ taptvā tapaḥ paramaduścaram¹²⁷//35//

bharttāraṁ dīptayaśasaṁ puruṣaṁ pratyapadyata/

sa vai svāyaṁbhuvāḥ pūrvaṁ puruṣo manur ucyate//36//

女性として創造された半身はシャタルーパーになった。その女神は、1 億年の間、最高に困難な苦行を行ない、夫として輝かしい名声の男性を得た。そしてまさに彼は以前にスヴァーヤンブヴァであり、プルシャであり、マヌと呼ばれた。

【Kūrma-p. 1.8.9-11】

svāyaṁbhuvo manurd devaḥ so 'bhavat puruṣo munīḥ /

sā devī śatarūpākhyā tapaḥ kṛtvā suduścaram // 9 //

bharttāraṁ dīptayaśasaṁ manum evānvapadyata /

tasmāc ca śatarūpā sā putradvayam asūyata // 10 //

priyavratottānapāḍau kanyādvayam anuttamam /

tayoḥ prasūtiṁ dakṣāya manuḥ kanyāṁ dade punaḥ // 11 //

その男性（息子）は、スヴァーヤンブヴァであるマヌ神であり、聖者であった。かのシャタルーパーという名の女神は非常に困難な苦行をし、輝かしい名声のマヌを夫として得た。そして彼とそのシャタルーパーは 2 人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダ、そして 2 人の素晴らしい娘をもうけた。彼女たちのうち、プラスーティという娘をマヌはダクシャに与えた。

【Liṅga-p. 1.70.269-270】

brahmaṇaḥ sā tanuḥ pūrvā divam āvṛtya tiṣṭhati /

yā tv ardhāt sṛjato nārī śatarūpā vyajāyata // 269 //

sā devī niyutaṁ taptvā tapaḥ paramaduścaram /

bhartāraṁ dīptayaśasaṁ puruṣaṁ pratyapadyata // 270 //

ブラフマーのかの最初の体（男性の半身）は、天を覆ってとどまった。半身から創られたシャタルーパーという女神は、1 億年の間、最高に困難な苦行をし、夫として輝く名声の男性を得た。

¹²⁷ ほぼ平行句となっている Śiva-p. 5.30.3 を参照し、parama duścaram を連書した。

【Śiva-p. 2.1.16.12】

svāyaṃbhuvo manus tatra puruṣaḥ parasādhnam /

śatarūpābhīdhā nārī yoginī sā tapasvinī // 12 //

そこで、男性は最高の〔創造の〕手段であるスヴァーヤンブヴァになった。かの女性はシャタルーパーと呼ばれるヨーギニーであり、苦行者である。

【Śiva-p. 5.30.3】

sā tu varṣaśatam taptvā tapaḥ paramaduścaram /

bhartāram dīptatapasam puruṣam pratyapadyata //3//

彼女（シャタルーパー）は、100 年の間、最高に困難な苦行を行ない、熱烈な苦行を〔している〕プルシャを夫として得た。

【Śiva-p. 7.1.17.4】

sā devī śatarūpā tu tapaḥ kṛtvā suduścaram /

bharttāram dīptayaśasam manum evānvapadyata // 4 //

一方、かの女神シャタルーパーは非常に困難な苦行をし、輝かしい名声のマヌを夫として得た。

【Vāyu-p. 10.10-11】

yā tv ardhāt¹²⁸ sṛjate nārī śatarūpā vyajāyata /

sā devī niyutaṁ taptvā tapaḥ paramaduścaram // 10 //

bhartāram¹²⁹ dīptayaśasam puruṣam pratyapadyata /

sa vai svāyaṃbhuvah¹³⁰ pūrvam puruṣo manur ucyate // 11 //

半身から創られた女性であるシャタルーパー女神は、1 億年の間、最高に困難な苦行をし、〔彼女は〕夫として輝く名声の男性を得た。彼こそ最初のスヴァーヤンブヴァという男性マヌであると言われる。

第 5 項 構成要素 D の分析

構成要素 D（マヌとシャタルーパーに関する記述）は、分裂した半身同士（マヌとシャタルーパー）が夫婦になるという構成要素である。

D1 では「妻になる」もしくは「夫になる」という表現をしている。D1③～④におい

¹²⁸ N 版では arddhāt となっている。

¹²⁹ N 版では bhartāran となっている。

¹³⁰ N 版では svāyaṃbhuvah となっている。

では、「妻になる」もしくは「夫になる」という記述に加え、ラティという名が動詞√ram（楽しむ）に由来するという記述が含まれる。これは妻との性行為が男性にとって最も素晴らしい悦楽であるということを述べたものと考えられる。D2 では vivāha（結婚）、mithuna（夫婦）、maithuna（性行為）という言葉を用いて、創造（生産）を行なう男女の関係性を述べている。

構成要素 D では、相手をパートナーであると認識し合っている男女には創造（生産）が可能であり、2 人が創造をすべき関係であることを述べていると考えられる。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

D1. マヌとシャタルーパーが夫婦になる

①マヌがシャタルーパーを妻にする

【Brahma-p. 1.58】

sirṅkṣus tu prajāś tv evam āpavo vai prajāpatiḥ /

lebhe sa puruṣaḥ patnīm śatarūpām ayonijām // 58 //

このように、プラジャーパティであるアーパヴァは、生類を創造することを望んだ。かの男性は、子宮から生まれたものではないシャタルーパーを妻として娶った。

②シャタルーパーがマヌを夫にする

【Kūrma-p. 1.8.9-11】

svāyaṃbhavo manurd devaḥ so 'bhavat puruṣo munīḥ /

sā devī śatarūpākhyā tapaḥ kṛtvā suduścaram // 9 //

bharttāraṃ diptayaśasaṃ manum evānvapadyata /

tasmāc ca śatarūpā sā putradvayam asūyata // 10 //

priyavratottānapādau kanyādvayam anuttamam /

tayoḥ prasūtiṃ dakṣāya manuḥ kanyāṃ dade punaḥ // 11 //

その男性は、スヴァーヤンブヴァであるマヌ神であり、聖者であった。かのシャタルーパーという名の女神は、非常に困難な苦行をし、輝かしい名声のマヌを夫として得た。そして彼とそのシャタルーパーは2人の息子プリアヴラタとウッターナパーダ、そして2人の素晴らしい娘をもうけた。彼女たちのうち、ブラスーティという娘をマヌはダクシャに与えた。

【Śiva-p. 5.30.3】

sā tu varṣaśataṃ taptvā tapaḥ paramaduścaram /

bhartāraṃ diptatapasam puruṣam pratyapadyata //3//

彼女（シャタルーパー）は、100 年の間、最高に困難な苦行を行ない、熱烈な

苦行を〔している〕プルシャを夫として得た。

【Śiva-p. 7.1.17.4】

sā devī śatarūpā tu tapaḥ kṛtvā suduścaram /

bharttāraṁ dīptayaśasaṁ manum evānvapadyata // 4 //

一方、かの女神シャタルーパーは、非常に困難な苦行をし、輝かしい名声のマヌを夫として得た。

③マヌがシャタルーパーを妻とし、さらにラティという名前の起源が語られる

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.37-38】

tasyaikasaptatiyugaṁ manvaṁtaram ihocyate/

labdhvā tu puruṣaḥ patnīm śatarūpām ayonijām//37//

tayā sa ramate sārddhaṁ tasmāt sā ratir ucyate/

prathamah saṁprayogaḥ sa kalpādaḥ samavarttata//38//

ここでは 71 ユガが彼のマヌヴァンタラと呼ばれる。そして、プルシャは妻として子宮から産まれなかったシャタルーパーを得て、彼は彼女と共に楽しんだ。それゆえ、彼女はラティと呼ばれる。カルパの初めにこの最初の結合があった。

④シャタルーパーがマヌを夫とし、さらにラティという名前の起源が語られる

【Linga-p. 1.70.269-273】

brahmaṇaḥ sā tanuḥ pūrvā divam āvṛtya tiṣṭhati /

yā tv ardhāt sṛjato nārī śatarūpā vyajāyata // 269 //

sā devī niyutaṁ taptvā tapaḥ paramaduścaram /

bhartāraṁ dīptayaśasaṁ puruṣaṁ pratyapadyata // 270 //

ブラフマーのかの最初の体（男性の半身）は、天を覆ってとどまった。半身から創られたシャタルーパーという女神は、1 億年の間、最高に困難な苦行をし、夫として輝く名声の男性を得た。

sa vai svāyaṁbhuvāḥ pūrvam puruṣo manur ucyate /

tasyaiva saptatiyugaṁ manvaṁtaram ihocyate // 271 //

彼こそ、最初のスヴァーヤンブヴァという男性マヌであると言われる。その 70 の〔大〕ユガ期を、この世界では、マヌヴァンタラと言う。

lebhe sa puruṣaḥ patnīm śatarūpām ayonijām /

tayā sārddhaṁ sa ramate tasmāt sā ratir ucyate // 272 //

かの男性は子宮から生まれたのではないシャタルーパーを妻にした。彼は彼女と共に楽しんだ。それゆえ、彼女はラティと呼ばれる。

prathamah saṁprayogātmā kalpādaḥ samapadyata /

virājam asṛjad brahmā so 'bhavat¹³¹ puruṣo virāt // 273 //

最初の自身の〔半身同士の〕結合が、カルパの初めに起こった。ブラフマーはヴィラージュを創り、かの男性ヴィラージュが出来た。

【Vāyu-p. 10.10-13】

yā tv ardhāt¹³² sṛjate nārī śatarūpā vyajāyata /

sā devī niyutaṇ taptvā tapaḥ paramaduścaram // 10 //

bhartāram¹³³ dīptayaśasaṃ puruṣaṃ pratyapadyata /

sa vai svāyambhuvaḥ¹³⁴ pūrvaṃ puruṣo manur ucyate // 11 //

半身から創られた女性であるシャタルーパー女神は、1 億年の間、最高に困難な苦行をし、〔彼女は〕夫として輝く名声の男性を得た。彼こそ最初のスヴァーヤンブヴァという男性マヌであると言われる。

tasyaikasaptatiyugaṃ manvantaram ihocyate /

labdhā tu puruṣaḥ patnīm śatarūpām ayonijām // 12 //

tayā sa ramate sārddhaṃ tasmāt¹³⁵ sā ratir ucyate /

prathamāḥ saṃprayogaḥ sa kalpādaḥ samavartata¹³⁶ // 13 //

その 71 の〔大〕ユガ期をこの世界ではマヌヴァンタラという。男性は、子宮から生まれた者ではないシャタルーパーを妻にし、彼は、彼女と共に楽しんだ。それゆえ彼女はラティと呼ばれる。最初の結合が、カルパの初めに行われた。

D2. その他の記述

①maithuna（性行為）と vivāha（結婚）という表現

【Śiva-p. 2.1.16.11-13】

arddhena nārī puruṣaś cārdhena saṃtato mune /

sa tasyām asṛjad dvaṃdvaṃ sarvasādhanaṃ uttamam // 11 //

続けて、半身によって女性になり、半身によって男性になった。聖者よ。彼（男性半身）は、彼女（女性半身）において、全て〔を生み出す〕手段として最高の 2 人を創った。

svāyambhuvo manus tatra puruṣaḥ parasādhanaṃ /

¹³¹ 原文（N 版）では sobhavat となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、so 'bhavat とした。

¹³² N 版では arddhāt となっている。

¹³³ N 版では bhartāran となっている。

¹³⁴ N 版では svāyambhuvaḥ となっている。

¹³⁵ Ā 版では tatmāt となっているが、英訳を参照し、N 版の tasmāt を採用した。

¹³⁶ N 版では samavarttata となっている。

śatarūpābhīdhā nārī yoginī sā tapasvinī // 12 //

そこで、男性は最高の〔創造の〕手段であるスヴァーヤンブヴァになった。かの女性はシャタルーパーと呼ばれるヨーギニーであり、苦行者である。

sā punar manunā tena grhītā¹³⁷ śobhanā /

vivāhavidhinā tātāsṛjat¹³⁸ sargaṃ samaithunam // 13 //

さらに、結婚儀礼によって最高に吉祥な彼女（シャタルーパー）はかのマヌに受け入れられた。愛しき者よ。性交によって創造が起こった。

②mithuna（夫婦）という表現

【Bhāgavata-p. 3.12.54-55】

tābhyāṃ rūpavibhāgābhyāṃ mithunaṃ samapadyata /

yas tu tatra pumān so 'bhūn manuḥ svāyaṃbhuvāḥ svarāt // 54 //

これらの姿が分裂した2人によって、夫婦を生み出した。そして、そのうちの男性〔部分〕は、スヴァーヤンブヴァであり、スヴァラートであるマヌになった。

strī yāsīc¹³⁹ chatarūpākhyā mahiṣyasya hamātmanaḥ /

tadā mithunadharmeṇa prajā hy edhāmbabhūvire // 55 //

力強いマハートマン〔を持つ者〕（ブラフマー）の女性〔部分〕は、シャタルーパーという名前になった。その時、夫婦関係によって生類は実に繁栄した。

③maithuna（性行為）という表現

【Brahma-p. 43.37-38ab】

dakṣiṇāṃge tathātmānaṃ¹⁴⁰ saṃcintya puruṣaṃ svayam/

vāme caiva tu nārīṃ sa dvidhā bhūtam akalpayat//37//

tataḥ prabhṛti loke 'smin prajā maithunasambhavāḥ/38ab

彼は、自分で考えてから、右半身で自分自身である男性を、左半身で女性を〔というように〕、生類を二様に創った。そしてそれ以来、この世界では性行為によって生まれた生類が〔繁栄するようになった〕。

¹³⁷ N版では grhītā tivā（分書）となっている。この語は恐らく動詞 grah の変化形であると考えられるが、不明である。英訳を参照し、「受け入れられた」とした。

¹³⁸ N版では tātā'sṛjat となっている、これは tātā asṛjat の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは K版の tātāsṛjat を採用した。

¹³⁹ 原文（N版）では yā 'sīc となっている。これは yā āsīc の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは yāsīc と表記した。

¹⁴⁰ 原文（N版）では tathā 'tmānaṃ となっている。これは tathā ātmānaṃ の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは tathātmānaṃ とした。

第 6 項 構成要素 E の分析

構成要素 E (マヌとシャタルーパーの子供たち) は、マヌとシャタルーパーの夫婦から生まれる次世代に関するものである。

E1 では、マヌとシャタルーパーの息子としてプリヤヴラタとウッターナパーダ 2 人の名を記述していることで完全に一致している。しかし、娘に関する言及や娘の人数 (アーケーティとプラスーティの 2 人か、アーケーティとデーヴァフーティとプラスーティの 3 人か) に関しては様々なヴァラエティーがある。E2 では、マヌの系譜を述べるのではなく、創造を進めたということのみを言及している。

以下に、構成要素に該当する記述を示す。

E1. 息子や娘を生み出した

① 息子：プリヤヴラタとウッターナパーダ、娘：アーケーティとプラスーティ

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.40-42】

sa vairājāḥ prajāśargaṃ sasarja puruṣo manuḥ /

vairājāt puruṣād vīrau śatarūpā vyajāyata //40//

かのヴァイラージャでありプルシャであるマヌは、生類の創造をした。シャタルーパーはヴァイラージャであるプルシャから 2 人の勇者を生んだ。

priyavratottānapāḍau putrau putravatām varau /

kanye dve sumahābhāge yābhyām jātā imāḥ prajāḥ //41//

2 人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダは、息子を持つ者たちにとって最も素晴らしい〔息子たち〕である。〔さらにシャタルーパーから〕とても幸運な 2 人の娘が生まれ、これらの生類が生まれた。

devī nāmnā tathākūtiḥ prasūtiś caiva te śubhe /

svāyaṃbhavaḥ prasūtiṃ tu dakṣāya vyasṛjat prabhuḥ //42//

アーケーティと名付けられた女神とプラスーティの 2 人は吉祥である。そしてスヴァーヤンブヴァ神はプラスーティをダクシャに与えた。

【Kūrma-p. 1.8.9-11】

svāyaṃbhavo manurd devaḥ so 'bhavat puruṣo munīḥ /

sā devī śatarūpākhyā tapaḥ kṛtvā suduścaram // 9 //

bharttāraṃ dīptayaśasaṃ manum evānvapadyata /

tasmāc ca śatarūpā sā putradvayam asūyata // 10 //

priyavratottānapāḍau kanyādvayam anuttamam /

tayoḥ prasūtiṃ dakṣāya manuḥ kanyām dade punaḥ // 11 //

prajāpatir athākūtiṃ mānaso jagṛhe ruciḥ // 12ab //

その男性は、スヴァーヤンブヴァであるマヌ神であり、聖者であった。かのシャタルーパーという名の女神は困難な苦行をし、輝かしい名声のマヌを夫として得た。そして彼とそのシャタルーパーは2人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダ、そして2人の素晴らしい娘をもうけた。彼女たちのうち、プラスーティという娘をマヌはダクシャに与えた。そして、心から生まれた創造者ルチはアーケーティを娶った。

【Linga-p. 1.70.275-276】

vairājāt puruṣād vīrāc chatarūpā vyajāyata /

priyavratottānapādaḥ putrau dvau lokasammatau // 275 //

力強いヴァイラージャとシャタルーパーは、世界から尊敬される2人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダをもうけた。

kanye dve ca mahābhāge yābhyāṃ jātā imāḥ prajāḥ /

devī nāma tathākūtiḥ prasūtiś caiva te ubhe // 276 //

さらに、2人の吉祥な娘が〔生まれ〕、この2人からこれらの生類は生まれた。2人の女神たちは、その名をアーケーティとプラスーティという。

【Śiva-p. 7.1.17.5-6】

tasmāt tu śatarūpā sā putradvayam asūyata /

priyavratottānapādaḥ putrau putratvātām varau // 5 //

その後、かのシャタルーパーは2人の息子をもうけた。プリヤヴラタとウッターナパーダという2人の息子は、子供を持つ親の力強い息子たちである。

kanye dve ca mahābhāge yābhyāṃ jātās tv imāḥ prajāḥ /

ākūtir ekā vijñeyā prasūtir aparā smṛtā // 6 //

さらに、2人の非常に吉祥な娘が〔生まれた〕。2人によってこれらの〔この世界の〕生類は生まれた。1人目（姉）がアーケーティと知られるべきで、妹がプラスーティといわれる。

【Vāyu-p. 10.15-17】

sa vairājāḥ prajāśargāḥ sa sarge puruṣo manuḥ /

vairājāt puruṣād vīrāc chatarūpā vyajāyata // 15 //

priyavratottānapādaḥ putrau putratvātām varau /

kanye dve ca mahābhāge yābhyāṃ jātāḥ prajāś tv imāḥ // 16 //

その人類創造はヴァイラージャである。創造において、かの男性はマヌになった。力強い男性ヴァイラージャとシャタルーパーは、さらに息子をもうけるこ

とを願って、プリヤヴラタとウッターナパーダという 2 人の息子をもうけた。
さらに 2 人の吉祥な娘が〔生まれ〕、この 2 人からこれらの生類は生まれた。

devī nāmnā tathākūtiḥ¹⁴¹ prasūtiś caiva te śubhe /

svāyambhuvaḥ¹⁴² prasūtin tu dakṣāya vyasrjat prabhuḥ // 17 //

吉祥な女神たちは、その名をアークーティとプラスーティという。スヴァーヤ
ンブヴァ神はプラスーティをダクシャに与えた。

②息子：プリヤヴラタとウッターナパーダ、娘：アークーティとデーヴァフー
ティとプラスーティ

【Bhāgavata-p. 3.12.56】

sa cāpi śatarūpāyāṃ pañcā 'patyāny ajījanat /

priyavratottānapādau tisraḥ kanyāś ca bhārata /

ākūtir devahūtiś ca prasūtir iti sattama // 56 //

そして、彼はさらに、シャタルーパーとの間に、プリヤヴラタ、ウッターナ
パーダと 3 人の娘アークーティ、デーヴァフーティ、プラスーティという 5 人の
子を授かった。バラタ族の長よ。最高の者よ。

【Śiva-p. 2.1.16.14-15ab】

tasyāṃ tena samutpannas tanayaś ca priyavrataḥ /

tathāivottānapādaś ca tathā kanyātrayaṃ punaḥ // 14 //

ākūtir devahūtiś ca prasūtir iti viśrutāḥ //15ab//

彼（マヌ）によって彼女（シャタルーパー）の中に家族が増え、プリヤヴラタ
とウッターナパーダ、更に 3 人の娘、アークーティ、デーヴァフーティ、プラ
スーティが生まれた。〔彼らは〕良く知られている。

③息子：プリヤヴラタとウッターナパーダ、娘：名前は不明

【Agni-p. 18.1】

priyavratottānapādau manuḥ svāyambhuvaḥ sutau/

ajījanat sutāṃ ramyāṃ śatarūpāṃ tapo 'nvitām//1//

スヴァーヤンブヴァであるマヌは苦行に従事しているシャタルーパーにプリ
ヤヴラタとウッターナパーダという 2 人の息子と美しい娘を産ませた。

¹⁴¹ Ā 版では tathā 'kūtiḥ となっている。これは tathā ākūtiḥ の連声を分かりやすく記述した
ものと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

¹⁴² N 版では svāyambhuvaḥ となっている。

④息子：プリヤヴラタとウッターナパーダのみ

【Śiva-p. 5.30.5】

vairājāt puruṣād dhīrā¹⁴³ śatarūpā vyajāyata /

priyavratottānapādau vīrakāyau¹⁴⁴ ajāyatām //5//

知的なシャタルーパーはヴァイラージャであるプルシャから〔プリヤヴラタとウッターナパーダを〕もうけた。〔彼女から〕プリヤヴラタとウッターナパーダという強靱な肉体を持つ者たちが生まれた。

E2. 生類たちを生み出した

【Brahma-p. 1.59】

āpavasya mahimnā tu divam āvṛtya tiṣṭhataḥ /

dharmēṇaiva munisreṣṭhāḥ śatarūpā vyajāyata // 59 //

アーパヴァの偉大さによって天は覆われた。最高の聖仙たちよ。ダルマ（法）に従って、シャタルーパーは〔生類を〕創造した。

【Brahma-p. 43.37-38ab】

dakṣiṇāṃge tathātmānaṃ¹⁴⁵ saṃcintya puruṣaṃ svayam /

vāme caiva tu nārīṃ sa dvidhā bhūtam akalpayat //37//

tataḥ prabhṛti loke 'smin prajā maithunasambhavāḥ /38ab

彼は、自分で考えてから、右半身で自分自身である男性を、左半身で女性を〔というように〕、生類を二様に創った。そしてそれ以来、この世界では性行為によって生まれた生類が〔繁栄するようになった〕。

第7項 構成要素 F の分析

構成要素 F（その他の者たちの創造）では、ブラフマー神がこの創造の過程において創り出した様々な者たちに関する記述を集めたものである。

F1（ルドラの創造）①と②では、ルドラはブラフマーの怒りから生まれる。怒りから生まれることで、ルドラの持っている恐ろしい者や神々の怒りの具現化というイメー

¹⁴³ N 版では *vīrā* となっており、その場合の訳は「力強いシャタルーパーはヴァイラージャであるプルシャから生まれた。」となる。

¹⁴⁴ 宮本久義教授の意見、および英訳を参照し、男性・両数が適切であると判断し、K 版、N 版共に *vīrakāyām* であるところを、*vīrakāyau* に訂正した。

¹⁴⁵ 原文では *tathā 'tmānaṃ* となっている。これは *tathā ātmānaṃ* の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは *tathātmānaṃ* とした。

ジ¹⁴⁶を表していると考えられる。F1①と③では、泣いた(動詞√**rud**)ためにルドラ(**rudra**)と名付けられたという誕生譚が述べられている。

F2 は聖者たちの創造という構成要素である。これはブラフマー神が聖者たちを創造するという内容である。以下に創造された聖者たちの名を挙げる(表 5)。

¹⁴⁶ [バンダルカル 1984 p. 296]

表 5 構成要素 F2 における聖者の名¹⁴⁷ (ブラフマー創造神話)

	マリーチ	アトリ	アンギラス	プラスティヤ	プラハ	クラトゥ	ブラチエータス	ヴァスィシュタ	ブリグ	ナーラダ	ダクシャ	カルダマ	ダルマ	ガウタマ	サナトクマール	ルチ	ルドラ
Agni-p. 17.15	①	②	③	④	⑤	⑥		⑦									
Brahma-p. 1.44-50	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧		⑨							①		②
Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.16-29	③	⑧	②	④	⑤	⑥		⑨	①		⑦		⑩			⑪	○
Kālikā-p. 25.51-54	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	①						
Padma-p. 1.40.69-72	③	④	⑪	⑤	⑥	⑦		⑧	⑩		②		①	⑨			
Śiva-p. 2.1.16.4-8	①	⑧	③	⑤	④	⑦		⑥	②	⑩	⑨	⑪	⑫				
Śiva-p. 5.29.16-19	①	②	③	④	⑤	⑥		⑦							⑧		⑨
マヌ法典	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩							

このように、挙げられている人物名は文献によって異なるものの、マリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタの 7 名の名は一致している。

構成要素 F3 (その他の者たちの創造) では、ブラフマー神によって創造された F1、F2 の者たち以外の者たちについての記述を示した。ブラフマー神からありとあらゆるものが創造されている様子が分かる。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

¹⁴⁷ 縦軸が文献名、横軸が聖者の名前であり、表中の番号は創造された順番である。例えば、Agni-p. 17.15 では、マリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタの順に名が述べられている。番号ではなく○となっているものは、創造されたという記述はあるが、順番が不明なものである。この表を載せた意図は、記述の定型化を調査するためである。表には加えなかったが、Brahma-p. 43.33-34 には「マリーチなどの聖者たち」という記述がある。

F1. ルドラの創造

① 怒りから生まれる。「泣く」ので「ルドラ」と名付けられる

【Varāha-p. 2.14-16】

evam uktvā tirobhāvaṃ gato 'haṃ so 'pi cintayan /

āste yāvaj jagaddhātri nādhyagacchat tu kiñcana //14//

tāvat tasya mahāroṣo brahmaṇo 'vyaktajanmanaḥ /

sambhūya tena bālāḥ syād eko roṣātmasambhavaḥ //15//

このように言って私は消えた。世界の母よ。彼（ブラフマー）もまさにどのように〔すべきか〕を考えて、かの未顕現から生まれたブラフマーが非常に怒り、それによって〔ブラフマー〕自身の怒りから生まれた1人の男の子が生まれ出るであろう時まで、留まった。

yo rudan vāritas tena brahmaṇāvyaktamūrttinā /

bravīti nāma me dehi tasya rudreti so dadau //16//

泣いている彼はかの未顕現の姿のブラフマーによって〔泣くことを〕止められ、「私に名前を下さい」と言った。それゆえ〔ブラフマーは〕その者にルドラという〔名を〕与えた。

② 怒りから生まれる

【Brahma-p. 1.46】

nārāyaṇātmakānāṃ tu saptānāṃ brahmajanmanām /

tato 'srjat purā brahmā rudraṃ roṣātmasambhavam // 46 //

そして、ナーラーヤナの性質を有する7人がブラフマーから生まれるやいなや、すぐにブラフマーは激怒から生まれた息子ルドラを創った。

【Śiva-p. 5.29.17】

sapta brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ /

tato 'srjat punar brahmā rudrān krodhasamudbhavān //17//

彼らはプラーナ聖典において7人のブラフマーと定められている。そしてさらにブラフマーは怒りから生じたルドラたちを創った。

③ 「泣く」ので「ルドラ」と名付けられる

【Kālikā-p. 25.44-46】

tato brahmā varāhāya namaskṛtya mahaujase /

ardhanārīśvaraṃ kakṣād¹⁴⁸ devadevaṃ vyajāyata //44//

¹⁴⁸ C版では kayād となっているが、この場合意味に矛盾が生じるので、N版の kakṣād（脇の下から）を採用した。しかしN版の英訳にはこの言葉は訳されていない。

それから、ブラフマーは非常に力強いヴァラーハに敬礼し、脇の下から神々の神アルダナーリーシュヴァラを創った。

prathamam jātamātraḥ sa praruroda mahāsvanaḥ /

kiṃ rodiṣīti taṃ brahmā rudantaṃ pratyuvāca ha //45//

最初、彼は生まれた途端に大声で泣き始めた。「何故、泣いているのだ」とブラフマーは、泣いているその者に言った。

nāma dehīti taṃ so 'tha pratyuvāca maheśvaraḥ /

rudranāmā rodanāt taṃ¹⁴⁹ mā rodīs tvaṃ mahāśaya //46//

そこで、「名前を下さい。」と彼（ブラフマー神）にかのマヘーシュヴァラは言った。「泣くが故に、汝はルドラという名前だ。高貴な者よ。泣くでない。」

④ニーラローヒタ（赤みがかった青色）であるルドラが生まれる

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.23】

abhimānātmakaṃ rudraṃ nirmame nilalohitam/

śirasas 'ṃgirasam¹⁵⁰ caiva śrotrād atrim tathaiva ca//23//

名声¹⁵¹の本質をしたニーラローヒタ（赤みがかった青色）であるルドラを創った。そして、頭からアンギラスを、耳からアトリを、同様に〔創った〕。

F2. 聖者たちの創造

【Agni-p. 17.15】

marīcim atryangirasam pulastyam pulahaṃ kratum/

vasiṣṭhaṃ mānasān sapta brahmāṇān iti niścitam//15//

ブラフマーの心から生まれた 7 人と言われるマリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタを〔創った〕。

【Brahma-p. 1.44-50】

sasarja sṛṣṭiṃ tadrūpāṃ sraṣṭum icchan prajāpatin /

marīcim atryaṅgirasau pulastyam pulahaṃ kratum //44//

vasiṣṭhaṃ ca mahātejāḥ so 'sṛjat sapta mānasān /

sapta brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ //45//

それらの姿をとった創造を欲して、マリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタといった創造主たちを創った。彼（ブ

¹⁴⁹ N 版では rodanāc ca となっている。訳はほぼ同じである。

¹⁵⁰ 原文（M 版）では śirasomṅgirasam となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、śirasas 'ṃgirasam とした。

¹⁵¹ abhimāna の訳は英訳を参照した。

ラフマー) は、その偉大な輝きを持つ心から生まれた 7 人を創った。彼らは、7 人のブラフマーとして、プラーナ聖典において、定められている。

nārāyaṇātmakānām tu saptānām brahmanjanmanām /
tato 'srjat purā brahmā rudraṁ roṣātmasaṁbhavam //46//

そして、ナーラーヤナの性質を有する 7 人がブラフマーから生まれるやいなや、すぐにブラフマーは激怒から生まれた息子ルドラを創った。

sanatkumāraṁ ca vibhuṁ pūrveṣām api pūrvajam /
saptasv etā ajāyanta prajā rudrās ca bho dvijāḥ //47//

そして以前に、最年長であり、遍在するサナトクマーラを〔創った〕。7 人からこれらの生類やルドラたちが生まれた。おお、再生族の者たちよ。

skandaḥ sanatkumāraś ca tejaḥ saṁkṣipyā tiṣṭhataḥ /
teṣām sapta mahāvaṁśā divyā devagaṇānvitāḥ //48//

kriyāvantaḥ prajāvanto maharṣibhir alaṁkṛtāḥ /
vidyuto 'śanimeghāṁś ca rohitendradhanuṁṣi ca //49//

vayāṁsi ca sasarpjāda¹⁵² parjanyaṁ ca sasarja ha /
rco yajūṁṣi sāmāni nirmame yajñasiddhaye //50//

スカンダとサナトクマーラは、輝きを集めて、とどまった。それらの 7 人は、神聖であり、偉大なヴァンシャ（系譜）に属し、神々の一団を従えており、儀式の執行者たちであり、子を持つ者たちであり、偉大な聖仙によって飾られる。稲光と稲妻を伴う雲と虹¹⁵³と鳥を彼（ブラフマー）は創った。また初めに彼はパルジャニヤ（雨雲）を創った。ヤジュニヤ（儀礼）を成就するために、リグとヤジュスとサーマンを創った。

【Brahma-p. 43.33-34】

marīcyādīn munīn sarvān gandharvoragarākṣasān/
(sapta svargān sapātālān bhuvanāni caturdaśa/
dvīpān asṛjad āmbhodhīn gaṁgādyāḥ saritas tathā /)
yakṣavidyādharaṁś cānyān gaṁgādyāḥ saritas tathā//33
naravānarasiṁhāṁś ca vīvidhāṁś ca vihaṁgamān/
jarāyūn aṇḍajān devī svedajodbhedajāṁś tathā//34//

マリーチなどの聖者たち、ガンダルヴァや蛇やラークシャサ、(7 つの天界と〔7 つの〕地獄、〔すなわち〕14 の世界、及び海を伴った島、ガンガーなどの川を

¹⁵² 原文 (N 版) では sasarpjā ''dau となっているが、これは sasarpjā ādau の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは sasarpjādau とした。

¹⁵³ 虹には rohitadhanus (不完全であり、人には見えない直線の虹) と indradhanus (完全な虹) がある。

創った。) ¹⁵⁴ヤクシャとヴィディヤードラや他のもの、及びガンガーなどの川〔を創った〕。そして人と猿、ライオン、色々な種の鳥たち、胎生のもの、卵生のもの、湿生のもの、芽生のものを創った。女神よ。

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.16-29】

tataḥ prajāḥ samudbhūtā yathā proktā mayā purā /
prakriyāyām yathā tubhyaṁ tretāmadhye mahātmanaḥ //16//

yadā prajāś tu tāḥ sṛṣṭā na vyavarddhatadhdhimataḥ ¹⁵⁵ /
tato 'nyān mānasān putrān ātmanaḥ sadṛśo 'sṛjat //17//

そして以前に私によってあなたに「プラクリヤー」で言われたように、トリーターユガの間に、マハートマン（ブラフマー）から生類たちが生まれた。しかし知者（ブラフマー）から創造されたそれらの生類たちが繁栄しなかったのも、自分に似せて〔ブラフマーは〕心から生まれた他の息子たちを創った。

bhṛgvamgiromaricimś ca pulastyam pulaham kratum /
dakṣam atrim vasiṣṭham ca nirmame mānasān sūtān //18//

ブリグとアンギラス、マリーチ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタ〔という〕心から生まれた息子たちを創った。

nava brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṁ gatāḥ /

brahmā yat ātmakānām tu sarveṣām ātmanyoninām //19//

彼らは、9人のブラフマーとしてプラーナ聖典において定められている。というのも、アートマンを源泉とする全ての者にとってのブラフマーだからである。

tato 'sṛjat punar brahmā dharmam bhūtasukhāvaham /

prajāpatiṁ ruciṁ caiva pūrveṣām eva pūrvajau //20//

さらにブラフマーは、生類に喜びをもたらすダルマと創造者ルチを創った。〔彼ら2人は〕太古の者たちにとっても年長者である。

buddhitaḥ saṣṛje dharmam sarvabhūtasukhāvaham /

manasas tu rucir nāma jajñe yo 'vyaktajanmanaḥ //21//

〔ブラフマーは〕知から全ての生類に喜びをもたらすダルマを創った。生まれが未顕現の者の心からルチという名の〔者は〕生まれた。

bhṛguś tu hṛdayāj jajñe ṛṣiḥ salilayoninaḥ /

prāṇād dakṣam asṛjan ¹⁵⁶ brahmā cakṣurbhyaṁ tu maricim ¹⁵⁷ //22//

¹⁵⁴ この（）はN版で用いられている。特に説明はなされていないが、恐らく、このシュローカが加えられている文献と、省かれている文献があるという意味だろう。

¹⁵⁵ 原文（M版）では vyavarddhatadhdhimataḥ となっているが、英訳を参照し、vyavarddhatadhdhimataḥ とした。

¹⁵⁶ 原文（M版）では sṛjan となっているが、英訳を参照し、asṛjan とした。

そして、水から生まれた者（ブラフマー）の心からブリグは生まれた。さらにブラフマーはプラーナからダクシャを、両目からマリーチを創った。

abhimānātmakam rudraṃ nirmame nilalohitam /

śirasō 'ṃgirasam¹⁵⁸ caiva śrotrād atriṃ tathaiva ca //23//

名声の本質をしたニーラローヒターであるルドラを創った。そして、頭からアンギラスを、耳からアトリを、同様に〔創った〕。

pulastyam ca tathodānād vyānāc ca pulahaṃ punaḥ /

samānajo vasiṣṭhaś ca hy apānān nirmame kratum //24//

そしてウダーナからプラスティヤを、さらにヴィヤーナからブラハを同様に〔創った〕。ヴァスィシュタはサマーナから生まれた。そしてアパーナからクラトゥを創った。

ity ete brahmaṇaḥ putrāḥ prajādau dvādaśa smṛtāḥ /

dharmaś teṣāṃ prathamajo devatānāṃ smṛtaś tu vai //25//

このように生類のはじめ（先祖）には、この 12 人のブラフマーの息子たちが知られている。そしてダルマが彼ら神格の中で最も年長の者であると知られている。

bhṛgvādayaś tu ye sṛṣṭāś te vai brahmaṛṣayaḥ smṛtāḥ /

gṛhamedhipurāṇāś te dharmas taiḥ prāk pravarttitaḥ //26//

そしてブリグを始めとする者たちである生類は、ブラフマルシ（梵仙）として知られている。彼らは儀礼をする太古の家長である。最初にダルマが彼らによって確立された。

dvādaśaite prasūyaṃte prajāḥ kalpe punaḥ punaḥ /

teṣāṃ dvādaśa te vaṃśā divyā devaguṇānvitāḥ //27//

この 12 人の者たちは、カルパにおいて何度も何度も生類を創造した。彼ら（生類）にとっては、彼ら 12 人の者たちが、神的であり神の性質をそなえたヴァンシャである。

kriyāvaṃtaḥ prajāvaṃto maharṣibhir alaṃkṛtāḥ /

yadā tair iha sṛṣṭaiś tu dharmamādyaiś ca maharṣibhiḥ //28//

sṛjyamānāḥ prajāś caiva na vyavarddhamta dhīmataḥ /

tamomātrāvṛtaḥ so 'bhūc chokapratihataś ca vai //29//

〔彼らは〕儀礼を行い生産（生殖）を行なう者たちであり、偉大なりシたちによって讃えられている。この世界で、これらの創造されたダルマをはじめとする偉大なりシたちによって、生類たちが知者（ブラフマー）から創造されたが、

¹⁵⁷ 原文（M 版）では maricinam となっているが、英訳を参照し、maricim とした。

¹⁵⁸ 原文（M 版）では śirasomgirasam となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、śirasō 'ṃgirasam とした。

繁栄しなかった時、彼（ブラフマー）はタマスの要素に覆われ、そして悲しみに打ちひしがれた。

【Kālikā-p. 25.51-54】

tam¹⁵⁹ āha bhagavān brahmā kuru sṛṣṭim prajāpate /
tapas taptvā virāṭ so 'pi manuṃ svāyambhuvaṃ tataḥ //51//
sasarja so 'pi tapasā¹⁶⁰ brahmāṇaṃ paryatoṣayat /
toṣitas tena manasā dakṣaṃ sṛṣṭyai sasarja saḥ //52//

ブラフマー神は彼に言った。「創造をなせ。創造主よ。」かのヴィラージュも、苦行をし、スヴァーヤンブヴァであるマヌを創った。彼はまた、苦行によってブラフマーを満足させた。満足した彼（ブラフマー）は、彼（ブラフマー）の心によって、〔さらなる〕創造のためにダクシャを創った。

sṛṣṭe dakṣe 'tha daśadhā praṇato manunā vidhiḥ /
punar eva sūtān anyān sasarja daśa mānasān //53//
marīcim atryaṃgirasau pulastyam pulahaṃ kratum /
pracetasam vasiṣṭaṃ ca bhṛguṃ nāradaṃ eva ca //54//

さて、ダクシャが創られた時、創造主（ブラフマー）は、マヌに 10 回敬礼された。さらに〔ブラフマーは〕10 人の心から生まれた他の息子たち、マリーチ、アトリ、アングラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、プラチエータス、ヴァスィシュタ、ブリグ、ナーラダを創った。

【Padma-p. 1.40.69-72】

ātmanaḥ sadṛśān putrān asṛjad vai pitāmahaḥ /
viśve prajānāṃ patayo yebhyo lokā viniṣṛtāḥ // 69 //
ピターマハ（祖父、ブラフマー）は、自分に似た息子たちを創った。〔彼らは〕皆、生類の主であり、彼らから世界が現れた。
viśveśaṃ prathamam tāvan mahātmā tapasātmajam /
sarvatra saṃhataṃ puṇyam nāmnā dharmam sa sṛṣṭavān // 70 //
かのマハートマンは、最初に、苦行によって、あらゆる徳を集めたダルマという名の息子を創った。
dakṣam marīcim atriṃ ca pulastyam pulahaṃ kratum /
vasiṣṭhaṃ gautamaṃ caiva bhṛguṃ aṃgirasam munim // 71 //

¹⁵⁹ C 版と N 版、双方の註釈には tad という解釈もあるとしているが、いずれも tam を採用している。

¹⁶⁰ C 版と N 版、双方の註釈には manasā という解釈もあるとしているが、いずれも tapasā を採用している。

ダクシャ、マリーチ、アトリ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュ
ユタ、ガウタマ、ブリグと聖者アンギラスを〔創った〕。

atyadbhutās svakṛtyena jñeyās te tu maharṣayaḥ /

trayodaśaguṇā raṁbhā ye vaṁśās tu maharṣiṇām // 72 //

それらのマハルシ（偉大な聖仙）は、自らのなした行いによって非常に驚異的
な者たちとして知られるべきである。マハルシたちのその系譜は、13 の徳を支
柱（基礎）としている。

【Śiva-p. 2.1.16.4-8】

marīcim ca svanetrābhyām hṛdayād bhr̥gum eva ca /

śirasas 'girasam vyānāt pulaham munisattamam // 4 //

udānāc ca pulastyam hi vasiṣṭhañ ca samānataḥ /

kratum tv apānāc chrotrābhyām atrim dakṣam ca prāṇataḥ // 5 //

asṛjam tvām tadotsaṁgāc chāyāyāḥ kardamam munim /

saṁkalpād asṛjam dharmam sarvasādhanaśādhanaḥ // 6 //

マリーチを私の両目から、ブリグを心から、アンギラスを頭から、聖者の最高
者プラハをヴィヤーナから、プラスティヤをウダーナから、ヴァスィシュタを
サマーナから、クラトゥをアパーナから、アトリを耳から、ダクシャをプラー
ナから、あなた（ナーラダ）を膝から、カルダマ仙を影から、私は創った。〔さ
らに〕 私は、全てを成就させる手段であるダルマをサンカルパから創った。

evam etān aham sṛṣṭvā kṛtārthaḥ¹⁶¹ sādhakottamān /

abhavam munisārdūla mahādevaprasādataḥ // 7 //

このように私はこれらの最高のサーダカたちを創り、マハーデーヴァの恩恵に
よって、満足した。聖者の最高者よ。

tato mad ājñayā tāta dharmam saṁkalpasambhavaḥ /

mānavam rūpam āpannaḥ¹⁶² sādhakais tu pravartitaḥ // 8 //

そして、私の命令によって、サンカルパから生まれたダルマは、人間の姿を得
て、サーダカたちと共に動き始めた。愛しき者よ。

【Śiva-p. 5.29.16-19】

marīcim atryamgirasau pulastyam plaham kratum /

vasiṣṭham tu mahātejāḥ¹⁶³ so 'sṛjat sapta mānasān //16//

そしてかの偉大な輝きを持つ者（ブラフマー）は、マリーチとアトリ、アンギ

¹⁶¹ N 版では kṛtārthas となっている。

¹⁶² N 版では āpannas となっている。

¹⁶³ N 版では mahātejās となっている。

ラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタという7人の心から生まれた者たちを創った。

sapta brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ /

tato 'srjat punar brahmā rudrān krodhasamudbhavān //17//

彼らはプラーナ聖典において7人のブラフマーと定められている。そしてさらにブラフマーは怒りから生じたルドラたちを創った。

sanatkumāraṃ ca ṛṣiṃ sarveṣāṃ api pūrvajam /

sapta caite prajāyaṃte paścād rudrāś ca sarvataḥ //18//

それから、皆の年長者である聖仙サナトクマーラを〔創った〕。そしてこの（前述の）7人を創った。その後、色々な場所にルドラたちが〔生まれた〕。

ataḥ¹⁶⁴ sanatkumāras tu tejaḥ¹⁶⁵ saṃkṣīpya tiṣṭhati /

teṣāṃ sapta mahāvaṃśā divyā devaṛṣipūjītāḥ //19//

こうしてサナトクマーラは輝きを凝集して留まった。彼ら¹⁶⁶の7つの神的な偉大なヴァンシャはデーヴァルシに崇められた。

【『マヌ法典』 1.34-35[渡瀬 1990 p. 26]

私は生類を創造しようと欲して、至難の苦行を行ない、まず初めに、十人の人類の主となる偉大なリシを創造した。〔すなわち〕マリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、プラチエータス、ヴァシシュタ、ブリグそしてナーラダである。

F3. その他の者たちの創造

【Brahma-p. 1.47-51】

sanatkumāraṃ ca vibhuṃ pūrveṣāṃ api pūrvajam /

saptasv etā ajāyanta prajā rudrāś ca bho dvijāḥ //47//

そして以前に、最年長であり、遍在するサナトクマーラを〔創った〕。7人からこれらの生類やルドラたちが生まれた。おお、再生族の者たちよ。

skandaḥ sanatkumāraś ca tejaḥ saṃkṣīpya tiṣṭhataḥ /

teṣāṃ sapta mahāvaṃśā divyā devagaṇānvitāḥ //48//

kriyāvantaḥ prajāvanto maharṣibhir alaṃkṛtāḥ /

vidyuto 'śanimeghāṃś ca rohitendradhanuṃṣi ca //49//

¹⁶⁴ N版では atas となっている。

¹⁶⁵ N版では tejas となっている。

¹⁶⁶ マリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタの7人のことである。

vayāṃsi ca sasarjāda¹⁶⁷ parjanyaṃ ca sasarja ha /

rco yajūṃṣi sāmāni nirmame yajñasiddhaye //50//

スカンダとサナトクマーラは、輝きを集めて、とどまった。それらの 7 人は、神聖であり、偉大なヴァンシャに属し、神々の一団を従えており、儀式の執行者たちであり、子を持つ者たちであり、偉大な聖仙によって飾られる。稲光と稲妻を伴う雲と虹と鳥を彼（ブラフマー）は創った。また初めに彼はパルジュニヤを創った。ヤジュニヤを成就するために、リグとヤジュスとサーマンを創った。

sādhyaṃ anyāṃs tathā devān ity evaṃ anuśūruma /

uccāvacaṇi bhṛtāni gātrebhyas tasya jajñire //51//

同様に、サーディヤなどの神々を〔創った〕と、私たちは聞いた。高き者や低き者たちは、彼（ブラフマー）の手足から生まれた。

【Brahma-p. 43.31-36】

mātrāyonīni bhūtāni sthūlasūkṣmāṇi yāni ca /

caturvidhāni sarvāṇi sthāvarāṇi carāṇi ca //31//

マートラーヨーニ（子宮から生じたもの¹⁶⁸）は、粗大なものや微細なものであり、全てで 4 種類ある。〔それらは〕動くものと動かないものである。

tataḥ prajāpatir brahmā cakre sarvaṃ carācaram /

saṃcintya manasātmānaṃ¹⁶⁹ sasarja vividhāḥ prajāḥ //32//

そして、創造主ブラフマーは、全て動くものと動かないものを作った。心によって、〔自分〕自身で考えて、色々な種類の生類を創った。

marīcyādīn munīn sarvān gandharvoragarākṣasān /

(sapta svargān sapātālān bhuvanāni caturdaśa /

dvīpān asṛjad ambhodhīn gaṃgādyāḥ saritas tathā /)

yakṣavidyādharāṃś cānyān gaṃgādyāḥ saritas tathā //33//

naravānarasiṃhāṃś ca vividhāṃś ca vihaṃgamān /

jarāyūn aṇḍajān devī svedajodbhedajāṃs tathā //34//

マリーチなどや聖者たち、ガンダルヴァや蛇やラクシャサ、(7つの天界と〔7つの〕地獄、〔すなわち〕14の世界、及び海を伴った島、ガンガーなどの川を創った。) ヤクシャとヴィディヤダラや他のもの、及びガンガーなどの川〔を

¹⁶⁷ 原文 (N 版) では sasarjā ''dau となっているが、これは sasarjā ādau の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは sasarjāda¹⁶⁷ とした。

¹⁶⁸ mātrāyonīni の訳が不明である。英訳にも混乱が見られるため、文脈から判断し、「子宮から生じたもの」とした。

¹⁶⁹ 原文 (N 版) では manasā ''tmānaṃ となっている。これは manasā ātmānaṃ の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは、manasātmānaṃ とした。

創った]。そして人と猿、ライオン、色々な種の鳥たち、胎生のもの、卵生のもの、湿生のもの、芽生のものを創った。女神よ。

brahmaṃ¹⁷⁰ kṣatram¹⁷¹ tathā vaiśyaṃ śūdraṃ caiva catuṣṭayam /

antyajātāmś ca mlecchāmś ca sasarja vividhān pṛthak //35//

そしてバラモンとクシャトリア、ヴァイシュヤ、シュードラという4種の〔カースト〕と別にアンティヤジャータ¹⁷²、ムレーッチャ¹⁷³といった色々な種類を創った。

yat kiṃcij jīvasamjñam tu tṛṇagulmapipīlikam /

brahmā bhūtvā jagatsarvaṃ nirmame sacarācaram //36//

そしてブラフマーは、草や低木やアリといった何らか命と呼ばれるものを生み、動くものや動かないものから成る全世界を創った。

【Śiva-p. 2.1.16.9】

tato 'srjaṃ svagātrebhyo vividhebhya 'mitān sutān /

surāsurādikāṃś tebhya dattvā tām tām tanuṃ mune // 9 //

そして、私は自分の肢体の様々な部分から、神からアスラまでの無数の息子たちを、彼らにそれぞれの体を与えて創った。聖仙よ。

【Śiva-p. 5.29.23】

uccāvacāni bhūtāni gātrebhyas tasya jajñire /

āpavasya prajāśargam srjato hi prajāpateḥ //23//

創造主アーパヴァ¹⁷⁴が生類創造を行なった時、高き者や低き者たちは彼の手足から生まれた。

【『マヌ法典』1.36-51[渡瀬 1990 pp. 27-28]】

ブラフマン（ブラフマー）が世界創造と生類創造をする。

¹⁷⁰ 原文（N版）では *brahma* となっているが、英訳を参照し、*brahmaṃ* とした。

¹⁷¹ 原文（N版）では *kṣatram* となっているが、英訳を参照し、*kṣatram* とした。

¹⁷² 最下層の生まれの者のことを指す。一般的にアウトカースト（不可触民、ダリット）と呼ばれる。

¹⁷³ 英訳では外国人とされているが、辞書によると外国人、未開人、非アーリア人などを指すとされている。

¹⁷⁴ ここではマヌのことを指していると考えられる。

第 8 項 構成要素 G の分析

G は、サーンキヤ・ヨーガ哲学的記述という構成要素である。

G1（トリグナに関する記述）は、サーンキヤ哲学における 3 つのグナ（要素）についての記述である。以下に、この構成要素の流れを示す（表 6）。

表 6 構成要素 G1 におけるトリグナの記述の流れ¹⁷⁵ (ブラフマー創造神話)

文献名	Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.10-13	Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.28-32	Kūrma-p. 1.8.2-5	Liṅga-p. 1.70.261-266	Vāyu-p. 10.2-5
記述の流れ	ブラフマー神がラジャスとサットヴァを排除する				
	ブラフマー神がタマスに覆われる	ブラフマー神がタマスに覆われる	ブラフマー神がタマスに覆われる	ブラフマー神がタマスに覆われる	ブラフマー神がタマスに覆われる
		ブラフマー神の息子たちもタマスに蔽われる			
	ブラフマー神がタマスを追い出す		ラジャスとサットヴァがタマスを追い払う	ラジャスとサットヴァがタマスを追い払う	ブラフマー神が、ラジャス性を抑え、タマスを作る
	ブラフマー神はラジャスに蔽われる				ラジャスがタマスを覆う
	タマスがヒンサーとショーカを生み出す	アダルマとヒンサーがある	タマスがアダルマーチャラナとヒンサーになる	タマスからアダルマが、ショーカからヒンサーが生まれる	

このように、トリグナは、トリグナとして同時に登場するのではなく、順番に登場する。

G2 (プルシャとプラクリティという記述) では、シャタルーパーをプラクリティとし、マヌをプルシャとしている。サーンキヤ哲学では、女性原理であるプラクリティを男性原理であるプルシャが観照することで世界が展開するとされる。ここでは、マヌとシャタルーパーの 2 人から生類創造が起こることをサーンキヤ哲学的に説明していると思われる。

G3 (ヨーガに関する記述) では、シャタルーパーがヨーギニーであることが述べられている。C においてシャタルーパーが苦行を行なうことから、ヨーガをその苦行の一

¹⁷⁵ 横軸に文献を配置し、縦軸に構成要素 G1 の記述の流れを示した。Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.10-13 を例にとると、構成要素 G1 は、ブラフマー神がラジャスとサットヴァを排除する→ブラフマー神がタマスに覆われる→ブラフマー神がタマスを追い出す→ブラフマー神はラジャスに蔽われる→タマスがヒンサーとショーカを生み出すという順に記述が進んでいくということである。

部ととらえていると考えられる。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

G1. トリグナに関する記述

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.10-13】

athātmani samadrākṣīt tamomātrāṃ tu cāriṇīm /

rajaḥ sattvaṃ parityajya vartamānāṃ svakarmataḥ //10//

そして〔ブラフマーは〕自身の中にラジャスとサットヴァを排除して、自分自身の行為によってうごめくタマス¹⁷⁶の要素を見た。

tataḥ sa tena duḥkhena śucaṃ cakre jagatpatiḥ /

tamaś ca vyanudat paścād rajasā tu samāvṛṇot //11//

さらにその悲しみによってかの世界の主（ブラフマー）は悲嘆にくれた。そしてタマスを追い出し、その後ラジャスによって覆った。

tat tamaḥ pratinuttaṃ vai mithunaṃ saṃprasūyata¹⁷⁷ /

adharmācaraṇāt tasya himsā śoko vyajāyata //12//

追い出されたかのタマスは双子を生んだ。非法な行いゆえに彼（タマス）にヒンサーとショーカ（悲しみ）が生まれた。

tatas tasmin samudbhūte mithune varaṇātmake /

tataḥ sa bhagavān āsīt prītaś caitaṃ hi śīśriye //13//

そこで、かの覆う性質を持った双子が生まれた時、かの神（ブラフマー）は喜んだ。そしてそれに依拠した。

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.28-32】

kriyāvaṃtaḥ prajāvaṃto maharṣibhir alaṃkṛtāḥ /

yadā tair iha sṛṣṭais tu dharmmādyaiś ca maharṣibhiḥ //28//

srjyamānāḥ prajāś caiva na vyavarddhamta dhīmataḥ /

tamomātrāvṛtaḥ so 'bhūc chokapratihataś ca vai //29//

〔彼らは〕儀礼を行い生産（生殖）を行なう者たちであり、偉大なりシたちによって讃えられている。この世界で、これらの創造されたダルマをはじめとする偉大なりシたちによって、生類たちが知者（ブラフマー）から創造されたが、繁栄しなかった時、彼（ブラフマー）はタマスの要素に覆われ、そして悲しみに打ちひしがれた。

¹⁷⁶ サーンキヤ学派では、タマスとラジャス、サットヴァの3要素（トリグナ）を存在物の構成要素としている。この3要素のバランスが変化することによって、世界が展開するとされる。

¹⁷⁷ 後続の語が adharmācaraṇāt であるため、連声の規則として saṃprasūyata になったと考えられる。

yathāvr̥taḥ¹⁷⁸ sa vai brahmā tamomātrā tu sā punaḥ /

putrāṇaṃ ca tamomātrā aparā niḥsṛtā 'bhavat //30//

かのブラフマーが覆われたように、再び、かのタマスの要素が、〔覆うためにあった〕。息子たちにとっても、他の現れ出たタマスの要素に〔覆われるように〕なった。

pratisrotātmako 'dharmo hiṃsā caivāsubhātmikā /

tataḥ pratihate tasya pratīte varaṇātmake //31//

svāṃ tanuṃ sa tadā brahmā samapohata bhāsvarām /

dvidhā kṛtvā svakaṃ deham arddhena puruṣo 'bhavat //32//

アダルマは流れに逆らう性質であり、そしてヒンサーはまさに不吉な性質である。そして彼（ブラフマー）が打ちひしがれて〔タマスに〕覆われるようになった時、かのブラフマーは自分の輝く体を捨てた。自分の体を二分した後、半身によって男性になった。

【Kūrma-p. 1.8.2-5】

tamomātrāvr̥to brahmā tadāśocata duḥkhitāḥ /

tataḥ sa vidadhe buddhim arthaniścaya gāminim //2//

そして、タマスの要素に覆われたブラフマー神は落ち込んで悲嘆に暮れた。それから彼（ブラフマー）は目的を解決するための知性を使った。

athātmani samadrākṣīt tamomātrāṃ niyāmikām /

rajaḥ sattvaṃ ca saṃvṛttaṃ varttamānaṃ svadharmataḥ //3//

そして、自分の中に〔あらゆるものを〕制御する〔性質を持つ〕タマスを見た。ラジャスとサットヴァは自己のダルマとして存在していた。

tamas tu vyanudat paścād rajaḥsattvena saṃyutaḥ /

tat tamaḥ pratinunnaṃ vai mithunaṃ samajāyata //4//

しかし、その後、タマスはラジャスとサットヴァの結合したものに追い払われた。そして追い払われたタマスは一對のものになった。

adharmācaraṇo viprā hiṃsā cāsubhalakṣaṇā /

svāṃ tanuṃ sa tato brahmā tām apohata bhāsvarām //5//

バラモンたちよ。〔その一對は〕アダルマーチャラナと不吉な性格のヒンサーである。そこで、かのブラフマー神は自分のその輝く体を捨てた。

【Liṅga-p. 1.70.261-266】

yadāsyā tāḥ prajāḥ sṛṣṭā na vyavardhamta sattamāḥ /

¹⁷⁸ 原文（M版）では yathā''vr̥taḥ となっている。これは yathā āvr̥taḥ の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは yathāvr̥taḥ とした。

tamomātrāvṛto brahmā tadā śokena duḥkhitaḥ // 261 //

彼に創造されたこれらの素晴らしい生類が繁栄しなかったので、タマスの要素に覆われたブラフマー神は、悲しみによって落ち込んだ。

tataḥ sa vidadhe buddhim arthaniścayaagāminim /

athātmani samadrākṣīt tamomātrām niyāmikām // 262 //

rajaḥ sattvaṃ parityajya vartamānām svadharmataḥ /

tataḥ sa tena duḥkhena duḥkhaṃ cakre jagatpatiḥ // 263 //

それから彼は目的を解決するための知性を働かせた。そして自分の中に、〔あらゆるものを〕制御する〔性質を持ち〕、自己のダルマからラジャスとサットヴァを離れ、存在しているタマスを見た。そして、かの世界の主（ブラフマー）は、その苦しみに苦しんだ。

tamaś ca vyanudat paścād rajaḥ sattvaṃ tam āvṛnot /

tat tamaḥ pratinunnaṃ vai mithunaṃ samajāyata // 264 //

彼（ブラフマー）はタマスを追ひ払い、その後ラジャスとサットヴァはそれ（タマス）を覆った。そして、追ひ払われたタマスは一對のものになった。

adharmas tamaso jajñe hiṃsā śokād ajāyata /

tatas tasmin samudbhūte mithune dāruṇātmike // 265 //

gatāsūr bhagavān āsīt prītiś cainam aśīśriyat /

svām tanuṃ sa tato brahmā tām apohata bhāsvarām // 266 //

タマスからアダルマが生じ、ショーカからヒンサーが生じた。そして、かの恐ろしい性質の双子（アダルマとヒンサー）が生まれた時、神は死んだ。そして、喜びが彼に依拠した。そこでかのブラフマー神は、自分のその輝く体を捨てた。

【Vāyu-p. 10.2-5】

tamomātrāvṛto brahmā tadāprabhṛti duḥkhitaḥ /

tataḥ sa vidadhe buddhim arthaniścayaagāminim // 2 //

その時から、タマスの要素に包まれたブラフマーは落胆した。そして彼は目的を解決するために知性を働かせた。

athātmani¹⁷⁹ samasrākṣīt tamomātrām niyāmikām /

rājasatvaṃ parājitya vartamānaṃ¹⁸⁰ ca¹⁸¹ dharmataḥ // 3 //

さて〔ブラフマーは〕自身の中でラジャス性を抑えて、規則正しく機能するも

¹⁷⁹ Ā 版では athā ’tmāni となっている。これは atha ātmāni の連声を分かりやすく記述したものである。ここでは N 版の表記を採用した。

¹⁸⁰ N 版では varttamānaṃ となっている。

¹⁸¹ N 版では sa となっている。その場合、訳は「さて彼は自身の中でラジャス性を抑えて、規則正しく機能するものの抑制するタマス〔の要素〕のみを創った」となる。

の抑制するタマス〔の要素〕のみを創った。

tapyate tena duḥkhena śokaṃ¹⁸² cakre jagatpatiḥ /
tamaś ca vyanudat tasmād rajas tamasaṃ¹⁸³ āvṛṇot // 4 //

世界の主（ブラフマー）は、その苦しみによって、傷ついて悲嘆にくれた。そしてタマスは取り除かれ、それ故にラジャスはタマスを覆った。

tat tamaḥ pratinuttaṃ vai mithunaṃ sa vyajāyata /
adharmāc caraṇāj¹⁸⁴ jajñe hiṃsā śokād ajāyata // 5 //

彼（ブラフマー）は、その追い払われたタマスを双子として生んだ。双子はアダルマである足¹⁸⁵から生まれた。ショーカからヒンサーが生じた。

G2. プルシャとプラクリティという記述

①プルシャとプラクリティ

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.33-38】

ardhena nārī sā tasya śatarūpā vyajāyata /
prakṛtir bhūtachātrī sā kāmād vai sṛjataḥ prabhoḥ //33//

彼の半身によってかの女性シャタルーパーが生じた。彼女は、創造する者である神がカーマから〔創られたので〕、プラクリティであり生類の母である。

sā divaṃ pṛthivīm caiva mahimnā vyāpya susthitā /
brahmaṇaḥ sā tanuḥ pūrvā divam āvṛtya tiṣṭhataḥ //34//

彼女は偉大さによって天と地に満ち、確立した。それは天を覆って留まっているブラフマーの以前の体であった。

yā tv arddhā sṛjyate nārī śatarūpā vyajāyata /
sā devī niyutaṃ taptvā tapaḥ paramaduścaram¹⁸⁶ //35//

bharttāraṃ diptayaśasaṃ puruṣaṃ pratyapadyata /
sa vai svāyaṃbhavaḥ pūrvaṃ puruṣo manur ucyate //36//

女性として創造された半身はシャタルーパーになった。その女神は、1億年の間、最高に困難な苦行を行ない、夫として輝かしい名声の男性を得た。そしてまさに彼は以前にスヴァーヤンブヴァであり、プルシャであり、マヌと呼ばれた。

tasyaikasaptatiyugaṃ manvaṃtaram ihocyate /

¹⁸² N版では śokañ となっている。

¹⁸³ Ā版では tasam となっているが、英訳を参照し、N版の tamasaṃ を採用した。

¹⁸⁴ Ā版では caraṇāmaj となっているが、英訳を参照し、N版の caraṇāj を採用した。

¹⁸⁵ 神のタマス性の表現と考えられる。

¹⁸⁶ 原文（M版）では parama duścaram（分書）となっているが、ほぼ平行句となっている Śiva-p. 5.30.3 を参照し、paramaduścaram（連書）とした。

labdhvā tu puruṣaḥ patnīm śatarūpām ayonijām //37//

tayā sa ramate sārddham tasmāt sā ratir ucyate /

prathamah saṁprayogaḥ sa kalpādaḥ samavarttata //38//

ここでは 71 ユガが彼のマヌヴァンタラと呼ばれる。そして、プルシャは妻として子宮から産まれなかったシャタルーパーを得て、彼は彼女と共に楽しんだ。それゆえ、彼女はラティと呼ばれる。カルパの初めにこの最初の結合があった。

②プラクリティ

【Brahmaṇḍa-p. 1.2.9.15】

sā hi kāmātmanā sṛṣṭā prakṛteḥ sā surūpiṇī /

śatarūpeti sā proktā sā proktaiva punaḥ punaḥ //15//

かの美しい姿の女性は、まさにカーマートマンによってプラクリティから創られた。彼女はシャタルーパーとよばれた。彼女は何度も何度も〔そう〕呼ばれた。

【Linga-p. 1.70.268】

prakṛtiṁ bhūtadhātṛiṁ tāṁ kāmād vai sṛṣṭavān prabhuḥ /

sā divaṁ pṛthivīm caiva mahimnā vyāpyadhiṣṭhitā // 268 //

〔ブラフマー〕神は意欲（kāma）から、かの〔全〕存在を支えるプラクリティを創った。それ（プラクリティ）は、偉大さによって天と地に満ちて、とどまった。

プルシャに関する言及についてだが、プルシャという言葉は男性や人間という意味でほぼ全ての神話において用いられている。そのため、サーンキヤの要素が強いとはいえないのでここでは抜粋しなかった。

G3. ヨーガに関する記述

【Kūrma-p. 1.8.7-8】

nārīṁ ca śatarūpākhyāṁ yoginīm sasṛje śubhām /

sā divaṁ pṛthivīm caiva mahimnā vyāpya saṁsthitā //7//

そして、彼は〔女性半身によって〕シャタルーパーという名の吉祥なるヨーギニーの女性を創った。彼女は偉大さによって、天と地に満ちてとどまった。

yogaiśvaryabalopetā jñānavijñānasamṃyutā /

yo 'bhavat puruṣāt putro virāḍavyaktajanmanaḥ //8//

ヨーガの超能力を授けられた者（シャタルーパー）は、〔高い〕知識と判断力を持っていた。未顕現から生まれた男性（ブラフマー）から生まれた息子がヴ

イラージュである。

【Śiva-p. 2.1.16.12】

svāyaṃbhuvo manus tatra puruṣaḥ parasāadhanam /

śatarūpābhidhā nārī yoginī sā tapasvinī // 12 //

そこで、男性は最高の〔創造の〕手段であるスヴァーヤンブヴァになった。かの女性はシャタルーパーと呼ばれるヨーギニーであり、苦行者である。

第2節 神話全体の流れ

最後に神話全体の構成について検討する。以下に、それぞれの要素をそれぞれの神話の流れに沿ってまとめた表を示す（表7）。

表 7 神話の構成要素と神話の流れを対応した表¹⁸⁷（ブラフマー創造神話）

文献名／構成要素	マヌ法典 1.1-51	Agni-p. 17.15-18.1	Bhāgavata-p. 3.12.51-56	Brahma-p. 1.41-59	Brahma-p. 43.30-38	Brahma-p. Gm. 91.33cd-35ab	Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.8cd-42	Kālikā-p. 25.44-55	Kūrma-p. 1.8.1-12b	Linga-p. 1.70.260cd-276	Matsya-p. 3.30-32	Padma-p. 1.40.67-72	Śiva-p. 2.1.16.3-15ab	Śiva-p. 5.29.16-30.5	Śiva-p. 7.1.17.1-6	Varāha-p. 2.13-20	Vāyu-p. 10.1-17
A							A1										
G							G1		G1								
B							B1										
G							G2										
F		F2		F2 F1 F3			F2 F1	F1						F2 F1 F3			
A	A3	A3	A1	A1	A3		A1	A3	A3	A1	A3	A2	A3	A1	A3	A4	A1
G										G1							G1
F					F3 F2								F2 F3			F1	
B	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B2	B1	B1	B1	B1	B1
G							G1 G2		G3	G2							
C		C					C		C	C			C	C	C		C
G													G3				
D			D2	D1	D2		D1		D1	D1			D2	D1	D1		D1
E		E1	E1	E2	E2		E1		E1	E1			E1	E1	E1		E1
F	F2 F3							F2				F2					

この神話の構成要素と神話の流れを対応した表から、構成要素 F（その他の者たちの創造）、G（サーンキヤ・ヨーガ哲学的記述）を省く¹⁸⁸と、以下ようになる（表 8）。

¹⁸⁷ 横軸は文献別、縦軸は神話において述べられる構成要素の順番である。例えば、『マヌ法典』1.1-51 では、構成要素が A3→B1→F2→F3 の順に述べられていることを示す。

¹⁸⁸ 神話の流れに関わりのない要素であるため。

表 8 神話の構成要素から F、G を除いた神話の流れを対応した表（ブラフマー創造神話）

文献名／構成要素	マヌ法典 1.1-51	Agni-p. 17.15-18.1	Bhāgavata-p. 3.12.51-56	Brahma-p. 1.41-59	Brahma-p. 43.30-38	Brahma-p. Gm. 91.33cd-35ab	Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.8cd-42	Kālikā-p. 25.44-55	Kūrma-p. 1.8.1-12b	Linga-p. 1.70.260cd-276	Matsya-p. 3.30-32	Padma-p. 1.40.67-72	Śiva-p. 2.1.16.3-15ab	Śiva-p. 5.29.16-30.5	Śiva-p. 7.1.17.1-6	Varāha-p. 2.13-20	Vāyu-p. 10.1-17
A							A1										
B							B1										
A	A3	A3	A1	A1	A3		A1	A3	A3	A1	A3	A2	A3	A1	A3	A4	A1
B	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B2	B1	B1	B1	B1	B1
C		C					C		C	C			C	C	C		C
D			D2	D1	D2		D1		D1	D1			D2	D1	D1		D1
E		E1	E1	E2	E2		E1		E1	E1			E1	E1	E1		E1

上記の表から見て、ほぼ全ての神話に示される構成要素は、以下の通りである。

A. 発端：ブラフマー神による創造行為

B. 分裂：ブラフマー神が半身により女性に、半身により男性へと分裂する

非常にシンプルだが、この A→B という流れは、ブラフマー創造神話であると認められるために必要最小限の構成要素を示していると言える。これに更なる構成要素を加えて、【ブラフマー創造神話基本形】（以下【ブラフマー基本形】と略す）を示す。

【ブラフマー基本形】

A. 発端：ブラフマー神による創造行為

B. 分裂：ブラフマー神が半身により女性に、半身により男性へと分裂する

C. シャタルーパーによる苦行（欠落している神話もあり）

D. マヌとシャタルーパーに関する記述：マヌとシャタルーパーが夫婦関係になる（欠落している神話もあり）

E. マヌとシャタルーパーの子供たち

このパターンでは、ブラフマー神から分裂した男女が、1 人の男性マヌと 1 人の女性シャタルーパーになり、彼らが夫婦となって子供たちを生み出すという内容である。多くの神話がこのパターンを取っており、ブラフマー創造神話の流れの基本的なパターン

であると言える。Bhāgavata-p. 3.12.51-56、Brahma-p. 1.41-59、Brahma-p. 43.30-38 では、構成要素 C がないため、分裂した女性半身が苦行をせずに男性半身と夫婦になるのだが、後続する構成要素 D、E は、他の神話と同様の者であり、物語全体の流れに大きな違いはないと言えるだろう。Agni-p. 17.15-18.1 では、構成要素 D がないためにマヌとシャタルーパーが夫婦になるという記述がないが、二人が子供たちを生み出すという記述から夫婦関係があることが暗示されていると考えられるため、やはり物語全体の流れに大きな違いはないと判断した。そのため、構成要素の欠落があってもこれらの神話を【ブラフマー基本形】であると分類した。以下にこのパターンに該当する神話の構成要素と神話全体の流れを対応させた表を示す（表 9）。

表 9 神話全体の流れ¹⁸⁹ 【ブラフマー基本形】

文献名／構成要素	Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.8cd-42	Kūrma-p. 1.8.1-12b	Linga-p. 1.70.260cd-276	Śiva-p. 2.1.16.3-15ab	Śiva-p. 5.29.16-30.5	Śiva-p. 7.1.17.1-6	Vāyu-p. 10.1-17	Bhāgavata-p. 3.12.51-56	Brahma-p. 1.41-59	Brahma-p. 43.30-38	Agni-p. 17.15-18.1
A	A1										
B	B1										
A	A1	A3	A1	A3	A1	A3	A1	A1	A1	A3	A3
B	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1	B1
C	C	C	C	C	C	C	C				C
D	D1	D1	D1	D2	D1	D1	D1	D2	D1	D2	
E	E1	E1	E1	E1	E1	E1	E1	E1	E2	E2	E1

このように、ブラフマー創造神話の全体的な流れは 1 つのパターンを持つと言える。

¹⁸⁹ 左からアルファベット順に文献を配置したが、分かりやすいように構成要素の欠落がある神話は右に配置した。

第3節 小結

ここまでプラーナ聖典と『マヌ法典』に見られる 17 のブラフマー創造神話の構造を、構成要素別の分析と神話全体の流れのパターン化によって明確にしてきた。

第1節では、構成要素別の分析によって各構成要素に含まれる記述の共通性を調査した。構成要素 A（発端：ブラフマー神による創造行為）は基本的には、ブラフマー神による創造の過程において男女に分裂する存在が必要な理由や状況を示している。構成要素 B（分裂：ブラフマー神が半身により女性に、半身により男性へと分裂する）では、ブラフマー神が自分自身の身体を男性半身と女性半身の 2 つに分けるという形が基本となっている。構成要素 C①（シャタルーパーによる苦行：構成要素 B において分裂した女性半身シャタルーパーが苦行する）は、シャタルーパーが困難な苦行をするというものであり、ほとんどの記述で一致している。構成要素 D（マヌとシャタルーパーに関する記述）は、分裂した半身同士（マヌとシャタルーパー）が夫婦になるという一致がある。構成要素 E（マヌとシャタルーパーの子供たち）は、マヌとシャタルーパーの夫婦から生まれる次世代に関するものである。E1 では、マヌとシャタルーパーの息子としてプリアヴラタとウッターナパーダ 2 人の名を記述していることで完全に一致している。構成要素 F（その他の者たちの創造）では、ブラフマー神が様々な者たちを創造している。F1（ルドラの創造）ではルドラを創造している。F2（聖者たちの創造）において、ブラフマー神によって創造された聖者たちの中で、マリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタの 7 名の名が一致している。構成要素 G（サーンキヤ・ヨーガ哲学的記述）の G1（トリグナに関する記述）では、トリグナが順番に登場するという一致があった。G2（プルシャとプラクリティという記述）では、2 人から生類創造が起こることをサーンキヤ哲学的に説明するという共通点があった。G3（ヨーガに関する記述）では、シャタルーパーがヨーギニーであるという一致点があった。このように、各構成要素には多くの共通点があり、元々同一の内容を述べた記述であった可能性が示せた。

続いて、第2節では、第1節において分類した構成要素を神話の流れに沿って配置することで、神話全体の構造のパターンを調べた。まず、ブラフマー創造神話であると認められるために必要最小限の構成要素の配置は、ほぼ全ての神話に含まれている A→B という流れであると考えられる。これをふまえて考察したところ、ブラフマー創造神話の全体的な流れには、A→B→C→D→E という流れの前後や途中に F と G の構成要素が点在するという 1 つのパターンがあるのではないかという結論に至った。

以上、見てきたように、本章で取り扱った 17 の神話は、各構成要素を 1 つ 1 つ分析しその一致点を見つけるというやり方によっても、神話の中に置かれている構成要素の位置関係から物語全体の流れを比較するというやり方によっても、同一の神話のヴァリ

エーションである可能性が高いことが示された。そして、この 17 の神話には、ほぼ全てに共通する物語の流れが 1 パターンあり、それが様々なヴァリエーションを持つブラフマー創造神話の基本形となっているのではないかと考えられることが分かった。

第2章 アルダナーリーシュヴァラ創造神話

本章ではアルダナーリーシュヴァラ創造神話の構造について、第1章（ブラフマー創造神話）において用いた方法と同様の方法で論じる。本論文では、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の定義を「世界創造の場面においてシヴァ神が男性半身と女性半身に分裂する」という内容が含まれていることとした。この定義に基づいたアルダナーリーシュヴァラ創造神話は、Kūrma-p. 1.10.88-11.14ab、Liṅga-p. 1.5.28-33、Liṅga-p. 1.41.7-13ab、Liṅga-p. 1.41.37-48、Liṅga-p. 1.70.314-329ab、Liṅga-p. 1.99.6cd-14ab、Mārkaṇḍeya-p. 47.3-16ab、Padma-p. 1.3.166-179ab、Śiva-p. 2.1.15.49-59、Śiva-p. 3.3.1-30、Śiva-p. 7.1.16.4-26、Skanda-p. 1.2.22.35cd-38ab、Skanda-p. 7.2.9.1-17、Varāha-p. 2.42-51、Vāyu-p. 9.67-84、Viṣṇu-p. 1.7.1-17ab という 16 の神話である。その中から構成要素を取り出すと以下の通りであった。

- A¹⁹⁰. 発端：ブラフマー神による創造行為
- C. シャタルーパーによる苦行
- D. マヌとシャタルーパーに関する記述：マヌとシャタルーパーが夫婦関係になる
- E. マヌとシャタルーパーの子供たち
- F. その他の者たちの創造
- G. サーンキヤ・ヨーガ哲学的記述
- H. 創造の過程でブラフマー神が怒る¹⁹¹
- I. アルダナーリーシュヴァラの出現¹⁹²
- J. アルダナーリーシュヴァラが男女に分裂する過程¹⁹³
- K. 男性部分¹⁹⁴
- L. 女性部分¹⁹⁵
- M. 仕事を担う¹⁹⁶

¹⁹⁰ ここでは、便宜的にアルファベットによって分類し、第1章のブラフマー創造神話の構成要素と関連させた。

¹⁹¹ 構成要素 H は、ブラフマー神が創造していく中で、何らかの理由でブラフマー神が怒るというものである。多くの神話では、その怒りが引き金となり、アルダナーリーシュヴァラが出現する（構成要素 I）。

¹⁹² 構成要素 I は、アルダナーリーシュヴァラが出現する場面の記述である。

¹⁹³ 構成要素 J は、アルダナーリーシュヴァラがどのように男性半身と女性半身に分裂したかを述べるものである。

¹⁹⁴ 構成要素 K は、分裂した後の男性半身についての記述である。

¹⁹⁵ 構成要素 L は、分裂した後の女性半身についての記述である。

¹⁹⁶ 構成要素 M は、マヌやルドラが守護の仕事や神々の仕事を行なうという記述である。

N. ダクシャの娘¹⁹⁷

O. スターヌに関する記述¹⁹⁸

P. ルドラの説明¹⁹⁹

この中で、構成要素 A、H、I、J、K、L、N は物語の流れに関わる構成要素であり、C、D、E、F、G、M、O、P は関わりのない構成要素である。つまり、構成要素 A→H→I→J→K→L→N へと物語が進んでいく前後や途中に構成要素 C、D、E、F、G、M、O、P が混在しているという形となっている。ただし、物語の流れに関わるとした構成要素がいくつか欠落していたり、物語の流れに関わる構成要素の順序が異なっている神話も多くあるため、構成要素 A→H→I→J→K→L→N という流れは参考程度に考えておくこととする。

本章では、第 1 章同様に、第 1 節において構成要素ごとの細部における分析をし、第 2 節において神話の流れという全体的な分析を行なう。

第 1 節では、まず 16 のアルダナーリーシュヴァラ創造神話の中から抜粋したそれぞれの構成要素に該当する記述を内容別に詳細に分類する²⁰⁰。本章では、分かりやすいように、第 1 章と関連させて構成要素の分類をした。それゆえ、例えばブラフマー創造神話に見られた構成要素 A4 は、アルダナーリーシュヴァラ創造神話には見られなかったもので、本章では省いた。このようにブラフマー創造神話で述べられているがアルダナーリーシュヴァラ創造神話では述べられていない構成要素は省略し、分析を進めていくこととする。そのようにして、A から P までの全ての構成要素を分類し、そのヴァリエーションから見られる一致や相違について分析する。一致点があることにより、16 のアルダナーリーシュヴァラ創造神話が同じ物語を述べていることが明らかになり、相違点があることにより、それがいくつものヴァリエーションを持つことが明らかになる。

第 2 節では、16 のアルダナーリーシュヴァラ創造神話全体の流れについて論じる。第 1 章第 2 節と同様の方法で、16 のアルダナーリーシュヴァラ創造神話がどのような構成要素の順番から成り立っているかを分析する。このように神話全体の流れをパターン化することで、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の持つ基本的な物語の形態や、基本形にいくつかの構成要素を加えてできる異なる形態を明確にする。

¹⁹⁷ 構成要素 N は、分裂した女性半身がダクシャの娘になる場面の記述である。

¹⁹⁸ 構成要素 O は、シヴァ神がスターヌ（不動者）であるとする記述である。

¹⁹⁹ 構成要素 P は、ルドラについての記述であるが、ルドラはシヴァ神の化身としての 1 者という扱いだけでなく、ルドラという者たちというあたかも 1 つの種族であるかのような扱いをされることがある。ここでは、そのルドラという者たちに関する記述を示している。

²⁰⁰ 分類の方法は第 1 章と同様である。

第1節 アルダナーリーシュヴァラ創造神話の構成要素

第1項 構成要素別分類

アルダナーリーシュヴァラ創造神話を構成要素別に分類すると、以下のようになる。

A. 発端：ブラフマー神による創造行為

A1. ブラフマー神が創造を行なったが、創造された者たちが繁栄しない

①創造された者たち：生類

②創造された者たち：聖仙

A2. ブラフマー神が創造のために苦行する

A3. 創造を進めている過程

A5. シヴァ神が生類を生み出さず、世界の破壊が起こるまでスターヌ（不動者）のままでいた

A6. バガヴァットとバガーがリングと台座として存在している

C. シャタルーパーによる苦行

②シャタルーパーが苦行し、汚れを除去する

D. マヌとシャタルーパーに関する記述：マヌとシャタルーパーが夫婦関係になる

D1. マヌとシャタルーパーが夫婦になる

①マヌがシャタルーパーを妻にする

E. マヌとシャタルーパーの子供たち

E1. 息子や娘を生み出した

①息子：プリャヴラタとウッターナパーダ、娘：アークーティとプラスーティ

F. その他の者たちの創造

F2. 聖者たちの創造

F3. その他の者たちの創造

G. サーンキヤ・ヨーガ哲学的記述

G1. トリグナに関する記述

G3. ヨーガに関する記述

H. 創造の過程でブラフマー神が怒る

- ①サナンダナなどが創造に無関心なので、ブラフマー神が怒る
- ②創造が進まず、自身に対し、ブラフマー神が怒る

I. アルダナーリーシュヴァラの出現

I1. ブラフマー神からアルダナーリーシュヴァラが現れる

- ①ブラフマー神の怒りにより、ルドラが額から生まれる
- ②ブラフマー神が怒り、生命（呼吸）を捨てたその口から、ルドラが生まれる
- ③ブラフマー神の苦行中にルドラが鼻から生まれる
- ④ブラフマー神が苦行中に朗誦した時、口からアルダナーリーシュヴァラが生まれる
- ⑤ブラフマー神の苦行に満足したシヴァ神が、ブラフマー神の額を貫き、アルダナーリーシュヴァラとして出現する
- ⑥苦行によってアヴィムクタからアルダナーリーシュヴァラが生まれる
- ⑦ブラフマー神の怒りから、アルダナーリーシュヴァラが生まれる

I2. ブラフマー神の苦行に満足したシヴァ神が、アルダナーリーシュヴァラに変化する

I3. 元々、アルダナーリーシュヴァラとして存在している

I4. リンガ（シヴァ）と台座（女神）の結合体として、アルダナーリーシュヴァラになる

J. アルダナーリーシュヴァラが男女に分裂する過程

J1. ブラフマー神の働きかけによりアルダナーリーシュヴァラが分裂する

- ①ブラフマー神から分裂するように言われる
- ②ブラフマー神の信仰を受け、男女別々になる
- ③ブラフマー神の苦行に満足し、シヴァ神が分裂する

J2. 自身の意思で分裂する

J3. ヨーガによって分裂する

K. 男性部分が 11 に分かれる

- ①11 に分かれる
- ②11 に分かれる。彼らはルドラと呼ばれる三界の支配者とされる
- ③11 に分かれ、さらに黒い者や白い者などに分かれる
- ④11 に分かれ、さらに男性部分と共に女性部分も、優しい者、粗野な者、穏やかな者、黒い者、白い者などに分かれる

L. 女性部分

L1. 女性部分は女神である

- ①女性は女神とされ、白い者と黒い者の 2 人に分かれる
- ②女性はサティールとされ、白い者と黒い者の 2 人に分かれる
- ③女性は無マールとなり、多くの女神や女性を創る
- ④女性は無女神シュラッダーである
- ⑤女性は無ダクシャの娘となる
- ⑥女性は無女神とされ、シャクティを生み出す

L2. 女性部分から創造が起こる

- ①優しい者、粗野な者などに分かれる
- ②優しい者、粗野な者、白い者、黒い者などに分かれる
- ③女性部分から、全ての女性が生まれたとする

M. 仕事を担う

M1. 以前にブラフマー神が生み出したマヌをブラフマー神が守護の仕事に任命する

M2. 11 人のルドラが神々の仕事を担う

N. ダクシャの娘

- ①半身の女性がダクシャの娘になり、ルドラと結婚する
- ②半身の女性がダクシャの娘になり、ルドラと結婚する。その後パールヴァティになり、再びルドラの配偶神になる
- ③半身の女性がダクシャの娘になり、ルドラと結婚する。それとともに、娘 (putri) という言葉の由来を述べる
- ④半身の女性がダクシャの娘になり、女性という存在が確立する
- ⑤半身の女性がダクシャの娘になり、女性における享受が確立する
- ⑥半身から生まれた女神サティールがダクシャに敬われる

O. スターヌ（不動者）に関する記述

P. ルドラの説明

P1. ルドラという名の由来

P2. 多数のルドラ

続いて、上記の構成要素を神話の流れに沿って配置する（表 10）。この表 10 は、第 1 章（ブラフマー創造神話）の表 4 と同様の方法で行った。

表 10 神話の構成要素と当該箇所を対応させた表（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

文献名	各構成要素の配置（上段：構成要素、下段：対応する偈）						
kūrma-p.1. 10.88-11.14ab	F2 10.88-89 N② 11.9-13ab	A2 11.1	I1③ 11.2	J1① 11.3-4	K② 11.4-5	M2 11.5	L2② 11.6
liṅga-p. 1.5.28-33	A3 28	I3 28	J1① 28	L2③ 29	K① 29	N③ 30-33	
liṅga-p. 1.41.7-13ab	A2 7-9	I1⑤ 7-10	J3 11	G3 11			
liṅga-p. 1.41.37-48	A2 37-38	H② 39-41	F3 40-41	I1② 42	J2 43-46	K① 43	L1③ 44-48
liṅga-p.1. 70.314-329ab	A5 314-323 L1② 327-329ab	P2 317-320	O 323-325	I3 324-325	J2 324-325	K① 326	N⑥ 327
liṅga-p.1. 99.6cd-14ab	A6 6cd-7	I4 8	J1① 12	L1④ 13	N① 13-14		
mārkaṇḍeya-p. 47.3-16ab	G1 3 K④ 11-12	A1① 3-4 L2② 12	A1② 4-10 M1 13	F2 5-8 C② 14	H① 8-10 D1① 14	I1⑦ 9-10 E1① 15-16ab	J1① 9-10
padma-p.1.3. 166-179ab	A1① 166 K③ 175-176ab D1① 176cd-178ab	F2 167-169	A1② 167-171 L2① 175 E1① 178cd-179ab	H① 169-171	I1① 172-173 M1 176cd-178ab	J1① 174 C② 176cd-178ab	
śiva-p.2.1. 15.49-59	F2 49	H① 50-51	A2 54	I1⑥ 55-56	P2 59		
śiva-p. 3.3.1-30	A1① 2	A2 5-7	I2 7-8	J1③ 11-13	L1⑥ 19	N④ 27	
śiva-p. 7.1.16.4-26	J1③ 4-6	A2 5	L1⑥ 21cd-22	N⑤ 23-25			

skanda-p.1.2. 22.35cd-38ab	I3 35cd-36ab K① 37cd-38ab		J1② 36cd-37ab		L2③ 37cd-38ab		
skanda-p.7.2. 9.1-17	A3 1-5 O 14	I1④ 5-6 G1 15-16	J1① 7	K② 8	M2 9-10	L1⑤ 9-10	N① 9-12
varāha-p. 2.42-51	A3 42-48	F2 43-46	F3 47	I1① 48-49	J1① 49-50	K① 50	
vāyu-p. 9.67-84	A1① 67 J1① 76-77	A1② 68-75 K① 77	F2 68-75 P1 78-81	H① 73cd-75 L1① 84	I1⑦ 73cd-75		
viṣṇu-p. 1.7.1-17ab	G1 2 K③ 14-15	A1① 3-4 L2① 15	A1② 4-11 M1 16	F2 4-8 C② 17	H① 9-11 D1① 17	I1① 12-13 E1① 18-19ab	J1① 12-14

以下、これらの構成要素を原文と和訳を示して詳細に分析していく。

第2項 構成要素 A の分析

構成要素 A（発端：ブラフマー神による創造行為）は、アルダナーリーシュヴァラ創造神話と第1章で論じたブラフマー創造神話の起点となる構成要素である。

A1 と A2、A3 は、ブラフマー神による創造の過程にあるということで共通している。A5（Līṅga-p. 1.7.314-323）では、ブラフマー神を創造主としているものの、ルドラ（シヴァ神）が多数のルドラを創造した後、生類の創造をやめるといった内容となっている。これは Līṅga-p. がシヴァ神を最高神とするシヴァ派のプラーナ聖典であるため、シヴァ神が創造に介入していると考えられる。A6（Līṅga-p. 1.99.6cd-7）は、他の A の構成要素とは全く異なる世界観を持っている。ここでは、創造者がリングとバガー（台座）になっている。これに続く記述（H9）からも分かるように、このリングとバガーが結合し、アルダナーリーシュヴァラになる。リングはシヴァ神を示すものであり、他の A の構成要素に見られたようなブラフマー神の創造過程という背景が描かれていない

め、ブラフマー神の影響力がだいぶ減じられていると言えよう。

このように、A6 以外の A の構成要素を含む全ての神話において、ブラフマー創造神話と似た内容のものが見られた。A6 においては、新しい要素が混入していると考えられる。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

A1. ブラフマー神が創造を行なったが、創造された者たちが繁栄しない

① 創造された者たち：生類

【Mārkaṇḍeya-p. 47.3-4】

devādyaḥ sthāvarāṃtās ca traiguṇyaviṣayāḥ smṛtāḥ /
evaṃ bhūtāni sṛṣṭāni sthāvarāṇi carāṇi ca //3//

神々を始めとして動かないものまでが、トリグナから成るものの対象であると知られる。このように、〔ブラフマー神によって〕動くものや動かないものという存在が創られた。

yadāsyā tāḥ prajāḥ sarvā na²⁰¹ vyavarddhanta dhīmataḥ /
athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmano 'srjat //4//

その賢者（ブラフマー）の〔創造した〕それら全ての生類が増えなかったので、〔ブラフマーは〕自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。

【Padma-p. 1.3.166】

evaṃ bhūtāni sṛṣṭāni sthāvarāṇi carāṇi ca /
yadāsyā tāḥ prajāḥ sarvā na vyavarddhamta dhīmataḥ //166//

このように〔ブラフマーによって〕動くものや動かないものという存在が生み出された。彼の思考〔によるもの〕だったにもかかわらず、これら全ての生類は繁栄しなかった²⁰²。

【Śiva-p. 3.3.2】

yadā sṛṣṭāḥ prajāḥ sarvā²⁰³ na vyavarddhamta vedhasā /
tadā ciptākuro 'bhūt sa tena duḥkhena duḥkhitāḥ //2//

創造主（ブラフマー）によって創造された全ての生類が繁栄しなかったので、心配した彼（ブラフマー）は、それゆえ非常に苦しんだ。

²⁰¹ E 版では ca となっているが、英訳や B 版（原文、及び英訳）を参照し、na とした。

²⁰² 英訳では「繁栄する」となっているが、否定辞 na が入っているため、「繁栄しない」とした。

²⁰³ N 版では prajāsarvāḥ となっている。翻訳はほぼ同じである。

【Vāyu-p. 9.67】

evaṃ bhūtāni sṛṣṭāni carāṇi sthāvarāṇi ca /

yadāsyā²⁰⁴ tāḥ prajāḥ sṛṣṭā na vyavardhanta dhīmataḥ //67²⁰⁵//

このように〔ブラフマーによって〕動くものや動かないものという存在が生み出された。彼の思考〔によるもの〕だったにもかかわらず、これらの創造された生類は繁栄しなかった。

【Viṣṇu-p. 1.7.3-4】

evaṃ bhūtāni sṛṣṭāni carāṇi sthāvarāṇi ca //3//

このように〔ブラフマーによって〕動くものや動かないものという存在が創られた。

yadāsyā tāḥ prajāḥ sarvā na vyavardhanta dhīmataḥ /

athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmāno 'sṛjat //4//

この賢者（ブラフマー）の〔創造した〕それら全ての生類が増えなかったので、〔ブラフマーは〕自分に似た心から生まれた他の息子たちを創った。

②創造された者たち：聖仙

【Mārkaṇḍeya-p. 47.4-10】

yadāsyā tāḥ prajāḥ sarvā na²⁰⁶ vyavarddhanta dhīmataḥ /

athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmano 'sṛjat //4//

その賢者（ブラフマー）の〔創造した〕それら全ての生類が増えなかったので、〔ブラフマーは〕自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。

bhṛguṃ pulastyam pulahaṃ kratum aṅgirasam tathā /

marīciṃ dakṣam atriṃ ca vasiṣṭhaṃ²⁰⁷ caiva mānasam //5//

すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、アンギラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。

nava brahmaṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ /

tato 'sṛjat punar brahmā rudraṃ krodhātmasambhavam //6//

saṅkalpaṃ caiva dharmam ca pūrveṣāṃ api pūrvajam /

sanandanādayo ye ca pūrvam sṛṣṭāḥ svayambhuvā //7//

彼らは9人のブラフマーとして、プラーナ聖典において定められている。そし

²⁰⁴ Ā 版では yadā 'sya となっている。これは yadā asya の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N 版を採用した。

²⁰⁵ N 版では 9 章 67-77 偈に該当する。

²⁰⁶ E 版では ca となっているが、英訳や B 版（原文、及び英訳）を参照し、na とした。

²⁰⁷ B 版では vasiṣṭāṇ となっているが、E 版の vasiṣṭhaṃ と同一人物を指すと考えられる。

て、ブラフマーはさらに、自身の怒りから生まれたルドラと、サンカルパ、前述の者たちより先に生まれたダルマを創った。そして、自己創造者（ブラフマー）によって、以前にサナンダナなどが創られた。

na te lokaṣu sajjanto nirapekṣāḥ samāhitāḥ /

sarve te 'nāgatajñānā vitarāgā vimatsarāḥ //8//

彼ら〔サナンダナなど〕は、世界に関わることなく、無関心で〔自身の事に〕専心していた。彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokasṛṣṭau mahātmanah /

brahmaṇo 'bhūn mahākrodhas tatrotpanno 'rkasannibhaḥ //9//

arddhanārīnaravapuḥ puruṣo 'tīsarīravān /

vibhajātmānam ity uktvā sa tadāntardadhe tataḥ //10//

このように、彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは、大きな怒りを感じた。そこから、太陽に等しく、大きな体を持ち、半身が女性である男性の姿の者が生まれた。「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、それから彼（ブラフマー）は消えた。

【Padma-p. 1.3.167-171】

athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmano 'sṛjat /

bhṛguṃ mām pulahaṃ caiva kratum aṃgirasam tathā //167//

marīciṃ dakṣam atriṃ ca vasiṣṭhaṃ caiva mānasān /

nava brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ //168//

それから彼は、自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。ブリグ、私（プラスティヤ）、プラハ、クラトゥ、アングiras、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタこそが〔その〕心から生まれた息子たちである。彼らは9人のブラフマーとしてプラーナ聖典に定められている。

sanaṃdanādayo ye ca pūrvam sṛṣṭās tu vedhasā /

na te lokaṣv asajjanta nirapekṣāḥ prajāsu te //169//

サナンダナなど、創造者によって以前に創られた彼らは、その世界のにおける生類〔の創造〕に無関心で、創造しなかった。

sarve hy āgatavijñānā vitarāgā vimatsarāḥ /

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokasṛṣṭau mahātmanah //170//

brahmaṇo 'bhūn²⁰⁸ mahān krodhas trailokyadahanakṣamaḥ /

tasya krodhāt samudbhūtaṃ jvālāmālāvadīpitam //171//

まさに全ての者たちは、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。

²⁰⁸ 原文（N版）では brahmaṇobhūn となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、brahmaṇo 'bhūn とした。

このように、彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは三界を燃やせるほど大きな怒りを感じた。彼の怒りから燃える炎の輪が生じた。

【Vāyu-p. 9.68-75】

athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmano 'srjat /

bhṛguṃ pulastyam pulahaṃ kratum āngirasan tathā //68//

marīciṃ dakṣam atriṃ ca vasiṣṭhaṃ caiva mānasam /

nava brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ //69//

teṣāṃ brahmātmakānāṃ vai sarveṣāṃ brahmavādinām /70ab

それから彼は、自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラストィヤ、プラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。彼らは 9 人のブラフマーとしてプラーナ聖典に定められている。彼らは皆、ブラフマー自身であり、ヴェーダに関して語れる者である。

tato 'srjat punar brahmā rudraṃ roṣātmasaṃbhavam //70cd//

saṃkalpaṃ caiva dharmam ca pūrveṣāṃ api pūrvajāḥ /71ab

そして、祖先の中の祖先ブラフマーはさらに、自身の怒りから生まれたルドラと、サンカルパとダルマを創った。

agre sasarjja vai brahmā mānasān ātmanaḥ samān //71cd//

sanandanam sasanakam vidvāṃsam ca sanātanam /

sanatkumāraṃ ca vibhuṃ sanakam ca sanandanam //72//

na te lokeṣu sarjjante²⁰⁹ nirapekṣāḥ sanātanāḥ /73ab

初めに、ブラフマーは自身に似た心から生まれた息子たち、サナカをともなったサナンダナと博識なサナータナと遍在するサナトクマーラ（とサナカとサナンダナ²¹⁰）を創った。彼らは、世界〔の創造〕に無関心であり、永遠であるので〔創造を〕もたらさない。

sarve te hy āgatajñānā vītarāgā vimatsarāḥ //73cd//

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokavṛttānukāraṇāt /

hiraṇyagarbho bhagavān parameṣṭhi hy acintayat //74//

tasya roṣāt samutpannaḥ puruṣo 'rkkasamadyutiḥ /

arddhanārīnaravapus tejasā jvalanopamaḥ //75//

彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように、彼らが、世界の〔生産〕活動に無関心であったので、金色の胎児である神パラ

²⁰⁹ Ā 版では *sajjante* となっているが、英訳を参照し、N 版の *sarjjante* を採用した。

²¹⁰ サナカとサナンダナは繰り返しになっており、英訳では訳されていないため、省略した。

メーシュティン（最高者、ブラフマー）は熟考した。彼の怒りから人が生まれた。〔その者は〕太陽に等しい輝きをしており、半身に女性を持つ男性の姿であり、炎によって非常に輝くようであった。

【Viṣṇu-p. 1.7.4-11】

yadāśya tāḥ prajāḥ sarvā na vyavardhanta dhīmataḥ /

athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmāno 'srjat //4//

この賢者（ブラフマー）の〔創造した〕それら全ての生類が増えなかったので、〔ブラフマーは〕自分に似た心から生まれた他の息子たちを創った。

bhṛguṃ pulastyam pulahaṃ kratum āngirasaṃ tathā /

marīciṃ dakṣam atriṃ ca vasiṣṭhaṃ²¹¹ caiva mānasān²¹² //5//

すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。

nava brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ //6//

彼らは9人のブラフマーとしてプラーナ聖典において定められている。

khyātiṃ bhūtiṃ ca sambhūtiṃ kṣamāṃ prītiṃ tathaiva ca /

sannatiṃ ca tathaivorjjām anasūyāṃ tathaiva ca //7//

prasūtiṃ ca tataḥ sṛṣṭvā dadau teṣāṃ mahātmanām /

patnyo bhavadhvam ity uktvā teṣāṃ eva tu dattavān //8//²¹³

まさに同様に、キヤーティ、ブーティ、サンブーティ、クシャマー、プリーティ、サンナティ、ウールツジャー、アナスーヤー、プラスーティを創り、「偉大な魂を持つ彼らの妻になれ」と言って、彼女らの創造者（ブラフマー）は〔9人の聖仙に彼女たちを〕与えた。

sanandanādayo ye ca pūrvasṛṣṭās²¹⁴ tu vedhasā /

na te lokeṣv asajjanta nirapekṣāḥ prajāsu te //9//

サナンダナなど、創造者によって以前に創られた彼らは、世界における生類〔の創造〕に無関心で、創造しなかった。

sarve te 'bhyāgatajñānā²¹⁵ vītarāgā vimatsarāḥ /

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokasṛṣṭau²¹⁶ mahātmanaḥ //10//

²¹¹ H 版では vasiṣṭham となっているが、N 版の vasiṣṭham を採用した。

²¹² H 版では mānasam となっているが、英訳を参照し、N 版の mānasān を採用した。

²¹³ H 版では 7-8 偈が欠如している。

²¹⁴ H 版では pūrvam sṛṣṭā となっているが、語形変化を考慮し、N 版の pūrvasṛṣṭās を採用した。

²¹⁵ H 版では hy āgatajñānā となっている。訳はほぼ同じである。

²¹⁶ H 版では lokasṛṣṭo となっているが、英訳を参照し、N 版の lokasṛṣṭau を採用した。

brahmaṇo 'bhūn²¹⁷ mahān krodhas²¹⁸ trailokyadahanakṣamaḥ /
tasya krodhāt samudbhūtajvālāmālātidīpitam²¹⁹ /
brahmaṇo 'bhūt²²⁰ tadā sarvaṃ trailokyam akhilaṃ mune //11//

彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは、三界を燃やすことが出来るほど大きな怒りを感じた。彼の怒りから、燃える火炎の輪が生じ、三界全てに満ちた。聖仙よ。

A2. ブラフマー神が創造のために苦行する

【Kūrma-p. 1.11.1】

evaṃ sṛṣṭvā marīcyādīn devadevaḥ pitāmahaḥ /
sahaiva mānasaiḥ putrais tatāpa paramaṃ tapaḥ //1//

このようにマリーチなどを創造してから、神々の神であるピターマハは、心から生まれた息子たちと共に、最高の苦行をした。

【Linga-p. 1.41.7-9】

na vyavardhampta loka 'smin prajāḥ kamalayoninā /
vṛddhyarthaṃ bhagavān brahmā putrair vai mānasaiḥ saha //7//
duścaraṃ vicacāreṣaṃ samuddiśya tapaḥ svayam /
tuṣṭas tu tapasā tasya bhavo jñātvā sa vāñchitam //8//
lalāṭamadhyam nirbhidyā brahmaṇaḥ puruṣasya tu /
putras te 'ham²²¹ iti procya śrīpūṃrūpo 'bhavat²²² tadā //9//

蓮から生まれた者（ブラフマー）によって〔創られた〕生類が、この世界で繁栄しなかったので、ブラフマー神は繁栄のために、心から生まれた息子たちと共に、〔シヴァ〕神に対し、自身で厳しい苦行をした。そして、かの〔シヴァ〕神は、彼の苦行に満足し、〔ブラフマーの〕願いを知り、ブラフマー神の額の

²¹⁷ N版では brahmaṇobhūn となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、brahmaṇo 'bhūn とした。

²¹⁸ H版では mahākrodas となっている。訳はほぼ同じである。

²¹⁹ H版では samudbhūtajvālāmālāvidīpitam となっているが、N版の samudbhūtajvālāmālātidīpitam を採用した。

²²⁰ N版では brahmaṇobhūt となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、brahmaṇo 'bhūt とした。

²²¹ 原文（N版）では teham となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、te 'ham とした。

²²² 原文（N版）では śrīpūṃrūpobhavat となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、śrīpūṃrūpo 'bhavat とした。

中央を貫き、「私はお前の息子である。」と言って、女性と男性を〔兼ね備えた〕姿になった。

【Liṅga-p. 1.41.37-38】

aṣṭamūrteḥ prasādena viraṃciś cāsrjat punaḥ /
srṣṭvaitad akhilaṃ brahmā punaḥ kalpāmtare prabhuḥ //37//
sahasrayugaparyamtaṃ saṃsupte ca carācare /
prajāḥ sraṣṭumanās tepe tata ugraṃ tapo mahat //38//

そして、アシュタムールティ²²³（ルドラ）の恩恵によって、ヴィランチ（ブラフマー）は再び創造した。ブラフマー神は、他の（前の）カルパにおいて、動くものや動かないものにおけるその全てを創造した後、千ユガ期の間眠り、〔その後目が覚めて〕生類を創りたいと考え、それから非常に過酷な苦行をした。

【Śiva-p. 2.1.15.54】

tapāḥ kuru śivasyeti hariṇā śikṣito 'py aham /
tapokārī mahadghoraṃ paramaṃ munisattama //54//

私はまさにハリ（ヴィシュヌ）によって「シヴァへの苦行をなせ」と教えられた。最高の聖者よ。非常に過酷な最高の苦行した。

【Śiva-p. 3.3.5-7】

prabhāveṇa vinā śaṃbhor na jāyerann imāḥ prajāḥ /
evaṃ saṃcintayan brahmā tapāḥ karttuṃ pracakrame //5//

「シャンプ（吉祥者、シヴァ）の創造力なしには、これらの生類は生まれないだろう。」そのように考えたブラフマーは、苦行をし始めた。

śivayā²²⁴ parayā śaktyā saṃyuktaṃ parameśvaram /
saṃcintya hṛdaye prītyā tepeṣaṃ²²⁵ paramaṃ tapāḥ //6//

最高のシャクティであるシヴァーと結合したパラメーシュヴァラ（シヴァ神）を、心の中で喜んで考え、〔ブラフマーは〕主（シヴァ）に対し最高の苦行をした。

tīvreṇa tapasā tasya saṃyuktasya svayaṃbhavaḥ /
acireṇaiva kālena tutoṣa sa śivo drutam //7//

²²³ アシュタムールティとは、8つの姿の事である。前文 35-36 偈によると、太陽、火、月、地、風、人、水、虚空の8つとなっている。

²²⁴ K 版では śivāya となっている。韻律上はどちらでも良く、意味上でもどちらでも不自然ではないが、ここでは英訳を参照し、N 版の śivayā を採用した。

²²⁵ N 版では tepe sa となっている。この場合、訳は「彼は最高の苦行をした」となる。

かのスヴァヤンブー（自生者、ブラフマー）が、厳しい苦行に専念していたので、すぐさま、かのシヴァ神は満足した。

【Śiva-p. 7.1.16.5】

prajānām eva vṛddhyartham tapas taptam tvayādhunā²²⁶ /

tapasā 'nena tuṣṭo 'smi²²⁷ dadāmi ca tavepsitam //5//

まさに生類の繁栄のために、今、あなたによって苦行がなされた。この苦行で私は満足した。ゆえに、お前の望むものを与えよう。

A3. 創造を進めている過程

【Linga-p. 1.5.28】

ardhanārīśvaram dṛṣṭvā sargādaḥ kanakāṃḍajāḥ /

vibhajasveti cāhādaḥ yadā jātā tadābhavat //28//

創造の初めに、黄金の卵から生まれた者（ブラフマー）である創造者がアルダナーリーシュヴァラを見て、「[汝を] 分けよ」と言った時に、彼はそのように〔男女2つに〕なった。

【Skanda-p. 7.2.9.1-5】

yadā sṛṣṭam mayā sarvaṃ trailokyam sacarācaram /

tadā mūrtim imāṃ tyaktvā bhavaḥ sṛṣṭo mayā 'dhunā //1//

pitāmahamahat tvaṃ syāt tathā śighram vidhiyatām /

brahmaṇo vacanaṃ śrutvā viṣṇunā sa promoditaḥ //2//

mahadāścaryajanake samprāpto girim ūrddhani /

na vicāras tvayā kāryaḥ kartavyaṃ brahmabhāṣitam //3//

「私によって、動くものから動かないものまでの三界の全て〔のもの〕が創られた時、私はこの姿を捨て、その時バヴァ（シヴァ）を創ろう。汝は、ピターマハの偉大さとなるだろう。直ちに、そのように創りなさい。」ブラフマーの言葉を聞き、ヴィシュヌに促されて、非常に不思議な山頂にやってきた。あなたによって思議されるべきではなく、ブラフマーに言われたことをなすべきである。

tathety uktvā śivo devas tatraivāntaradhīyata²²⁸ /

brahmā yayau meruśṛṅgaṃ manasaḥ śirasi sthitam //4//

²²⁶ K 版では tvayā 'dhunā となっている。これは tvayā adhunā の連声を分かりやすく記述したと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

²²⁷ N 版では tuṣṭosmi（連書）となっている。

²²⁸ N 版では tatraivāṃtaradhīyata となっている。

「分かりました。」と言って、シヴァ神はそこから消えた。ブラフマーは頭の中のメール山の山頂に心で行った。

tapas tepe prajānātho vedoccāraṇataparāḥ /

atharvavedoccaraṇaṃ yāvac cakre pitāmahaḥ //5//

ヴェーダの朗唱に通曉したピターマハである創造主は、苦行をし、アタルヴァヴェーダを朗誦した。

【Varāha-p. 2.42-48】

navadhā sṛṣṭir utpannā brahmaṇo 'vyaktajanmanaḥ /

kathaṃ sā vavṛdhe deva etan me kathayācyuta //42//

未顕現から生まれたブラフマーの9種の創造が起きた。それはどのように神において増えたのか。それを私に語りなさい。不滅の者よ。

varāha uvāca //

ヴァラーハは言った。

prathamam brahmaṇā sṛṣṭā rudrādyās tu tapodhanāḥ /

sanakādayas tataḥ sṛṣṭā marīcyādaya eva ca //43//

初めにルドラを始めとする偉大な苦行者たちがブラフマーによって創造された。それから、サナカなどが、そしてマリーチなどが創られた。

marīcir atris ca tathā aṅgirāḥ pulahaḥ kratuḥ /

pulastyaś ca mahātejāḥ pracetā bhṛgur eva ca /

nārado daśamaś caiva vaśiṣṭhaś ca mahātapāḥ //44//

〔それは〕マリーチ、アトリ、アンギラス、プラハ、クラトゥ、プラスティヤ、偉大な輝きを持つプラチェータス、ブリグ、ナーラダと、10番目が偉大な苦行者ヴァシシュタである。

sanakādayo nivṛttyākhye tena dharmme prayojitāḥ /

pravṛttyākhye marīcyādyā muktvaikaṃ nāradaṃ munim //45//

彼（ブラフマー）によって、サナカたちは自制（nivṛtti）という名の性質を付与され、聖仙ナーラダ1人を除くマリーチなどは活動（pravṛtti）という名〔の性質を付与された〕。

yo 'sau prajāpatis tvādyo dakṣiṇāṅguṣṭhasambhavaḥ /

tasyādau tatra vaṃśe tu jagad etac carācaram //46//

それが最初のブラジャーパティで、〔ブラフマーの〕右の親指から生まれた者である。そこで、彼（ブラジャーパティ）の系譜の最初に、この動くものや動かないものから成る世界が〔生じた〕。

devāś ca dānavāś caiva gandharvoragapakṣiṇaḥ /

sarvve dakṣasya kanyāsu jātāḥ paramadhārmikāḥ //47//

神やダーナヴァ、ガンダルヴァ、蛇、鳥、という高德なものの全てがダクシャの娘たちから生まれた。

yo 'sau rudreti vikhyātaḥ putraḥ krodhasamudbhavaḥ /

bhrukuṭikuṭilāt tasya lalāṭāt parameṣṭhinaḥ //48//

かのルドラと呼ばれる息子は、かのパラメーシュティンの眉をしかめた額から、怒りによって生まれた。

A5. シヴァ神が生類を生み出さず、世界の破壊が起こるまでスターヌ（不動者）のままでいた

【Linga-p. 1.70.314-323】

brahmā dṛṣṭvābravīd enaṃ mā srākṣīr idṛśīḥ prajāḥ /

sraṣṭavyā nātmanas tulyāḥ prajā deva namo 'stu²²⁹ te //314//

ブラフマー神はその者（ルドラ）を見て言った。「そのような²³⁰生類を創るな²³¹。

〔汝〕自身に似た生類を創るべきではない。神よ、汝に敬礼する。

anyāḥ sṛja tvam bhadraṃ te prajā vai mṛtyusaṃyutāḥ /

nārapsyaṃte hi karmāṇi prajā vigatamṛtyavaḥ //315//

汝に幸あれ。汝は他の死を伴う（死すべき）生類を創りなさい。死の来ない生類は、儀式を執り行わないだろう。」

evam ukto 'bravīd enaṃ nāhaṃ mṛtyujarānvitāḥ /

prajāḥ srakṣyāmi bhadraṃ te sthito 'haṃ²³² tvam sṛja prajāḥ //316//

このように言われた彼（ルドラ）は、彼（ブラフマー）に言った。「私は、死や老が訪れる生類を創らないだろう。あなたに幸あれ。私は留まるので、あなたが生類を創りなさい。

ete ye vai mayā sṛṣṭā virūpā nīlāhitāḥ /

sahasrāṇāṃ sahasraṃ tu ātmano nissṛtāḥ prajāḥ //317//

私によって創られた多様な紫紅色の何千もの者たちは自滅する生類である。

ete devā bhaviṣyaṃti rudrā nāma mahābalāḥ /

prṥhivyāṃ aṃtarikṣe ca dikṣu caiva pariśritāḥ //318//

これらの神々はルドラという名の偉大な力を持つ者たちとなるだろう。〔彼らは〕大地や天地の間、さらに〔あらゆる〕方角に存在している。

²²⁹ 原文（N版）では namostu となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、namo 'stu とした。

²³⁰ 前文の 303-313 偈において、ルドラが創造した者たちが何千万人の恐ろしい者たちであるという描写がなされている。

²³¹ 原文（N版）ではアオリスト形になっているが、英訳に従い、命令調に訳した。

²³² 原文（N版）では sthitoḥam となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、sthito 'haṃ とした。

śatarudrāḥ samātmāno bhaviṣyaṃtīti yājñikāḥ /

yajñabhājo bhaviṣyaṃti sarvadevagaṇaiḥ saha //319//

100 人のルドラたちは、平静を保ち、儀式を執り行う者たちとなるだろう。全ての神々の集まりと共に供物の享受者となるだろう。

manvaṃtareṣu ye devā bhaviṣyaṃtīha bhedataḥ /

sārdhaṃ tair iḥyamānāste sthāsyamtiḥyugakṣayāt //320//

これらの神々（ルドラたち）は数々のマヌヴァンタラの間、別々に存在するだろう。この神々（全ての神々）と共に敬われ、この世界で、ユガの終わりに至るまでとどまるだろう。」

evam uktas tadā brahmā mahādevena dhīmatā /

pratyuvāca namaskṛtya hr̥ṣyamāṇaḥ prajāpatiḥ //321//

このように、賢者である偉大な神（ルドラ）によって言われた創造主ブラフマーは、敬礼して、喜んで答えた。

evam bhavatu bhadraṃ te yathā te vyāhṛtaṃ vibho /

brahmaṇā samanujñāte tathā sarvam abhūt kila //322//

「汝に言われた通り、そのようにしよう。汝に幸あれ。遍在する者よ。」〔そのように〕ブラフマーによって認められた時、全て〔の創造〕が起こった。

tataḥ prabhṛti deveśo na cāsūyata vai prajāḥ /

ūrdhvaretāḥ sthitaḥ sthāṇur yāvad ābhūtasamplavam //323//

それ以来、神々の神（ルドラ）は、生類を生み出さなかった。生類の破滅が起こるまで、禁欲生活を保ったスターヌのままでいた。

A6. バガヴァットとバガーがリングと台座として存在している

【Linga-p. 1.99.6cd-7】

sā bhagākyā jagaddhātrī liṅgamūrtes trivedikā //6cd//

彼女はバガー（幸運なる者、分配者）という名であり、世界の母であり、リングの像の3つの台座である。

liṅgas tu bhagavān dvābhyāṃ jagatsṛṣṭir dvijottamāḥ /

liṅgamūrṭiḥ śivo jyotis tamasaś copari sthitaḥ //7//

そしてリングはバガヴァット（幸運を持つ者）であり、両者（バガーとバガヴァット）によって世界の創造がある。バラモンたちよ。リングの姿をしたシヴァは、タマスの上にある光として存在している。

第3項 構成要素 C の分析

構成要素 C②（シャタルーパーによる苦行：シャタルーパーが苦行し、汚れを除去する）では、「苦行を行ない汚れを除去すること（*taṇirḍhūtakalmaṣām*）」という言葉が述べられている。全ての神話において、一致して述べられているため、何かしらの決まった行為を行なう必要があるという可能性もある。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

②シャタルーパーが苦行し、汚れを除去する

【Mārkaṇḍeya-p. 47.14】

śatarūpām ca tāṃ nārīm taṇirḍhūtakalmaṣām /

svāyambhuvo manur devaḥ patnīve²³³ jagrhe vibhuḥ //14//

主でありスヴァーヤンブヴァであるマヌ神は、妻として、苦行によって汚れを除去したかの女性シャタルーパーを娶った。

【Padma-p. 1.3.176cd-178ab】

tato brahmā svāyambhūtaṃ pūrvam svāyambhuvaṃ prabhuṃ //176cd//

ātmānam eva kṛtavān prajāpatye manuṃ nṛpa /

śatarūpām ca tāṃ nārīm taṇirḍhūtakalmaṣām //177//

svāyambhuvo manur nāma patnīve jagrhe prabhuḥ //178ab

それからブラフマーは、以前に〔ブラフマー〕自身から生まれ、〔ブラフマー〕自身でもあるスヴァーヤンブヴァをマヌとして創造の〔の仕事〕に任命した。王よ。スヴァーヤンブヴァであるマヌという名の神は、妻として、苦行によって汚れを除去した、かの女性シャタルーパーを娶った。

【Viṣṇu-p. 1.7.17】

śatarūpām ca tāṃ nārīm taṇirḍhūtakalmaṣām /

svāyambhuvo manur devaḥ patnīve²³⁴ jagrhe prabhuḥ²³⁵ //17//

スヴァーヤンブヴァである主マヌ神は、妻として、苦行によって汚れを除去したかの女性シャタルーパーを娶った。

²³³ E 版では *patīve* だが、B 版を参照し *patnīve* とした。

²³⁴ H 版では *palnīve* となっているが、英訳を参照し、N 版の *patnīve* を採用した。

²³⁵ H 版では *vibhuḥ* となっている。訳は同じである。

第4項 構成要素Dの分析

構成要素 D1（マヌとシャタルーパーに関する記述：マヌとシャタルーパーが夫婦になる）は、ブラフマー創造神話の内容とほとんど同じである。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

D1. マヌとシャタルーパーが夫婦になる

①マヌがシャタルーパーを妻にする

【Mārkaṇḍeya-p. 47.14】

śatarūpām ca tām nārīm taponirdhūtakalmaṣām /
svāyambhuvo manur devaḥ patnīve²³⁶ jagrhe vibhuḥ //14//

主でありスヴァーヤンブヴァであるマヌ神は、妻として、苦行によって汚れを除去したかの女性シャタルーパーを娶った。

【Padma-p. 1.3.176cd-178ab】

tato brahmā svayambhūtaṁ pūrvaṁ svāyambhuvaṁ prabhuṁ //176cd//
ātmānam eva kṛtavān prajāpatye manuṁ nrpa /
śatarūpām ca tām nārīm taponirdhūtakalmaṣām //177//
svāyambhuvo manur nāma patnīve jagrhe prabhuḥ //178ab

それからブラフマーは、以前に〔ブラフマー〕自身から生まれ、〔ブラフマー〕自身でもあるスヴァーヤンブヴァをマヌとして創造の〔の仕事〕に任命した。王よ。スヴァーヤンブヴァであるマヌという名の神は、妻として、苦行によって汚れを除去した、かの女性シャタルーパーを娶った。

【Viṣṇu-p. 1.7.17】

śatarūpām ca tām nārīm taponirdhūtakalmaṣām /
svāyambhuvo manur devaḥ patnīve²³⁷ jagrhe prabhuḥ²³⁸ //17//

スヴァーヤンブヴァである主マヌ神は、妻として、苦行によって汚れを除去したかの女性シャタルーパーを娶った。

²³⁶ E 版では palīve だが、B 版を参照し patnīve とした。

²³⁷ H 版では palnīve となっているが、英訳を参照し、N 版の patnīve を採用した。

²³⁸ H 版では vibhuḥ となっている。訳は同じである。

第5項 構成要素 E の分析

構成要素 E1①（マヌとシャタルーパーの子供たち：息子や娘を生み出した：息子：プリヤヴラタとウッターナパーダ、娘：アーケーティとプラスーティ）は、ブラフマー創造神話の内容とほぼ一致している。C・D・Eの一連の構成要素に関して、アルダナーリーシュヴァラ創造神話においては、Mārkaṇḍeya-p. 47.14-16ab と Padma-p. 1.3.176cd-179ab と Viṣṇu-p. 1.7.17-19ab の3ヶ所でのみ言及されている。それらの内容はほぼ一致しており、言及箇所が少ないながらも、この一連の構成要素がある1つの形を確立していると言える。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

E1. 息子や娘を生み出した

①息子：プリヤヴラタとウッターナパーダ、娘：アーケーティとプラスーティ
【Mārkaṇḍeya-p. 47.15-16ab】

tasmāc ca puruṣāt putrau śatarūpā vyajāyata /

priyavratottānapādaḥ prakhyātāv ātmakarmabhiḥ //15//

そして、その男性（マヌ）からシャタルーパーは、自身の善業によって名高い2人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダを生んだ。

kanye dve ca tathākūtim²³⁹ prasūtiṁ ca tataḥ pitā /16ab

そして、父（マヌ）はさらに、アーケーティとプラスーティという2人の娘を〔もうけた〕。

【Padma-p. 1.3.178cd-179ab】

tasmāc ca puruṣād devī śatarūpā vyajāyata //178cd//

priyavratottānapādaprasūtyākūtisaṁjñitam²⁴⁰ /179ab

そして、その男性によってシャタルーパー女神は、プリヤヴラタとウッターナパーダとプラスーティとアーケーティと呼ばれる〔子供たち〕を生んだ。

【Viṣṇu-p. 1.7.18-19ab】

tasmāt tu²⁴¹ puruṣād devī śatarūpā²⁴² vyajāyata /

²³⁹ B版では tathā rddhiṁ となっており、娘の名前がアーケーティであるヴァージョンとリッディであるヴァージョンがあることが分かる。

²⁴⁰ 原文（N版）では priyavratottānapādaprasūtyākūtisaṁjñitam となっているが、英訳を参照し、priyavratottānapādaprasūtyākūtisaṁjñitam とした。

²⁴¹ H版では tasmāc ca となっている。訳はほぼ同じである。

²⁴² H版では satarūpā となっているが、英訳を参照し、N版の śatarūpā を採用した。

priyavratottānapādau prasūtyākūṭisaṃjñitam //18//

kanyādvayaṃ ca dharmajña rūpaudāryaguṇānvitam /19ab

その男性とシャタルーパー女神は、プリヤヴラタとウッターナパーダ〔という息子〕たちとプラスーティとアーケーティと呼ばれる美貌と寛大さと徳をそなえた2人の娘たちをもうけた。ダルマを知る者よ。

第6項 構成要素 F の分析

構成要素 F（その他の者たちの創造）では、ブラフマー神がこの創造の過程において創り出した様々な者たちに関する記述を集めたものである。

構成要素 F2（聖者たちの創造）は、ブラフマー神がマリーチなどの聖者たちを創造するという記述である。以下に、創造された者たちの名を挙げる（表 11）。

表 11 構成要素 F2 における聖者の名²⁴³（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

	マリーチ	アトリ	アンギラス	プラスティヤ	プラハ	クラトウ	プラチエータス	ヴァスィシユタ	ブリグ	ナーラダ	ダクシャ	聖者たちに関する記述
Mārkaṇḍeya-p. 47.5	⑥	⑧	⑤	②	③	④		⑨	①		⑦	9 人のブラフマー
Padma-p. 1.3.167-168	⑥	⑧	⑤	②	③	④		⑨	①		⑦	9 人のブラフマー
Vāyu-p. 9.69-70ab	⑥	⑧	⑤	②	③	④		⑨	①		⑦	9 人のブラフマー
Viṣṇu-p. 1.7.5-6	⑥	⑧	⑤	②	③	④		⑨	①		⑦	9 人のブラフマー
Kūrma-p. 1.10.88-89	①	⑧	③	④	⑤	⑥		⑨	②		⑦	9 人のブラフマー
Varāha-p. 2.44	①	②	③	⑥	④	⑤	⑦	⑩	⑧	⑨		

一致する内容が多く、形式化が進んでいると言える。表には加えなかったが、Śiva-p.

²⁴³ 縦軸が文献名、横軸が聖者の名前であり、表中の番号は創造された順番である。この表を載せた意図は、記述の定型化を調査するためである。

2.1.15.49 では「ブラフマー神の心から生まれたサナカなど 5 人の息子²⁴⁴」という記述がある。

構成要素 F3（その他の者たちの創造）では、ブラフマー神による創造の過程にあるため、世界創造や生類創造がなされている。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

F2. 聖者たちの創造

【Kūrma-p. 1.10.88-89】

nārāyaṇākhyo bhagavān yathāpurvaṃ prajāpatiḥ /
marīcibhrgvaṅgirasah pulastyam pulahaṃ kratum //88//
dakṣam atrim vasiṣṭhañ ca so 'srjad yogavidyayā /
nava brahmāṇa ity ete purāṇe niścayo mataḥ /
sarve te brahmaṇā tulyāḥ sādhakā brahmavādinaḥ //89//

かのナーラーヤナと呼ばれるブラジャーパティである神²⁴⁵は、以前のように、マリーチ、ブリグ、アングラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタをヨーガの知識によって創造した。彼らは、9 人のブラフマーとして、プラーナ聖典において定められている。彼らは皆、ブラフマーと同じく有能であり、ヴェーダについて語れる者である。

【Mārkaṇḍeya-p. 47.5-8】

bhrgum pulastyam pulahaṃ kratum aṅgirasam tathā /
marīcim dakṣam atrim ca vasiṣṭham²⁴⁶ caiva mānasam //5//
すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。
nava brahmaṇa ity ete purāṇe niścayam gatāḥ /
tato 'srjat punar brahmā rudraṃ krodhātmasambhavam //6//
saṅkalpaṃ caiva dharmam ca pūrveṣām api pūrvajam /
sanandanādayo ye ca pūrvam sṛṣṭāḥ svayambhuvā //7//

彼らは 9 人のブラフマーとして、プラーナ聖典において定められている。そして、ブラフマーはさらに、自身の怒りから生まれたルドラと、サンカルパ、前

²⁴⁴ サナカたちは、マリーチたちと同様にブラフマー神によって生み出されたものたちであるが、マリーチたちとは異なるグループの者たちとされており、「9 人のブラフマー」などのようには称されない。

²⁴⁵ ナーラーヤナは本来はヴィシュヌ神の異名ではあるが、ここではブラフマー神を指していると考えられる。

²⁴⁶ B 版では vasiṣṭaṇ となっているが、E 版の vasiṣṭham と同一人物を指すと考えられる。

述の者たちより先に生まれたダルマを創った。そして、自己創造者（ブラフマー）によって、以前にサナンダナなどが創られた。

na te lokeṣu sajjanto nirapekṣāḥ samāhitāḥ /

sarve te 'nāgatajñānā vītarāgā vimatsarāḥ //8//

彼ら〔サナンダナなど〕は、世界に関わることなく、無関心で〔自身の事に〕専心していた。彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。

【Padma-p. 1.3.167-169】

athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmano 'srjat /

bhṛguṃ mām pulahaṃ caiva kratum aṃgirasam tathā //167//

marīciṃ dakṣam atriṃ ca vasiṣṭhaṃ caiva mānasān /

nava brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ //168//

それから彼は、自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。ブリグ、私（プラスティヤ）、プラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタこそが〔その〕心から生まれた息子たちである。彼らは9人のブラフマーとしてプラーナ聖典に定められている。

sanaṃdanādayo ye ca pūrvam sṛṣṭās tu vedhasā /

na te lokeṣv asajjanta nirapekṣāḥ prajāsu te //169//

サナンダナなど、創造者によって以前に創られた彼らは、その世界のにおける生類〔の創造〕に無関心で、創造しなかった。

【Śiva-p. 2.1.15.49】

sanakādyāḥ sutā me hi mānasā brahmasaṃmitāḥ /

mahāvairāgyasaṃpannā abhavan pañca²⁴⁷ suvratāḥ //49//

まさに、私の心から生まれたサナカなどの5人の息子たちは、ブラフマンと同等であり、良く戒を守る者たちであり、偉大なる無執着の者たちであった。

【Varāha-p. 2.43-46】

prathamam brahmaṇā sṛṣṭā rudrādyās tu tapodhanāḥ /

sanakādayas tataḥ sṛṣṭā marīcyādaya eva ca //43//

初めにルドラを始めとする偉大な苦行者たちがブラフマーによって創造された。それから、サナカなどが、そしてマリーチなどが創られた。

marīcir atriś ca tathā aṅgirāḥ pulahaḥ kratuḥ /

pulastyaś ca mahātejāḥ pracetā bhṛgur eva ca /

nārado daśamaś caiva vasiṣṭhaś ca mahātapāḥ //44//

²⁴⁷ N 版では pañca となっている。

〔それは〕 マリーチ、アトリ、アングラス、プラハ、クラトゥ、プラスティヤ、偉大な輝きを持つプラチータス、ブリグ、ナーラダと、10 番目が偉大な苦行者ヴァシシュタである。

sanakādayo nivṛtṭyākhye tena dharmme prayojitāḥ /
pravṛtṭyākhye marīcyādyā muktvaikaṃ nāradaṃ munim //45//

彼（ブラフマー）によって、サナカたちは自制という名の性質を付与され、聖仙ナーラダ 1 人を除くマリーチなどは活動という名〔の性質を付与された〕。

yo 'sau prajāpatis tvādyo dakṣiṇāṅguṣṭhasambhavaḥ /
tasyādau tatra vaṃśe tu jagad etac carācaram //46//

それが最初のブラジャーパティで、〔ブラフマーの〕右の親指から生まれた者である。そこで、彼（ブラジャーパティ）の系譜の最初に、この動くものや動かないものから成る世界が〔生じた〕。

【Vāyu-p. 9.68-75】

athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmano 'srjat /
bhṛguṃ pulastyaṃ pulahaṃ kratum āṅgirasam tathā //68//
marīciṃ dakṣam atriṃ ca vasiṣṭhaṃ caiva mānasam /
nava brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ //69//
teṣāṃ brahmātmakānāṃ vai sarveṣāṃ brahmavādinām /70ab

それから彼は、自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。彼らは 9 人のブラフマーとしてプラナ聖典に定められている。彼らは皆、ブラフマー自身であり、ヴェーダに関して語れる者である。

tato 'srjat punar brahmā rudraṃ roṣātmasambhavam //70cd//
saṃkalpaṃ caiva dharmam ca pūrveṣāṃ api pūrvajāḥ /71ab

そして、祖先の中の祖先ブラフマーはさらに、自身の怒りから生まれたルドラと、サンカルパとダルマを創った。

agre sasarija vai brahmā mānasān ātmanaḥ samān //71cd//
sanandanam sasanakam vidvāṃsam ca sanātanam /
sanatkumāram ca vibhum sanakam ca sanandanam //72//

na te lokeṣu sarjjante²⁴⁸ nirapekṣāḥ sanātanāḥ /73ab

初めに、ブラフマーは自身に似た心から生まれた息子たち、サナダナとササナカと博識なサナータナと遍在するサナトクマーラを創った。彼らは、世界〔の

²⁴⁸ Ā では sarjjante となっているが、英訳を参照し、N 版の sarjjante を採用した。

創造〕に無関心であり、永遠であるので〔創造を〕もたらさない。

sarve te hy āgatajñānā vītarāgā vimatsarāḥ //73cd//

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokavṛttānukāraṇāt /

hiraṇyagarbho bhagavān parameṣṭhī hy acintayat //74//

tasya roṣāt samutpannaḥ puruṣo 'rkkasamadyutiḥ /

arddhanārīnaravapus tejasā jvalanopamaḥ //75//

彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように、彼らが、世界の〔生産〕活動に無関心であったので、金色の胎児である神パラメーシュティンは熟考した。彼の怒りから人が生まれた。〔その者は〕太陽に等しい輝きをしており、半身が女性である男性の姿であり、炎によって非常に輝くようであった。

【Viṣṇu-p. 1.7.4-8】

yadāśya tāḥ prajāḥ sarvā na vyavardhanta dhīmataḥ /

athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmāno 'srjat //4//

この賢者（ブラフマー）の〔創造した〕それら全ての生類が増えなかったので、〔ブラフマーは〕自分に似た心から生まれた他の息子たちを創った。

bhṛguṃ pulastyam pulahaṃ kratum aṅgirasam tathā /

marīciṃ dakṣam atriṃ ca vasiṣṭhaṃ²⁴⁹ caiva mānasān²⁵⁰ //5//

すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。

nava brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ //6//

彼らは9人のブラフマーとしてプラーナ聖典において定められている。

khyātiṃ bhūtiṃ ca sambhūtiṃ kṣamāṃ prītiṃ tathaiva ca /

sannatiṃ ca tathaivorjjām anasūyāṃ tathaiva ca //7//

prasūtiṃ ca tataḥ sṛṣṭvā dadau teṣāṃ mahātmanām /

patnyo bhavadhvam ity uktvā teṣāṃ eva tu dattavān //8//²⁵¹

まさに同様に、キヤーティ、ブーティ、サンブーティ、クシャマー、プリーティ、サンナティ、ウールツジャー、アナスーヤー、プラスーティを創り、「偉大な魂を持つ彼らの妻になれ」と言って、彼女らの創造者（ブラフマー）は〔9人の聖仙に彼女たちを〕与えた。

²⁴⁹ H版では vasiṣṭhaṃ となっているが、N版の vasiṣṭham を採用した。

²⁵⁰ H版では mānasam となっているが、英訳を参照し、N版の mānasān を採用した。

²⁵¹ H版では 7-8 偈が欠如している。

F3. その他の者たちの創造

【Liṅga-p. 1.41.40-41】

krodhāviṣṭasya netrābhyām prāpatann aśrubindavaḥ /
tatas tebhyo 'śrubim̐dubhyo²⁵² bhūtāḥ pretās tadābhavan //40//

怒りに満ちた〔ブラフマーの〕両目から、涙の滴りが落ちた。その涙の滴りから、ブータ（悪鬼）やプレータ（屍鬼）が生じた。

sarvāms tām agraṇ dṛṣṭvā bhūtapretaniśācarān /
aniṃdata tadā devo brahmātmānam ajo vibhuḥ //41//

ブータやプレータ、ニシャーチャラ（夜行鬼）など全ての最初に生まれた者たちを見て、アジャ（生まれない²⁵³）神であるブラフマー神は、自身を責めた。

【Varāha-p. 2.47】

devās ca dānavās caiva gandharvvoragapakṣiṇaḥ /
sarve dakṣasya kanyāsu jātāḥ paramadhārmikāḥ //47//

神やダーナヴァ、ガンダルヴァ、蛇、鳥、という高德なもの全てがダクシャの娘たちから生まれた。

第7項 構成要素 G の分析

G は、サーンキヤ・ヨーガ哲学的記述という構成要素である。

構成要素 G1（トリグナに関する記述）では、Mārkaṇḍeya-p. 47.3 と Viṣṇu-p. 1.7.2 において、全てのものはトリグナから成っているというサーンキヤ哲学的な世界観を述べている。Skanda-p. 7.2.15-16 では、ブラフマー神の生類創造において、それぞれのグナからそれぞれのグナに見合う人々が創られるべきであると説いている。

G3（ヨーガに関する記述）では、シヴァ神が男女に分裂する手段としてヨーガを用いている。他の神話には見られない独特な記述である。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

G1. トリグナに関する記述

【Mārkaṇḍeya-p. 47.3】

devādyaḥ sthāvarāmtās ca traiguṇyaviṣayāḥ smṛtāḥ /
evam bhūtāni sṛṣṭāni sthāvarāṇi carāṇi ca //3//

²⁵² 原文 (N 版) では tebhyośrubim̐dubhyo となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、tebhyo 'śrubim̐dubhyo とした。

²⁵³ 一般的な生殖によって生まれたのではない者という意味である。

神々を始めとして動かないものまでが、トリグナから成るものの対象であると知られる。このように、〔ブラフマー神によって〕動くものや動かないものという存在が創られた。

【Viṣṇu-p. 1.7.2】

te sarve samavarttanta ye mayā prāg udāhṛtāḥ²⁵⁴ /

devādyaḥ sthāvarāntās ca traiguṇyaviṣaye sthitāḥ //2//

彼らは皆、以前に私が言ったように生じた。神々を始めとして動かないものまでがトリグナから成るものの対象である。

【Skanda-p. 7.2.15-16】

rajaṇīpāḥ sattvarūpās tamorūpās ca ye narāḥ /

sarve te bhavatā kārya guṇatrayavibhāgataḥ //15//

yadā te tāmasaiḥ kārya tadā raudro bhava svayam /

yadā te rājasaiḥ kārya tadā tvam rājaso bhava /

sāttvikais te yadā kārya tadā tvam sāttviko bhava //16//

ラジャスの形や、サットヴァの形、タマスの形の人間たちは皆、あなた（ブラフマー）によって、グナの3要素から〔創造〕されるべきである。彼らがタマスの的なものによって創られる時、自身でルドラの的なものとなれ。彼らがラジャスの的なもの〔によって創られる〕時、汝はラジャスの的なものとなれ。彼らがサットヴァ的的なもの〔によって創られる〕時、汝はサットヴァ的的なものとなれ。

G3. ヨーガに関する記述

【Liṅga-p. 1.41.11】

athārdhamātrāṇ kalyāṇīm ātmanāḥ parameśvarīm /

bubhuje yogamārgena vṛddhyartham jagatām śivaḥ //11//

それから、世界の繁栄のために、シヴァはヨーガの手段によって〔分裂し〕、自身の半分の部分であり、安寧をもたらすパラメーシュヴァリーを享受した。

²⁵⁴ H 版では udīritāḥ となっている。訳はほぼ同じである。

第 8 項 構成要素 H の分析

構成要素 H（創造の過程でブラフマーが怒る）は、アルダナーリーシュヴァラを生み出すエネルギーとしてブラフマー神の怒りを述べたものと考えられる。

H①（サナンダナなどが創造に無関心なので、ブラフマー神が怒る）では、ブラフマー神によってそれまでに創られた者たちが創造に無関心だったために、創造が進まず、ブラフマー神が怒っている。その者たちに関して「未来の知識を持つ」、「執着から離れている」、「嫉妬しない」、「シヴァ神への瞑想に専心する」など、苦行者や宗教活動者としての良い特質が述べられている。ここでは、そのような者たちだけでなく、創造行為、すなわち子孫繁栄を行なう者たちも必要であるところを述べていると考えられる。H②（創造が進まず、自身に対し、ブラフマー神が怒る）では、苦行しても繁栄せず、自分の涙からはブータやプレータなどが生まれてしまい、ブラフマー神が自分に対して怒っている。この記述の続きは構成要素 I1②（アルダナーリーシュヴァラの出現：ブラフマー神が怒り、生命（呼吸）を捨てたその口から、ルドラが生まれる）になるのだが、そこでは、怒ったブラフマー神が捨てた生命（呼吸）からルドラが生まれている。涙などではなく、ブラフマー神の生命そのものを受け継ぐことで、ルドラに創造者の役割が移行したと考えることもできる。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

①サナンダナなどが創造に無関心なので、ブラフマー神が怒る

【Mārkaṇḍeya-p. 47.8-10】

na te lokeṣu sajjanto nirapekṣāḥ samāhitāḥ /
sarve te 'nāgatajñānā vītarāgā vimatsarāḥ //8//

彼ら〔サナンダナなど〕は、世界に関わることなく、無関心で〔自身の事に〕専心していた。彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokasṛṣṭau mahātmanah /
brahmaṇo 'bhūn mahākrodhas tatrotpanno 'rkasannibhaḥ //9//
arddhanārīnaravapuḥ puruṣo 'tīsarīravān /
vibhajātmānam ity uktvā sa tadāntardadhe tataḥ //10//

このように、彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは、大きな怒りを感じた。そこから、太陽に等しく、大きな体を持ち、半身が女性である男性の姿の者が生まれた。「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、それから彼（ブラフマー）は消えた。

【Padma-p. 1.3.169-171】

sanaṃdanādayo ye ca pūrvam sṛṣṭās tu vedhasā /

na te lokeṣv asajjanta nirapekṣāḥ prajāsu te //169//

サナンダナなど、創造者によって以前に創られた彼らは、その世界のにおける生類〔の創造〕に無関心で、創造しなかった。

sarve hy āgatavijñānā vītarāgā vimatsarāḥ /

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokasṛṣṭau mahātmanaḥ //170//

brahmaṇo 'bhūn²⁵⁵ mahān krodhas trailokyadahanakṣamaḥ /

tasya krodhāt samudbhūtaṃ jvālāmālāvadīpitam //171//

まさに全ての者たちは、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように、彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは三界を燃やせるほど大きな怒りを感じた。彼の怒りから燃える炎の輪が生じた。

【Śiva-p. 2.1.15.50-51】

mayā jñaptā api²⁵⁶ ca te saṃsāravimukhā budhāḥ /

śivadyānaikamanaso na sṛṣṭo cakrire matim //50//

私によって指示されたにもかかわらず、それらの知者たちは世界²⁵⁷から顔を背けていた。創造行為をせず、シヴァに対する瞑想に専心し、信仰していた。

pratyuttaraṃ ca tair dattaṃ śrutvāhaṃ²⁵⁸ munisattama /

akārṣaṃ krodham atyugraṃ moham āptaś ca nārada //51//

そして、私は彼らによってなされた返答を聞いて、非常に怒った。最高の聖者よ。ナーラダよ。そして困惑した。

【Vāyu-p. 9.73cd-75】

sarve te hy āgataijñānā vītarāgā vimatsarāḥ //73cd//

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokavṛttānukāraṇāt /

hiraṇyagarbho bhagavān parameṣṭhī hy acintayat //74//

tasya roṣāt samutpannaḥ puruṣo 'rkkasamadyutiḥ /

arddhanārīnaravapus tejasā jvalanopamaḥ //75//

彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように、彼らが、世界の〔生産〕活動に無関心であったので、金色の胎児である神パラ

²⁵⁵ 原文（N版）では brahmaṇobhūn となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、brahmaṇo 'bhūn とした。

²⁵⁶ N版では āpa となっているが、ここでは K版を採用した。

²⁵⁷ 世俗的なことを指す。英訳によると創造行為とある。

²⁵⁸ K版では śrutvā 'haṃ となっている、これは śrutvā ahaṃ の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N版の表記を採用した。

メーシェティンは熟考した。彼の怒りから人が生まれた。〔その者は〕太陽に等しい輝きをしており、半身が女性である男性の姿であり、炎によって非常に輝くようであった。

【Viṣṇu-p. 1.7.9-11】

sanandanādayo ye ca pūrvasṛṣṭās²⁵⁹ tu vedhasā /

na te lokeṣv asajjanta nirapekṣāḥ prajāsu te //9//

サナンダナなど、創造者（ブラフマー）によって以前に創られた彼らは、世界における生類〔の創造〕に無関心で、創造しなかった。

sarve te 'bhyāgatajñānā²⁶⁰ vītarāgā vimatsarāḥ /

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokasṛṣṭau²⁶¹ mahātmanaḥ //10//

brahmaṇo 'bhūn²⁶² mahān krodhas²⁶³ trailokyadahanakṣamaḥ /

tasya krodhāt samudbhūtajvālāmālātīdīpitam²⁶⁴ /

brahmaṇo 'bhūt²⁶⁵ tadā sarvaṃ trailokyam akhilaṃ mune //11//

彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは、三界を燃やすことが出来るほど大きな怒りを感じた。彼の怒りから、燃える火炎の輪が生じ、三界全てに満ちた。聖仙よ。

②創造が進まず、自身に対し、ブラフマー神が怒る

【Liṅga-p. 1.41.39-41】

tasyaivaṃ tapyamānasya na kiṃcit samavartata /

tato dīrghena kālena duḥkhāt krodho vyajāyata //39//

彼がこのような苦行しても、何も繁栄しなかった。その後、長い時間の後、〔ブラフマーの〕嘆きから怒りが生じた。

krodhāviṣṭasya netrābhyāṃ prāpatann aśrubindavaḥ /

²⁵⁹ H 版では pūrvam sṛṣṭā となっているが、語形変化を考慮し、N 版の pūrvasṛṣṭās を採用した。

²⁶⁰ H 版では hy āgatajñānā となっている。訳はほぼ同じである。

²⁶¹ H 版では lokasṛṣṭo となっているが、英訳を参照し、N 版の lokasṛṣṭau を採用した。

²⁶² N 版では brahmaṇobhūn となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、brahmaṇo 'bhūn とした。

²⁶³ H 版では mahākrodas となっている。訳はほぼ同じである。

²⁶⁴ H 版では samudbhūtajvālāmālāvidīpitam となっているが、N 版の samudbhūtajvālāmālātīdīpitam を採用した。

²⁶⁵ N 版では brahmaṇobhūt となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、brahmaṇo 'bhūt とした。

tatas tebhyo 'śrubimḍubhyo²⁶⁶ bhūtāḥ pretās tadābhavan //40//

怒りに満ちた〔ブラフマーの〕両目から、涙の滴りが落ちた。その涙の滴りから、ブータやプレータが生じた。

sarvāṃs tām agraḥjān dṛṣṭvā bhūtapretaniśācarān /

animḍata tadā devo brahmātmānam ajo vibhuḥ //41//

ブータやプレータ、ニシャーチャラなど全ての最初に生まれた者たちを見て、アジャ神であるブラフマー神は、自身を責めた。

第9項 構成要素Ⅰの分析

構成要素Ⅰ（アルダナーリーシュヴァラの出現）は、アルダナーリーシュヴァラが登場する場面についての記述である。以下に、Ⅰの構成要素をまとめた表を示す（表12）。

²⁶⁶ 原文（N版）では *tebhyośrubimḍubhyo* となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、*tebhyo 'śrubimḍubhyo* とした。

表 12 構成要素 I におけるアルダナーリーシュヴァラの描写²⁶⁷

分類	文献名	誕生時の状況	誕生者についての描写
I1①	Padma-p. 1.3.172-173	ブラフマー神が怒って眉をしかめた額から誕生	真昼の太陽に等しい光、半身が女性である男性の姿、巨大な身体を具えたルドラ
	Varāha-p. 2.48-49	ブラフマー神が怒って眉をしかめた額から誕生	半身が女性である男性の姿、大きくて非常に恐ろしい姿、息子ルドラ
	Viṣṇu-p. 1.7.12-13	ブラフマー神が怒って眉をしかめた額から誕生	真昼の太陽に等しい輝き、半身が女性である男性の姿、獐猛で大きな身体を具えたルドラ
I1②	Līṅga-p. 1.41.42	ブラフマー神が怒りに満ち、生命（呼吸）を捨てた時に、ブラフマー神の口から誕生	呼吸から成るルドラ
I1③	Kūrma-p. 1.11.2	ブラフマー神が苦行をした時に、ブラフマー神の鼻から誕生	世界を破壊する炎から生まれた者、三叉戟を持つイーシャーナ、3つの目を持つルドラ
I1④	Skanda-p. 7.2.9.5-6	ブラフマー神が苦行し、アタルヴァヴェーダの唱句を創った時、ブラフマー神の口から誕生	恐ろしい姿をした者、破壊から生まれた者、見るのが困難な（醜い）者、大きな恐怖を感じさせる者、半身に女性を持つ男性の姿、ルドラ
I1⑤	Līṅga-p. 1.41.7-10	シヴァ神がブラフマー神の苦行に満足し、ブラフマー神の願いを聞き入れるために、ブラフマー神の額の中央を貫いて、女性と男性を兼ね備えた姿になる	女性と男性を兼ね備えた姿、ブラフマー神の息子マハーデーヴァ、アルダナーリーシュヴァラ
I1⑥	Śiva-p. 2.1.15.55-56	創造のために苦行しているブラフマー神の両眉と鼻の間にあるアヴィムクタから誕生	マヘーシャの光の海であり、部分を完全にそなえた世界の神であるアルダナーリーシュヴァラ
I1⑦	Mārkaṇḍeya-p. 47.9-10	ブラフマー神の怒りから誕生	太陽に等しい、大きな身体を持つ、半身が女性である男性の姿の者
	Vāyu-p. 9.73cd-75	ブラフマー神の怒りから誕生	太陽に等しい輝き、半身が女性である男性の姿、炎によって非常に輝いている
I2	Śiva-p. 3.3.7-8	ブラフマー神の苦行に満足したシヴァ神が願いを叶える姿を取る	願いを叶える姿、アルダナーリーナラ

²⁶⁷ 横軸の左から、構成要素名、文献名、誕生時の状況：アルダナーリーシュヴァラが生まれた時、どのような場面であり何が起こったかをまとめて示したもの、誕生者についての描写：アルダナーリーシュヴァラについてどのように描かれているかをまとめたものである。

I3	Liṅga-p. 1.5.28	創造の初めにブラフマーがアルダナーリーシュヴァラを見た	アルダナーリーシュヴァラ
	Liṅga-p. 1.70.324-325	最初からアルダナーリーナラ	太陽に等しい輝き、半身が女性である男性の姿、輝きにおいて炎に等しい者、マハーデーヴァ神、ブルシャ
	Skanda-p. 1.2.22.35cd-36ab	ブラフマーが生まれた時、アルダナーリーシュヴァラが前に立っていた	全てに遍在し留まるアルダナーリーシュヴァラ
I4	Liṅga-p. 1.99.8	リングと台座の結合体であるアルダナーリーシュヴァラ	リングと台座の結合体であるアルダナーリーシュヴァラ

構成要素 I1 (ブラフマー神からアルダナーリーシュヴァラが現れる) における① (ブラフマー神の怒りにより、ルドラが額から生まれる)、② (ブラフマー神が怒り、生命 (呼吸) を捨てたその口から、ルドラが生まれる)、③ (ブラフマー神の苦行中にルドラが鼻から生まれる)、④ (ブラフマー神が苦行中に唱句を発した時、口からアルダナーリーシュヴァラが生まれる)、⑤ (ブラフマー神の苦行に満足したシヴァ神が、ブラフマー神の額を貫き、アルダナーリーシュヴァラとして出現する)、⑥ (苦行によってアヴィムクタからアルダナーリーシュヴァラが生まれる)、および⑦ (ブラフマー神の怒りから、アルダナーリーシュヴァラが生まれる) では、ブラフマーの何らかの動きにより、アルダナーリーシュヴァラが出現している。構成要素 I2 (ブラフマー神の苦行に満足したシヴァ神が、アルダナーリーシュヴァラに変化する) と I3 (元々、アルダナーリーシュヴァラとして存在している) では、ブラフマー神が創造行為を行なっている間に、アルダナーリーシュヴァラが出現するが、ブラフマー神の行為を出現の原因としていない。構成要素 I4 (リング (シヴァ) と台座 (女神) の結合体として、アルダナーリーシュヴァラになる) では、ブラフマー神は登場しない。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

I1. ブラフマー神からアルダナーリーシュヴァラが現れる

①ブラフマー神の怒りにより、ルドラが額から生まれる

【Padma-p. 1.3.172-173】

brahmaṇas tu tadā jyotis trailokyam akhilaṃ dahat /
bhrukuṭīkuṭilāt tasya lalāṭāt krodhadīpitāt //172//
samutpannas tadā rudro madhyāhñārkaśamaprabhaḥ /
arddhanārīnaravapuḥ pracaṇḍotiśarīravān²⁶⁸ //173//

そして、ブラフマーの光は三界全てを燃やせる〔力があつた〕。怒りに燃え、

²⁶⁸ 意味が不明であるため、英訳を参照し、「巨大な体を具えた」とした。

眉をしかめた彼の額から、その時、真昼の太陽に等しい光を持ち、半身が女性である男性の姿をしており、巨大な体を具えたルドラが生まれた。

【Varāha-p. 2.48-49】

yo 'sau rudreti vikhyātaḥ putraḥ krodhasamudbhavaḥ /

bhrukuṭikuṭilāt tasya lalātāt parameṣṭhinaḥ //48//

かのルドラと呼ばれる息子は、かのパラメーシュティン（最高神、ブラフマー）の眉をしかめた額から、怒りによって生まれた。

arddhanārīnaravapuḥ pracaṇḍo 'tibhayaṅkaraḥ /

vibhajātmānam ity uktvā brahmā cāntardadhe punaḥ //49//

〔それは〕半身が女性である男性の姿をしており、大きく、非常に恐ろしい姿であった。「〔汝〕自身を分けよ。」と言ってブラフマーは再び消えた。

【Viṣṇu-p. 1.7.12-13】

bhrakuṭikuṭilāt tasya lalātāt krodhadīpitāt /

samutpannas tadā rudro madhyāhnārkasamaprabhaḥ //12//

ardhanārīnaravapuḥ pracaṇḍo 'tīsarīravān /

vibhajātmānam ity uktvā taṁ brahmāntardadhe tataḥ //13//

怒りに燃え、眉をしかめた彼の額から、その時、真昼の太陽に等しい輝きを持つ、半身が女性である男性の姿の、獯猛で大きな体を具えたルドラが生まれた。彼に「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、それからブラフマーは消えた。

②ブラフマー神が怒り、生命（呼吸）を捨てたその口から、ルドラが生まれる

【Līṅga-p. 1.41.42】

jahau prāṇāṁś ca bhagavān krodhāviṣṭaḥ prajāpatiḥ /

tataḥ prāṇamayo rudraḥ prādurāsīt prabhor mukhāt //42//

怒りに満ちた創造神（ブラフマー）は〔自身の〕生命（呼吸）を捨てた。そして、神の口から、呼吸から成るルドラが現れた。

③ブラフマー神の苦行中にルドラが鼻から生まれる

【Kūrma-p. 1.11.2】

tasyaiva tapato vakrād rudraḥ kālāgnisambhavaḥ /

trīśūlapāṇir īśānaḥ prādurāsīt trilocaṇaḥ //2//

ちょうど彼（ブラフマー）が苦行をした時、鼻から、世界を破壊する炎から生まれ三叉戟を持つイーシャーナであり 3 つの目を持つルドラが生まれた。

④ブラフマー神が苦行中に朗誦した時、口からアルダナーリーシュヴァラが生まれる

【Skanda-p. 7.2.9.5-6】

tapas tepe prajānātho vedoccāraṇataparāḥ /

atharvavedoccaraṇam yāvac cakre pitāmahaḥ //5//

ヴェーダの朗唱に通曉したピターマハである創造主は、苦行をし、アタルヴァヴェーダを朗誦した。

mukhād rudraḥ samabhavad raudrarūpo bhavāpahaḥ /

arddhanārīnaravapur duṣprekṣyo 'tibhayaṅkaraḥ²⁶⁹ //6//

〔ブラフマーの〕口から、恐ろしい姿をした者であり、破壊から生まれた者であり、見るのが困難な者であり、大きな恐怖を感じさせる者であり、半身が女性である男性の姿のルドラが生まれた。

⑤ブラフマー神の苦行に満足したシヴァ神が、ブラフマー神の額を貫き、アルダナーリーシュヴァラとして出現する

【Liṅga-p. 1.41.7-10】

na vyavardhampta loka 'smin prajāḥ kamalayoninā /

vṛddhyartham bhagavān brahmā putrair vai mānasaiḥ saha //7//

duścaram vicacāreṣam samuddiśya tapaḥ svayam /

tuṣṭas tu tapasā tasya bhavo jñātvā sa vāñchitam //8//

lalāṭamadhyam nirbhidyā brahmaṇaḥ puruṣasya tu /

putras te 'ham²⁷⁰ iti procya śrīpūṣṇrūpo 'bhavat²⁷¹ tadā //9//

蓮から生まれた者によって〔創られた〕生類が、この世界で繁栄しなかったの
で、ブラフマー神は繁栄のために、心から生まれた息子たちと共に、〔シヴァ〕
神に対し、自身で厳しい苦行をした。そして、かの〔シヴァ〕神は、彼の苦行
に満足し、〔ブラフマーの〕願いを知り、ブラフマー神の額の中央を貫き、「私
はお前の息子である。」と言って、女性と男性を〔兼ね備えた〕姿になった。

tasya putro mahādeva hy ardhanārīśvaro 'bhavat²⁷² /

dadāha bhagavān sarvaṁ brahmāṇam ca jagadgurum //10//

²⁶⁹ N版では 'tibhayaṅkaraḥ となっている。

²⁷⁰ 原文 (N版) では teham となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、te 'ham とした。

²⁷¹ 原文 (N版) では śrīpūṣṇrūpobhavat となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、śrīpūṣṇrūpo 'bhavat とした。

²⁷² 原文 (N版) では ardhanārīśvarobhavat となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、ardhanārīśvaro 'bhavat とした。

彼（ブラフマー）の息子マハーデーヴァはまさにアルダナーリーシュヴァラになった。神（アルダナーリーシュヴァラ）は、全世界の父ブラフマーを燃やした。

⑥苦行によってアヴィムクタからアルダナーリーシュヴァラが生まれる

【Śiva-p. 2.1.15.55-56】

tapasyataś ca sṛṣṭyartham bhruvor ghrāṇasya²⁷³ madhyataḥ /

avimuktābhidhād²⁷⁴ deśāt svakīyān me viśeṣataḥ //55//

trimūrtinām maheśasya prādur āsīd ghrṇānidhiḥ /

arddhanārīśvaro²⁷⁵ bhūtvā pūrṇāṃśaḥ²⁷⁶ sakaleśvaraḥ //56//

そして、創造のために苦行することによって、私の両眉と鼻の間にあるアヴィムクタ²⁷⁷という名の場所（聖地）自身から、三神の〔うちの 1 人である〕マハーシャの光の海が特別に現れ出た。〔それは、〕部分を完全にそなえた世界の神アルダナーリーシュヴァラになった²⁷⁸。

⑦ブラフマー神の怒りから、アルダナーリーシュヴァラが生まれる

【Mārkaṇḍeya-p. 47.9-10】

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokasṛṣṭau mahātmanaḥ /

brahmaṇo 'bhūn mahākrodhas tatrotpanno 'rkasannibhaḥ //9//

arddhanārīnaravapuḥ puruṣo 'tīśārīravān /

vibhajātmānam ity uktvā sa tadāntardadhe tataḥ //10//

このように、彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは、大きな怒りを感じた。そこから、太陽に等しく、大きな体を持ち、半身が女性である男性の姿の者が生まれた。「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、それから彼（ブラフマー）は消えた。

²⁷³ N 版では ghrāṇasya となっているが、言葉の意味を考え、英訳を参照し、K 版の ghrāṇasya を採用した。

²⁷⁴ N 版では avimuktābhi dhād (分書) となっているが、英訳を参照し、K 版の avimuktābhidhād を採用した。

²⁷⁵ N 版では ārdhhanārīśvaro となっているが、言葉の意味を考え、英訳を参照し、K 版の arddhanārīśvaro を採用した。

²⁷⁶ N 版では pūrṇāṃśas となっている。

²⁷⁷ ヴァーラーナシーにある聖地の名前である。

²⁷⁸ 訳が複雑になってしまうため、文章を区切った。

【Vāyu-p. 9.73cd-75】

sarve te hy āgatajñānā vītarāgā vimatsarāḥ //73cd//

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokavṛttānukāraṇāt /

hiraṇyagarbho bhagavān parameṣṭhī hy acintayat //74//

tasya roṣāt samutpannaḥ puruṣo 'rkkasamadyutiḥ /

arddhanārīnaravapus tejasā jvalanopamaḥ //75//

彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように、彼らが、世界の〔生産〕活動に無関心であったので、金色の胎児である神パラメーシュティンは熟考した。彼の怒りから人が生まれた。〔その者は〕太陽に等しい輝きをしており、半身が女性である男性の姿であり、炎によって非常に輝くようであった。

I2. ブラフマー神の苦行に満足したシヴァ神が、アルダナーリーシュヴァラに変化する

【Śiva-p. 3.3.7-8】

tīvreṇa tapasā tasya saṃyuktasya svayaṃbhavaḥ /

acireṇaiva kālena tutoṣa sa śivo drutam //7//

かのスヴァヤンブーが、厳しい苦行に専念していたので、すぐさま、かのシヴァ神は満足した。

tataḥ pūrṇacidīśasya mūrtim āviśya kāmādām /

arddhanārīnaro bhūtvā tato brahmāntikaṃ haraḥ //8//

そこで、全知の神（シヴァ）が願いを叶える姿をとって、ハラ（シヴァ）は半身が女性である男性になり、ブラフマーに近づいた。

I3. 元々、アルダナーリーシュヴァラとして存在している

【Liṅga-p. 1.5.28】

ardhanārīśvaraṃ drṣṭvā sargādaḥ kanakāṃḍajaḥ /

vibhajasveti cāhādaḥ yadā jātā tadābhavat //28//

創造の初めに、黄金の卵から生まれた者である創造者がアルダナーリーシュヴァラを見て、「〔汝を〕分けよ」と言った時に、彼はそのように〔男女2つに〕なった。

【Liṅga-p. 1.70.324-325】

yasmād uktaḥ sthito 'smīti²⁷⁹ tasmāt sthāṇur iti smṛtaḥ /

²⁷⁹ 原文(N版)では sthitosmīti となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、sthito 'smīti とした。

eṣa devo mahādevaḥ puruṣo 'rkasamadyutiḥ²⁸⁰ //324//

ardhanārīnaravapus tejasā jvalanopamaḥ /

svecchayāsau dvidhā bhūtaḥ prthak strī puruṣaḥ prthak //325//

「私は留まる (sthita)」と言ったので、スターヌ (sthānu) として知られる。このマハーデーヴァ神プルシャは、太陽に等しい輝きを持ち、半身が女性である男性の姿をしており、輝きにおいて炎に等しい者であった。自身の意思に従って、その者は、別々に女性と男性の2つになった。

【Skanda-p. 1.2.22.35cd-36ab】

ahaṃ tv ādau yadā jātas tadā paśyaṃ puraḥ sthitam //35cd//

ardhanārīśvaraṃ devaṃ vyāpya viśvam avasthitam /36ab

私 (ブラフマー) が最初に生まれた時、[私の] 前に立っている、全てに遍在し留まるアルダナーリーシュヴァラ神を見た。

I4. リンガ (シヴァ) と台座 (女神) の結合体として、アルダナーリーシュヴァラになる

【Linga-p. 1.99.8】

liṃgavedisamāyogād ardhanārīśvaro 'bhavat²⁸¹ /

brahmāṇaṃ vidadhe devaṃ agre putraṃ caturmukham //8//

リンガと台座の結合体によって、アルダナーリーシュヴァラになった。[アルダナーリーシュヴァラは、] 最初に息子として四面のブラフマー神を創った。

第10項 構成要素Jの分析

構成要素 J (アルダナーリーシュヴァラが男女に分裂する過程) は、アルダナーリーシュヴァラがどのように男性半身と女性半身に分裂したかを述べるものである。

J1 (ブラフマー神の働きかけによりアルダナーリーシュヴァラが分裂する) には、創造者の役割の移行がうかがえる。① (ブラフマー神から分裂するように言われる) では、ルドラ (シヴァ神) が、ブラフマー神から自身を分けるように促され、分裂する。その後、多くの記述では、ブラフマー神はそこから消えてしまう。これは、男女に分裂する生類の創造者という役割が、ブラフマー神からシヴァ神へ移行したことを示していると

²⁸⁰ 原文 (N 版) では puruṣorkasamadyutiḥ となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、puruṣo 'rkasamadyutiḥ とした。

²⁸¹ 原文 (N 版) では ardhanārīśvarobhavad だが、アヴァグラハ記号の省略と考え、ardhanārīśvaro 'bhavat とした。

考えられる。②（ブラフマー神の信仰を受け、男女別々になる）と③（ブラフマー神の苦行に満足し、シヴァ神が分裂する）も、ブラフマー神の信仰や苦行を反映し、分裂している。ブラフマー神の意図をシヴァ神が汲み取り、分裂しているため、創造者の役割の移行が暗示されているといえることができるだろう。

J2（自身の意思で分裂する）と J3（ヨーガによって分裂する）においては、ブラフマー神の介入はなく、シヴァ神が独自に判断し分裂している。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

J1. ブラフマー神の働きかけによりアルダナーリーシュヴァラが分裂する

①ブラフマー神から分裂するように言われる

【Kūrma-p. 1.11.3-4】

arddhanārīnaravapuḥ duṣprekṣyo 'tibhayaṃkaraḥ /
vibhajātmānam ity uktvā brahmā cāntarddadhe bhayāt //3//

半身が女性である男性の姿の者は、非常に恐ろしく見るのが困難だった。ブラフマーは「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、恐れから消えた。

tathokto 'sau dvidhā strītvam puruṣatvam tathākarot /
bibheda puruṣatvañ ca daśadhā caikadhā punaḥ //4//

そして、このように言われたその者（ルドラ）は、女性要素と男性要素の2つになった。そして男性要素をさらに 11 に分けた。

【Liṅga-p. 1.5.28】

ardhanārīśvaram ḍṛṣṭvā sargādaḥ kanakāṃḍajaḥ /
vibhajasveti cāhādaḥ yadā jātā tadābhavat //28//

創造の初めに、黄金の卵から生まれた者である創造者がアルダナーリーシュヴァラを見て、「〔汝を〕分けよ」と言った時に、彼はそのように〔男女2つに〕なった。

【Liṅga-p. 1.99.12】

vibhajasveti viśveśam viśvātmānam ajo vibhuḥ /
sasarja devīm vāmāṃgāt patnīm caivātmanaḥ samām //12//

「分けよ」とアジャである遍在者（ブラフマー）は、世界の神であるヴィシュヴァートマン（全てのアートマン、シヴァ）に〔言った〕。そして〔シヴァは〕左半身から自分に等しい妻である女神を創った。

【Mārkaṇḍeya-p. 47.9-10】

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokasṛṣṭau mahātmanaḥ /

brahmaṇo 'bhūn mahākrodhas tatrotpanno 'rkasannibhaḥ //9//

arddhanārīnaravapuḥ puruṣo 'tīsarīravān /

vibhajātmānam ity uktvā sa tadāntardadhe tataḥ //10//

このように、彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは、大きな怒りを感じた。そこから、太陽に等しく、大きな体を持ち、半身が女性である男性の姿の者が生まれた。「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、それから彼（ブラフマー）は消えた。

【Padma-p. 1.3.174】

vibhajātmānam ity uktvā taṁ brahmāntardadhe²⁸² tataḥ /

tathoktvo 'sau²⁸³ dvidhā strītvam puruṣatvam tathākarot //174//

彼に「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、ブラフマーは消えた。このように言われ、その者は女性要素と男性要素の2つを創った。

【Skanda-p. 7.2.9.7】

vibhajātmānam ity uktvā brahmā cāntardadhe²⁸⁴ bhayāt /

tathokto 'sau dvidhā strītvam puruṣatvam tathā 'karot //7//

「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、ブラフマーは恐れから消えた。このように言われ、その者は、女性要素と男性要素の2つを創った。

【Varāha-p. 2.49-50】

arddhanārīnaravapuḥ pracaṇḍo 'tibhayaṅkaraḥ /

vibhajātmānam ity uktvā brahmā cāntardadhe punaḥ //49//

〔それは〕半身が女性である男性の姿をしており、大きく、非常に恐ろしい姿であった。「〔汝〕自身を分けよ。」と言ってブラフマーは再び消えた。

tathokto 'sau dvidhā strītvam puruṣatvam cakāra saḥ /

bibheda puruṣatvam ca daśadhā caikadhā ca saḥ //50//

彼はそのように言われ、女性要素と男性要素の2つになった。彼は、男性要素を11に分けた。

²⁸² 原文（N版）では brahmāntardadheḥ となっているが、英訳を参照し、brahmāntardadhe とした。

²⁸³ 原文（N版）では tathoktvosau となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、tathoktvo 'sau とした。

²⁸⁴ N版では cāntardadhe となっている。

【Vāyu-p. 9.76-77】

sarvaṃ tejomayaṃ jātaṃ ādityasamatejasam /

vibhajātmānam²⁸⁵ ity uktvā tatraivāntaradhīyata //76//

「全てが輝いた状態で太陽に等しい輝きを持つ〔汝〕自身を分けよ。」と言って、まさにそこから〔ブラフマーは〕消えた。

evam uktvā dvidhā bhūtaḥ pṛthak strī puruṣaḥ pṛthak /

sa caikādaśadhā jajñe arddham ātmānam īśvaraḥ //77//

このように言われ、〔その者は〕別々に男性と女性の 2 つになった。かのイーシュヴァラは、自身の半分を 11 に分けた。

【Viṣṇu-p. 1.7.12-14】

bhṛakuṭīkuṭīlāt tasya lalāṭāt krodhadīpitāt /

samutpannas tadā rudro madhyāhnārkaśamaprabhaḥ //12//

ardhanārīnaravapuḥ pracaṇḍo 'tīśarīravān /

vibhajātmānam ity uktvā taṃ brahmāntardadhe tataḥ //13//

怒りに燃え、眉をしかめた彼の額から、その時、真昼の太陽に等しい輝きを持つ、半身に女性を持つ男性の姿の、獯猛で大きな体を具えたルドラが生まれた。彼に「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、それからブラフマーは消えた。

tathokto 'sau²⁸⁶ dvidhā strītvam²⁸⁷ puruṣatvam tathā 'karot /

vibheda²⁸⁸ puruṣatvam ca daśadhā caikadhā punaḥ²⁸⁹ //14//

このように言われたその者は、女性部分と男性部分の 2 つを創った。そしてさらに男性部分を 11 に分けた。

②ブラフマー神の信仰を受け、男女別々になる

【Skanda-p. 1.2.22.36cd-37ab】

dr̥ṣṭvā taṃ abruvaṃ devaṃ bhajasveti ca bhaktitaḥ //36cd//

tato nārī pṛthag jātā puruṣaś ca tathā pṛthak /37ab

彼（シヴァ）を見て、私は神に、信愛によって「崇めたまえ」と言った。それ

²⁸⁵ Ā 版では vibhajā 'tmānam となっている。これは vibhajā ātmānam の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

²⁸⁶ N 版では tathoktosau となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、tathokto 'sau とした。

²⁸⁷ H 版では strītvam となっているが、N 版の strītvam を採用した。

²⁸⁸ H 版では bibheda となっている。訳はほぼ同じである。

²⁸⁹ H 版では ca saḥ となっている。この場合、訳は「そして彼は男性部分を 11 に分けた」となる。

から、女性とは別に生まれ、男性も同様に別に〔生まれた〕。

③ブラフマー神の苦行に満足し、シヴァ神が分裂する

【Śiva-p. 3.3.11-13】

vatsa vatsa mahābhāga mama putra pitāmaha /

jñātavān asmi sarvaṃ tat tat tvatas te manoratham //11//

「愛しき者よ。最高の幸運よ。私の息子であり、ピターマハよ。汝から〔生じた〕 汝の心の中にある願いをあれもこれも全て理解した。

prajānām eva vṛddhyartham tapas taptam tvayādhunā²⁹⁰ /

tapasā tena tuṣṭo 'smi dadāmi ca tavepsitam //12//

ity uktvā paramodāraṃ svabhāvamadhuraṃ vacaḥ /

prṭhak cakāra vapuṣo bhāgād devīm śivām śivaḥ //13//

今まさに、生類の繁栄のためにあなたによって苦行がなされた。その苦行に私は満足したので、あなたの望むものを与えよう。」と、最高に慈悲深い自然で甘美な言葉を述べた。シヴァは、吉祥な体からシヴァー女神を別にした。

【Śiva-p. 7.1.16.4-6】

vatsa vatsa²⁹¹ mahābhāga mama putra pitāmaha /

jñātam eva mayā sarvaṃ tava vākyasya gauravam //4//

わが子よ、わが子よ、マハーバーガ（大きな幸福）よ。私の息子よ。ピターマハよ。あなたの言ったことの重大さは私によって全て理解された。

prajānām eva vṛddhyartham tapas taptam tvayādhunā²⁹² /

tapasā 'nena tuṣṭo 'smi²⁹³ dadāmi ca tavepsitam //5//

まさに生類の繁栄のために、今、あなたによって苦行がなされた。この苦行で私は満足した。ゆえに、お前の望むものを与えよう。

ity uktvā paramodāraṃ svabhāvamadhuraṃ vacaḥ /

sasarja vapuṣo bhāgād devīm devavaro haraḥ //6//

このように素晴らしく後期で自然で優しい言葉を言い、美しい姿をした偉大な神ハラは、〔自分の体の〕部分から女神を創った。

²⁹⁰ K 版では tvayā 'dhunā となっている。これは tvayā adhunā の連声を分かりやすく記述したものである。ここでは N 版の tvayādhunā という表記を採用した。

²⁹¹ N 版では vatsavatsa（連書）となっている。

²⁹² K 版では tvayā 'dhunā となっている。これは tvayā adhunā の連声を分かりやすく記述したものである。ここでは N 版の表記を採用した。

²⁹³ N 版では tuṣṭosmi（連書）となっている。

J2. 自身の意思で分裂する

【Liṅga-p. 1.41.43-46】

ardhanārīśvaro²⁹⁴ bhūtvā bālārkaśadyutiḥ /
tadaikādaśadhātmanam pravibhajya vyavasthitaḥ //43//

〔ルドラは〕朝日に等しい輝きを持つアルダナーリーシュヴァラとなり、それから自身を 11〔の部分〕に分けて、とどまった。

ardhenāmśena sarvātmā sasarjāsau śivām umām /
sā cāsṛjat tadā lakṣmīm durgām śreṣṭhām sarasvatīm //44//
vāmām raudrīm mahāmāyām vaiṣṇavīm vārijekṣaṇām /
kalām vikarīṇīm caiva kālīm kamalavāsinīm //45//
balavikarīṇīm devīm balapramathinīm tathā /
sarvabhūtasya damanīm sasṛje ca manonmanīm //46//

〔自分の〕半身によって、かの全てのアートマンである者（アルダナーリーシュヴァラ）は、吉祥（シヴァー）なウマーを創った。彼女は、ラクシュミーと最高の者ドゥルガー、サラスヴァティー、ヴァーマー、ラウドリー、マハーマヤー、蓮の目をした者ヴァイシュナヴィー、カラーヴィカリニー、蓮に住む者カーリー、バラヴィカリニー女神、バラプラマティニー、全存在のダマニー、マノーンマニーを創った。

【Liṅga-p. 1.70.324-325】

yasmād uktaḥ sthito 'smīti²⁹⁵ tasmāt sthāṇur iti smṛtaḥ /
eṣa devo mahādevaḥ puruṣo 'rkasamadyutiḥ²⁹⁶ //324//
ardhanārīnaravapus tejasā jvalanopamaḥ /
svecchayāsau dvidhā bhūtaḥ pṛthak strī puruṣaḥ pṛthak //325//

「私は留まる」と言ったので、スターヌとして知られる。このマハーデーヴァ神プルシャは、太陽に等しい輝きを持ち、半身が女性である男性の姿をしており、輝きにおいて炎に等しい者であった。自身の意思に従って、その者は、別々に女性と男性の 2 つになった。

J3. ヨーガによって分裂する

²⁹⁴ 原文 (N 版) では adhanārīśvaro となっているが、英訳を参照し、ardhanārīśvaro とした。

²⁹⁵ 原文 (N 版) では sthitosmīti となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、sthito 'smīti とした。

²⁹⁶ 原文 (N 版) では puruṣorkasamadyutiḥ となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、puruṣo 'rkasamadyutiḥ とした。

【Liṅga-p. 1.41.11】

athārdhamātrām kalyāṇīm ātmanah paramēśvarīm /

bubhuje yogamārgena vṛddhyartham jagatām śivah //11//

それから、世界の繁栄のために、シヴァはヨーガの手段によって〔分裂し〕、自身の半分の部分であり、安寧をもたらすパラメーシュヴァリーを享受した。

第 11 項 構成要素 K の分析

構成要素 K（男性部分が 11²⁹⁷に分かれる）は、分裂した後の男性半身についての記述である。

③（11 に分かれ、さらに黒い者や白い者などに分かれる）、④（11 に分かれ、さらに男性部分と共に女性部分も、優しい者、粗野な者、穏やかな者、黒い者、白い者などに分かれる）では、さらに様々な特徴の者に分かれると述べられており、人間の多様性と、ここから様々な人間が生まれ、繁栄していくことを示していると考えられる。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

①11 に分かれる

【Liṅga-p. 1.5.29】

tasyāś caivāṃśajāḥ sarvāḥ striyaś tribhuvane tathā /

ekādaśavidhā rudrās tasya cāṃśodbhavās tathā //29//

三界における全ての女性は彼女の部分から生まれた。同様に 11 人のルドラは、彼の部分から生まれた。

【Liṅga-p. 1.41.43】

ardhanārīśvaro²⁹⁸ bhūtvā bālārkaśadyutiḥ /

tadaikādaśadhātmānam pravibhajya vyavasthitaḥ //43//

〔ルドラは〕朝日に等しい輝きを持つアルダナーリーシュヴァラとなり、それ

²⁹⁷ ここに登場する 11 という数字は、ヴェーダ文献などにおいて、アムリタを飲んだ 33 神のうちの 11 人がルドラであるとされている[Hang 1922 p. 101]ことに由来すると思われる。このアルダナーリーシュヴァラ創造神話以外にも、11 とアルダナーリーシュヴァラを述べる偈（Liṅga-p. 1.18.30）がある。ardhanārīśarīrāya avyaktāya namonamah / ekādaśavibhedāya sthānave te namah sadā //30// 「半身が女性であり、未顕現〔だが〕、11 の異なる〔姿〕をした不動の者であるあなたに敬礼する。」

²⁹⁸ 原文（N 版）では adhanārīśvaro となっているが、英訳を参照し、ardhanārīśvaro とした。

から自身を 11〔の部分〕に分けて、とどまった。

【Liṅga-p. 1.70.326】

sa evaikādaśārdhena sthito 'sau²⁹⁹ parameśvaraḥ /

tatra yā sā mahābhāgā śaṃkarasyārdhakāyini //326//

かのパラメーシュヴァラは、〔男性〕半身を 11 にした。シャンカラ（シヴァ）の残りの半〔身〕が、かの幸運な女性である。

【Skanda-p. 1.2.22.37cd-38ab】

tasyāś caivāṃśajāḥ sarvāḥ striyas tribhuvane smṛtāḥ //37cd//

ekādaśa ca rudrāś ca puruṣāś tasya cāṃśajāḥ //38ab

そして三世界の全ての女性たちは彼女から〔体を〕分けて生まれたと言われて
いる。そして 11 人のルドラと男性たちは、彼の部分から生まれた。

【Varāha-p. 2.50】

tathokto 'sau dvidhā strītvam puruṣatvam cakāra saḥ /

bibheda puruṣatvam ca daśadhā caikadhā ca saḥ //50//

彼はそうに言われ、女性要素と男性要素の 2 つになった。彼は、男性要素
を 11 に分けた。

【Vāyu-p. 9.77】

evam uktvā dvidhā bhūtaḥ pṛthak strī puruṣaḥ pṛthak /

sa caikādaśadhā jajñe arddham ātmānam īśvaraḥ //77//

このように言われ、〔その者は〕別々に男性と女性の 2 つになった。かのイー
シュヴァラは、自身の半分を 11 に分けた。

②11 に分かれる。彼らはルドラと呼ばれる三界の支配者とされる

【Kūrma-p. 1.11.4-5】

tathokto 'sau dvidhā strītvam puruṣatvam tathākarot /

bibheda puruṣatvañ ca daśadhā caikadhā punaḥ //4//

そして、このように言われたその者（ルドラ）は、女性要素と男性要素の 2 つ
になった。そして男性要素をさらに 11 に分けた。

ekādaśaite kathitā rudrāś tribhuvaneśvaraḥ /

kapālīśādayo viprā devakārye niyojitāḥ //5//

²⁹⁹ 原文（N 版）では sthitosau となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、sthito 'sau とした。

バラモンたちよ。これらの 11 人はルドラと呼ばれ、三界の支配者であり、カパーリーシャなどであり、神々に関する仕事に従事した。

【Skanda-p. 7.2.9.8】

vibheda puruṣatvaṃ ca daśadhā caikadhā punaḥ /

ekādaśaite kathitā rudrās tribhuvaneśvarāḥ //8//

そしてさらに、男性要素を 11 に分けた。これらの 11 人はルドラと呼ばれる三界の支配者である。

③11 に分かれ、さらに黒い者や白い者などに分かれる

【Padma-p. 1.3.175-176ab】

bibheda puruṣatvaṃ ca daśadhā caikadhā ca saḥ /

saumyāsaumyais tathā rūpaiḥ śāntaiḥ strītvam ca sa prabhuḥ //175//

そして、彼は男性要素を 11 に分けた。そして、その神は女性要素を、優しい者や粗野な者、美しい者、穏やかな者に〔分けた〕。

vibheda bahudhā caiva svarūpair asitaiḥ sitaiḥ /176ab

さらに、自身の姿を黒い者や白いものなど多数に分けた。

【Viṣṇu-p. 1.7.14-15】

tathokto 'sau³⁰⁰ dvidhā strītvam³⁰¹ puruṣatvaṃ tathā 'karot /

vibheda³⁰² puruṣatvaṃ ca daśadhā caikadhā punaḥ³⁰³ //14//

このように言われたその者は、女性部分と男性部分の 2 つを創った。そしてさらに男性部分を 11 に分けた。

saumyāsaumyais tathā śāntāśāntaiḥ³⁰⁴ strītvam ca sa prabhuḥ /

vibheda³⁰⁵ bahudhā devaḥ svarūpair asitaiḥ sitaiḥ //15//

そしてその神は女性部分を優しい者や粗野な者、穏やかな者、騒がしい者に分けた。さらに神は自身の姿を黒い者や白い者など多様に〔分けた〕。

³⁰⁰ N 版では tathoktosau となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、tathokto 'sau とした。

³⁰¹ H 版では strītvam となっているが、N 版の strītvam を採用した。

³⁰² H 版では bibheda となっている。訳はほぼ同じである。

³⁰³ H 版では ca saḥ となっている。この場合、訳は「そして彼は男性部分を 11 に分けた」となる。

³⁰⁴ N 版では tadā śāntā 'śāntaiḥ となっており、H 版では tathā śāntā śāntaiḥ となっている。ここでは平行句である Kūrma-p. 1.11.6ab を参照し、tathā śāntāśāntaiḥ とした。

³⁰⁵ H 版では bibheda となっている。訳はほぼ同じである。

④11 に分かれ、さらに男性部分と共に女性部分も、優しい者、粗野な者、穏やかな者、黒い者、白い者などに分かれる

【Mārkaṇḍeya-p. 47.11-12】

sa cokto³⁰⁶ vai pṛthak strītvam puruṣatvam tathākarot /

bibheda puruṣatvam ca daśadhā caikadhā³⁰⁷ tu saḥ //11//

そして、言われた彼は、別々に女性要素と男性要素を創った。そして、彼は男性要素を 11 に分けた。

saumyāsaumyais³⁰⁸ tathā śāntaiḥ puṁstvām strītvam ca sa prabhuḥ /

bibheda bahudhā devaḥ puruṣair asitaiḥ sitaiḥ³⁰⁹ //12//

そしてその神は優しい者や粗野な者、穏やかな者に男性要素と女性要素を〔分けた〕。神は黒い者や白い者など多様に分けた。

第 12 項 構成要素 L の分析

構成要素 L（女性部分）は、分裂した後の女性半身についての記述である。大きく分けて L1（女性部分は女神である）と L2（女性部分から創造が起こる）としたが、L1 と L2 の内容は、共通項も差異も様々で一概に分類することは難しい。ここではまず構成要素 L の分類を列挙し、それを見ながら分析を進めたいと思う。

L1. 女性部分は女神である

- ①女性 は 女神 と され、白い 者と 黒い 者の 2 人 に 分かれる
- ②女性 は サティ ー と され、白い 者と 黒い 者の 2 人 に 分かれる
- ③女性 は ウマー となり、多くの 女神 や 女性 を 創る
- ④女性 は 女神 シュラ ッ ダ ー である
- ⑤女性 は ダク シャ の 娘 となる
- ⑥女性 は 女神 と され、シャ ク ティ を 生み 出す

L2. 女性部分から創造が起こる

- ①優しい 者、粗野 な 者 など に 分かれる
- ②優しい 者、粗野 な 者、白い 者、黒い 者 など に 分かれる
- ③女性 部分 から、全ての 女性 が 生まれ た と する

³⁰⁶ E 版では coktā だが B 版（サンスクリット版、英語版）を参照し cokto とした。

³⁰⁷ E 版では caikadhām だが B 版を参照し caikadhā とした。

³⁰⁸ E 版では saumyāsaumyais だが B 版を参照し saumyāsomyais とした。

³⁰⁹ E 版では amitaiḥ sitaiḥ だが B 版を参照し asitaiḥ sitaiḥ とした。

L1 では、分裂した女性部分を女神であると断言しており、シヴァ神と女神からなるアルダナーリーシュヴァラという序論第 3 節にて定義したアルダナーリーシュヴァラの姿を述べている。一方、構成要素 L2 では、女神になるという記述はない。しかし、分裂した女性部分から様々な者たちや全ての女性たちが生まれたとする内容には、創造者の役割が明確に示されていると言える。

L2①、L2②は、K③、K④と同様に、人間の多様性とこの女性から様々な人間が生まれ繁栄していくことを示した内容と考えられる。

L1①と L1②における白い者と黒い者という記述も同様に人間の多様性を示していると考えられるが、具体的に白い者をアーリヤ系の人間、黒い者をドラヴィダ系の人間ととらえていると考えられる。

L1③と L2③では、分裂した女性半身のみから女性が繁栄していく様子が描かれており、男性の関与は見られない。これは、女性や女神の存在感が増大していることを示していると思われる。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

L1. 女性部分は女神である

①女性は女神とされ、白い者と黒い者の 2 人に分かれる

【Vāyu-p. 9.84】

ātmanāṃ vibhajasveti soktā devī svayaṃbhuvā /

sā tu proktā dvidhā bhūtā śuklā kṛṣṇā ca vai dvijāḥ //84//

その女神は、「汝自身を分けよ」とスヴァヤンブーに言われた。そして言われた彼女は、白い者と黒い者の 2 つになった。再生族の者たちよ。

②女性はサティとされ、白い者と黒い者の 2 人に分かれる

【Linga-p. 1.70.327-329ab】

prāg uktā tu mahādevī strī saiveha satī hy abhūt /

hitāya jagatāṃ devī dakṣeṇārādhitā purā //327//

そして、以前に述べたマハーデーヴィーが、世界の幸福のために、この世界でサティという女性になった。その女神は、ダクシャによって以前から敬われていた者である。

kāryārthaṃ dakṣiṇaṃ tasyāḥ śuklaṃ vāmaṃ tathāsitam /

ātmanāṃ vibhajasveti proktā devena śaṃbhunā //328//

〔彼女は〕「〔創造という〕役割のために、その右半身を白い者に、左半身を同様に黒い者に、自身を分けよ。」とシャンブ神に言われた。

sā tathoktā dvidhā bhūtā śuklā kṛṣṇā ca vai dvijāḥ //329ab

このように言われた彼女は、白い者と黒い者の 2 つになった。再生族の者たち

よ。

③女性はウマーとなり、多くの女神や女性を創る

【Liṅga-p. 1.41.44-48】

ardhenāmśena sarvātmā sasarjāsau śivām umām /
sā cāsṛjat tadā lakṣmīm durgām śreṣṭhām sarasvatīm //44//
vāmām raudrīm mahāmāyām vaiṣṇavīm vārijekṣaṇām /
kalām vikariṇīm caiva kālīm kamalavāsinīm //45//
balavikariṇīm devīm balapramathinīm tathā /
sarvabhūtasya damanīm sasṛje ca manonmanīm //46//

〔自分の〕半身によって、かの全てのアートマンである者は、吉祥なウマーを創った。彼女は、ラクシュミーと最高の者ドゥルガー、サラスヴァティー、ヴァーマー、ラウドリー、マハーマーヤー、蓮の目をした者ヴァイシュナヴィー、カラーヴィカリニー、蓮に住む者カーリー、バラヴィカリニー女神、バラプラマティニー、全存在のダマニー、マノーシマニーを創った。

tathānyā bahavaḥ sṛṣṭās tayā nāryaḥ sahasraśaḥ /
rudraiś caiva mahādevas tābhis tribhuvaneśvaraḥ //47//
sarvātmanaś ca tasyāgre hy atiṣṭhat parameśvaraḥ /
mṛtasya tasya devasya brahmaṇaḥ parameṣṭhinaḥ //48//

同様に、彼女によって、何千もの他の多くの女性たちが創られた。そして、ルドラたちや彼女たちと共に、三界の主であり、マハーデーヴァであるパラメーシュヴァラは、全てのアートマンであり死んでしまった³¹⁰かのパラメーシュティンであるブラフマー神の前に立った。

④女性は女神シュラッダーである

【Liṅga-p. 1.99.13】

śraddhā hy asya śubhā patnī tataḥ puṃsaḥ purātani /
saivājñayā vibhor devī dakṣaputrī babhūva ha //13//

そしてまさに、この男性（シヴァ）から〔出た〕光り輝く太古の妻は、シュラッダーである。かの女神こそ、神³¹¹の命によりダクシャの娘となったのである。

⑤女性は大クシャの娘となる

³¹⁰ 42 偈において「生命（呼吸）を捨てた」ため、死んだと考えられる。

³¹¹ 誰を指しているのかは不明。可能性としては、この場面に登場しているシヴァ神とブラフマー神、そしてこの前後に登場しているヴィシュヌ神の3者の誰かであると考えられる。

【Skanda-p. 7.2.9.9-10】

kṛtvā nāmāni sarveṣāṃ devakārye niyojitāḥ /
vibhajya punar īśānī svātmānaṃ śaṃkarād vibhoḥ //9//
mahādevaniyogena pitāmahaṃ upasthitā /
tām āha bhagavān brahmā dakṣasya duhitā bhava //10//

全てのものに命名し、〔彼らは〕神の仕事を担った。さらにシャンカラ神から自分自身を分けて〔創られた〕イーシャーニー（女性半身）は、マハーデーヴァの命令により、ピターマハに近づいた。ブラフマー神は彼女に「ダクシャの娘になれ。」と言った。

⑥女性は女神とされ、シャクティを生み出す

【Śiva-p. 3.3.19】

sarvāsāṃ eva śaktināṃ tvattaḥ khalu samudbhavaḥ /
tasmāt tvām³¹² paramāṃ śaktiṃ prārthayāmy akhileśvarīm //19//

実に、全てのシャクティはあなたから生じる。それ故に、最高のシャクティであり、全存在の女神であるあなたに願う。

【Śiva-p. 7.1.16.21cd-22】

evaṃ sā yācitā devī brahmaṇā brahmayoninā //21cd//
śaktim ekāṃ bhruvor madhyāt sasrjātmasamaprabhām /
tām āha prahasan prekṣya devadevavaro haraḥ //22//

このように、ブラフマーの母体であるブラフマーによって、懇願されたかの女神は、両眉の中央から、自身と等しい輝きを持つ 1 人のシャクティを創った。神々にとっての偉大な神ハラは微笑んで、彼女を見て言った。

L2. 女性部分から創造が起こる

①優しい者、粗野な者などに分かれる

【Padma-p. 1.3.175】

bibheda puruṣatvaṃ ca daśadhā caikadhā ca saḥ /
saumyāsaumyais tathā rūpaiḥ śāntaiḥ strītvam ca sa prabhuḥ //175//

そして、彼は男性要素を 11 に分けた。そして、その神は女性要素を、優しい者や粗野な者、美しい者、穏やかな者に〔分けた〕。

【Viṣṇu-p. 1.7.15】

saumyāsaumyais tathā śāntāśāntaiḥ³¹³ strītvam ca sa prabhuḥ /

³¹² N 版では tvām となっている。英訳を参照し、K 版の tvām を採用した。

vibheda³¹⁴ bahudhā devaḥ svarūpair asitaiḥ sitaiḥ //15//

そしてその神は女性部分を優しい者や粗野な者、穏やかな者、騒がしい者に分けた。さらに神は自身の姿を黒い者や白い者など多様に〔分けた〕。

②優しい者、粗野な者、白い者、黒い者などに分かれる

【Kūrma-p. 1.11.6】

saumyāsaumyais tathā śāntāśāntaiḥ strītvāñ ca sa prabhuḥ /

bibheda bahudhā devaḥ svarūpair asitaiḥ sitaiḥ //6//

それから、かの神は、女性要素を、その者本人の姿によって吉祥な者、粗野な者、穏やかな者、騒がしい者、色黒の者、色白の者などたくさんに分けた。

【Mārkaṇḍeya-p. 47.12】

saumyāsaumyais³¹⁵ tathā śāntaiḥ puṁstvaṁ strītvam ca sa prabhuḥ /

bibheda bahudhā devaḥ puruṣair asitaiḥ sitaiḥ³¹⁶ //12//

そしてその神は優しい者や粗野な者、穏やかな者に男性要素と女性要素を〔分けた〕。神は黒い者や白い者など多様に分けた。

③女性部分から、全ての女性が生まれたとする

【Liṅga-p. 1.5.29】

tasyāś caivāṁśajāḥ sarvāḥ striyas tribhuvane tathā /

ekādaśavidhā rudrās tasya cāṁśodbhavās tathā //29//

三界における全ての女性は彼女の部分から生まれた。同様に 11 人のルドラは、彼の部分から生まれた。

【Skanda-p. 1.2.22.37cd-38ab】

tasyāś caivāṁśajāḥ sarvāḥ striyas tribhuvane smṛtāḥ //37cd//

ekādaśa ca rudrās ca puruṣās tasya cāṁśajāḥ /38ab

そして三世界の全ての女性たちは彼女から〔体を〕分けて生まれたと言われていた。そして 11 人のルドラと男性たちは、彼の部分から生まれた。

³¹³ N 版では tadā śāntā 'śāntaiḥ となっており、H 版では tathā śāntā śāntaiḥ となっている。ここでは平行句である Kūrma-p. 1.11.6ab を参照し、tathā śāntāśāntaiḥ とした。

³¹⁴ H 版では bibheda となっている。訳はほぼ同じである。

³¹⁵ E 版では saumyāsaumyais だが B 版を参照し saumyāsomyais とした。

³¹⁶ E 版では amitaiḥ sitaiḥ だが B 版を参照し asitaiḥ sitaiḥ とした。

第 13 項 構成要素 M の分析

構成要素 M は、マヌやルドラたちが守護の仕事や神々の仕事を行なうという記述である。

M1 (以前にブラフマー神が生み出したマヌをブラフマー神が守護の仕事に任命する) では、ブラフマー神によってマヌが創造や創造の守護を命じられている。このことによってマヌが創造者となるのだが、この文脈において、マヌはアルダナーリーシュヴァラとは別人である。ここでは、アルダナーリーシュヴァラによる創造の神話とマヌによる創造の神話が混在して書かれていると言える。

M2 (11 人のルドラが神々の仕事を担う) という構成要素のついては、この内容を補足するような記述が見当たらないため、詳細は不明である。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

M1. 以前にブラフマー神が生み出したマヌをブラフマー神が守護の仕事に任命する

【Mārkaṇḍeya-p. 47.13】

tato brahmātmā sambhūtaṁ pūrvaṁ svāyambhuvaṁ³¹⁷ prabhuḥ /
ātmanah sadṛśaṁ kṛtvā prajāpālye³¹⁸ manuṁ dvija //13//

それから神は、以前にブラフマー自身から生まれたスヴァーヤンブヴァを自身に似せて創り、マヌとして、人々の守護〔の仕事〕に〔任命した〕。再生族の者よ。

【Padma-p. 1.3.176cd-178ab】

tato brahmā svayambhūtaṁ pūrvaṁ svāyambhuvaṁ prabhuṁ //176cd//
ātmānam eva kṛtavān prajāpatye manuṁ nrpa /
śatarūpāṁ ca tāṁ nārīṁ taponirdhūtakalmaṣām //177//
svāyambhuvo manur nāma patnīve jagṛhe prabhuḥ //178ab

それからブラフマーは、以前に〔ブラフマー〕自身から生まれ、〔ブラフマー〕自身でもあるスヴァーヤンブヴァをマヌとして創造の〔の仕事〕に任命した。王よ。スヴァーヤンブヴァであるマヌという名の神は、妻として、苦行によって汚れを除去した、かの女性シャタルーパーを娶った。

³¹⁷ B 版では svāyambhuvaḥ となっている。この場合の訳は「それから人々の守護においてスヴァーヤンブヴァ神は前述のブラフマー自身から生まれた者を自身に似せて創りマヌと〔した〕。再生族の者よ。」

³¹⁸ B 版では prajāpālo。この場合の訳は「それから人々の守護者である神はブラフマー自身から生まれた前述のスヴァーヤンブヴァを自身に似せて創りマヌと〔した〕。再生族の者よ。」

【Viṣṇu-p. 1.7.16】

tato brahmātmāsaṁbhūtaṁ pūrvaṁ svāyambhuvam³¹⁹ prabhuḥ /
ātmānam eva kṛtavān prajāpālye manuṁ³²⁰ dvija //16//

それから神は、以前にブラフマー自身から生まれ、〔ブラフマー〕自身でもあるスヴァーヤンブヴァをマヌとして〔創造の〕守護〔の仕事〕に任命した。再生族の者よ。

M2. 11 人のルドラが神々の仕事を担う

【Kūrma-p. 1.11.5】

ekādaśaite kathitā rudrās tribhuvaneśvarāḥ /
kapālīsādayo viprā devakārye niyojitāḥ //5//

バラモンたちよ。これらの 11 人はルドラと呼ばれ、三界の支配者であり、カパーリーシャなどであり、神々に関する仕事に従事した。

【Skanda-p. 7.2.9.9-10】

kṛtvā nāmāni sarveṣāṁ devakārye niyojitāḥ /
vibhajya punar īśāni svātmānam śaṁkarād vibhoḥ //9//
mahādevaniyogena pitāmaham upasthitā /
tām āha bhagavān brahmā dakṣasya duhitā bhava //10//

全てのものに命名し、〔彼らは〕神の仕事を担当した。さらにシャンカラ神から自分自身を分けて〔創られた〕イーシャーニーは、マハーデーヴァの命令により、ピターマハに近づいた。ブラフマー神は彼女に「ダクシャの娘になれ。」と言った。

第 14 項 構成要素 N の分析

構成要素 N（ダクシャの娘）は、分裂した女性半身がダクシャの娘になる場面の記述であり、ほぼ全てのアルダナーリーシュヴァラ創造神話に記述されている。

ダクシャの娘とはサティー女神であり、ダクシャとは F2 において、マリーチやアトリたちと共にブラフマー神によって創造された聖者である。このダクシャには、シヴァ神との確執を描いたとも言える神話が残されている。それは「ダクシャが儀礼を行う際にシヴァ神を除外したため、怒ったシヴァ神の妻サティーがその祭火の中に自らの身を

³¹⁹ H 版では sāyambhuvam となっているが、英訳を参照し、N 版の svāyambhuvam を採用した。

³²⁰ N 版では manuḥ となっているが、英訳を参照し、H 版の manuṁ を採用した。

投じて死んだ」という神話である。N の要素はこの神話へつながるための導入部になっている可能性がある³²¹。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

①半身の女性がダクシャの娘になり、ルドラと結婚する

【Linga-p. 1.99.13-14ab】

śraddhā hy asya śubhā patnī tataḥ puṃsaḥ purātani /

saivājñayā vibhor devī dakṣaputrī babhūva ha //13//

そしてまさに、この男性（シヴァ）から〔出た〕光り輝く太古の妻は、シュラッダーである。かの女神こそ、神³²²の命によりダクシャの娘となったのである。

satīsaṃjñā tadā sā vai rudram evāśritā patim /14ab

彼女はサティーという名で、その時まさにルドラを夫にした。

【Skanda-p. 7.2.9.9-12】

kṛtvā nāmāni sarveṣāṃ devakārye niyojitāḥ /

vibhajya punar īśānī svātmānaṃ śaṃkarād vibhoḥ //9//

mahādevaniyogena pitāmaham upasthitā /

tām āha bhagavān brahmā dakṣasya duhitā bhava //10//

全てのものに命名し、〔彼らは〕神の仕事を担った。さらにシャンカラ神から自分自身を分けて〔創られた〕イーシャーニーは、まは一つデーヴァの命令により、ピターマハに近づいた。ブラフマー神は彼女に「ダクシャの娘になれ。」と言った。

sāpi tasya niyogena prādur āsīt prajāpateḥ /

niyogād brahmaṇo dakṣo dadau rudrāya tām satīm //11//

彼女も、彼（ブラフマー）の命令により、創造者（ダクシャ）から現れた。ダクシャはブラフマーの命令により、ルドラにかのサティーを与えた。

dākṣiṇ rudro 'pi jagrāha svakīyām eva sūlabhṛt /

atha barhmā babhāṣe taṃ sṛṣṭiṃ kuru satīpate //12//

³²¹ この構成要素 N は前述の L1 と重複している場合がある。というのも、どちらも分裂後の女性半身のことを説明している記述であり、どちらも女神になるという内容が述べられているからである。例えば、N①（Skanda-p. 7.2.9.9-12）は、L1（Skanda-p. 7.2.9.9-10）を全て含め、さらなる内容を付加した記述となっている。そのため、L1 と N の分別が不明瞭となり、分かりにくい可能性がある。しかし、ダクシャの娘になるという内容は、アルダナーリーシュヴァラ創造神話とダクシャの儀礼の神話との関連を示す可能性があり、ダクシャの娘と限定して書かれていることに意味がある特別な構成要素である可能性があるもので、2 つの構成要素に分けた。

³²² 誰を指しているのかは不明。可能性としては、この場面に登場しているシヴァ神とブラフマー神、そしてこの前後に登場しているヴィシュヌ神の 3 者の誰かであると考えられる。

三叉戟を持つ者であるルドラも、その人自身（ルドラ）であるダクシャの娘を受け入れた。そして、ブラフマーは彼に「創造をせよ。サティーの夫よ。」と言った。

②半身の女性がダクシャの娘になり、ルドラと結婚する。その後パールヴァティーになり、再びルドラの配偶神になる

【Kūrma-p. 1.11.9-13ab】

tām āha bhagavān brahmā dakṣasya duhitā bhava /

sāpi tasya niyogena prādūrāsīt prajāpateḥ //9//

ブラフマー神は彼女に「ダクシャの娘になれ」と言った。彼女は彼の命令により、プラジャーパティ（創造者、ダクシャ）から生じた。

niyogād brahmaṇo devīm dadau rudrāya tām satīm /

dākṣiṃ rudro 'pi jagrāha svakīyām eva sūlabhṛt //10//

〔ダクシャは〕ブラフマー神の命令により、ルドラに、かのサティー女神を与えた。三叉戟を持つ者であるルドラも、その人自身（ルドラ）であるダクシャの娘を受け入れた³²³。

prajāpativinirdeśāt kālena parameśvarī /

vibhajya punar īśānī ātmānaṃ śaṃkarād vibhoḥ //11//

menāyām abhavat putrī tadā himavataḥ satī /12ab

時が過ぎて、プラジャーパティの命令により、パラメーシュヴァリーであるイーシャーニーは、さらにシャンカラ神から自身を分けて、それから、サティーはヒマヴァットとメナーの娘になった。

sa cāpi parvatavaro dadau rudrāya pārvatīm //12cd//

hitāya sarvadevānāṃ trailokyasyātmano dvijāḥ /13ab

そして、その最高の山（ヒマヴァット）は、また、パールヴァティーを、三界の全ての神々と自身の幸福の為に、ルドラに与えた。再生族の者たちよ。

③半身の女性がダクシャの娘になり、ルドラと結婚する。それとともに、娘（putrī）という言葉の由来を述べる

【Liṅga-p. 1.5.30-33】

strīliṅgam akhilaṃ sā vai pulliṅgam nīllohitaḥ /

taṃ dṛṣtvā bhagavān brahmā dakṣamālokyā suvratām //30//

bhajasva dhātṛīm jagatām mamāpi ca tavāpi ca /

punnāmno narakāt trāti iti putre tv ihoktitaḥ //31//

³²³ 後続の文章から考えると、アルダナーリーシュヴァラ（ルドラが半身にサティーを受け入れた）になったと考えられる。

praśastā tava kāmteyaṃ syāt putrī viśvamāṭṛkā /

tasmāt putrī satī nāmnā tavaiṣā ca bhaviṣyati //32//

全ての女性性を持つ者は彼女であり、男性性を持つ者はニーラローヒターである。彼（シヴァ）を見てからブラフマー神はダクシャを見て、「世界の創造者にして、良く戒律を守る者であり、私のものであり、また汝（シヴァ）のものでもある、〔彼女を〕崇めよ。息子（putra）〔の語源〕が「人（pums）に由来し、地獄から救う（trāti）」とここって言えるならば〔娘（putrī）も同様の意味を持つ〕³²⁴。〔この〕娘は汝（シヴァ）の妻であり、世界の母として賞賛される〔であろう〕。それ故、彼女は、サティーという名で汝（ダクシャ）の娘となるであろう。」「と言った。

evam uktas tadā dakṣo niyogād brahmaṇo muniḥ /

labdhvā putrīm dadau sāksāt satīm rudrāya sādaram //33//

このように言われた聖者ダクシャは、ブラフマーの命令により娘を得て、そのまま、敬意を示して、ルドラにサティーを与えた。

④半身の女性がダクシャの娘になり、女性という存在が確立する

【Śiva-p. 3.3.27】

tām ājñāṃ parameśasya śirasā pratigṛhya sā /

brahmaṇo vacanād devī dakṣasya duhitābhavat³²⁵ //27//

かの女神は、最高神（ブラフマー）のその願いを、頭を〔下げて〕受け入れ、ブラフマーの言葉に従って、ダクシャの娘になった。

⑤半身の女性がダクシャの娘になり、女性における享受が確立する

【Śiva-p. 7.1.16.23-25】

brahmāṇaṃ tapas ārādhya kuru³²⁶ tasya yathepsitam /

tām ājñāṃ parameśasya śirasā pratigṛhya sā //23//

brahmaṇo vacanād devī dakṣasya duhitābhavat³²⁷ /24ab

「ブラフマーを苦行により崇め、彼の望むことをしなさい。」彼女は頭〔を下げる事〕によって、パラメーシャ（最高神、シヴァ）のその命令を受け入れ、

³²⁴ 意味は不確定だが、英訳を参照し、このように訳す。

³²⁵ K 版では duhitā 'bhavat となっている。これは duhitā abhavat の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N 版の duhitābhavat という表記を採用した。

³²⁶ N 版では ārādhyakuru（連書）となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、K 版の ārādhya kuru を採用した。

³²⁷ K 版では duhitā 'bhavat となっている。これは duhitā abhavat の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

ブラフマーの言葉から、女神はダクシャの娘となった。
dattvaivam³²⁸ atulāṃ śaktiṃ brahmaṇe brahmarūpiṇīm //24cd//
viveśa deham devasya devaś cāṃtaradhiyata /
tadāprabhṛti³²⁹ loke 'smin striyāṃ bhogaḥ pratiṣṭhitaḥ //25//

このように、ブラフマンの姿（性質）をした比類ないシャクティをブラフマーに与えて、〔女神は〕神（シヴァ）の体に入った。そして、神は（姿を）消した。この時以来、この世界において、女性における享受が確立された。

⑥半身から生まれた女神サティーがダクシャに敬われる

【Liṅga-p. 1.70.327】

prāg uktā tu mahādevī strī saiveha satī hy abhūt /
hitāya jagatāṃ devī dakṣeṇārādhitā purā //327//

そして、以前に述べたマハーデーヴィーが、世界の幸福のために、この世界でサティーという女性になった。その女神は、ダクシャによって以前から敬われていた者である。

第 15 項 構成要素 O の分析

構成要素 O は、シヴァ神がスターヌであるとする記述である。これは、前後の内容に深く関わるものではないため、後代に付け加えられた可能性が高い。シヴァ神にスターヌという性格や名前を付加して定着させる意図があるのだろう。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

【Liṅga-p. 1.70.323-325】

tataḥ prabhṛti deveśo na cāsūyata vai prajāḥ /
ūrdhvaretāḥ sthitaḥ sthāṇur yāvad ābhūtasamplavam //323//
それ以来、神々の神は、生類を生み出さなかった。生類の破滅が起こるまで、禁欲生活を保ったスターヌのままでいた。
yasmād uktaḥ sthito 'smīti³³⁰ tasmāt sthāṇur iti smṛtaḥ /
eṣa devo mahādevaḥ puruṣo 'rkasamadyutiḥ³³¹ //324//

³²⁸ K 版では dattvaivam となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、N 版の dattvaivam を採用した。

³²⁹ N 版では tadā prabhṛti（分書）となっている。訳は同じとする。

³³⁰ 原文（N 版）では sthitosmīti となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、sthito 'smīti とした。

ardhanārīnaravapus tejasā jvalanopamaḥ /

svecchayāsau dvidhā bhūtaḥ pṛthak strī puruṣaḥ pṛthak //325//

「私は留まる」と言ったので、スターヌとして知られる。このマハーデーヴァ神プルシャは、太陽に等しい輝きを持ち、半身が女性である男性の姿をしており、輝きにおいて炎に等しい者であった。自身の意思に従って、その者は、別々に女性と男性の2つになった。

【Skanda-p. 7.2.9.14】

sthāṇuvatsamsthito yasmāt tasmās sthāṇur bhavāmy aham //14//

柱のようにとどまるが故に、私はスターヌ〔と呼ばれる者〕となるであろう。

第16項 構成要素 P の分析

構成要素 P は、ルドラについての記述であるが、ルドラはシヴァ神の化身としての1者という扱いだけでなく、ルドラという者たちというあたかも1つの種族であるかのような扱いをされることがある。ここでは、そのルドラという者たちに関する記述を示している。

P1（ルドラという名の由来）では、泣く、わめく（動詞√rud）の派生語としてルドラという名の誕生譚が述べられている。P2（多数のルドラに関する記述）では、ルドラは人間と言うよりも神々に近い存在として描かれている。

以下に、この構成要素に該当する記述を示す。

P1. ルドラという名の由来

【Vāyu-p. 9.78-81】

tenoktās te mahātmānaḥ sarva eva mahātmanā /

jagato bahulībhāvam adhikṛtya hitaiṣiṇaḥ //78//

lokaṇṛtāntahetor hi prayatadhvam atandritāḥ /

viśvaṃ viśvasya lokasya sthāpanāya hitāya ca //79//

彼ら全ての偉大な魂を持つ者たちは、かの偉大な者³³²に言われた。「世界の繁栄に関して幸福を祈り、世界の一部始終のために、全世界の全ての秩序と恩恵のために、倦むことなく努めなさい。」

evam uktvās tu rurudur dadruvuś ca samantataḥ /

³³¹ 原文(N版)では puruṣorkasamadyutiḥ となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、puruṣo 'rkasamadyutiḥ とした。

³³² シヴァ神もしくはブラフマー神を指していると思われるが、明確には分らない。

rodanād dravaṇāc³³³ caiva rudrā nāmneti viśrutāḥ //80//

このように言われ、彼らは泣いて四方八方に走り回った。泣いて走ったために
〔彼らは〕ルドラという名で知られている。

yair hi vyāptam idaṃ sarvaṃ trailokyam sacarācaram /

teṣām anuttarā³³⁴ loke sarvalokaparāyaṇāḥ //81//

彼らによって、この動くものや動かないものの全てが三界に満ちた。世界にお
ける彼らの長たちが全世界の維持者となった。

P2. 多数のルドラ

【Linga-p. 1.70.317-320】

ete ye vai mayā sṛṣṭā virūpā nīlaloḥitāḥ /

sahasrāṇām sahasraṃ tu ātmano nissṛtāḥ prajāḥ //317//

私によって創られた多様な紫紅色の何千もの者たちは自滅する生類である。

ete devā bhaviṣyaṃti rudrā nāma mahābalāḥ /

prthivyām aṃtarikṣe ca dikṣu caiva pariśritāḥ //318//

これらの神々はルドラという名の偉大な力を持つ者たちとなるだろう。〔彼ら
は〕大地や天地の間、さらに〔あらゆる〕方角に存在している。

śatarudrāḥ samātmāno bhaviṣyaṃtīti yājñikāḥ /

yajñabhājo bhaviṣyaṃti sarvadevaganaiḥ saha //319//

100 人のルドラたちは、平静を保ち、儀式を執り行う者たちとなるだろう。全
ての神々の集まりと共に供物の享受者となるだろう。

manvaṃtareṣu ye devā bhaviṣyaṃtīha bhedataḥ /

sārdham tair iḥyamānāste sthāsyamti hāyugakṣayāt //320//

これらの神々（ルドラたち）は数々のマヌヴァンタラの間、別々に存在するだ
ろう。この神々（全ての神々）と共に敬われ、この世界で、ユガの終わりに至
るまでとどまるだろう。」

【Śiva-p. 2.1.15.59】

śrutvā mama vacaḥ³³⁵ so 'tha³³⁶ devadevo maheśvaraḥ /

³³³ N 版では drāvaṇāc となっている。意味はほぼ同じである。

³³⁴ N 版では anucarā となっている。この場合の訳は「世界における彼らの末裔たちが全世界の維持者となった。」となる。

³³⁵ N 版では vacas となっている。

³³⁶ N 版では sotha となっている。これはアヴァグラハ記号を省略しているものと考えられる。

sasarja svātmanas tulyān rudro rudragāṇān bahūn³³⁷ //59//

さて、私の言葉を聞いて、かのデーヴァデーヴァであり、マヘーシュヴァラであるルドラは、自分自身に良く似たたくさんのルドラの一团を創った。

第2節 神話全体の流れ

最後に神話全体の構成について検討する。以下に、それぞれの構成要素をそれぞれの神話の流れに沿ってまとめた表を示す（表 13）。

³³⁷ N 版では bahūna となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、K 版の bahūn を採用した。

表 13 神話の構成要素と神話の流れを対応した表³³⁸ (アルダナーリーシュヴァラ創造神話)

文献／ 構成要素	Kūrma-p. 1.10.88-11.1.4ab	Linga-p. 1.5.28-33	Linga-p. 1.41.7-13ab	Linga-p. 1.41.37-48	Linga-p. 1.70.314-329ab	Linga-p. 1.99.6cd-14ab	Mārkaṇḍeya-p. 47.3-16ab	Padma-p. 1.3.166-179ab	Śiva-p. 2.1.15.49-59	Śiva-p. 3.3.1-30	Śiva-p. 7.1.16.4-26	Skanda-p. 1.2.22.35cd-38ab	Skanda-p. 7.2.9.1-17	Varāha-p. 2.42-51	Vāyu-p. 9.67-84	Viṣṇu-p. 1.7.1-17ab
F	F2								F2							
G							G1									G1
H									H							
J											J1					
A	A2	A3	A2	A2	A5	A6	A1	A1	A2	A1	A2		A3	A3	A1	A1
F							F2	F2						F2	F2	F2
A								A1		A2						
H				H			H	H							H	H
F				F3										F3		
P					P2											
O					O											
I	I1	I3	I1	I1	I3	I4	I1	I1	I1	I2		I3	I1	I1	I1	I1
J	J1	J1	J3	J2	J2	J1	J1	J1		J1		J1	J1	J1	J1	J1
K	K			K	K		K	K					K	K	K	K
L		L2		L1		L1	L2	L2		L1	L1	L2				L2
M	M2						M1	M1					M2			M1
N					N	N				N	N					
K		K										K				
L	L2				L1								L1			
N	N	N											N			
O													O			
P									P2						P1	
C							C	C								C
D							D1	D1								D1
E							E1	E1								E1
G			G3										G1			
L															L1	

³³⁸ 横軸は文献別、縦軸は神話において述べられる構成要素の順番である。

アルダナーリーシュヴァラ創造神話は、ブラフマー創造神話と比較すると、構成要素が複雑に点在し、多様性があると言える。ここから、F (その他の者たちの創造)、G (サーンキヤ・ヨーガ哲学的記述)、H (創造の過程でブラフマーが怒る)、M2 (仕事を担う：11人のルドラが神々の仕事を担う)、O (スターヌに関する記述)、P (ルドラの説明) といった流れに関わりのない構成要素を省くと、以下ようになる (表 14)。

表 14 神話の構成要素から F、G、H、M2、O、P を除いた神話の流れを対応した表 (アルダナーリーシュヴァラ創造神話)

文献／構成要素	Kūrma-p. 1.10.88-11.14ab	Liṅga-p. 1.5.28-33	Liṅga-p. 1.41.7-13ab	Liṅga-p. 1.41.37-48	Liṅga-p. 1.70.314-329ab	Liṅga-p. 1.99.6cd-14ab	Mārkaṇḍeya-p. 47.3-16ab	Padma-p. 1.3.166-179ab	Śiva-p. 2.1.15.49-59	Śiva-p. 3.3.1-30	Śiva-p. 7.1.16.4-26	Skanda-p. 1.2.22.35cd-38ab	Skanda-p. 7.2.9.1-17	Varāha-p. 2.42-51	Vāyu-p. 9.67-84	Viṣṇu-p. 1.7.1-17ab
J											J1					
A	A2	A3	A2	A2	A5	A6	A1	A1	A2	A1 A2	A2		A3	A3	A1	A1
I	I1	I3	I1	I1	I3	I4	I1	I1	I1	I2		I3	I1	I1	I1	I1
J	J1	J1	J3	J2	J2	J1	J1	J1		J1		J1	J1	J1	J1	J1
K	K			K	K		K	K					K	K	K	K
L	L2	L2		L1		L1	L2	L2		L2	L2	L2	L1		L1	L2
M							M1	M1								M1
N	N				N	N				N	N		N			
K		K										K				
L					L1											
N		N														
C							C	C								C
D							D1	D1								D1
E							E1	E1								E1

上記の表から見て、ほとんど全ての神話に示される構成要素は以下の通りである。

A. 発端：ブラフマー神による創造行為

I. アルダナーリーシュヴァラの出現

J. アルダナーリーシュヴァラが男女に分裂する過程

この A→I→J という流れは、アルダナーリーシュヴァラ創造神話であると認められるために必要最小限の構成要素を示していると言える。これに更なる構成要素を加えて、以下に基本パターンを示す。

【アルダナーリーシュヴァラ創造神話基本形】（以下【アルダナーリーシュヴァラ基本形】と略す。）

- A. 発端：ブラフマー神による創造行為
- I. アルダナーリーシュヴァラの出現
- J. アルダナーリーシュヴァラが男女に分裂する過程
- K. 男性部分（欠落している神話あり）
- L. 女性部分（欠落している神話あり）

これは多くの神話に共通するパターンである。アルダナーリーシュヴァラ創造神話は多様性があり、【アルダナーリーシュヴァラ基本形】以外にも 3 つのパターンが考えられる。それら 3 パターンは、この基本形にいくつかの構成要素を加えてできるパターンである。すなわち、【アルダナーリーシュヴァラ基本形】は全てのパターンに含まれているということであり、それゆえ基本形であると考えた。以下にこのパターンに該当する神話の構成要素と神話全体の流れを対応させた表を示す（表 15）

表 15 神話全体の流れ【アルダナーリーシュヴァラ基本形】

文献／構成要素	Kūrma-p. 1.10.88-11.14ab	Linga-p. 1.5.28-33	Linga-p. 1.41.37-48	Linga-p. 1.70.314-329ab	Linga-p. 1.99.6cd-14ab	Mārkaṇḍeya-p. 47.3-16ab	Padma-p. 1.3.166-179ab	Śiva-p. 3.3.1-30	Śiva-p. 7.1.16.4-26	Skanda-p. 1.2.22.35cd-38ab	Skanda-p. 7.2.9.1-17	Varāha-p. 2.42-51	Vāyu-p. 9.67-84	Viṣṇu-p. 1.7.1-17ab
J									J1					
A	A2	A3	A2	A5	A6	A1	A1	A1 A2	A2		A3	A3	A1	A1
I	I1	I3	I1	I3	I4	I1	I1	I2		I3	I1	I1	I1	I1
J	J1	J1	J2	J2	J1	J1	J1	J1		J1	J1	J1	J1	J1
K	K		K	K		K	K				K	K	K	K
L	L2	L2	L1		L1	L2	L2	L1	L1	L2	L1		L1	L2
M						M1	M1							M1
N	N			N	N			N	N		N			
K		K								K				
L				L1										
N		N												
C						C	C							C
D						D1	D1							D1
E						E1	E1							E1

続いて、基本形にいくつかの構成要素を加えて作られる 3 つのパターンを示そう。まず 1 つ目は、ブラフマー創造神話が混在していると考えられるパターンである。

【アルダナーリーシュヴァラ創造神話変化形 1】（以下【アルダナーリーシュヴァラ変化形 1】と略す。）

A. 発端：ブラフマー神による創造行為

I. アルダナーリーシュヴァラの出現

J. アルダナーリーシュヴァラが男女に分裂する過程

K. 男性部分

L. 女性部分

M1. 以前にブラフマー神が生み出したマヌをブラフマー神が守護の仕事に任

命する

C. シャタルーパーによる苦行

D1. マヌとシャタルーパーに関する記述：マヌとシャタルーパーが夫婦関係になる：マヌがシャタルーパーを妻にする

E1. マヌとシャタルーパーの子供たち：息子：プリャヴラタとウッターナパーダ、娘：アークーティとプラスーティ

このパターンは、 $A \rightarrow I \rightarrow J \rightarrow K \rightarrow L$ という連続した流れの後に、 $M1 \rightarrow C \rightarrow D1 \rightarrow E1$ という【ブラフマー基本形】の後半と同じ構成要素の流れが続いている。Kにて、男性半身は11人に分かれ³³⁹、Lにて女性半身も様々な者に分かれる。その後、アルダナーリーシュヴァラとは全く別人であるマヌ（M1）が突然登場し、更にシャタルーパーも突然登場し、そして苦行（C）し、そのマヌがシャタルーパーを妻とし（D1）、2人の息子と2人の娘を生み出す（E1）のである。つながりのある一連の神話というよりも、むしろ2つの異なった神話がただ連続して述べられているかのような印象を受ける。それゆえ、このパターンは、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の中にブラフマー創造神話の一連の構成要素 $C \rightarrow D1 \rightarrow E1$ が混在していると言うことができる。以下にこのパターンに該当する神話の構成要素と神話全体の流れを対応させた表を示す（表16）。

表 16 神話全体の流れ【アルダナーリーシュヴァラ変形 1】

文献／構成要素	Mārkaṇḍeya-p. 47.3-16ab	Padma-p. 1.3.166-179ab	Viṣṇu-p. 1.7.1-17ab
A	A1	A1	A1
I	I1	I1	I1
J	J1	J1	J1
K	K	K	K
L	L2	L2	L2
M	M1	M1	M1
C	C	C	C
D	D1	D1	D1
E	E1	E1	E1

³³⁹ Mārkaṇḍeya-p. 47.3-16ab では、11人がさらに様々な者に分かれる。

以下に、他のパターンを示そう。2 パターンに分けてあるが、内容が類似しているのでアルダナーリーシュヴァラ創造神話変化形 2-1（以下【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-1】と略す）とアルダナーリーシュヴァラ創造神話変化形 2-2（以下【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-2】と略す）とした。

【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-1】

- A. 発端：ブラフマー神による創造行為
- I. アルダナーリーシュヴァラの出現
- J. アルダナーリーシュヴァラが男女に分裂する過程
- K. 男性部分（欠落している神話もあり）
- L1. 女性部分：女性部分は女神である

このパターンにおいて重要な構成要素は、構成要素 L1（女性部分：女性部分は女神である）である。構成要素 L1 では、分裂後の女性半身が女神になることが述べられている。この姿は、序論第 3 節においておこなったアルダナーリーシュヴァラの定義である「シヴァ神とシヴァ神の配偶者である女神から成る」に当てはまる。そのため、この女神になるというパターンは、アルダナーリーシュヴァラという神格の確立を示すパターンであると言える。以下に【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-1】に該当する神話の構成要素と神話全体の流れを対応させた表を示す（表 17）。

表 17 神話全体の流れ【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-1】

文献／ 構成要素	Līṅga-p. 1.41.37-48	Līṅga-p. 1.70.314-329ab	Līṅga-p. 1.99.6cd-14ab	Śiva-p. 3.3.1-30	Śiva-p. 7.1.16.4-26	Skanda-p. 7.2.9.1-17	Vāyu-p. 9.67-84
J					J1		
A	A2	A5	A6	A1 A2	A2	A3	A1
I	I1	I3	I4	I2		I1	I1
J	J2	J2	J1	J1		J1	J1
K	K	K				K	K
L	L1		L1	L1	L1	L1	L1
N		N	N	N	N	N	
L		L1					

「シヴァ神とシヴァ神の配偶者である女神から成る」という定義であるアルダナーリーシュヴァラを述べているパターンにはもう 1 つある。それは以下のパターンである。

【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-2】

- A. 発端：ブラフマー神による創造行為
- I. アルダナーリーシュヴァラの出現
- J. アルダナーリーシュヴァラが男女に分裂する過程
- K. 男性部分（欠落している神話もあり）
- L2. 女性部分：女性部分から創造が起こる
- N. ダクシャの娘

このパターンに登場するダクシャの娘とはサティー女神というシヴァ神の配偶神であり、女性部分が最終的にダクシャの娘になるという内容は「シヴァ神とシヴァ神の配偶者である女神から成る」というアルダナーリーシュヴァラの定義に従っている。このパターンでは、構成要素 N の前後に必ず構成要素 L が述べられている。構成要素 N においても述べた³⁴⁰が、構成要素 L と N は、分裂後の女性半身についての記述なので、不可分であり、重複することもある。構成要素 L は、L1（女性部分は女神である）と L2（女性部分から創造が起こる）に分けられる。構成要素 L1 が述べられる場合、前述の【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-1】となる。一方、構成要素 L2 の場合、そこには女性部分が女神であるという構成要素がないため、構成要素 N のダクシャの娘、すなわちサティー女神であるという内容が【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-1】における構成要素 L1 と同じ役割を果たしている。そのため、このパターンは【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-1】と同じ流れのパターンであると判断し、【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-2】と名付けた。

以下に【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-2】に該当する神話の構成要素と神話全体の流れを対応させた表を示す（表 18³⁴¹）。

³⁴⁰ 本章第 1 節第 14 項を参照のこと。

³⁴¹ 表 17 では、構成要素 L1 を含むパターンは【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-1】であると判断したので、構成要素 L2 を含む神話だけを取り上げた。

表 18 神話全体の流れ【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2・2】

文献 ／ 構成要素	Kūrma-p. 1.10.88-11.14ab	Linga-p. 1.5.28-33
A	A2	A3
I	I1	I3
J	J1	J1
K	K	
L	L2	L2
N	N	
K		K
N		N

このように、アルダナーリーシュヴァラ創造神話は、構成要素が多く、構成要素の有無や順番に多様性がある。しかし、欠落や順序不同がありながらも、基本パターンとその基本パターンに他の構成要素が加えられたパターンの計 4 パターンが見いだせた。

第 3 節 小結

本章では、第 1 章で行なったのと同様の方法を用いて、プラーナ聖典に見られる 16 のアルダナーリーシュヴァラ創造神話の構造を明らかにしてきた。

第 1 節では、各構成要素を分析することによってそれぞれの構成要素に含まれる記述の共通性を調べた。構成要素 A（発端：ブラフマー神による創造行為）は基本的には、ブラフマー神による創造の過程において男女に分裂する存在が必要な理由や状況を示していた。ただし、A6（バガヴァットとバガーがリングと台座として存在している）においては、ブラフマー神が登場せず、シヴァ神の世界創造が述べられていた。構成要素 C②（シャタルーパーによる苦行：シャタルーパーが苦行し、汚れを除去する）、および構成要素 D1（マヌとシャタルーパーに関する記述：マヌとシャタルーパーが夫婦になる）、構成要素 E1①（マヌとシャタルーパーの子供たち：息子や娘を生み出した：

息子：プリヤヴラタとウッターナパーダ、娘：アークーティとプラスーティ）は、内容的にほぼ一致しており、この一連の構成要素がある1つの形を確立していると言える。構成要素 F2（聖者たちの創造）は、ブラフマー神がマリーチなどの聖者たちを創造するという記述である。ブリグ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、アンギラス、マリーチ、アトリ、ヴァスィシュタという8人の名が一致していた。構成要素 G1（トリグナに関する記述）では、Mārkaṇḍeya-p. 47.3 と Viṣṇu-p. 1.7.2 の内容がほぼ一致していた。構成要素 H①（サナンダナなどが創造に無関心なので、ブラフマー神が怒る）では、ブラフマー神によってそれまでに創られた者たちが創造に無関心だったために、創造が進まず、ブラフマー神が怒っているという内容の一致が見られた。構成要素 I（アルダナーリーシュヴァラの出現）は、アルダナーリーシュヴァラが登場する場面という同一の内容であった。構成要素 J1（ブラフマー神の働きかけによりアルダナーリーシュヴァラが分裂する）では、アルダナーリーシュヴァラがブラフマー神からの何らかの働きかけを受け、男性半身と女性半身に分裂するという共通の内容を持つ記述であった。構成要素 K（男性部分が11に分かれる）は、分裂した後の男性半身が11に分かれるという一致が見られた。構成要素 L（女性部分）は、分裂した後の女性半身についての記述であり、様々な内容を述べているが、女性部分が多数の女性に分裂する、もしくは女神になるという共通点が見られた。構成要素 M は、マヌやルドラたちが守護の仕事や神々の仕事を行なうという共通の記述があった。構成要素 N（ダクシャの娘）は、分裂した女性半身がダクシャの娘になるという同一の場面を述べていた。構成要素 O は、シヴァ神がスターヌ（不動者）であるという共通点があった。このように、各構成要素には多くの共通点があり、元々同一の内容を述べた記述であった可能性が示せた。

続いて、第1章と同様に、第2節において構成要素を神話の流れに沿って配置し、神話全体の構造のパターンを示した。最初に A→I→J という流れを提示したのだが、これはアルダナーリーシュヴァラ創造神話であると認められるために必要最小限の構成要素を示していると言える。この流れに他の構成要素を加えて、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の基本パターンは、A→I→J→K→L となるのではないかと考察した。続いて基本形にいくつかの構成要素を加えて作られる他のパターンを示す。

1 つ目はアルダナーリーシュヴァラ創造神話の中にブラフマー創造神話の構成要素が混在している【アルダナーリーシュヴァラ変形 1】である。これは A→I→J→K→L→M1→C→D1→E1 という流れになる。

2 つ目は分裂した女性半身が女神になる【アルダナーリーシュヴァラ変形 2-1】である。これは A→I→J→K→L1 という流れであり、「アルダナーリーシュヴァラはシヴァ神とシヴァ神の配偶者である女神から成る」とされている現在のアルダナーリーシュヴァラと同様の姿を示すパターンである。このパターンと類似する【アルダナーリーシュヴァラ変形 2-2】として A→I→J→K→L2→N という流れを持つものもある。この場合、構成要素 N（ダクシャの娘）が、構成要素 L1 と同様、女神になることを示し

ている。

このように、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の全体的な流れには4つのパターンがあることが分かった。

以上、見てきたように、本章で取り扱った16の神話は、第1章と同様に、各構成要素を分析し一致点を見つける方法によっても、物語全体の流れを比較するというやり方によっても、同一の神話のヴァリエーションである可能性が高いことが示された。そして、この16のアルダナーリーシュヴァラ創造神話は、構成要素が多く、構成要素の有無や順番に多様性があるため、共通性が分かりにくくなっているが、詳細に分析していくと、基本パターンと呼べる1つのパターンがあり、さらにその基本パターンに他の構成要素を加えてできる3つのパターンも見つけられた。その3つのパターンの中で、【アルダナーリーシュヴァラ変化形2-1】と【アルダナーリーシュヴァラ変化形2-2】では、分裂した女性半身が女神となっており、それは「アルダナーリーシュヴァラはシヴァ神とシヴァ神の配偶者である女神から成る」とされる現在のアルダナーリーシュヴァラと同様の姿を述べている。そのため、これらのパターンが確立した時点で、アルダナーリーシュヴァラという神格が成立したといえるのではないだろうか。

第3章 ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の比較

本章では、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の構成を比較する。ここで明らかにしたい点は、以下の2点である。

まず第一に、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話が同一の神話のヴァリエーションであるかどうかという点である。第1章にて17のブラフマー創造神話を分析し、それらが全て同一の神話のヴァリエーションであると考えられると結論した。第2章でも16のアルダナーリーシュヴァラ創造神話を分析し、それらが同一の神話のヴァリエーションである可能性が高いことを示した。そこで、本章では17のブラフマー創造神話と16のアルダナーリーシュヴァラ創造神話が全て、同一の神話のヴァリエーションであることを示したい。

第2の点は、以上のことを前提として、これらの神話の成立の順序、すなわちブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話のどちらが先につくられ、どのように変遷していったかについて明らかにしようと考えている。序論第3節で述べた先行研究などから見て、本来、ブラフマー神が持っていた「男女に分裂し創造を行なう」という役割を、アルダナーリーシュヴァラ（シヴァ神）が受け継いだと考えるのが一般的と言えるが、確定的な証拠があるとは言えない。そのため、ここで今一度そのことについて考察したいと思う。

本章第1節ではブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話に共通する構成要素を比較し、その一致点と相違点を分析する。第2節では神話全体の流れのパターンを比較し、双方の神話が同一の神話であるかどうかを検討した後、それぞれのパターンが作られた順序、すなわち「男女に分裂し創造を行なう創造者」の神話がどのように変遷していったのかについて考察する。そして、第3節において本章の小结を述べる。

第1節 構成要素

第1項 構成要素の有無

まず、第1章と第2章で分類した神話の構成要素を合わせて表にする。縦軸が構成要

素の羅列、横軸がブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話である。表の見方は、構成要素 A を例にとると、ブラフマー創造神話の縦列の中で○と表記してある構成要素 A1①、A1②、A2、A3、A4 はブラフマー創造神話に見られた記述であり、空欄となっている A5、A6 は見られなかった記述である。アルダナーリーシュヴァラ創造神話も同様である。以下に表を示す（表 19）。

表 19 ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話における各構成要素の有無

どちらの神話か／構成要素	ブラフマー創造神話	アルダナーリーシュヴァラ創造神話	どちらの神話か／構成要素	ブラフマー創造神話	アルダナーリーシュヴァラ創造神話	どちらの神話か／構成要素	ブラフマー創造神話	アルダナーリーシュヴァラ創造神話	どちらの神話か／構成要素	ブラフマー創造神話	アルダナーリーシュヴァラ創造神話	どちらの神話か／構成要素	ブラフマー創造神話	アルダナーリーシュヴァラ創造神話
A1①	○	○	B1①	○		F1②	○		I1⑦		○	L1⑤		○
②	○	○	B2	○		③	○		I2		○	⑥		○
A2	○	○	C①	○		④	○		I3		○	L2①		○
A3	○	○	②		○	F2	○	○	I4		○	②		○
A4	○		D1①	○	○	F3	○	○	J1①		○	③		○
A5		○	②	○		G1	○	○	J1②		○	M1		○
A6		○	③	○		G2①	○		③		○	M2		○
B1①	○		④	○		②	○		J2		○	N①		○
②	○		D2①	○		G3	○	○	J3		○	②		○
③	○		②	○		H①		○	K①		○	③		○
④	○		③	○		②		○	②		○	④		○
⑤	○		E1①	○	○	I1①		○	③		○	⑤		○
⑥	○		②	○		②		○	K④		○	⑥		○
⑦	○		③	○		③		○	L1①		○	O		○
⑧	○		④	○		④		○	②		○	P1		○
⑨	○		E2	○		⑤		○	③		○	P2		○
⑩	○		F1①	○		⑥		○	④		○			

この中から、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話に共通する構成要素が含まれる A、C、D1、E1、F1、F2、F3、G1、G3、I1³⁴²、P1³⁴³、について、比較していく。

第2項 構成要素 A の比較

構成要素 A（発端：ブラフマー神による創造行為）に関しては、ブラフマー創造神話もアルダナーリーシュヴァラ創造神話も、ブラフマー神による創造の過程であるという内容が基本である。

構成要素 A1（ブラフマー神が創造を行なったが、創造された者たちが繁栄しない）、A2（ブラフマー神が創造のために苦行する）、A3（創造を進めている過程）では双方の内容に似ている部分も多く、ほぼ同一の神話の一部である可能性がうかがえる。A4（ヴィシュヌ神やヴィシュヌ神の化身により、創造を促される）は、ブラフマー創造神話のみに見られる構成要素であり、内容的に見るとブラフマー神の創造行為にヴィシュヌ神が介入する形となっている。その理由としては、Varāha-p.がヴィシュヌ系プラーナ聖典であることが挙げられるだろう。A5（シヴァ神が生類を生み出さず、世界の破壊が起こるまでスターヌのままでいた）、A6（バガヴァットとバガーがリングと台座として存在している）は、アルダナーリーシュヴァラ創造神話のみに見られる構成要素であり、内容的にはブラフマー神の創造行為にシヴァ神（アルダナーリーシュヴァラ）が介入する形となっている。すなわち A5、A6 では、アルダナーリーシュヴァラが、男女に分裂し生産を行なう創造以外にも、異なる形態の創造をなしているということである。それゆえ、アルダナーリーシュヴァラの創造者という役割が、より明確化されていると考えられる。

以下に構成要素 A の記述を示す³⁴⁴。

ブラフマー創造神話（原文は第1章第1節第2項を参照のこと）

A1. ブラフマー神が創造を行なったが、創造された者たちが繁栄しない

①創造された者たち：生類

【Brahma-p. 1.52】プラジャーパティからのたくさんの生類の創造がなされた時でも、創造された生類は、全く繁栄しなかった。

³⁴² 構成要素 F1 と合わせて、構成要素 I1 について論じる。

³⁴³ 構成要素 F1、および構成要素 I1 と合わせて、構成要素 P1 について論じる。

³⁴⁴ 本章では、サンスクリット原文を省略する。サンスクリット原文に関しては、第1章第1節、および第2章第1節を参照のこと。

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.8cd-9】そして生類の創造を促進させるためにこの者（ブラフマー）が創造している間、それらの創造された生類はいかなる理由によっても繁栄しなかった。そこで彼（ブラフマー）は原因に近づくための知性を働かせた。

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.28-29】〔彼らは〕儀礼を行い生産（生殖）を行なう者たちであり、偉大なりシたちによって讃えられている。この世界で、これらの創造されたダルマをはじめとする偉大なりシたちによって、生類たちが知者（ブラフマー）から創造されたが、繁栄しなかった時、彼（ブラフマー）はタマスの要素に覆われ、そして悲しみに打ちひしがれた。

【Līṅga-p. 1.70.261】彼に創造されたこれらの素晴らしい生類が繁栄しなかったので、タマスの要素に覆われたブラフマー神は、悲しみによって落ち込んだ。

【Śiva-p. 5.29.24】創造された生類たちが繁栄しなかったので、〔ブラフマーは〕自身の体を 2 つにしてまさに男と女になった。

【Vāyu-p. 10.1】このように、世界の創造者ブラフマーによって世界〔の生類〕が創られたが、それらの生類はいかなる原因によっても増えなかった。

②創造された者たち：聖仙

【Bhāgavata-p. 3.12.51-52】聖仙たちの偉大な力によってでさえも発展しない創造を知って、彼（ブラフマー）は、再びその増大のために熟考した。カウラヴァよ。おお。これは驚くべきことだ。私が常に従事しているにもかかわらず、生類が全く繁栄しない。この場合、確実に運命が邪魔をしている。

A2. ブラフマー神が創造のために苦行する

【Padma-p. 1.40.67】彼ら苦行をするバラモンたちが去ったまさにその時、〔ブラフマーは〕さらに非常に厳しい最高の状態の段階の苦行をしていた。

A3. 創造を進めている過程

【Agni-p. 17.15-17】ブラフマーの心から生まれた 7 人と言われるマリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタを〔創った〕。最高の者よ。この 7 人は生き物やルドラたちを生み出した。自身を 2 つにして、半身によって男性に、半身によって女性になった。そして、かのブ

ラフマーは彼女の中に生き物たちを創造した。

【Brahma-p. 43.30】それから、そのような存在である全世界の偉大な神ブラフマーは、五大要素を合わせた〔世界〕を徐々に創っていった。

【Kūrma-p. 1.8.5-6】バラモンたちよ。〔その一対は〕アダルマーチャラナと不吉な性格のヒンサーである。そこで、かのブラフマー神は自分のその輝く体を捨てた。さらに身体を2つにし、半分が男性に、半分が女性になった。男性神はヴィラージュを創った。

【Matsya-p. 3.30-31】〔ブラフマー神は〕世界創造のために、心の中でサーヴィットリーを念想し、そして唱える者（ブラフマー）は、汚れない体を自分から分けて、半身を女性の姿にし、半身を男性の姿にした。そして彼女はシャタルーパーと呼ばれ、サーヴィットリーとも呼ばれた。

【Śiva-p. 2.1.16.3-9】そして私は他の者たちを創造しても満足しなかった。聖者よ。そこで、アンバーを共なるシヴァを瞑想し、私はサーダカたちを創造した。聖者よ。マリーチを私の両目から、ブリグを心から、アングラスを頭から、聖者の最高者プラハをヴィヤーナから、プラスティヤをウダーナから、ヴァスィシュタをサマーナから、クラトゥをアパーナから、アトリを耳から、ダクシャをプラーナから、あなた（ナーラダ）を膝から、カルダマ仙を影から、私は創った。〔さらに〕私は、全てを成就させる手段であるダルマをサンカルパから創った。このように私はこれらの最高のサーダカたちを創り、マハーデーヴァの恩恵によって、満足した。聖者の最高者よ。そして、私の命令によって、サンカルパから生まれたダルマは、人間の姿を得て、サーダカたちと共に動き始めた。愛しき者よ。そして、私は自分の肢体の様々な部分から、神からアスラまでの無数の息子たちを、彼らにそれぞれの体を与えて創った。聖仙よ。

【Kālikā-p. 25.1-43】ブラフマー神が原子レベルの創造をし、その維持のためにヴィシュヌ神になり、更に地球を水から持ち上げて世界像創造をするためにヴァラーハになる。

【Śiva-p. 7.1.16.4-26】ブラフマー神による創造の過程でアルダナーリーシュヴァラが創造を行なう。

【『マヌ法典』1.1-31[渡瀬 1990 pp. 21-26]】ブラフマンが世界創造と生類創造をする。

A4. ヴィシュヌ神やヴィシュヌ神の化身により、創造を促される。

【Varāha-p. 2.13】このようになっている私（ヴァラーハ）の臍の蓮の上に四面〔のブラフマー〕が現れ出た。女神よ。マハーマティーよ。私は彼（ブラフマー）に「生類を創造せよ」と言った。

アルダナーリーシュヴァラ創造神話（原文は第2章第1節第2項を参照のこと）

A1. ブラフマー神が創造を行なったが、創造された者たちが繁栄しない

①創造された者たち：生類

【Mārkaṇḍeya-p. 47.3-4】神々を始めとして動かないものまでが、トリグナから成るものの対象であると知られる。このように、〔ブラフマー神によって〕動くものや動かないものという存在が創られた。その賢者（ブラフマー）の〔創造した〕それら全ての生類が増えなかったので、〔ブラフマーは〕自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。

【Padma-p. 1.3.166】このように〔ブラフマーによって〕動くものや動かないものという存在が生み出された。彼の思考〔によるもの〕だったにもかかわらず、これら全ての生類は繁栄しなかった。

【Śiva-p. 3.3.2】創造主（ブラフマー）によって創造された全ての生類が繁栄しなかったので、心配した彼（ブラフマー）は、それゆえ非常に苦しんだ。

【Vāyu-p. 9.67】このように〔ブラフマーによって〕動くものや動かないものという存在が生み出された。彼の思考〔によるもの〕だったにもかかわらず、これらの創造された生類は繁栄しなかった。

【Viṣṇu-p. 1.7.3-4】このように〔ブラフマーによって〕動くものや動かないものという存在が創られた。この賢者（ブラフマー）の〔創造した〕それら全ての生類が増えなかったので、〔ブラフマーは〕自分に似た心から生まれた他の息子たちを創った。

②創造された者たち：聖仙

【Mārkaṇḍeya-p. 47.4-10】その賢者（ブラフマー）の〔創造した〕それら全ての生類が増えなかったので、〔ブラフマーは〕自分に似た、心から生まれた他

の息子たちを創った。すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラスティヤ、ブラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。彼らは9人のブラフマーとして、プラーナ聖典において定められている。そして、ブラフマーはさらに、自身の怒りから生まれたルドラと、サンカルパ、前述の者たちより先に生まれたダルマを創った。そして、自己創造者（ブラフマー）によって、以前にサナンダナなどが創られた。彼ら〔サナンダナなど〕は、世界に関わることなく、無関心で〔自身の事に〕専心していた。彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように、彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは、大きな怒りを感じた。そこから、太陽に等しく、大きな体を持ち、半身が女性である男性の姿の者が生まれた。「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、それから彼（ブラフマー）は消えた。

【Padma-p. 1.3.167-171】それから彼は、自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。ブリグ、私（プラスティヤ）、ブラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタこそが〔その〕心から生まれた息子たちである。彼らは9人のブラフマーとしてプラーナ聖典に定められている。サナンダナなど、創造者によって以前に創られた彼らは、その世界における生類〔の創造〕に無関心で、創造しなかった。まさに全ての者たちは、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように、彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは三界を燃やせるほど大きな怒りを感じた。彼の怒りから燃える炎の輪が生じた。

【Vāyu-p. 9.68-75】それから彼は、自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラスティヤ、ブラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。彼らは9人のブラフマーとしてプラーナ聖典に定められている。彼らは皆、ブラフマー自身であり、ヴェーダに関して語れる者である。そして、祖先の中の祖先ブラフマーはさらに、自身の怒りから生まれたルドラと、サンカルパとダルマを創った。初めに、ブラフマーは自身に似た心から生まれた息子たち、サナカをともなったサナンダナと博識なサナータナと遍在するサナトクマーラを創った。彼らは、世界〔の創造〕に無関心であり、永遠であるので〔創造を〕もたらさない。彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように、彼らが、世界の〔生産〕活動に無関心であったので、金色の胎児である神パラメーシュティンは熟考した。彼の怒りから人が生まれた。〔その者は〕太陽に等しい輝きをしており、半身に女性を持つ男性の姿であり、炎に

よって非常に輝くようであった。

【Viṣṇu-p. 1.7.4-11】この賢者（ブラフマー）の〔創造した〕それら全ての生類が増えなかったので、〔ブラフマーは〕自分に似た心から生まれた他の息子たちを創った。すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。彼らは9人のブラフマーとしてプラーナ聖典において定められている。まさに同様に、キヤーティ、ブーティ、サンブーティ、クシャマー、プリーティ、サンナティ、ウールツジャー、アナスーヤー、プラスーティを創り、「偉大な魂を持つ彼らの妻になれ」と言って、彼女らの創造者（ブラフマー）は〔9人の聖仙に彼女たちを〕与えた。サナンダナなど、創造者（ブラフマー）によって以前に創られた彼らは、世界における生類〔の創造〕に無関心で、創造しなかった。彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは、三界を燃やすことが出来るほど大きな怒りを感じた。彼の怒りから、燃える火炎の輪が生じ、三界全てに満ちた。聖仙よ。

A2. ブラフマー神が創造のために苦行する

【Kūrma-p. 1.11.1】このようにマリーチなどを創造してから、神々の神であるピターマハは、心から生まれた息子たちと共に、最高の苦行をした。

【Liṅga-p. 1.41.7-9】蓮から生まれた者によって〔創られた〕生類が、この世界で繁栄しなかったので、ブラフマー神は繁栄のために、心から生まれた息子たちと共に、〔シヴァ〕神に対し、自身で厳しい苦行をした。そして、かの〔シヴァ〕神は、彼の苦行に満足し、〔ブラフマーの〕願いを知り、ブラフマー神の額の中央を貫き、「私はお前の息子である。」と言って、女性と男性を〔兼ね備えた〕姿になった。

【Liṅga-p. 1.41.37-38】そして、アシュタムールティの恩恵によって、ヴィランチは再び創造した。ブラフマー神は、他の（前の）カルパにおいて、動くものや動かないものにおけるその全てを創造した後、千ユガ期の間眠り、〔その後目が覚めて〕生類を創りたいと考え、それから非常に過酷な苦行をした。

【Śiva-p. 2.1.15.54】私はまさにハリによって「シヴァへの苦行をなせ」と教えられた。最高の聖者よ。非常に過酷な最高の苦行した。

【Śiva-p. 3.3.5-7】「シャンブの創造力なしには、これらの生類は生まれないだろう。」そのように考えたブラフマーは、苦行をし始めた。最高のシャクティであるシヴァーと結合したパラメーシュヴァラを、心の中で喜んで考え、〔ブラフマーは〕主（シヴァ）に対し最高の苦行をした。かのスヴァヤンブーが、厳しい苦行に専念していたので、すぐさま、かのシヴァ神は満足した。

【Śiva-p. 7.1.16.5】まさに生類の繁栄のために、今、あなたによって苦行がなされた。この苦行で私は満足した。ゆえに、お前の望むものを与えよう。

A3. 創造を進めている過程

【Linga-p. 1.5.28】創造の初めに、黄金の卵から生まれた者である創造者がアルダナーリーシュヴァラを見て、「〔汝を〕分けよ」と言った時に、彼はそのように〔男女2つに〕なった。

【Skanda-p. 7.2.9.1-5】「私によって、動くものから動かないものまでの三界の全て〔のもの〕が創られた時、私はこの姿を捨て、その時バヴァを創ろう。汝は、ピターマハの偉大さとなるだろう。直ちに、そのように創りなさい。」ブラフマーの言葉を聞き、ヴィシュヌに促されて、非常に不思議な山頂にやってきた。あなたによって思議されるべきではなく、ブラフマーに言われたことをなすべきである。「分かりました。」と言って、シヴァ神はそこから消えた。ブラフマーは頭の中のメール山の山頂に心で行った。ヴェーダの朗唱に通曉したピターマハである創造主は、苦行をし、アタルヴァヴェーダを朗誦した。

【Varāha-p. 2.42-48】未顕現から生まれたブラフマーの9種の創造が起きた。それはどのように神において増えたのか。それを私に語りなさい。不滅の者よ。ヴァラーハは言った。初めにルドラを始めとする偉大な苦行者たちがブラフマーによって創造された。それから、サナカなどが、そしてマリーチなどが創られた。〔それは〕マリーチ、アトリ、アンギラス、ブラハ、クラトゥ、プラスティヤ、偉大な輝きを持つブラチェータス、ブリグ、ナーラダと、10番目が偉大な苦行者ヴァシシュタである。彼（ブラフマー）によって、サナカたちは自制という名の性質を付与され、聖仙ナーラダ1人を除くマリーチなどは活動という名〔の性質を付与された〕。それが最初のプラジャーパティで、〔ブラフマーの〕右の親指から生まれた者である。そこで、彼（プラジャーパティ）の系譜の最初に、この動くものや動かないものから成る世界が〔生じた〕。神やダーナヴァ、ガンダルヴァ、蛇、鳥、という高德なもの全てがダクシャの娘たち

から生まれた。かのルドラと呼ばれる息子は、かのパラメーシュティンの眉をしかめた額から、怒りによって生まれた。

A5. シヴァ神が生類を生み出さず、世界の破壊が起こるまでスターヌのままでいた

【Linga-p. 1.70.314-323】ブラフマー神はその者（ルドラ）を見て言った。「そのような生類を創るな。〔汝〕自身に似た生類を創るべきではない。神よ、汝に敬礼する。汝に幸あれ。汝は他の死を伴う（死すべき）生類を創りなさい。死の来ない生類は、儀式を執り行わないだろう。」このように言われた彼（ルドラ）は、彼（ブラフマー）に言った。「私は、死や老が訪れる生類を創らないだろう。あなたに幸あれ。私は留まるので、あなたが生類を創りなさい。私によって創られた多様な紫紅色の何千もの者たちは自滅する生類である。これらの神々はルドラという名の偉大な力を持つ者たちとなるだろう。〔彼らは〕大地や天地の間、さらに〔あらゆる〕方角に存在している。100人のルドラたちは、平静を保ち、儀式を執り行う者たちとなるだろう。全ての神々の集まりと共に供物の享受者となるだろう。これらの神々（ルドラたち）は数々のマヌヴァンタラの間、別々に存在するだろう。この神々（全ての神々）と共に敬われ、この世界で、ユガの終わりに至るまでとどまるだろう。」このように、賢者である偉大な神（ルドラ）によって言われた創造主ブラフマーは、敬礼して、喜んで答えた。「汝に言われた通り、そのようにしよう。汝に幸あれ。遍在する者よ。」「[そのように]」ブラフマーによって認められた時、全て〔の創造〕が起こった。それ以来、神々の神は、生類を生み出さなかった。生類の破滅が起こるまで、禁欲生活を保ったスターヌのままでいた。

A6. バガヴァットとバガーがリングと台座として存在している

【Linga-p. 1.99.6cd-7】彼女はバガーという名であり、世界の母であり、リングの像の3つの台座である。そしてリングはバガヴァットであり、両者（バガーとバガヴァット）によって世界の創造がある。バラモンたちよ。リングの姿をしたシヴァは、タマスの上にある光として存在している。

第3項 構成要素 C の比較

構成要素 C（シャタルーパーによる苦行）では、ブラフマー創造神話は①（Bにおいて分裂した女性半身シャタルーパーが苦行する）のみであり、アルダナーリーシュヴァラ創造神話は②（シャタルーパーが苦行し、汚れを除去する）のみである。

①と②はどちらも、シャタルーパーが苦行し、マヌを夫としている。しかし、①（ブ

ラフマー創造神話)では、苦行をした結果、マヌを夫としているのに対し、②(アルダナーリーシュヴァラ創造神話)では、苦行により汚れを除去した後、マヌを夫としている。すなわち、苦行の恩恵が、①では夫を得ることであり、②では汚れの除去である。さらに②では、汚れの除去の恩恵(結果)が夫を得ることである。そして、アルダナーリーシュヴァラ創造神話では、「苦行によって汚れを除去した(taponirdhūtakalmaṣām)」という一語が必ず書かれており、文章もほとんど平行句である。ブラフマー創造神話では、内容はほぼ一致しており、平行句もあるが、アルダナーリーシュヴァラ創造神話ほどの一致はない。構成要素 C に関しては、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の記述の方がより定型化されていると言える。

以下に構成要素 C の記述を示す。

ブラフマー創造神話 (原文は第 1 章第 1 節第 4 項を参照のこと)

①構成要素 B において分裂した女性半身シャタルーパーが苦行する

【Agni-p.18.1】スヴァーヤンブヴァであるマヌは苦行に従事しているシャタルーパーにプリヤヴラタとウッターナパーダという 2 人の息子と美しい娘を産ませた。

【Brahmāṇḍa-p.1.2.9.35-36】女性として創造された半身はシャタルーパーになった。その女神は、1 億年の間、最高に困難な苦行を行ない、夫として輝かしい名声の男性を得た。そしてまさに彼は以前にスヴァーヤンブヴァであり、プルシャであり、マヌと呼ばれた。

【Kūrma-p.1.8.9-11】その男性は、スヴァーヤンブヴァであるマヌ神であり、聖者であった。かのシャタルーパーという名の女神は非常に困難な苦行をし、輝かしい名声のマヌを夫として得た。そして彼とそのシャタルーパーは 2 人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダ、そして 2 人の素晴らしい娘をもうけた。彼女たちのうち、プラスーティという娘をマヌはダクシャに与えた。

【Līṅga-p.1.70.269-270】ブラフマーのかの最初の体(男性の半身)は、天を覆ってとどまった。半身から創られたシャタルーパーという女神は、1 億年の間、最高に困難な苦行をし、夫として輝く名声の男性を得た。

【Śiva-p.2.1.16.12】そこで、男性は最高の〔創造の〕手段であるスヴァーヤンブヴァになった。かの女性シャタルーパーと呼ばれるヨーギニーであり、苦行者である。

【Śiva-p.5.30.3】彼女（シャタルーパー）は、100 年の間、最高に困難な苦行を行ない、熱烈な苦行を〔している〕プルシャを夫として得た。

【Śiva-p.7.1.17.4】一方、かの女神シャタルーパーは非常に困難な苦行をし、輝かしい名声のマヌを夫として得た。

【Vāyu-p.10.10-11】半身から創られた女性であるシャタルーパー女神は、1 億年の間、最高に困難な苦行をし、〔彼女は〕夫として輝く名声の男性を得た。彼こそ最初のスヴァーヤンブヴァという男性マヌであると言われる。

アルダナーリーシュヴァラ創造神話（原文は第 2 章第 1 節第 3 項を参照のこと）

②シャタルーパーが苦行し、汚れを除去する

【Mārkaṇḍeya-p. 47.14】主でありスヴァーヤンブヴァであるマヌ神は、妻として、苦行によって汚れを除去したかの女性シャタルーパーを娶った。

【Padma-p. 1.3.176cd-178ab】それからブラフマーは、以前に〔ブラフマー〕自身から生まれ、〔ブラフマー〕自身でもあるスヴァーヤンブヴァをマヌとして創造の〔の仕事〕に任命した。王よ。スヴァーヤンブヴァであるマヌという名の神は、妻として、苦行によって汚れを除去した、かの女性シャタルーパーを娶った。

【Viṣṇu-p. 1.7.17】スヴァーヤンブヴァである主マヌ神は、妻として、苦行によって汚れを除去したかの女性シャタルーパーを娶った。

第 4 項 構成要素 D1 の比較

構成要素 D1（マヌとシャタルーパーに関する記述：マヌとシャタルーパーが夫婦関係になる）では、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の記述は構成要素 D1①（マヌとシャタルーパーが夫婦になる：マヌがシャタルーパーを妻にする）だけであり、ほぼ平行情句となっている。一方、ブラフマー創造神話では、マヌとシャタルーパーが夫婦になるという根本的な内容は一致しているが、マヌがシャタルーパーを娶るかシャタルーパーがマヌを夫にするか、ラティの語源の説明が付加されているかどうかといった違いが述べられている。構成要素 C と同様に、構成要素 D1 でも、アルダナーリーシュヴァラ

創造神話の方が、より完全に定型化されていると言える。

以下に構成要素 D1 の記述を示す。

ブラフマー創造神話 (原文は第 1 章第 1 節第 5 項を参照のこと)

D1. マヌとシャタルーパーが夫婦になる

①マヌがシャタルーパーを妻にする

【Brahma-p.1.58】 このように、プラジャーパティであるアーパヴァは、生類を創造することを望んだ。かの男性は、子宮から生まれたものではないシャタルーパーを妻として娶った。

②シャタルーパーがマヌを夫にする

【Kūrma-p.1.8.9-11】 その男性は、スヴァーヤンブヴァであるマヌ神であり、聖者であった。かのシャタルーパーという名の女神は、非常に困難な苦行をし、輝かしい名声のマヌを夫として得た。そして彼とそのシャタルーパーは 2 人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダ、そして 2 人の素晴らしい娘をもうけた。彼女たちのうち、プラスーティという娘をマヌはダクシャに与えた。

【Śiva-p.5.30.3】 彼女（シャタルーパー）は、100 年の間、最高に困難な苦行を行ない、熱烈な苦行を〔している〕プルシャを夫として得た。

【Śiva-p.7.1.17.4】 一方、かの女神シャタルーパーは、非常に困難な苦行をし、輝かしい名声のマヌを夫として得た。

③マヌがシャタルーパーを妻とし、さらにラティという名前の起源が語られる

【Brahmāṇḍa-p.1.2.9.37-38】 ここでは 71 ユガが彼のマヌヴァンタラと呼ばれる。そして、プルシャは妻として子宮から産まれなかったシャタルーパーを得て、彼は彼女と共に楽しんだ。それゆえ、彼女はラティと呼ばれる。カルパの初めにこの最初の結合があった。

④シャタルーパーがマヌを夫とし、さらにラティという名前の起源が語られる

【Līṅga-p.1.70.269-273】 ブラフマーのかの最初の体（男性の半身）は、天を覆ってとどまった。半身から創られたシャタルーパーという女神は、1 億年の間、最高に困難な苦行をし、夫として輝く名声の男性を得た。彼こそ、最初のスヴァーヤンブヴァという男性マヌであると言われる。その 70 の〔大〕ユガ期を、この世界では、マヌヴァンタラと言う。かの男性は子宮から生まれたのではないシャタルーパーを妻にした。彼は彼女と共に楽しんだ。それゆえ、彼女はラ

ティと呼ばれる。最初の自身の〔半身同士の〕結合が、カルパの初めに起こった。ブラフマーはヴィラージュを創り、かの男性ヴィラージュが出来た。

【Vāyu-p.10.10-13】 半身から創られた女性であるシャタルーパー女神は、1 億年の間、最高に困難な苦行をし、〔彼女は〕夫として輝く名声の男性を得た。彼こそ最初のスヴァーヤンブヴァという男性マヌであると言われる。その 71 の〔大〕ユガ期をこの世界ではマヌヴァンタラという。男性は、子宮から生まれた者ではないシャタルーパーを妻にし、彼は、彼女と共に楽しんだ。それゆえ彼女はラティと呼ばれる。最初の結合が、カルパの初めに行われた。

アルダナーリーシュヴァラ創造神話（原文は第 2 章第 1 節第 4 項を参照のこと）

D1. マヌとシャタルーパーが夫婦になる

①マヌがシャタルーパーを妻にする

【Mārkaṇḍeya-p. 47.14】 主でありスヴァーヤンブヴァであるマヌ神は、妻として、苦行によって汚れを除去したかの女性シャタルーパーを娶った。

【Padma-p. 1.3.176cd-178ab】 それからブラフマーは、以前に〔ブラフマー〕自身から生まれ、〔ブラフマー〕自身でもあるスヴァーヤンブヴァをマヌとして創造の〔の仕事〕に任命した。王よ。スヴァーヤンブヴァであるマヌという名の神は、妻として、苦行によって汚れを除去した、かの女性シャタルーパーを娶った。

【Viṣṇu-p. 1.7.17】 スヴァーヤンブヴァである主マヌ神は、妻として、苦行によって汚れを除去したかの女性シャタルーパーを娶った。

第 5 項 構成要素 E1 の比較

構成要素 E1（マヌとシャタルーパーの子供たち：息子や娘を生み出した）は、マヌとシャタルーパーに二人の息子であるプリヤヴラタとウッターナパーダと娘たちが生まれるというものである。この構成要素に関して、ブラフマー創造神話では娘に関する内容が異なって書かれているが、アルダナーリーシュヴァラ創造神話では E1①（息子：プリヤヴラタとウッターナパーダ、娘：アーケーティとプラスーティ）に統一されている³⁴⁵。そのため、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の方が定型化が進んでいると言え

³⁴⁵ Mārkaṇḍeya-p. 47.15-16ab の B 版では、娘の 1 人がアーケーティではなく、リッディとなっているため、異なる説もある。

る。

以下に構成要素 E1 の記述を示す。

ブラフマー創造神話 (原文は第 1 章第 1 節第 6 項を参照のこと)

E1. 息子や娘を生み出した

①息子：プリヤヴラタとウッターナパーダ、娘：アーケーティとプラスーティ

【Brahmāṇḍa-p.1.2.9.40-42】かのヴァイラージャでありプルシャであるマヌは、生類の創造をした。シャタルーパーはヴァイラージャであるプルシャから 2 人の勇者を生んだ。2 人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダは、息子を持つ者たちにとって最も素晴らしい〔息子たち〕である。〔さらにシャタルーパーから〕とても幸運な 2 人の娘が生まれ、これらの生類が生まれた。アーケーティと名付けられた女神とプラスーティの 2 人は吉祥である。そしてスヴァーヤンブヴァ神はプラスーティをダクシャに与えた。

【Kūrma-p.1.8.9-11】その男性は、スヴァーヤンブヴァ、聖者であった。かのシャタルーパーという名の女神は困難な苦行をし、輝かしい名声のマヌを夫として得た。そして彼とそのシャタルーパーは 2 人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダ、そして 2 人の素晴らしい娘をもうけた。彼女たちのうち、プラスーティという娘をマヌはダクシャに与えた。そして、心から生まれた創造者ルチはアーケーティを娶った。

【Līṅga-p.1.70.275-276】力強いヴァイラージャとシャタルーパーは、世界から尊敬される 2 人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダをもうけた。さらに、2 人の吉祥な娘が〔生まれ〕、この 2 人からこれらの生類は生まれた。2 人の女神たちは、その名をアーケーティとプラスーティという。

【Śiva-p.7.1.17.5-6】その後、かのシャタルーパーは 2 人の息子をもうけた。プリヤヴラタとウッターナパーダという 2 人の息子は、子供を持つ親の力強い息子たちである。さらに、2 人の非常に吉祥な娘が〔生まれた〕。2 人によってこれらの〔この世界の〕生類は生まれた。1 人目（姉）がアーケーティと知られるべきで、妹がプラスーティといわれる。

【Vāyu-p.10.15-17】その人類創造はヴァイラージャである。創造において、かの男性はマヌになった。力強い男性ヴァイラージャとシャタルーパーは、さらに息子をもうけることを願って、プリヤヴラタとウッターナパーダという 2 人

の息子をもうけた。さらに 2 人の吉祥な娘が〔生まれ〕、この 2 人からこれらの生類は生まれた。吉祥な女神たちは、その名をアーケーティとプラスーティという。スヴァーヤンブヴァ神はプラスーティをダクシャに与えた。

②息子：プリヤヴラタとウッターナパーダ、娘：アーケーティとデーヴァフーティとプラスーティ

【Bhāgavata-p.3.12.56】そして、彼はさらに、シャタルーパーとの間に、プリヤヴラタ、ウッターナパーダと 3 人の娘アーケーティ、デーヴァフーティ、プラスーティという 5 人の子を授かった。バラタ族の長よ。最高の者よ。

【Śiva-p.2.1.16.14-15b】彼（マヌ）によって彼女（シャタルーパー）の中に家族が増え、プリヤヴラタとウッターナパーダ、更に 3 人の娘、アーケーティ、デーヴァフーティ、プラスーティが生まれた。〔彼らは〕良く知られている。

③息子：プリヤヴラタとウッターナパーダ、娘：名前は不明

【Agni-p.18.1】スヴァーヤンブヴァであるマヌは苦行に従事しているシャタルーパーにプリヤヴラタとウッターナパーダという 2 人の息子と美しい娘を産ませた。

④息子：プリヤヴラタとウッターナパーダのみ

【Śiva-p.5.30.5】知的なシャタルーパーはヴァイラージャであるプルシャから〔プリヤヴラタとウッターナパーダを〕もうけた。〔彼女から〕プリヤヴラタとウッターナパーダという強靱な肉体を持つ者たちが生まれた。

アルダナーリーシュヴァラ創造神話（原文は第 2 章第 1 節第 5 項を参照のこと）

E1. 息子や娘を生み出した

①息子：プリヤヴラタとウッターナパーダ、娘：アーケーティとプラスーティ

【Mārkaṇḍeya-p. 47.15-16ab】そして、その男性（マヌ）からシャタルーパーは、自身の善業によって名高い 2 人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダを生んだ。そして、父（マヌ）はさらに、アーケーティとプラスーティという 2 人の娘を〔もうけた〕。

【Padma-p. 1.3.178cd-179ab】そして、その男性によってシャタルーパー女神は、プリヤヴラタとウッターナパーダとプラスーティとアーケーティと呼ばれる〔子供たち〕を生んだ。

【Viṣṇu-p. 1.7.18-19ab】 その男性とシャタルーパー女神は、プリヤヴラタとウッターナパーダ〔という息子〕たちとプラスーティとアーケーティと呼ばれる美貌と寛大さと徳をそなえた2人の娘たちをもうけた。ダルマを知る者よ。

第6項 構成要素 F1、I1 の分析

ブラフマー創造神話の F1①と F1②に共通する内容に「ルドラがブラフマー神の怒りから生まれる」というものがある。これはアルダナーリーシュヴァラ創造神話では構成要素 I1（アルダナーリーシュヴァラの出現：ブラフマー神からアルダナーリーシュヴァラが現れる）における①（ブラフマー神の怒りにより、ルドラが額から生まれる）、②（ブラフマー神が怒り、生命（呼吸）を捨てたその口から、ルドラが生まれる）、⑦（ブラフマー神の怒りから、アルダナーリーシュヴァラが生まれる）と共通している。比較しやすいよう、ブラフマー創造神話 F1①、②とアルダナーリーシュヴァラ創造神話 I1①、②、⑦を、表にして以下に示す（表 20）。

表 20 構成要素 F1①、②と I1①、②、⑦におけるルドラ（アルダナーリーシュヴァラ）の描写

分類	文献名	誕生時の状況	誕生者についての描写
ブラフマー創造神話			
F1 ①	Bhāgavata-p. 3.12.7-10	ブラフマー神が思考によって制御しようとしているにもかかわらず、ブラフマー神の両眉の中央から、一瞬にして激怒が誕生	ブラフマー神の激怒、赤味がかかった青色の息子、泣いている、ルドラ
	Varāha-p. 2.14-16	どうすべきか考えたブラフマー神が非常に怒った、そのブラフマー神の怒りから誕生	1人の男の子、泣いている、ルドラ
F1 ②	Brahma-p. 1.46	7人（マリーチたち）が生まれた後すぐにブラフマー神の怒りから誕生	息子ルドラ
	Śiva-p. 5.29.17	ブラフマー神の怒りから誕生	ルドラ（「ルドラたちを創った」とあるので、ルドラだけではない）
アルダナーリーシュヴァラ創造神話			
I1①	Padma-p. 1.3.172-173	ブラフマー神が怒って眉をしかめた額から誕生	真昼の太陽に等しい光、半身が女性である男性の姿、巨大な身体を具えたルドラ
	Varāha-p. 2.48-49	ブラフマー神が怒って眉をしかめた額から誕生	半身が女性である男性の姿、大きくて非常に恐ろしい姿、息子ルドラ
	Viṣṇu-p. 1.7.12-13	ブラフマー神が怒って眉をしかめた額から誕生	真昼の太陽に等しい輝き、半身が女性である男性の姿、獐猛で大きな身体を具えたルドラ
I1②	Liṅga-p. 1.41.42	ブラフマー神が怒りに満ち、生命（呼吸）を捨てた時に、ブラフマー神の口から誕生	呼吸から成るルドラ
I1⑦	Mārkaṇḍeya-p. 47.9-10	ブラフマー神の怒りから誕生	太陽に等しい、大きな身体を持つ、半身が女性である男性の姿の者
	Vāyu-p. 9.73cd-75	ブラフマー神の怒りから誕生	太陽に等しい輝き、半身が女性である男性の姿、炎によって非常に輝いている

完全な一致はしていないが、ブラフマー神の怒り、もしくは怒ったブラフマー神の頭

部から生まれたという誕生時の状況と誕生者がルドラという名であること³⁴⁶が一致しており、同一の記述のヴァリエーションと考えることができるだろう。ここから言えることは、ブラフマー創造神話においてブラフマー神が創造の過程で生み出した者たちの中の1人である男性ルドラは、アルダナーリーシュヴァラ創造神話においては男女に分裂し創造を行なう者であるルドラ（アルダナーリーシュヴァラ）となっているということである。このことをふまえて、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話のどちらが先に書かれたかを考えてみたい。

元々、創造された者たちの中の1人として描かれていたルドラが、時代を経て、神話のヴァリエーションが増えていき、男女に分裂する創造者の役割を持つアルダナーリーシュヴァラに変化することは十分にあり得ることである。しかし、逆に男女に分裂する創造者であるアルダナーリーシュヴァラが、その役割をブラフマー神に返して、創造された者たちの中の1人へと戻ることは可能だろうか。それも男女に分裂する創造者の性格を一切見せずにである。神話には多数のヴァリエーションがあり、その中には初期の内容をそのまま受け継いだ記述が残っていても不思議ではない。しかし、ブラフマー創造神話におけるルドラには、男女に分裂する創造者の可能性を感じさせない記述しか見受けられない。本論文で取り扱っていない神話の中にそのようなものがある可能性は否定できないが、本論文で取り上げた神話から考察すると、ルドラがアルダナーリーシュヴァラに変化したと考えるのが自然である。そのため、この構成要素から導き出せる結論は、ブラフマー創造神話は、アルダナーリーシュヴァラ創造神話に先行する神話であるということである。

以下に、構成要素 F1①、F1②、I1①、I1②、I1⑦の記述を示す。

ブラフマー創造神話（原文は第1章第1節第7項を参照のこと）

F1. ルドラの創造

①怒りから生まれる。「泣く」ので「ルドラ」と名付けられる

【Bhāgavata-p.3.12.7-10】思考によって制御しようとしているにもかかわらず、一瞬にしてプラジャーパティの両眉の中央から、彼の激怒が、赤味がかった青色の息子として生まれた。神々の年長者であるかのバヴァ神は泣いた。「創造者よ、世界の父よ。私に名と〔住む〕場所をくれ。」蓮から生まれた者は、彼のそのような言葉を受け入れ、吉祥な言葉で〔次のように〕言った。「泣くでない。それを汝にやろう。神の最高者よ。興奮した子供のように泣いたので、それ故、人々は汝をルドラという名で呼ぶであろう。」

³⁴⁶ I1⑦ではルドラという名は述べられていないが、他のアルダナーリーシュヴァラ創造神話における誕生者の描写とほぼ同じ描写をしているため、同一人物であることは明らかであろう。

【Varāha-p.2.14-16】 このように言って私は消えた。世界の母よ。彼（ブラフマー）もまさにどのように〔すべきか〕を考えて、かの未顕現から生まれたブラフマーが非常に怒り、それによって〔ブラフマー〕自身の怒りから生まれた1人の男の子が生まれ出るであろう時まで、留まった。泣いている彼はかの未顕現の姿のブラフマーによって〔泣くことを〕止められ、「私に名前を下さい」と言った。それゆえ〔ブラフマーは〕その者にルドラという〔名を〕与えた。

②怒りから生まれる

【Brahma-p.1.46】 そして、ナーラーヤナの性質を有する7人がブラフマーから生まれるやいなや、すぐにブラフマーは激怒から生まれた息子ルドラを創った。

【Śiva-p.5.29.17】 彼らはプラーナ聖典において7人のブラフマーと定められている。そしてさらにブラフマーは怒りから生じたルドラたちを創った。

アルダナーリーシュヴァラ創造神話（原文は第2章第1節第9項を参照のこと）

I1. ブラフマー神からアルダナーリーシュヴァラが現れる

①ブラフマー神の怒りにより、ルドラが額から生まれる

【Padma-p. 1.3.172-173】 そして、ブラフマーの光は三界全てを燃やせる〔力があつた〕。怒りに燃え、眉をしかめた彼の額から、その時、真昼の太陽に等しい光を持ち、半身が女性である男性の姿をしており、巨大な体を具えたルドラが生まれた。

【Varāha-p. 2.48-49】かのルドラと呼ばれる息子は、かのパラメーシュティン（最高神、ブラフマー）の眉をしかめた額から、怒りによって生まれた。〔それは〕半身が女性である男性の姿をしており、大きく、非常に恐ろしい姿であつた。「〔汝〕自身を分けよ。」と言ってブラフマーは再び消えた。

【Viṣṇu-p. 1.7.12-13】 怒りに燃え、眉をしかめた彼の額から、その時、真昼の太陽に等しい輝きを持つ、半身が女性である男性の姿の、獐猛で大きな体を具えたルドラが生まれた。彼に「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、それからブラフマーは消えた。

②ブラフマー神が怒り、生命（呼吸）を捨てたその口から、ルドラが生まれる

【Līṅga-p. 1.41.42】 怒りに満ちた創造神（ブラフマー）は〔自身の〕生命（呼吸）を捨てた。そして、神の口から、呼吸から成るルドラが現れた。

⑦ブラフマー神の怒りから、アルダナーリーシュヴァラが生まれる

【Mārkaṇḍeya-p. 47.9-10】このように、彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは、大きな怒りを感じた。そこから、太陽に等しく、大きな体を持ち、半身が女性である男性の姿の者が生まれた。「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、それから彼（ブラフマー）は消えた。

【Vāyu-p. 9.73cd-75】彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように、彼らが世界の〔生産〕活動に無関心であったので、金色の胎児である神パラメーシュティンは熟考した。彼の怒りから人が生まれた。〔その者は〕太陽に等しい輝きをしており、半身が女性である男性の姿であり、炎によって非常に輝くようであった。

第7項 構成要素 F1、P1 の分析

ブラフマー創造神話にある構成要素 F1（その他の者たちの創造：ルドラの創造）には、F1①と F1③に共通する「泣いた（動詞√rud）ためにルドラ（rudra）と名付けられた」という誕生譚が含まれている。これは、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の構成要素 P1（ルドラの説明：ルドラという名の由来）と共通する。しかし、共通する内容の誕生譚であるにも関わらず相違点が多くある。ブラフマー創造神話 F1①、F1③では、1人のルドラがブラフマー神に対し名前をくれるように要求し、その結果ルドラと言う名を得ている。アルダナーリーシュヴァラ創造神話 P1 では、ルドラは多数いて、泣きわめいて走り回ったためにルドラと呼ばれるようになったとしている。これらの構成要素を同一と断言するには難しいため、類似する記述をさらに見つけ出し検討する必要がある。

以下に構成要素 F1①、F1③、P1 の記述を示す。

ブラフマー創造神話（原文は第1章第1節第7項を参照のこと）

F1. ルドラの創造

①怒りから生まれる。「泣く」ので「ルドラ」と名付けられる

【Bhāgavata-p.3.12.7-10】思考によって制御しようとしているにもかかわらず、一瞬にしてプラジャーパティの両眉の中央から、彼の激怒が、赤味がかかった青色の息子として生まれた。神々の年長者であるかのバヴァ神は泣いた。「創造者よ、世界の父よ。私に名と〔住む〕場所をくれ。」蓮から生まれた者は、彼のそのような言葉を受け入れ、吉祥な言葉で〔次のように〕言った。「泣くでない。それを汝にやろう。神の最高者よ。興奮した子供のように泣いたので、

それ故、人々は汝をルドラという名で呼ぶであろう。

【Varāha-p.2.14-16】このように言って私は消えた。世界の母よ。彼（ブラフマー）もまさにどのように「すべきか」を考えて、かの未顕現から生まれたブラフマーが非常に怒り、それによって「ブラフマー」自身の怒りから生まれた 1 人の男の子が生まれ出るであろう時まで、留まった。泣いている彼はかの未顕現の姿のブラフマーによって「泣くことを」止められ、「私に名前を下さい」と言った。それゆえ「ブラフマーは」その者にルドラという「名を」与えた。

③「泣く」ので「ルドラ」と名付けられる

【Kālikā-p.25.44-46】それから、ブラフマーは非常に力強いヴァラーハに敬礼し、脇の下から神々の神アルダナーリーシュヴァラを創った。最初、彼は生まれた途端に大声で泣き始めた。「何故、泣いているのだ」とブラフマーは、泣いているその者に言った。そこで、「名前を下さい。」と彼（ブラフマー神）にかのマヘーシュヴァラは言った。「泣くが故に、汝はルドラという名前だ。高貴な者よ。泣くでない。」

アルダナーリーシュヴァラ創造神話（原文は第 2 章第 1 節第 16 項を参照のこと）

P1. ルドラという名の由来

【Vāyu-p. 9.78-81】彼ら全ての偉大な魂を持つ者たちは、かの偉大な者に言われた。「世界の繁栄に関して幸福を祈り、世界の一部始終のために、全世界の全ての秩序と恩恵のために、倦むことなく努めなさい。」このように言われ、彼らは泣いて四方八方に走り回った。泣いて走ったために「彼らは」ルドラという名で知られている。彼らによって、この動くものや動かないものの全てが三界に満ちた。世界における彼らの長たちが全世界の維持者となった。

第 8 項 構成要素 F2 の分析

F2 は聖者たちの創造という構成要素である。これはブラフマー神が聖者たちを創造するという内容である。以下に、神話中に述べられる創造された聖者たちの名とその記述順を記した表を示す（表 21）。

表 21 構成要素 F2 における聖者の名³⁴⁷

		マリーチ	アトリ	アンギラス	ブラステイヤ	ブラハ	クラトゥ	ブラチエータス	ヴァスィシシュタ	ブリグ	ナーラダ	ダクシャ	カルダマ	ダルマ	ガウタマ	サナトクマール	ルチ	ルドラ
ブラフマー創造神話	Agni-p. 17.15	①	②	③	④	⑤	⑥		⑦									
	Brahma-p. 1.44-50	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧		⑨							①		②
	Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.16-29	③	⑧	②	④	⑤	⑥		⑨	①		⑦		⑩			⑪	○
	Kālikā-p. 25.51-54	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	①						
	Padma-p. 1.40.69-72	③	④	⑪	⑤	⑥	⑦		⑧	⑩		②		①	⑨			
	Śiva-p. 2.1.16.4-8	①	⑧	③	⑤	④	⑦		⑥	②	⑩	⑨	⑪	⑫				
	Śiva-p. 5.29.16-19	①	②	③	④	⑤	⑥		⑦							⑧		⑨
	マヌ法典	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩							
アルダナーリーシュヴァラ創造神話	Mārkaṇḍeya-p. 47.5	⑥	⑧	⑤	②	③	④		⑨	①		⑦						
	Padma-p. 1.3.167-168	⑥	⑧	⑤	②	③	④		⑨	①		⑦						
	Vāyu-p. 9.69-70ab	⑥	⑧	⑤	②	③	④		⑨	①		⑦						
	Viṣṇu-p. 1.7.5-6	⑥	⑧	⑤	②	③	④		⑨	①		⑦						
	Kūrma-p. 1.10.88-89	①	⑧	③	④	⑤	⑥		⑨	②		⑦						
	Varāha-p. 2.44	①	②	③	⑥	④	⑤	⑦	⑩	⑧	⑨							

³⁴⁷ 縦軸が文献名、横軸が聖者の名前であり、表中の番号は創造された順番である。表には加えなかったが、ブラフマー創造神話：Brahma-p. 43.33-34 には「マリーチなどの聖者たち」という記述があり、アルダナーリーシュヴァラ創造神話：Śiva-p. 2.1.15.49 には「ブラフマー神の心から生まれたサナカなど 5 人の息子」という記述がある。

ブラフマー創造神話ではマリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタの名は一致しているが、プラチェータスなど他の者は登場する文献と登場しない文献がある。聖者の名の記述順もまったく一致していない。一方、アルダナーリーシュヴァラ創造神話では、Varāha-p. 2.44 以外の文献において名も記述順も完全に一致しており、定型化されていると言える。以下にこの聖者たちがどのように描写されているかについての表を示す（表 22）。

表 22 構成要素 F2 における聖者たちの人数の描写

ブラフマー創造神話	Agni-p. 17.15	ブラフマー神の心から生まれた 7 人
	Brahma-p. 1.44-50	7 人のブラフマー+サナトクマーラ、ルドラ
	Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.16-29	9 人のブラフマー+ダルマ、ルチ、ルドラ（12 人が神の性質を具えた系譜の先祖）
	Kālikā-p. 25.51-54	ブラフマー神の心から生まれた 10 人+ダクシャ
	Padma-p. 1.40.69-72	ひじょうに驚異的なマハルシ（偉大な聖仙）
	Śiva-p. 2.1.16.4-8	最高のサーダカ達
	Śiva-p. 5.29.16-19	7 人のブラフマー+サナトクマーラ、ルドラ
	マヌ法典	10 人の人類の主となる偉大なリシ
アルダナーリーシュヴァラ創造神話	Mārkaṇḍeya-p. 47.5	9 人のブラフマー
	Padma-p. 1.3.167-168	9 人のブラフマー
	Vāyu-p. 9.69-70ab	9 人のブラフマー
	Viṣṇu-p. 1.7.5-6	9 人のブラフマー
	Kūrma-p. 1.10.88-89	9 人のブラフマー
	Varāha-p. 2.44	

ブラフマー創造神話における Brahma-p. 1.44-50、Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.16-29、Śiva-p. 5.29.16-19 では、「彼らは 7 人（もしくは 9 人）のブラフマーとしてプラーナ聖典に定められている」という同一の描写が見られ、アルダナーリーシュヴァラ創造神話では Varāha-p. 2.44 以外の記述で「彼らは 9 人のブラフマーとしてプラーナ聖典に定められている」という同一の描写がなされている。

表 21 と表 22 から見て、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話における構成要素 F2 は同一の記述と言える。さらに、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の記述内容の方が、定型化しているため、後代に成立したと考えることが出来る。

以下に構成要素 F2 の記述を示す。

ブラフマー創造神話 (原文は第 1 章第 1 節第 7 項を参照のこと)

【Agni-p. 17.15】ブラフマーの心から生まれた 7 人と言われるマリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタを〔創った〕。

【Brahma-p. 1.44-50】それらの姿をとった創造を欲して、マリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタといった創造主たちを創った。彼（ブラフマー）は、その偉大な輝きを持つ心から生まれた 7 人を創った。彼らは、7 人のブラフマーとして、プラーナ聖典において、定められている。そして、ナーラーヤナの性質を有する 7 人がブラフマーから生まれるやいなや、すぐにブラフマーは激怒から生まれた息子ルドラを創った。そして以前に、最年長であり、遍在するサナトクマーラを〔創った〕。7 人からこれらの生類やルドラたちが生まれた。おお、再生族の者たちよ。スカンダとサナトクマーラは、輝きを集めて、とどまった。それらの 7 人は、神聖であり、偉大なヴァンシャに属し、神々の一団を従えており、儀式の執行者たちであり、子を持つ者たちであり、偉大な聖仙によって飾られる。稲光と稲妻を伴う雲と虹と鳥を彼（ブラフマー）は創った。また初めに彼はパルジャニヤを創った。ヤジュニヤを成就するために、リグとヤジュスとサーマンを創った。

【Brahma-p. 43.33-34】マリーチなどの聖者たち、ガンダルヴァや蛇やラクシャサ、(7 つの天界と〔7 つの〕地獄、〔すなわち〕 14 の世界、及び海を伴った島、ガンガーなどの川を創った。) ヤクシャとヴィディヤダーラや他のもの、及びガンガーなどの川〔を創った〕。そして人と猿、ライオン、色々な種の鳥たち、胎生のもの、卵生のもの、湿生のもの、芽生のものを創った。女神よ。

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.16-29】そして以前に私によってあなたに「プラクリヤー」で言われたように、トレーターユガの間に、マハートマンから生類たちが生まれた。しかし知者から創造されたそれらの生類たちが繁栄しなかったので、自分に似せて〔ブラフマーは〕心から生まれた他の息子たちを創った。ブリグとアンギラス、マリーチ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタ〔という〕心から生まれた息子たちを創った。彼らは、9 人のブラフマーとしてプラーナ聖典において定められている。というのも、アートマンを源泉とする全ての者にとってのブラフマーだからである。さらにブラフマーは、生類に喜びをもたらすダルマと創造者ルチを創った。〔彼ら 2 人は〕太古の者たちにとっても年長者である。〔ブラフマーは〕知から全ての生類に喜びをもたらすダルマを創った。生まれが未顕現の者の心からルチという名の

〔者は〕生まれた。そして、水から生まれた者の心からブリグは生まれた。さらにブラフマーはプラーナからダクシャを、両目からマリーチを創った。名声の本質をしたニーラローヒターであるルドラを創った。そして、頭からアンギラスを、耳からアトリを、同様に〔創った〕。そしてウダーナからプラスティヤを、さらにヴィヤーナからプラハを同様に〔創った〕。ヴァスィシュタはサマーナから生まれた。そしてアパーナからクラトゥを創った。このように生類のはじめ（先祖）には、この 12 人のブラフマーの息子たちが知られている。そしてダルマが彼ら神格の中で最も年長の者であると知られている。そしてブリグを始めとする者たちである生類は、ブラフマルシとして知られている。彼らは儀礼をする太古の家長である。最初にダルマが彼らによって確立された。この 12 人の者たちは、カルパにおいて何度も何度も生類を創造した。彼ら（生類）にとっては、彼ら 12 人の者たちが、神的であり神の性質をそなえたヴァンシャである。〔彼らは〕儀礼を行い生産（生殖）を行なう者たちであり、偉大なりシたちによって讃えられている。この世界で、これらの創造されたダルマをはじめとする偉大なりシたちによって、生類たちが知者から創造されたが、繁栄しなかった時、彼（ブラフマー）はタマスに覆われ、そして悲しみに打ちひしがれた。

【Kālikā-p. 25.51-54】ブラフマー神は彼に言った。「創造をなせ。創造主よ。」かのヴィラージュも、苦行をし、スヴァーヤンブヴァであるマヌを創った。彼はまた、苦行によってブラフマーを満足させた。満足した彼（ブラフマー）は、彼（ブラフマー）の心によって、〔さらなる〕創造のためにダクシャを創った。さて、ダクシャが創られた時、創造主は、マヌに 10 回敬礼された。さらに〔ブラフマーは〕10 人の心から生まれた他の息子たち、マリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、プラチェータス、ヴァスィシュタ、ブリグ、ナーラダを創った。

【Padma-p. 1.40.69-72】ピターマハは、自分に似た息子たちを創った。〔彼らは〕皆、生類の主であり、彼らから世界が現れた。かのマハートマンは、最初に、苦行によって、あらゆる徳を集めたダルマという名の息子を創った。ダクシャ、マリーチ、アトリ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタ、ガウタマ、ブリグと聖者アンギラスを〔創った〕。それらのマハルシは、自らのなした行いによって非常に驚異的な者たちとして知られるべきである。マハルシたちのその系譜は、13 の徳を支柱（基礎）としている。

【Śiva-p. 2.1.16.4-8】マリーチを私の両目から、ブリグを心から、アンギラスを

頭から、聖者の最高者プラハをヴィヤーナから、プラスティヤをウダーナから、ヴァスィシュタをサマーナから、クラトゥをアパーナから、アトリを耳から、ダクシャをプラーナから、あなた（ナーラダ）を膝から、カルダマ仙を影から、私は創った。〔さらに〕私は、全てを成就させる手段であるダルマをサンカルパから創った。このように私はこれらの最高のサーダカたちを創り、マハーデーヴァの恩恵によって、満足した。聖者の最高者よ。そして、私の命令によって、サンカルパから生まれたダルマは、人間の姿を得て、サーダカたちと共に動き始めた。愛しき者よ。

【Śiva-p. 5.29.16-19】そしてかの偉大な輝きを持つ者（ブラフマー）は、マリーチとアトリ、アングラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタという 7 人の心から生まれた者たちを創った。彼らはプラーナ聖典において 7 人のブラフマーと定められている。そしてさらにブラフマーは怒りから生じたルドラたちを創った。それから、皆の年長者である聖仙サナトクマーラを〔創った〕。そしてこの（前述の）7 人を創った。その後、色々な場所にルドラたちが〔生まれた〕。こうしてサナトクマーラは輝きを凝集して留まった。彼らの 7 つの神的な偉大なヴァンシャはデーヴァルシに崇められた。

【『マヌ法典』 1.34-35[渡瀬 1990 p. 26]】私は生類を創造しようと欲して、至難の苦行を行ない、まず初めに、十人の人類の主となる偉大なリシを創造した。〔すなわち〕マリーチ、アトリ、アングラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、プラチェータス、ヴァシシュタ、ブリグそしてナーラダである。

アルダナーリーシュヴァラ創造神話（原文は第 2 章第 1 節第 6 項を参照のこと）

【Kūrma-p. 1.10.88-89】かのナーラーヤナと呼ばれるブラジャーパティである神は、以前のように、マリーチ、ブリグ、アングラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタをヨーガの知識によって創造した。彼らは、9 人のブラフマーとして、プラーナ聖典において定められている。彼らは皆、ブラフマーと同じく有能であり、ヴェーダについて語れる者である。

【Mārkaṇḍeya-p. 47.5-8】すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。彼らは 9 人のブラフマーとして、プラーナ聖典において定められている。そして、ブラフマーはさらに、自身の怒りから生まれたルドラと、サンカルパ、前述の者たちより先に生まれたダルマを創った。そして、自己創造者によって、以前にサナンダナなどが創られた。彼ら〔サナンダナなど〕は、

世界に関わることなく、無関心で〔自身の事に〕専心していた。彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。

【Padma-p. 1.3.167-169】それから彼は、自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。ブリグ、私（プラスティヤ）、ブラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタこそが〔その〕心から生まれた息子たちである。彼らは9人のブラフマーとしてプラーナ聖典に定められている。サナンドナなど、創造者によって以前に創られた彼らは、その世界のにおける生類〔の創造〕に無関心で、創造しなかった。

【Śiva-p. 2.1.15.49】まさに、私の心から生まれたサナカなどの5人の息子たちは、ブラフマンと同等であり、良く戒を守る者たちであり、偉大なる無執着の者たちであった。

【Varāha-p. 2.43-46】初めにルドラを始めとする偉大な苦行者たちがブラフマーによって創造された。それから、サナカなどが、そしてマリーチなどが創られた。〔それは〕マリーチ、アトリ、アングラス、ブラハ、クラトゥ、プラスティヤ、偉大な輝きを持つプラチェータス、ブリグ、ナーラダと、10番目が偉大な苦行者ヴァシシュタである。彼（ブラフマー）によって、サナカたちは自制という名の性質を付与され、聖仙ナーラダ1人を除くマリーチなどは活動という名〔の性質を付与された〕。それが最初のプラジャーパティで、〔ブラフマーの〕右の親指から生まれた者である。そこで、彼（プラジャーパティ）の系譜の最初に、この動くものや動かないものから成る世界が〔生じた〕。

【Vāyu-p. 9.68-75】それから彼は、自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラスティヤ、ブラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。彼らは9人のブラフマーとしてプラーナ聖典に定められている。彼らは皆、ブラフマー自身であり、ヴェーダに関して語れる者である。そして、祖先の中の祖先ブラフマーはさらに、自身の怒りから生まれたルドラと、サンカルパとダルマを創った。初めに、ブラフマーは自身に似た心から生まれた息子たち、サナンドナとササナカと博識なサナータナと遍在するサナトクマーラを創った。彼らは、世界〔の創造〕に無関心であり、永遠であるので〔創造を〕もたらさない。彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように、彼らが、世界の〔生産〕活動に無関心であったので、金色の胎児である神パラメーシュティンは熟考した。彼の怒りから人が生まれた。〔その者は〕

太陽に等しい輝きをしており、半身が女性である男性の姿であり、炎によって非常に輝くようであった。

【Viṣṇu-p. 1.7.4-8】この賢者（ブラフマー）の〔創造した〕それら全ての生類が増えなかったので、〔ブラフマーは〕自分に似た心から生まれた他の息子たちを創った。すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。彼らは 9 人のブラフマーとしてプラーナ聖典において定められている。まさに同様に、キヤーティ、ブーティ、サンブーティ、クシャマー、プリーティ、サンナティ、ウールツジャー、アナスーヤー、プラスーティを創り、「偉大な魂を持つ彼らの妻になれ」と言って、彼女らの創造者（ブラフマー）は〔9 人の聖仙に彼女たちを〕与えた。

第 9 項 構成要素 G1 の分析

構成要素 G1（サーンキヤ・ヨーガ哲学に関する記述：トリグナに関する記述）は、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話に共通する構成要素ではあるが、内容的にはかなり異なっている。

ブラフマー創造神話においては、トリグナは「タマスのみがあった」や「ラジャスとサットヴァがタマス追い出す」など順番に登場する。この内容は、『マイトリ・ウパニシャッド (Maitry-upaniṣad³⁴⁸)』5.2 と類似している。『マイトリ・ウパニシャッド』5.2 には、最初に世界にはタマスのみしか存在しておらず、その後、タマスが変化してラジャスになり、さらにラジャスが変化してサットヴァになることで世界創造をするという記述がある。ブラフマー創造神話では、最初にブラフマー神がタマスのみに覆われ、その後、ラジャスのみ、もしくはラジャスとサットヴァが登場し、タマスにとって代わる形となっている。『マイトリ・ウパニシャッド』ではブラフマー神が創造者ではないのでブラフマー創造神話の内容と完全一致はしていないものの、トリグナが順番に登場するという内容は一致している。そのため、ブラフマー創造神話の記述は『マイトリ・ウパニシャッド』5.2 から影響を受けたと考えられる。

アルダナーリーシュヴァラ創造神話においては、2 種類の内容が見られる。1 つは、アルダナーリーシュヴァラ創造神話 Skanda-p. 7.2.15-16 に見られる「ラジャス性の人、サットヴァ性の人、タマス性の人」という記述である。これも『マイトリ・ウパニシャ

³⁴⁸ 『マイトリ・ウパニシャッド』は、サンスクリット語で書かれた哲学書であるウパニシャッド聖典の 1 つであり、紀元前 4 世紀後半から紀元前 3 世紀の間に成立したとされる[辻 1990 pp. 30-35]。

ッド』5.2に見られる記述に類似している。『マイトリ・ウパニシャッド』5.2では、創造者のタマス性を持つ部分がルドラであり、ラジャス性を持つ部分がブラフマーであり、サットヴァ性を持つ部分がヴィシュヌであり、一存在が3種になっていると述べられる。一方、Skanda-p. 7.2.15-16では、ブラフマー神がトリグナからラジャス形、サットヴァ形、タマス形の人間たちを創るべきであり、タマス性の者はルドラのとなり、ラジャス性の者はラジャスのとなり、サットヴァ性の者はサットヴァ的となるだろうという内容である。ブラフマー神とヴィシュヌ神が登場するか否かの違いが見られるが、トリグナにより分類をするなど内容的に類似しており、Skanda-p. 7.2.15-16が『マイトリ・ウパニシャッド』5.2から影響を受けたと言える。

アルダナーリーシュヴァラ創造神話に見られる2種類目の記述は、「全ての存在がトリグナから成る」という内容である。サットヴァ、ラジャス、タマスをトリグナとしてまとめているのはサーンキヤ哲学の体系化が進んだ『サーンキヤ・カーリカー (Sāṃkhya-kārikā)』(紀元後4世紀頃成立)以降のことと考えられる。そのため、この記述は、比較的新しいものと言える。

以上、見てきたように『マイトリ・ウパニシャッド』のみを取り入れているブラフマー創造神話は、より新しいサーンキヤ哲学の考えも取り入れているアルダナーリーシュヴァラ創造神話より、古い時代に書かれた可能性がある。

以下に『マイトリ・ウパニシャッド』5.2、および構成要素G1の記述を示す。

『マイトリ・ウパニシャッド』5.2³⁴⁹

最初に、この(世界)はタマスのみであった。それが最高存在の中にあるかも知れない。最高存在は押しやられた時に平衡を失った。その姿はまさにラジャスである。そのラジャスが押しやられた時に平衡を失った。まさにそれがサットヴァの姿である。そのサットヴァが押しやられた時に精髓が流れ出た。……彼(創造主)の姿については既に述べられた。さて、ブラフマチャーリンたちよ、まさにタマス性を持った彼の部分は、このルドラである。ブラフマチャーリンたちよ、まさにラジャス性を持った彼の部分は、このブラフマーである。ブラフマチャーリンたちよ、まさにサットヴァ性を持った彼の部分は、このヴィシュヌである。まさにその1人の者は3種、8種、11種、12種、そして無数に生まれた。……

ブラフマー創造神話 (原文は第1章第1節第8項を参照のこと)

G1. トリグナに関する記述

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.10-13】そして〔ブラフマーは〕自身の中にラジャスとサ

³⁴⁹ [Radhakrishnan 1953 pp. 814-815] ([湯田 2000 pp. 571-572]を参照し翻訳の修正をした。)

ットヴァを排除して、自分自身の行為によってうごめくタマスの要素を見た。さらにその悲しみによってかの世界の主（ブラフマー）は悲嘆にくれた。そしてタマスを追い出し、その後ラジャスによって覆った。追い出されたかのタマスは双子を生んだ。非法な行いゆえに彼（タマス）にヒンサーとショーカ）が生まれた。そこで、かの覆う性質を持った双子が生まれた時、かの神（ブラフマー）は喜んだ。そしてそれに依拠した。

【Brahmāṇḍa-p. 1.2.9.28-32】〔彼らは〕儀礼を行い生産（生殖）を行なう者たちであり、偉大なりシたちによって讃えられている。この世界で、これらの創造されたダルマをはじめとする偉大なりシたちによって、生類たちが知者（ブラフマー）から創造されたが、繁栄しなかった時、彼（ブラフマー）はタマスの要素に覆われ、そして悲しみに打ちひしがれた。かのブラフマーが覆われたように、再び、かのタマスの要素が、〔覆うためにあった〕。息子たちにとっても、他の現れ出たタマスの要素に〔覆われるように〕なった。アダルマは流れに逆らう性質であり、そしてヒンサーはまさに不吉な性質である。そして彼（ブラフマー）が打ちひしがれて〔タマスに〕覆われるようになった時、かのブラフマーは自分の輝く体を捨てた。自分の体を二分した後、半身によって男性になった。

【Kūrma-p. 1.8.2-5】そして、タマスの要素に覆われたブラフマー神は落ち込んで悲嘆に暮れた。それから彼（ブラフマー）は目的を解決するための知性を使った。そして、自分の中に〔あらゆるものを〕制御する〔性質を持つ〕タマスを見た。ラジャスとサットヴァは自己のダルマとして存在していた。しかし、その後、タマスはラジャスとサットヴァの結合したものに追い払われた。そして追い払われたタマスは一對のものになった。バラモンたちよ。〔その一對は〕アダルマーチャラナと不吉な性格のヒンサーである。そこで、かのブラフマー神は自分のその輝く体を捨てた。

【Līṅga-p. 1.70.261-266】彼に創造されたこれらの素晴らしい生類が繁栄しなかったので、タマスの要素に覆われたブラフマー神は、悲しみによって落ち込んだ。それから彼は目的を解決するための知性を働かせた。そして自分の中に、〔あらゆるものを〕制御する〔性質を持ち〕、自己のダルマからラジャスとサットヴァを離れ、存在しているタマスを見た。そして、かの世界の主（ブラフマー）は、その苦しみに苦しんだ。彼（ブラフマー）はタマスを追ひ払い、その後ラジャスとサットヴァはそれ（タマス）を覆った。そして、追い払われたタマスは一對のものになった。タマスからアダルマが生じ、ショーカからヒン

サーが生じた。そして、かの恐ろしい性質の双子（アダルマとヒンサー）が生まれた時、神は死んだ。そして、喜びが彼に依拠した。そこでかのブラフマー神は、自分のその輝く体を捨てた。

【Vāyu-p. 10.2-5】その時から、タマスの要素に包まれたブラフマーは落胆した。そして彼は目的を解決するために知性を働かせた。さて〔ブラフマーは〕自身の中でラジャス性を抑えて、規則正しく機能するものの抑制するタマス〔の要素〕のみを創った。世界の主（ブラフマー）は、その苦しみによって、傷ついて悲嘆にくれた。そしてタマスは取り除かれ、それ故にラジャスはタマスを覆った。彼（ブラフマー）は、その追い払われたタマスを双子として生んだ。双子はアダルマである足から生まれた。ショーカからヒンサーが生じた。

アルダナリーシュヴァラ創造神話（原文は第2章第1節第7項を参照のこと）

G1. トリグナに関する記述

【Mārkaṇḍeya-p. 47.3】神々を始めとして動かないものまでが、トリグナから成るものの対象であると知られる。このように、〔ブラフマー神によって〕動くものや動かないものという存在が創られた。

【Viṣṇu-p. 1.7.2】彼らは皆、以前に私が言ったように生じた。神々を始めとして動かないものまでがトリグナから成るものの対象である。

【Skanda-p. 7.2.15-16】ラジャスの形や、サットヴァの形、タマスの形の人間たちは皆、あなた（ブラフマー）によって、グナの3要素から〔創造〕されるべきである。彼らがタマスのなものによって創られる時、自身でルドラのものとなれ。彼らがラジャスのなもの〔によって創られる〕時、汝はラジャスのものとなれ。彼らがサットヴァ的なもの〔によって創られる〕時、汝はサットヴァ的なものとなれ。

第10項 構成要素 F3 の分析と G3 の分析

構成要素 F3（その他の者たちの創造：その他の者たちの創造³⁵⁰）は、ブラフマー創造神話においてもアルダナリーシュヴァラ創造神話においても様々な者たちを創造している場面を描いている。創造の場面であるという一致はあるものの、全ての記述が異

³⁵⁰ 構成要素 F も構成要素 F3 も「その他の者たちの創造」と名付けたため、このような表記になった。

なる内容を述べているため、同様の記述内容とは言えないだろう。

構成要素 G3（サーンキヤ・ヨーガ哲学的記述：ヨーガに関する記述）においては、ブラフマー創造神話はシャタルーパーがヨーギニーであるという内容であり、アルダナーリーシュヴァラ創造神話はシヴァ神がヨーガによって男女に分裂したという内容である。ブラフマー創造神話の構成要素 G3 である Kūrma-p. 1.8.7-8 と Śiva-p. 2.1.16.12 の記述は同様の内容であると言えるが、それらとアルダナーリーシュヴァラ創造神話の構成要素 G3 である Liṅga-p. 1.41.11 の記述が同一であるとは言えない。

以下に、F3、および G3 の記述を示す。

ブラフマー創造神話（原文は第 1 章第 1 節第 7 項を参照のこと）

F3. その他の者たちの創造

【Brahma-p. 1.47-51】そして以前に、最年長であり、遍在するサナトクマーラを〔創った〕。7 人からこれらの生類やルドラたちが生まれた。おお、再生族の者たちよ。スカンダとサナトクマーラは、輝きを集めて、とどまった。それらの 7 人は、神聖であり、偉大なヴァンシャに属し、神々の一団を従えており、儀礼の執行者たちであり、子を持つ者たちであり、偉大な聖仙によって飾られる。稲光と稲妻を伴う雲と虹と鳥を彼（ブラフマー）は創った。また初めに彼はパルジャニヤを創った。ヤジュニヤを成就するために、リグとヤジュスとサーマンを創った。同様に、サーディヤなどの神々を〔創った〕と、私たちは聞いた。高き者や低き者たちは、彼（ブラフマー）の手足から生まれた。

【Brahma-p. 43.31-36】マートラーヨーニ（子宮から生じたもの）は、粗大なものや微細なものであり、全てで 4 種類ある。〔それらは〕動くものと動かないものである。そして、創造主ブラフマーは、全て動くものと動かないものを作った。心によって、〔自分〕自身で考えて、色々な種類の生類を創った。マリーチなどや聖者たち、ガンダルヴァや蛇やラクシャサ、（7 つの天界と〔7 つの〕地獄、〔すなわち〕 14 の世界、及び海を伴った島、ガンガーなどの川を創った。）ヤクシャとヴィディヤーダラや他のもの、及びガンガーなどの川〔を創った〕。そして人と猿、ライオン、色々な種の鳥たち、胎生のもの、卵生のもの、湿生のもの、芽生のものを創った。女神よ。そしてバラモンとクシャトリア、ヴァイシュヤ、シュードラという 4 種の〔カースト〕と別にアンティヤジャータ、ムレーツチャといった色々な種類を創った。そしてブラフマーは、草や低木やアリといった何らかの命と呼ばれるものを生み、動くものと動かないものから成る全世界を創った。

【Śiva-p. 2.1.16.9】そして、私は自分の肢体の様々な部分から、神からアスラまでの無数の息子たちを、彼らにそれぞれの体を与えて創った。聖仙よ。

【Śiva-p. 5.29.23】創造主アーパヴァが生類創造を行なった時、高き者や低き者たちは彼の手足から生まれた。

【『マヌ法典』 1.36-51[渡瀬 1990 pp. 27-28]】ブラフマン（ブラフマー）が世界創造と生類創造をする。

アルダナーリーシュヴァラ創造神話（原文は第 2 章第 1 節第 6 項を参照のこと）

F3. その他の者たちの創造

【Linga-p. 1.41.40-41】怒りに満ちた〔ブラフマーの〕両目から、涙の滴りが落ちた。その涙の滴りから、ブータやプレータが生じた。ブータやプレータ、ニシャーチャラなど全ての最初に生まれた者たちを見て、アジャ神であるブラフマー神は、自身を責めた。

【Varāha-p. 2.47】神やダーナヴァ、ガンダルヴァ、蛇、鳥、という高德なもの全てがダクシャの娘たちから生まれた。

ブラフマー創造神話（原文は第 1 章第 1 節第 8 項を参照のこと）

G3. ヨーガに関する記述

【Kūrma-p. 1.8.7-8】そして、彼は〔女性半身によって〕シャタルーパーという名の吉祥なるヨーギニーの女性を創った。彼女は偉大さによって、天と地に満ちてとどまった。ヨーガの超能力を授けられた者（シャタルーパー）は、〔高い〕知識と判断力を持っていた。未顕現から生まれた男性（ブラフマー）から生まれた息子がヴィラージュである。

【Śiva-p. 2.1.16.12】そこで、男性は最高の〔創造の〕手段であるスヴァーヤンブヴァになった。かの女性はシャタルーパーと呼ばれるヨーギニーであり、苦行者である。

アルダナーリーシュヴァラ創造神話（原文は第 2 章第 1 節第 7 項を参照のこと）

G3. ヨーガに関する記述

【Linga-p. 1.41.11】それから、世界の繁栄のために、シヴァはヨーガの手段によって〔分裂し〕、自身の半分の部分であり、安寧をもたらすパラメーシュヴァリーを享受した。

第2節 神話全体の流れの比較

本節では、第1章第2節で述べたブラフマー創造神話の全体的な流れのパターンと第2章第2節で取り上げたアルダナーリーシュヴァラ創造神話の全体的な流れのパターンを比較し、これらの神話が同一の神話であるかどうか、そして神話のパターンが作られた順序について考察する。

まず、本章第1節においてブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話に共通する構成要素の比較をおこない、双方の神話が同一の構成要素を多く含む神話であることが分かった。本節では、まず、神話の流れに共通性があるかどうかを検討し、その後、神話の変遷について言及したい。

第1項 神話の流れから見る共通性

神話の流れが共通しているかどうかを知るために、双方の神話の基本形を比較する。以下に、第1章第2節と第2章第2節で導き出した双方の神話の基本パターンを示したい。

【ブラフマー基本形】

- A. 発端：ブラフマー神による創造行為
- B. 分裂：ブラフマー神が半身により女性に、半身により男性へと分裂する
- C. シャタルーパーによる苦行（欠落している神話もあり）
- D. マヌとシャタルーパーに関する記述：マヌとシャタルーパーが夫婦関係になる（欠落している神話もあり）
- E. マヌとシャタルーパーの子供たち

【アルダナーリーシュヴァラ基本形】

- A. 発端：ブラフマー神による創造行為
- I. アルダナーリーシュヴァラの出現
- J. アルダナーリーシュヴァラが男女に分裂する過程
- K. 男性部分（欠落している神話あり）
- L. 女性部分（欠落している神話あり）

双方の神話の基本形を比較すると、【ブラフマー基本形】では、ブラフマー神の創造の場面において、ブラフマー神が男性半身と女性半身に分裂し、1人の男性マヌと1人の女性シャタルーパーになり、彼らが夫婦となって子供たちを生み出すという内容である。

一方、【アルダナーリーシュヴァラ基本形】では、ブラフマー神やシヴァ神の創造の場面において、アルダナーリーシュヴァラが現れ、男性半身と女性半身に分裂し、それぞれが1人の人になって、男性部分のその後についての記述があり、女性部分のその後についての記述があるというものである。

これらを比較すると、構成要素 B と構成要素 J には1人の神が男性半身と女性半身に分裂するという一致が見られる。さらに構成要素 D、および構成要素 K、L では、分裂した男性半身と女性半身がそれぞれ1人の男性と1人の女性になっている。

このように、神話全体の流れの基本形の比較から見ても、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話は共通する内容が多く、同一の神話のヴァリエーションである可能性は非常に高いと言える。

第2項 神話の変遷

ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話が同一の神話であるとして、では、その神話の変遷、すなわちどのように神話が変化していったのかについて考えてみたい。

アルダナーリーシュヴァラ創造神話には、前述の基本形以外に3つのパターンがある。以下にそれらを示す。

【アルダナーリーシュヴァラ変形 1】

- A. 発端：ブラフマー神による創造行為
- I. アルダナーリーシュヴァラの出現
- J. アルダナーリーシュヴァラが男女に分裂する過程
- K. 男性部分
- L. 女性部分
- M1. 以前にブラフマー神が生み出したマヌをブラフマー神が守護の仕事に任命する
- C. シャタルーパーによる苦行
- D1. マヌとシャタルーパーに関する記述：マヌとシャタルーパーが夫婦関係になる：マヌがシャタルーパーを妻にする
- E1. マヌとシャタルーパーの子供たち：息子：プリャヴラタとウッターナパー

ダ、娘：アーケーティとプラスーティ

【アルダナーリーシュヴァラ変形 2-1】

- A. 発端：ブラフマー神による創造行為
- I. アルダナーリーシュヴァラの出現
- J. アルダナーリーシュヴァラが男女に分裂する過程
- K. 男性部分（欠落している神話もあり）
- L1. 女性部分：女性部分は女神である

【アルダナーリーシュヴァラ変形 2-2】

- A. 発端：ブラフマー神による創造行為
- I. アルダナーリーシュヴァラの出現
- J. アルダナーリーシュヴァラが男女に分裂する過程
- K. 男性部分（欠落している神話もあり）
- L2. 女性部分：女性部分から創造が起こる
- N. ダクシャの娘

最初に注目する点は C→D→E という一連の構成要素である。これらの構成要素は【ブラフマー基本形】と【アルダナーリーシュヴァラ変形 1】に共通して見られる。しかし、第 2 章でも述べたように、【アルダナーリーシュヴァラ変形 1】では、A→I→J→K→L という【アルダナーリーシュヴァラ基本形】の後に、それまで全く言及されていなかったマヌが構成要素 M1 の中で突然登場し、その後シャタルーパーも突然登場し、C→D→E と物語が進んでいく。そのため、A→I→J→K→L→C→D→E というつながりのある一連の神話ではなく、A→I→J→K→L と C→D→E という 2 つの異なった神話がただ連続して述べられているかのように見える。一方で、【ブラフマー基本形】における A→B→C→D→E という流れの中に矛盾や断絶はなく、1 つの自然な流れを持つ神話となっている。さらに、先行研究や本章第 1 節からもブラフマー創造神話がアルダナーリーシュヴァラ創造神話に先行する可能性が高いことが示されている。それゆえ【アルダナーリーシュヴァラ変形 1】の構成要素 C→D→E は、【ブラフマー基本形】から引き継いだ可能性があり、【ブラフマー基本形】が【アルダナーリーシュヴァラ変形 1】より先に作られたと推測することができる。

さらにここから【アルダナーリーシュヴァラ基本形】と想定した形が【アルダナーリーシュヴァラ変形 1】より先に成立した可能性も示せる。なぜならば、【アルダナーリーシュヴァラ基本形】が述べられた後に、構成要素 C→D→E という 2 つ目の神話が述べられているからである。本節第 1 項で分析したように、構成要素 D と構成要素 K、L は、分裂した男性半身と女性半身がそれぞれ 1 人の男性と 1 人の女性になっていると

いう点で一致している。【アルダナーリーシュヴァラ基本形】における構成要素 K、L は構成要素 D にとって代わることが可能であり、神話の構成上、 $A \rightarrow I \rightarrow J \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow E$ という流れを作ることも可能である。この場合、アルダナーリーシュヴァラがマヌとシヤターパーに分裂することにはなるが、突然マヌが登場するという物語の断絶を避けることができる。しかし、本論文で用いた【アルダナーリーシュヴァラ変形 1】に該当する神話は全て、【アルダナーリーシュヴァラ基本形】の後に構成要素 $C \rightarrow D \rightarrow E$ を述べている。このことは、【アルダナーリーシュヴァラ基本形】が確立した後に【アルダナーリーシュヴァラ変形 1】が作られた可能性が高いことを示していると考えられるだろう。

次に【アルダナーリーシュヴァラ変形 2-1】と【アルダナーリーシュヴァラ変形 2-2】について考えてみたい。この 2 つのパターンには序論第 3 節において定義した「シヴァ神とシヴァ神の配偶者である女神から成る」アルダナーリーシュヴァラが述べられている。すなわち、分裂した女性半身が女神であるという内容が述べられているということである。この 2 つのパターン以外には、女性半身が女神であると明言する構成要素を含むものはないため、この【アルダナーリーシュヴァラ変形 2-1】と【アルダナーリーシュヴァラ変形 2-2】がもっとも新しく作られたパターンであると考えられる。そして【アルダナーリーシュヴァラ変形 2-1】と【アルダナーリーシュヴァラ変形 2-2】は、以上の理由から、アルダナーリーシュヴァラという神格の成立を示すパターンでもあると言えるだろう。

最後に【アルダナーリーシュヴァラ変形 2-1】と【アルダナーリーシュヴァラ変形 2-2】のどちらが先に作られたのかについて考察する。2 つのパターンを比べてみると、【アルダナーリーシュヴァラ変形 2-1】が先行すると考えるのが自然であろう。というのも、構成要素 N では「ダクシャの娘」と人物が特定されているが、構成要素 L1 ではダクシャ以外の名前も登場するため、ダクシャの娘はそのヴァラエティーの 1 人³⁵¹にすぎないのではないかと推測できる。実際に、アルダナーリーシュヴァラの女性半身は、サティー女神だけでなく、パールヴァティー女神やウマー女神、ガウリー女神、カーリー女神などヴァラエティーがあり、厳密に特定されていない。本論文では便宜上、構成要素 L1 と N に分別したが、実際には構成要素 N は L1 の派生形であると考えても良いかも知れない。

³⁵¹ しかしアルダナーリーシュヴァラ創造神話において構成要素 N を含む神話は確かに多い。その理由としては、第 2 章第 1 節第 14 項でも述べたように、「ダクシャが儀礼を行う際にシヴァ神を除外したため、怒ったシヴァ神の妻サティーがその祭火の中に自らの身を投じて死んだ」という神話への導入部分とされているためである可能性が高い。実際、このダクシャの儀礼の神話の中でもシヴァ神とサティー女神がアルダナーリーシュヴァラの形を取るという内容が記されており、ダクシャの儀礼の神話とアルダナーリーシュヴァラには何らかの関係が見て取れる。

このように、「男女に分裂する創造者」の神話は、①【ブラフマー基本形】、②【アルダナーリーシュヴァラ基本形】、③【アルダナーリーシュヴァラ変化形 1】、④【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-1】、⑤【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-2】という順序で成立した可能性が高いと言える。

第3節 小結

本章では、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の構成を比較した。

第1節では、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話に共通する構成要素を比較し、それらに共通性があるかどうかを検討した。構成要素 A（発端：ブラフマー神による創造行為）に関しては、ブラフマー創造神話もアルダナーリーシュヴァラ創造神話も、ブラフマー神による創造の過程であるという共通点があった。構成要素 C（シャタルーパーによる苦行）では、ブラフマー創造神話もアルダナーリーシュヴァラ創造神話も、シャタルーパーが苦行しマヌを夫としているという一致があるが、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の記述の方がより定型化されていた。構成要素 D1（マヌとシャタルーパーに関する記述：マヌとシャタルーパーが夫婦関係になる）でも、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の方がより定型化されていると分かった。構成要素 E1（マヌとシャタルーパーの子供たち：息子や娘を生み出した）でも、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の方が定型化が進んでいると分かった。ブラフマー創造神話の構成要素 F1①と F1②に共通する「ルドラがブラフマー神の怒りから生まれる」とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の構成要素 I1（アルダナーリーシュヴァラの出現：ブラフマー神からアルダナーリーシュヴァラが現れる）における①（ブラフマー神の怒りにより、ルドラが額から生まれる）、②（ブラフマー神が怒り、生命（呼吸）を捨てたその口から、ルドラが生まれる）、⑦（ブラフマー神の怒りから、アルダナーリーシュヴァラが生まれる）も共通点があり、同一の記述のヴァリエーションと考えられる。さらに構成要素 F1①、F1②、I1①、I1②、I1⑦の比較から、ブラフマー創造神話がアルダナーリーシュヴァラ創造神話に先行する可能性が高いと分かった。続いて、ブラフマー創造神話の構成要素 F1①と F1③に共通する「泣いた（動詞√rud）ためにルドラ（rudra）と名付けられた」という誕生譚とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の構成要素 P1（ルドラの説明：ルドラという名の由来）は類似してるが、同一であると断言することはできないため、更なる究明が必要である。構成要素 F2（聖者たちの創造）では、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話には共通の記述内容が見られ、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の方がより後代に成立した可能性があることが分かった。構

成要素 G1（サーンキヤ・ヨーガ哲学に関する記述：トリグナに関する記述）は、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話に共通するが、内容的にはかなり異なっており、『マイトリ・ウパニシャッド』のみを取り入れているブラフマー創造神話より、新しいサーンキヤ哲学の考えも取り入れているアルダナーリーシュヴァラ創造神話の方がより後代に書かれた可能性が示された。構成要素 F3（その他の者たちの創造：その他の者たちの創造）は、ブラフマー創造神話においてもアルダナーリーシュヴァラ創造神話においても様々な者たちを創造している場面を描いているが、描かれている者たちの相違が多く、同様の記述内容ということができないと判断した。構成要素 G3（サーンキヤ・ヨーガ哲学的記述：ヨーガに関する記述）においても、同一であるとは言えないと判断した。以上のように、様々な構成要素を分析したところ、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話には共通する内容の構成要素が多数見られることが分かった。

第2節では、まず、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の全体的な流れのパターンを比較したところ、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話は共通する内容が多く、同一の神話のヴァリエーションである可能性は非常に高いと分かった。続いて、第1章と第2章で導き出した神話の流れのパターンを比較し、それらが作られた順序、すなわち「男女に分裂し創造を行なう創造者」の神話の変遷を考察した。その結果、「男女に分裂する創造者」の神話は、①【ブラフマー基本形】、②【アルダナーリーシュヴァラ基本形】、③【アルダナーリーシュヴァラ変化形 1】、④【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-1】、⑤【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-2】という順序で成立したのではないかと分かった。

結論

本論文では序論第 1 節において、アルダナーリーシュヴァラの役割や図像、異名などの説明をした後、アルダナーリーシュヴァラに関する先行研究と本論文で取り扱う男女に分裂し創造を行なうアルダナーリーシュヴァラの神話について概説した。第 2 節では、プラーナ聖典について成立年代に関する問題と使用言語、プラーナパンチャラクシャナの問題、18 マハープラーナ、宗派性について説明した。それから、本論文で引用した 15 のプラーナ聖典の概略を述べた。第 3 節では、本論文の趣旨を示すため、アルダナーリーシュヴァラが登場する以前の時代に描かれていた男女に分裂する創造者たちに関して、先行研究やプラーナ聖典より古いとされている文献を用いて説明した。そして、本論文で取り扱ったアルダナーリーシュヴァラ創造神話とブラフマー創造神話についての説明、アルダナーリーシュヴァラの定義、本論文の目的を述べた。

第 1 章では、プラーナ聖典と『マヌ法典』に見られる 17 のブラフマー創造神話の構造を把握するべく、第 1 節にて、それぞれの神話を類似した記述内容や神話素を含む構成要素毎の分類し、その構成要素を取り上げ、比較し、分析した。その結果、同一の内容の構成要素が多数あることが判明した。第 2 節では、神話全体の流れに沿って構成要素を配置し、その位置関係や構成要素の有無を分析した。すると、これらの神話の多くは共通する全体的な流れのパターンを持つと考えられることが分かった。以上から、ブラフマー創造神話は同一の神話のヴァリエーションである可能性が高いという結論を得た。

第 2 章でも、第 1 章で行なったのと同様の方法を用いて、プラーナ聖典に見られる 16 のアルダナーリーシュヴァラ創造神話の構造を分析した。第 1 節では、各構成要素に含まれる記述に共通性がある可能性が高いことが判明し、第 2 節では、神話全体の構造にも共通性があることが分かった。そのため、ブラフマー創造神話同様、アルダナーリーシュヴァラ創造神話も同一の神話のヴァリエーションであるだろうと考えた。そして、神話全体の流れを見ると、1 種の基本形パターンと 3 種の変化形パターンがあると可能性が高いことが判明した。その変化形のうち 2 種において、半身の女性が女神になるという内容が含まれており、これをもってアルダナーリーシュヴァラという神格の成立であると判断できると結論した。

第 3 章において、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の構造を比較したところ、それら 33 の神話が全て同一の神話のヴァリエーションである可能性が高いと判明した。第 1 節では、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話に共通する構成要素を比較し、多くの構成要素に共通性や同一性があることを突き止めた。第 2 節では、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の全体的な流れの基本形を比較し、それらに共通性があることを明らかにした。以上をふまえ

て、最後に「男女に分裂し創造を行なう者」の神話の変遷について考察を行なった。その結果、①【ブラフマー基本形】、②【アルダナーリーシュヴァラ基本形】、③【アルダナーリーシュヴァラ変化形 1】、④【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-1】、⑤【アルダナーリーシュヴァラ変化形 2-2】という順序に成立したのではないかと結論できた。ここまで基本形や変化形などという言い方で述べてきたので、物語の内容が分かりにくいかもしれない。そのため、神話に登場する固有名詞などを使い、具体的に述べると以下になる。

元来、ブラフマー神には生類を創造する者という役割が具わっていた。そこで、ブラフマー神が半身によって男性マヌになり、半身によって女性シャタルーパーになり、マヌとシャタルーパーが夫婦関係を結び、2人から生まれた子供が繁栄していくという生類創造の形の神話が語られるようになった³⁵²。その生類創造神話と共に、ルドラの誕生譚もよく語られていたと考えられる。ある時、ブラフマー神が行なうはずの男女に分裂する役割をルドラが引き受けるようになった。それからルドラは男女に分裂する創造者として語られるようになったが、マヌとシャタルーパーの生類創造神話も同時に語られていた。その後、ルドラにはシヴァ神の化身という性格が強く表れるようになり、分裂した半身の女性にもシヴァ神の配偶神としての性格が付加されるようになった。そして、シヴァ神とその配偶神である女神から成る神であるアルダナーリーシュヴァラが確立し、現在までその形を維持している。

これが、アルダナーリーシュヴァラの成立過程であり、アルダナーリーシュヴァラ創造神話の変遷であろう。

以上のように、本論文では「男女に分裂し創造を行なう者」の神話の構造と変遷を見してきた。このことにより、アルダナーリーシュヴァラという神格は、「男女に分裂し創造を行う者」の神話の変遷と共に徐々に作られていって成立したと考えられることが分かった。換言すれば、アルダナーリーシュヴァラは元来、創造者という役割を受け持つために作られた神格であったと言えるだろう。

しかしその後、時代を経るに従って、男女両性を持つという特徴ゆえに、創造者という役割だけでなく、男女から構成されるもの（例えば夫婦や性行為など）を司る者であったり、男女という対極物の一致ゆえに世界との一体化を体現する者などの性格が付加されていったと考えられる。それらを描いた神話に関しては、本論文の巻末に記載した資料編を参照されたい。資料編には、本論文で用いた 33 の創造神話だけでなく、筆者が現在までに試訳を行なったアルダナーリーシュヴァラに関する全ての神話を提示している。そこには、本論文では言及し切れなかった多様なアルダナーリーシュヴァラの姿が垣間見える。それらの神話の研究は今後の課題としたい。古代から現代に至るまでのアルダナーリーシュヴァラに具わった性格、役割、側面を解明していくことで、イン

³⁵² 『マヌ法典』に記載されているため、この生類創造神話は紀元前 2 世紀から紀元後 2 世紀の間には、成立していたと考えられる。

ド思想における神話や神観念について、新たなことが判明するかも知れない。このことにより、古代インド人がどのように世界の構造を考えていたのかについて多少なりとも理解が進むだろうと思われる。それはすなわち「世界とは何だろうか」という我々人間たちの大いなる疑問を解き明かす1つの手がかりとなるだろうと考えている。



本論文を執筆するにあたり、研究面でも精神面でもご支援くださった研究科の教授方、学友たち、家族に深く御礼いたします。とりわけ、指導教授の宮本久義先生には、サンスクリット語やインド学、論文のご指導だけでなく、研究に対する姿勢や物事の捉え方、文化芸術への考え方など様々なことをご教授いただきました。それを今後も何らかの形で生かしていくことをお約束すると共に、心よりの感謝を申し上げます。ありがとうございました。

文献一覧

【プレーナ聖典】あるいは【一次資料】

Agni-purāṇa

1987, *Agnipurāṇam*, 41, Pune: Ānandāśrama.

1985, *Śrīagnimahāpurāṇam*, Delhi: Nag Publishers.

1984-1987, *The Agni Purāṇa*, Vol. 1-4, AITM Vol. 27-30, Delhi: Motilal Banarsidass.

Bhāgavata-purāṇa

1987, *Śrībhāgavatamahāpurāṇam*, Delhi: Nag Publishers.

1976-1978, *The Bhāgavata Purāṇa*, Vol. 1-5, AITM Vol. 7-11, Delhi: Motilal Banarsidass.

Brahma-purāṇa

1985, *Śrībrahmamahāpurāṇam*, Delhi: Nag Publishers.

1985-1986, *The Brahma Purāṇa*, Vol. 1-4, AITM Vol. 33-36, Delhi: Motilal Banarsidass.

Brahmāṇḍa-purāṇa

1973, *Brahmāṇḍa Purāṇa of Sage Kṛṣṇa Dvaipāyana Vyāsa*, Delhi: Motilal Banarsidass.

1983-1984, *The Brahmāṇḍa Purāṇa*, Vol. 1-5, AITM Vol. 22-26, Delhi: Motilal Banarsidass.

Kālikā-purāṇa

1972, *The Kālikāpurāṇam, The Naikrishnadas-krishnadas Prachyavidya Nranthamala 5*,
Varanasi: The Chowkhamba Vidyabhawan.

1991-1992, *The Kālikāpurāṇam*, Delhi: Nag Publishers.

Kūrma-purāṇa

1983, *Śrīkūrmamahāpurāṇam*, Delhi: Nag Publishers.

1981-1982, *The Kūrma-purāṇa*, Vol. 1-2, AITM Vol. 20-21, Delhi: Motilal Banarsidass.

Liṅga-purāṇa

1989, *Śrīliṅgamahāpurāṇam*, Delhi: Nag Publishers.

1973, *The Liṅga-purāṇa*, Vol. 1-2, AITM Vol. 5-6, Delhi: Motilal Banarsidass.

Mārkaṇḍeya-purāṇa

2005, *Mārkaṇḍeya Mahāpurāṇam*, Delhi: Eastern Book Linkers.

1862, *The Mārkaṇḍeya Purāṇa*, 29, Calcutta: Bishop's College Press.

1904, *The Mārkaṇḍeya Purāṇa*, Calcutta: The Asiatic Society.

Matsya-purāṇa

1981, *Matsyapurāṇam*, 54, Pune: Ānandāśrama.

1984, *Śrīmatsyamahāpurāṇam*, Delhi: Nag Publishers.

Nārada-purāṇa

1984, *Śrīnāradyamahāpurāṇam*, Delhi: Nag Publishers.

1980-1982, *The Nārada-purāṇa*, Vol. 1-5, AITM Vol. 15-19, Delhi: Motilal Banarsidass.

Padma-purāṇa

1984, *Śrīpadmamahāpurāṇam*, Delhi: Nag Publishers.

1988-1992, *The Padma-purāṇa*, Vol. 1-10, AITM Vol. 39-48, Delhi: Motilal Banarsidass.

Śiva-purāṇa

1964, *Śrīśivamahāpurāṇam*, Kāśī: Paṇḍita-pustakālaya.

1986, *Śrīśivamahāpurāṇam*, Delhi: Nag Publishers.

1970, *The Śiva-purāṇa*, Vol. 1-4, AITM Vol. 1-4, Delhi: Motilal Banarsidass.

Skanda-purāṇa

2003, *Skandamahāpurāṇam*, 111, Varanasi: Chowkhamba Press.

1986-1987, *Śrīskandamahāpurāṇam*, Delhi: Nag Publishers.

1992-2011, *Skandamahāpurāṇam*, Vol. 1-22, AITM Vol. 49-71, Delhi: Motilal Banarsidass.

Vāmana-purāṇa

1968, *The Vāmana Purāṇa with English Translation*, Varanasi: All India Kashiraj Trust.

Varāha-purāṇa

1893, *The Varāha Purāṇa*, Calcutta: The Asiatic Society.

1985, *The Varāha-purāṇa*, Vol. 1-2, AITM Vol. 31-32, Delhi: Motilal Banarsidass.

Vāyu-purāṇa

1983, *Vāyupurāṇam*, 49, Pune: Ānandāśrama.

1983, *Śrīvāyumahāpurāṇam*, Delhi: Nag Publishers.

1987-1988, *The Vāyu-purāṇa*, Vol. 1-2, AITM Vol. 37-38, Delhi: Motilal Banarsidass.

Viṣṇu-purāṇa

1985, *Śrīvāyumahāpurāṇam*, Delhi: Nag Publishers.

Wilson, H. H., 1980, *The Viṣṇu Purāṇa: A System of Hindu Mythology and Tradition*, Delhi: Nag Publishers.

【参考文献】あるいは【二次資料】

Banerjea, J. N., 1956, *The Development of Hindu Iconography*, Calcutta: University of Calcutta.

Dikshitar, V. R. Ramachandra, 1951, *The Purāṇa Index* Vol. 1, Madras: University of Madras.

Donaldson, Thomas Eugene, 2007, *Śiva-Pārvatī and Allied Images: Their Iconography and Body Language*, Vol. 1. Delhi: D. K. Printworld.

Eliot, Charles, 1921, *Hinduism and Buddhism: An Historical Sketch*. Vol. 2, London: Edward Arnold & Co..

Flood, Gavin, 2003, *The Blackwell Companion to Hinduism*, Malden, Oxford, Carlton: Blackwell Publishing.

Goldberg, Ellen, 2002, *The Lord Who Is Half Woman: Ardhanārīśvara In Indian And Feminist Perspective*, Albany: State University of New York Press.

Handa, O. C., 1992, *Śiva in Art: A Study of Śaiva Iconography and Miniatures*, Delhi: Indus Publishing Company.

Hang, Martin, 1922, *The Aitareya Brahmanam of the Rigveda, The Sacred Books of the Hindus*. Vol.4, Allahabad: The Panini Office.

Hazra, R. C., 1940, *Studies in The Purāṇic Records on Hindu Rites and Customs*, Delhi, Patna, Varanasi: Motilal Banarsidass.

Kane, Pandurang Vaman, 1962, *History of Dharmaśāstra* Vol. 5. 2, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

Kinsley, David, 1986, *Hindu Goddesses: Visions of the Divine Feminine in the Hindu Religious Tradition*, California: University of California Press.

Kramrisch, Stella, 1988, *The Presence of Śiva*, Delhi: Motilal Banarsidass.

- Mani, Vettam, 1975, *Purāṇic Encyclopaedia*, Delhi: Motilal Banarsidass.
- O'Flaherty, Wendy Doniger, 1973, *Śiva: The Erotic Ascetic*, Oxford: Oxford University Press.
- 1980, *Women, Androgynes, and Other Mythical Beasts*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Olivelle, Patrick, 2005, *Manu's Code of Law: A Critical Edition and Translation of the Mānava-dharmaśāstra*, Oxford: Oxford University Press.
- Pande, Alka, 2004, *Ardhanarishvara: The Androgyne: Probing The Gender Within*, Delhi: Rupa & Co..
- Radhakrishnan, S., 1948, *The Bhagavadgītā With an Introductory Essay Sanskrit Text, English Translation and Notes*, London: George Allen and Unwin Ltd..
- 1953, *The Principal Upaniṣads*, London: George Allen and Unwin Ltd..
- Rao, T. A. Gopinatha, 1914-1916, *Elements of Hindu Iconography*, Madras: Law Printing House.
- Rocher, Ludo, 1986, *The Purāṇas, A History of Indian Literature Vol. 2, Epic and Sanskrit Religious Literature Fasc.3*, Wiesbaden: Harrassowitz.
- Śaṅkarācārya, 1978, *Bhagavadgītā with Śāṅkarabhāṣya: Works of Śaṅkarācārya in Original Sanskrit Vol.2*, Delhi: Motilal Banarsidass.
- Saran, Prem, 2008, *Yoga Bhoga and Ardhanariswara: Individuality, Wellbeing and Gender in Tantra*, Delhi: Routledge.
- Shastri, Haraprasad, 1928, "The Maha-Puranas" *Journal of the Bihar and Orissa Research Society*, 14, pp. 323-340.
- Shastri, J. L., 1983, *Manusmṛti with the Sanskrit Commentary Manvarthamuktāvalī of Kullūka Bhaṭṭa*, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- Stutley, Margaret, 2006, *Hindu Deities: A Mythological Dictionary with Illustrations*, Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd..
- Wendy Doniger, 1993, *Purāṇa Perennis: Reciprocity and Transformation in Hindu and Jaina Texts*, Albany: State University of New York Press.
- Yadav, Neeta, 2001, *Ardhanārīśvara in Art and Literature*, Delhi: D. K. Printworld.
- 上村勝彦、1992、『バガヴァッド・ギーター』、岩波書房。
- 1998、『バガヴァッド・ギーターの世界：ヒンドゥー教の救済』、日本放送出版協会。
- 2003、『インド神話—マハーバーラタの神々』、筑摩書房。
- 辛島昇（他）、1992、『南アジアを知る事典』、平凡社。
- 菅沼晃、1985、『インド神話伝説事典』、東京堂出版。
- 立川武蔵、2002、『シヴァと女神たち』、山川出版。
- 辻直四郎（訳）、1970、『リグ・ヴェーダ賛歌』、岩波書店。
- 1990、『ウパニシャッド』、講談社。

- 中村元、1962、『ヴェーダーンタ・サーラ：原文対訳』、平楽寺書店。
——1988、『図説佛教語大辞典』、東京書籍株式会社。
西岡直樹、1996、『ネパール・インドの聖なる植物』、八坂書房。
服部正明、2005、『古代インドの神秘思想：初期ウパニシャッドの世界』、講談社。
バンダルカル、R.G.、1984、『ヒンドゥー教－ヴィシュヌとシヴァの宗教』、せりか書
房。
本多恵、1978、『ヨーガ書註解－試訳と研究－』、平楽寺書店。
松宮春一郎（編）、1922、『ウパニシャッド全集一』、世界文庫刊行会。
ミルチャ・エリアーデ、1973、『エリアーデ著作集 第六巻 悪魔と両性具有』、せり
か書房。
湯田豊、2000、『ウパニシャッド－翻訳および解説－』、大東出版社。
ルイ・ルヌー、1996、『インドの文学』、白水社。
渡瀬信之（訳）、1990、『サンスクリット原典全訳・マヌ法典』、中央公論社。

第 2 部 資料編

Agni-purāṇa :Ā 版（底本）、N 版、AITM 版（英訳）

ch.17-15-ch.18.1（ブラフマー創造神話）

marīcim atryangirasam¹ pulastyam pulaham kratum /

vasiṣṭham mānasān sapta brahmāṇān iti niścitam //15//

ブラフマーの心から生まれた 7 人と言われるマリーチ、アトリ、アングラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタを〔創った〕。

saptaite janayanti sma prajā rudrās ca sattama /

dvidhā kṛtvātmo² deham arddhena puruṣo 'bhavat // 16//

arddhena nārī tasyām sa brahmā vai cāsṛjat prajāḥ //17//

最高の者よ。この 7 人は生き物やルドラたちを生み出した。自身を 2 つにして、半身によって男性に、半身によって女性になった。そして、かのブラフマーは彼女の中に生き物たちを創造した。

agmir uvāca //

アグニは言った。

priyavratottānapādaḥ manuḥ svāyambhuvaḥ sutau /

ajījanat sutām ramyām śatarūpām tapo 'nvitām //1//

スヴァーヤンブヴァ（自生者スヴァヤンブーの息子）であるマヌは苦行に従事しているシャタルーパーにプリヤヴラタとウッターナパーダという 2 人の息子と美しい娘を産ませた。

ch.63.11-12³

saṅkarṣaṇam viśvarūpam liṅgam vai rudramūrtikam /

arddhanārīśvaram tatra⁴ hariśaṅkaramātrkāḥ //11//

bhairavam ca tathā sūryam grahāṃs tadvad vināyakam /

gaurim indrādibhiḥ sevyām citrajām ca balābalām //12⁵//

¹ 原文では単数形となっているが、他の文献の平行句や英訳を参照し、2 人とした。

² Ā 版では kṛtvā 'tsano となっている。これはまず、kṛtvā ātsano の連声を分かりやすくしたものと思われる。そして、ātsano であるが、英訳を参照し、N 版の ātmano の方が適格と考えた。よって、表記は kṛtvātmano を採用した。

³ 63 章は、図像の説明をしている章である。

⁴ N 版では tadvadd だが、翻訳は同じとなる。

サンカルシャナ、ヴィシュヴァルーパー、そしてルドラの印であるリング、アルダナーリーシュヴァラ、ハリ、シャンカラ、マートリカーたち、ヴァイラヴァ、スーリヤ、星々、ヴィナーヤカと、インドラたちによって敬われているガウリーと、チトラ⁶から生まれたバラとアバラ⁷も〔安置すべきである〕。

ch.178.10ab⁸

namo 'rddhanārīśaharam amitāṅgyai ca nāsikām /10ab

「計り知れない（大きな）肢に敬礼あれ。」〔と言って〕アルダナーリーシャであるハラに、そして鼻に対して〔敬礼すべきである〕。

ch.178.18cd-20

lalitā vijayā bhadrā bhavānī kumudā śivā //18cd//

vāsudevī tathā gaurī maṅgalā kamalā satī /

caitrādaḥ dānakāle ca prīyatām iti vācayet //19//

チャイトラ月などや捧げものをする時などに「ラリター、ヴィジャヤー、バドラー、バヴァーニー、クムダー、シヴァー、そしてヴァースデーヴィー、ガウリー、マンガラー、カマラー、サティーは満足させられるべきである」と言うべきである。

phalam ekaṃ⁹ parityājyaṃ vratānte śayanaṃ dadet¹⁰ /

⁵ N 版では 7cd-9ab である。

⁶ *citra* の解釈は不明である。形容詞として訳す場合、「様々な」という意味なので、*citrajām* は「様々な生まれの」と訳すことができる。人名とする場合、①ビーマセーナに殺されたドリタラーシュトラの息子、②スブラマンヤの幼少期の遊び友達であるガジャラージャ（ゾウの王）、③パーンダヴァに敵対するカウラヴァの戦士、④カウラヴァに敵対するチェーディ王国出身のパーンダヴァの戦士のいずれかとされる[mani 1975 p. 184]。そのため *citrajām* は「チトラから生まれた」と訳すことができる。英訳では *citrajām* は訳されていない。ここでは、「チトラから生まれた」という訳を用いた。

⁷ *balābalām* の解釈は不明である。英訳によると何らかの固有名詞として訳されているため、それに準じた。[mani 1975 p. 99]では、バラは①カシュヤパと妻ダナーウの息子（アスラ）、②ヴァルナとヴァルナの長兄の妻の息子（神）、③イクシュヴァーク王朝におけるパリークシトと妻スショーバナ（蛙の娘）の息子、④クンバカルナの戦いで戦った猿、⑤ヴァーユ神がスブラマンヤに捧げた戦士、⑥古代バーラタのマハリシ。アンギラスの息子、⑦サナータナ・ヴィシュヴァデーヴァ、⑧ヴィシュヌのパールシャダ、⑨マーヤースラの息子とあり、アバラはパーンチャジャンヤの 15 人の息子（神）の 1 人と書かれている。ここでの「バラとアバラ」は複数形のため、合わせて 3 人以上を指すことになるので、何かしらの一団を示している可能性もある。

⁸ 178 章は、ラリター女神に対するムーラガウリーヴラタのやり方を説明している章である。

umāmaheśvaraṃ haimaṃ vṛṣabhaṃ ca gavā saha //20//

ヴラタの最後には、1つの果物が捧げられ、台が与えられるべきである。黄金のウマー
マヘーシュヴァラ〔像〕と牝牛を伴った雄牛を〔捧げるべきである〕。

ch.199.9-11ab

strīṇām umāvrataṃ śrīdaṃ tṛtīyāsv aṣṭamiṣu ca /

gaurīm maheśvaraṃ cāpi yajet saubhāgyam āpnuyāt //9//

〔毎月〕3日目と8日目にウマーヴラタ〔を行なうこと〕は、女性に幸福を授ける〔ことである〕。ガウリーとマヘーシュヴァラを信仰すべきである。〔そうすれば〕幸福を得るだろう。

umāmaheśvarau prārcya hy aviyogādi cāpnuyāt /

mūlavratākārī strī ca hy umeśavratākārīṇī //10//

sūryabhaktā tu yā nārī dhruvaṃ sā puruṣo bhavet //11ab

まさにウマーマヘーシュヴァラを信仰すれば〔神との〕別離がなくなるであろう。なぜならウメーシャヴラタの行為者は主要なヴラタの実践者であり、女性である〔からである〕。まさに太陽を崇拝する女性は必ず男性になるであろう¹¹。

ch.293.41-46¹²

śrīkaṇṭho 'nantasūkṣmau ca trimūrttir amareśvaraḥ /

agniśo bhāvabhūtiś ca tithīśaḥ sthāṇuko haraḥ //41//

daṇḍīśo bhautikaḥ sadyojātaś cānugraheśvaraḥ /

akrūrāś ca mahāsenāḥ śaraṇyā devatā amūḥ //42//

彼らシュリーカンタ、アナンタ、スークシュマ、トリムールティ、アマレーシュヴァラ、
アグニーシャ、バーヴァブーティ、ティティーシャ、スターヌカ、ハラ、ダンディーシャ、
バウティカ、サドヨージャータ、アヌグラヘーシュヴァラ、アクルーラ、マハーセ
ーナは守護の神々である。

tataḥ krodīśaṇḍau ca pañcāntakaśivottamau /

tathaiva rudrakūrmau ca triṇetraś caturāṇanaḥ //43//

⁹ 原文では phalalekaṃ だが、N 版を参照し、phalam ekaṃ とした。

¹⁰ 動詞√dā の optative（本来は dadyāt）と思われる。英訳もそのように訳している。

¹¹ 変成男子のことと思われる。

¹² 293 章は、様々なマントラの説明をしている章である。これらの神々は、マントラの主
神、守護神である崇められるべき神々と考えられる。

ajeśaśarmāsomesau tathā lāṅgalidārukau /
 arddhanārīśvaraś comā kāntaś cāṣāḍhi daṇḍinau //44//
 atrir mīnaś ca meṣaś ca lohitaś ca śikhī¹³ tathā /
 chagalaṇḍadviraṇḍau dvau samahākālabālinau //45//
 bhujaṅgaś ca pinākī ca khaṅgiśaś ca bakaḥ punaḥ /
 śveto bhṛgur guḍīśākṣāḥ kṣayaḥ saṃvarttakaḥ smṛtaḥ //46//

クローディーシャ、チャンダ、パンチャーントカ、シヴォータマ、ルドラ、クールマ、トリネートラ、チャトウラーナナ、アジェーシャ、シャルマン、ソーメーシャ¹⁴、ラーンガリ、ダールカ、アルダナーリーシュヴァラ、ウマー、カーンタ、アーシャーディ、ダンディン、アトリ、ミーナ、メーシャ、ローヒタ、シキン、チャガランダ、ドウヴィランダ、マハーカーラ、バーリン、ブージャンガ、ピナーキー、カンギーシャ、バカ、シュヴェータ、ブリグ、グディー、イーシャー、アクシャ、クシャヤ、サンヴァルタカもまた〔守護の神々と〕言われている。

ch.313.22-26ab¹⁵

kruddhaḥ prasādi bhavati yudhi mantrāmbupānataḥ¹⁶ /
 añjanaṃ tilakaṃ vaśyo jihvāgre kavita bhavet //22¹⁷//

怒った人は戦いの時にマントラ〔で清められた〕水を飲むことによって恩寵を与えられた人になる。〔マントラが唱えられて作られた〕アイシャドウとティラカを〔コントロールする者は〕、舌先に詩が生じるであろう。

tajjapān maithunaṃ vaśye¹⁸ tajjapād yonivīkṣaṇaṃ /
 sparśād vaśi tilahomāt sarvañ caiva tu sidhyati //23¹⁹//

そのジャパ（念誦）により性行為をコントロールすることができる。そのジャパによりヨーニ（女性器）を凝視する〔ことをコントロールできる〕。触れることによってコントロールする者となる。そして胡麻を供えることによって、まさに全てのことが成就する。

¹³ ヘビの名と考えられる。

¹⁴ 原文は両数形となっているが、英訳を参照し、3人とした。

¹⁵ 313章は、様々な神々への信仰に関するマントラについての章である。

¹⁶ N版では mātṛāmbupānataḥ なので、訳は「怒った人は戦いの時に富の水を飲むことによって喜ばしい人になる。」

¹⁷ N版では 18cd-19ab である。

¹⁸ 言葉が不明であったため、英訳を参照し、文脈も加味し、ここでは「コントロールすることができる」とした。

¹⁹ N版では 19cd-20ab である。

saptābhimantritaṁ cānnaṁ bhuñjaṁs tasya śriyaḥ sadā /

arddhanārīśarūpo 'yaṁ lakṣmyādivaiṣṇavādikaḥ //24²⁰//

7度正しく礼拝された食物を食する者は常に吉祥が〔授かる〕。これ（マントラ²¹）はアルダナーリーシャの姿でもあり、ラクシュミーなどヴィシュヌ派の者（神々）でもある。

anaṅgarūpā śaktiś ca dvitīyā madanāturā /

pavanavegā bhuvanapālā vai sarvasiddhidā²² //25//

anaṅgamadanānaṅgamekhalān tāṁ japocchriye²³ /26ab²⁴

シャクティ（力）であるアナンガルーパーと二番目であるマダナートゥラー²⁵、パヴァナヴェーガー、ブヴァナパーラー、サルヴァスィッディダー、アナンガマダナー、アナンガメーカーラー〔のマントラ〕を念誦すべきである。

²⁰ N版では 20cd-21ab である。

²¹ 英訳を参照して訳した。

²² 原文では sarvasiddhikā だが、N版と英訳を参照し sarvasiddhidā とした。

²³ 言葉が不明であったため、英訳を参照し、文脈も加味し、ここでは「念誦すべきである」とした。

²⁴ N版では 21cd-23 である。

²⁵ このパダは他にも「〔ガウリーに次いで〕二番目のシャクティであるアナンガルーパー、マダナートゥラー」と訳すこともできる。

Bhāgavata-purāṇa :N 版（底本）、AITM 版（英訳）

3.ch.12.51-56（ブラフマー創造神話）

ṛṣiṇām bhūrivīryāṇām api sargam avistṛtam /

jñātvā tad vṛddhaye bhūyaś cintayāmāsa kaurava // 51 //

聖仙たちの偉大な力によってでさえも発展しない創造を知って、彼（ブラフマー）は、再びその増大²⁶のために熟考した。カウラヴァ²⁷よ。

aho adbhutam etan me vyāpṛtasyāpi nityadā /

na hy edhante prajā nūnaṁ daivam atra vighātakam // 52 //

おお。これは驚くべきことだ。私が常に従事しているにもかかわらず、生類が全く繁栄しない。この場合、確実に運命が邪魔をしている。

evam yuktakṛtas tasya daivam cāvekṣatas tadā /

kasya rūpam abhūd dvedhā yat kāyam abhicakṣate // 53 //

このように正しく行いをし、彼（ブラフマー）が運命を観察している時、体の形が2つになった。それをカーヤ（身体）と呼ぶ。

tābhyām rūpavibhāgābhyām mithunaṁ samapadyata /

yas tu tatra pumān so 'bhūn manuḥ svāyaṁbhuvāḥ svarāt // 54 //

これらの姿が分裂した2人によって、夫婦を生み出した。そして、そのうちの男性〔部分〕は、スヴァーヤンブヴァであり、スヴァラート（自己支配者）であるマヌになった。

strī yāsīc²⁸ chatarūpākhyā mahiṣyasya hamātmanah /

tadā mithunadharmeṇa prajā hy edhāmbabhūvire // 55 //

力強いマハートマン（偉大な魂）〔を持つ者〕（ブラフマー）の女性〔部分〕は、シャタルーパーという名前になった。その時、夫婦関係によって生類は実に繁栄した。

sa cāpi śatarūpāyām pañcā 'patyāny ajījanat /

priyavratottānapādau tisraḥ kanyāś ca bhārata /

ākūtir devahūtiś ca prasūtir iti sattama // 56 //

そして、彼はさらに、シャタルーパーとの間に、プリアヴラタ、ウッターナパーダと3人の娘アーケーティ、デーヴァフーティ、プラスーティという5人の子を授かった。バ

²⁶ 前文に tato parām upādāya sa sargāya mano dadhe //50cd//（そして最高の者（女性）を得て、彼は創造のために専心した。）とあるので、「その増大」とは創造が進むことを指していると考えられる。

²⁷ ヴィドゥラのこと。ヴィドゥラとは、マハーバータの主要な登場人物の1人で、「ヴィヤーサとアンバーリカーの召使い女の息子。ドリタラーシトラとパーンドウの異母弟」[上村 2002 p. 38]である。

²⁸ 原文では yā 'śīc となっている。これは yā āśīc の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは yāsīc と表記した。

ラタ族の長よ。最高の者よ。

4.ch.4.3²⁹

tato viniṣṣvasya satī vihāya taṃ śokena roṣeṇa ca dūyatā hṛdā /

pitror agāt strainavimūḍhadhīr gṛhān preṇātmano yo 'rdham adāt sa tāṃ priyaḥ //3//

そこで女性の性質として判断力が惑わされ、悲しみと怒りによって心が打ちひしがれて、サティーはため息をつき彼（シヴァ）をあとに残して両親の元へ行った。〔その〕彼は、〔サティーを含めた〕従者たちへの愛情ゆえに自身の半分を愛する彼女に与えた。

4.ch.16.17³⁰

mātr̥bhaktiḥ parastrīṣu patnyām ardha ivātmanaḥ /

prajāsu pitṛvatsnigdhaḥ kiṅkaro brahmavādinām //17//

〔彼は〕他の女性に対しては母に対するようなバクティ〔を持ち〕、妻に対しては自身の半身のよう〔に扱い〕、人々に対しては父に対するような愛情〔を持ち〕、ブラフマンについて語れる者たちにとっては召使い〔のよう〕である。

12.ch.12.11³¹

ūrdhvatiryagavāksargo rudrasargas tathaiva ca /

ardhanārīnarasyātha yataḥ svāyaṃbhuvo manuḥ /

śatarūpā ca yā strīṇāmādyā prakṛtir uttamā //11//

天にいる者たちと地上にいる者（動物）たち、地下にいる者たちの創造、同様に、ルドラの創造、そしてアルダナーリーナラの〔創造〕、〔アルダナーリーナラ〕からのスヴァーヤンブヴァ・マヌと最初の女性と名付けられた最高の女性原理であるシャタルーパーの〔創造〕。

²⁹ 夫シヴァと父ダクシャが不仲ゆえにサティーが死を選ぶ、という神話の一部である。儀礼においてダクシャから不当な扱いを受けたシヴァは怒り、サティーに「父ダクシャに会いに行ってはならない」と言った。サティーは、友人や親類に会いたい、シヴァを恐れてもいた。結局、理性を失ったサティーは両親の元へ行った、という内容である。

³⁰ バーラタの王プリトゥに対する讃歌の一部である。

³¹ バーガヴァタプラーナ 12 スカンダの概要について述べた章の一部である。内容は、前述の Bāgavata-p. 3.12.51-56 のことと考えられる。

Brahma-purāṇa :N 版（底本）、AITM 版（英訳）

ch.1.41-59（ブラフマー創造神話）

tatra jajñe svayaṃ brahmā svayaṃbhūr iti naḥ śrutam /

hiraṇyavarṇo bhagavān uṣitvā parivatsaram //41//

tadaṇḍam akarod dvaidhaṃ divaṃ bhuvam athāpi ca /

tayoḥ śakalayor madhya ākāśam akarot prabhūḥ //42//

そこで、スヴァヤンブー（自生者）であるブラフマーが自身を創造したと私たち³²は聞いた。黄金色の神（ブラフマー）は一年間とどまって、それからその卵を天と地の2つにした。2つに分けられたものの中央に神（ブラフマー）は虚空を創った。

ap pāriplavāṃ pṛthvīm diśaś ca daśadhā /

tatra kālāṃ mano vācaṃ kāmāṃ krodham atho ratim //43//

〔ブラフマーは〕水に浮いた大地と10の方角を〔創った〕。そこに、カーラ（時間）、マナス（心）、ヴァーチュ（言葉）、カーマ（愛欲）、クローダー（怒り）、ラティ（享楽）を〔創った〕。

sasarja sṛṣṭiṃ tadrūpāṃ sraṣṭum icchan prajāpatin /

marīcim atryaṅgirasau pulastyāṃ pulahaṃ kratum //44//

vasiṣṭhaṃ ca mahātejāḥ so 'srjat sapta mānasān /

sapta brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ //45//

それらの姿をとった創造を欲して、マリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタといった創造主たちを創った。彼（ブラフマー）は、その偉大な輝きを持つ心から生まれた7人を創った。彼らは、7人のブラフマーとして、プラーナ聖典において、定められている。

nārāyaṇātmakānāṃ tu saptānāṃ brahmajanmanām /

tato 'srjat purā brahmā rudraṃ roṣātmasaṃbhavam //46//

そして、ナーラーヤナの性質を有する7人がブラフマーから生まれるやいなや、すぐにブラフマーは激怒から生まれた息子ルドラを創った。

sanatkumāraṃ ca vibhuṃ pūrveṣāṃ api pūrvajam /

saptasv etā ajāyanta prajā rudrāś ca bho dvijāḥ //47//

そして以前に、最年長であり、遍在するサナトクマーラを〔創った〕。7人からこれらの生類やルドラたちが生まれた。おお、再生族の者たちよ。

skandaḥ sanatkumāraś ca tejaḥ saṃkṣīpya tiṣṭhataḥ /

teṣāṃ sapta mahāvamśā divyā devagaṇānvitāḥ //48//

kriyāvantaḥ prajāvanto maharṣibhir alaṃkṛtāḥ /

³² 話者であるローマハルシャナとダクシャや他の聖者たちのことである。

vidyuto 'śanimeghāṃś ca rohitendradhanuṃṣi ca //49//

vayāṃsi ca sasarjāda³³ parjanyaṃ ca sasarja ha /

ṛco yajūṃṣi sāmāni nirmame yajñasiddhaye //50//

スカンダとサナトクマーラは、輝きを集めて、とどまった。それらの7人は、神聖であり、偉大なヴァンシャ（系譜）に属し、神々の一団を従えており、儀式の執行者たちであり、子を持つ者たちであり、偉大な聖仙によって飾られる。稲光と稲妻を伴う雲と虹³⁴と鳥を彼（ブラフマー）は創った。また初めに彼はパルジャニヤ（雨雲）を創った。ヤジュニヤ（儀礼）を成就するために、リグとヤジュスとサーマンを創った。

sādhyaṃ anyāṃs tathā devān ity evam anuśūruma /

uccāvacāni bhṛtāni gātrebhyas tasya jajñire //51//

同様に、サーディヤなどの神々を〔創った〕と、私たちは聞いた。高き者や低き者たちは、彼（ブラフマー）の手足から生まれた。

āyataṃ³⁵ ca prajāśargaṃ sṛjato 'pi prajāpateḥ /

sṛjyamānāḥ prajā naiva vivardhante yadā tadā //52//

ブラジャーパティ（創造主、ブラフマー）からのたくさんの生類の創造がなされた時でも、創造された生類は、全く繁栄しなかった。

dvidhā kṛtvātmano³⁶ deham ardhena puruṣo 'bhavat /

ardhena narī tasyāṃ tu so 'sṛjad vividhāḥ prajāḥ //53//

彼（ブラフマー）は、自身の身体を2つにし、半身によって男性に、半身によって女性になった。彼は彼女に様々な種類の生類を創った。

divaṃ ca pṛthivīm caiva mahimnā vyāpya tiṣṭhati /

virājam asṛjad viṣṇuḥ so 'sṛjat puruṣaṃ virāt //54//

彼（半身の男性）は、天や地に、偉大さによって満ち、とどまった。ヴィシュヌはヴィラージュ（主）を創り、かのヴィラージュはプルシャを創った。

puruṣaṃ taṃ manuṃ vidyāt tasya manvantaraṃ smṛtam /

dvitīyaṃ mānasasyaitan manor antaram ucyate //55//

そのプルシャをマヌであると知るべきである。彼のマヌヴァンタラとして知られており、彼（ブラフマー）の心から生まれたマヌの2つ目の時代であると言われている。

sa vairājaḥ prajāśarge sasarja puruṣaḥ prabhuh /

³³ 原文では sasarjā ''dau となっているが、これは sasarjā ādau の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは sasarjāda³³ とした。

³⁴ 虹には rohitadhanus（不完全であり、人には見えない直線の虹）と indradhanus（完全な虹）がある。

³⁵ 原文では āya taṃ（分書）となっているが、英訳を参照し、単語の有無を考慮し、āyataṃ（連書）とした。

³⁶ 原文では kṛtvā ''tmano となっているが、これは kṛtvā ātmano の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは kṛtvātmano とした。

nārāyaṇavisargasya prajāś tasyāpy ayonijāḥ //56//

かのヴァイラージャ（ヴィラージュの息子）であり、プルシャである神は、生類の創造〔の段階〕において創った。ナーラーヤナ（ヴィシュヌ）に創られた生類とマヌの生類もまた、子宮から生まれたものではなかった。

āyusmān kīrtimān dhanyaḥ prajāvāṁś ca bhaven naraḥ /

ādisargaṃ viditvemaṃ yatheṣṭāṃ cāpnuyād³⁷ gatim //57//

この最初の創造を知ったならば、人は、長寿で、名声を持ち、富を持ち、子を持つだろう。そして彼は望んだ目的を得るだろう。

sisṛkṣus tu prajāś tv evam āpavo vai prajāpatiḥ /

lebhe sa puruṣaḥ patnīm śatarūpām ayonijām //58//

このように、ブラジャーパティであるアーパヴァ³⁸は、生類を創造することを望んだ。かの男性は、子宮から生まれたものではないシャタルーパーを妻として娶った。

āpavasya mahimnā tu divam āvṛtya tiṣṭhataḥ /

dharmenaiva munisreṣṭhāḥ śatarūpā vyajāyata //59//

アーパヴァの偉大さによって天は覆われた。最高の聖仙たちよ。ダルマ（法）に従って、シャタルーパーは〔生類を〕創造した。

ch.43.30-38ab（ブラフマー創造神話）

tādṛgbhūtas tato brahmā sarvalokamaheśvaraḥ /

pañcabhūtasamāyuktaṃ sṛjate ca śanaiḥ śanaiḥ³⁹ //30//

それから、そのような存在である全世界の偉大な神ブラフマーは、五大要素⁴⁰を合わせた〔世界〕を徐々に創っていった。

mātrāyonīni bhūtāni sthūlasūkṣmāṇi yāni ca /

caturvidhāni sarvāṇi sthāvarāṇi carāṇi ca //31//

マートラーヨーニ（子宮から生じたもの⁴¹）は、粗大なものや微細なものであり、全て

³⁷ 原文では cā ’pnuyād となっているが、これは cā āpnuyād の連声を分かりやすく記述したものである。ここでは cāpnuyād とした。

³⁸ *Purāṇic Encyclopaedia* や主要な辞書では、アーパヴァはヴァスィシュタとされている。45 偈においてヴァスィシュタが創造されているので、そのようにとらえることは不可能ではないが、文脈から判断すると、ブラフマー、もしくはブラフマーから分かれた半身の男性を指す可能性が高いと考える。

³⁹ śanaiḥ śanaiḥ に関して、英訳では slowly となっているが、創造を進めていくという状況から判断し、「徐々に」と訳した。

⁴⁰ 地水火風空のことと考えられる。

⁴¹ mātrāyonīni の訳が不明である。英訳にも混乱が見られるため、文脈から判断し、「子宮から生じたもの」とした。

で4種類ある。〔それらは〕動くものと動かないものである。

tataḥ prajāpatir brahmā cakre sarvaṃ carācaram /

saṃcintya manasātmānaṃ⁴² sasarja vividhāḥ prajāḥ //32//

そして、創造主ブラフマーは、全て動くものと動かないものを作った。心によって、〔自分〕自身で考えて、色々な種類の生類を創った。

marīcyādīn munīn sarvān gandharvoragarākṣasān /

(sapta svargān sapātālān bhuvanāni caturdaśa /

dvīpān aśṛjad āmbhodhīn gaṃgādyāḥ saritas tathā /)

yakṣavidyādharāṃś cānyān gaṃgādyāḥ saritas tathā //33//

naravānarasiṃhāṃś ca vividhāṃś ca vihaṃgamān /

jarāyūn aṇḍajān devī svedajodbhedajāṃś tathā //34//

マリーチなどや聖者たち、ガンダルヴァや蛇やラクシャサ、(7つの天界と〔7つの〕地獄、〔すなわち〕14の世界、及び海を伴った島、ガンガーなどの川を創った。) ⁴³ヤクシャとヴィディヤダーダラや他のもの、及びガンガーなどの川〔を創った〕。そして人と猿、ライオン、色々な種の鳥たち、胎生のもの、卵生のもの、湿生のもの、芽生のものを創った。女神よ。

brahmaṃ⁴⁴ kṣatram⁴⁵ tathā vaiśyaṃ sūdraṃ caiva catuṣṭayam /

antyajātāṃś ca mleccchāṃś ca sasarja vividhān pṛthak //35//

そしてバラモンとクシャトリア、ヴァイシュヤ、シュードラという4種の〔カースト〕と別にアンティヤジャータ⁴⁶、ムレーツチャ⁴⁷といった色々な種類を創った。

yat kiṃcij jīvasaṃjñāṃ tu tṛṇagulmapipīlikam /

brahmā bhūtvā jagatsarvaṃ nirmame sacarācaram //36//

そしてブラフマーは、草や低木やアリといった何らかの命と呼ばれるものを生み、動くものと動かないものから成る全世界を創った。

dakṣiṇāṃge tathātmānaṃ⁴⁸ saṃcintya puruṣaṃ svayam /

vāme caiva tu nārīṃ sa dvidhā bhūtam akalpayat //37//

⁴² 原文では manasā 'tmānaṃ となっている。これは manasā ātmānaṃ の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは、manasātmānaṃ とした。

⁴³ この () は N 版で用いられている。特に説明はなされていないが、恐らく、このシュローカが加えられている文献と、省かれている文献があるという意味だろう。

⁴⁴ 原文では brahma となっているが、英訳を参照し、brahmaṃ とした。

⁴⁵ 原文では kṣatram となっているが、英訳を参照し、kṣatram とした。

⁴⁶ 最下層の生まれの者のことを指す。一般的にアウトカースト（不可触民、ダリット）と呼ばれる。

⁴⁷ 英訳では外国人とされているが、辞書によると外国人、未開人、非アーリア人などを指すとされている。

⁴⁸ 原文では tathā 'tmānaṃ となっている。これは tathā ātmānaṃ の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは tathātmānaṃ とした。

tataḥ prabhṛti loke 'smin prajā maithunasambhavāḥ /38ab

彼は、自分で考えてから、右半身で自分自身である男性を、左半身で女性を「[というように]」、生類を二様に創った。そしてそれ以来、この世界では性行為によって生まれた生類が「[繁栄するようになった]」。

ch.72.2-4⁴⁹

yadā yadā tv adharmasya vṛddhir bhavati bho dvijāḥ⁵⁰ /

dharmas ca hrāsam abhyeti tadā devo janārdanaḥ //2//

avatāraṁ karoty atra dvidhā kṛtvā 'tmanas tanum /

sādhūnām rakṣaṇārthāya dharmasamsthāpanāya ca //3//

おお、再生族の者たちよ。アダルマが増えダルマが減る時にはいつもジャーナルダナ神（ヴィシュヌ）は、良き者たちを守るため、そしてダルマを堅固にするために、自身の体を二分してここ（地上）に降下（化身）する。

duṣṭānām nigrhāṛthāya hy anyeṣāṁ ca suradviṣām /

prajānām rakṣaṇārthāya jāyate 'sau yuge yuge //4//

なぜならかの者（ヴィシュヌ）は悪い者やまたその他の神々の敵たちを罰するために、生類たちを守るために、ユガ毎に生まれる。

Gautamī-māhātmya ch.40.106-107⁵¹

jītvā ripūn devagaṇān prapūjya guruṁ namaskartum agād viśākhaḥ /

⁴⁹ この章は、プリティヴィーの重荷を取り除くためにハリが取った化身の物語である。この文章ではヴィシュヌが自身の身体を二分するのだが、男女に二分するのか、ヴィシュヌが二人になるのかは不明である。

⁵⁰ この句は *Bhagavadgītā*4.7a:yadā yadā hi dharmasya glānir bhavati bhārata /7ab [Radhakrishnan 1948 p. 154]、「実に、美德（正法）が衰え、不徳（非法）が栄える時」[上村 1992 p. 51]と近似している。続く *Bhagavadgītā*4.7c-8 についても abhyutthānam adharmasya tadā 'tmānam srjāmy aham //7cd// paritrāṇāya sādhūnām vināśāya ca duṣkṛtām / dharmasamsthāpanārthāya sambhavāmi yuge yuge //8// [Radhakrishnan 1948 pp. 154-155]、「私は自身を現わすのである。

（七）」「善人を救うため、悪人を滅ぼすため、美德を確立するために、私は世紀ごとに出現する。（八）」[上村 1992 p. 51]とあり、平行句ではないにしても内容が近似している。

Bhagavadgītā の成立年代が紀元前 4 世紀～紀元後 4 世紀[上村 1998 p. 27]と *Brahma-p.* に先行することから、*Brahma-p.* が *Bhagavadgītā* を模倣した可能性が考えられる。

⁵¹ この文章は、「ピッパラダの両親が神々のせいで死んだために、復讐を考えているピッパラダが、シヴァに帰依し、神々を殺す力を恩恵として求める」という神話の中で、シヴァの描写として書かれたものである。

cukopa dṛṣṭvā gaṇanāthamūḍham aṅke tam āropya jahāsa somaḥ //106//

īśāṅkarūḍho 'pi śīśusvabhāvān na mātur aṅkaṃ pramumoca bālaḥ /

kruddhaṃ sutaṃ bodhitum apy aśaktas tato 'rdhanāritvam avāpa somaḥ //107//

敵に打ち勝ち、神々を崇め、ヴィシャーカ（スカンダ）は尊敬する人（父シヴァ）に敬礼しに行った。〔ヴィシャーカは〕ガナナータ（ガネーシャ）が彼のひざに乗っているのを見て怒った。ソーマ（シヴァ）は〔スカンダもひざに〕登らせて笑った。子供（スカンダ）はイーシャ（シヴァ）のひざに登ったにもかかわらず、子供の性質上、母のひざを離れなかった。それゆえ怒っている息子を理解することさえできず、シヴァは半身が女性の姿を取った。

Gautamī-māhātmya ch.59.81⁵²

eke tarkair vimuhyanti liyante tatra cāpare /

śivaśaktyos tadā 'dvaitaṃ sundaraṃ naumi vigrahaṃ //81//

ある者たちは論理（反論）に惑わされ、そして他の者たちはそこに沈潜している。そこで私は不二の美しいシヴァシャクティの姿を崇めます。

Gautamī-māhātmya ch.91.33cd-35ab（ブラフマー創造神話）

vinā patnyā na sidhyeta yajñāḥ śrutinidarśanāt //33cd//

śarīram ātmano 'haṃ vai dvedhā cākaravaṃ mune /

pūrvārdhena tataḥ patnī mamābhūd yajñasiddhaye //34//

uttareṇa tv ahaṃ tadvad ardho jāyā iti śruteḥ //35ab

天啓聖典が示すところによると、妻なしではヤジュニャは成就しない。そこで私（ブラフマー）は自身の体を2つにした。聖仙よ。それからヤジュニャを成就させるために最初の半身で私の妻となった。残りの半身で私〔になった〕。「半身は妻である」と天啓聖典に〔言われている〕。

⁵² この文章は、マハーシャニとの戦いに敗れ、侮辱されたインドラが、妻インドラーニーから「私と共に苦行をし、マハーシャニを倒す力を手にいれましょう。妻と共に苦行すると永遠の恩恵を受けられます。」と言われ、苦行に行き、その時にシヴァに対し行なった讃歌の一部である。シヴァが自身の妻を褒め称え、女神がシヴァを抱きしめるとダルマが現れ、続いて次々と良いものが現れ、シヴァと女神が触れ合ったために世界の罪がとり除かれた、といった女神（妻）の必要性を述べた内容となっている。

Brahmāṇḍa-purāṇa :M 版（底本）、AITM 版（英訳）

1.2.ch.9.8cd-42（ブラフマー創造神話）

athāsya sṛjataḥ sargaṃ prajānāṃ parivṛddhaye //8cd//

na vyavarddhamta tāḥ sṛṣṭāḥ prajāḥ kenāpi hetunā /

tataḥ sa vidadhe buddhim arthaniścayagāminim //9//

そして生類の創造を促進させるためにこの者（ブラフマー）が創造している間、それらの創造された生類はいかなる理由によっても繁栄しなかった。そこで彼（ブラフマー）は原因に近づくための知性を働かせた。

athātmani samadrākṣīt tamomātrāṃ tu cāriṇim /

rajaḥ sattvaṃ parityajya vartamānāṃ svakarmataḥ //10//

そして〔ブラフマーは〕自身の中にラジャスとサットヴァを排除して、自分自身の行為によってうごめくタマス⁵³の要素を見た。

tataḥ sa tena duḥkhena śucaṃ cakre jagatpatih /

tamaś ca vyanudat paścād rajasā tu samāvṛṇot //11//

さらにその悲しみによってかの世界の主（ブラフマー）は悲嘆にくれた。そしてタマスを追い出し、その後ラジャスによって覆った。

tat tamaḥ pratinuttaṃ vai mithunaṃ saṃprasūyata⁵⁴ /

adharmācaraṇāt tasya hiṃsā śoko vyajāyata //12//

追い出されたかのタマスは双子を生んだ。非法な行いゆえに彼（タマス）にヒンサー（暴力）とショーカ（悲しみ）が生まれた。

tatas tasmin samudbhūte mithune varaṇātmake /

tataḥ sa bhagavān āsīt prītaś caitaṃ hi śīśriye //13//

そこで、かの覆う性質を持った双子が生まれた時、かの神（ブラフマー）は喜んだ。そしてそれに依拠した。

evaṃ prītātmanas tasya svadehārdhād viniṣṛtā /

nārī paramakalyāṇī sarvabhūtanamanoharā //14//

このように喜んだ彼自身の半身から全存在の心を奪う最高に吉祥な女性が現れた。

sā hi kāmātmanā sṛṣṭā prakṛteḥ sā surūpiṇī /

śatarūpeti sā proktā sā proktaiva punaḥ punaḥ //15//

かの美しい姿の女性は、まさにカーマートマン（欲望⁵⁵を持つ者、ブラフマー）によっ

⁵³ サーンキヤ学派では、タマスとラジャス、サットヴァの3要素（トリグナ）を存在物の構成要素としている。この3要素の優劣が変化することによって、世界が展開するとされる。

⁵⁴ 後続の語が adharmācaraṇāt であるため、連声の規則として saṃprasūyata になったと考えられる。

てプラクリティから創られた。彼女はシャタルーパーとよばれた。彼女は何度も何度も〔そう〕呼ばれた。

tataḥ prajāḥ samudbhūtā yathā proktā mayā purā /

prakriyāyaṁ yathā tubhyaṁ tretāmadhye mahātmanaḥ //16//

yadā prajāḥ tu tāḥ sṛṣṭā na vyavarddhatadhdhīmataḥ⁵⁶ /

tato 'nyān mānasān putrān ātmanaḥ sadṛśo 'sṛjat //17//

そして以前に私によってあなたに「プラクリヤー」で言われたように、トレーターユガの間に、マハートマンから生類たちが生まれた。しかし知者（ブラフマー）から創造されたそれらの生類たちが繁栄しなかったのも、自分に似せて〔ブラフマーは〕心から生まれた他の息子たちを創った。

bhṛgvamgiro marīciṁś ca pulastyam pulahaṁ kratum /

dakṣam atrim vasiṣṭhaṁ ca nirmame mānasān sutān //18//

ブリグとアングiras、マリーチ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタ〔という〕心から生まれた息子たちを創った。

nava brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṁ gatāḥ /

brahmā yat ātmakānām tu sarveṣāṁ ātmayoninām //19//

彼らは、9 人のブラフマーとしてプラーナ聖典において定められている。というのも、アートマンを源泉とする全ての者にとってのブラフマーだからである。

tato 'sṛjat punar brahmā dharmam bhūtasukhāvaham /

prajāpatiṁ ruciṁ caiva pūrveṣāṁ eva pūrvajau //20//

さらにブラフマーは、生類に喜びをもたらすダルマと創造者ルチを創った。〔彼ら 2 人は〕太古の者たちにとっても年長者である。

buddhitaḥ sasṛje dharmam sarvabhūtasukhāvaham /

manasas tu rucir nāma jajñe yo 'vyaktajanmanaḥ //21//

〔ブラフマーは〕知から全ての生類に喜びをもたらすダルマを創った。生まれが未顕現の者（ブラフマー）の心からルチという名の〔者は〕生まれた。

bhṛguḥ tu hṛdayāj jajñe ṛṣiḥ salilayoninaḥ /

prāṇād dakṣam asṛjan⁵⁷ brahmā cakṣurbhyāṁ tu marīciṁ⁵⁸ //22//

そして、水から生まれた者（ブラフマー）の心からブリグは生まれた。さらにブラフマーはプラーナ（呼吸）からダクシャを、両目からマリーチを創った。

abhimānātmakam rudram nirmame nilalohitam /

śirasas 'mṅgirasam⁵⁹ caiva śrotrād atrim tathaiva ca //23//

⁵⁵ 繁栄に対する欲望を意味する。

⁵⁶ 原文では vyavarddhatadhdhīmataḥ となっているが、英訳を参照し、vyavarddhatadhdhīmataḥ とした。

⁵⁷ 原文では sṛjan となっているが、英訳を参照し、asṛjan とした。

⁵⁸ 原文では maricinam となっているが、英訳を参照し、marīciṁ とした。

名声⁶⁰の本質をしたニーラローヒター（赤みがかった青色）であるルドラを創った。そして、頭からアンギラスを、耳からアトリを、同様に〔創った〕。

pulastyam ca tathodānād vyānāc ca pulahaṃ punaḥ /

samānajo vasiṣṭhaś ca hy apānān nirmame kratum //24//

そしてウダーナ（呼吸）からプラストィヤを、さらにヴィヤーナからプラハを同様に〔創った〕。ヴァスィシュタはサマーナ（呼吸）から生まれた。そしてアパーナ（呼吸）からクラトゥを創った。

ity ete brahmaṇaḥ putrāḥ prajādau dvādaśa smṛtāḥ /

dharmaś teṣāṃ prathamajo devatānāṃ smṛtaś tu vai //25//

このように生類のはじめ（先祖）には、この 12 人のブラフマーの息子たちが知られている。そしてダルマが彼ら神格の中で最も年長の者であると知られている。

bhṛgvādayaś tu ye sṛṣṭāś te vai brahmaṛṣayaḥ smṛtāḥ /

gṛhamedhipurāṇāś te dharmas taiḥ prāk pravarttitaḥ //26//

そしてブリグを始めとする者たちである生類は、ブラフマルシ（梵仙）として知られている。彼らは儀礼をする太古の家長である。最初にダルマ（法）が彼らによって確立された。

dvādaśaite prasūyaṃte prajāḥ kalpe punaḥ punaḥ /

teṣāṃ dvādaśa te vaṃśā divyā devaguṇānvitāḥ //27//

この 12 人の者たちは、カルパにおいて何度も何度も生類を創造した。彼ら（生類）にとっては、彼ら 12 人の者たちが、神的であり神の性質をそなえたヴァンシャである。

kriyāvaṃtaḥ prajavaṃto maharṣibhir alaṃkṛtāḥ /

yadā tair iha sṛṣṭaiś tu dharmamādyaiś ca maharṣibhiḥ //28//

srjyamānāḥ prajāś caiva na vyavarddhamta dhimataḥ /

tamomātrāvṛtaḥ so 'bhūc chokapratihataś ca vai //29//

〔彼らは〕儀礼を行い生産（生殖）を行なう者たちであり、偉大なりシたちによって讃えられている。この世界で、これらの創造されたダルマをはじめとする偉大なりシたちによって、生類たちが知者（ブラフマー）から創造されたが、繁栄しなかった時、彼（ブラフマー）はタマスの要素に覆われ、そして悲しみに打ちひしがれた。

yathāvṛtaḥ⁶¹ sa vai brahmā tamomātrā tu sā punaḥ /

putrāṇāṃ ca tamomātrā aparā niḥsṛtā 'bhavat //30//

かのブラフマーが覆われたように、再び、かのタマスの要素が、〔覆うためにあった〕。息子たちにとっても、他の現れ出たタマスの要素に〔覆われるように〕なった。

⁵⁹ 原文では śirasomgirasam となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、śiraso 'mgirasam とした。

⁶⁰ abhimāna の訳は英訳を参照した。

⁶¹ 原文では yathā 'vṛtaḥ となっている。これは yathā āvṛtaḥ の連声を分かりやすく記述したものである。ここでは yathāvṛtaḥ とした。

pratisrotātmako 'dharmo hiṃsā caivāśubhātmikā /

tataḥ pratihate tasya pratīte varaṇātmake //31//

svāṃ tanuṃ sa tadā brahmā samapohata bhāsvarām /

dvidhā kṛtvā svakaṃ deham arddhena puruṣo 'bhavat //32//

アダルマ（非法）は流れに逆らう性質であり、そしてヒンサーはまさに不吉な性質である。そして彼（ブラフマー）が打ちひしがれて〔タマスに〕覆われるようになった時、かのブラフマーは自分の輝く体を捨てた。自分の体を二分した後、半身によって男性になった。

ardhena nārī sā tasya śatarūpā vyajāyata /

prakṛtir bhūtaḥ hātrī sā kāmād vai sṛjataḥ prabhoḥ //33//

彼の半身によってかの女性シャタルーパーが生じた。彼女は、創造する者である神がカーマから〔創られたので〕、プラクリティであり生類の母である。

sā divaṃ pṛthivīm caiva mahimnā vyāpya susthitā /

brahmaṇaḥ sā tanuḥ pūrvā divam āvṛtya tiṣṭhataḥ //34//

彼女は偉大さによって天と地に満ち、確立した。それは天を覆って留まっているブラフマーの以前の体であった。

yā tv arddhā sṛjyate nārī śatarūpā vyajāyata /

sā devī niyutaṃ taptvā tapaḥ paramaduścaram⁶² //35//

bharttāraṃ diptayaśasaṃ puruṣaṃ pratyapadyata /

sa vai svāyaṃbhavaḥ pūrvam puruṣo manur ucyate //36//

女性として創造された半身はシャタルーパーになった。その女神は、1億年の間、最高に困難な苦行を行ない、夫として輝かしい名声の男性を得た。そしてまさに彼は以前にスヴァーヤンブヴァであり、プルシャであり、マヌと呼ばれた。

tasyaikasaptatiyugaṃ manvaṃtaram ihocyate /

labdhvā tu puruṣaḥ patnīm śatarūpām ayonijām //37//

tayā sa ramate sārddham tasmāt sā ratir ucyate /

prathamaḥ saṃprayogaḥ sa kalpādaḥ samavarttata //38//

ここでは 71 ユガが彼のマヌヴァンタラと呼ばれる。そして、プルシャは妻として子宮から産まれなかったシャタルーパーを得て、彼は彼女と共に楽しんだ。それゆえ、彼女はラティ⁶³と呼ばれる。カルパの初めにこの最初の結合があった。

virājam asṛjad brahmā so 'bhavat puruṣo virāt /

samrāt saśatarūpas tu vairājas tu manuḥ smṛtaḥ //39//

ブラフマーはヴィラージャ（輝く者）を創った。彼はプルシャであり、ヴィラージュで

⁶² 原文では parama duścaram（分書）となっているが、ほぼ平行句となっている Śiva-p. 5.30.3 を参照し、paramaduścaram（連書）とした。

⁶³ rati（楽しみ、悦楽）は動詞 ram（楽しむ）からの派生語である。

あり、サムラージュ（最高の主）であり、シャタルーパーを伴った者であり、ヴァイラージャであり、マヌと呼ばれる者になった。

sa vairājaḥ prajāśargam saśarja puruṣo manuḥ /

vairājāt puruṣād vīrau śatarūpā vyajāyata //40//

かのヴァイラージャでありプルシャであるマヌは、生類の創造をした。シャタルーパーはヴァイラージャであるプルシャから 2 人の勇者を生んだ。

priyavratottānapāḍau putrau putravatām varau /

kanye dve sumahābhāge yābhyām jātā imāḥ prajāḥ //41//

2 人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダは、息子を持つ者たちにとって最も素晴らしい〔息子たち〕である。〔さらにシャタルーパーから〕とても幸運な 2 人の娘が生まれ、これらの生類が生まれた。

devī nāmnā tathākūṭiḥ prasūtiś caiva te śubhe /

svāyaṃbhuvah prasūtiḥ tu dakṣāya vyaśrjat prabhuḥ //42//

アーケーティと名付けられた女神とプラスーティの 2 人は吉祥である。そしてスヴァーヤンブヴァ神はプラスーティをダクシャに与えた。

1.2.ch.27.96-98⁶⁴

tatas te muditā viprāḥ prakṛtisthe maheśvare /

gandhodakaiḥ suśuddhaiś ca kuśapuṣpavimiśritaiḥ //96//

snāpayamti mahākumbhair adbhīr devaṃ maheśvaram /

gāyaṃti vividhair guhyair huṃkāraiś⁶⁵ cāpi susvaraiḥ //97//

そしてかの喜んだバラモンたちは、マヘーシュヴァラ（シヴァ）がプラクリティの状態にあったので、草と花が混ぜられた完全に浄化された香水の入った大きな壺の水によって、マヘーシュヴァラ神を沐浴させた。〔そのバラモンたちは〕様々な秘密の huṃ という音で美しい声によって歌った。

namo digvāsase deva kiṃkiṇīḍhrāya vai namaḥ /

arddhanārīśārīrāya sāmṣkhyayogapravarttine //98//

神よ。ディグヴァーサス（シヴァ）に敬礼する。キンキニー⁶⁶を付けた神に敬礼する。

⁶⁴ 聖者たちが、クリタユガの時に、ヒマーラヤの頂にあるデーヴァドゥーラの森で、シヴァに対し苦行をする神話の一部である。乱れた髪や赤茶色の目、赤く直立したリングを持ち、全裸に灰を塗っている恐ろしいシヴァを見て、恐れて拒絶した聖者たちは、ブラフマーに庇護を求める。しかしブラフマーがシヴァを信仰せよと言うので、聖者たちが戸惑いながらもシヴァを崇めていると、それに満足したシヴァから恩恵を授かり、聖者たちは喜んで、シヴァ讃歌を唱えるという内容である。

⁶⁵ 原文では hukāraiś となっているが、英訳を参照し、huṃkāraiś とした。

半身が女性である者に〔敬礼する〕。サーンキヤとヨーガを広めた⁶⁷者に〔敬礼する〕。

2.3.ch.39.32-36⁶⁸

jagrāha tāni sarvāṇi sucaṁdro līlayaiva hi /

cikṣepa śivaśūlaṁ ca rāmo nṛpataye yadā //32//

babhūva puṣpamālāṁ ca tac chūlaṁ nṛpater gale /

dadarśa ca puras tasya bhadrakālīṁ jagatprasūm //33//

スチャンドラはにそれら全てをつかんだ。そして、ラーマが王（スチャンドラ）にシヴァの三叉戟を投げた時、その三叉戟は王の首で花輪になった。そして、〔ラーマは〕彼（ラーマ）の前に世界の母であるバドラカーリー（吉祥な黒い女性）を見た。

vahaṁtiṁ muṁḍamālāṁ ca vikaṭāsyāṁ bhayaṁkarīm /

siṁhasthāṁ ca trinetraṁ ca triśūlavaradhārīṇīm //34//

dr̥ṣṭvā vihāya śastrāstraṁ namaskṛtya samaiḍata /

rāma uvāca//

namo 'stu⁶⁹ te śaṁkaravallabhāyai jagatsavitryai samalaṁkṛtāyai //35//

nānāvibhūṣābhīr ibhārigāyai prapannarakṣāvihitodyamāyai /

dakṣaprasūtyai himavadbhavāyai maheśvarārddhāṁgasamāsthītāyai //36//

〔ラーマは〕ヴァハンティ（流水）であり、骸骨の輪を持ち、おどろおどろしい顔をしており、恐ろしい女性であり、ライオンに乗っており、三つ目であり、素晴らしい三叉戟を持つ女性を見て、武器やミサイルを置き、〔女神に〕敬礼し、賞賛した。ラーマは言った。「シャンカラの愛する人に、世界の母に、良く飾られた者に、色々な飾りによって〔飾られた者に〕、ライオン〔に乗って〕行く者に、やって来る者を拒まずに守る者に、ダクシャの娘に、ヒマヴァットの娘に、マヘーシュヴァラを半身に持つ者に敬礼する。」

⁶⁶ 舞踊などの際に足に付ける小さな鈴のこと。ヒンディー語ではグングルーと呼ばれる。

⁶⁷ アルダナーリーシュヴァラの男性半身をプルシャ、女性半身をプラクリティとし、サーンキヤ哲学の原理であるプルシャとプラクリティに対応していると考えられていると思われる。

⁶⁸ パラシュラーマの戦いの物語の一部である。3日間戦い続け、たくさんの王や戦士を殺したラーマのところへ、スチャンドラがたくさんの戦士を引き連れやってきた。お互いにお互いの戦士を殺し合った。ラーマがアーチャマナの儀礼によって放ったミサイルに対し、スチャンドラが尊崇から敬礼したところ、そのミサイルはスチャンドラを傷つけなかった。怒ったラーマは槍やこん棒、斧などを投げつけた。すると、その中の三叉戟がスチャンドラの首で花輪となり、ラーマは眼前にバドラカーリーを見た。そして、ラーマはバドラカーリーに敬礼した。するとバドラカーリーはラーマに「スチャンドラを倒す」という恩恵を与えた。という話である。

⁶⁹ 原文では namostu となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、namo 'stu とした。

Lalitā-māhātmya ch.30.58-61⁷⁰

tad bāṇapātanāj jātadhairyaviplava īśvaraḥ /

parvatasya sutām gaurīm pariṇeṣyati satvaram //58//

そして、矢の雨が降ることで、イーシュヴァラ（シヴァ）は忍耐力を失います。すぐに〔シヴァは〕山の娘ガウリーと結婚するでしょう。

sahasrakoṭayaḥ kāmā matprasādāt tvadudbhavāḥ /

sarveṣāṃ deham āviśya dāsyamti ratim uttamām //59//

私（ラリターアンビカー）の恩恵によって、10 億のカーマがあなた（カーマ神）から生まれます。〔それらは〕全ての〔人の〕体に入り、最高のラティを与えるでしょう。

matprasādena vairāgyāt saṃkruddho 'pi sa īśvaraḥ /

dehadāhaṃ vidhātuṃ te na samartho bhaviṣyati //60//

私の恩恵によって、利欲の性質を持つがゆえに、かのイーシュヴァラはたとえ憤怒していても、あなたの体を燃やすことはないでしょう。

adṛśyamūrtilḥ sarveṣāṃ prāṇināṃ bhavamohanah /

svabhāryāvirahāśaṃkī dehasyārdhaṃ pradāsyati /

prayāto 'sau kātarātmā tvadbāṇāhatamānasaḥ //61//

バヴァ（シヴァ）を魅惑する者（カーマ）は、全ての生きとし生ける者によって、目に見えない存在〔であれ〕。自分の妻から離れることを恐れる者（シヴァ）は、体の半分を〔妻に〕与えるでしょう。あなたの矢に心を射ぬかれたその者（シヴァ）は、心をかき乱されます。

⁷⁰ ラリターアンビカー女神がラティに慈悲を示したため、シヴァに焼かれたカーマが回復した。そこで、カーマがラリターに感謝を示したところ、ラリターは「全世界を喜ばせなさい。（以下、翻訳文）」と言った。後続のラリターの台詞はガンダルパを酷評する者は種なしになる、など、様々な者たちへの恩恵を述べている。

Lalitā-māhātmya ch.5.30⁷¹

sivo vā yāṃ samārādhya dhyānayogabalena ca /

īśvaraḥ sarvasiddhānām arddhanārīśvaro 'bhavat //30//

そして、シヴァは彼女を崇め、瞑想とヨーガの力によって、全ての成就者たちのイーシュヴァラであるアルダナーリーシュヴァラになった。

Lalitā-māhātmya ch.39.50-51⁷²

śivo 'py atraiva sāmṇidhyaṃ tava prītyā karotv iti /

atha śrītripurādakṣabhāgāt kāmēśvaraḥ paraḥ //50//

īśānaḥ sarvavidyānām īśvaraḥ sarvadehinām /

āvirāsin mahādevaḥ sākṣāc chr̥ṅgāranāyakaḥ //51//

「ここであなた（シヴァ）の愛によってシヴァもまた近づくべし」と〔言った〕。それから、最高のカーメーシュヴァラであり、全知者たちにとってのイーシャーナであり、体を持つ者（生類）全てにとってのイーシュヴァラであり、彼自身愛情を持つ者であるマハーデーヴァが、シュリートリプラーの右側に現れた。

Lalitā-māhātmya ch.44.48⁷³

siṃdūrakāṃcanasamobhayabhāgam arddhanārīśvaraṃ girisutāharabhūpacihnam /

pāśadvayākṣavalayeṣṭadahastam eva smṛtvā nyasel lipipadeṣu samīhitārtham //48//

等しく（1つの身体に）紅色と金色の2つの部分を持っており、山の娘とハラの王の印を持ち、2つの索綱と腕輪を〔持ち〕、与願印をしている、アルダナーリーシュヴァラ

⁷¹ ヴィシュヌがアガスティヤに解脱する方法を述べている物語の一部である。基本的に人間が解脱するための方法について述べているが、「最高のシャクティを崇める者は、様々な方法で解放され、世俗の者が受ける苦しみを受けない。」という文章の後にこの一文が書かれている。

⁷² この39章は、カーマークシー女神の化身や恩恵について述べている章である。ブラフマーがカーマークシー女神に世界の幸福のためにここにいるように求めたため、女神はカーンチーに住む地を得た。カーマークシー女神はヴィシュヌの妻ラクシュミーでもある。そしてブラフマーはシヴァにも「カーマークシーに近づきなさい」と言ったため、シヴァはシュリートリプラー（カーマークシー）とアルダナーリーシュヴァラを形成した。その後、カーマークシーの額にある目から美しい少女が現れ、ブラフマーと原初の男女の婚姻を行った。

⁷³ AITMにおいて「女神への瞑想」と題された章の一部である。この偈頌の前は、カーマやカーマの化身に対しニヤーサ儀礼などを行なうよう述べられている。

を瞑想し、リピ（文字）〔が書かれた〕地面の上で望みのためにニヤーサ儀礼をするべきである。

Kālikā-purāṇa :C 版（底本）、N 版（サンスクリット、英訳）

ch.1.9-13⁷⁴

bhūyas tac chrotum icchāmo haram kālī purā katham /

mohayāmāsa yatinam satirūpeṇa ceśvaram //9//

更に、私たちは聞きたい。どのようにしてカーリーは以前にサティの姿によって苦行者であるハラ神を魅惑したのか。

sarvadā dhyānanilayaṃ yaminam yatinām varam /

saṃkṣobhayāmāsa katham saṃsāravimukhaṃ haram //10//

どのようにして、常に瞑想に耽っており、自制しており、苦行者たちの中の最高者であり、世界から顔を背けるハラを興奮せしめたのか。

satī vā katham utpannā dakṣadārāsu śobhanā /

katham haro manaścakre dāragrahaṇakarmanī //11//

あるいはどのように輝かしいサティがダクシャの妻にうまれたのか。どのようにハラは妻を得ることを決心したのか。

katham vā dakṣakopena tyaktadehā satī purā /

himavattanayā jātī bhūyo vā katham āgatā //12//

あるいは、どのようにサティは以前にダクシャへの怒りによって体を捨てることになったのか。そしてさらに、どのようにヒマーラヤの娘として生まれたのか。

katham ardhaśarīram sāharat⁷⁵ smararipoḥ punaḥ /

etat sarvaṃ samācakṣva vistareṇa dvijottama //13//

さらにどのようにカーマの敵（シヴァ）の半身を得たのか。再生族の最高者よ。このことを全て詳しく話してください。

ch.25.44-55（ブラフマー創造神話）

tato brahmā varāhāya namaskṛtya mahaujase /

ardhanārīśvaram kakṣād⁷⁶ devadevaṃ vyajāyata //44//

⁷⁴ *Kālikā-p.* の冒頭部分である。聖者カマタたちがヒマーラヤの麓に住む聖仙マールカンデーヤに質問するという形で、*Kālikā-p.* にはどのようなことが書かれているかを大まかに示している。ここでアルダナーリーシュヴァラについて書かれているということは、*Kālikā-p.* においてアルダナーリーシュヴァラは主要な登場人物、すなわち何かしらの重要な役割を担っている存在と考えられていると言えよう。

⁷⁵ N 版では *sā 'harata* となっている。これは *sā āharata* の連声を分かりやすく記述したものと思われる。この場合、訳は原文の *sāharat* と同じになる。

それから、ブラフマーは非常に力強いヴァラーハに敬礼し、脇の下から神々の神アルダナーリーシュヴァラを創った。

prathamam jātamātraḥ sa praruroda mahāsvanaḥ /

kiṃ rodiṣīti taṃ brahmā rudantaṃ pratyuvāca ha //45//

最初、彼は生まれた途端に大声で泣き始めた。「何故、泣いているのだ」とブラフマーは、泣いているその者に言った。

nāma dehīti taṃ so 'tha pratyuvāca maheśvaraḥ /

rudranāmā rodanāt taṃ⁷⁷ mā rodiṣi tvam mahāśaya //46//

そこで、「名前を下さい。」と彼（ブラフマー神）にかのマヘーシュヴァラは言った。「泣くが故に、汝はルドラという名前だ。高貴な者よ。泣くでない。」

evam uktaḥ punaḥ so 'tha saptavārān ruroda saḥ /

tato 'parāṇi nāmāni sapta brahmākarot punaḥ //47//

彼はこのように言われた〔が〕、彼はさらに7回も泣いた。そこで、ブラフマーはさらに7つの他の名前を与えた。

śarvaṃ bhavaṃ bhīmaṃ ca mahādevaṃ caturthakam /

pañcamaṃ cogram īśānaṃ śaṣṭhaṃ paśupatiṃ param //48//

シャルヴァ、バヴァ、ビーマ、4つ目にマハーデーヴァ、そして5つ目にウグラ、6つ目にイーシャーナ、最後にパシュパティ〔という7つの名を与えた〕。

mayā yathā vibhaktas tvam tathātmā svo vibhajyatām /

tvayāpi bhūrisṛṣṭyartham bhavāṃś cāpi prajāpatiḥ //49//

「私が汝を分けたように、そのように汝は、汝によっても、多くの創造〔がある〕ために、自身を分けなさい。汝も創造主である。」

tato brahmā dvidhā bhūtvā puruṣo 'rdhena so 'bhavat /

ardhena nārī tasyāṃ tu virājam asṛjat prabhuḥ //50//

それからブラフマーは2つになって、半身によって彼は男性となった。そしてもう半身によって女性になった。神と彼女はヴィラージュを創造した。

tam⁷⁸ āha bhagavān brahmā kuru sṛṣṭiṃ prajāpate /

tapas taptvā virāṭ so 'pi manuṃ svāyambhuvaṃ tataḥ //51//

sasarja so 'pi tapasā⁷⁹ brahmāṇam paryatoṣayat /

⁷⁶ C版では kayād となっているが、この場合、訳は「〔ブラフマーは〕それぞれから神々の神アルダナーリーシュヴァラを創った」となるため、意味に矛盾が生じる。それゆえ、ここでは N 版の kakṣād（脇の下から）を採用したが、N 版の英訳にはこの言葉は訳されていない。

⁷⁷ N 版では rodanāc ca となっている。訳はほぼ同じである。

⁷⁸ C 版と N 版、双方の註釈には tad という解釈もあるとしているが、いずれも tam を採用している。

toṣitas tena manasā dakṣaṃ sṛṣṭyai sasarja saḥ //52//

ブラフマー神は彼に言った。「創造をなせ。創造主よ。」かのヴィラージュも、苦行をし、スヴァーヤンブヴァであるマヌを創った。彼はまた、苦行によってブラフマーを満足させた。満足した彼（ブラフマー）は、彼（ブラフマー）の心によって、〔さらなる〕創造のためにダクシャを創った。

sṛṣṭe dakṣe 'tha daśadhā praṇato manunā vidhiḥ /

punar eva sutān anyān sasarja daśa mānasān //53//

marīcim atryaṃgirasau pulastyam pulahaṃ kratum /

pracetasam vasiṣṭaṃ ca bhṛguṃ nāradam eva ca //54//

さて、ダクシャが創られた時、創造主（ブラフマー）は、マヌに 10 回敬礼された。さらに〔ブラフマーは〕10 人の心から生まれた他の息子たち、マリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、プラチェータス、ヴァスィシュタ、ブリグ、ナーラダを創った。

etān utpādya manasā manuṃ svāyambhuvam punaḥ /

yūyam sṛjadhvam ity uktvā lokaśo 'ntardadhe punaḥ //55//

世界の神（ブラフマー）は、彼らを心から生み出した後、さらにスヴァーヤンブヴァであるマヌに「汝等は創造をせよ。」と言って、再び消えた。

ch.30.109⁸⁰

tulyā jaṭārdhaśubhrāṃśuśubhraśīrṣā⁸¹ mahābalāḥ /

ardhanārīśvarāḥ kecid yathārudras tathaiva te //109//

ある者たちは蓬髪と半月（三日月）と白髪を持つ非常に力強い者たちに等しく、〔ある者たちは〕アルダナーリーナラであり、〔ある者たちは〕まさにルドラのものであった。

⁷⁹ C 版と N 版、双方の註釈には *manasā* という解釈もあるとしているが、いずれも *tapasā* を採用している。

⁸⁰ ヴァラーハが世界を破壊し、神々も恐れているので、シヴァがヴァラーハを倒すという神話の一部である。ブラフマーとヴィシュヌとシヴァが協力して、まずヴィシュヌの身体からヴァラーハを追い出し、シヴァがヴァラーハと戦った。苦戦を強いられるシヴァにヴィシュヌがエネルギーを送ると、シヴァが大きな咆哮をあげた。この文章は、咆哮をあげた際に現れたたくさんのガナの一団について描写しているものである。

⁸¹ N 版では *jaṭārdhaśubhrāṃśuśubhraśīrṣām* となっている。

ch.30.161cd-164⁸²

ardhanārīśvarāś cānye hy ardhanārīśvaram haram //161cd//

dhyānasthaṃ praviviśus te tulyarūpā harasya te /

umāsahāyo hi yadā ramate sasukhaṃ haraḥ //162//

ardhanārīśarīrās tu dvārapālā bhavanti te /

ākāśamārge gacchantam anugacchanti nityaśaḥ //163//

そして他の者たちは、アルダナーリーシュヴァラであり、ハラ（シヴァ）に良く似た姿をしており、瞑想に耽るアルダナーリーシュヴァラであるハラに入っていた。そして、ハラがウマーと共に楽しみを享受する時には、彼らアルダナーリーシュヴァラたちはドアの守り人となる。空を行く〔シヴァに〕彼らは常についていく。

dhyānasthaṃ paricaryanti salilādibhir īśvaram /

nānāśastradharāḥ śambhor gaṇās te pramathāḥ smṛtāḥ //164//

瞑想に耽るイーシュヴァラに水など〔を提供すること〕によって、彼らは給仕する。彼らは色々な武器を持ち、プラマタと呼ばれるシャンブの眷属である。

ch.41.2-3⁸³

katham ardhaśarīraṃ sā jahāra ca piṇākinaḥ /

etan naḥ prcchatāṃ samyak kathayasva mahāmate //2//

そしてどのように彼女はピナーカを持つ者（シヴァ）の半身を得たのか。知者よ。質問する私たちにそれを全て話してください。

mārkaṇḍeya uvāca //

マールカンデーヤは言った。

śṛṇudhvaṃ muniśārdulā yathā dākṣāyaṇī satī /

bhūtā girisutā pūrvam yathārdham aharat tanum //3//

素晴らしい聖者たちよ。ダクシャの娘サティーは以前どのように山の娘となり、どのように〔ハラ〕の半身を得たのか。聞きなさい。

⁸² 前述の現れたガナに関する描写の続きである。30 章 109 偈の後、ヴァラーハは倒され、ブラフマーとヴィシュヌとシヴァが創造について相談をした。その後、シヴァが瞑想に入った際には、これらのガナがシヴァの周りを取り囲んでいる。これらのガナはプラマタと呼ばれており、4 グループに分けられている。それぞれ様々な姿や役割を持っており、ここではアルダナーリーシュヴァラの姿のガナについて描写されている。

⁸³ 41 章 1 偈において「カーリーはどのようにヒマーラヤの娘として生まれたのか？どのようにダクシャの娘（サティー＝カーリー）は体を捨て、シヴァを夫としたのか？」という質問もなされている。

ch.41.66-67⁸⁴

anayaiva giriśreṣṭha ardhanārīśvaro haraḥ /

bhaviṣyati ca sauhārdājyotsnayaivāmṛtātmanaḥ //66//

最高の山よ。まさに彼女と共にハラは、愛情あふれる光とアムリタ〔の関係〕として、アルダナーリーシュヴァラとなるだろう。

śarīrārdhaṃ harasyaiśā kariṣyati nijāspade /

svarṇagaurī suvarṇābhā tapasā toṣite hare //67//

金色に輝くスヴァルナガウリーが苦行〔をすること〕によって、ハラが満足した時、彼女は〔自分〕自身にハラの半身を得るだろう。

ch.45

ṛṣaya ūcuḥ //

聖仙たちは言った。

vicitram idam ākhyātaṃ brahman kālīharāgamam /

puṇyaṃ pāpaharaṃ nityaṃ śrutisaukhyapadaṃ varam //1//

バラモンよ。この驚嘆すべきであり、吉祥であり、悪を取り払い、永遠であり、耳を喜ばせる最高のカーリーとハラが結合が語られた。

bhūyaḥ kathaya śarvasya kālītanvardham uttamam /

kathaṃ jahāra gaurī vā kathambhūtātha kālīkā //2//

kena vā kāraṇenāśu kṛṣṇā gaurītvam āgatā /

tan naḥ kathaya tattvena muniśreṣṭha⁸⁵ dvijottama //3//

さらにもっとお話し下さい、シャルヴァ(シヴァ)の最高なるカーリーの半身について。

⁸⁴ 前述の 41 章 2～3 偈にてなされている質問に答えた内容である。サティーは、体を捨てた後、シヴァーに対し子宝の苦行をするメーナカー（ヒマーラヤの妻）の娘として生まれた。メーナカーは苦行をし、最初にマイナカーを授かった後、苦行に満足したシヴァーがメーナカーの腹に入り、カーリーとして生まれた。ある日、聖仙ナーラダがやってきて、「カーリーがシヴァの妻になるだろう。現在過去未来においてシヴァは彼女以外を妻としない。」と言い、この 66～67 偈を述べた。

⁸⁵ N 版では muniśreṣṭhi となっている。訳は同じである。

どうしてガウリー（白き者）⁸⁶が〔黒さを〕捨てたのか。あるいはカーリカー⁸⁷（黒き者）はさてどのようなになったのか。あるいはどのような理由によって黒き者（カーリー）は白さを得たのか。それを私たちにありのままに話してください。最高の聖者よ。再生族の最上者よ。

mārkaṇḍeya uvāca //

マールカンデーヤは言った。

idaṃ tu mahadākhyānaṃ kathayiṣyāmi vo 'dhunā /

maharṣayas tac chṛṇvantu tattvena śubhadaṃ param //4//

さて私はこの長い物語を今あなたに語りましょう。偉大な聖仙たちはこの素晴らしい吉祥〔な話〕をありのままにお聞きなさい。

etad aurvaṃ purā rājā sagaraḥ prṣṭavān munim /

sa taṃ yathā samācaṣṭa tad vo 'tha nigadāmy aham //5//

サガラ王は以前これ（このエピソード）を聖者アウルヴァにたずねました。では彼（アウルヴァ）が彼（サガラ）に語ったことをあなた方に私が話しましょう。

purābhūt somavaṃśe⁸⁸ ca sagaro nāma pārthivaḥ /

sa śrīmān balavān dakṣaḥ sarvaśāstrārthapāragah //6//

以前、月の系譜〔の時代〕にサガラ⁸⁹という名の王がいた。彼は吉祥であり、力強く、才知があり、あらゆる聖典を熟知していた。

so 'bhūd ekarathenaiva jitvā sarvān mahābhujah /

sārvabhaumo narapatiḥ sarvarājagunair yutah //7//

彼（サガラ）は一台の戦車によって全ての王に打ち勝った者であり、全知全能であり、人々の主であり、あらゆる王の素質を具えていた。

taṃ prāptarājyaṃ rājānaṃ sagaraṃ pārthivottamam /

sabhājayitum atyarthaṃ munayaḥ samupāgatāḥ //8//

王位に即位したかの王の最高者サガラ王を大いに賞賛するために聖者たちが集まってきた。

prācyodīcyā⁹⁰ mahātmāno dākṣiṇātyās tathottarāḥ /

munayo brāhmaṇās caiva nṛpaṃ draṣṭuṃ samāgaman //9//

⁸⁶ ガウリーは白さの象徴的な表現であり、カーリー、あるいはカーリカーは黒さの象徴的な表現であると考えられる。ここではそれらは全て同一人物であるとされており、のちにパールヴァティーという呼び名も出てくる。

⁸⁷ カーリーとカーリカーという呼び名は同一人物の同一状態（パールヴァティーが黒くなっている状態）を指すと考えられる。違いは韻律ゆえと思われる。

⁸⁸ ソーマヴァンシャとはチャンドラヴァンシャ（月の系譜）のことを指す。

⁸⁹ サガラ王とはスーリヤヴァンシャに属するアヨーディヤの王である。この章は、アウルヴァ仙に子を授かるよう祈った時の物語に組み込まれている物語と考えられる。

⁹⁰ 辞書によると udīcyā は「北に住む人々、北部」の意味があるが、その他に「サラスヴァティー川の北部および西部地域」という意味もあるため、ここでは「西」とした。

東西南北から聖者やバラモンなど偉大な者たちがまさに王を見るために集まってきた。
āgateṣv atha sarveṣu mahātmā jvalanopamaḥ /

aurvo nāma munīḥ śrīmān āgato nanditum nṛpaṃ //10//

そして全て〔の聖者〕がやって来た時に、炎に例えられる偉大なアウルヴァという名の
吉祥なる聖者が王を祝福しに来た。

tam āgataṃ numiṃ dṛṣṭvā jvalantam iva pāvakaṃ /

saparyayā mahatyā tu sagaras tam apūjayat //11//

燃えているかのように輝いている到着したかの聖者（アウルヴァ）を見て、サガラは大
いなる尊敬の念と共に彼に敬礼した。

pādyam ācamanīyaṃ ca dattvaivārghapurogamam⁹¹ /

niveśayāmāsa ca taṃ muniśreṣṭhaṃ varāsane //12//

アルガ〔のための水〕をはじめパーディヤ（足を洗う水）、アーチャマニーヤ（口を漱
ぐ水）を捧げて、そして〔サガラは〕かの最高の聖者をすばらしい座に就かせた。

uvāca ca mahātmānam aurvaṃ sa sagaro nṛpaḥ /

praṇamya ca yathāyogyaṃ kuśalaṃ ta iti dvijam //13//

それからかのサガラ王は、偉大な魂を持つ再生族の者アウルヴァに正しく敬礼し、そし
て彼に、ご機嫌はいかがですか。と言った。

sa ca prāha muniśreṣṭho naraṛāja sadā mama /

sarvatra kuśalaṃ tvāṃ tu draṣṭum kuśalaṃ utsahe //14//

かの最高の聖者は言った。人々の王よ。いかなる時でもいかなる地でも私は元気です。
あなたがお元気かどうかを見るために私はやってきた。

tvattaḥ ko 'nyo 'sti kuśalī pṛthivyāṃ savarājasu /

ya ekaḥ sañjigāyāśu bhavān sakalapārthivān //15//

あなた 1 人がまさに全ての王たちを征服した。そのあなた以外にこの地上において王た
ちの中で繁栄している者がいるだろうか。

kuśalaṃ vardhatāṃ nityaṃ tava rājavarottama /

yathā nityā sadācāraiḥ pṛthiviṃ śādhi⁹² bhūpate //16//

力強い最上の王よ。大地を治める者よ。常にあなたの繁栄を増やなさい。道德規範に
基づくよき行いによって世界を治めなさい。

tava vṛddhau jagadvṛddhir vṛddhau ceṣṭāṃ tataḥ kuru /

śubhrāṃśuvṛddhau satataṃ sāgarasyeva vardhanam //17//

あなたが反映すれば世界が繁栄する。それゆえ、あなたは繁栄において努力をするべき
である。月が繁栄する（満ちる）時に、常に海（サガラ）が繁栄する（満ちる）ように。

⁹¹ argha（アルガ）は客人を尊敬して歓待することを言い、その際に用いられる清めの水を
arghya（アルギヤ）という。

⁹² śādhi の訳は不明である。英訳を参照し、「治めなさい」と訳した。

prathamam sadguṇair ātmā kriyatām nṛpa yojanam /

tataḥ svabhāryā mahiṣī kriyatām tadguṇair yutā //18//

王よ。まず〔あなた〕自身が美德を具えるべきである。次に自分の妻である王妃を同じ美德を具えた者にするべきである。

nityā saṃyojitā cet syād vanitā svayam eva hi /

svagūṇeṣu pravekṣyanti mahaty api dhṛtavratā //19//

まさに妻自身が内に具えている〔貞淑さ〕が大いなるものであるとしても、自分（サガラ）の美德の中に〔彼女の〕貞淑さが確立するであろう。

śrūyate himavatputrī śambhusaṃgatamānasā /

kriyābhyupāyair bahubhiḥ śambhunā sā prayojitā //20//

ヒマーラヤの娘（パールヴァティー）がシャンブと一緒にいたいと考えた時、彼女はシャンブによって多くの行動の手段を具えたと言われている。

tato 'timahatā premṇā śaṃkarasyātha pārvatī /

śarīram ardham aharat tasyaivānumate satī //21//

そして、シャンカラ（シヴァ）に対する強い愛情によって、山の娘サティーは、彼自身の同意を得て、半身を得た。

ardhanārīśvaras tena tadā prabhṛti śaṃkaraḥ /

abhavan nṛpaśārdūla nānyāṃ bhāryāṃ gr̥hītavān //22//

最高の王よ。それゆえに、それ以降シャンカラはアルダナーリーシュヴァラになった。他のいかなる女性も〔妻として〕持たなかった。

tasmāt tvam api rājendra svajāyām ātmanottare⁹³ /

guṇaiḥ saṃyojaya laghuṃ saṃyojaya tataḥ sutam //23//

それゆえ、ラーजेन्द्र（サガラ）よ。まさにあなたも自身の左にいる自分の妻を美德を具えた者にするべきである。そして若い息子を同様に〔美德を具えた者に〕するべきである。

mārkaṇḍeya uvāca //

マールカンデーヤは言った。

ity aurvabhāṣitam śrutvā sagaro 'pi mudānvitaḥ /

idaṃ munim apr̥cchat sa nṛpatiḥ smitasantataḥ //24//

このようなアウルヴァの言葉を聞き、サガラは喜んだ。〔そして〕かの微笑みに溢れた王はこの聖仙にたずねた。

sagara uvāca //

サガラは言った。

katham sā girijā devī kāyārdham aharat satī /

śaṃkarasya dvijaśreṣṭha tad ahaṃ śrotum utsahe //25//

⁹³ uttara の意味は不明である。英訳では欠如している。ここでは「左にいる」と訳した。

再生族の最高者よ。かのギリジャー女神であるサティーは、どのようにしてシャンカラの半身を得たのですか。私はそれを聞きたいです。

nītyā yayā vā yoktavyā svātmā bhāryā suto 'thavā /

tām nītiṃ ca sadācārasaṃhitām śrotum utsahe //26//

そして私と妻とさらには息子がどのような道德規範によって行動するべきか、その道德規範と日々の振る舞いの決まりを聞きたいです。

rājanītiṃ satām nītiṃ anyeṣāṃ ca kṛtātmanām /

prthak prthak śrotum icchur ahaṃ tvām nāthaye dvija //27//

王の道德規範と知者の道德規範、そして他にも成就した者たちの〔道德規範〕を別々に聞きたいと願う私はあなたにたずねましょう。再生族の者よ。

yadā⁹⁴ guhyam idaṃ brahman na tadā śrotum utsahe /

tathā nājñāpayāmi tvām śrotum icchuś ca tatsamam /

kṛpayā kathaniyaṃ cet tadā kathaya tan mune //28//

バラモンよ。もし、これが秘密であるならば私は聞くことを望みません。そのように聞きたいと思っている私は同じようにあなたに命令しません。語られるべきならばどうぞ、その時にはそれを語って下さい。聖者よ。

mārkaṇḍeya uvāca //

マールカンデーヤは言った。

ity evaṃ sagareṇoktam aurvo 'pi dvijasattama /

pratyuvāca mahātmānaṃ kṛpālus tatra bhūpatau //29//

再生族の最高者よ。サガラによってこのように言われたので王に憐れみを抱くアウルヴァは、偉大な魂を持つ者に言った。

aurva uvāca //

アウルヴァは言った。

śṛṇu rājan pravakṣyāmi yad yat prṣṭam iha tvayā /

yathā harasya tanvardhaṃ bhūbhṛtputrī purāharat //30//

王よ。聞きなさい。今あなたによってたずねられたそれぞれの〔質問〕に答えましょう。どのように山の娘は以前にハラの半身を得たのか。

yathā nītiḥ tvayā kāryā yatra yatra nṛpottama /

sarveṣāṃ ca sadācāraṃ kramād vakṣyāmi tac chṛṇu //31//

そこここでのなされるべき道德規範である全ての良きふるまいを順番に話そう。王の最上者よ。それを聞きなさい。

yadoḍhā himavatputrī śaṃkarena mahātmanā /

kiyantaṃ sa tadā kālāṃ tatra ninye sahomayā //32//

⁹⁴ N 版では yadi となっている。訳は同じである。

ヒマーラヤの娘が偉大な魂を持つシャンカラと結婚した時、しばらくの間、彼はウマーと共にそこで過ごした。

ramamāṇas tayā sārdham sānau kuñje dariṣu ca /

vijahāra ciraṃ tatra pārvatīm modayan haraḥ //33//

ハラは彼女と共に山の頂や木陰、洞窟などで喜びを享受し、パールヴァティーを喜ばせつつ、ハラは散策した。

atha kāle tu samprāpte śambhuḥ kailāsaparvatam /

sagaṇo bhāryayā sārdham agacchat tridivopamam //34//

やがて時が来て、眷属を伴ったシャンブは妻と共に3番目の天に等しいカイラーサ山に行った。

sa tvayā kriḍamānaś ca tyaktadhyānātmacintanaḥ /

tadvaktracandre netrāṇi cakorān⁹⁵ iva cākarot //35//

そして彼女と戯れていた彼は瞑想や省察を放棄してしまった。さらに月のような〔彼女の〕顔にチャコーラ鳥のような目をやった。

puṣpāṇi kvacid āhr̥tya girijāṃ prati śaṃkaraḥ /

sarvāṅgasāṅginīm mālāṃ vidadhe 'tīmanoharām //36//

シャンカラは山の娘のためにどこかで花々を摘んで、〔彼女の〕愛らしい体全体〔のため〕にとっても魅力的な花輪を用意した。

kadācid ādarśatale yugapac cātmano mukham /

mukhaṃ tathaivāparṇāyā vīkṣāṇ cakre vṛṣadhvajāḥ //37//

ある時はヴリシャドゥヴァジャ（雄牛の旗印を持つ者、シヴァ）は鏡面に自分の顔とアパルナー（パールヴァティー）の顔を同時に見た。

kadācin mrganābhīnām vilepair gandhapatrakam⁹⁶ /

tasyā ghanastanayuge vililekha smarāntakaḥ //38//

またある時はスマラーンタカ（カーマの殺戮者、シヴァ）は彼女の豊満な両の乳房にムスクのペーストでガンダパトラカを描いた。

gandhasāravilepena⁹⁷ tilakāny ambikātanau /

lalāṭe cākaroc cāru candravad ghanasandhiṣu //39//

ムスクのペーストでアンビカーの体に塗った〔シヴァは、彼女の〕額にティラカを付け、

⁹⁵ cakora（チャコーラ鳥）とは辞書によるとハイイロイワシャコというウズラの類の鳥であり、月から降り注ぐ光（アムリタ）を飲むことで生きるとされている。文学的な約束事（kavisamaya）として、このような表現がある。

⁹⁶ gandhapatraka は芳香のある葉を持つ物のことであり、一般的にはオレンジの木に使われる。ここでは木の種類が明確ではないので「ガンダパトラカ」とした。

⁹⁷ gandhasāra とは辞書によるとサンダルウッドのことだが、英訳によるとムスクとしている。英訳は gandha（におい）、sāra（エッセンス）ということから解釈してると思われる。ここでは英訳に従い、ムスクと訳した。

色々な節目にも付けた。⁹⁸

umāniryāsasamsaktakeśapāśeṣu citrakam /
candanāgurukastūrīkuṃkumasya vilepanaiḥ //40//

cakāra yena tasyās tu keśapāśo vyarājata /
nartanāyāvatiṛṇasya śikhipucchasya⁹⁹ sāmyadhṛk //41//

ウマーの髪の毛の束は草木の汁 に染められており、彼女の髪の毛の束がそれによってまるで踊ろうとして羽を広げたクジャクの尾に似たような輝きを持っているところの白檀、沈香、麝香、サフランの軟膏を塗られている。

jāmbūnada¹⁰⁰ mayāñ śuddhān kuṇḍalādyān manoharān /
alaṃkāraṇ umādehe¹⁰¹ samākārṣīd vṛṣadhvajah //42//

ヴリシャドゥヴァジャはジャンブーナダ川の純金のイヤリングなど美しい飾りをウマーの体に飾った。

tair jāmbūnadasambhūtair yojitair girijātanuḥ /
vibhāti jaladāpūrṇe kālikeva taḍidgaṇaiḥ //43//

このジャンブーナダ川からの装飾品で飾られたギリジャー（パールヴァティー）の体は雲で蔽われた〔空の〕中で、稲光を伴った黒い〔雲の〕ように輝いた。

sarvair divyair alaṃkārair nānāratnaiḥ sadamśukaiḥ /
saṃpūrṇamaṇḍitā kālī sādṛśyaṃ prakṛter dadhau //44//

全ての神聖な装飾品や色々な宝、良き衣裳によって完璧に飾られたカーリーは自然（創造主、プラクリティ）に良く似た相貌をしていた。

evaṃ sadā sānurāgas tasyāṃ śambhur jagatpatiḥ /
jagaddhitāya cikrīḍa kālyā dayitayā saha //45//

このように、彼女への愛情にあふれる世界の主シャンブは、世界の〔安寧の〕ために妻カーリーと戯れた。

kālī ca jagatāṃ mātā mahāmāyā jaganmayī /
yoganidrā jagadbuddhir vidyāvidyātmikākḥilā //46//

prakṛtiḥ paramā mūrṭiḥ¹⁰² sargāntasthitikārīṇī /
sammohya śaṃkaraṃ yatnāj jagatāṃ ca hitaiṣiṇī /

reme tena samaṃ devī candrikeva sudhāmśunā //47//

そして、カーリーであり、世界の母であり、マハーマーヤーであり、世界を内包する者

⁹⁸ この文章は翻訳が不明である。英訳は「Hara haing applied the paste made of the musk to the body of Ambika put tilakas on her forehead, and on close joints」となっている。

⁹⁹ 原文では śikhitucchasya となっているが、英訳を参照し、N 版の śikhipucchasya を採用した。

¹⁰⁰ jāmbūnada（ジャンブーナダ川）とは、ジャンブードヴィーパに流れる川のことである。

¹⁰¹ 原文では umā dehe（分書）だが、英訳を参照し、umādehe（連書）とした。

¹⁰² 原文では mūrṭiḥ となっているが、N 版の mūrṭiḥ を採用した。

であり、ヨーガ・ニドラーであり、世界の統覚であり、知と無知を本質とする完全な存在であり、創造者（プラクリティ）であり、最高の姿をしている創造維持破壊を起こす者（パールヴァティー）はシャンカラを魅了し、そして努力〔をすること〕により世界のために働く者〔となった〕。月が月光と共にあるように、彼女（パールヴァティー）は彼（シヴァ）と楽しんだ。

athaikadā smaraharaḥ kailāsāgre sahomayā /

ramamāṇo mudā yukto dadṛśe 'psarasaḥ śubhāḥ //48//

さてある時、カイラーサ山の頂でウマーと共に興じ、喜びを得ていたスマラハラは美しいアプサラスたちを見た。

rūpayauvanasampannāḥ sarvalakṣaṇasaṃyutāḥ /

tāsāṃ madhyagatā veśyā urvaśī ca manoharā //49//

〔彼女たちは〕完璧な姿と若々しさをそなえ、全ての〔吉祥な〕特徴を持っていた。彼女たちの中に魅惑的な〔天界の〕遊女ウルヴァスィーがいた。

tāḥ sarvā raktagaurāṃgyaḥ sarvālaṅkārabhūṣitāḥ /

munināṃ ca mano 'tyartham śaktā mohayitum haṭhāt //50//

白桃色の肌をして、あらゆる装飾品によって飾られている彼女たちは皆、聖者の心を一瞬にして強く魅了することができる。

tāḥ praṇamya haraṃ dṛṣtvā girijāṃ ca manoramām /

agre prāñjalayas tasthus tadbhītinatamastakāḥ //51//

彼女たちはハラと美しいギリジャーを見て敬礼し、〔彼らの〕眼前で合掌し、彼（シヴァ）に対する畏怖から頭を下げたままだった。

atha prāha tadā bhargaḥ pārvatīm idam adbhutam /

tāsāṃ samakṣaṃ tasyāṃ tu bhāṣitum syād yad apriyam //52//

そしてその時バルガ（シヴァ）はパールヴァティーにこの不思議なことを言った。〔それは〕彼女たちの目の前で彼女（パールヴァティー）にとって不快であったかも知れない（ことである）。

kālī bhinnāñjanaśyāme urvaśyādyapsarogaṇaiḥ /

tvayeha strīsvabhāvena saṃlāpaḥ kriyatām iti //53//

「カーリーよ。アイライナーのように黒い女性よ。今、あなたの女性としても性質を持って、ウルヴァスィーなどのアプサラスの一団とお話ししなさい。」と。

tac chrutvā vacanaṃ tasya yathāyogyam ca sorvaśī /

apsarasaḥ samābhāṣya viśr̥ṣṭā girijā tayā //54//

彼のこの言葉を聞いてウルヴァスィーを伴ったギリジャーはアプサラス達と出来る限り適切に対話し、彼女（ウルヴァスィー）から離れた。

atha sā krodhavaśagā pārvatī bhargabhāvitāt /

kālī bhinnāñjanaśyāmeti uditā hy abhavat kṣaṇāt //55//

さてかのパールヴァティーはバルガから発せられた「黒いアイライナーのカーリー」と
[いう] 言葉で、突然怒った。

sā cāpsarasām purato varṇoddeśavikatthanam /

na sehe manyunā yuktā girijendukalābhṛtaḥ //56//

そして熱情にかられたかのギリジャーはアプサラスたちの前での月を付けた者（シヴァ）
からの肌の色を指摘する皮肉に耐えられなかった。

atha sā roṣasamyuktā tyaktvā vṛṣabhavāhanam¹⁰³ /

apahnute śailasānau roṣāpahnutam āgatā //57//

そして怒った彼女はヴリシャバヴァーハナ（乗り物が雄牛である者、シヴァ）[のもと]
を離れ、山の頂の岩〔陰〕に隠れ、怒りを隠しおおせた。

mārgamāṇo 'tha virahavyākulo vṛṣavāhanaḥ /

nāsasāda kiyatkālam pārvatīm parvatottame //58//

そして〔パールヴァティーとの〕離別に当惑したヴリシャヴァーハナはパールヴァティ
ーを探しつつ、最高の山で長い間見つけられずにいた。

virahavyākulam jñātvā svayaṁ sā pārvatī haram /

ātmānaṁ darśayāmāsa girisānāv apahnute //59//

〔シヴァが〕離別に当惑していると知り、かのパールヴァティーは自ら、ハラに山の隠
れている場所で自分を見せた。

tām āsādyā tataḥ śambhuḥ kimartham abhajaḥ priye /

mānaṁ manonudam devi viśirṇa iva cābravīt //60//

それからシャンブは彼女のもとに到着して「愛しい人よ。なぜ離れたのだ？自尊心を害
されたか？女神よ。そして〔私は悲しみに〕打ちひしがれたようだった」と言った¹⁰⁴。

bhartur āgaḥ purandhrīṇām mānagrahaṇakāraṇam /

tad vinā grahaṇāt tasya bhīru prāpnoti vācyatām //61//

「妻たちの機嫌が悪い理由は夫の罪である。それゆえ、それ（機嫌）が悪いことの理由
なしにそれ（機嫌）を損ねているのならば、咎められることになる。心弱者よ。

tasmāt kimartham akaro roṣaṁ tvaṁ jalajānane /

tad ācakṣva drutaṁ kānte mano me na prasīdati //62//

それゆえに蓮のような顔の者よ。あなたはなぜ怒ったのか。それをすぐに教えてくれ。
愛する人よ。私の心は穏やかでない。」

ity uktvā śaṅkaro devīm tām ālīngitum udyataḥ /

¹⁰³ N 版では vṛṣavāhanam となっているが、韻律の関係上、C 版の vṛṣabhavāhanam を採用し
た。いずれもシヴァの異名であり、いずれも「乗り物が雄牛である者」という意味である。

¹⁰⁴ この偈の訳には「それからシャンブは彼女のもとに到着して「愛しい人よ。なぜ離れた
のだ？自尊心を害されたか？女神よ。」と〔悲しみに〕打ちひしがれたように語った。」と
する可能性があり、iva の位置関係から考えるとこちらが有力であると思われるが、英訳に
従った訳を採用した。

kālī taṃ vārayāmāsa vacanaṃ cābravīd idam //63//

と言って、シャンカラはかの女神（パールヴァティー）を抱きしめようとした。〔しかし〕カーリーは彼を制し、そして次の言葉を言った。

na dṛṣṭapūrvā kim ahaṃ yena bhinnāñjanopamā /

kriyate mayi bhūteśa bhavatāpsarasām puraḥ //64//

「全存在の主（シヴァ）よ。アプサラスたちの目の前で私について〔黒色の〕アイライナーに似ているとした（例えた）あなたは、私を以前（その時）に見なかったでしょう？
jātihīnaṃ vṛttihīnaṃ rūpahīnaṃ adakṣiṇam /

hīnāṃgam atiriktāṃgam tena doṣeṇa nākṣipet //65//

低いカーストの者や無職の者、姿の醜い者、寛容さがない者、身体〔の一部〕が欠損している者、過多の者をそのような欠点によって嘲笑うべきではありません。

iti brahmā purā prāha vedaughārthāvaniścayam /

taṃ cāvamanya bhavatā parihāso 'bhyabhāṣyata //66//

このように以前にブラフマーがヴェーダの教えだと言いました。そしてあなたはこれ（この教え）を破り、嘲笑して言いましたね。

yāvan na me śarīrasya bhavitṛī suvarṇagauratā¹⁰⁵ /

na sameṣye tvayā tāvad iti satyaṃ bravīmi te//67//

私の体が金色がかった白色にならない間は、あなたと一緒ににはなりません。このように私はあなたに誓います¹⁰⁶。

śarīragauratāṃ śambho na sameṣye tvayā vinā /

tatra me śṛṇu sandhāya ātmanaḥ śirasā śape //68//

シャンブよ。あなたがいないのなら私は白い体にならないでしょう（なりたくありません）。それゆえお聞きなさい。〔また〕一緒に〔なりましょう〕。私は頭（心の中）で私の〔この〕誓いをします。」

ity uktvā sā tadā devī tasyaiva purato yayau /

mahākoṣīprapātākhyam himavatsānum uttamam //69//

このように言っのかの女神（パールヴァティー）はそのあと彼の前から大カウシ川の源泉と呼ばれる素晴らしいヒマーラヤの山頂へと行ってしまった。

mahādevo 'pi taṃ bhāvyam jñānena kṛtaniścayam /

artham jñātvā tadāparṇam sarvajño nāpyavārayat //70//

全知者マハーデーヴァ（シヴァ）もまた、知によってかの未来が決定されていることを知り、アパルナー（パールヴァティー）を妨げなかった。

sā gatvā pūrvavat tatra śambhusaṃgatamānasā /

śatam ārādhayāmāsa varṣāṇi vṛṣabhadhvajam //71//

¹⁰⁵ 原文では svarnagauratā だが、N 版の suvarṇagauratā を採用した。

¹⁰⁶ 原文では「真実を言います」だが、これは誓いの言葉を指す決まり文句である。

シャンブと共にいたいと心に思う彼女は、以前のようにそこへ行って、ヴリシャバドヴァジャに対して 100 年間崇め続けた。

ekaṃ pādaṃ samutkṣipyā vāmenākramya sā kṣitim /

uttarābhimukhī bhūtvā nirāhārā nīrantaram //72//

vaiyāghracarmavasanā sordhvamūrddhānanā¹⁰⁷ satī /

jyotir mayam paraṃ śāntaṃ śivaṃ śivakaraṃ varam //73//

ātmasvarūpatattvajñā tattvenārādhayad dharam /74ab

一方の足を揚げ、左〔足〕によって地に立ち、かの自分自身の本質をわきまえているサティーは北を向き、常に断食し、トラの皮を身にまとい頭や顔を上方に向けた。輝きを持つ最上者であり、寂静であり、吉祥を受ける吉祥なるハラを、本質である者として崇拜した。

tāṃ cintayantiṃ paramaṇīścalāṃ tattvamānasām //74cd//

mene munigaṇaḥ sthānur yo na jānāti tattvataḥ /

evaṃ tasyās tapasyanti yā jagmur varṣāṇi vai śatam //75//

anyeṣāṃ ca yathā śaśvad ekaṃ nṛpatisattama /76ab

完全なる不動の姿勢を取り、真理を心の中で瞑想する彼女（パールヴァティ）を、真実が見抜けないかの如く聖者たちは木の幹¹⁰⁸と考えた。このように、彼女は苦行をして 100 年が過ぎ、それは他の人にとってはあたかも永遠なる一年が過ぎたようだった。王の最高者（サガラ）よ。

tatas tāṃ śatavarṣānte śaṃkaro yogataparāḥ //76cd//

ātmānaṃ darśayāmāsa kramād ekaṃ sa satrapam /

prathamam darśayāmāsa brahmānaṃ ca hariṃ tataḥ //77//

そこで 100 年が終わった時に、ヨーガに専心したかのシャンカラは恐る恐る少しずつ自身〔の姿〕を彼女に見せた。まず最初にブラフマーとして、そしてハリとして〔自分を〕見せた。

tatas tu śāmbhavaṃ dehaṃ tatas teṣāṃ athaikatām /

jyotirmayatvaṃ śuddhatvaṃ sarveṣāṃ hetutām tataḥ //78//

そしてシャンブとしての姿を〔現し〕それから輝きを持ち清浄さを持ちあらゆるものの原因であるそれら〔三神〕の一体化〔した姿〕を〔見せた〕。

tatas tu śāmbhurūpaṃ sa darśayāmāsa śaṃkaraḥ /

yoganidrām mahāmāyām yoginīm kālīkāmbikām //79//

それからかのシャンカラはシャンブの姿を、ヨーガニドラーでありマハーマーヤーでありヨーギニーでありカーリカーであるアンビカーに見せた。

¹⁰⁷ 原文では sordhvamūrddhānanā となっており、N 版では sordhvamurddhānanā となっているが、英訳を参照し、sordhvamūrddhānanā とした。

¹⁰⁸ 英訳を参照し、このように訳した。

prathamam darśayitvā tu tasyāḥ prakṛtirūpatām /

paścāt sā pārvatīty eva kramāt tasyā adarśayat //80//

そしてまず、彼女の創造者としての姿を見せて、そして彼女がパールヴァティーであると〔示し〕、少しずつ彼女の〔本質を〕示した。

tapasā sambhṛtenāśu jñānam āsādyā pārvatī /

antardṛṣṭyā bahirdṛṣṭyā tattvaṃ jñātvā yathātatham //81//

śambhuṃ jaganmayam mene tathātmānam jaganmayim /

brahmā viṣṇur haraś cāpi tataḥ sarvam idaṃ jagat //82//

苦行を行なっていることにより、パールヴァティーはすぐに知を得て、内面を見ることや外面を見ることによって本質をありのままに知り、シャンブを世界の内包者と〔知り〕、自身を世界の内包者と〔知り〕、ブラフマーとヴィシュヌとハラこそが、それゆえその全世界と理解した。

aham samastaprakṛtir yoganidrā tathā satī /

iti dhyānena sā devī prāpya dhyānam tadātyajat /

unmīlya nayanadvandvaṃ bahiḥ śambhuṃ dadarśa ca //83//

「私（パールヴァティー）は全ての創造者でありヨーガニドラーであり同様にサティーである」と、かの女神（パールヴァティー）は瞑想によって知り、瞑想を終わりにした。そして両眼を開いて外にいる（具現化されている）シャンブを見た。

sā dṛṣṭvā śaṃkaram devaṃ devadevam umāpatim /

tuṣṭāva¹⁰⁹ vāgbhir iṣṭābhir yaminam yogatatparam //84//

彼女は、神々の主であり、ウマーの夫であるシャンカラ神を見て、尊崇の言葉によって、自己を抑制しており、ヨーガに専心する者（シヴァ）を満足させた。

pārvatī uvāca //

パールヴァティーは言った。

namas te jagatām nātha namas te keśavāvyaya /

pradhānapuruṣātīta kāraṇatrayakāraṇa //85//

「世界の主（シヴァ）よ。敬礼します。ケーシャヴァよ。不滅の者よ。プラダーナとプルシャを超越した者よ。〔世界存在の〕3つの原因（創造維持破壊）の原因よ。敬礼します。

yogamohamanorāgadharmādharmamayas tathā /

vidyāvidyāsvarūpaś ca śāmbhavaḥ kāya eṣa te //86//

シャンブとしてのあなたのこの体は、ヨーガ（瞑想）とモーハ（迷妄）、マノーラーガ（心の執着）、ダルマ、アダルマから成る者であり、知と無知の姿をしている。

tvam niḥśreyaḥ śreyasā yujyamāno dṛśyo 'dṛśyo yogamūrtir manīṣi /

samyak śraddhā pauraṣe tattvarūpaṃ tvam vai jyotiḥ śāntirūpaṃ purastāt //87//

¹⁰⁹ 文法的に不明だが、英訳を参照し、「満足させた」とした。

あなた（シヴァ）は無比なる者であり、最高のものと結び付いた者であり、目に見える者でもあり見えない者でもあります。あなたはヨーガの印を持ち、知者です。正しい信仰であり、男性性における本質の姿をしており、光であり、〔苦行者たちの¹¹⁰〕 面前では静謐な姿をした者です。

brahmā viṣṇuḥ tvam haras tvam mahendraḥ śūryaḥ somo vāyur agnir dhanēṣaḥ /

tvam toyēṣaḥ śamano rākṣasaś ca śeṣas tvatto bhidyate ko 'pi nāsmīn //88//

あなた（シヴァ）はブラフマーであり、ヴィシュヌであり、ハラです。あなたはマヘーンドラであり、スーリヤであり、ソーマであり、ヴァーユであり、アグニであり、ダネーシャ（クベーラ）です。あなたはトーイェーシャ（ヴァルナ、水神）であり、シャマナ（殺す者）であり、ラークシャサであり、シェーシャです。このようにあなたと分かたれる者はそこにはありません。

tvam bhūmir dyaur dyusadām cāpi panthās tvam sthāvaro jaṅgamo bhūrvalasthaḥ¹¹¹ /

jñānam jñeyam dhyānagamyam ca tattvam parātparam vyaktarūpam pareṣām //89//

あなた（シヴァ）はブーミ（地）であり、ディヤウスであり、そして天に住む者たちの場所でもあります。あなたは植物であり、動物であり、洞窟にある大地です。知であり、知られるべき者であり、瞑想によって認識されうる者であり、本質であり、最高者の中の最高者であり、他の者たちの顕現体です。

tvam puruṣaḥ paramātmā pradhānam tvam hi jyāyān āgamo jñānagamyah /

bhāvaḥ kṛtyam pañcarūpī samastair āsādyas te¹¹² gocarās tadbhavāya //90//

あなた（シヴァ）はプルシャであり、パラマートマンであり、プラダーナ（第一義的なもの¹¹³）です。あなたは最高のアーガマであり、知識によって到達できる者です。本質であり、目的であり、5つの姿の者¹¹⁴であり、全ての者によって到達されうる者であり、あなたのそれらの対象は実在に帰結しています。

kīrtiḥ¹¹⁵ kīrtya¹¹⁶ stutyarūpī stutiś ca draṣṭā dṛśyaḥ sthairyadhṛk sthāvaraś ca /

nityo 'nityo muktayogo viyogo dānādāne bhedasāmaprayogaḥ //91//

¹¹⁰ 誰の面前であるか原文からは判断できないが、英訳を参照し、苦行者たちの面前とした。

¹¹¹ 英訳では the earth in the water(?)（水の中にある大地か?）となっており、意味が曖昧とされている。直前の sthāvara-（動かざるもの＝植物）と jaṅgama-（動くもの＝動物）との関係から、bhūrvalastha-を鉱物ととらえることも可能である。しかし Einoo card によると、sthāvara-と jaṅgama-が羅列されることは頻繁だが、そこに bhūrvalastha-も共に羅列されている例は全く見られない。

¹¹² ここでは「あなたのそれらの対象は実在に帰結しています」と訳したが、「それらの対象はその実在に帰結しています」と訳すこともできる。英訳では、この te は訳されていない。

¹¹³ サーンキヤ哲学的な解釈をすると根本原質となる。

¹¹⁴ 英訳によると「5つの感官が平衡状態を保っているところの者」としている。

¹¹⁵ 原文では kīrtiḥ だが、N 版の kīrtiḥ を採用した。

¹¹⁶ 原文では kīrtyaḥ であり、N 版では kīrtyaḥ だが、英訳を参照し、kīrtya とした

〔あなた（シヴァ）は〕 栄光であり、賞賛されるべき者であり、崇められるべき姿を持つ者であり、そして讃美であり、目撃者であり、見られるべき者であり、不動を持つ者であり、不動の者です。永遠であり、永遠でない者であり、解脱した者であり、独存者であり、ダーナ（布施の行為）とアダーナ（布施しない行為）においてその差異を同一視して見る者です。

nītir neyo dikṣito dakṣiṇās ca sārāt sāraḥ saṃvidhātā vidheyah /

āryo¹¹⁷ 'nāryo rūpadhṛg rūpahino divyo devo mānuṣo 'mānuṣaś ca //92//

〔あなた（シヴァ）は〕 ニーティ（正義）であり、ネーヤ（正義に従う者）であり、印可された者であり、たくさんの寄進であり、原因の原因である創造者であり、規定された者です。アーリヤ（高貴な者）であり、アナーリヤ（卑賤な者）であり、姿を持つ者であり、姿を持たない者であり、神聖であり、神であり、人であり、人ではありません。

srjyah sraṣṭā pālakaḥ pālyarūpaś cetā ceyo normiyuktas tathormiḥ /

vidyāvidyāvedavādaikarūpo rūpārūpas tikṣṇasaumyaikarūpaḥ //93//

〔あなた（シヴァ）は〕 創造された者であり、創造者であり、守護者であり、守護される者であり、思索者であり、思索される者であり、欲望を失った者であり、同様に欲望である者です。知と無知というヴェーダの教えの一形態であり、有形無形であり、鋭さと穏やかさを1つのものとする者です。

bhāvābhāvaḥ śobhanaḥ śuddharūpī śaśvaddāntaḥ¹¹⁸ śāntir ugrā muninām /

dvandvo 'dvandvaḥ sarvago 'sarvagaś ca bhrānto 'bhrāntaḥ siddhasiddhipradaś ca //94//

〔あなた（シヴァ）は〕 有であり、無であり、輝きであり、純粋な姿の者であり、永遠の者であり、制御された者であり、聖仙たちのすさまじいまでの寂静さです。ペアであり、ペアでなく、遍在であり、遍在でなく、混乱した者であり、混乱した者でなく、スィッダ（成就者）としてのスィッディ（完全性）を与える者です。

ekasthas tvam sarvagoptā sudeho nirdehas tvam deha ekaḥ surāṇām /

sthūlaḥ sūkṣmo nirvikāraḥ śarīri viśvātmā tvam nāsti bhinno bhavattaḥ //95//

あなた（シヴァ）は一所に立つ者であり、全てを庇護する者であり、美しい体を持つ者であり、体を持たぬ者です。あなたは神々の唯一の身体です。あなたは粗大にして微細であり、変化せず、体を持つ者であり、宇宙の本質です。あなたとは別のものではありません。

kāryākārye yasya rūpe namas¹¹⁹ te vyāpyāvyāpye bhāgaḥino 'tipūrṇaḥ /

yogajñānasthātmakam yasya nityam rūpam yasya śrīda tasmai namas te //96//

なされるべきものとなされないべきものの姿であり、〔そして〕 浸透されたものと浸透されていないもの〔の姿であり〕、その一部が欠けている者と過度にある者〔の姿を持

¹¹⁷ N版では āryo となっている。

¹¹⁸ N版では śāstraddāntaḥ だが、原文の śaśvaddāntaḥ を採用した。英訳では訳されていない。

¹¹⁹ 英訳を参照し、samas を namas に訂正した。

つ] あなた（シヴァ）に敬礼します。常にヨーガの知に依拠することを本質とする者であり、姿が吉祥を与える者である、あなたに敬礼します。

pradhānapuṃsor api yo vidhātā yaḥ kālarūpī puruṣaḥ pareśaḥ /

tam īśam ugraṃ varaḍaṃ vareṇyaṃ namāmi cinnītivitānakaṃ tvām //97//

〔あなた（シヴァ）は〕プラダーナとプンス¹²⁰の創造者であり、時の姿を取ったプルシャであり、他の者たち全ての主です。そのような強い力を持つ者であり、恩恵を与える者であり、祈りを捧げられる神であり、思考と正義を広げる者であるあなたに敬礼します。

akṣayo yo 'vyayaḥ sākṣī kṣetrajñāḥ kṣetradhṛgvaraḥ /

tasmai namas te viśvātman vṛṣadhvaḥ maheśvaraḥ //98//

全てのものの本質（シヴァ）よ。雄牛を旗印とする者よ。マヘーシュヴァラよ。消滅せざる者であり、不変の者であり、目撃者であり、知田者であり、優れた大地の維持者であるあなたに敬礼します。」

jñānāmṛtaviniṣyandi yasya ciccandramāḥ sadā /

tad rūpaṃ ekaṃ yaṃ jñeyaṃ bhaktimātraṃ namo 'stu te //99//

その人の知の月が常に知のアムリタを流し出している〔姿〕であり、バクティのみとして知られる唯一の姿を持つ、そのあなた（シヴァ）に敬礼します。

aurva uvāca //

アウルヴァは言った。

iti stuto mahādevaḥ sarvabhūtānukampakaḥ /

prasannavadanaḥ prāḥa pārvatīṃ pratihaṛṣayan //100//

このように、賞賛され、全人類に憐れみを抱いた、顔に喜びを浮かべるマハーデーヴァは喜びつつ、パールヴァティーに言った。

īśvara uvāca //

イーシュヴァラは言った。

pṛito 'smi devi bhadraṃ te varaṃ varaya vāñchitam /

tapasāpy āyitāś cāhaṃ tvayā brahmā tathā hariḥ //101//

「私（シヴァ）は満足した。女神（パールヴァティー）よ。祝福あれ。望む恩恵を選びなさい。まさに〔あなたの〕苦行によって、あなたによって、私とブラフマーとハリは喜んだ。

tapasā tvatsamo nāsti śīlena ca guṇena ca /

tvām vinā na hi tṛpyāmi priye kuru yathepsitam //102//

苦行、振る舞い、徳に関してあなた（パールヴァティー）に等しい者はいない。愛しき者よ。実にあなたなしでは私（シヴァ）は満足しない。〔自分が〕望むようなことをしなさい。」

¹²⁰ サーンキヤ哲学的に見ると、プラダーナとプンスは女性原理と男性原理を表している。

tataḥ sā mohitā prāha māyayā himavatsutā /

そしてかの山の娘はマーヤー（幻影）に惑わされ、言った。

121

jāmbunadābhagauro me deho bhavatu sāmpratam /

ananyakāntas tvaṃ cāpi bhūyā matto vinā hara //103//

「すぐに私（パールヴァティー）の体が金色がかった白色になりますように。ハラよ。あなたも、他の愛しき者を持たない者になって下さい。」

evam ukto mahādevaḥ pārvatīyā pārvatīm tataḥ /

ākāśagaṃgātoyaughe majjayāmāsa bhāminīm //104//

そこで、このようにパールヴァティーによって言われたマハーデーヴァは、美しいパールヴァティーを天から流れ落ちるガンガーの水流で沐浴させた。

sā nimajjya samuttīrṇā vidyudgaurī vyajāyata /

sītāmbhomadhyagā devī śāradābhre tadid yathā //105//

沐浴して、あがってきた彼女は輝く白色の肌になった。澄んだ水の中にいる女神は秋空の〔雷の〕閃光のようだった。

122

śambhuś cāṃgīcakārāśu nāhaṃ tvatto vinā priye /

manasāpi grahīṣyāmi nānyāṃ satyaṃ bravīmi te //106//

そしてシャンブはすぐに約束した。「私はあなた以外に〔妻を持た〕ない。愛しき者よ。心の中でさえも他の女性と一緒にならない。と、私はあなたに誓う。」

aurva uvāca //

アウルヴァは言った。

atha toyāt samuttīrṇā pārvatī modasaṃyutā /

tapāḥkleśaparityaktā candrikeva vidhor yathā //107//

さて水からあがってきたパールヴァティーは喜んだ。苦行の苦しみから解放され、月明かりのようだった。

atha tāṃ pārvatīm devīm ādāya vṛṣabhadhvajaḥ¹²³ /

jagāma śailaṃ kailāsaṃ svam āśramapadaṃ laghu //108//

それからヴリシャバドヴァジャは、かのパールヴァティー女神を連れて、すぐにカイラーサ山の自分のアーシュラマ（隠遁所）に行った。

tadā gatvā haro devīm adhivāśya vibhūṣya ca /

pūrvavan modayāmāsa narmahāsakathādibhiḥ //109//

¹²¹ N版ではここに aurva uvāca //「アウルヴァは言った」という一文が入る。

¹²² N版ではここに īśvara uvāca //「イーシュヴァラ（シヴァ）は言った」という一文が入る。

¹²³ N版では vṛṣadhvajah だが、韻律の関係上、vṛṣabhadhvajah を採用した。意味は同じである。

そしてハラは〔カイラーサ山に〕行ってから、女神を住まわせて〔宝石などで〕飾り、以前のように冗談や笑い話や物語を語るなどして、喜ばせた。

sāpi sauvarṇagaurāṅgī vīkṣya rūpaṃ manoharam /

gr̥hītasamayam śambhuṃ prāpyātīva mumoda ha //110//

金色がかった白い肌をしている彼女（パールヴァティー）もまた、〔自分自身の〕美しい姿を見て、誓願を受け入れたシャンブを得て、非常に喜んだ。

evam tayos tu śivayor anyonyaramamāṇayoḥ /

jagāma suciraṃ kālam kailāse parvatottame //111//

このように最高の山カイラーサで、シヴァたち2人が互いに喜んでいる間に、大変長い時間が過ぎた。

athaikadā mahādevasamīpe himavatsutā /

āsīnā dadṛśe tasya svām chāyām urasi sthitām //112//

さてある時、マハーデーヴァの隣に座っているヒマーラヤの娘は、彼の胸に自分の影（反映）が映っているのを見た。

sphaṭikābhrasame svacche hṛdi śambhor manohare /

yogijñānādarśatale cārvaṅgīm¹²⁴ pratibimbītām //113//

苦行者の知の鏡の表面であり、水晶のように美しく澄んだシャンブの心に、美しい体の女性が反映しているのを〔見た〕。

ātmacchāyām gīrisutā vāmabhāge manohare /

dadarśa¹²⁵ vanitārūpam smitavaktrām manoharām //114//

美しい〔シヴァの胸の〕左側に、山の娘は、美しく微笑む女性の姿をした自分の影を見た。

bhrāntyā dṛṣṭyātha pārvatyās tadā jñānam ajāyata /

kṛtasatyō 'pi giriśaḥ kim anyām vanitām dadhau //115//

māyayā sthāpitām gātre vīkṣantīm kuṭīlam ca mām /116ab

その時パールヴァティーの間違った見解によって、〔誤った〕認識が起きた。ギリシャ（シヴァ）は、その体にマーヤーによって置かれて、そして意地悪く私を見つめている他の女性を、どうして置いているのか。

iti tasyās tadā vaktraṃ malinaṃ bhrūkūṭīyutam¹²⁶ /

babhūva vṛṣaketuś ca śyāma utpātako yathā //116//

と。それから彼女の顔は暗くなり、眉がしかめられた。そして、ヴリシャケートゥも、まるで誓願を破った結果であるかのように、黒くなった。

¹²⁴ N版では cārvaṅgī となっており、この場合の訳は「美しい体の女性は、反映した女性を見た」となる。

¹²⁵ 原文では dadaśa だが、N版を参照し、dadarśa とした。

¹²⁶ 原文では bhrūkūṭīyutam だが、英訳を参照し、bhrūkūṭīyutam とした。

sā dṛṣṭvātha tadā chāyāṃ viṣṇumāyāvimohitā /

apahnutaṃ gireḥ śṛṅgaṃ mānād roṣād viveṣa ha //117//

その時、ヴィシュヌマーヤーに惑わされて、影を〔本物の女性と〕見た彼女（パールヴァティー）は、自尊心と怒りから、山の頂にある隠れ家に入ってしまった。

atha tāṃ mārgamāṇas tu śaṃkaro virahākulaḥ /

cirād apahnutaṃ devīm āsāsāda tato haraḥ //118//

さて離別に悩まされたシャンカラは彼女（パールヴァティー）を探して、長い時間の後、ハラは隠れているかの女神を見つけた。

tām āsādyā mahādevo vivarṇavadanāṃ priyām /

uvāca roṣaṇe hetuṃ jñātum icchur yathātatham //119//

マハーデーヴァは、青白い顔色をしたその愛する人に近づいて、「[あなたの] 怒りの原因をありのまま知りたい」と言った。

īśvara uvāca //

イーシュヴァラは言った。

kim arthas tvam varārohe mahyam kupyasi kopane /

roṣahetum ahaṃ vaktuṃ tavecchāmiha vallabhe //120//

「あなたはなぜ私に対して怒っているのか。美しい腰の女よ。私はあなたに怒りの原因を話して欲しい。愛する者よ。

na tubhyam aparādhyāmi vācā vā mānasāthavā /

kāyena vā katham kopam kartum arhasi bhāmini //121//

私はあなたに対して言葉もしくは心、もしくは行いによって悪いことをしていない。それなのになぜあなたは怒るのか？美しい¹²⁷女（パールヴァティー）よ。」

devy uvāca //

女神は言った。

samayena mayā pūrvaṃ tathā samprārthito bhavān /

katham taṃ parihāya tvam anyāṃ bhāryāṃ samihase //122//

「あなた（シヴァ）は以前に、私に誓願によって約束しましたね。なぜ、あなたはそれ（誓願）を破って、他の女を妻にしたいと望むのですか。

pratyakṣeṇa mayā dṛṣṭā tava hṛdy antare hara /

cārvaṅgī vanitā kācit toyaniryātabhasmani //123//

ハラよ。水によって灰が洗われたあなたの胸の内に、誰かしらの美しい体の女性〔がいの〕を直接、目で見ました。

bhavān sarvajñānamayaḥ sarvagaḥ paramēśvaraḥ /

toṣito me tapovrātair na tuṣṭas tvam maheśvara //124//

¹²⁷ bhāmini には「美しい」という意味以外に「怒った」という意味もある。英訳に従い、「美しい」と訳したが、「怒った」も含意している可能性がある。

全ての知に溢れた者であり、遍在者であり、パラメーシュヴァラであるあなた（シヴァ）は、私の多くの苦行によって満足した〔と思いましたが、しかし〕あなたは満足していませんでしたね。マヘーシュヴァラよ。

tasmād ahaṃ tapas taptuṃ śāsavad gantuṃ samutsahe /

anujānīhi mām¹²⁸ śambho mā vilambaṃ vṛthā kṛthāḥ //125//

それゆえ私は、永遠に苦行しに行くことにいたします。私をお許してください。シャンブよ。引きとどめないで下さい。」

129

iti śrutvā vacas tasyāḥ smitavistāritānanāḥ /

śaṃkaraḥ pārvatīṃ prāha sandigdham iva bhāminīm //126//

このような彼女の言葉を聞いて、シャンカラは顔中に微笑みを浮かべ、疑っているような美しいパールヴァティーに言った。

130

nāham anyāṃ striyaṃ voḍhā nāhaṃ samayabhedakaḥ /

tava mithyāmatir jātā mūgdhe mūḍhatayādhunā //127//

「私は他の女と結婚していない。私は誓願を破っていない。今、無知ゆえにあなたに思い違いが生じた。無垢¹³¹な女（パールヴァティー）よ。

tvam icchasi yadi śrotuṃ tatra hetuṃ ca pārvati /

tad ahaṃ kathaye tattvaṃ mānaṃ mānini mā kṛthāḥ //128//

もしあなたが、それに関して理由を聞きたいならば、パールヴァティーよ、それならば私は真実を語ろう。自尊心のある女よ。言いたいことを留めることはない。

mama vakṣasi vistīrṇe darpaṇasv acchabhāsini /

tavaiva vapuṣaś chāyābimbītā lokitā tvayā //129//

鏡のように透明に輝く私の広い胸には、まさにあなた〔自身〕（パールヴァティー）の美しい姿の影の反映があなたによって見られた。

idānīm eva budhyasva tvām ṛte nāsti sā mayi /

nātra mānas tvayā kāryo hṛdayāntarasamsthite //130//

まさに今、あなた（パールヴァティー）は分かったはずだ。あなた以外には私〔の胸〕には、その女性はいない。〔ゆえに〕心の中にある〔悪い〕考えが、あなたによってなされるべきではない。」

devy uvāca //

女神（パールヴァティー）は言った。

¹²⁸ N 版では mā である。付帯辞なので意味は同じ。

¹²⁹ N 版ではここに aurva uvāca //「アウルヴァは言った」という一文が入る。

¹³⁰ N 版ではここに īśvara uvāca //「イーシュヴァラは言った」という一文が入る。

¹³¹ mūgdhā を「無垢な」と訳したが、「無知な」という意味も含意している可能性がある。

mayi sthitāyām chāyāsti mām rte nāsti sā punaḥ /

katham etan mayā jñeyam tan me vada vṛṣadhvaḥ //131//

「私がいる時、影もいる。しかし、私無しでは彼女はいない。ヴリシャドゥヴァジャ（シヴァ）よ。いかにしてこれが私によって知られるべきでしょうか。それを私に教えてください。」

īśvara uvāca //

イーシュヴァラ（シヴァ）は言った。

gavākṣābhyantare sthitvā tajjālena manohare /

paśya toyaugghaniryātabhūtilepam uro mama //132//

「美しい者（パールヴァティー）よ。丸窓の中にとどまり、水流によって塗られた〔灰〕を洗い流した、私の胸を見なさい。

tathā tvam maṇḍitaṁ dehaṁ vikṣyādarśatale punaḥ /

maddhṛdāsannam āsādyā tādṛkchāyām vilokaya //133//

そして、あなたは、鏡の表面にある飾られた体を見て、〔今度は〕私の胸に近づいて、それに似た影を見なさい。

yathā drakṣyasi dehe svam tat kuru tvam tathā mama /

ālokaya nijam chāyām tvam¹³² vinā nāsti tat punaḥ //134//

あなたが〔私自身の〕体の中にあるそれを、あなた〔自身〕のようにしなさい。あなたがいなければ。それ（影）はない〔ということを〕あなたの影の中に見なさい。

tvam eva jñāsyasi cchāyām madvakṣasi manohare /

jñātvā visṛjya mānaṁ mām tvam cāpy upapatsyasi //135//

あなたは、まさに私の胸にいる影〔があなたであること〕を知るだろう。美しい女（パールヴァティー）よ。〔それを〕知って、自尊心を捨て、そしてあなたは私を受け入れなさい。」

aurvya uvāca //

アウルヴァは言った。

evam uktā hareṇātha pārvatīndukalābhṛtaḥ /

toyair nirdhāvyā hrdayam svām chāyām punar aikṣata //136//

そしてこのようにハラによって言われたパールヴァティーは、三日月を付けた者（シヴァ）の心を水で拭い、再び自分の影を見た。

drṣṭvādarśatale vaktraṁ nijam dehaṁ ca pārvatī /

ālokayāmāsa tadā śaśvac chaṁkaravakṣasi //137//

パールヴァティーは、鏡の表面に〔映る〕自分の顔や体を見て、それから長い間シャンカラの胸の上を見つめていた。

yathā sā kurute devī kāpaṭyam netravibhramam /

¹³² 原文では tvam となっているが、後続の vinā との関係から、N 版の tvam を採用した。

tathā sā kurute cchāyā karakam pādikaṃ tathā //138//

その女神が見せかけの目の動きや手足〔の動き〕をすると、その影も同じようにする。

tataḥ punar gavākṣasya jāle sthitvā himādrījā /

tathā vyalokayac chambhor hṛdayaṃ vītabhūtikam //139//

そして再び、ヒマーラヤの娘は、丸窓の幻影の中にとどまり、さらにシャンブのブーティカが消えた胸を見た。

tayā tatra tu pārvatīyā vṛṣabhadhvajavakṣasi /

na kāpi dṛṣṭā vanitā dṛṣṭaṃ jālasya maṇḍalam //140//

しかしヴリシャバドゥヴァジャの胸のところに、かのパールヴァティーは、いかなる女性も見ず、幻影の輪が見えた。

evaṃ bahuvidhair devī tadopāyais tathetaraiḥ /

niryātaśaṃśayā bhūtvā lajjāṃ prāpa varāṃganā //141//

このようにこの時、美しい女神（パールヴァティー）は、色々な異なる方法で、疑いから抜け出し、恥じた。

tāṃ lajjitāṃ girisutām īṣadbhītām adhomukhīm /

śambhur āliṅgya pāṇibhyāṃ mukhaṃ cāsyās cucumba ca //142//

シャンブは、恥ずかしがって、少し恐れてうつむくその山の娘を両手で抱きしめ、そして彼女の口に口づけた。

sa tām āha mahādevo devīm āśvāsayan muhuḥ /

mā vṛiḍasva mahābhāge bhrāntiḥ kasya na jāyate //143//

かのマハーデーヴァは、その女神（パールヴァティー）を何度も落ち着かせようとして、〔次のように〕言った。「吉祥な者よ。恥じるでない。間違いをおかさない者などいない。

mānas tvayi varastrībhiḥ kāryaḥ premakaro yataḥ /

tvayāpi viralāḥ kāryo māno devī na sarvadā //144//

あなたの中の自尊心は、愛をつくり出したので、あなたによっても、常にではないが、時々は自尊心がつくられて〔良い〕。女神よ。」

ity uktā devadevena mainākasahajāmbikā /

śaṃkaraṃ praṇayāt prāha sūnṛtaṃ madhuraṃ vacaḥ //145//

このように神々の神（シヴァ）によって言われた、マイナーカ（メーナーの息子）と共に生まれたアンビカーは、愛情からシャンカラに優しく甘い言葉をかけた。

devy uvāca //

女神（パールヴァティー）は言った。

yathā tavāhaṃ satataṃ chāyevānugatā hara /

bhaveyaṃ sāhacaryeṇa tathā mām kartum arhasi //146//

「ハラよ。私はいつもあなたの影のように付いていきたいので、私がそうできるように、

同行させて下さい。

sarvagātrena saṁsparśaṁ nityāliṅganavibhramam /

aham icchāmi bhavatas tattvaṁ cet kartum arhasi //147//

全身によって接触し、常に抱擁している歓喜を、私は望みます。もしあなたに真実があるならば、そうして下さい。」

bhāgavān uvāca //

神（シヴァ）は言った。

rocate tan mahyam api yas tvam icchasi bhāmini /

tatropāyam ahaṁ vakṣye yadi śaknoṣi taṁ kuru //148//

「私は美しいあなた（パールヴァティー）が望むこと、それを私も喜ぶ。そこで、私は方法を言う。もし、あなたができるならば、それをしなさい。

ardhaṁ mama gr̥hāṇa tvam śarīrasya manohare /

ardhaṁ bhavatu me nārī athaivārdhaṁ pumān iti //149//

魅力的な女（パールヴァティー）よ。私の〔体の〕半分は女性に、そして残りの半分は男性になるように、あなたは私の身体の半分を取りなさい。

yadi tvam api śaknoṣi kartuṁ tad ardham idṛśam /

tadāhaṁ te hariṣyāmi śarīrārdhaṁ varānane //150//

もしあなたが、そのように半分にすることができるならば、そのときは私はあなたの半身を受け入れよう。美しい顔の女（パールヴァティー）よ。

tavaivārdhaṁ tathā nārī hy ardhaṁ bhavatu pūruṣaḥ /

vidyate tatra śaktir me tvam anujñātum arhasi //151//

まさにあなたの半身が女性に、半身が男性になるならば、そこで私のシャクティは知られる。あなたは同意しなさい。」

devy uvāca //

女神（パールヴァティー）は言った。

tavaivāhaṁ hariṣyāmi śarīrārdhaṁ vṛṣadhvaja /

kiṁ tv ahaṁ tv evam icchāmi tac cet tvam kartum icchasi //152//

「私はあなたの半身を受け入れましょう。ヴリシャドウヴァジャよ。しかし、私はあなたがそれを望むならば、その〔以下の〕ように望みます。

yadāhaṁ ardhaṁ bhavato bhūtvā tiṣṭhāmi tāvatā /

tyajāmy ahaṁ yadā te 'rdhaṁ sampūrṇaṁ syāt tadā dvayam //153//

もし私があなたの半身になってとどまる間、その間、私は捨てます¹³³。あなたの半分〔となって〕完全になるならば、その時は、2人〔が合体した姿〕となるでしょう¹³⁴。

¹³³ 何を捨てるのかは不明であり、英訳にも訳されていない。

¹³⁴ この文章は、英訳でも混乱が見られる。この訳以外にも「あなたの半分が完全であるならば、その時は2人〔も完全である〕でしょう。」という訳もできる。

ity ardhabhāgaharaṇaṃ bhaved yadi yathepsitam /

tavaivāhaṃ tadā śambho śarīrārdhaṃ harāmy aham //154//

このように、もし半分の部分を取ることを、あなたが望むならば、私はその時、あなたの半身を取ります。シャンブよ。」

īśvara uvāca //

イーシュヴァラは言った。

evam astu bhaven nityaṃ yathārdhaṃ hartum arhasi /

śarīrasyārdhaharaṇaṃ bhūyas tava yathepsitam //155//

「常にあなた（パールヴァティー）が半分を取るような形に、そのようにあれ。さらにあなたが望むように〔私は〕体の半分を取る。」

aurvya uvāca //

アウルヴァは言った。

atha gaurī tadā pūrvam anubhūtaṃ tapaḥsthitau /

yoganidrāsvarūpaṃ tadātmano 'cintayad dhiyā //156//

そしてそれからガウリーは、以前に苦行に励んでいた時に認識した、自分のヨーガニドラーとしての姿を、知によって考えた。

haraṃ praṇāmya prathamam brahmāṇaṃ ca tataḥ param /

tatas trijagatām īśaṃ hariṃ nārāyaṇaṃ prabhum //157//

最初にハラに敬礼し、続いてブラフマーに、そして三世界の神ハリであるナーラーヤナ神に〔敬礼した〕。

cintayitvā yadā teṣāṃ ekatā sā jaganmayī /

ātmānaṃ yoganidrāṃ ca cintayitvā tapasvinī //158//

dakṣiṇe svaśarīrasya bhāgārdhaṃ śaśabhr̥dbhr̥taḥ /

śarīrasya tadā vāmam atipremṇā nijaṃ hare //159//

苦行者である全世界を内包する彼女（パールヴァティー）が、彼ら自身〔と同一である〕と考え、ヨーガニドラー本人であると考え、自分の体の右半分にシャシャブリドブリトゥ（月を付けた者、シヴァ）〔の半分〕を〔得て〕、ハラの体の左側に強い愛情によって自分自身を〔同化させた〕。

haro 'pi svaśarīrārdhaṃ gaurikāye tadā svayam /

premṇā nyaveśayat tasyāś cikīrṣuḥ priyam adbhutam //160//

彼女が気に入る素晴らしいことをしたいハラもまた、愛情によってガウリーの体に、自分の半身を取り込ませた。

atha sthitvā tadā bhargaḥ kālyā saha ciraṃ tadā /

parityajya śarīrārdhaṃ pṛthag eva babhau rucā //161//

そしてバルガは、カーリーと共に、長い間〔そう〕していて、まさに半分を〔彼女に〕与えて、光によって輝いた。

kālī bhūtvā svarṇagaurī śarīrārdham ca śaṅkaram /

prāptamodā tadātmānaṃ santuṣṭā ca jaganmayī //162//

金色がかった白色の世界の母カーリーは、体の半分がシャンカラとなり、喜んで自分自身に満足した。

evaṃ yadā śarīrārdham ādāya parameśvarī /

rahasye tiṣṭhati tadā rājate 'tīva śobhanā //163//

このように、輝くパラメーシュヴァリー（パールヴァティー）が〔シヴァの〕半身を得て、隠遁所にとどまっている時、非常に輝いていた。

arddham dhammillasaṃyuktaṃ jaṭājūṭārdhahyojitam /

ekasmin śravaṇe bhogī bhāge jāmbūnadārcitam //164//

kuṇḍalaṃ śravaṇe 'nyasmin śīrṣe tasyā vyarājata /

arddham mṛgākṣi cānyārdham vṛṣabhākṣi vyajāyata //165//

〔頭の〕半分（女性側）は飾られた編髪を頭の周りに巻きつけており、半分（男性側）は蓬髪の房の束がある。一方（男性側）の耳にはへビがおり、他方（女性側）の耳には金の飾りで飾られた耳飾りがある。頭部において、半分（女性側）は彼女の子鹿のような目が輝いている。他方（男性側）の半分は雄牛のような目がある。

arddham sthūlanasaṃ cāru tilapuṣpanasaṃ param /

dirghaśmaśru tathaivārdham arddham śmaśruvivarjitam //166//

半分（男性側）は大きな鼻で、もう一方（女性側）は美しい胡麻の花の〔ような〕鼻である。半分（男性側）は長いあごひげがあり、半分（女性側）はあごひげがない。

āraktacārudaśanaṃ raktauṣṭham ekatas tathā /

aparaṃ śuklavipulaṃ dirghākṛtiraḍaṃ param //167//

一方（女性側）には赤みがかった美しい歯と染められた唇があり、もう一方（男性側）は白く大きな〔唇〕と長い形の歯がある。

arddhanīlagalaṃ cārdham aparaṃ hārasaṃyutam /

arddham kaṃkaṇakeyūrayuktabāhu tathāparam //168//

nāgakeyūrasaṃyuktaṃ sthūlabāhunirūrmikam /

ardham vilolasubhujam karihastabhujam param //169//

〔男性側の〕首の半分までが青黒く、そしてもう一方（女性側）は真珠の首飾りがつけられている。半分（女性側）は腕輪を手首と上腕につけており、もう一方（男性側）は蛇の腕輪をつけ、粗い腕を持ち、指輪をしていない。半分（男性側）は活動的な美しい腕を持ち、もう一方（女性）はゾウの鼻のような腕をしている。

ekatra sormikāśākhā¹³⁵ karasyānyatra tāṃ vinā /

ekastanaṃ tu hṛdayaṃ romāvālyardhasaṃyutam //170//

一方（女性側）では手の指に指輪がはめられ、もう一方（男性側）にはそれがない。〔一

¹³⁵ 原文は somikāśākhā となっているが、英訳を参照し、sormikāśākhā とした。

方¹³⁶の〕胸部には1つの乳房があり、もう一方（女性側）には半〔身〕にローマーヴァリー¹³⁷がつけられている。

rambhāstambhasamānora supārṣṇi mṛdupādakam /

ekaṃ tathāparam sthūlaṃ saṃhatorupadāmbujam //171//

一方（女性側）にはバナナ¹³⁸の木の幹のような腿を〔持ち〕、美しい踵を〔持ち〕、柔らかな足を〔持ち〕、もう一方（男性側）は、腿から蓮のような足にかけて粗くつながっている¹³⁹。

ekaṃ cārumṛdusthūlajaghanam sumanoharam /

tathāparam dr̥dhakaṭi saṃhatorddhapadānvayam //172//

一方（女性側）は、非常に魅力的で美しく柔らかく大きな尻を〔持ち〕、もう一方（男性側）は、しっかりとした尻で、〔それは〕腰から足にかけてつながっている。

ekaṃ vaiyāghracarmaughayuktaṃ bhūtivilepanam /

aparam mṛdu kauśeyavasanaṃ candanokṣitam //173//

一方（男性側）は、恐ろしいトラ皮の布を着て、灰が塗られており、もう一方（女性側）は、柔らかい腰布を〔巻き〕サンダルウッドが付けられている。

evam arddhaṃ tathā jātaṃ yoṣillakṣaṇasaṃyutam /

aparam balavad bhūrī sugūḍhaṃ puruṣākṛti //174//

同様に、半分（女性側）は、若い女性の特徴をそなえて生まれており、もう一方（男性側）は、大変力強く、神秘的な男性の姿をしている。

evam arddhaṃ smararipor jahāra girijā satī /

hitāya sarvajagatām kālīkā kālīkopamā //175//

このように、山の娘であるサティー、すなわち黒い雲に例えられるカーリカーは、全世界の利のために、カーマの敵（シヴァ）の半分を得た。

tasyāḥ śarīraṃ rājendra haratanvarddhasaṃyutam /

yenopameyaṃ tatrāsti mārgitaṃ bhuvanatrāye //176//

王たちの王（サガラ）よ。彼女（パールヴァティ）の体は、ハラの半身を得ている。三界において、それと比較されるべきものが探された。

santānaḥ pārijāto vā ekāntaviśadas taruḥ /

amoghayā yathā vallyā tau cāpi yayatur na hi //177//

¹³⁶ 男性側と女性側の対比表現なので、本来は男性側の胸を表現しているべきだが、ekastanam は「1つの乳房」という女性的な表現となるため、男女どちらの描写をしているか、明確ではない。

¹³⁷ ローマーヴァリー（romāvali）とは、へそから上部にある、体の中心線に向かって生える産毛のことであり、美女の特徴の1つとされているものである。

¹³⁸ バナナの種類であるプランタンのことである。

¹³⁹ 他にも「腿の下部が腿の上部と蓮のような足につながっている」と訳すことも可能である。英訳では、ここの訳をしていない。

アモーガー¹⁴⁰といったつる植物に「巻かれた」究極に輝く木は、如意樹の木やパーリジャータの木、それらでも「彼女に比べ」られなかった。

bahudhā ca pṛthak tena tau remāte nareśvara /

arddhanārīśvaro bhūtvā sa tu reme kadācana //178//

そして、人々の主（サガラ）よ。様々に異なる方法で彼ら二人は楽しんだ。そして、時々、彼はアルダナーリーシュヴァラになって楽しんだ。

iti yady api bhūteśaḥ svayaṃ śaknoti kālīkām /

gaurīm kartuṃ tadā sarvabhūtakāraṇakāraṇaḥ //179//

tathāpi tām girisutām saṃyojya vividhaiḥ purā /

tapasy ayojayad devaḥ kriyopāyair anekāśaḥ //180//

このように全存在の原因の原因である生類の主（シヴァ）が自身でカーリカー（黒い者）からガウリー（白い者）に変えることができた。それでも以前と同じように、神（シヴァ）は、様々な方法で、彼女をともなう、儀礼と言う方法で、繰り返し苦行させた。

taṇīrddhūtasarvāṅgīm paścād gaurīm athākarot /

arddham ca pradadau tasyai śārīrasya maheśvaraḥ //181//

マハーシュヴァは全ての身体を苦行によって「浄化した」女性を、その後ガウリーにし、そして彼女に体の半分を与えた。

naivāsya tattvaṃ jānanti śakrādyaḥ sakalāḥ surāḥ /

śārīrarddhapradānasya tapase yojanasya ca //182//

シャクラ（インドラ）など神々は皆、この「シヴァがパールヴァティーに」半身を与えたという事実「と、パールヴァティーが」苦行を行なったという「事実」を知らない。

etasya tattvaṃ jānanti mahātmāno mahābalāḥ /

nandī bhṛṅgī mahākālo vetālo¹⁴¹ bhairavas tathā //183//

ナンディン、ブリンギン、マハーカーラ、ヴェータラ、バイラヴァといった偉大な魂を持つ力強い者たちはこの事実を知っている。

aṅgabhūtā maheśasya vītabhītās tapodhanāḥ /

ye mānuṣaśārīreṇa prāpire tapaso balāt //184//

gaṇānām ādhipatyam tu te jānanti haraṃ param /185ab

「彼らは」マヘーシャの体「の一部」になっており、恐れを知らない者たちであり、偉大な苦行者であり、苦行の力から人間の体を持ち、苦行の力でガナの統治者の立場を得た。そのような彼らはハラが最高者であることを知っている。

evaṃ sadā tvayā yojyāḥ sānugā nṛpasattama //185cd//

vanitā satkriyopāyais tato bhadram avāpsyasi /186ab

¹⁴⁰ らっぱ形の鼻をつけるつる植物のこと。学名を *Bignonia Svaveolens* といい、ツリガネカズラの一種である。

¹⁴¹ 原文では *vetalo* となっているが、英訳を参照し、*vetālo* とした。

このように、王の最高者よ。あなたと共に従者たちと妻が正しいことを行なうという方法によって、そこからあなたは吉祥を得るだろう。

ya idaṃ śṛṇuyān nityam adbhutaṃ puṇyadāyakam // 186cd//

śivayoḥ prītikaraṇaṃ śarīrārdhagrahaṃ tathā /

gaurīvasādhanaṃ caiva kālīkāyāḥ śubhāvaham //187//

na tasya vighnā jāyante sa ca puṇyatamo mataḥ /

dīrghāyuh sa sukhī bhūyāt putrapautrasamanvitaḥ //188//

この永遠で不思議で吉祥を与える、このような、シヴァたち 2 人の半身を得た喜びや、カーリカーが白い肌を得た幸福を聞く者である、最も吉祥な考えを持つ者は、障害に直面することがなく、そして子や子孫に囲まれて幸せな長寿を全うするだろう。

satataṃ pariśṛṇvāṇaḥ śivayoś caritaṃ mahat /

śivalokam avāpnoti suciraṃ śivavallabhaḥ //189//

常にシヴァたち 2 人の偉大な物語を聞く者は、長い間、シヴァの恩寵を受け、〔死後〕シヴァローカ（シヴァの天界）へ到達する。

iti śrīkālīkāpurāṇe 'rddhanārīśvaracarite pañcatvāriṃśo 'dhyāyaḥ //

以上が吉祥なカーリカープラーナにおけるアルダナーリーシュヴァラの物語第 45 章である。

ch. 83.40-42¹⁴²

iti te kathitaṃ rājaṃ charīrārdham yathādriḥ /

śambhor jahāra vetālabhairavau ca yathāhvayau //40//

このように〔以下のことが〕あなたに語られた。王（サガラ）よ。どのようにして山の娘がシャンブの半身を得たのか。そして、ヴェーターラとバイラヴァはどうしてその名になったのか。

yasya vā tanayau jātau yathā yātau gaṇeśatām /

kim anyat kathaye tubhyaṃ tad vadasva nṛpottama //41//

さらに、その人に 2 人の息子たちがどのように生まれ、集団の長になったのか。他にあなたのために話すべきことは何か。言いなさい。王の最上の者よ。

mārkaṇḍeya uvāca //

マールカンデーヤは言った。

ity aurvvasya ca saṃvādaḥ sagareṇa mahātmanā /

yo 'sau kāyārdhaharaṇaṃ śambhor girijayā kṛtaḥ //42//

¹⁴² ここで述べられる「山の娘がシャンブ（シヴァ）の半身を得た」という物語は、前述の Kālīkā-p. 45 で述べられた物語である。

以上が、ギリジャーによってシャンブの半身が得られたという〔内容の〕アウルヴァと偉大な魂を持つサガラの対話である。

ch.90.27-28¹⁴³

yathā ca kālīkā devī mohayāmāsa śaṃkaram /

yathotpannā śarīrārdham kṛtaṃ śambhor yathā tathā //27//

そしてどのようにカーリカー女神はシャンカ（シヴァ）を魅惑したのか。どのように〔彼女は〕生まれたのか。どのようにシャンブの半身になったのか。ありのままに〔全て話した〕。

kālīkāyai namas tubhyam iti yo bhāṣate svayam /

tasya haste sthitā muktis trivargas tu vaśānugaḥ //28//

「カーリカーよ、あなたに敬礼す。」と自ら唱える者、その者の手には、解脱と自身の意のままになる人生の三大目的¹⁴⁴がある。

¹⁴³ ここで述べられる「山の娘がシャンブ（シヴァ）の半身になった」という物語も、Kālīkā-p. 83 同様、前述の Kālīkā-p. 45 で述べられた物語である。

¹⁴⁴ 人生の三大目的とは、ダルマ（法）とアルタ（実利）とカーマ（性愛）のことである。ここでは、「解脱と人生の三大目的」と分けて述べているが、解脱も人生の目的の中に入れ「人生の四大目的」と言うこともある。

Kūrma-purāṇa :N 版（底本）、AITM 版（英訳）

1.ch.8.1-12ab（ブラフマー創造神話）

kūrma uvāca //

クールマは言った。

evam bhūtāni sṛṣṭāni sthāvarāṇi carāṇi ca /

yadāsyā tāḥ prajāḥ sṛṣṭā na vyavarddhanta dhimataḥ //1//

このように、〔ブラフマーによって〕動くものや動かないものという存在が生み出された。彼（ブラフマー）の思考〔によるものだったが〕、これらの創造された生類は繁栄しなかった。

tamomātrāvṛto brahmā tadāśocata duḥkhitaḥ /

tataḥ sa vidadhe buddhim arthaniścayaḥ gāminim //2//

そして、タマスの要素に覆われたブラフマー神は落ち込んで悲嘆に暮れた。それから彼（ブラフマー）は目的を解決するための知性を使った。

athātmani samadrākṣit tamomātrām niyāmikām /

rajaḥ sattvaṃ ca saṃvṛttaṃ varttamānaṃ svadharmataḥ //3//

そして、自分の中に〔あらゆるものを〕制御する〔性質を持つ〕タマスを見た。ラジャスとサットヴァは自己のダルマとして存在していた。

tamas tu vyanudat paścād rajaḥsattvena saṃyutaḥ /

tat tamaḥ pratinunnaṃ vai mithunaṃ samajāyata //4//

しかし、その後、タマスはラジャスとサットヴァの結合したものに追い払われた。そして追い払われたタマスは一對のものになった。

adharmācaraṇo viprā himsā cāsubhalaḥ kṣaṇā /

svām tanuṃ sa tato brahmā tām apohata bhāsvaram //5//

バラモンたちよ。〔その一對は〕アダルマーチャラナ（非法な行い）と不吉な性格のヒンサー（暴力）である。そこで、かのブラフマー神は自分のその輝く体を捨てた。

dvidhākarot punard deham arddhena puruṣo 'bhavat /

arddhena nārī puruṣo virājam asṛjat prabuh //6//

さらに身体を2つにし、半分が男性に、半分が女性になった。男性神はヴィラージュを創った。

nārīm ca śatarūpākhyām yoginīm sasṛje śubhām /

sā divaṃ pṛthivīm caiva mahimnā vyāpya saṃsthitā //7//

そして、彼は〔女性半身によって〕シャタルーパーという名の吉祥なるヨーギニーの女性を創った。彼女は偉大さによって、天と地に満ちてとどまった。

yogaiśvaryabalopetā jñānavijñānasamṛyutā /

yo 'bhavat puruṣāt putro virāḍavyaktajanmanaḥ //8//

ヨーガの超能力を授けられた者（シャタルーパー）は、〔高い〕知識と判断力を持っていた。未顕現から生まれた男性（ブラフマー）から生まれた息子がヴィラージュである。

svāyaṃbhuvō manurd devaḥ so 'bhavat puruṣo muniḥ /

sā devī śatarūpākhyā tapaḥ kṛtvā suduścaram //9//

bharttāraṃ diptayaśasaṃ manum evānvapadyata /

tasmāc ca śatarūpā sā putradvayam asūyata //10//

priyavratottānapāḍau kanyādvayam anuttamam /

tayoḥ prasūtiṃ dakṣāya manuḥ kanyāṃ dade punaḥ //11//

その男性は、スヴァーヤンブヴァであるマヌ神であり、聖者であった。かのシャタルーパーという名の女神は非常に困難な苦行をし、輝かしい名声のマヌを夫として得た。そして彼とそのシャタルーパーは二人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダ、そして二人の素晴らしい娘をもうけた。彼女たちのうち、プラスーティという娘をマヌはダクシャに与えた。

prajāpatir athākūtiṃ mānaso jagṛhe ruciḥ //12ab

そして、心から生まれた創造者ルチはアーケーティを娶った。

1.ch.10.88-ch.11.14ab（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

nārāyaṇākhyo bhagavān yathāpurvaṃ prajāpatiḥ /

marīcibhrgvaṅgirasah pulastyam pulahaṃ kratum //88//

dakṣam atrim vasiṣṭhaṃ ca so 'sṛjad yogavidyayā /

nava brahmāṇa ity ete purāṇe niścayo mataḥ /

sarve te brahmaṇā tulyāḥ sādhakā brahmavādinaḥ //89//

かのナーラーヤナと呼ばれるブラジャーパティである神¹⁴⁵は、以前のように、マリーチ、ブリグ、アンギラス、プラスティヤ、ブラハ、クラトゥ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタをヨーガの知識によって創造した。彼らは、9人のブラフマーとして、ブラーナ聖典において定められている。彼らは皆、ブラフマーと同じく有能であり、ヴェーダについて語れる者である。

saṅkalpaṃ caiva dharmaṃ ca yugadharmāmś ca śāśvatān /

sthānābhīmāninaḥ sarvānyathā te kathitaṃ purā //90//

そして、以前あなたに語ったように、サンカルパ、ダルマ、全てのユガに関するダルマ、各人にふさわしい場所を〔話した〕。

¹⁴⁵ ナーラーヤナはヴィシュヌの異名ではあるが、ここではブラフマーを指していると考えられる。

kūrma uvāca //

クールマは言った。

evaṃ sṛṣṭvā marīcyādīn devadevaḥ pitāmahaḥ /

sahaiva mānasaiḥ putrais tatāpa paramaṃ tapaḥ //1//

このようにマリーチなどを創造してから、神々の神であるピターマハは、心から生まれた息子たちと共に、最高の苦行をした。

tasyaiva tapato vakrād rudraḥ kālāgnisambhavaḥ /

triśūlapāṇir īśānaḥ prādurāsīt trilocaṇaḥ //2//

ちょうど彼（ブラフマー）が苦行をした時、鼻から、世界を破壊する炎から生まれ三叉戟を持つイーシャーナであり 3 つの目を持つルドラが生まれた。

arddhanārīnaravapuḥ duṣprekṣyo 'tibhayaṃkaraḥ /

vibhajātmānam ity uktvā brahmā cāntarddadhē bhayāt //3//

半身が女性である男性の姿の者は、非常に恐ろしく見るのが困難だった。ブラフマーは「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、恐れから消えた。

tathokto 'sau dvidhā strītvam puruṣatvam tathākarot /

bibheda puruṣatvañ ca daśadhā caikadhā punaḥ //4//

そして、このように言われたその者（ルドラ）は、女性要素と男性要素の 2 つになった。そして男性要素をさらに 11 に分けた。

ekādaśaite kathitā rudrās tribhuvaneśvarāḥ /

kapālīśādayo viprā devakārye niyojitāḥ //5//

バラモンたちよ。これらの 11 人はルドラと呼ばれ、三界の支配者であり、カパーリーシャなどであり、神々に関する仕事に従事した。

saumyāsaumyais tathā śāntāśāntaiḥ strītvāñ ca sa prabhuḥ /

bibheda bahudhā devaḥ svarūpair asitaiḥ sitaiḥ //6//

それから、かの神は、女性要素を、その者本人の姿によって吉祥な者、粗野な者、穏やかな者、騒がしい者、色黒の者、色白の者などたくさんに分けた。

tā vai vibhūṭayo viprā viśrutāḥ śaktayo bhuvi /

lakṣmyādayo yad vapoṣā viśvaṃ vyāpnoti śāṃkarī //7//

バラモンたちよ。ラクシュミーなどの者たちは、〔この〕地上で、遍在する者として、〔そして〕シャクティとして有名であった。シャーンカーリーはその姿によって、全〔世界〕に満ちている。

vibhajya punar īśānī svātmāmśam akarod dvijāḥ /

mahādevaniyogena pitāmahaṃ upasthitā //8//

再生族の者たちよ。さらにイーシャーニーは自分の部分を分けて、偉大な神（シヴァ）の命令によってピターマハに近づいた。

tām āha bhagavān brahmā dakṣasya duhitā bhava /

sāpi tasya niyogena prādurāsīt prajāpateḥ //9//

ブラフマー神は彼女に「ダクシャの娘になれ」と言った。彼女は彼の命令により、プラジャーパティ（ダクシャ）から生じた。

niyogād brahmaṇo devīm dadau rudrāya tām satīm /

dākṣiṇ rudro 'pi jagrāha svakīyām eva śūlabhṛt //10//

〔ダクシャは〕ブラフマー神の命令により、ルドラに、かのサティー女神を与えた。三叉戟を持つ者であるルドラも、その人自身（ルドラ）であるダクシャの娘を受け入れた

¹⁴⁶
。

prajāpativinirdeśāt kālena parameśvarī /

vibhajya punar īśānī ātmānaṃ śaṃkarād vibhoḥ //11//

menāyām abhavat putrī tadā himavataḥ satī /12ab

時が過ぎて、プラジャーパティ（ブラフマー）の命令により、パラメーシュヴァリーであるイーシャーニーは、さらにシャンカラ神から自身を分けて、それから、サティーはヒマヴァットとメナーの娘になった。

sa cāpi parvatavaro dadau rudrāya pārvatīm //12cd//

hitāya sarvadevānām trailokyasyātmano dvijāḥ /13ab

そして、その最高の山（ヒマヴァット）は、また、パールヴァティを、三界の全ての神々と自身の幸福の為に、ルドラに与えた。再生族の者たちよ。

saiśā māheśvarī¹⁴⁷ devī śaṃkarārddhaśarīrīṇī //13cd//

śivā satī haimavatī surāsuranamaskṛtā /14ab

まさにこの者は、シャンカラの身体の半分をそなえているマヘーシュヴァリー女神であり、神々とアスラから尊敬されるシヴァーでありサティーでありヒマヴァットの娘である。

1.ch.15.71-73

saṃstūya bhagavān īśaṃ śambhus tatrāgamat svayam /

vīkṣya devādhidevaṃ tam umāṃ sarvaguṇair vṛtām //71//

tuṣṭāva bhagavān brahmā dakṣaḥ sarve divaukasaḥ /

viśeṣāt pārvatīm devīm īśvarārddhaśarīrīṇīm //72//

stotrair nānāvidhair dakṣaḥ praṇamya ca kṛtāñjaliḥ /

¹⁴⁶ 後続の文章から考えると、アルダナーリーシュヴァラ（ルドラが半身にサティーを受け入れた）になったと考えられる。

¹⁴⁷ 原文では māheśvarī となっているが、英訳を参照し、maheśvarī とした。

tato bhagavatī devī prahasantī maheśvaram //73//

神（ブラフマー）はイーシュヴァラを讃え、シャンブ本人がそこへやって来た。あらゆる美德を兼ね備えたウマーと、かの神々の神（シヴァ）を見て、ブラフマー神とダクシャと天に住む者たちの全てが〔シヴァとウマーを〕賞賛した。特にダクシャは色々な種類のストートラによってシヴァ神の半身であるパールヴァティー女神に敬礼し合掌した。そこで偉大な女神はマハーシュヴァラに笑いかけた。

1.ch.16.154

praṇemur ādarād devyo gāyanti smātilālasāḥ /

praṇemur girijāṃ devīm vāmapārsve pinākinaḥ //154//

女神たちは尊敬の念から敬礼した。熱心に歌った。ピナーカを持つ者（シヴァ）の左側にいるギリジャー女神に敬礼した。

1.ch.35.22-28

kadācit tatra vasatā vyāsenāmitatejasā /

bhramamāṇena bhikṣā vai naiva labdhā dvijottamāḥ //22//

ある時、そこ（ヴァーラーナシー）に住む無限の栄光を持つヴィヤーサは歩きまわっていたのだが、しかし施し（恩恵）を得られなかった。バラモンよ。

tataḥ krodhāṇṛtatanur narāṇām iha vāsinām /

vighnaṃ sṛjāmi sarveṣāṃ yena siddhir hi hīyate //23//

そこで体に怒りをみなぎらせた〔ヴィヤーサ〕は「ここに住む全ての人に障害をもたらそう。それによってまさに成就是奪い去られる。」〔と言った〕。

tatkṣaṇāt sā mahādevī śaṃkarārdhaśarīriṇī /

prādur āsīt svayaṃ prītyā deṣaṃ kṛtvā tu mānuṣaṃ //24//

その瞬間、シャンカラの半身である、かのマハーデーヴィーは恩恵によって、自身を人間の体として顕現した。

bho bho vyāsa mahābuddhe śaptavyā na tvayā purī /

grhāṇa bhikṣāṃ mattas tvam uktvaivaṃ pradadau śivā //25//

「おお、おお、ヴィヤーサよ。偉大な知者よ。お前によって町が呪われるべきではない。お前は私から施し（恩恵）を受け取りなさい。」そのように言ってシヴァーは〔恩恵を〕与えた。

uvāca ca mahādevī krodhanas tvam yato mune /

ihā kṣetre na vastavyaṃ kṛtaghno 'si yataḥ sadā //26//

そして、マハーデーヴィーは言った。「聖仙よ。お前は怒りに傾きやすく恩知らずだ。そのため常にこの地に住むべきではない。」

evam uktaḥ sa bhagavān dhyānāj jñātvā parāṃ śivām /

uvāca praṇato bhṛtvā stutvā ca pravaraḥ stavaiḥ //27//

このように言われたかのバガヴァット（ヴィヤーサ）は瞑想によって素晴らしいシヴァーを認識した後、敬礼して従い、そして最高の讃歌で褒め称えたのち言った。

caturddaśyām athāṣṭamyām praveśaṃ dehi śāṅkari /

evam astv ity anujñāya devī cāntaradhiyata //28//

「14日目と8日目に〔町へ〕入ることを許可してください。シャンカリーよ。」女神は「そうであれ」と許可し、そして消えた。

2.ch.18.43¹⁴⁸

viśvaṃ paśupatiṃ bhīmaṃ naranārīśarīṇaṃ /

namaḥ sūryāya rudrāya bhāsvate parameṣṭhine //43//

全世界であり、パシュパティであり、恐ろしい者であり、男女の身体を持つ者であり、スーリヤ（太陽）であり、ルドラであり、輝く者であり、パラメーシュティン（最高の主宰者）である者に敬礼する。

2.ch.31.20-21¹⁴⁹

na hy eṣa bhagavān īśaḥ svātmāno vyatiriktayā /

kadācid ramate rudras tādṛśo hi maheśvaraḥ /

ayaṃ sa bhagavān īśaḥ svayaṃjyotiḥ sanātanaḥ //20//

このイーシャ神は、自分自身とは異なる者とは楽しまない。ルドラはそのようなマヘーシュヴァラである。この彼は、自身で輝いている者、永遠のイーシャ神である。

svānandabhūtā kathitā devī āgantukā śivā //21//

¹⁴⁸ バラモンが行なうべき儀礼の中にある太陽神信仰において唱えるスーリヤフリダヤ讃歌の一節である。

¹⁴⁹ シヴァの偉大さを理解できないブラフマーに対してシヴァが言った言葉である。あらゆる執着を捨てるべきであるにも関わらず、バラモン（恐らくシヴァの信者）たちが妻や従者たちと楽しみを享受するのは何故か？というブラフマーの問いに答える形となっている。

〔シヴァ〕自身の喜びをなす者であり、来た者¹⁵⁰が女神シヴァーである。

2.ch.39.24¹⁵¹

naranārīśarīrāya yoginām gurave namaḥ /

namo dāntāya śāmtāya tāpasāya harāya ca //24//

男女の体を持つ者であり、ヨーガ行者たちのグルである者に敬礼いたします。自制している者であり、寂静な者であり、苦行者でもあるハラに敬礼いたします。

2.ch.46.85¹⁵²

darśanaṃ devadevasya naranārīśarīratā /

devyā vibhāgakathanaṃ devadevāt pinākinaḥ //85//

男女の体を持つ状態としての神々の神（シヴァ）の顕現、女神が神々の神であるピナーカを持つ者（シヴァ）から分離する物語。

¹⁵⁰ 英訳では not extraneous (coming from outside)（外から来た者ではない）となっており、反対の意味で訳している。

¹⁵¹ もう一度シヴァに会いたいと望む聖者たちが、ヒマーラヤの頂にあるデーヴァダールの森にやってきて苦行をしていた。クリタユガにシヴァはガウリーを伴って、デーヴァダールの森へやって来た。シヴァを見た聖者たちは、ひれ伏し、讃歌を唱えて、シヴァを崇めた。この文章は、その讃歌の一部である。

¹⁵² この文章は、Kūrma-p. の最後の部分であり、このプラーナ聖典で語られた主要な題材を述べている章の一部である。前述の 1.ch.10.88-ch.11.14ab に該当する部分と考えられる。

Liṅga-purāṇa :N 版（底本）、AITM 版（英訳）

1.ch.5.28-33（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

ardhanārīśvaram dr̥ṣṭvā sargādaḥ kanakāṃḍajāḥ /

vibhajasveti cāhādaḥ yadā jātā tadābhavat //28//

創造の初めに、黄金の卵から生まれた者である創造者がアルダナーリーシュヴァラを見て、「〔汝を〕分けよ」と言った時に、彼はそのように〔男女2つに〕なった。

tasyāś caivāṃśajāḥ sarvāḥ striyaḥ tribhuvane tathā /

ekādaśavidhā rudrās tasya cāṃśodbhavās tathā //29//

三界における全ての女性は彼女の部分から生まれた。同様に 11 人のルドラは、彼の部分から生まれた。

strīṇgam akhilam sā vai pulliṅgam nīllohitaḥ /

taṃ dr̥ṣṭvā bhagavān brahmā dakṣamālokyā suvratāṃ //30//

bhajasva dhātrīm jagatāṃ mamāpi ca tavāpi ca /

punnāmno narakāt trāti iti putre tv ihoktitaḥ //31//

praśastā tava kāmteyaṃ syāt putrī viśvamātrkā /

tasmāt putrī satī nāmnā tavaiśā ca bhaviṣyati //32//

全ての女性性を持つ者は彼女であり、男性性を持つ者はニーラローヒターである。彼（シヴァ）を見てからブラフマー神はダクシャを見て、「世界の創造者にして、良く戒律を守る者であり、私のものであり、また汝（シヴァ）のものでもある、〔彼女を〕崇めよ。putra〔の語源〕が「puṃs（人）に由来し、地獄から救う（trāti）」とここで言えるならば〔putrī も同様の意味を持つ〕¹⁵³。〔この〕娘は汝（シヴァ）の妻であり、世界の母として賞賛される〔であろう〕。それ故、彼女は、サティーという名で汝（ダクシャ）の娘となるであろう。」〔と言った〕。

evam uktas tadā dakṣo niyogād brahmaṇo munīḥ /

labdhvā putrīm dadau sāksāt satīm rudrāya sādaram //33//

このように言われた聖者ダクシャは、ブラフマーの命令により娘を得て、そのまま、敬意を示して、ルドラにサティーを与えた。

1.ch.18.30¹⁵⁴

ardhanārīśarīrāya avyaktāya namonamaḥ /

¹⁵³ 意味は不確定だが、英訳を参照し、このように訳す。

¹⁵⁴ ヴィシュヌによって唱えられたシヴァ讃歌の一部である。

ekādaśavibhedāya sthāṇave te namaḥ sadā //30//

半身が女性であり、未顕現〔だが〕、11¹⁵⁵の異なる〔姿〕をした不動の者であるあなたに敬礼する。

1.ch.21.62¹⁵⁶

naranārīśarīrāya devyāḥ priyakarāya ca /

jaṭine muṇḍine caiva vyālayajñopavīṭine //62//

男女の体を持つ者に、女神を喜ばせる者に、蓬髪を持つ者に、剃髪した者に、蛇を聖紐にしている者に、敬礼する。

1.ch.28.1-2¹⁵⁷

tasyopari mahādevaṃ niṣkalaṃ sakalākṛtiṃ /

kāṃtārdhārūḍhadehaṃ ca pūjayed dhyānavidyayā //2//

さらに、無属性であり有属性である、最愛の人を半〔身〕に乗せた体を持つマハーデーヴァを瞑想の知によって崇拝すべきである。

1.ch.33.3-4¹⁵⁸

vakṣyāmi vo hitaṃ puṇyaṃ bhaktānāṃ munipuṃgavāḥ /

strīliṅgaṃ akhilaṃ devī prakṛtiṃ mama dehajā //3//

聖者たちよ。私は、あなたが信徒たちに対して〔なすべき〕利と善について語ろう。全ての女性の表徴は私の体から生まれた女神プラクリティである。

puṃliṅgaṃ puruṣo viprā mama dehasamudbhavaḥ /

ubhābhyāṃ eva vai sṣṣṭir mama viprā na saṃśayaḥ //4//

バラモンたちよ。男性の表徴は私の体に由来するプルシャである。これら2つによって

¹⁵⁵ 帰敬偈なので内容については詳しく触れられていないが、11人の者について、おいてアルダナーリーシュヴァラが生まれた後に、11人のルドラに分裂する記述があり、それに関連する者である可能性がある。

¹⁵⁶ ブラフマーの前でヴィシュヌによって唱えられたシヴァ讃歌の一部である。

¹⁵⁷ リンガを瞑想することによるシヴァ信仰の方法を述べている。

¹⁵⁸ これはシヴァの述べたことである。シヴァに由来するプルシャとプラクリティから創造が起こるゆえ、シヴァに帰依し、シヴァ派の行者を非難してはならないと説いている。

こそ、私の創造が〔ある。それは〕疑いのないことである。バラモンたちよ。

1.ch.33.16¹⁵⁹

namo devādhīdevāya mahādevāya vai namaḥ /

ardhanārīśarīrāya sām̐khyayogapravartine //16//

神々の神に、偉大な神に、敬礼する。半身が女性である者に、サーンキヤヨーガ¹⁶⁰のグルに、敬礼する。

1.ch.41.7-13ab (アルダナーリーシュヴァラ創造神話)

na vyavardham̐ta loke 'smin prajāḥ kamalayoninā /

vṛddhyartham̐ bhagavān brahmā putrair vai mānasaiḥ saha //7//

duścaram̐ vicacāreṣam̐ samuddiśya tapaḥ svayam /

tuṣṭas tu tapasā tasya bhavo jñātvā sa vāñchitam //8//

lalāṭamadyam̐ nirbhīdyā brahmaṇaḥ puruṣasya tu /

putras te 'ham¹⁶¹ iti procya śrīpūmrūpo 'bhavat¹⁶² tadā //9//

蓮から生まれた者（ブラフマー）によって〔創られた〕生類が、この世界で繁栄しなかったのも、ブラフマー神は繁栄のために、心から生まれた息子たちと共に、〔シヴァ〕神に対し、自身で厳しい苦行をした。そして、かの〔シヴァ〕神は、彼の苦行に満足し、〔ブラフマーの〕願いを知り、ブラフマー神の額の中央を貫き、「私はお前の息子である。」と言って、女性と男性を〔兼ね備えた〕姿になった。

tasya putro mahādevo hy ardhanaārīśvaro 'bhavat¹⁶³ /

¹⁵⁹ 前述の 33 章 3-4 偈以降で、シヴァ信仰やシヴァ派の行者への信仰により、恩恵を受けられるということをシヴァに説かれた聖者たちが、シヴァに帰依し、敬礼した。そして、彼らは喜んでシヴァへの浄化儀礼を始めるのだが、この文章は、その際に唱えられたシヴァ讃歌の一部である。

¹⁶⁰160 *Liṅga-p.* 1.33.3-4 において、女性の表徴ブラクリティと男性の表徴プルシャから創造があると述べていることから、サーンキヤ哲学の世界の展開論と重ね合わせて、このような表現をしていると考えられる。しかし、サーンキヤ哲学の理論では、プルシャとブラクリティは一体化しないので、エピクサーンキヤの考え方に近いと言える。

¹⁶¹ 原文では *teham* となっているが、アヴァグラハの省略と考え、*te 'ham* とした。

¹⁶² 原文では *śrīpūmrūpobhavat* となっているが、アヴァグラハの省略と考え、*śrīpūmrūpo 'bhavat* とした。

¹⁶³ 原文では *ardhanaārīśvarobhavat* となっているが、アヴァグラハの省略と考え、*ardhanaārīśvaro 'bhavat* とした。

dadāha bhagavān sarvaṃ brahmāṇaṃ ca jagadgurum //10//

彼（ブラフマー）の息子マハーデーヴァはまさにアルダナーリーシュヴァラになった。
神（アルダナーリーシュヴァラ）は、全世界の父ブラフマーを燃やした。

athārdhamātrāṃ kalyāṇīm ātmanaḥ parameśvarīm /

bubhuje yogamārgena vṛddhyartham jagatām śivāḥ //11//

それから、世界の繁栄のために、シヴァはヨーガの手段によって〔分裂し〕、自身の半分の部分であり、安寧をもたらすパラメーシュヴァリーを享受した。

tasyāṃ hariṃ ca brahmāṇaṃ sasarja parameśvaraḥ /

viśveśvaras tu viśvātmā cāstraṃ pāśupatiṃ tathā //12//

パラメーシュヴァラと彼女はハリとブラフマーを創った。同様に、全てのアートマンである世界の主宰神（シヴァ）は、パーシュパティという名の武器を〔創った。〕

tasmād brahmā mahādevyāś cāmśajaś ca haris tathā /13ab

故に、ブラフマーとハリは、マハーデーヴィーの一部から生まれた。

1.ch.41.37-48（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

aṣṭamūrteḥ prasādena viraṃciś cāsrjat punaḥ /

sr̥ṣṭvaitad akhilaṃ brahmā punaḥ kalpāṃtare prabhuḥ //37//

sahasrayugaparyantaṃ saṃsupte ca carācare /

prajāḥ sraṣṭumanās tepe tata ugraṃ tapo mahat //38//

そして、アシュタムールティ¹⁶⁴（ルドラ）の恩恵によって、ヴィランチ（ブラフマー）は再び創造した。ブラフマー神は、他の（前の）カルパにおいて、動くものや動かないものにおけるその全てを創造した後、千ユガ期の間眠り、〔その後目が覚めて〕生類を創りたいと考え、それから非常に過酷な苦行をした。

tasyaivaṃ tapyamānasya na kiṃcit samavartata /

tato dīrghena kālena duḥkhāt krodho vyajāyata //39//

彼がこのように苦行しても、何も繁栄しなかった。その後、長い時間の後、〔ブラフマーの〕嘆きから怒りが生じた。

krodhāviṣṭasya netrābhyāṃ prāpatann āsrubindavaḥ /

tatas tebhyo 'śrubim̐dubhyo¹⁶⁵ bhūtāḥ pretās tadābhavan //40//

怒りに満ちた〔ブラフマーの〕両目から、涙の滴りが落ちた。その涙の滴りから、ブー

¹⁶⁴ アシュタムールティとは、8つの姿の事である。前文 35-36 偈によると、太陽、火、月、地、風、人、水、虚空の8つとなっている。

¹⁶⁵ 原文では tebhyo'śrubim̐dubhyo となっているが、アヴァグラハの省略と考え、tebhyo 'śrubim̐dubhyo とした。

タ（悪鬼）やプレータ（屍鬼）が生じた。

sarvāṃs tān agrajān dṛṣṭvā bhūtapretaniśācarān /

aniṃdata tadā devo brahmātmānam ajo vibhuḥ //41//

ブータやプレータ、ニシャーチャラ（夜行鬼）など全ての最初に生まれた者たちを見て、アジャ（生まれない¹⁶⁶）神であるブラフマー神は、自身を責めた。

jahau prāṇāṃś ca bhagavān krodhāviṣṭaḥ prajāpatiḥ /

tataḥ prāṇamayo rudraḥ prādurāsīt prabhor mukhāt //42//

怒りに満ちた創造神（ブラフマー）は〔自身の〕生命（呼吸）を捨てた。そして、神の口から、呼吸から成るルドラが現れた。

ardhanārīśvaro¹⁶⁷ bhūtvā bālārkaśadyutiḥ /

tadaikādaśadhātmānam pravibhajya vyavasthitaḥ //43//

〔ルドラは〕朝日に等しい輝きを持つアルダナーリーシュヴァラとなり、それから自身を 11 〔の部分〕に分けて、とどまった。

ardhenāṃśena sarvātmā sarajāsau śivām umām /

sā cāsṛjat tadā lakṣmīm durgām śreṣṭhām sarasvatīm //44//

vāmām raudrīm mahāmāyām vaiṣṇavīm vārijekṣaṇām /

kalām vikarīṇīm caiva kālīm kamalavāsinīm //45//

balavikarīṇīm devīm balapramathinīm tathā /

sarvabhūtasya damanīm sasṛje ca manonmanīm //46//

〔自分の〕半身によって、かの全てのアートマンである者（アルダナーリーシュヴァラ）は、吉祥（シヴァー）なウマーを創った。彼女は、ラクシュミーと最高の者ドゥルガー、サラスヴァティー、ヴァーマー、ラウドリー、マハーマーヤー、蓮の目をした者ヴァイシュナヴィー、カラーヴィカリニー、蓮に住む者カーリー、バラヴィカリニー女神、バラプラマティニー、全存在のダマニー、マノーンマニーを創った。

tathānyā bahavaḥ sṛṣṭās tayā nāryaḥ sahasraśaḥ /

rudraīś caiva mahādevas tābhis tribhuvaneśvaraḥ //47//

sarvātmānaś ca tasyāgre hy atiṣṭhat parameśvaraḥ /

mṛtasya tasya devasya brahmaṇaḥ parameṣṭhinaḥ //48//

同様に、彼女によって、何千もの他の多くの女性たちが創られた。そして、ルドラたちや彼女たちと共に、三界の主であり、マハーデーヴァであるパラメーシュヴァラは、全てのアートマンであり死んでしまった¹⁶⁸かのパラメーシュティンであるブラフマー神の前に立った。

¹⁶⁶ 一般的な生殖によって生まれたのではない者という意味である。

¹⁶⁷ 原文では adhanārīśvaro となっているが、英訳を参照し、ardhanārīśvaro とした。

¹⁶⁸ 42 偈において「生命（呼吸）を捨てた」ため、死んだと考えられる。

1.ch.54.65¹⁶⁹

sahasrakiraṇaḥ śrīmān aṣṭahastaḥ sumaṅgalaḥ /
ardhanārīvapuḥ sāksāt trinetras tridaśādhipaḥ //65//

千の光線を発する吉祥な者（シヴァ）は、8本の腕と吉祥な印を持ち、まさしく半〔身〕が女性の姿であり、三眼を持つ神々の神である。

1.ch.70.260cd-276（ブラフマー創造神話）

evaṃ bhūtāni sṛṣṭāni sthāvarāṇi carāṇi ca // 260cd //

このように〔ブラフマーによって〕動くものや動かないものという存在が生み出された。

yadāsyā tāḥ prajāḥ sṛṣṭā na vyavardhamta sattamāḥ /

tamomātrāvṛto brahmā tadā śokena duḥkhitaḥ // 261 //

彼に創造されたこれらの素晴らしい生類が繁栄しなかったので、タマスの要素に覆われたブラフマー神は、悲しみによって落ち込んだ。

tataḥ sa vidadhe buddhim arthaniścayaḡāminim /

athātmani samadrākṣit tamomātrām niyāmikām // 262 //

rajaḥ sattvaṃ parityajya vartamānām svadharmataḥ /

tataḥ sa tena duḥkhena duḥkhaṃ cakre jagatpatiḥ // 263 //

それから彼は目的を解決するための知性を働かせた。そして自分の中に、〔あらゆるものを〕制御する〔性質を持ち〕、自己のダルマからラジャスとサットヴァを離れ、存在しているタマスを見た。そして、かの世界の主（ブラフマー）は、その苦しみに苦しんだ。

tamaś ca vyanudat paścād rajaḥ sattvaṃ tam āvṛnot /

tat tamaḥ pratinunnam vai mithunaṃ samajāyata // 264 //

彼（ブラフマー）はタマスを追い払い、その後ラジャスとサットヴァはそれ（タマス）を覆った。そして、追い払われたタマスは一對のものになった。

adharmas tamaso jajñe hiṃsā śokād ajāyata /

tatas tasmin samudbhūte mithune dāruṇātmike // 265 //

gatāsur bhagavān āsīt prītiś cainam aśīśriyat /

svām tanuṃ sa tato brahmā tām apohata bhāsvarām // 266 //

タマスからアダルマが生じ、ショーカからヒンサーが生じた。そして、かの恐ろしい性

¹⁶⁹ 雨についての説明の一部である。シヴァは雨の創造者であり、太陽であるシヴァが発する光線によって水が得られるとされる。

質の双子（アダルマとヒンサー）が生まれた時、神は死んだ。そして、喜びが彼に依拠した。そこでかのブラフマー神は、自分のその輝く体を捨てた。

dvidhā kṛtvā svakaṃ deham ardhena puruṣo 'bhavat¹⁷⁰ /

ardhena nārī sā tasya śatarūpā vyajāyata // 267 //

〔ブラフマーは〕自身の体を 2 つにし、半身によって男性になった。彼（ブラフマー）の〔もう一方の〕半身がシャタルーパーという女性として生まれた。

prakṛtiṃ bhūtabhātrīṃ tām kāmād vai sṛṣṭavān prabhuḥ /

sā divaṃ pṛthivīm caiva mahimnā vyāpyadhiṣṭhitā // 268 //

〔ブラフマー〕神は意欲から、かの〔全〕存在を支えるプラクリティを創った。それ（プラクリティ）は、偉大さによって天と地に満ちて、とどまった。

brahmaṇaḥ sā tanuḥ pūrvā divaṃ āvṛtya tiṣṭhati /

yā tv ardhāt sṛjato nārī śatarūpā vyajāyata // 269 //

sā devī niyutaṃ taptvā tapaḥ paramaduṣcaram /

bhartāraṃ dīptayaśasaṃ puruṣaṃ pratyapadyata // 270 //

ブラフマーのかの最初の体（男性の半身）は、天を覆ってとどまった。半身から創られたシャタルーパーという女神は、1 億年の間、最高に困難な苦行をし、夫として輝く名声の男性を得た。

sa vai svāyaṃbhavaḥ pūrvam puruṣo manur ucyate /

tasyaiva saptatiyugaṃ manvaṃtaram ihocyate // 271 //

彼こそ、最初のスヴァーヤンブヴァという男性マヌであると言われる。その 70 の〔大〕ユガ期を、この世界では、マヌヴァンタラと言う。

lebhe sa puruṣaḥ patnīm śatarūpām ayonijām /

tayā sārddham sa ramate tasmāt sā ratir ucyate // 272 //

かの男性は子宮から生まれたのではないシャタルーパーを妻にした。彼は彼女と共に楽しんだ。それゆえ、彼女はラティと呼ばれる。

prathamam saṃprayogātmā kalpādaḥ samapadyata /

virājam asṛjad brahmā so 'bhavat¹⁷¹ puruṣo virāt // 273 //

最初の自身の〔半身同士の〕結合が、カルパの初めに起こった。ブラフマーはヴィラージュを創り、かの男性ヴィラージュが出来た。

samrāt ca śatarūpā vai vairājaḥ sa manuḥ smṛtaḥ /

sa vairājaḥ prajāśargaṃ sasarja puruṣo manuḥ // 274 //

そして、シャタルーパーは支配者になった。ヴァイラージャはマヌと言われる。かのヴァイラージャである男性マヌは人類創造をした。

¹⁷⁰ 原文では puruṣobhavad となっているが、アヴァグラハの省略と考え、puruṣo 'bhavat とした。

¹⁷¹ 原文では sobhavad となっているが、アヴァグラハの省略と考え、so 'bhavat とした。

vairājāt puruṣād vīrāc chatarūpā vyajāyata /

priyavratottānapādaḥ putrau dvau lokasammatāu // 275 //

力強いヴァイラージャとシャタルーパーは、世界から尊敬される 2 人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダをもうけた。

kanye dve ca mahābhāge yābhyāṃ jātā imāḥ prajāḥ /

devī nāma tathākūṭiḥ prasūtiś caiva te ubhe // 276 //

さらに、2 人の吉祥な娘が〔生まれ〕、この 2 人からこれらの生類は生まれた。2 人の女神たちは、その名をアーケーティとプラスーティという。

1.ch.70.314-329ab (アルダナーリーシュヴァラ創造神話)

brahmā dṛṣṭvābravīd enaṃ mā srākṣīr idṛśiḥ prajāḥ /

sraṣṭavyā nātmanas tulyāḥ prajā deva namo 'stu¹⁷² te //314//

ブラフマー神はその者（ルドラ）を見て言った。「そのような¹⁷³生類を創るな¹⁷⁴。〔汝〕自身に似た生類を創るべきではない。神よ、汝に敬礼する。

anyāḥ sṛja tvam bhadraṃ te prajā vai mṛtyusaṃyutāḥ /

nārapsyaṃte hi karmāṇi prajā vigatamṛtyavaḥ //315//

汝に幸あれ。汝は他の死を伴う（死すべき）生類を創りなさい。死の来ない生類は、儀式を執り行わないだろう。」

evam ukto 'bravīd enaṃ nāhaṃ mṛtyujarānvitāḥ /

prajāḥ srakṣyāmi bhadraṃ te sthito 'haṃ¹⁷⁵ tvam sṛja prajāḥ //316//

このように言われた彼（ルドラ）は、彼（ブラフマー）に言った。「私は、死や老が訪れる生類を創らないだろう。あなたに幸あれ。私は留まるので、あなたが生類を創りなさい。

ete ye vai mayā sṛṣṭā virūpā nīlalohitāḥ /

sahasrāṇāṃ sahasraṃ tu ātmano nissṛtāḥ prajāḥ //317//

私によって創られた多様な紫紅色の何千もの者たちは自滅する生類である。

ete devā bhaviṣyaṃti rudrā nāma mahābalāḥ /

prṥthivyāṃ aṃtarikṣe ca dikṣu caiva pariśritāḥ //318//

これらの神々はルドラという名の偉大な力を持つ者たちとなるだろう。〔彼らは〕大地や天地の間、さらに〔あらゆる〕方角に存在している。

¹⁷² 原文では namostu となっているが、アヴァグラハの省略と考え、namo 'stu とした。

¹⁷³ 前文の 303-313 偈において、ルドラが創造した者たちが何千万人の恐ろしい者たちであるという描写がなされている。

¹⁷⁴ 原文ではアオリスト形になっているが、英訳に従い、命令調に訳した。

¹⁷⁵ 原文では sthitoḥam となっているが、アヴァグラハの省略と考え、sthito 'haṃ とした。

śatarudrāḥ samātmāno bhaviṣyaṃtīti yājñikāḥ /

yajñabhājo bhaviṣyaṃti sarvadevagaṇaiḥ saha //319//

百人のルドラたちは、平静を保ち、儀式を執り行う者たちとなるだろう。全ての神々の集まりと共に供物の享受者となるだろう。

manvaṃtareṣu ye devā bhaviṣyaṃtīha bhedataḥ /

sārdhaṃ tair iḥyamānāste sthāsyamtiḥyugakṣayāt //320//

これらの神々（ルドラたち）は数々のマヌヴァンタラの間、別々に存在するだろう。この神々（全ての神々）と共に敬われ、この世界で、ユガの終わりに至るまでとどまるだろう。」

evam uktas tadā brahmā mahādevena dhīmatā /

pratyuvāca namaskṛtya hr̥ṣyamāṇaḥ prajāpatiḥ //321//

このように、賢者である偉大な神（ルドラ）によって言われた創造主ブラフマーは、敬礼して、喜んで答えた。

evam bhavatu bhadraṃ te yathā te vyāhṛtaṃ vibho /

brahmaṇā samanujñāte tathā sarvam abhūt kila //322//

「汝に言われた通り、そのようにしよう。汝に幸あれ。遍在する者よ。」〔そのように〕ブラフマーによって認められた時、全て〔の創造〕が起こった。

tataḥ prabhṛti deveśo na cāsūyata vai prajāḥ /

ūrdhvaretāḥ sthitaḥ sthāṇur yāvad ābhūtasamplavam //323//

それ以来、神々の神（ルドラ）は、生類を生み出さなかった。生類の破滅が起こるまで、禁欲生活を保ったスターヌのままでいた。

yasmād uktaḥ sthito 'smīti¹⁷⁶ tasmāt sthāṇur iti smṛtaḥ /

eṣa devo mahādevaḥ puruṣo 'rkasamadyutiḥ¹⁷⁷ //324//

ardhanārīnaravapus tejasā jvalanopamaḥ /

svecchayāsau dvidhā bhūtaḥ pṛthak strī puruṣaḥ pṛthak //325//

「私は留まる」と言ったので、スターヌとして知られる。このマハーデーヴァ神プルシャは、太陽に等しい輝きを持ち、半身が女性である男性の姿をしており、輝きにおいて炎に等しい者であった。自身の意思に従って、その者は、別々に女性と男性の2つになった。

sa evaikādaśārdhena sthito 'sau¹⁷⁸ parameśvaraḥ /

tatra yā sā mahābhāgā śaṃkarasyārdhakāyini //326//

かのパラメーシュヴァラは、〔男性〕半身を 11 にした。シャンカラの残りの半〔身〕が、

¹⁷⁶ 原文では sthitosmīti となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、sthito 'smīti とした。

¹⁷⁷ 原文では puruṣorkasamadyutiḥ となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、puruṣo 'rkasamadyutiḥ とした。

¹⁷⁸ 原文では sthitosau となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、sthito 'sau とした。

かの幸運な女性である。

prāg uktā tu mahādevī strī saiveha satī hy abhūt /

hitāya jagatām devī dakṣeṇārādhitā purā //327//

そして、以前に述べたマハーデーヴィーが、世界の幸福のために、この世界でサティーという女性になった。その女神は、ダクシャによって以前から敬われていた者である。

kāryārthaṁ dakṣiṇaṁ tasyāḥ śuklaṁ vāmaṁ tathāsitam /

ātmānaṁ vibhajasveti proktā devena śambhunā //328//

〔彼女は〕「〔創造という〕役割のために、その右半身を白い者に、左半身を同様に黒い者に、自身を分けよ。」とシャンブ神に言われた。

sā tathoktā dvidhā bhūtā śuklā kṛṣṇā ca vai dvijāḥ //329ab

このように言われた彼女は、白い者と黒い者の2つになった。再生族の者たちよ。

1.ch.76.34-37¹⁷⁹

sarvavidhnān atikramya śivaloke mahīyate /

tatra bhuktvā mahābhogān yāvadābhūtasamplavam //34//

jñānaṁ vicārato labdhvā rudrebhyas tatra mucyate //35ab

全ての障害を乗り越えて、シヴァローカにおいて喜ぶ。そこにおいて、世界の終わりに至るまで、大きな喜びを享受し、熟考することによりルドラたちから知を得て、そこで解脱した。

ardhanārīśvaraṁ devaṁ caturbhujam anuttamam //35cd//

varadābhayaḥastam ca śūlapadmadharaṁ prabhum /

strīpūṁbhāvena saṁsthānaṁ sarvābharaṇabhūṣitam //36//

kṛtvā bhaktyā pratiṣṭhāpya śivaloke mahīyate //37ab

最高の4本の腕を持つアルダナーリーシュヴァラ神であり、恩寵を与える施無畏印をなす者であり、三叉戟と蓮を持つ者であり、男女の姿を具えた者であり、全ての飾りに飾られた者を、バクティ（信愛）によって、作り、建立すれば、シヴァローカによって喜びを得られる。

tatra bhuktvā mahābhogān aṇimādiguṇair yutaḥ //37cd//

ācaṁdratāraḥ jñānaṁ tato labdhvā vimucyate //38ab

そこで大きな喜びを享受し、アニマン（微小化）などの能力を具え、月や星に至る知を得て、それから解脱する。

yaḥ kuryād devadeveśaṁ sarvajñaṁ nakulīśvaram //38cd//

¹⁷⁹ 76章では、シヴァ像の安置により得られる恩恵について述べた章である。様々な姿のシヴァ像を安置することで、それぞれ異なる恩恵が得られると述べられている。

vṛtaṃ śiṣyapraśiṣyaiś ca vyākhyānodyatapāṇinam /

kṛtvā bhaktyā pratiṣṭhāpya śivalokaṃ sa gacchati //39//

デーヴァデーヴェーシャ（神々の神）である全知のラクリーシュヴァラ¹⁸⁰を創り、弟子や孫弟子たちによって取り囲まれ、解釈に着手し、バクティによって建立する者は、シヴァローカへ行く。

bhuktvā tu vipulāṃs tatra bhogān yugaśataṃ naraḥ /

jñānayogaṃ samāsādyā tatraiva ca vimucyate //40//

そして人はそこで 100 ユガの間、大きな享受を楽しみ、そしてジュニャーナヨーガを得て、まさにそこで解脱する。

1.ch.99.6cd-14ab（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

sā bhagākhya jagaddhātṛi liṅgamūrtes trivedikā //6cd//

彼女はバガー（幸運なる者、分配者）という名であり、世界の母であり、リングの像の 3 つの台座である。

liṅgas tu bhagavān dvābhyāṃ jagatsṛṣṭir dvijottamāḥ /

liṅgamūrthiḥ śivo jyotis tamasaś copari sthitaḥ //7//

そしてリングはバガヴァット（幸運を持つ者）であり、両者（バガーとバガヴァット）によって世界の創造がある。バラモンたちよ。リングの姿をしたシヴァは、タマス（闇）の上にある光として存在している。

liṅgavedisaṃmāyogād ardhanārīśvaro 'bhavat¹⁸¹ /

brahmāṇaṃ vidadhe devam agre putraṃ caturmukham //8//

リングと台座の結合体によって、アルダナーリーシュヴァラになった。〔アルダナーリーシュヴァラは、〕最初に息子として四面のブラフマー神を創った。

prahīṇoti¹⁸² sma tasyaiva jñānaṃ jñānamayo haraḥ /

viśvādhiko 'sau¹⁸³ bhagavān ardhanārīśvaro vibhuḥ //9//

かの知をそなえた者であり、何よりも優れた者であり、かのバガヴァットであり、アルダナーリーシュヴァラであり、遍在者であるハラは、まさに彼（ブラフマー）に知を授け

¹⁸⁰ 英訳では Nakulīśvara となっている。lakulīśa はパーシュパタ派の開祖（シヴァ神の 28 番目の化身）であり、nakula はシヴァの名の 1 つであるため、ラクリーシュヴァラもナクリーシュヴァラも可能である。

¹⁸¹ 原文では ardhanārīśvarobhavat だが、アヴァグラハ記号の省略と考え、ardhanārīśvaro 'bhavat とした。

¹⁸² 原文では prahīṇoti だが、英訳を参照し、prahīṇoti とした。

¹⁸³ 原文では viśvādhikosau だが、アヴァグラハ記号の省略と考え、viśvādhiko 'sau とした。

た¹⁸⁴。

hiraṇyagarbhaṃ taṃ devo jāyamānam apaśyata /

so 'pi¹⁸⁵ rudraṃ mahādevaṃ brahmāpaśyata śaṃkaram //10//

神（ルドラ、シヴァ）は、かの生まれたヒラニヤガルバ（ブラフマー）を見た。そのブラフマーも、シャンカラであり、マハーデーヴァであるルドラを見た。

taṃ dṛṣṭvā saṃsthitam devam ardhanārīśvaraṃ prabhum /

tuṣṭāva vāgbhir iṣṭābhir varadaṃ vārijodbhavaḥ //11//

〔そこに〕いるかの主アルダナーリーシュヴァラ神を見て、蓮から生まれた者（ブラフマー）は、吉祥な言葉によって、恩恵を与える者（シヴァ）を崇めた。

vibhajasveti viśveśaṃ viśvātmānam ajo vibhuḥ /

sasarja devīm vāmāṅgāt patnīm caivātmanaḥ samām //12//

「分けよ」とアジャ（生まれない者¹⁸⁶）である遍在者（ブラフマー）は、世界の神であるヴィシュヴァートマン（全てのアートマン、シヴァ）に〔言った〕。そして〔シヴァは〕左半身から自分に等しい妻である女神を創った。

śraddhā hy asya śubhā patnī tataḥ pumsaḥ purātani /

saivājñayā vibhor devī dakṣaputrī babhūva ha //13//

そしてまさに、この男性（シヴァ）から〔出た〕光り輝く太古の妻は、シュラッダーである。かの女神こそ、神¹⁸⁷の命によりダクシャの娘となったのである。

satīsaṃjñā tadā sā vai rudraṃ evāśritā patim /14ab

彼女はサティーという名で、その時まさにルドラを夫にした。

2.ch.11.7-8¹⁸⁸

brahmā haro 'pi¹⁸⁹ sāvitrī śaṃkarārdhaśarīrīni /

viṣṇur maheśvaro lakṣmīr bhavānī parameśvarī //7//

ハラは実にブラフマーであり、シャンカラの半身である者はサーヴィットリーである。マヘーシュヴァラはヴィシュヌであり、偉大なバヴァーニー女神はラクシュミーである。

vajrapāṇī mahādevaḥ śacī śaileṃdrakanyakā /

¹⁸⁴ 英訳を参照し「まさに彼（ブラフマー）に知を授けた」と訳したが、「まさに彼（シヴァ）の知を授けた」という翻訳も可能である。

¹⁸⁵ 原文では *sopi* だが、アヴァグラハ記号の省略と考え、*so 'pi* とした。

¹⁸⁶ 一般的な生殖によって生まれたのではない者という意味である。

¹⁸⁷ 誰を指しているのかは不明。可能性としては、この場面に登場しているシヴァとブラフマー、そしてこの前後に登場しているヴィシュヌの3者であると考えられる。

¹⁸⁸ シヴァとシヴァーの偉大さについて述べた章の一部である。

¹⁸⁹ 原文は *haropi* だが、アヴァグラハ記号の省略と考え、*haro 'pi* とした。

jātavedāḥ svayaṁ rudraḥ svāhā śarvārdhakāyini //8//

マハーデーヴァはヴァジュラを持つ者（インドラ）であり、ヒマーラヤの神の娘はシャチーである。ルドラ自身が火であり、シャルヴァを半身に持つ者はスヴァーハーである。

2.ch.19.6-8

maṇḍale cāgrato 'paśyan¹⁹⁰ devadevaṁ sahomayā /

devās ca munayaḥ sarve vidyutkoṭīsamaprabham //6//

そして全ての神と聖者たちは、眼前にあるマンダラ山において、何千万本の稲妻に似た輝きを持ち、ウマーと共にいる神々の神（シヴァ）を見た。

aṣṭabāhuṁ caturvaktraṁ dvādaśākṣaṁ mahābhujam /

ardhanārīśvaraṁ devaṁ jaṭāmukutaḥhāriṇam //7//

sarvābharaṇasaṁyuktaḥ raktamālyānulepanam /

raktāṁbaradharaṁ sṛṣṭisthitisamhārakārakam //8//

〔そのシヴァは〕 8本の腕、4つの顔、12の目、大きな腕を持ち、アルダナーリーシュヴァラ神であり、蓬髪のかぶりを付けており、あらゆる飾りを身に付けており、赤い花輪と塗香を付けており、赤い服を着ており、創造維持破壊の原因である。

2.ch.27.107-108¹⁹¹

ajeśaḥ kṣemarudraś ca somāṁśo¹⁹² lāṅgalī tathā /

daṇḍāruś cārdhanārī ca ekāṁtaś cāṁta eva ca //107//

pālī bhujāṅganāmā ca pinākī khaṅgir eva ca /

kāma īśas tathā śveto bhṛguḥ ṣoḍaśa vai smṛtāḥ //108//

アジェーシャ、クシェーマルドラ、ソーマーンシャ、ラーンガリー、ダンダール、アルダナーリー、エーカーンタ、アンタ、パーリー、ブジャンガナーマー、ピナーキー、カンギー、カーマ、イーシャ、シュヴェータ、ブリグの16人と言われている。

¹⁹⁰ 原文は cāgrato paśyan となっているが、この文章の主語が複数形のため、動詞も複数形である必要がある。そこで、cāgrato 'paśyan とした。

¹⁹¹ 27章は、王（クシャトリア）に必要である敵や死に打ち勝つ儀礼であるジャヤービシェーカについて説明している。その中で、南と南東の間に向かってマヒマーの神々に信仰を捧げるのだが、そのマヒマーの1人としてアルダナーリーという名の神が登場する。

¹⁹² 原文では somāṁśo だが、英訳を参照し、somāṁśo とした。

Mārkaṇḍeya-purāṇa :E 版（底本）、B 版、B 版（英訳）

ch.47.3-16ab¹⁹³（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

devādyāḥ sthāvarāṃtās ca traiguṇyaviṣayāḥ smṛtāḥ /

evaṃ bhūtāni sṛṣṭāni sthāvarāṇi carāṇi ca //3//

神々を始めとして動かないものまでが、トリグナから成るものの対象であると知られる。このように、[ブラフマー神によって]動くものや動かないものという存在が創られた。

yadāsyā tāḥ prajāḥ sarvā na¹⁹⁴ vyavarddhanta dhīmataḥ /

athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmano 'sṛjat //4//

その賢者（ブラフマー）の〔創造した〕それら全ての生類が増えなかったので、[ブラフマーは]自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。

bhṛguṃ pulastyam pulaham kratum aṅgirasam tathā /

marīciṃ dakṣam atriṃ ca vasiṣṭham¹⁹⁵ caiva mānasam //5//

すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、アングiras、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。

nava brahmaṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ /

tato 'sṛjat punar brahmā rudraṃ krodhātmasambhavam //6//

saṅkalpaṃ caiva dharmaṃ ca pūrveṣāṃ api pūrvajam /

sanandanādayo ye ca pūrvam sṛṣṭāḥ svayambhuvā //7//

彼らは9人のブラフマーとして、プラーナ聖典において定められている。そして、ブラフマーはさらに、自身の怒りから生まれたルドラと、サンカルパ、前述の者たちより先に生まれたダルマを創った。そして、自己創造者（ブラフマー）によって、以前にサナンダナなどが創られた。

na te lokeṣu sajjanto nirapekṣāḥ samāhitāḥ /

sarve te 'nāgatajñānā vitarāgā vimatsarāḥ //8//

彼ら〔サナンダナなど〕は、世界に関わることなく、無関心で〔自身の事に〕専心していた。彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokasṛṣṭau mahātmanah /

brahmaṇo 'bhūn mahākrodhas tatrotpanno 'rkaśannibhaḥ //9//

arddhanārīnaravapuḥ puruṣo 'tīśarīravān /

vibhajātmānam ity uktvā sa tadāntardadhe tataḥ //10//

¹⁹³ E 版では 47 章となっているが、B 版では 50 章となっている。

¹⁹⁴ E 版では ca となっているが、英訳や B 版（サンスクリット語、及び英訳）を参照し、na とした。

¹⁹⁵ B 版では vasiṣṭān となっているが、E 版の vasiṣṭham と同一人物を指すと考えられる。

このように、彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは、大きな怒りを感じた。そこから、太陽に等しく、大きな体を持ち、半身が女性である男性の姿の者が生まれた。「[汝] 自身を分けよ。」と言って、それから彼（ブラフマー）は消えた。

sa cokto¹⁹⁶ vai pṛthak strītvam puruṣatvam tathākarot /

bibheda puruṣatvam ca daśadhā caikadhā¹⁹⁷ tu saḥ //11//

そして、言われた彼は、別々に女性要素と男性要素を創った。そして、彼は男性要素を 11 に分けた。

saumyāsaumyais¹⁹⁸ tathā śāntaiḥ puṁstvam strītvam ca sa prabhuḥ /

bibheda bahudhā devaḥ puruṣair asitaiḥ sitaiḥ¹⁹⁹ //12//

そしてその神は優しい者や粗野な者、穏やかな者に男性要素と女性要素を〔分けた〕。神は黒い者や白い者など多様に分けた。

tato brahmātmāsambhūtaṁ pūrvam svāyambhuvaṁ²⁰⁰ prabhuḥ /

ātmanah sadṛśam kṛtvā prajāpālye²⁰¹ manuṁ dvija //13//

それから神は、以前にブラフマー自身から生まれたスヴァーヤンブヴァを自身に似せて創り、マヌとして、人々の守護〔の仕事〕に〔任命した〕。再生族の者よ。

śatarūpam ca tāṁ nārīm taponirdhūtakalmaṣām /

svāyambhuvo manur devaḥ patnīve²⁰² jagrhe vibhuḥ //14//

主でありスヴァーヤンブヴァであるマヌ神は、妻として、苦行によって汚れを除去したかの女性シャタルーパーを娶った。

tasmāc ca puruṣāt putrau śatarūpā vyajāyata /

priyavratottānapādaḥ prakhyātāv ātmakarmabhiḥ //15//

そして、その男性（マヌ）からシャタルーパーは、自身の善業によって名高い二人の息子プリヤヴラタとウッターナパーダを生んだ。

kanye dve ca tathākūtiṁ²⁰³ prasūtiṁ ca tataḥ pitā //16ab

196 E 版では coktā だが B 版（サンスクリット版、英語版）を参照し cokto とした。

197 E 版では caikadhām だが B 版を参照し caikadhā とした。

198 E 版では saumyāsaumyais だが B 版を参照し saumyāsomyais とした。

199 E 版では amitaiḥ sitaiḥ だが B 版を参照し asitaiḥ sitaiḥ とした。

200 B 版では svāyambhuvaḥ となっている。この場合の訳は「それから人々の守護においてスヴァーヤンブヴァ神は前述のブラフマー自身から生まれた者を自身に似せて創りマヌと〔した〕。再生族の者よ。」

201 B 版では prajāpālo。この場合の訳は「それから人々の守護者である神はブラフマー自身から生まれた前述のスヴァーヤンブヴァを自身に似せて創りマヌと〔した〕。再生族の者よ。」

202 E 版では palīve だが、B 版を参照し patnīve とした。

203 B 版では tathā rddhiṁ となっており、娘の名前がアーケーティであるヴァージョンとリッディであるヴァージョンがあることが分かる。

そして、父（マヌ）はさらに、アーケーティとプラスーティという二人の娘を〔もうけた〕。

Matsya-purāṇa :Ā 版 (底本)、H 版 (サンスクリット、英訳)

ch.3.30-32 (ブラフマー創造神話)

sāvitṛīm²⁰⁴ lokasṛṣṭyartham hr̥dī kṛtvā samāsthitaḥ /

tataḥ saṃjapatas tasya bhittvā deham akalmaṣam // 30 //

strīrūpam ardham akarod ardham puruṣarūpavat /

śatarūpā ca sā khyātā sāvitṛī ca nigadyate // 31 //

〔ブラフマー神は〕世界創造のために、心の中でサーヴィットリーを念想し、そして唱える者 (ブラフマー) は、汚れない体を自分から分けて、半身を女性の姿にし、半身を男性の姿にした。そして彼女はシャタルーパーと呼ばれ、サーヴィットリーとも呼ばれた。

sarasvaty atha gāyatrī brahmāṇī ca paramtapa /

tataḥ svadehasaṃsūtām ātmajām ity akalpayat // 32 //

さらにサラスヴァティー、ガーヤットリー、ブラフマーニーとも〔呼ばれた〕。最高の苦行者よ。そして、自身の体から生み出した娘と考えた²⁰⁵。

ch.60.25²⁰⁶

namo 'rdhanārīśaharam asitāṅgīti nāsikām /

nama ugrāya lokaśaṃ laliteti punar bhuvau //25//

「アルダナーリーシャハラ (半身が女性であるハラ神)²⁰⁷に敬礼する」、「アスティターンギー²⁰⁸に〔敬礼する〕」と〔唱えて〕鼻を〔崇めよ〕。「ウグラ (最高者) に敬礼する」と〔唱えて〕ローケーシャ (世界の主) を両眉でもって崇めよ。さらに「ラリター²⁰⁹に〔敬礼する〕」と〔唱えて〕女神を両眉でもって崇めよ。

²⁰⁴ 原文は sāvitṛī となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、sāvitṛīm とした。

²⁰⁵ この後、ブラフマーが、自分の息子たちに知られないように彼女を見たいがために、頭を 5 つにするという物語へと移っていく。

²⁰⁶ 白分第 3 日目にサティー女神とシヴァを祀り、唱えるマントラの一部である。

²⁰⁷ 原文、H 版共に ardhanārīśaharam だが、英訳を参照し、このように訳した。

²⁰⁸ 原文では asitāṅgī だが、英訳を参照し、このように訳した。

²⁰⁹ 原文では lalitā だが、英訳を参照し、このように訳した。

ch.157.12²¹⁰

tasyās tadbhāṣitaṃ śrutvā provāca kamalāśanaḥ /

evaṃ bhava tvam bhūyaś ca bhartṛdehārdhadhārīṇi //12//

彼女の話したことを聞いてカマラーサナ（蓮に座している者、ブラフマー）は言った。
「そのようになれ。そしてさらにお前は夫（シヴァ）の半身を持つ者〔となれ〕。」

ch.179.89-90²¹¹

sapta tā mātaro devyaḥ sārdhanārīśvaraḥ śivaḥ /

nivesya raudraṃ tat sthānaṃ tatraivāntardhīyata //89//

その7人の母神がかのルドラの状態に入ると、半身が女性であるイーシュヴァラすなわちシヴァ神はまさにその場で消えた。

samāṭṭvargas ya harasya mūrtir yadā yadā yāti ca tatsamīpe /

deveśvarasyāpi nṛsiṃhamūrteḥ pūjāṃ vidhatte tripurāndhakārīḥ //90//

母神の一団がハラ像のそばに行くたびに、トリプラーンダカーリ（トリブラとアンダカの敵、シヴァ）はヌリスィンハの姿をしているデーヴェーシュヴァラ²¹²（ヴィシュヌ）のプージャーをした。

²¹⁰ シヴァがパールヴァティーを顧みずに他の女性に近づいたことに対し、パールヴァティーが呪いの言葉を発している間に、彼女の怒りが恐ろしい獅子の姿を取って現われた。この獅子の口の中に入ろうかと考え始めた彼女に対し、ブラフマーが、「恩恵を与えよう。だから苦行をやめなさい。」と言った。パールヴァティーは、懸命に苦行しシヴァを得たが、シヴァは彼女に黒いと言ったので、金色の肌になりたいと願った。この文章は、それに対するブラフマーの返答である。この後、パールヴァティーの黒い肌は金色になり、取り払われた黒さがラートリー女神として生まれた。ラートリーは、パールヴァティーの怒りから現れた獅子を乗り物とした。

²¹¹ H版では88-89偈にあたる。ヴィシュヌが世界や創造、ヴィシュヌ派の人々を名乗るために子孫繁栄と幸福の女神である32人のマートリカーを創造した。彼女たちは、シヴァが創ったラウドラーデーヴィーを守護することや子宝を求める者たちへ子供を与えること、自分たちを個別に崇める者たちの望みを全て叶えることも命じられた。そしてヴィシュヌがその場で消えると、そこにクリタサウチャティールタが出来た。シヴァがラウドラーデーヴィーを彼女たちに与えた。その後、この文章が述べられる。

²¹² イーシュヴァラは通常シヴァ神を指すが、ここでは前後の文脈や英訳から見てヴィシュヌ神を指すと思われる。

ch.192.28²¹³

ardhanārīśvaram devaṃ paṭe bhaktyā likhāpayet /

śaṅkhatūryaninādaiś ca brahmaghoṣaiś ca sadvijaiḥ //28//

アルダナーリーシュヴァラ神をバクティによって布²¹⁴に描くべきである。そしてほら貝とラッパの音、再生族たちによるヴェーダの朗誦によって〔崇められるべきである〕。

ch.260.1-10²¹⁵

sūta uvāca //

スータは言った。

adhunā saṃpravakṣyāmi ardhanārīśvaram param /

ardhena devadevasya nārīrūpaṃ suśobhanam //1//

さて、神々の神（シヴァ）の半身によって非常に美しい女性の姿を取る最高の者アルダナーリーシュヴァラについて話そう。

īśārdhe tu jaṭābhāgo bālendukalayā yutaḥ /

umārdhe cāpi dātavyau śimantatilakāv ubhau //2//

シヴァ側の半身には、三日月で飾られた編髪がつくられるべきであり、そしてまたウマー側にも 2 つのシーマーンタティラカ²¹⁶がつくられるべきである。

vāsukim²¹⁷ dakṣiṇe karṇe vāme kuṇḍalam ādiśet /

bālikā copariṣṭāt tu kapālaṃ dakṣiṇe kare /

triśūlaṃ vā 'pi kartavyaṃ devadevasya śūliṇaḥ //3//

²¹³ シュックラティールタにおいてなすべきことの 1 つである。

²¹⁴ pata は英訳によると木の板とされており、今でいうところのキャンバスのようなものだと考えられる。ここは、アルダナーリーシュヴァラを図像化し、崇めていたことがうかがえる興味深い記述である。

²¹⁵ これは、図像についての説明をしている一部分である。ch.260.1-10 にてアルダナーリーシュヴァラの説明をしたのち、ch.260.11-21ab においてウーママヘーシュヴァラという図像の説明をし、ch.260.21cd-27 においてハリハラの説明をしている。ウーママヘーシュヴァラは、シヴァとウマーが並んでいる 2 体の図像であり、アルダナーリーシュヴァラの形とは異なる。ハリハラは、シヴァとヴィシュヌがアルダナーリーシュヴァラの形を取っている図像である。そのため、ウーママヘーシュヴァラは、形はアルダナーリーシュヴァラとは異なるが概念やシヴァとウマーの関係性が一致しており、ハリハラは、構成している神が異なるが形がアルダナーリーシュヴァラと一致しているため、類似性を持つので 3 者について同じ章で取り扱っているのだろう。ここから分かることは、この 3 者はそれぞれ別々の存在として認識され名を付けられていたということである。

²¹⁶ 両数になっているのは、シーマーンタ（髪分け目）によって髪が二分されているからだろうか。

²¹⁷ H 版では vāsukir なので、その場合の訳は「右耳にヴァースキ（蛇の王）が（おり）、左〔耳〕にイヤリングを飾るべきである。」

右耳にヴァースキ（蛇の王）を、左〔耳〕に耳飾りを飾るべきである。そしてバーリカー²¹⁸は上方にあり、右手には、カパーラかもしくは槍を持つシヴァの三叉戟がつくられるべきである。

vāmato darpaṇaṃ dadyād utpalaṃ ca viśeṣataḥ /

vāmabāhuś ca²¹⁹ kartavyaḥ keyūravalayānvitaḥ //4//

左には鏡とそして蓮が特につくられるべきである。そして左腕は腕輪と上腕の腕輪がつくられるべきである。

upavītaṃ ca kartavyaṃ maṇimuktāmayaṃ tathā//5//

宝石や真珠からできている紐（数珠）をつくるべきである。

stanabhāraṃ tathā 'rdhe tu vāme pīṇaṃ²²⁰ prakalpayet /

hārārdham²²¹ ujjalaṃ kuryāc chroṇy ardhe²²² tu tathaiva ca //6//

そして、左半身はしっかりとした重みのある乳房をつけるべきである。半〔身〕に輝く真珠の首飾りをつくるべきである。〔もう一方の〕半〔身〕には、腰〔帯²²³〕が同様に〔つくられるべきである〕。

liṅgārdham ūrdhvagaṃ²²⁴ kuryād vyālājinakṛtāmbaram²²⁵ /

vāne lambaparīdhānaṃ kaṭisūtratrāyānvitam //7//

nānāratnasamopetaṃ dakṣiṇaṃ bhujaḡānvitam /

devasya dakṣiṇaṃ pādaṃ padmopari suśaṃsthitam //8//

半身のリングは直立し、トラ皮の覆いが掛けられ、〔もう一方の〕左側はたくさんの宝石を付けた三枚の腰布が垂れ下がっている。右側は蛇をつくる〔べきである〕。神の右足は蓮の上に美しく置かれる〔べきである〕。

kiṃcid ūrdhvaṃ tathā vāmaṃ bhūṣitaṃ nūpureṇa tu /

ratnair vibhūṣitān kuryād aṅgulīṣv aṅgulīyakān //9//

少し上には、同様に左〔足〕がアングレットなどにより飾られ、足の指には宝石によって飾られた指輪が〔つくられるべきである〕。

sālaktakaṃ tathā pādaṃ pārvatyā darśayet sadā /

ardhanārīśvarasyedaṃ rūpaṃ asminn udāhṛtam //10//

²¹⁸ 何のことか不明である。英訳では、bālikā を mālīkā ととらえているようで「首から首飾りをさげている」と訳している。これから類推すると、もとは mālīkā（花輪）であった可能性がある。

²¹⁹ H 版では utpalaṃ tu となっている。

²²⁰ Ā 版では pīṇaṃ となっている。この場合、訳は「黄色く重みのある乳房」となる。

²²¹ H 版では parārghyaṃ となっている。

²²² 原文は ardha だが、H 版を参照し ardhe にした。

²²³ 英訳では a girdle（腰帯）と訳されている。

²²⁴ 原文では ūrdhagaṃ だが、H 版を参照し ūrdhvagaṃ にした。

²²⁵ 原文では vyālājinakṛtām varam となっているが、H 版の vyālājinakṛtābaram を採用した。

さらに、パールヴァティーの足はいつもラックで染められている〔状態〕で見せるべきである。アルダナーリーシュヴァラのこの姿が、以上のように説明された。

Nārada-purāṇa :N 版（底本）、AITM 版（英訳）

1.ch.16.40cd-43

śaṅkhacakraḍharaṃ śāntiṃ nārāyaṇaṃ anāmayam //40cd//

lakṣmīsaṃśritavāmāṅkaṃ tathābhayaḥkaraṃ prabhum /

kirīṭakuṇḍaladharaṃ nānāmaṇḍanaśobhitam //41//

bhrājatkaustubhamālāḍhyaṃ śrīvatsāṅkitavakṣasam /

pītāmbaradharaṃ devaṃ surāsuranamaskṛtam //42//

dhyāyed anādinidhanaṃ sarvakāmaphalapradaṃ /

antaryāmī jñānarūpī paripūrṇaḥ sanātanaḥ //43//

ほら貝とチャクラ（輪）を持ち、寂静であり、病から解放されており、ラクシュミーを左〔半〕身としており、恐れない者であり、主であり、冠と耳飾りを身に着けており、色々な装飾品によって輝いており、輝くカウストゥバ²²⁶のネックレスをたくさん〔着けており〕、胸にシュリーヴァトサ²²⁷の印をつけており、黄色い衣裳を身に着けた神であり、神とアスラから敬礼されており、無始無終であり、全ての願いの果を与えるナーラーヤナを瞑想するべきである。〔ナーラーヤナは〕アンタルヤーミン（内制者）であり、知の姿をしており、完全なる者であり、永遠の者である。

3.ch.66.120-121

yatra svīśapadaṃ noktaṃ tatra sarvatra yojayet /120ab

〔ここまでに述べられたマントラにおいて〕īśa という接尾辞の言及がなかった場合、あらゆる箇所で補うべきである。

munis syād dakṣiṇāmūrtir gāyatrīchanda īritam //120cd//

devatā cārddhanārīśo viniyogo 'khilāptaye /121ab

全てを成就するために、聖者はダクシナーームールティ²²⁸と、讃歌はガーヤトリーの韻律と、そして神はアルダナーリーシャと結び付けられるべきである。

halo bijāni caktāni svarāḥ śaktaya īritāḥ //121cd//

子音は種子と言われ、母音はシャクティと言われる。

²²⁶ 吉祥な神の宝石の名称。

²²⁷ śrīvatsa とは「幸福の女神にとって愛しき者の意。神（特にヴィシュヌ神）の胸にある三角形の印。時にはラクシュミー女神を表示する。」[中村 1988 p. 378]とされており、ヴィシュヌの特徴の 1 つである。

²²⁸ タントラにおけるシヴァの姿のこと。

3.ch.82.157cd

kalāṣoḍaśasampūrṇā kṛṣṇadehārdhādharīṇī //157cd//

16 のカラー²²⁹によって完全体となっている女性、クリシュナの半身を持つ女性。

3.ch.83.9-15

sanatkumāraḥ provāca smṛtvā rādhāpadāmbujam /

sanatkumāra uvāca //

śṛṇu nārada vakṣyāmi rādhāṃśānāṃ samudbhavam //9//

śaktīnāṃ paramāścaryaṃ maṃtrasādhanaṃpūrvakam /

yā tu rādhā mayā proktā kṛṣṇārdhāṃgasamudbhavā //10//

golokavāsīnī sā tu nityā kṛṣṇasahāyīnī /

tejomaṇḍalamadhyasthā dṛśyādṛśyasvarūpīnī //11//

蓮のようなラーダーの足を想って、サナトクマーラは言った。サナトクマーラは言った。

「ナーラダよ。聞きなさい。ラーダーの身体が〔どのように〕生じたのか、シャクティが〔いかに〕最も驚異的なものなのか、唱えられるべきマントラと共に話そう。そして、クリシュナの半身として生じた、私によって語られたラーダーは、ゴーローカ（クリシュナの天界）に住んでおり、永遠であり、クリシュナと共に在る者であり、光の輪の中央におり、顕現および未顕現を本質とする者である。

kadācit tu tayā sārddham sthitasya munisattama /

kṛṣṇasya vāmabhāgāt tu jāto nārāyaṇaḥ svayam //12//

聖者の最高者よ。ある時、彼女と共にいる時、クリシュナの体の左側からナーラーヤナは自分自身で生まれた。

rādhikāyās ca vāmāṃgān mahālakṣmīr babhūva ha /

tataḥ kṛṣṇo mahālakṣmīm dattvā nārāyaṇāya ca //13//

vaikunṭhe sthāpayāmāsa śaśvatpālanakarmanī /

atha golokaṇāthasya lomnāṃ vivarato mune //14//

jātās cāsaṃkhyagopālās tejasā vayasā samāḥ /

prānatulyapriyāḥ sarve babhūvuḥ pārśadā vibhoḥ //15//

まさにマハーラクシュミーはラーダーの体の左側から生まれた。そしてそれから、クリシュナはマハーラクシュミーをナーラーヤナに与え、永遠に庇護を与えるヴァイクンタ（ヴィシュヌの最高天）に〔とどまるよう〕任命した。聖者よ。それから、ゴーローカ

²²⁹ カラーとは 16 分割された 1 つの部分のことを言う。

の神（クリシュナ）の体毛の穴から、輝きも年齢も等しい数えきれないほどの牛飼いが生まれた。〔彼らは〕皆、〔クリシュナの〕プラーナに等しい愛しき者であり、主（クリシュナ）の従者となった。

3.ch.91.160-162

kaśyapo munir ākhyātaś chaṇḍo 'nuṣṭubudāhṛtam /

arddhanārīśvaraḥ prokto devatā jagatām patih //160//

カシュヤパは聖者と言われた。韻律はアヌシュトゥプと呼ばれている。アルダナーリーシュヴァラという神格は世界の主と呼ばれる。

rephādivyaṃjanaiḥ ṣaḍbhiḥ kuryād aṃgāni ṣaṭ kramāt /

trinetrām nīlamanibhaṃ śūlapāśaṃ kapālakam //161//

raktotpalaṃ ca hastābjair dadhataṃ cārubhūṣaṇam /

bāleṃdubaddhamukuṭam arddhanārīśvaraṃ smaret //162//

r の文字などの 6 つの子音によって、順番通りに 6 つのアンガ（身体）を〔念想〕すべきである。三つ目の者であり、青い宝石（サファイア）のように輝く者であり、三叉戟と索縄とカパーラと赤い睡蓮を蓮のような手に持つ者であり、美しく飾り立てている者であり、三日月を付けた冠をしている者であるアルダナーリーシュヴァラを念想すべきである。

4.ch.104.202

avimuktasya mātmyam umāmāheśvarasya ca /

mahaujaṣaḥ prabhāvaś ca jambūtīrthasya²³⁰ varṇanam //202//

アヴィムクタとウマーマヘーシュヴァラのマーハートミヤ（縁起譚）とマハウジャスの栄光、ジャンブーティールタの描写。

Uttara-bhāga ch.73.49

arddhālakam avastrāddham asthyutpaladalaśrajam /

arddhapuṃlakṣaṇaṃ vaṃde puruṣaṃ kṛṣṇapīṅgalam //49//

半〔身〕に蓬髪を〔そなえ〕、半〔身〕が裸であり、骨と蓮弁の花輪を〔それぞれ半身

²³⁰ 原文は jambūtīrthasya だが、英訳を参照し、jambūtīrthasya とした。

に身に着け]、半身は男性の特徴を〔示し〕、〔それぞれの半身が〕黒色（クリシュナ）と黄褐色（ピンガラ）の〔肌色をしている〕男性に、私は敬礼する。

Uttara-bhāga ch.80.107ab

yasya dhyānaṃ nagajaniyuto 'harniṣaṃ vai giriśo bhaktiklinno rahasi kurute hy
arddhanārīśvarākhyah /107ab

アルダナーリーシュヴァラと呼ばれており、山の娘を伴い、バクティに浸っているギリ
ーシャは、昼夜、密かにその者（クリシュナ）の瞑想を行なっている。

Padma-purāṇa :N 版（底本）、AITM 版（英訳）

1.ch.3.166-179ab（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

evam bhūtāni sṛṣṭāni sthāvarāṇi carāṇi ca /

yadāsyā tāḥ prajāḥ sarvā na vyavaraddhamta dhīmataḥ //166//

このように〔ブラフマーによって〕動くものや動かないものという存在が生み出された。彼の思考〔によるもの〕だったにもかかわらず、これら全ての生類は繁栄しなかった²³¹。

athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmano 'srjat /

bhṛguṃ mām pulahaṃ caiva kratum aṃgirasam tathā //167//

marīciṃ dakṣam atriṃ ca vasiṣṭhaṃ caiva mānasān /

nava brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ //168//

それから彼は、自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。ブリグ、私（プラスティヤ）、プラハ、クラトゥ、アンギラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタこそが〔その〕心から生まれた息子たちである。彼らは9人のブラフマーとしてプラーナ聖典に定められている。

sanaṃdanādayo ye ca pūrvam sṛṣṭās tu vedhasā /

na te lokesv asajjamta nirapekṣāḥ prajāsu te //169//

サナンダナなど、創造者によって以前に創られた彼らは、その世界のにおける生類〔の創造〕に無関心で、創造しなかった。

sarve hy āgatavijñānā vītarāgā vimatsarāḥ /

teṣv evam nirapekṣeṣu lokasṛṣṭau mahātmanah //170//

brahmaṇo 'bhūn²³² mahān krodhas trailokyadahanakṣamaḥ /

tasya krodhāt samudbhūtaṃ jvālāmālāvadīpitam //171//

まさに全ての者たちは、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように、彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは三界を燃やせるほど大きな怒りを感じた。彼の怒りから燃える炎の輪が生じた。

brahmaṇas tu tadā jyotis trailokyam akhilaṃ dahat /

bhrukuṭīkuṭilāt tasya lalāṭāt krodhadīpitāt //172//

samutpannas tadā rudro madhyāhnārkasamaprabhaḥ /

arddhanārīnaravapuḥ pracaṇḍotiśarīravān²³³ //173//

そして、ブラフマーの光は三界全てを燃やせる〔力があつた〕。怒りに燃え、眉をしか

²³¹ 英訳では「繁栄する」となっているが、否定辞 *na* が入っているため、「繁栄しない」とした。

²³² 原文では *brahmaṇobhūn* となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、*brahmaṇo 'bhūn* とした。

²³³ 意味が不明であるため、英訳を参照し、「巨大な体を具えた」とした。

めた彼の額から、その時、真昼の太陽に等しい光を持ち、半身が女性である男性の姿をしており、巨大な体を具えたルドラが生まれた。

vibhajātmānam ity uktvā taṁ brahmāmtardadhe²³⁴ tataḥ /

tathoktvo 'sau²³⁵ dvidhā strītvam puruṣatvam tathākarot //174//

彼に「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、ブラフマーは消えた。このように言われ、その者は女性要素と男性要素の2つを創った。

bibheda puruṣatvam ca daśadhā caikadhā ca saḥ /

saumyāsaumyais tathā rūpaiḥ śāmtaiḥ strītvam ca sa prabhuḥ //175//

そして、彼は男性要素を11に分けた。そして、その神は女性要素を、優しい者や粗野な者、美しい者、穏やかな者に〔分けた〕。

vibheda bahudhā caiva svarūpair asitaiḥ sitaiḥ /176ab

さらに、自身の姿を黒い者や白い者など多数に分けた。

tato brahmā svayaṁbhūtaṁ pūrvaṁ svāyaṁbhuvam prabhuṁ //176cd//

ātmānam eva kṛtavān prajāpatye manuṁ nṛpa /

śatarūpāṁ ca tāṁ nārīṁ taponirddhūtakalmaṣām //177//

svāyaṁbhuvo manur nāma patnīve jagṛhe prabhuḥ /178ab

それからブラフマーは、以前に〔ブラフマー〕自身から生まれ、〔ブラフマー〕自身でもあるスヴァーヤンブヴァをマヌとして創造の〔の仕事〕に任命した。王よ。スヴァーヤンブヴァであるマヌという名の神は、妻として、苦行によって汚れを除去した、かの女性シャタルーパーを娶った。

tasmāc ca puruṣād devī śatarūpā vyajāyata //178cd//

priyavratottānapādaprasūtyākūtisaṁjñitam²³⁶ /179ab

そして、その男性によってシャタルーパー女神は、プリヤヴラタとウッターナパーダとプラスーティとアーケーティと呼ばれる〔子供たち〕を生んだ。

1.ch.13.316-318²³⁷

yajñāśrāddham kṛtaṁ kṣudrair aihikasvārthatatparaiḥ /316ab

²³⁴ 原文では brahmāmtardadheḥ となっているが、英訳を参照し、brahmāmtardadhe とした。

²³⁵ 原文では tathoktvosau となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、tathoktvo 'sau とした。

²³⁶ 原文では priyavratottānapādaprasūtyākūtisaṁjñitam となっているが、英訳を参照し、priyavratottānapādaprasūtyākūtisaṁjñitam とした。

²³⁷ アスラ達が苦行している場面である。神々は、その苦行を失敗させようと画策しており、ここではわざと逆の価値観を述べている。

世俗的な自分の目的に従う劣った者たちによって、〔ルドラ（シヴァ）への〕ヤジュニャ（儀礼）とシュラーダがなされる。

ye tv amī vaiṣṇavā dharmā ye ca rudrakṛtās tathā //316cd//

kudharmā dārasahitair hiṃsāprāyāḥ kṛtāhitaiḥ /317ab

妻を伴っており、それはヴィシュヌ派のダルマであり、同様にルドラのなしたものである悪いダルマに従う人々は、人のためにならないことと共にヒンサーをしている。

arddhanārīśvaro rudraḥ katham mokṣam gamiṣyati //317cd//

vṛto bhūtagaṇair bhūribhūṣitāś cāsthibhis tathā /

na svargo naiva mokṣo 'tra²³⁸ lokāḥ kliṣyaṃti vai tathā //318//

アルダナーリーシュヴァラであり、ブータの一団に囲まれており、骨によって良く飾られたルドラが、どうして解脱をもたらそうか。天界でもなく、解脱でもなく、まさにここで人々は苦しむ²³⁹。

1.ch.25.5

umāmaheśvarasyārcām arcayet sūryanāmabhiḥ /

sūryārcām śivaliṃgaṃ ca ubhayaṃ pūjayed yataḥ //5//

スーリヤの名〔を唱えながら〕、ウマーマヘーシュヴァラ信仰をするべきである。それ以降、スーリヤ信仰とシヴァリングア〔信仰〕両方をするべきである。

1.ch.29.27ab²⁴⁰

namo 'rddhanārīśaharam²⁴¹ asitāṃgīti nāsikām /27ab

「アルダナーリーシュヴァラであるハラに敬礼する」〔と言って、シヴァを崇め〕、白い体を持つ者よ、〔「あなたに敬礼する」と言って〕鼻を〔崇めなさい〕。

²³⁸ 原文では mokṣotra となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、mokṣo 'tra とした。

²³⁹ 意味が分かりにくいので、意訳した。

²⁴⁰ これは、サウバーギヤ・シャヤナの誓願の文句の一部である。

²⁴¹ 原文では namorddhanārīśaharam となっているが、アヴァグラハ記号を省略しているものと考え、namo 'rddhanārīśaharam とした。

1.ch.34.56

śarīrārdhe ca te gaurī sadā sthāsyati śaṃkara /

anayā śobhase deva tvayā trailokyasum̐dara //56//

シャンカラよ。あなたの半身に常にガウリーが住するでしょう。神よ。三界の美しい者よ。彼女によって、あなたによって²⁴²、あなたは美しく輝く。

1.ch.40.67-72（ブラフマー創造神話）

yaṃ kālāṃ te gatā brahmabrahmā taṃ kālāṃ eva ca /

tapo ghorataraṃ bhūyaḥ saṃśritaḥ paramaṃ padaṃ // 67 //

彼ら苦行をするバラモンたちが去ったまさにその時、〔ブラフマーは〕さらに非常に厳しい最高の状態の段階の苦行をしていた。

na ca śaktas tato brahmā prabhur ekas tapaś caran /

śarīrārdhāt tato bhāryām utpādayati tac chubhām // 68 //

そして、ブラフマー神は1人では苦行できなかったのもので、体の半身から、吉祥な妻を生み出した。

ātmanaḥ sadṛśān putrān asṛjad vai pitāmahaḥ /

viśve prajānāṃ patayo yebhyo lokā viniṣṛtāḥ // 69 //

ピターマハは、自分に似た息子たちを創った。〔彼らは〕皆、生類の主であり、彼らから世界が現れた。

viśveśaṃ prathamāṃ tāvan mahātmā tapasātmajam /

sarvatra saṃhataṃ puṇyaṃ nāmnā dharmāṃ sa sṛṣṭavān // 70 //

かの偉大な魂を持つ者（ブラフマー）は、最初に、苦行によって、あらゆる徳を集めたダルマ（法）という名の息子を創った。

dakṣaṃ marīcim atriṃ ca pulastyaṃ pulahaṃ kratum /

vasiṣṭhaṃ gautamaṃ caiva bhṛguṃ aṃgirasam̐ munim̐ // 71 //

ダクシャ、マリーチ、アトリ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシユタ、ガウタマ、ブリグと聖者アングィラスを〔創った〕。

atyadbhutās svakṛtyena jñeyās te tu maharṣayaḥ /

trayodaśaguṇā raṃbhā ye vaṃśās tu maharṣiṇām̐ // 72 //

それらのマハルシ（偉大な聖仙）は、自らのなした行いによって非常に驚異的な者たちとして知られるべきである。マハルシたちのその系譜は、13の徳を支柱（基礎）としている。

²⁴² 意味が不明であり、英訳では訳されていない。

1.ch.44.85-89a

devy uvāca //

女神は言った。

tapasā duṣkareṇāptaḥ patir vai śaṃkaro mayā /

sa mām śyāmalavarṇeti bahuśaḥ proktavān rahaḥ //85//

「厳しい苦行によって、私によってシャンカラ（シヴァ）が夫として得られました。彼は私に密かに何度も「黒色〔の肌の者〕よ」と言いました。

tasmād ahaṃ kāmcanābhavarṇā tannāmasaṃyutā /

bhartur bhūtapater aṃgam ekato nirviṣaṃ bhavet //86//

それゆえ、私は輝く金色〔の肌〕となり、それと関連する名前²⁴³を持つ者となり、全存在の主である夫の体の一部分となり、毒（黒色）を取り除きましょう。」

tasyās tadbhāṣitaṃ śrutvā provāca jagadīśvaraḥ /

evaṃ bhava tvam bhūyaś ca bhartur dehārdhacārīṇi //87//

彼女から、その言葉を聞いて、世界の主は言った。「そのようになれ。そしてお前は〔自分の〕夫の半身を持つ者となるであろう。」

tatas tatyāja tāṃ kṛṣṇāṃ phullanīlotpalatvacam /

tvak ca sāpy abhavad bhīmā ghaṇṭāhastā trilocanā //88//

nānābharaṇasaṃpūrṇā pītakaśeyadhārīṇi //89ab

それから、〔彼女は〕その花開いた青い蓮のような青黒い肌〔色〕を捨てた。そして、まさにその肌は、手に鐘を持っており、三つ目をしており、色々な飾りに満ちており、黄色いシルクの衣裳を着ている恐ろしい女性になった。

1.ch.62.99²⁴⁴

umayāhetunā śaṃbhor jñānaṃ lokeṣu saṃtatam /

jñānamātā ca sā jñeyā śaṃbhor ardhāṅgavāsini //99//

ウマーによって、世界における世界を否定することによって²⁴⁵常にシャンブの知が〔あるべきである〕。彼女（ウマー）は、知の母として、そしてシャンブの半身を占める者として知られるべきである。

²⁴³ 英訳や他のプラーナ文献を参照し、この名前は「ガウリー」であると考えられる。

²⁴⁴ 世界創造の時に、ブラフマーから言われ、マヤーは 11 人の女神に分かれた。このウマーはその 11 人のうちの 1 人である。

²⁴⁵ 英訳を参照し、ahetunā とした。

5.ch.39.33-37

tasmai sa kathayāmāsa hayam nītaṃ raghoḥ pateḥ /
vājimedhāya nirmuktaṃ svacchaṃdagatim adbhutam //33//
rakṣitaṃ śatrusūdena mahābalasametinā /
tac chrtvā vacanaṃ tasya nṛpo vīramaṇir mahān //34//
nātipraśaṃsayāmāsa tatkarmasu mahāmatiḥ //35ab

彼（息子）は彼（ヴィーラマニ）に馬祠祭のために解き放たれ、自由に動き回る、強力な力を持っているシャトルスーダ（シャトルグナ、敵を殺す者）によって守られた、主ラグ（ラーマの先祖）の不可思議な馬を捕まえたと話した。そして、偉大な王ヴィーラマニは彼（息子）の言葉を聞いて、マハーマティ（偉大な考えを持つ者）は、その行為についてあまり賞賛しなかった。

nītvā punaḥ samāyāmtāṃ caurasyeva viceṣṭitam //35cd//
kathayāmāsa jāmātre śivāyādbhutakarmaṇe /
ardhāṃganādharāyāṃgabhūṣāya caṃdradhāriṇe //36//

あたかも泥棒がしたように捕まえられた馬を連れて行って、義理の兄弟であり、驚異的なことをなす者であり、半身に女性を持つ者であり、体を飾るものとして月を付けた者であるシヴァに話した。

tena saṃmaṇtrayāmāsa nṛpo vīramaṇir mahān /
putrasrṣṭaṃ mahatkarmaviniṃdyaṃ mahatāṃ mataḥ //37//

偉大なる者たちに賞賛される偉大なヴィーラマニ王は、息子によってなされた大きな非難されるべき行為を彼〔シヴァに〕相談した。

6.ch.88.31-33

dānaṃ vrataṃ tapo vāpi kiṃ tu pūrvam mayā kṛtam /
yenāhaṃ martyajā martye bhavānīvābhavaṃ²⁴⁶ kila //31//
tavāṃgārddhaharā nityaṃ garuḍoparigāmini /
iṃdrādidevatā vāsam agamaṃ ca tvayā saha //32//

それによって、実に私が死すべき存在として生まれ、死すべき者たち〔の世界〕において、バヴァーニー（パールヴァティー）のようになり、あなたの半身となり、常にガルダに乗り行く者となり、あなたと共にインドラなどの神の住処へ行ったところのその

²⁴⁶ 原文では bhavānīvā 'bhavaṃ となっているが、これは bhavānīvā abhavaṃ の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは bhavānīvābhavaṃ とした。

〔行為〕は、以前に私によってなされたどのような布施であり、どのような誓願であり、もしくはどのような苦行だったのか。

atas tvāṃ praṣṭum icchāmi kiṃ kṛtaṃ tu mayā śubham /

janmāntare ca kiṃ śīlākā cāhaṃ kasya kanyakā //33//

それゆえ、あなたにたずねたい。前世において、私によってどのような吉祥な行いが〔なされたのか〕？そして、私はどのような性格（本質）〔だったのか〕？誰の娘〔だったのか〕？

6.ch.206.10-11

brahmano mānasaṃ yena lobhitaṃ bhāratīṃ prati /

śivasyārdhāśarīraṃ ca pārvatyai yena dāpitaṃ //10//

tābhyām anyo jano loke vaśī vā jñānavān api /

yaḥ smaraṃ taṃ kṣamo jetuṃ striyaḥ prakṛtīcaṃcalāḥ //11//

彼（カーマ）によって、ブラフマーの心はバーラティー（サラスヴァティー）の方に惹きつけられ、また彼（カーマ）によって、シヴァの半身がパールヴァティーに与えられた。そのようなスマラ（カーマ）に打ち勝つことができる者は、世界において、制御できる者あるいは知者であっても、その２人（ブラフマーとシヴァ）以外にはいないだろう。〔なぜなら〕女性は性格が気まぐれ〔だからである〕。

Śiva-purāṇa :P 版（底本）、N 版、AITM 版（英訳）

2.1.ch.15.49-59（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

sanakādyāḥ sutā me hi mānasā brahmasaṃmitāḥ /

mahāvairāgyasaṃpannā abhavan pañca²⁴⁷ suvratāḥ //49//

まさに、私の心から生まれたサナカなどの 5 人の息子たちは、ブラフマンと同等であり、
良く戒を守る者たちであり、偉大なる無執着の者たちであった。

mayā jñaptā api²⁴⁸ ca te saṃsāravimukhā budhāḥ /

śivadyānaikamanaso na sṛṣṭo cakrire matim //50//

私によって指示されたにもかかわらず、それらの知者たちは世界²⁴⁹から顔を背けていた。
創造行為をせず、シヴァに対する瞑想に専心し、信仰していた。

pratyuttaraṃ ca tair dattaṃ śrutvāhaṃ²⁵⁰ munisattama /

akārṣaṃ krodham atyugraṃ moham āptaś ca nārada //51//

そして、私は彼らによってなされた返答を聞いて、非常に怒った。最高の聖者よ。ナー
ラダよ。そして困惑した。

kruddhasya mohitasyātha vihvalasya mune mama /

krodhena khalu netrābhyāṃ prāpatann aśrubimḍavaḥ²⁵¹ //52//

聖者よ。私が怒り、困惑し、動揺した時、まさにその時、怒りによって両目から涙の滴
りが落ちた。

tasminn avasare tatra smṛtena manasā mayā /

probodhito 'haṃ²⁵² tvaritam āgatena²⁵³ hi viṣṇunā //53//

その時、そこで、私が心で思ったので、急いでやって来たヴィシュヌによって、私は覚
醒させられた。

tapāḥ kuru śivasyeti hariṇā śikṣito 'py aham /

tapokārī mahadghoraṃ paramaṃ munisattama //54//

²⁴⁷ N 版では pañca となっている。

²⁴⁸ N 版では āpa となっているが、ここでは原文を採用した。

²⁴⁹ 世俗的なことを指す。英訳によると創造行為とある。

²⁵⁰ 原文では śrutvā 'haṃ となっている、これは śrutvā ahaṃ の連声を分かりやすく記述した
ものと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

²⁵¹ 原文では naśrubimḍavaḥ となっている。辞書[monier 1899]によると、vimḍu-という表記も
使われるが、bimḍu-という表記が通常とあるので、N 版の naśrubimḍavaḥ を採用した。

²⁵² N 版では probodhitoḥaṃ となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、
probodhito 'haṃ とした。

²⁵³ N 版では āgatenā となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、K 版の āgatena を
採用した。

私はまさにハリによって「シヴァへの苦行をなせ」と教えられた。最高の聖者よ。非常に過酷な最高の苦行した。

tapasyataś ca sṛṣṭyartham bhruvor ghrāṇasya²⁵⁴ madhyataḥ /

avimuktābhidhād²⁵⁵ deśāt svakīyān me viśeṣataḥ //55//

trimūrtinām maheśasya prādur āsīd ghrṇānidhiḥ /

arddhanārīśvaro²⁵⁶ bhūtvā pūrṇāmśaḥ²⁵⁷ sakaleśvaraḥ //56//

そして、創造のために苦行することによって、私の両眉と鼻の間にあるアヴィムクタ²⁵⁸ という名の場所（聖地）自身から、三神の〔うちの 1 人である〕マヘーシャの光の海が特別に現れ出た。〔それは、〕部分を完全にそなえた世界の神アルダナーリーシュヴァラになった²⁵⁹。

tamajaṃ śaṃkaraṃ sāksāt tejorāśim umāpatim²⁶⁰ /

sarvajñaṃ sarvakartāraṃ nīllohitasamjñakam //57//

dṛṣṭvā natvā mahābhaktyā stutvāham²⁶¹ tu praharṣitaḥ /

avocaṃ devadeveśaṃ sṛja tvam vividhāḥ prajāḥ //58//

かのアジャであり、シャンカラそのものであり、輝きの塊であり、ウマーの夫であり、全知者であり、全てを創造する者であるニーラローヒタと呼ばれる者を見て、敬礼し、大きなバクティによって崇め、私は非常に嬉しくなり、デーヴァデーヴェーシャ（神々の神の主）に言った。「あなたは、色々な種類の生類を創造しなさい。」

śrutvā mama vacaḥ²⁶² so 'tha²⁶³ devadevo maheśvaraḥ /

sasarja svātmanas tulyān rudro rudraṅgān bahūn²⁶⁴ //59//

さて、私の言葉を聞いて、かのデーヴァデーヴァ（神々の神）であり、マヘーシュヴァ

²⁵⁴ N 版では ghrāṇasya となっているが、言葉の意味を考え、英訳を参照し、原文の ghrāṇasya を採用した。

²⁵⁵ N 版では avimuktābhi dhād (分書) となっているが、英訳を参照し、原文の avimuktābhidhād を採用した。

²⁵⁶ N 版では ārdhanārīśvaro となっているが、言葉の意味を考え、英訳を参照し、原文の arddhanārīśvaro を採用した。

²⁵⁷ N 版では pūrṇāmśas となっている。

²⁵⁸ ヴァーラーナシーにある聖地の名前である。

²⁵⁹ 訳が複雑になってしまうため、文章を区切った。

²⁶⁰ 原文では upāpatim となっているが、英訳を参照し、N 版の umāpatim を採用した。

²⁶¹ 原文では stutvā 'ham となっている。これは stutvā aham の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

²⁶² N 版では vacas となっている。

²⁶³ N 版では sotha となっている。これはアヴァグラハ記号を省略しているものと考えられる。

²⁶⁴ N 版では bahūna となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、原文の bahūn を採用した。

ラであるルドラは、自分自身に良く似たたくさんのルドラの一団を創った。

2.1.ch.16.3-15ab (ブラフマー創造神話)

sṛṣṭyaṃ tāt aparāṃś cāpi nāhaṃ tuṣṭo 'bhavaṃ mune²⁶⁵ /

tato dhyātvā śivaṃ sām̐baṃ sādhaḥkān asṛjaṃ mune // 3 //

そして私は他の者たちを創造しても満足しなかった。聖者よ。そこで、アンバーを共なるシヴァを瞑想し、私はサーダカ（修行者）たちを創造した。聖者よ。

marīciṃ ca svanetrābhyāṃ hṛdayād bhr̥gum eva ca /

śirasō 'gīrasaṃ vyānāt pulahaṃ munisattamaṃ // 4 //

udānāc ca pulastyaṃ hi vasiṣṭhañ ca samānataḥ /

kratuṃ tv apānāc chrotrābhyāṃ atrīṃ dakṣaṃ ca prāṇataḥ // 5 //

asṛjaṃ tvāṃ tadotsaṃgāc chāyāyāḥ kardamaṃ munim /

saṃkalpād asṛjaṃ dharmāṃ sarvasādhanaśādhanaṃ // 6 //

マリーチを私の両目から、ブリグを心から、アングラスを頭から、聖者の最高者プラハをヴィヤーナから、プラスティヤをウダーナから、ヴァスィシュタをサマーナから、クラトゥをアパーナから、アトリを耳から、ダクシャをプラーナから、あなた（ナーラダ）を膝から、カルダマ仙を影から、私は創った。〔さらに〕私は、全てを成就させる手段であるダルマをサンカルパから創った。

evam etān ahaṃ sṛṣṭvā kṛtārthaḥ²⁶⁶ sādhaḥkottamān /

abhavaṃ muniśārdūla mahādevaprasādataḥ // 7 //

このように私はこれらの最高のサーダカたちを創り、マハーデーヴァの恩恵によって、満足した。聖者の最高者よ。

tato mad ājñayā tāta dharmāṃ saṃkalpasambhavaḥ /

mānavaṃ rūpaṃ āpannaḥ²⁶⁷ sādhaḥkais tu pravartitaḥ // 8 //

そして、私の命令によって、サンカルパから生まれたダルマは、人間の姿を得て、サーダカたちと共に動き始めた。愛しき者よ。

tato 'sṛjaṃ svagātrebhyo vividhebhyo 'mitān sutān /

surāsurādikāṃs tebhyo dattvā tām tām tanuṃ mune // 9 //

そして、私は自分の肢体の様々な部分から、神からアスラまでの無数の息子たちを、彼らにそれぞれの体を与えて創った。聖仙よ。

²⁶⁵ N 版では 'bhavamune となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、原文の 'bhavaṃ mune を採用した。

²⁶⁶ N 版では kṛtārthas となっている。

²⁶⁷ N 版では āpannas となっている。

tato 'haṃ śaṃkareṇātha prerito 'm̐tar gatena hi²⁶⁸ /

dvidhā kṛtvātmano dehaṃ dvirūpaś cābhavaṃ mune // 10 //

そして、それから、私は、私の中にいるシャンカラに促され、自身の体を 2 つにして、2 人の姿になった。聖者よ。

arddhena nārī puruṣaś cārdhena saṃtato mune /

sa tasyām asṛjad dvaṃdvaṃ sarvasāadhanam uttamam // 11 //

続けて、半身によって女性になり、半身によって男性になった。聖者よ。彼（男性半身）は、彼女（女性半身）において、全て〔を生み出す〕手段として最高の 2 人を創った。

svāyaṃbhavo manus tatra puruṣaḥ parasāadhanam /

śatarūpābhidhā nārī yoginī sā tapasvinī // 12 //

そこで、男性は最高の〔創造の〕手段であるスヴァーヤンブヴァになった。かの女性はシャタルーパーと呼ばれるヨーギニーであり、苦行者である。

sā punar manunā tena grhītātiva²⁶⁹ śobhanā /

vivāhavidhinā tātāsṛjat²⁷⁰ sargaṃ samaithunam // 13 //

さらに、結婚儀礼によって最高に吉祥な彼女（シャタルーパー）はかのマヌに受け入れられた。愛しき者よ。性交によって創造が起こった。

tasyām tena samutpannas tanayaś ca priyavrataḥ /

tathaivottānapādaś ca tathā kanyātrayaṃ punaḥ // 14 //

ākūtir devahūtiś ca prasūtir iti viśrutāḥ //15ab//

彼（マヌ）によって彼女（シャタルーパー）の中に家族が増え、プリヤヴラタとウッターナパーダ、更に 3 人の娘、アークーティ、デーヴァフーティ、プラスーティが生まれた。〔彼らは〕良く知られている。

2.2.ch.2.4-6²⁷¹

satī hi katham utpannā dakṣadāreṣu²⁷² śobhanā /

kathaṃ haro manaś cakre dārāharaṇakarmaṇi //4//

吉祥なサティーはまさにどのようにダクシャの妻に生まれたのか。ハラはどうして妻を

²⁶⁸ N 版では ha となっている。

²⁶⁹ N 版では grhītā tivā（分書）となっている。この語は恐らく動詞 **grah** の変化形であると考えられるが、不明である。英訳を参照し、「受け入れられた」とした。

²⁷⁰ N 版では tātā'sṛjat となっている、これは tātā asṛjat の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは K 版の tātāsṛjat を採用した。

²⁷¹ ブラフマーがナーラダにシヴァの吉祥な物語について質問している場面である。

²⁷² 原文では daśadāreṣu となっているが、英訳を参照し、N 版を採用した。

得ることを決心したのか。

katham vā dakṣakopena tyaktadehā satī purā /

himavattanayā jātā bhūyo vākāśam²⁷³ āgatā //5//

さらにサティーはどうして以前にダクシャへの怒りによって体を捨てたのか。〔どうして〕ヒマーラヤの娘として生まれたのか。さらに〔どうして〕天空に到着したのか。

pārvatyāś ca tapo 'tyugraṃ vivāhaś ca katham tv abhūt /

katham arddhaśarīrasthā babhūva smaranāśinaḥ //6//

どうしてパールヴァティーはとても厳しい苦行をしたのか。そして〔どのようにシヴァとパールヴァティーの〕結婚が〔なされたのか〕。どうして〔彼女は〕スマラナーシン（カーマを殺す者、シヴァ）の半身を占めるようになったのか。

2.2.ch.31.7

sā saty eva sadārādhyā sarvā pāpaphalapradā²⁷⁴ /

trilokamātā kalyāṇī śaṃkarārdhāṃgabhāginī //7//

かのサティーのみが常に崇められるべき者であり、全てであり、罪の結果を与える者であり、三界の母であり、安寧を与える者であり、シャンカラを半身として持つ者である。

2.2.ch.43.40

punaḥ kṛtvā tapas tatra śivaṃ vavre patiṃ ca sā /

gaurī bhūtvārdhāvāmāṃgī²⁷⁵ līlāś cakre 'dbhutāḥ śivā //40//

彼女は再び苦行をし、そしてそこでシヴァを夫として選んだ。白い〔肌〕になり、〔シヴァの〕左半身になったシヴァーは、素晴らしいリーラー（遊戯）をした。

²⁷³ 原文では vā 'kāśam となっている。これは vā ākāśam の連声を分かりやすく記述したもののと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

²⁷⁴ 原文では sarvapāpaphalapradā となっているが、韻律の関係上、N 版の sarvā pāpaphalapradā を採用した。

²⁷⁵ 原文では bhūtvā 'rdhāvāmāṃgī となっている。これは、bhūtvā arddhāvāmāṃgī の連声を分かりやすく記述したもののと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

2.3.ch.8.29-31

anayā kanyayā te 'dre arddhanārīśvaro²⁷⁶ haraḥ /

bhaviṣyati tathā harṣad inayor militam²⁷⁷ punaḥ //29//

山〔の神²⁷⁸〕よ。あなたのこの娘〔の半身を得ること〕によって、ハラはアルダナーリーシュヴァラになるであろう。そしてさらに喜んで、神と女神の一体化が〔なされるであろう〕。

śarīrārdham harasyaiśā hariṣyati sutā tava /

tapah prabhāvāt saṁtoṣya maheśam sakaleśvaram //30//

苦行の影響力によって、宇宙の主マヘーシャを崇め、お前のその娘はハラの半身を得るだろう。

svarṇagaurī suvarṇābhā²⁷⁹ tapasā toṣya tam haram /

vidyudgauratamā ceyam tava putrī bhaviṣyati //31//

金色に輝くスヴァルナガウリーは、苦行によって、かのハラを満足させ、そしてお前のこの娘は稲妻〔のごとく〕最高に白い〔肌〕となるであろう。

2.5.ch.49.17²⁸⁰

arddhanārīśvaram bhānum bhānukoṭīśataprabham /

yajñam yajñapatiṁ rudram īśānam varadam śivam //17//

半身が女性であるシヴァを、太陽である者を、10 億の太陽の輝きである者を、ヤジュニヤである者を、ヤジュニヤの主を、ルドラを、イーシャーナを、恩恵を与える者を、シヴァを〔瞑想していた〕。

²⁷⁶ N 版では arddhanārīśvaro となっている。

²⁷⁷ N 版では militam となっている。

²⁷⁸ 英訳を参照し補った。

²⁷⁹ N 版では surṇābhā となっているが、韻律や英訳を参照し、原文の suvarṇābhā を採用した。

²⁸⁰ ダーナヴァの王アンダカが苦行としてシヴァの 108 の姿を瞑想している場面である。その 108 の姿の 1 つにアルダナーリーシュヴァラが含まれている。

2.5.ch.59.24²⁸¹

tato vijñāya samjñāṃ tām sarvajñārdhāśarīṇī /

tenaiva kaṇḍukenātha yugapan nirjaghāna tau //24//

そして、全知者の半身を持つ者（パールヴァティー）は、その合図に気が付いて、まさにその鞠によって、彼ら 2 人を同時に打倒した。

3.ch.3.1-30（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

nandīśvara uvāca //

ナンディーシュヴァラは言った。

śṛṇu tāta mahāprājña vidhikāmaprapūrakam /

arddhanārīnarākhyam hi śivarūpam anuttamam //1//

愛しき者よ。偉大なる知者よ。創造主の〔世界創造の〕願いを叶える者であり、至高のアルダナーリーナラと呼ばれるシヴァの姿について聞きなさい。

yadā sṛṣṭāḥ prajāḥ sarvā²⁸² na vyavarddhamta vedhasā /

tadā cīṃtākuro 'bhūt sa tena duḥkhena duḥkhiṭaḥ //2//

創造主（ブラフマー）によって創造された全ての生類が繁栄しなかったので、心配した彼（ブラフマー）は、それゆえ非常に苦しんだ。

nabhovānī tadābhūd²⁸³ vai sṛṣṭim mithunajām kuru /

tac chrutvā maithunīm sṛṣṭim brahmā kartum amanyata //3//

その時、「夫婦から生み出す創造をなせ。」「という」天からの声があった。それを聞いて、ブラフマーは性交による創造をすることを考えた。

nārīṇām kulam īśānān nirgataṃ na purā yataḥ /

tato maithunajām sṛṣṭim kartum śeke na padmabhūḥ //4//

〔それ〕以前には、イーシャーナから生じた女性たちの系譜はなかった所以、蓮から生まれた者は、性交から生み出す創造をすることができなかった。

prabhāveṇa vinā śambhor na jāyerann imāḥ prajāḥ /

²⁸¹ 2 人のダイトゥヤがパールヴァティーを誘拐しようと企むという物語である。最初に、シヴァの命令を受け、ナーラダがダイトゥヤの住処へ行き、パールヴァティーの美しさを讃える讃歌を唱えた。ヴィダラとウトゥパラがカーマに惑わされ、女神を誘拐しようと考えた。ある時、シヴァが遊んでいるところで、パールヴァティーはボール遊びをしていた。ヴィダラとウトゥパラは、シヴァの従者のふりをして近づいたが、目つきが異常だったので、すぐにシヴァが気が付き、パールヴァティーに目で合図をした。

²⁸² N 版では prajāsarvāḥ となっている。翻訳はほぼ同じである。

²⁸³ 原文では tadā 'bhūd となっている。これは tadā ābhūd の連声を分かりやすく記述したもののと思われる。ここでは N 版の tadābhūd を採用した。

evaṃ saṃcintayan brahmā tapaḥ karttuṃ pracakrame //5//

「シャンブの創造力なしには、これらの生類は生まれないだろう。」そのように考えたブラフマーは、苦行をし始めた。

śivayā²⁸⁴ parayā śaktyā saṃyuktaṃ parameśvaram /

saṃcintya hṛdaye prītyā tepeśaṃ²⁸⁵ paramaṃ tapaḥ //6//

最高のシャクティであるシヴァーと結合したパラメーシュヴァラを、心の中で喜んで考え、〔ブラフマーは〕主（シヴァ）に対し最高の苦行をした。

tīvreṇa tapasā tasya saṃyuktasya svayambhavaḥ /

acireṇaiva kālena tutoṣa sa śivo drutam //7//

かのスヴァヤンブーが、厳しい苦行に専念していたので、すぐさま、かのシヴァ神は満足した。

tataḥ pūrṇacidīśasya mūrtim āviśya kāmādām /

arddhanārīnaro bhūtvā tato brahmāntikaṃ haraḥ //8//

そこで、全知の神が願いを叶える姿をとって、ハラはアルダナーリーナラとなり、ブラフマーに近づいた。

taṃ dṛṣtvā śaṃkaraṃ devaṃ śaktyā paramayānvitam²⁸⁶ /

praṇamya daṇḍavad brahmā sa tuṣṭāva kṛtāñjaliḥ //9//

最高のシャクティ（シヴァー）と結合したかのシャンカラ神を見て、かのブラフマーは五体投地の礼をして、合掌して賞賛した。

atha devo mahādeva vācā meghagabhīrayā /

saṃbhavāya saṃprīto viśvakarttā maheśvaraḥ //10//

そこで、マハーデーヴァであり、マヘーシュヴァラである世界の創造神（シヴァ）は、創造（アルダナーリーナラとして生まれたこと）に大喜びし、轟く雷鳴の〔ような〕声で、〔言った〕。

īśvara uvāca //

イーシュヴァラは言った。

vatsa vatsa mahābhāga mama putra pitāmaha /

jñātavān asmi sarvaṃ tat tat tvatas te manoratham //11//

「愛しき者よ。最高の幸運よ。私の息子であり、ピターマハよ。汝から〔生じた〕汝の心の中にある願いをあれもこれも全て理解した。

²⁸⁴ 原文では śivāya となっている。韻律上はどちらでも良く、意味上でもどちらでも不自然ではないが、ここでは英訳を参照し、N 版の śivayā を採用した。

²⁸⁵ N 版では tepe sa となっている。この場合、訳は「彼は最高の苦行をした」となる。

²⁸⁶ N 版では pramayānvitam となっている。この場合、翻訳は「吉祥なるシャクティと結合したかのシャンカラ神を見て」となる。ここでは英訳を参照し、原文の paramayānvitam を採用した。

prajānām eva vṛddhyartham tapas taptam tvayādhunā²⁸⁷ /

tapasā tena tuṣṭo 'smi dadāmi ca tavepsitam //12//

ity uktvā paramodāram svabhāvamadhuram vacaḥ /

pṛthak cakāra vapuṣo bhāgād devīm śivām śivaḥ //13//

今まさに、生類の繁栄のためにあなたによって苦行がなされた。その苦行に私は満足したので、あなたの望むものを与えよう。」と、最高に慈悲深い自然で甘美な言葉を述べた。シヴァは、吉祥な体からシヴァー女神を別にした。

tām dṛṣṭvā paramām śaktim pṛthagbhūtām śivāgatām /

praṇipatya²⁸⁸ vinitātmā prārthayāmāsa tām vidhiḥ //14//

別になったかの最高のシャクティであるシヴァーを見て、創造者（ブラフマー）は、尊敬を込めて礼をし、彼女に願った。

brahmovāca //

ブラフマーは言った。

devadevena sṛṣṭo 'ham²⁸⁹ ādau tvatpatinā śive /

prajāḥ sarvā niyuktās ca śaṃbhunā paramātmanā //15//

私は、初めにあなたの夫である神々の神によって創られた。シヴァーよ。そして、最高の魂を持つシャンブによって、全ての生類を〔創るように〕命じられた。

manasā nirmīṭaḥ sarve śive devādayo mayā /

na vṛddhim upagacchānti sṛjyamānāḥ punaḥ punaḥ //16//

シヴァーよ。神々など全てのものが私によって心で〔念想し〕創られた。〔しかし〕彼らは、繁栄しなかったので、〔私によって〕繰り返し創造された。

mīthunaprabhavām eva kṛtvā sṛṣṭim atah param /

saṃvaddhayitum icchāmi sarvā eva mama prajāḥ //17//

これ以降、私は、夫婦から生じる創造をして、私の全ての生類が繁栄することを願った。

na nirgataḥ purā tvatto nārīṇām kulam avyayam /

tena nārīkulaḥ śreṣṭhaḥ mama śaktir na vidyate //18//

以前、あなたから女性たちの途切れない系譜は生じなかった。それ故に、最高の女性の系譜を〔創る〕私のシャクティは知られていなかった。

sarvāsām eva śaktīnām tvattaḥ khalu samudbhavaḥ /

tasmāt tvām²⁹⁰ paramām śaktim prārthayāmy akhileśvarīm //19//

実に、全てのシャクティはあなたから生じる。それ故に、最高のシャクティであり、全

²⁸⁷ 原文では tvayā 'dhunā となっている。これは tvayā adhunā の連声を分かりやすく記述したものである。ここでは N 版の tvayādhunā という表記を採用した。

²⁸⁸ 原文の印刷が不鮮明だったので、英訳と N 版を参照し、praṇipatya とした。

²⁸⁹ N 版では sṛṣṭoham となっている。これはアヴァグラハ記号を省略したものと思われる。

²⁹⁰ N 版では tvām となっている。英訳を参照し、原文の tvām を採用した。

存在の女神であるあなたに願う。

śive nārīkulaṃ sraṣṭuṃ śaktiṃ dehi namo 'stu te /

carācaram jagadviddihetor²⁹¹ mātāḥ śivam priye //20//

シヴァーよ。動くものや動かないものを創る女性の系譜〔を得るための〕シャクティを与えたまえ。あなたに敬礼する。世界創造の原因である母よ。シヴァの最愛の者よ。

anyam tvattaḥ prārthayāmi varam ca varadeśvari /

dehi me tam kṛpām kṛtvā jaganmātar namo 'stu te //21//

そして、恩恵を授ける女神よ。私はあなたから〔もう 1 つ〕他の恩恵を願う。私に、憐れみを示し、それ（恩恵）を与えたまえ。世界の母よ。あなたに敬礼する。

carācaravivṛddhyartham īśenaikena sarvage /

dakṣasya mama putrasya putrī bhava bhavāmbike //22//

遍在する母よ。イーシャ 1 人と一緒になって、動くものや動かないものを繁栄するために、我が息子ダクシャの娘となれ。〔全〕存在の母よ。

evam saṃyācitā devī brahmaṇā parameśvarī /

tathāstv iti vacaḥ procya tac chaktiṃ vidhaye dadau //23//

このように、ブラフマーによって懇願されたパラメーシュヴァリー女神（シヴァー）は、「そのようにあれ。」という言葉述べ、そのシャクティを創造者（ブラフマー）に与えた。

tasmādd hi sā śivā devī śivaśaktir jaganmayī /

śaktim ekāṃ bhruvor madhyāt sasarjātmasamaprabhām //24//

それから、シヴァのシャクティであり、世界を内包するかのシヴァー女神は、眉の間から、自身に等しい輝きを持つ 1 つのシャクティを創った。

tām āha prahasan prekṣya śaktiṃ devavaro haraḥ /

kṛpāsindhur maheśāno līlākārī bhavāmbikām //25//

神々の中で最も優れた者であり、慈悲の海であり、偉大なイーシャーナであり、遊戯をなす者であるハラは、全存在の母であるかのシャクティ（シヴァー）を見て、微笑みながら言った。

śiva uvāca //

シヴァは言った。

tapasārādhitā devī brahmaṇā parameṣṭhnā /

prasannā bhava supṛityā kuru tasyākhilepsitam //26//

女神よ。パラメーシュティンであるブラフマーによって、〔あなたは〕苦行で創られた。〔それに〕満足せよ。喜んで彼の全ての願いをなせ。

tām ājñam parameśasya śirasā pratigṛhya sā /

²⁹¹ 原文は jagadviddhi hetor（分書）となっているが、N 版の jagadviddhihetor（連書）を採用した。

brahmaṇo vacanād devī dakṣasya duhitābhavat²⁹² //27//

かの女神は、最高神（ブラフマー）のその願いを、頭を〔下げて〕受け入れ、ブラフマーの言葉に従って、ダクシャの娘になった。

dattvaivam atulāṃ śaktiṃ brahmaṇo sâ śivā mune /

viveśa dehaṃ śambhor hi śambhuś cāntardadhe prabhuḥ //28//

聖者よ。かのシヴァーはこのように、比類なきシャクティをブラフマーに与えて、シャンブの体に入った。そしてシャンブ神は消えた。

tadā prabhṛti loke 'smin striyā bhāgaḥ prakalpitaḥ /

ānandaṃ prāpa sa vibhiḥ sṛṣṭir jātā ca maithunī //29//

それ以来、この世界では、女性によって〔引き受けられた〕部分（存在）が創られた。かの創造主（ブラフマー）は喜びを得た。そして、創造は性交から起こるようになった。

etat te kathitaṃ tāta śivarūpaṃ mahottamam /

arddhanārīnarārdhaṃ hi mahāmaṅgaladaṃ satām //30//

愛しき者よ。この最高に偉大なシヴァの姿であり、徳のある者たちに大きな吉祥を与える、半身が女性で半身が男性の者〔のこと〕があなたに語られた。

3.ch.15.44-47²⁹³

unmīlya netrakamale supte iva dinakṣaye /

apaśyad agre cotthāya śambhum arkaśatādhikam //44//

夜には眠りについていた蓮の目を持つ者²⁹⁴が〔その蓮のように、その目を〕開けて、そしてまず最初に起き上がり、百の太陽よりも〔輝いている〕シャンブを見た。

bhāle locanam ālokya kaṇṭhekālaṃ vṛṣadhvajam /

vāmāṅgasanniviṣṭādrītanayaṃ candraśekharam //45//

kaparddhena virājaṃtaṃ trīśūlājagavāyudham /

sphuratkarṇpūragaurāṃgaṃ pariṇaddhagajājīnam //46//

parijñāya mahādevaṃ guruvākyata āgamāt /

harṣabāspākulāsannakaṇṭharomāñcakañcukaḥ //47//

額に〔3つ目の〕目があり、黒い首をしており、吉祥な印を持っており、体の左側に山の娘を座らせ、月を頭につけ、蓬髪によって輝き、三叉戟やアジャガヴァの弓といった

²⁹² 原文では duhitā 'bhavat となっている。これは duhitā abhavat の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N 版の duhitābhavat という表記を採用した。

²⁹³ グリハパティはインドラに恩恵をたずねられても、シヴァから恩恵をもらうからとして、拒否した。それに対しインドラが怒り、ヴァジュラを落としたため、グリハパティは気絶した。そこへシヴァが現れ、グリハパティに起きるように促した。以下、翻訳部分である。

²⁹⁴ ヴィシュヴァーナラとシュチシュマティーの息子であるグリハパティのこと。

武器を持ち、樟脳〔のように〕輝く白い肢体を持ち、ゾウ皮で〔身を〕包む者を見て、
〔グリハパティは〕アーガマからの師の言葉によって、〔この者が〕マハーデーヴァだと認識し、〔彼は〕喜びによって涙で目が霞み、喜びによって頭の方まで毛が逆立った。

4.ch.1.1

yo dhatte nijamāyayaiva²⁹⁵ bhuvanākāraṃ vikārojjhito yasyāhuḥ karuṇākāṭākṣavibhavau
svargāpavargābhidhau²⁹⁶ /

pratyagbodhasukhād vyaṃ hr̥di sadā paśyanti yaṃ yoginaḥ²⁹⁷ tasmai

śailasutāñcitārddhavapuṣe śaśvan namas tejase //1//

まさに自分のマーヤーによって世界の姿を取る者であり、変容から免れている者であり、その者の憐れみの視線の力を〔人々が〕天界と解脱²⁹⁸の名称で呼ぶところの者であり、我々ヨーガ行者が内的な理解の喜びから、心の中で常に見つめている者であり、半分か山の神の娘であるという美しい姿に特色付けられた者である、輝く者に常に敬礼する。

4.ch.22.4

sa eva hi dvijo²⁹⁹ jātaḥ puṃstrīrūpaprabhedataḥ /

yaḥ puṃān sa śivaḥ khyātaḥ strīśaktiḥ sā hi kathyate //4//

まさにかの者こそが、男女の姿に分裂することによって二者となった。その男性はシヴァと呼ばれ、彼女は女性のシャクティと呼ばれる。

5.ch.29.16-ch.30.5（ブラフマー創造神話）

marīcim atyaṃgirasau pulastyam plahaṃ kratum /

²⁹⁵ 原文では nijamāyāyaiva だが、英訳を参照し、N 版の nijamāyayaiva を採用した。

²⁹⁶ N 版では svargāpavarggābhidhau となっている。

²⁹⁷ N 版では yoginas となっている。

²⁹⁸ 「天界と解脱 (svargāpavarga)」という言葉は、*Yoga-sūtra* 2.18 に示される bhogāpavarga（享受と解脱）という用語を模している可能性がある。そして、シヴァの svarga（天界）と apavarga（解脱）は、シヴァ派にとっての究極の目的と考えられているため、その意を示していることも考えられる。

²⁹⁹ N 版では dvidhā となっている。その場合、訳は「まさにかの者こそが、男女の姿に分裂することによって二様になった。」である。

vasiṣṭhaṃ tu mahātejāḥ³⁰⁰ so 'srjat sapta mānasān //16//

そしてかの偉大な輝きを持つ者（ブラフマー）は、マリーチとアトリ、アンギラス、プラスチック、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタという 7 人の心から生まれた者たちを創った。

sapta brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ /

tato 'srjat punar brahmā rudrān krodhasamudbhavān //17//

彼らはプラナ聖典において 7 人のブラフマーと定められている。そしてさらにブラフマーは怒りから生じたルドラたちを創った。

sanatkumāraṃ ca ṛṣiṃ sarveṣāṃ api pūrvajam /

sapta caite prajāyaṃte paścād rudrāś ca sarvataḥ //18//

それから、皆の年長者である聖仙サナトクマーラを〔創った〕。そしてこの（前述の）7 人を創った。その後、色々な場所にルドラたちが〔生まれた〕。

ataḥ³⁰¹ sanatkumāras tu tejāḥ³⁰² saṃkṣīpya tiṣṭhati /

teṣāṃ sapta mahāvamśā divyā devaṛṣipūjītāḥ //19//

こうしてサナトクマーラは輝きを凝集して留まった。彼ら³⁰³の 7 つの神的な偉大なヴァンシヤはデーヴァルシ（神仙）に崇められた。

prajāyante kriyāvanto maharṣibhir alaṃkṛtāḥ /

vidyuto 'śanimeghaṃś ca rohitendradhanūṃṣi ca //20//

マハルシ（偉大な聖仙）たちによって讃えられた儀礼の執行者たちは、稲光と稲妻を伴う雲と虹を創った。

payāṃsi ca sasarjādau parjanyaṃ ca sasarja ha /

ṛco yajūṃṣi sāmāni nirmame yajñasiddhaye //21//

そして、まず、水を創った。さらに雨（雨雲）を創った。ヤジュニヤを成就するために、リグとヤジュスとサーマンを創った³⁰⁴。

pūjyāṃs tair ayajan devān ity evaṃ anuśūruma /

mukhād devān ajanayat pītṛṃś caivātha vakṣasaḥ /

prajanāc ca manuṣyān vai jaghanān nirmame 'surān //22//

〔彼らは〕それら（リグとヤジュスとサーマン）によって信仰されるべき神々を崇めた。そのように〔私たちが〕聞いている。そして口から神々を創り、同様に胸からピトリ（先祖）を〔創った〕。さらに受胎によって人々を〔創り〕、そして臀部からアスラを創った

³⁰⁰ N 版では mahātejās となっている。

³⁰¹ N 版では atas となっている。

³⁰² N 版では tejas となっている。

³⁰³ マリーチ、アトリ、アンギラス、プラスチック、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタの 7 人のことである。

³⁰⁴ 創造者が明記されていない。これまでに名の挙げた人物の内の 1 人と考えるか、集合的に 7 人のブラフマーを単数形で表しているか、どちらかである。

uccāvacāni bhūtāni gātrebhyas tasya jajñire /

āpavasya prajāśargam sṛjato hi prajāpateḥ //23//

創造主アーパヴァ³⁰⁶が生類創造を行なった時、高き者や低き者たちは彼の手足から生まれた。

sṛjyamānāḥ prajāś caiva nāvarddhanta yadā tadā³⁰⁷ /

dvidhā kṛtvātmano dehaṃ strī caiva puruṣo 'bhavat //24//

創造された生類たちが繁栄しなかったので、〔ブラフマーは〕自身の体を 2 つにしてまさに男と女になった。

sasṛje 'tha prajāḥ³⁰⁸ sarvā mahimnā vyāpya viśvataḥ /

virājam asṛjad viṣṇuḥ³⁰⁹ sa sṛṣṭaḥ puruṣo virāt //25//

それから〔ブラフマーは〕全ての生類を創った。偉大さによってあらゆるところに満ちて、ヴィシュヌはヴィラージュを創った。ヴィラージュはかの創られたプルシャである。

dvitīyaṃ taṃ manuṃ viddhi manor antaram eva ca /

sa vairājaḥ prajāḥ³¹⁰ sarvāḥ³¹¹ sasarja puruṣaḥ prabhuḥ //26//

次のかの〔者〕を、まさにマヌの他のマヌであると知るべきである。かのヴァイラージャであるプルシャ神は、全ての生類を創った。

nārāyaṇavisargasya prajāś tasyāpy ayonijāḥ /

āyusmān kīrtimān dhanyaḥ prajāvāṃś cābhavat tataḥ //27//

かのナーラーヤナの創造においては、生類たちは子宮から生まれたのではなかった。そこから〔創造されたものは〕長寿であり、有名であり、祝福された者であり、子たくさんになった。

³⁰⁵ ここも創造者が明記されていない。

³⁰⁶ *Purāṇic Encyclopaedia* や主要な辞書ではアーパヴァはヴァスィシュタとされている。実際に、16 偈においてヴァスィシュタが創造されているので、そのようにとらえることは不可能ではない。しかし、後述の 30 章 1 偈に登場するアーパヴァはプルシャ（スヴァーヤンブヴァ・マヌ）と明記されている。そのため、ここに出てくるアーパヴァがヴァスィシュタでなくスヴァーヤンブヴァ・マヌである可能性も否定できない。英訳によると、「アーパヴァは水生生物の創造を行なっている時に、」と記述されているが、この根拠はアーパヴァが āpa（水）の派生語の可能性があるということからと推測される。

³⁰⁷ 原文では yadā となっている。この場合、「何度も何度も創造された生類たちが増えなかった」ことになり、意味的に不可解な点があるので、N 版を採用した。ちなみに、ほぼ平行句である *Brahma-p.1.52* でも tadā となっている。

³⁰⁸ N 版では prajāś となっている。

³⁰⁹ N 版では viṣṇus となっている。

³¹⁰ N 版では prajāś となっている。

³¹¹ N 版では sarvās となっている。

sūta uvāca//

スータは言った。

saṃsṛṣṭāsu prajāsv eva āpavo 'tha prajāpatiḥ /

leme vai puruṣaḥ patnīm śatarūpām³¹² ayonijām //1//

そして生類が創造された時、アーパヴァである創造主プルシャは、子宮から生まれたのではない妻シャタルーパーを楽しんだ。

āpavasya mahimnā tu divam āvṛtya tiṣṭhataḥ /

dharmenaiva mahātmā sa śatarūpāpy³¹³ ajāyata //2//

偉大さによって天を覆い、アーパヴァが留まっている時に、かのマハートマン（偉大な魂³¹⁴）はまさにダルマによってシャタルーパーになった。

sā tu varṣaśataṃ taptvā tapaḥ paramaduścaram /

bhartāraṃ dīptatapasam puruṣam pratyapadyata //3//

彼女は、100年の間、最高に困難な苦行を行ない、熱烈な苦行を〔している〕プルシャを夫として得た。

sa vai svāyaṃbhuvo jajñe puruṣo manur ucyate /

tasyaikasaptatiyugaṃ manvaṃtaram ihocyate //4//

かのスヴァーヤンブヴァが生まれた。〔その〕プルシャはマヌと呼ばれている。彼の71ユガをこの世ではマヌヴァンタラと呼ぶ。

vairājāt puruṣād dhīrā³¹⁵ śatarūpā vyajāyata /

priyavratottānapādau vīrakāyau³¹⁶ ajāyatām //5//

知的なシャタルーパーはヴァイラージャであるプルシャから〔プリヤヴラタとウッターナパーダを〕もうけた。〔彼女から〕プリヤヴラタとウッターナパーダという強靱な肉体を持つ者たちが生まれた。

6.ch.4.26-31

paṃcīkaraṇam uccārya bhāvayet svagurum budhaḥ /

³¹² 原文では śatarūpam となっているが、語形変化と性の一致を考慮し、N版の śatarūpām を採用した。

³¹³ 原文では śatarūpā 'py となっている。これは śatarūpā apy の連声を分かりやすく記述したものである。ここではN版の表記を採用した。

³¹⁴ ここではアーパヴァのことを指すと思われる。

³¹⁵ N版では vīrā となっており、その場合の訳は「力強いシャタルーパーはヴァイラージャであるプルシャから生まれた。」となる。

³¹⁶ 宮本久義教授の意見、および英訳を参照し、男性・両数が適切であると判断し、原文、N版共に vīrakāyām であるところを、vīrakāyau に訂正した。

vakṣyamāṇaprakāreṇa prāṇāyāmān³¹⁷ ṣaḍ ācāret //26³¹⁸//

nābhau bāhvoh³¹⁹ samdhiṣu ca prṣṭhe³²⁰ caiva yathākramam /

prakṣālya hastau ca tato dvir ācamya yathāvidhi //27//

dakṣahastena samgrhya jalam vāmena pāṇinā /

samācchādya dviṣadvāram praṇavenābhimaṁtrayet //28//

パンチーカラナ³²¹ [のマントラ] を唱えて、知者（行者）は、自分の師を〔想起するべし〕。〔今から〕述べる方法によって、〔行者〕は 6 つのプラーナーヤマ（ヨーガの呼吸法）を行うべし。まさに臍と腕と関節と背中において、順番通りに〔触れ³²²〕、そして両手を洗い、儀軌に従って 2 度浄化のために口をすすぎ、右手で水をすくい、左手で覆って、12 回プラナヴァ（聖音、オーム）を唱えるべきである。

evam trivāram samprokṣya śirasi triḥ pibet tataḥ /

samāhitena manasā dhyāyann omkāram īśvaram //29//

sauramaṇḍalamadhyastham sarvatejomayaṁ param /

aṣṭabāhuṁ caturvaktram arddhanārīkam³²³ adbhutam //30//

sarvāś caryaguṇopetaṁ³²⁴ sarvālaṁkāraśobhitam /31ab

同様に、聖音オームであり、太陽の円の中心に立っており、全ての輝きから成っており、最高の者であり、8 本の腕を持っており、4 つの顔を持っており、半身が女性の姿をしており、不可思議な者であり、全ての驚愕すべき特徴をそなえた者であり、あらゆる装飾で飾られているイーシュヴァラを瞑想することを心に留めながら、3 回頭に振り撒き、そして 3 回飲むべきである。

evam dhyātvātha³²⁵ vidhivad dadyād arghyatrayaṁ tataḥ //31cd//

このように儀軌に従って瞑想し、それから 3 つのアルギヤ（客人歓待のための清めの水）

³¹⁷ 原文では prāṇāyāmān だが、英訳を参照し、N 版の prāṇāyāmān を採用した。

³¹⁸ N 版では 26 偈と 27 偈が逆順になっている。英訳を参照し、原文を採用した。

³¹⁹ N 版では bāhvauḥ となっているが、言葉が不明であるため、原文の bāhvoh を採用した。

³²⁰ N 版では prṣṭha となっているが、英訳を参照し、原文の prṣṭhe を採用した。

³²¹ 原義は 5 つとなることである。『ヴェーダーンタ・サーラ：原文対訳』[中村 1962 p. 55]によると「さて五分の結合（pañcikaṇḍa）とは、まず虚空など（虚空・風・火・水・地）五つ（の微細な元素）の一つ一つを、平等に二分し、次に（かくして生じた）十の部分のうち最初の五つの部分の一つ一つ四箇ずつに平等に分割し、そのうちそれらのそれぞれ四箇（の小部分）が各自の他の部分を捨てて、（他の元素の）他の部分と結合することである。」となっている。

³²² 英訳を参照し補った。

³²³ N 版では arddhanārīmakam となっているが、言葉の意味が不明であることと韻律の関係から、原文の arddhanārīkam を採用した。

³²⁴ N 版では caryaguṇopetaṁ となっている。

³²⁵ 原文では dhyātvā 'tha となっている。これは dhyātvā atha の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

を与えるべし³²⁶。

6.ch.6.21-24

niruddhaprāṇa āsīno mūlenaiva svamūlataḥ /

śaktim utthāpya tattejaḥprabhāvāt piṅgalādhvanā //21//

puṣpāṃjalau nirgamayya maṇḍalasthasya bhāsvataḥ /

sindūrāruṇadehasya vāmārdhadayitasya ca //22//

akṣasrakpāśakhaṭvāṅgakapālāṃkuśapaṃkajam /

śaṃkhaṃ cakram dadhān asya caturvaktrasya locanaiḥ //23//

rājitasya dvādaśabhis tasya hṛtpaṃkajodare /

praṇavam pūrvam uddhṛtya hrāmhrīmsas³²⁷ tad anantaram //24//

自身のムーラ³²⁸からその根源（ムーラ）と共に〔その〕気を制御して座っている〔行者〕は、その輝きの力によって、ピンガラ管の通路によって、シャクティを花々が満たされた手に引き上げて、マンダラに立つ輝く者であり、体が辰砂の色のように赤くなっている者であり、左半〔身〕が妻である者であり、ルドラクシャ³²⁹の首輪と索縄とカトヴァーンガ（こん棒）とカパーラ（頭蓋骨）とアंकシャ（鉤棒）と睡蓮とほら貝とチャクラを持つ者であり、4つの顔を持つ者であり、12の目を持つ輝く者である彼の心の蓮の中に、最初にプラヴァナ（聖音オーム）を唱え、その後、hrām と hrīm と sah を〔唱えるべきである〕。

6.ch.13.52-56

iyam bhagavatī sāksāc chaṃkarārdhāsarīriṇī//

pañcavaktrā daśabhujā tripañcanayanojjvalā//52//

眼前にいるこの吉祥なる者はシャンカラを半身として持つ者である。〔彼女は〕5つの

³²⁶ 与える対象に関して、原文でも英訳でも記述されていないが、これはシヴァに対する儀礼の一部なので、恐らくシヴァに対して捧げていると思われる。

³²⁷ 原文では hrāmhrīsas となっているが、英訳を参照し、N版の hrāmhrīmsas を採用した。

³²⁸ ムーラダーラチャクラ（会陰部の辺りにあるチャクラ）のことと思われる。

³²⁹ ルドラクシャとはホルトノキ科ジュズボダイジュの種子のこと。「ルドラクシャは主神シヴァ自身であり、シヴァ、またはルドラがひじょうに大切にしているもの」[西岡 1996 p. 50]であり、「神聖で、縁起の良いものとされ、ただ触れただけでも罪は魔術のように洗われてしまうし、それを見ただけでもたいへんな御利益があり、不幸の兆しのある人からは、それがとり除かれる」[同上 p. 50]ものである。一般的に数珠にされ儀礼においてマントラを唱える際に使われる。

顔を持ち、10 の腕を持ち、15 の輝いた目を持つ。

navaratnakirīṭodyaccandralekhāvatamṣinī//

śuddhasphaṭikasamkāśā daśāyudhadharā³³⁰ śubhā//53//

〔彼女は〕9つの宝石の冠とその頂〔の上〕に昇っている三日月を付けており、純粋な水晶のようであり、10の武器を持った吉祥な者である。

hārakeyūrakaṭakakimṇiṇūpurādibhiḥ//

bhūṣitāvayavā divyavasanā ratnabhūṣaṇā//54//

〔彼女は〕真珠の首飾りと上腕につける腕輪と腕輪とアンクレット（足首につける鈴）とアンクレットなどによって四肢が飾られており、神々しい衣裳〔を身につけた〕者であり、宝石で飾られた者である。

viṣṇunā vidhinā devaṛṣigandharvanāyakaiḥ³³¹//

mānavaiś ca sadā sevyā sarvātmavyāpinī³³² śivā//55//

ヴィシュヌやヴィディ（ブラフマー）、神々、聖仙、ガンダルヴァの長たちや人間たちによって、〔彼女は〕常に従われており、全てのアートマンに遍住している者であり、シヴァーである。

sadāśivasya devasya dharmapatnī manoharā//

jagadambātrījananī³³³ triguṇā nirguṇāpy ajā//56//

〔彼女は〕サダーシヴァ神の妻であり、心を魅了する者であり、世界の母であり、三界の母であり、トリグナを持たないにもかかわらずトリグナを持ち、不生の者である。

6.ch.15.4ab

māyāśaktiyuto vāme sakalaś ca kriyādhikaḥ /4ab

マーヤーシャクティを左側に持つサカラは、活動性を有している。

6.ch.15.12ab

gaurīśaktiyuto vāme sarvasaṃhārakṛtprabhuḥ /12ab

ガウリーシャクティを左側に持つ者は、世界を崩壊させる神である。

³³⁰ N版では dayāyudhadharā となっており、この場合の訳は「慈悲の武器を持った者」となる。

³³¹ N版では devaṛṣigaṃdharvvanāyakaiḥ となっている。

³³² N版では sarvvātmavyāpinī となっている。

³³³ 原文では jagadambātrījananī（連書）であるが、英訳を参照し、N版の jagadambā trījananī（分書）を採用した。

6.ch.15.22ab

ramāśaktiyuto vāme sarvarakṣākaro³³⁴ mahān /22ab

ラマー（ラクシュミー）シャクティを左側に持つ全ての守護者は、偉大な者である。

6.ch.15.31ab

vāgdevīśahito vāme sṛṣṭikarttā jagatprabhuḥ /31ab

左側に言葉の女神を左側に持つ創造者は、世界の神である。

7.1.ch.15.16-33

brahmovāca //

ブラフマーは言った。

jaya deva mahādeva jayeśvara maheśvara /

jaya sarvagūṇaśreṣṭha³³⁵ jaya sarvasurādhipa //16//

勝利あれ。神よ。マハーデーヴァよ。勝利あれ。イーシュヴァラよ。マヘーシュヴァラよ。勝利あれ。全ての美德を持つ最上者よ。勝利あれ。全ての神々の主よ。

jaya prakṛti kalyāṇi jaya prakṛtināyike /

jaya prakṛtidūre tvam jaya prakṛtisundari //17//

勝利せよ。安寧をもたらすプラクリティよ。勝利せよ。女主人であるプラクリティよ。勝利せよ。プラクリティを超越した女性³³⁶よ。あなたは勝利せよ。美しいプラクリティよ。

jayāmoghamahāmāya jayāmoghamanoratha /

jayāmoghamahālīla jayāmoghamahābara //18//

勝利せよ。果をもたらすマハーマーヤ³³⁷（偉大なる幻想）よ。勝利せよ。果をもたらすマノーラタ（心の喜び）よ。勝利せよ。果をもたらすマハーリーラ³³⁸（素晴らしい遊戯）

³³⁴ 原文では savarakṣākaro となっているが、英訳を参照し、N 版の sarvarakṣākaro を採用した。

³³⁵ N 版では sarvagūṇa śreṣṭha（分書）となっているが、英訳を参照し、原文を採用した。

³³⁶ この語には「女性」を示す言葉は含まれていない。しかし、この一連の讃歌において、女神（女性）を指す言葉と神（男性）を指す言葉が混在しているため、その相違を明確にするべく、これ以下、女神に関する言葉において「女性」と記述する。

³³⁷ 言葉の意味、および英訳を参照し、マハーマーヤーの男性形と考えた。

³³⁸ 言葉の意味、および英訳を参照し、マハーリーラーの男性形と考えた。

よ。勝利せよ。果をもたらすマハーバラ（偉大な力）よ。

jaya viśvajaganmātar jaya viśvajaganmaye /

jaya viśvajagaddhātri jaya viśvajagatsakhi //19//

勝利せよ。全世界の母よ。勝利せよ。全世界を構成する女性よ。勝利せよ。全世界を創る女性よ。勝利せよ。全世界に寄り添う女性よ。

jaya śāśvatikaiśvarya jaya śāśvatikālaya /

jaya śāśvatikākāra jaya śāśvatikānuga //20//

勝利せよ。永遠なる主よ。勝利せよ。永遠なる住処よ。勝利せよ。永遠なる姿よ。勝利せよ。永遠なる信者よ³³⁹。

jayātmatrayanirmātri jayātmatrayapālīni /

jayātmatrayasamhartri jayātmatrayanāyike //21//

勝利せよ。3つのアートマンを創造する女性よ。勝利せよ。3つのアートマンを維持する女性よ。勝利せよ。3つのアートマンを破壊する女性よ。勝利せよ。3つのアートマンの女主人よ。

jayāvalokanāyatta jagatkāraṇabṛṃhaṇa³⁴⁰ /

jayopekṣākāṭākṣoṭthahutabhugbhuktabhautika //22//

勝利せよ。〔世界の〕照覧に依拠する者よ。世界の原因を促す者よ。勝利せよ。放棄する視線によって生まれた炎によって全世界を享受する者よ。

jaya devādyavijñeeye svātmasūkṣmadṛṣojjvale /

jaya sthūlātmaśaktyeśe jaya³⁴¹ vyāptacarācare //23//

勝利せよ。神々を始めとした者たちには把握しえない女性よ。自身の微細な顕現によって輝く女性よ。勝利せよ。粗大なアートマシャクティ（アートマンの力）を求める女性よ。勝利せよ。動くものや動かないものに遍在する女性よ。

jaya nānaikavinyastaviśvatattvasamuccaya³⁴² /

jayāsuraśironiṣṭhaśreṣṭhānugakadambaka³⁴³ //24//

勝利せよ。あらゆる世界原理を一所に集める者よ。勝利せよ。その者の信徒のグループがアスラの頭上に乗る、そのような最高の者よ。

jayopāśritasaṃrakṣāsaṃvidhānapāṭiyasi /

³³⁹ 英訳では lord of permanent devotees（永遠なる信者たちの神）となっている。

³⁴⁰ N版では jayāvalokanāyattajagatkāraṇabṛṃhaṇa（連書）となっている。この場合、訳は「照覧に依存し、世界を繁栄させる原因となる者よ」となる。

³⁴¹ N版では sthūlātmaśaktyeśejaya（連書）となっている。言葉の意味、および英訳を参照し、原文の sthūlātmaśaktyeśe jaya（分書）を採用した。

³⁴² N版では nānaikavinyastaviśvatattvasamuccaya となっている。この場合、訳は「名のある世界原理を一所に集める者よ」となる。

³⁴³ 原文では jayāsuraśironiṣṭha śreṣṭhānugakadambaka（分書）となっているが、英訳を参照し、N版の jayāsuraśironiṣṭhaśreṣṭhānugakadambaka（連書）を採用した。

jayonmūlitasamśāraṇiṣāṃkurodgame //25//

勝利せよ。(彼女に) 依拠する者たちを守れる立場にいる女性よ。勝利せよ。発芽した現象世界の毒の木の芽が根絶された女性よ。

jaya prādeśikaiśvaryavīryaśauryavijṛmbhaṇa³⁴⁴ /

jaya viśvabahirbhūta nirastaparavaibhava //26//

勝利せよ。限られた〔力〕や支配力、力強さ、男らしさを増大する者よ。勝利せよ。世界の外に依拠する者よ。敵の威力を鎮圧した者よ。

jaya praṇītapamcārthaprayogaparamāmṛta /

jaya pamcārthavijñānasudhāstotrasvarūpiṇi //27//

勝利せよ。五原理³⁴⁵の企図をもたらし究極の不死者よ。勝利せよ。パンチャールタの知を持つ繁栄をもたらしストートラの姿をした女性よ。

jayātighorasamśāramahārogabhiṣagvara³⁴⁶ /

jayānādimalājñānatamahṣaṭalacandrike //28//

勝利せよ。非常に恐ろしい世界の苦しみの治癒者よ。勝利せよ。無始以来の汚れを持つ無知の闇という覆い〔を取り払う〕月明かりである女性よ。

jaya tripurakālāgne jaya tripurabhairavai /

jaya triṣuṇanirmukte jaya triṣuṇamardini //29//

勝利せよ。トリプラを殺す黒い(死の)炎である女性よ。勝利せよ。トリプラを脅かす女性よ。勝利せよ。トリグナにとらわれていない女性よ。勝利せよ。トリグナを破壊する女性よ³⁴⁷。

jaya prathamasarvajña jaya sarvaprabodhike³⁴⁸ /

jaya pracuradivyāmga jaya prārthitadāyini //30//

勝利せよ。最高の全知者よ。勝利せよ。全てを悟る女性よ。勝利せよ。多産である神的な肢体を持つ者よ。勝利せよ。願いを叶える女性よ。

kva deva te param dhāma kva ca tucchaṃ ca no vacaḥ /

³⁴⁴ N 版では prādeśikaiśvaryavīryaśauryavijṛmbhaṇa となっている。

³⁴⁵ 五原理とは、シヴァ派の一派であるパーシュパタ (Pāśupata) 派における思想である。その5つとは「(1)「結果 (カールヤ)」すなわち原物質 (プラダーナ) より生じたマハットなどのもの。(2)「原因 (カーラナ)」すなわち主宰神 (イーシュヴァラ)、大主宰神 (マハー・イーシュヴァラ)、原物質。(3)「ヨーガ」すなわち、聖音オームを唱えること、黙想すること、意識を集中すること、などの瞑想に没頭すること。(4)「儀軌 (ヴィディ)」すなわち一日に三回 (はじめ、中、最後) に行なわれる (灰による) 沐浴に始まり、秘密の動作 (グーダ・チャルヤー) に終わる諸崇拝方法。(5)「苦の終わり (ドゥフカ・アンタ)」すなわち究極の救済である。」[バンデルカル 1984 pp. 354-355]

³⁴⁶ N 版では jayāti ghorasamśāramahārogabhiṣagvara (分書) となっている。この場合、訳は「勝利せよ。越えよ。恐ろしい世界の苦しみの治癒者よ」となる。

³⁴⁷ 英訳によると「トリグナを持っている女性よ」となっている。

³⁴⁸ N 版では sarvaprabodhika と男性形になっている。

tathāpi bhagavan bhaktyā pralapamtaṁ kṣamasva mām //31//

神よ。あなたの最高の住処はどこか。そして、私たちの価値なき言葉はどこなのか。それはもとより、神よ、信愛によって戯言を言う私を許したまえ。

vijñāpyaivaṁvidhaiḥ sūktair viśvakarmā caturmukhaḥ /

namaścakāra rudrāya rudrāṇyai ca muhurmuḥ //32//

このような種類の讃歌によって宣揚して、4つの顔を持つ全世界の創造主(ブラフマー)は、ルドラとルドラーニーに何度も何度も敬礼した。

idaṁ stotravaraṁ puṇyaṁ brahmaṇā samudīritam /

arddhanārīśvaraṁ nāma śivayor harṣavarddhanam //33//

ブラフマーによって唱えられた『アルダナーリーシュヴァラ』という名のこの神聖な素晴らしいストトラは、シヴァたち2人(シヴァとパールヴァティー)の喜びを高める。

7.1.ch.16.4-26 (アルダナーリーシュヴァラ創造神話)

īśvara uvāca //

イーシュヴァラは言った。

vatsa vatsa³⁴⁹ mahābhāga mama putra pitāmaha /

jñātam eva mayā sarvaṁ tava vākyasya gauravam //4//

わが子よ、わが子よ、マハーバーガ(大きな幸福)よ。私の息子よ。ピターマハよ。あなたの言ったことの重大さは私によって全て理解された。

prajānām eva vṛddhyartham tapas taptam tvayādhunā³⁵⁰ /

tapasā 'nena tuṣṭo 'smi³⁵¹ dadāmi ca tavepsitam //5//

まさに生類の繁栄のために、今、あなたによって苦行がなされた。この苦行で私は満足した。ゆえに、お前の望むものを与えよう。

ity uktvā paramodāraṁ svabhāvamadhuraṁ vacaḥ /

sasarja vapuṣo bhāgād devīm devavaro haraḥ //6//

このように素晴らしく後期で自然で優しい言葉を言い、美しい姿をした偉大な神ハラは、〔自分の体の〕部分から女神を創った。

yām āhur brahmavidvāṁso devīm divyaguṇānvitām /

³⁴⁹ N版では vatsavatsa (連書) となっている。

³⁵⁰ 原文では tvayā 'dhunā となっている。これは tvayā adhunā の連声を分かりやすく記述したものである。ここでは N版の表記を採用した。

³⁵¹ N版では tuṣṭosmi (連書) となっている。

parasya paramām³⁵² śaktim bhavasya paramātmanaḥ //7//

ヴェーダについて知る者³⁵³たちは、彼女が、最高のアートマンである偉大なバヴァの神
的な美德を具えた、素晴らしいシャクティ女神であると言った。

yasyām na khalu vidyaṃte janmamṛtyujarādayaḥ³⁵⁴ /

yā bhavānī bhavasyāṃgāt samāvirabhavat kila //8//

その彼女にはまさに生死老などが知られていない。そのバヴァーニーは、まさにバヴァ
の体から現れた。

yasyā vāco nivartante manasā ceṃdriyaiḥ saha /

sā bhartur vapuṣo bhāgā jāteva samadrśyata //9//

彼女〔自身〕の心と感官と共に、言葉を消した彼女は、美しい夫の〔体の〕一部から生
まれたように見えた。

yā sā jagad idaṃ kṛtsnaṃ mahimnā vyāpya tiṣṭhati /

śārīṇīva sā devī vicitraṃ samalakṣyata //10//

偉大さによって、この世界全てに満ちて留まったかの女神は、体を持った存在であるか
のごとく、様々に顕現した。

sarvaṃ jagad idaṃ caiśa saṃmohayati māyayā /

īśvarāt saiva jātābhūd³⁵⁵ ajātā paramārthataḥ //11//

そして彼女はマーヤーによってこの世界全てを惑わせた。彼女は実にイーシュヴァラか
ら生まれた者であり、勝義には生まれていない者であった。

na yasyāḥ³⁵⁶ paramo bhāvaḥ surāṇām api gocarāḥ /

viśvāmareśvarī³⁵⁷ caiva vibhaktā bhartur aṃgataḥ //12//

彼女の最高の状態（姿）は、神々にも見えなかった。そして、まさに全ての神々に対し
ての女神（パールヴァティー）は夫の体から分かれた。

tām dr̥ṣtvā parameśānīm sarvalokamaheśvarīm /

sarvajñām sarvagām sūkṣmām sadasadvyaktivarjitām //13//

paramām nikhilām bhāsā bhāsayantīm idaṃ jagat /

praṇipatya mahādevīm prārthayāmāsa vai virāt //14//

³⁵² N 版では parasyaparamām（連書）となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、
原文の parasya paramām を採用した。

³⁵³ 「ブラフマンについて知る者」という解釈もある。ここでは、英訳に従った。

³⁵⁴ N 版では janma mṛtyujarādayaḥ（分書）となっているが、英訳を参照し、原文の
janmamṛtyujarādayaḥ を採用した。

³⁵⁵ 原文では jātā 'bhūd となっている。これは jātā abhūd の連声を分かりやすく記述したもの
と思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

³⁵⁶ N 版では yasyā となっているが、語形変化を考慮し、原文の yasyāḥ を採用した。

³⁵⁷ 原文では viśvā 'mareśvarī となっている。これは viśvā amareśvarī の連声を分かりやすく記
述したものと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

かのパラメーシャーニー（最高の支配者）であり、全世界の偉大な女神であり、全知者であり、遍在者であり、微細であり、有と無の表れを取り払った者であり、〔彼女の〕輝きによってこの世界全体を照らす素晴らしいマハーデーヴィーを見て、ヴィラージュは敬礼し、懇願した。

brahmovāca//

ブラフマーは言った。

devi devena sṛṣṭo 'ham ādau sarvajaganmayi³⁵⁸ /

prajāśarge niyuktaś ca sṛjāmi sakalaṃ jagat //15//

女神よ。最初の創造時に、私は神によって創られた。そして生類の創造に任命され、全世界を創った。

manasā nirmīṭāḥ sarve devi devādayo mayā /

na vṛddhim upagacchanti sṛjyamānāḥ punaḥ punaḥ //16//

女神よ。神など全て〔の存在〕は、私によって心から創られた。〔しかし〕何度も何度も創られた者たちは、繁栄しなかった。

mithunaprabhavām eva kṛtvā sṛṣṭim ataḥ param /

saṃvardhayitum icchāmi sarvā eva mama prajāḥ //17//

そしてそれから、私の全ての生類が、夫婦によって生まれる創造をして、繁栄を願った。

na nirgataṃ purā tvatto nārīṇāṃ kulam avyayam /

tena nārīkulaṃ sraṣṭuṃ śaktir mama na vidyate //18//

以前、あなたから女性たちの断絶しない系譜が始まらなかった。それゆえ、女性たちの系譜を創るシャクティは、私にはなかった。

sarvāsām eva śaktināṃ tvattaḥ khalu samudbhavaḥ /

tasmāt sarvatra sarveṣāṃ sarvaśaktipradāyinīm //19//

tvām eva varadāṃ māyāṃ prārthayāmi sureśvarīm /

carācaravivṛddhyartham aṃśenaikena sarvage //20//

dakṣasya mama putrasya putrī bhava bhavārdini /21ab

まさに全てのシャクティはあなたから生じた。それゆえ、私は、あらゆる所で全ての人〔に対して〕全てのシャクティを与える女性であり、恩恵を受ける女性であり、マヤーであり、神々にとっての女神であるあなたに懇願する。動くものや動かないものの繁栄のために、一部分によって、わが息子であるダクシャの娘となるべし。遍在者よ。

evam sā yācitā devī brahmaṇā brahmayoninā //21cd//

śaktim ekāṃ bhruvor madhyāt sasrjātmasamaprabhām /

tām āha prahasan prekṣya devadevavaro haraḥ //22//

このように、ブラフマーの母体であるブラフマーによって、懇願されたかの女神は、両眉の中央から、自身と等しい輝きを持つ1人のシャクティを創った。神々にとっての偉

³⁵⁸ sarvajaganmayi の翻訳が不明なので、英訳に従って訳した。

大な神ハラは微笑んで、彼女を見て言った。

brahmāṇaṃ tapas ārādhya kuru³⁵⁹ tasya yathepsitam /

tām ājñāṃ parameśasya śirasā pratigrhya sã //23//

brahmaṇo vacanād devī dakṣasya duhitābhavat³⁶⁰ /24ab

「ブラフマーを苦行により崇め、彼の望むことをしなさい。」彼女は頭〔を下げること〕によって、パラメーシャのその命令を受け入れ、ブラフマーの言葉から、女神はダクシヤの娘となった。

dattvaivam³⁶¹ atulām śaktiṃ brahmaṇe brahmarūpiṇīm //24cd//

viveśa deham devasya devaś cāṃtaradhīyata /

tadāprabhṛti³⁶² loke 'smin striyāṃ bhogaḥ pratiṣṭhitaḥ //25//

このように、ブラフマンの姿（性質）をした比類ないシャクティをブラフマーに与えて、〔女神は〕神（シヴァ）の体に入った。そして、神は（姿を）消した。この時以来、この世界において、女性における享受が確立された。

prajāśṛṣṭis ca vipreṇ drā maithunena pravartate /

brahmāpi prāpa sānandaṃ santoṣaṃ munipuṃgavāḥ //26//

そして、生類創造は性交によって起こる〔ようになった〕。バラモンの長たちよ。ブラフマーもまた、喜ばしい満足を得た。聖者の高名なる者たちよ。

7.1.ch.17.1-6（ブラフマー創造神話）

vāyur uvāca //

ヴァーユは言った。

evaṃ labdhvā parāṃ śaktiṃ īśvarād eva śāśvatīm /

maithunaprabhavāṃ śṛṣṭiṃ kartṛkāmaḥ prajāpatiḥ // 1 //

svayam apy adbhuto nārī cārddhena puruṣo 'bhavat /

yārddhena nārī sã tasmāc chatarūpā vyajāyata // 2 //

このように、神から、永遠であり最高であるシャクティを得て、性交による生殖という創造を欲する創造主（ブラフマー神）は、自身で、半身によって女性、〔半身によって〕

³⁵⁹ N版では ārādhyakuru（連書）となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、原文の ārādhya kuru を採用した。

³⁶⁰ 原文では duhitā 'bhavat となっている。これは duhitā abhavat の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

³⁶¹ 原文では dattbaivam となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、N 版の dattvaivam を採用した。

³⁶² N 版では tadā prabhṛti（分書）となっている。訳は同じとする。

男性という驚異的な姿になった。半身によって女性に〔なった〕彼女は、それゆえシャタルーパーとして生まれた。

virājam asṛjad brahmā so 'rddhena³⁶³ puruṣo 'bhavat /

sa vai svāyaṃbhavaḥ pūrvaṃ puruṣo manur ucyate // 3 //

ブラフマーは半身によって男性になりヴィラージュを創った。彼は、スヴァーヤンブヴァという最初の男性であり、マヌであると言われる。

sā devī śatarūpā tu tapaḥ kṛtvā suduścaram /

bharttāraṃ diptayaśasaṃ manum evānvapadyata // 4 //

一方、かの女神シャタルーパーは非常に困難な苦行をし、輝かしい名声のマヌを夫として得た。

tasmāt tu śatarūpā sā putradvayam asūyata /

priyavratottānapādaḥ putrau putravatāṃ varau // 5 //

その後、かのシャタルーパーは2人の息子をもうけた。プリヤヴラタとウッターナパーダという2人の息子は、子供を持てる親の力強い息子たちである。

kanye dve ca mahābhāge yābhyāṃ jātās tv imāḥ prajāḥ /

ākūtir ekā vijñeyā prasūtir aparā smṛtā // 6 //

さらに、2人の非常に吉祥な娘が〔生まれた〕。2人によってこれらの〔この世界の〕生類は生まれた。1人目（姉）がアーケーティと知られるべきで、妹がプラスーティといわれる。

7.1.ch.32.50-52

dvādaśāṃṭaṣṭhitasyendoḥ parastāc chvetapaṃkaje /

samāsinaṃ mahādevaṃ śaṃkaraṃ³⁶⁴ bhaktavatsalam //50//

arddhanārīśvaraṃ devaṃ nirmalaṃ madhurākṛtim /

śuddhasphaṭikasamkāśaṃ prasannaṃ śītaladyutim //51//

dhyātvā hi mānase devaṃ svasthacitto 'tha mānavaḥ /

śivanāmāṣṭakenaiva bhavapuṣpaiḥ³⁶⁵ samarcayet //52//

〔行者は〕12枚の〔花卉〕中にいる月よりもさらに遠くにある白い蓮の中に座っている、マハーデーヴァであり、信者に対して親切であり、アルダナーリーシュヴァラ神であり、汚れなく喜ばしい姿をしており、清浄な水晶のようであり、清らかであり、冷涼であり、輝いている〔シヴァ〕を瞑想し、そして自身の平常心を保っている人（行者）

³⁶³ N版では'ddhana となっているが、英訳を参照し、原文の'rddhena を採用した。

³⁶⁴ N版では śaṃkaram となっている。

³⁶⁵ N版では bhavapuṣpais となっている。

は、心の中でシヴァの 8 つの名 [の唱名³⁶⁶] と聖なる花々によって [シヴァ] 神を崇めるべきである。

7.2.ch.8.26-31

devā ūcuḥ //

神々は言った。

bhagavan kena mārgēṇa pūjaniyo 'si bhūtale /

kasyādhikāraḥ pūjāyāṃ vaktum arhasi tattvataḥ //26//

吉祥な者よ。この世界であなたはどのような方法で祀られるべきでしょうか。プージャー（儀礼）において、誰に権威が [ありますか]。ありのままに語って下さい。

tataḥ sasmitam ālokya devīm devavaro haraḥ /

svarūpaṃ darśayāmāsa ghoram sūryātmakam param //27//

そして、神の最高者であるハラは微笑みながら女神を見て、恐ろしく太陽のような最高の姿を現した。

sarvaiś varyaguṇopetaṃ sarvatejomayaṃ param /

śaktibhir mūrtibhiś cāṃgair grahair devaiś ca saṃvṛtam //28//

aṣṭabāhuṃ catrvaktram arddhanārīkam adbhutam /29ab

全ての支配力という特質をそなえた者であり、全ての輝きを持つ者であり、最高者であり、シャクティたちや身像³⁶⁷や星々や神々に囲まれた者であり、8 本の腕を持ち、4 つの顔を持ち、アルダナーリーカ（半分女性の身体）の身体をした不可思議な者だった。

dr̥ṣṭvaivam adbhutākāraṃ devā viṣṇupurogamāḥ //29cd//

buddhvā divākaraṃ devaṃ devīm caiva niśākaram /

pañcabhūtāni śeṣāṇi tanmayaṃ ca carācaram //30//

このように、不可思議な姿を見て、ヴィシュヌをはじめとする神々は、太陽としての神、月としての女神、さらに残りのものが五大要素であり、動くものと動かないもの [全て] が彼自身であると理解した³⁶⁸。

evam uktvā namaścakrus tasimai cārghyaṃ pradāya vai //31//

そのように言って、アルギヤ（客人歓待儀礼の水）を捧げ、彼（シヴァ）に敬礼した。

³⁶⁶ 英訳を参照し補った。

³⁶⁷ 英訳を参照し、mūrtibhiś と aṃgair を一語として訳した。

³⁶⁸ 文章が複雑になるため、一旦、文章を終わりにした。

7.2.ch.24.51

arddhanārīśvare pūjye paurvāparyam na vidyate /

tatra tatropacārāṇām liṅge vānyatra vā kvacit //51//

アルダナーリーシュヴァラが崇められるべき場合には、〔儀礼の〕次第は知られていない。リングに対して、あるいはその他の場合でも、儀礼に関しての〔次第は決められていない〕。

7.2.ch.27.26-27

raṁ vahnyeti svāheti madhye hutvāhutitrayam /

sarpiṣā vā samidbhir vā pariṣecanam ācaret //26//

途中で「raṁ vahnyeti svāhā」と言って、ギーまたは祠薪と共に 3 回の祈願儀礼をし、パリシェーチャナ（散水儀礼）を行なうべし。

evaṁ kṛte śivāgniḥ syāt smaret tatra śivāsanam /

tatrāvāhya yajed devam ardhanārīśvaram śivam /

dīpāntaṁ pariṣicyātha samiddhomaṁ samācaret //27//

このようになされたならば〔それは〕シヴァの炎になるだろう。そこで〔行者は〕シヴァの座〔としてのそれ〕を瞑想するべきである。そこに〔シヴァを〕勧請し、アルダナーリーシュヴァラであるシヴァ神に対して儀礼をするべきである。さて、散水儀礼をして、光を最後とする祠薪を用いた儀礼をするべきである。

Skanda-purāṇa :C 版（底本）、N 版、AITM 版（英訳）

1.1.ch.17.98-99

ekadā paryaṭan rājā nāmnā citraratho mahān /

kailāsam³⁶⁹ āgatas tatra sa dadarśa parādbhutam //98//

sabhātalaṃ maheśasya gaṇaiś caiva virājitam /

arddhāṃgalagnayā devyā śobhitaṃ ca maheśvaram //99//

かつて、放浪していたチトララタ（輝く戦車）という名の偉大な王は、カイラーサ山へやってきた。そこで彼は、非常に驚異的でありガナによって輝くマヘーシャの集会場と〔シヴァの〕半身となった女神によって輝くマヘーシュヴァラを見た。

1.1.ch.17.113-115

bṛhaspatir uvāca //

ブリハस्पティは言った。

kārtike māsi saṃprāpte maṇḍavāre trayodaśi /

saṃpūrtis tu bhavet tatra saṃpūrṇavratasiddhaye //113//

カールティカ月の土曜日で 13 日になったならば、そこで、全ての誓願成就のためになされた願が成就する。

vṛṣabho rājataḥ kāryaḥ pṛṣṭhe tasya supīṭhakam /

tasyopari nyased devam umākāṃtaṃ³⁷⁰ trilocanam //114//

〔信者によって〕銀の雄牛が作られるべきである。その〔雄牛の〕背に、すばらしい良き座が〔あるべきである〕。〔信者は〕その〔座の〕上にウマーの愛する者である三つ目の神を置くべきである。

pañcavaktraṃ daśabhujam arddhāṅge³⁷¹ giriḥ satim /

evaṃ comāmaheśaṃ ca sauvarṇaṃ kārayed budhaḥ //115//

〔信者はその像を〕五面十臂であり、半身に山の娘サティーを〔具えた姿で作るべきである〕。知者（信者）は、このように金のウーマーマヘーシャ〔の像〕を作るべきである。

³⁶⁹ C 版では kailāsam となっているが、英訳を参照し、N 版の kailāsam を採用した。

³⁷⁰ C 版では umākātaṃ となっているが、英訳を参照し、N 版の umākāṃtaṃ を採用した。

³⁷¹ N 版では arddhāṅge となっている。

1.1.ch.34.32

nirvikāro vikāraiś ca bahubhir vikalikṛtaḥ /

arddhāṃgalagnā sā devī dṛṣṭā tena śivasya ca //32//

ヴィカーラ（変質）しないもの（シヴァ）は、多くのヴィカーラ（変質、ガウリー）によって、弱められた。そして、かの女神は、彼（ナーラダ）によって、シヴァの半身になっているのが見られた。

1.2.ch.3.61-64

cintāṃ³⁷² suvipulāṃ prāpto narake duṣkṛtī yathā /

yadi tiṣṭhāmi cātraiva ardhadehadharo hy aham //61//

私は地獄にいる罪人のように大きな心配をしている。そして、もし私がここに留まるならば、[私は] アルダデーハダラ（半身である者）になる（である）。

naro hi gṛhiṇīhīno ardhadeha iti smṛtaḥ /

yathātmanā vinā dehe kāryaṃ kiṃcin na sidhyati //62//

evaṃ gṛhiṇyā hīno hi na sa karmasu śasyate /

yo naraḥ strīṣu deheṣu anuraktas tv asau paśuḥ //63//

まさに妻のいない男はアルダデーハ（半身者）であると言われる。体の中にアートマンなしでは、何の結果も成就しないように、そのように、まさに妻を欠いている者は儀礼において、ふさわしくない。女性たちと肉体に執着している男は獣である。

anayor hi phalaṃ grāhyaṃ sārātā nātra³⁷³ kācana /

ardhadehī ca manujaḥ tv asaṃspr̥śyaḥ satāṃ mataḥ //64//

まさにこの 2 人（男性半身と女性半身）において果が得られるべきである [が]、ここには、いかなる価値もない。そして半身の男は、触られるべきでないと [言うのが] 善き人々の意見である。

1.2.ch.6.135-136

tataḥ karaṃ samudyamya prāhendro devasaṅgame³⁷⁴ /

harāṅgaruddhavamārdhā³⁷⁵ yāvad devī gireḥ sutā //135//

³⁷² N 版では cintāṃ となっている。

³⁷³ C 版では nā'tra となっている。これは na atra の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

³⁷⁴ N 版では devasaṅgame となっている。

gaṇādhiśo vyaṃ yāvad yāvat tribhuvanaṃ tv idam /

tāvan nandyād idaṃ sthānaṃ nāradaśthāpitaṃ surāḥ //136//

それから、インドラは神々の集まりで、手を挙げて言った。ハラの体の左半〔身〕になっている者あり、山の娘である女神がいる限り、ガナーディーシャ（ガネーシャ）がいる限り、私たちがいる限り、そして、この三界がある限りは、ナーラダが設立したこの地は、喜びにあふれるだろう。神々よ。

1.2.ch.22.35cd-38ab（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

ahaṃ tv ādau yadā jātas tadā paśyaṃ puraḥ sthitam //35cd//

ardhanārīśvaraṃ devaṃ vyāpya viśvam avasthitam /36ab

私（ブラフマー）が最初に生まれた時、〔私の〕前に立っている、全てに遍在し留まるアルダナーリーシュヴァラ神を見た。

dr̥ṣṭvā tam abruvaṃ devaṃ bhajasveti ca bhaktitaḥ //36cd//

tato nārī pṛthag jātā puruṣaś ca tathā pṛthak /37ab

彼（シヴァ）を見て、私は神に、信愛によって「崇めたまえ」と言った。それから、女性とは別に生まれ、男性も同様に別に〔生まれた〕。

tasyāś caivāṃśajāḥ sarvāḥ striyas tribhuvane smṛtāḥ //37cd//

ekādaśa ca rudrāś ca puruṣāś tasya cāṃśajāḥ /38ab

そして三世界の全ての女性たちは彼女から〔体を〕分けて生まれたと言われている。そして 11 人のルドラと男性たちは、彼の部分から生まれた。

1.2.ch.29.42-46ab

tapasā duṣkareṇāptaḥ³⁷⁶ patitve śaṅkaro mayā /

sa mām śyāmalavarṇeti bahuśaḥ proktavān bhavaḥ //42//

syām ahaṃ kāñcanākārā³⁷⁷ vāllabhyena ca saṃyutā /

bhartur bhūtapater aṅge³⁷⁸ hy ekato nirviśaṅkitā³⁷⁹ //43//

³⁷⁵ N 版では harāṃgaruddhavāmārdhā となっている。

³⁷⁶ C 版では duṣkareṇā ’ptaḥ となっている。これは duṣkareṇā āptaḥ の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

³⁷⁷ N 版では kāñcanākārā となっている。

³⁷⁸ N 版では aṃge となっている。

³⁷⁹ N 版では nirviśaṃkitā となっている。

「厳しい苦行によって、私によって、夫としてシャンカラが得られました。かのバヴァは私に何度も「黒色の〔肌の者〕よ」と言いました。それゆえ、私は〔シヴァへの〕愛ゆえに、金色からなる者になりましょう。そうなれば、躊躇することなく、ブータの主である夫の体の一部になりましょう。」

tasyās tadbhāṣitaṃ śrutvā provāca jalajāsanaḥ /

evaṃ bhavatu bhūyas tvaṃ bhartur dehārdhadhāriṇī //44//

彼女から、その言葉を聞いて、蓮に座る者は言った。「そのようになれ。そしてお前は〔自分の〕夫の半身を持つ者となるであろう。」

tatas tasyāḥ śarīrāt tu strī sunilāmbujatviṣā³⁸⁰ /

nirgatā sābhavad bhīmā ghaṇṭāhastā³⁸¹ trilocanā //45//

nānābharaṇapūrṇāṅgī³⁸² pītakaśeyavāsini /46ab

それから、彼女の体から、とても黒い蓮の輝きを持っており、恐ろしく、手に鐘を持っており、三つ目をしており、色々な飾りを体全体につけており、黄色いシルクの衣裳を着ている、かの女性が現れた。

1.2.ch.30.13cd-14ab

ardhanārīśvaraṃ rūpaṃ yathā rudrasya sarvadam //13cd//

tathā mahīsamudrasya snānaṃ sarvaphalapradam /14ab

ルドラのアルダナーリーシュヴァラの姿が全てを授けるように、マヒー川³⁸³と海〔の合流点〕での沐浴は全ての果を与える。

1.2.ch62.3-5

deva daityena ghoreṇa durjayena surāsuraiḥ /

pīḍitā dārukeṇa smaḥ svasthānāc cāpi cyāvitāḥ //3//

na viṣṇunā na candreṇa³⁸⁴ na cānyenāpi³⁸⁵ kenacit /

³⁸⁰ N 版では sunilāmbujatviṣā となっている。

³⁸¹ N 版では ghaṇṭāhastā となっている。

³⁸² N 版では nānābharaṇapūrṇāṅgī となっている。

³⁸³ マディヤプラデーシュ州のビンディヤ山脈西部から、ラージャスターン州を通り、グジャラート州に出て、カンベイ湾に注ぐ川。

³⁸⁴ N 版では candreṇa になっている。

³⁸⁵ C 版では cā 'nyenā 'pi となっている。これは ca anyena api の連声を分かりやすく記述し

śakyo hantum³⁸⁶ sa duṣṭātmā ardhanārīśvaram vinā //4//

tena sampīḍyamānānām³⁸⁷ asmākaṃ śaraṇaṃ bhava /

ity uktvā rurudur devās trāhitrāhīti cābruvan³⁸⁸ //5//

「神よ。〔我々は〕神とアスラ達によって征服しがたい、恐ろしいダイティヤであるダールカに悩まされている。そして自分たちの住处からも追い出された。ヴィシュヌによっても、チャンドラによっても、また他の何者によっても、かの悪者は殺すことが不可能である。アルダナーリーシュヴァラ以外によつては。それゆえ、悩まされている我々の守護をしてくれ。」と言ひ、泣いた。そして神々は「救いたまえ、救いたまえ。」と言った。

1.3.Pūrvārdha3.37

ardhāṅgī³⁸⁹ sā tava deva śivaśaktyātmakaṃ vapuḥ /

eka eva mahādeva na pare tvadvina vibho //37//

彼女はあなたの半身である。神よ。〔あなたの〕身体はシヴァ・シャクティから成っている。マハーデーヴァは、まさに1つであり、あなた以外の他のものは〔存在〕しない。神よ。

1.3.Pūrvārdha9.13cd

strīsaṅgavāmasubhago³⁹⁰ vidhir vihitasundaraḥ³⁹¹ //13cd//

左側が女性である徳の高い者、運命を定める者、美しき姿をそなえし者。

たものと思われる。ここではN版の表記を採用した。

³⁸⁶ N版では hantum となっている。

³⁸⁷ N版では sampīḍyamānānām となっている。

³⁸⁸ C版では cā 'bruvan となっている。これは ca abruvan の連声を分かりやすく記述したもののと思われる。ここではN版の表記を採用した。

³⁸⁹ N版では ardhāṅgī となっている。

³⁹⁰ N版では strīsaṅgavāmasubhago となっている。

³⁹¹ N版では vihitasundaraḥ となっている。

1.3.Uttarārdha4.47cd-51ab

prāleyaśailakanyāpi tatra kṛtvā tapaḥ purā //47cd//

alabdha vāmadehārdham³⁹² manmathāreḥ praseduṣaḥ³⁹³ /

gauryā pratiṣṭhitam tatra pravālādrīśvarābhidham //48//

liṅgam bhogapradam puṁsām kaivalyāya prakalpate /

tatra gaurīnideśena durgā mahiṣamardinī //49//

sākṣādbhūya satām datte mantrasiddhim avighnataḥ /

khaḍgatīrtham iti khyātam tatra gauryāśrame navam //50//

sakṛn nimajjanān nīṇām pañcapātakanāśanam /51ab

以前に雪山の娘（パールヴァティー）はそこで苦行をして、喜んだマンマターリ（愛の神カーマの敵、シヴァ）の左半身を得た。ガウリーによって、プラヴァーラードリ・シュヴァラ（若葉の山の主）という名〔のリング〕が、そこに立てられた。〔その〕リングは、人々に解脱のための喜びを与える。そこに、ガウリーの要請によって、マヒシャマルディニー（マヒシャをやっつける者）であるドゥルガーは、〔人々の〕眼前に現れ出て、障害なく、良き人々にマントラの成就を与えた。そのガウリーの住処に、カドガ（剣）ティールタと呼ばれる新しい〔聖地〕が〔できた〕。〔そこで〕一度でも沐浴すれば、人々の5つのパータカ（罪）が消滅する。

1.3.Uttarārdha16.13

ardhanārīśvaram rūpaṁ tvayā cen na prakāśitam /

prabhavāmi katham sruṣṭum jagad etac carācaram //13//

もしも、あなたによって、アルダナーリーシュヴァラの姿が顕現されなかったならば、私はどのようにしてこの動くものや動かないものから成る世界を創造させることができるだろうか。

1.3.Uttarārdha21.19cd-24

ity uktveśo niṣaṇṇas tām pārśvadeśe³⁹⁴ nyaveśayat //19cd//

このように言って、座っているイーシャは彼女をわきへ座らせた。

³⁹² C版では alabdhavāmadehārdham（連書）となっているが、ここでは N 版の alabdha vāmadehārdham を採用した。

³⁹³ 言葉が不明なので、英訳を参照し、「喜んだ」とした。

³⁹⁴ C版では pārśvadeśe となっているが、英訳を参照し、N 版の pārśvadeśe を採用した。

gauriṃ svakiya evāṅge gūhamānām iva hriyā /

aṅgadvayaṃ³⁹⁵ tayor aikyam agāt premṇā ca līnayoḥ //20//

あたかも〔シヴァが〕恥ずかしさによって〔シヴァ〕自身の身体にガウリーを隠すように、愛情によって寄り添った彼らの2つの身体が1つになった。

arthadvayaṃ ivāhnāya³⁹⁶ sannikarṣopalambhataḥ³⁹⁷ /

ardhe karpūradhavalam ardhe sindhūrapāṭalam³⁹⁸ //21//

あたかも〔2人が〕寄り添うことによって、2つのものが〔1つになることに〕で、半分は樟腦のように白く、半分は辰砂で赤色をしている³⁹⁹。

tadvicitram abhūd aṅgaṃ⁴⁰⁰ śivayor ekatām gatam /

ardhe kuntaladāmārdhahāramadhye⁴⁰¹ tu kuñcikā⁴⁰² //22//

シヴァたち（シヴァとシヴァーの2人）が1つになった体はとても素晴らしいものであった。半分（女性側）には花冠を付けた束ねた髪と、ネックレスの中央にフェネルの花が〔ついていた〕。

aṅgād⁴⁰³ ardhenducūḍasya vapurardhendukūlitam⁴⁰⁴ /

ekanūpuratāṭaṅkaparihāryamanoharam⁴⁰⁵ //23//

三日月を頭に頂いている神の身体は、半身にシルクを着け⁴⁰⁶、心を魅了する1つのアンクレットと耳飾り、腕輪を〔付けている〕。

ekapiṅgalasadhrīco⁴⁰⁷ gātram ekastanaṃ babhau /

devyai dattvā ca dhāmārthaṃ vāmadevo jagāda tām //24//

クベーラの友人（シヴァ）の身体は、1つの乳房に輝いた。〔このように〕女神が依拠するために〔自分の体を〕与え、そしてヴァーマデーヴァ（シヴァ）は彼女に言った。

³⁹⁵ N版では aṅgadvayaṃ となっている。

³⁹⁶ C版では ivā 'hnāya となっている。これは iva āhnāya（もしくは iva ahnāya）の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここではN版の表記を採用した。

³⁹⁷ N版では sannikarṣopalambhataḥ となっている。

³⁹⁸ N版では sindhūrapāṭalam となっている。

³⁹⁹ āhnāya（もしくは ahnāya）の解釈が不明であり、英訳も混乱している。ここでは、英訳に従って訳した。

⁴⁰⁰ N版では aṅgaṃ となっている。

⁴⁰¹ N版では kuṇṭaladāmārdhahāramadhye となっている。

⁴⁰² N版では kuñcikā となっている。

⁴⁰³ N版では aṅgād となっている。

⁴⁰⁴ C版では vapurardhendukūlitam となっているが、英訳を参照し、N版の vapurardhendukūlitam を採用した。

⁴⁰⁵ N版では ekanūpuratāṭaṅkaparihāryamanoharam となっている。

⁴⁰⁶ 訳が不明だったので、英訳を参照し、このように訳した。

⁴⁰⁷ N版では ekapiṅgalasadhrīco となっている。

3.1.ch.29.18

samāruhya mahokṣāṇaṃ bhūtavṛṇḍaniṣevitaḥ⁴⁰⁸ /

giriṣārdhavadapuḥ śūli sūryakoṭisamaprabhaḥ //18//

〔神は〕大きな雄牛に乗り、ブータの一団に囲まれた者であり、半身がギリジャーの体をしており、三叉戟を持っており、千万の太陽に等しい輝きを持つ者である。

3.1.ch.47.51

rāmanāthamahālīṅgadakṣiṇe⁴⁰⁹ giriṣā mudā /

vartate paramānandaśivasyārdhaśarīriṇi //51//

ラーマナータ〔と呼ばれる〕マハーリングアの南に、パラマーナンダ（最高の至福）であるシヴァを半身とする、喜び溢れるギリジャーがいる。

3.1.ch.48.107

namas te giriṣārdhāya niṣpāpaṃ kuru mām sadā /

rudrākṣamālābharaṇa candraśekhara śaṅkara⁴¹⁰ //107//

半〔身〕がギリジャーである者に、敬礼します。常に私を罪から遠ざけたまえ。ルドラークシャの数珠を付けた者よ。月を頭に付けた者よ。シャンカラよ。

4.1.ch.14.40cd-43ab

dvijarāja tapas taptam yad atyugraṃ tvayātra vai //40cd//

再生族の王よ。まさにここであなたによって非常に厳しい苦行がなされた。

yac ca kratukriyotsargas tvayā mahyam niveditaḥ /

athāpi tam yat tv idaṃ liṅgam⁴¹¹ mama candreśvarābhidham⁴¹² //41//

tato 'tra⁴¹³ liṅge⁴¹⁴ tvan nāmni soma somārdharūpadhrk /

⁴⁰⁸ N 版では bhūtavṛṇḍaniṣevitaḥ となっている。

⁴⁰⁹ N 版では rāmanāthamahālīṅgam dakṣiṇe となっている。訳はほぼ同じである。

⁴¹⁰ N 版では śaṅkara となっている。

⁴¹¹ N 版では liṅgam となっている。

⁴¹² N 版では candreśvarābhidham となっている。

pratimāsaṃ pañcadaśyām⁴¹⁵ śuklāyām sarvagopy⁴¹⁶ aham //42cd//

ahorātraṃ vasiṣyāmi trailokyaiśvaryasaṃyutaḥ /43ab

そして、クラトゥ（儀礼）の執行によって出てきたものがあなたによって私に捧げられた。そしてさらに、私のチャンドレーシュヴァラと呼ばれるこのリング、〔すなわち〕あなたによって命名されたこのリングに、ウマーの半身の姿を持つ者であり、三界の神通力を持つ者であり、遍在者である私は、毎月白分 15 日目に昼も夜も依拠するであろう。ソーマよ。

4.1.ch.17.36

nidhanādivivarjita kṛtanatikṛt⁴¹⁷ kṛtividhimanoratha pannagabhṛt⁴¹⁸ /

nagabhartṛsutārpitavāmapuḥ svavapuḥ paripūritasarvajagat //36//

死などから隔絶された者よ。〔皆に〕敬礼される者よ。行為が遂行されることを望む者よ。蛇を持つ者よ。山の神の娘を〔体の〕左側に持つ者よ。自分の体によって全世界に遍在する者よ。

4.1.ch.29.238ab

mahāpātakarāśighnī mahādevārdhahārini /238ab

積み重なるマハーパートカ⁴¹⁹（大罪）を根絶する女性、マハーデーヴァの半〔身〕を奪う女性（796 番目の名前）。

⁴¹³ N 版では tatotra となっている。これはアヴァグラハを省略しているものと考えられる。

⁴¹⁴ N 版では liṅge となっている。

⁴¹⁵ N 版では pañcadaśyām となっている。

⁴¹⁶ 英訳を参照し、sarvago 'apy のアヴァグラハを省略しているものと考えた。

⁴¹⁷ 英訳では nidhanādivivarjita と kṛtanatikṛt を 1 つの言葉（連書したもの）として訳しており、「死などから隔絶された者たちに敬礼される者よ」となっている。この場合、「死などから隔絶された者たち」は神々を指す可能性がある。

⁴¹⁸ Ā 版では kṛtividhimanorathapannagabhṛt（連書）となっているが、英訳に従って、kṛtividhimanoratha pannagabhṛt（分書）とした。

⁴¹⁹ マハーパートカは『マヌ法典』第 9 章、11 章および 12 章に規定されている最も大きな罪の事である。

4.1.ch.30.78

āḥ kāsivāsijanatā nanu vañcitābhūd⁴²⁰ bhāle vilocanavatā vanitārdhabhājā /

ādāya yat sukṛtabhājanam iṣṭadeham nirvāṇamātram apavarjayatā punarbhū⁴²¹ //78//

ああ、カーシー⁴²²（ヴァーラーナスイー）に住む人々は、額に目を持つ者（シヴァ）であり、妻を半〔身〕に持つ者（シヴァ）であり、善行の器として望まれた体を持ち、再生することなく、ニルヴァーナ（解脱）のみを与える者（シヴァ）によって、確かに欺かれているのかも知れない。

4.1.ch.49.54

itthaṃ parītya mārtaṇḍo⁴²³ mṛḍaṃ⁴²⁴ devaṃ mṛḍānikām /

atha tuṣṭāva prītātmā śivavāmārdhahāriṇīm //54//

このように、心の中で喜んでいるマールタンダ（太陽神）はムリダ神を右繞し、それから、シヴァの左半〔身〕を持つ者⁴²⁵であるムリダーニカー（ムリダの妻）を崇めた。

4.2.ch.59.1-3

sarvajñahṛdayānanda⁴²⁶ gaurīcumbitamūrdhaja⁴²⁷ /

tārakāntaka⁴²⁸ ṣaḍvakra tāriṇe bhadrakāriṇe //1//

全知者の心の喜びよ。ガウリーにキスされた神を持つ者よ。ターラカ（ダイティヤの名前）を殺す者よ。6つの顔を持つ者よ。守護者よ。吉祥者よ。

sarvajñānanidhe tubhyaṃ namaḥ sarvajñasūnave /

sarvathājītamārāya kumārāya mahātmāne //2//

⁴²⁰ N版では vañcitābhūd となっている。C版では vañcitā 'bhūd となっている。これは vañcitā abhūd の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここではN版の表記を採用した。

⁴²¹ 言葉の語形が不明なため、英訳を参照し、「再生することなく」としたが、なぜ否定形になっているのかは分からない。

⁴²² カーシでも良いが、ここでは英訳に従い、カーシーとした。

⁴²³ N版では mārtaṇḍo となっている。

⁴²⁴ C版では mṛḍan となっているが、語形変化を考慮し、N版の mṛḍaṃ を採用した。

⁴²⁵ 女神が左側に置かれる場合が多いことと英訳を参照し、このように訳したが、「シヴァを左半〔身〕に持つ者」という訳も考えられる。

⁴²⁶ N版では sarvajñahṛdayānanda となっている。

⁴²⁷ N版では gaurīcumbitamūrdhaja となっている。

⁴²⁸ N版では tārakāntaka となっている。

全知の海よ。全知者の息子であるあなたに敬礼する。あらゆる手段を使ってマーラに勝った者であり、クマーラ（若者）であり、偉大な魂である者に〔敬礼する〕。

kāmārim ardhanārīṣaṃ vīkṣya kāmakṛtaṃ kila /

yo jigāya kumāro 'pi⁴²⁹ mārāṃ tasmai namo 'stu⁴³⁰ te //3//

カーマーリであり、カーマによってアルダナーリーシャになっている者を見て、〔まだ〕クマーラ（若者）であるのに、マーラに打ち勝ったあなたに敬礼する。

4.2.ch.63.52

vāmadevāya vāmārdhadhāriṇe vṛṣagāmine /

namo bhargāya bhīmāya natabhītiharāya ca //52//

ヴァーマデーヴァに、半〔身〕に美しい女性⁴³¹を持つ者に、牛に〔乗って〕行く者に、バルガに、ビーマ（恐ろしい者、シヴァ）に、敬礼する者たちの恐れを壊す者に、敬礼する。

4.2.ch.65.33

vijñāya netrasañjñāṃ⁴³² tu sarvajñārdhaśarīrīṇi /

tenaiva kandukenātha⁴³³ yugapan nijaghāna tau //33//

しかし、全知者の半身である女性は、合図に気が付いて、それから、まさにその鞠で同時に彼ら 2 人を殺した。

⁴²⁹ N 版では kumāropi となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、kumāro 'pi とした。

⁴³⁰ N 版では namostu となっていが、アヴァグラハ記号の省略と考え、namo 'stu とした。

⁴³¹ vāma-には「美しい」という意味と「左側の」という意味がある。ここでは、「美しい」という意味を採用したが、「左側の」という意味も含意している可能性がある。

⁴³² N 版では netrasañjñāṃ となっている。

⁴³³ N 版では kaṇḍukenātha となっている。

4.2.ch.71.85⁴³⁴

ardhāṅgenāsmadbhayato⁴³⁵ yoṣid ekā nigūhitā /
tasya grāme 'pi⁴³⁶ sakale dvitīyo na catuṣpadaḥ //85//

私たちへの恐れから、〔シヴァの〕半身によって、1 人の女性が隠された。彼の全ての村では、〔ナンディン以外の〕他の四足の生き物はいない。

4.2.ch.76.99-101

suptāsu tāsū bālāsu trinetraḥ śaśibhūṣaṇaḥ /
śuddhakarṇpūragaurāṅgo⁴³⁷ jaṭāmukutaṃaṇḍalaḥ⁴³⁸ //99//
tamālanīlasugrīvāḥ sphuratphaṇivibhūṣaṇaḥ /
vāmārdhaviṣasacchaktir nāgayajñopavītavān //100//
tasmād eva viniṣkramya līṅgāt⁴³⁹ pannagamekhalāt /
uvāca ca tato bālā vibhur uttiṣṭhateti saḥ //101//

その少女たちが眠っている時、三つ目を持ち、月を〔頭に〕飾り、清浄な樟脳のように白い肢体を持ち、蓬髪を丸い冠としており、タマラの木のごとき青色の美しい首を持ち、輝く蛇で飾られ、左半〔身〕がシャクティによって輝き、へびを聖紐として付けた者は、かの蛇の帯〔を付けた〕リングから現れ出て、そして、その遍在者は少女たちに「起きなさい」と言った。

⁴³⁴ 人間に殺されないという恩恵を受け、世界を支配したダイトゥヤであるドゥルガは、言いなりにならないマハーデーヴィーを自分の元に連れて来るように従者たちに言う。この文章は、その従者たちの返答の一部である。従者たちは「彼女はか弱い女であり、我々は強い。世界はあなたの支配下にある。我々にはあなたを通して出来ないことはない。ヴィシュヌは装飾品を賄賂にすればあなたの要請を受ける。シヴァは無視されている。シヴァは毒を飲みこみ、貧困から灰と動物の皮と蛇で身を飾り、我々を恐れて女を半身に隠している。彼の村には、年老いた 1 匹の雄牛以外、四足の動物はいない。彼の従者は火葬場に住み、灰を体に塗り、腰布だけ巻き、蓬髪を束ねている。」と行った。

⁴³⁵ N 版では ardhāṅgenāsmadbhayato となっている。

⁴³⁶ N 版では grāmepi となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、grāme 'pi とした。

⁴³⁷ N 版では śuddhakarṇpūragaurāṅgo となっている。

⁴³⁸ N 版では jaṭāmukutaṃaṇḍalaḥ となっている。

⁴³⁹ N 版では līṅgāt となっている。

4.2.ch.76.109

jaya sarpaphaṇāratnaprabhābhāsita-vigraha /

jayādrirājatanayātapaḥ kṛitārdhadehaka //109//

勝利あれ。蛇の鎌首にある宝石の輝きによって光っている独存者よ。勝利あれ。山の王の娘の苦行によって半身が購われた者よ。

4.2.ch.87.34-35

sarvaḥ prakṛtyā jñāyeta sthāṇuḥ prakṛtivarjitaḥ /

prāyaśaḥ puruṣo nāsāv ardhanārīvapur yataḥ //34//

全ての人は、〔自身の〕プラクリティ（本性）⁴⁴⁰によって知られている。〔しかし〕不動者はプラクリティを欠いている。半分が女性の体であるため、彼はほとんど男ではない。

yośā 'pi na bhaved eṣa yato 'sau śmaśrulānanaḥ /

napuṃsako 'pi na bhavel liṅgam asya yato 'rcyate //35//

彼は女性でもない。なぜならば、彼は口ひげをつけた顔をしているからである。彼は中性⁴⁴¹でもない。なぜならば、彼のリングが崇められているからである。

4.2.ch.88.36-37

tvayā ca śaktimān asmin mahadaiśvaryarakṣaṇe⁴⁴² /

tvāñ⁴⁴³ ca śaktiṃ samāsādyā svalilārūpadhāriṇim //36//

etat sṛjāmi pāmy admi tval līlāprerito 'ṅgane⁴⁴⁴ /

kuto māṃ hātum icches tvam mama vāmārdhadhāriṇi //37//

あなたによって（あなたのおかげで）〔私は〕この強大さと神通力を守ることにおけるシャクティを持つ者になった。そして、自身がリーラーの姿を持つ者であり、シャクティであるあなたを得て、あなたのリーラーに鼓舞された私はこの〔世界〕を創り、守り、消費する。ふくよかな女性よ。どうしてあなたは私を許すのだ。私の左半身である女性よ。

⁴⁴⁰ サーンキヤ哲学的なプラクリティすなわち根本原質あるいは物質の要素が強い。

⁴⁴¹ 英訳では eunuch（去勢者）となっている。

⁴⁴² N 版では ahadaiśvaryarakṣaṇe となっているが、英訳を参照し、C 版の mahadaiśvaryarakṣaṇe を採用した。

⁴⁴³ N 版では tvām となっている。

⁴⁴⁴ N 版では līlāpreritoṃgane となっている。これはアヴァグラハ記号を省略しているものと考えられる。

5.1.ch.38.13

yaś candrakhaṇḍam⁴⁴⁵ amalam vilasanmayūkham baddhvā sadā suradhuniṁ śirasā⁴⁴⁶ bibharti /
vāmāṅgake vidhṛtavān⁴⁴⁷ girirājaputrī tam śaṁkaram śaraṇadam śaraṇam vrajāmi //13//

汚れなく光り輝く三日月を持っており、常に神々の川（ガンガー）を頭に乗せている者であり、左〔半〕身に山の王の娘を持つ者である、かの庇護者シャンカラに庇護を求める。

5.1.ch.63.112cd

stripriyaḥ striparaḥ straiṇaḥ striyo vāmāṅgavāsakaḥ⁴⁴⁸ //112cd//

女性によって愛される者、女性に捧げられた者、女性に属する者、女性たちを左の体に居させる者。

5.2.ch.39.30c-34

devam ārādhayāmāsa tapasā duṣkareṇa tu //30cd//

そして、厳しい苦行によって〔布林ギリティ（シヴァの従者）は〕神（シヴァ）を崇めた。

etasminn antare⁴⁴⁹ devi līṅgamadhyāt⁴⁵⁰ tvam utthitā⁴⁵¹ /
arddhāṅgam⁴⁵² māmakaṁ kṛtvā svakīyāṅgam⁴⁵³ athārdhdhatā⁴⁵⁴ /

⁴⁴⁵ N 版では、camḍrakhaṇḍam となっている。

⁴⁴⁶ N 版では、surasaric chirasā となっているが、文法的に無理があるため、訳すとしたら「神々の川（ガンガー）を頭に乗せている者」となるだろう。

⁴⁴⁷ N 版では、yasyārdhadeham abhajaḥ となっている。この場合の訳は、「その半身を占めている」となる。

⁴⁴⁸ N 版では vāmāṅgavāsakaḥ となっている。

⁴⁴⁹ N 版では antare となっている。

⁴⁵⁰ N 版では līṅgamadhyāt となっている。

⁴⁵¹ C 版では utthita となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、N 版の utthitā を採用した。

⁴⁵² N 版では arddhāṅgam となっている。

⁴⁵³ N 版では svakīyāṅgam となっている。

phaṇīndrabaddhajūṭārdham⁴⁵⁵ arddhadhamillabhūṣitam //31//

女神よ。この時、リングの中央からあなたが現れ出た。〔あなたの〕半身は私のものとし、そして〔もう一方の〕半身は〔あなた〕自身の体〔とした〕。半〔身〕には大蛇たちが結び付けられた編髪を〔持ち、反対の〕半〔身〕は編髪に飾り立てられている。

patravallivicitrārdham arddhacandravirājitam⁴⁵⁶ /

muktāhāranibaddhārdham arddham sarpaiś ca veṣṭitam //32//

半〔身〕はつる草模様で美しく飾られ、〔反対の〕半〔身〕は〔三日〕月によって輝いている。半〔身〕はパールのネックレスをし、そして〔反対の〕半〔身〕は蛇をともなっている。

tato bhṛṅgiriṭir⁴⁵⁷ devi dṛṣṭvā tan mahad adbhutam /

cintayāmāsa⁴⁵⁸ hṛdaye mayā 'jñānād anuṣṭhitam //33//

そして、女神よ。ブリンギリティは、その偉大で不可思議な者を見て、心の中で考えた。「私によって知らずに〔間違いが〕なされてしまった。」

umā ca śaṅkaraś⁴⁵⁹ caiva deham ekaṃ sanātanam /

ekā mūrttir anirdeśyā dvidhā bhedena dṛśyate //34//

ウマーとシャンカラは永遠の一体である。分けることができない1つの姿が、2人に分かれて見えている。

5.3.ch.26.17ab

jaya tvam devadeveśa jayomārdhhaśarīradhṛk / 17ab

あなたに勝利あれ。神々の神の主（シヴァ）よ。勝利あれ。ウマーを半身として持つ者よ。

5.3.ch.26.151-152

tataḥ samvatsarasyānte⁴⁶⁰ udyāpanavidhiṃ śṛṇu /

⁴⁵⁴ N版では athārdhatāḥ となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、C版の athārdhatā を採用した。

⁴⁵⁵ N版では phaṇīndrabaddhajūṭārdham となっている。

⁴⁵⁶ N版では arddhacandravirājitam となっている。

⁴⁵⁷ N版では bhṛṅgiriṭir となっている。

⁴⁵⁸ N版では cintayāmāsa となっている。

⁴⁵⁹ N版では śaṅkaraś となっている。

madhuvṛkṣaṃ tato gatvā bahusambhārasamvṛtaḥ⁴⁶¹ //151//

nikhanet pratimāṃ madhye mādḥūkīṃ madhukasya ca /

tatrasthaṃ pūjayet sarvaṃ umādehārdḍhadhāriṇaṃ //152//

そして、1年の終わりに〔行なう〕ウディヤーパナの儀軌を聞きなさい。それから、多くの儀礼の道具を持った者（信者）は、マドゥ⁴⁶²の木所へ行き、マドゥの木から作られた神像をマドゥの木〔がある所〕の中央に設置するべきである。そこにいるウマーを半身に持つサルヴァ（全て、シヴァ⁴⁶³）を信仰するべきである。

5.3.ch.48.78

jayasva devadeveśa umārdḍhārdḍhaśarīradhṛk /

namas te devadeveśa sarvāya triṇuṇātmane //78//

勝利あれ。神々の神の主（シヴァ）よ。ウマーの半〔身〕を〔自身の〕半身として持つ者よ。神々の神の主よ。トリグナから構成されているサルヴァに敬礼する。

5.3.ch.65.5-6ab

bhairavaṃ rūpaṃ āsthāya gauryā cārddhāṅgasamsthitaḥ⁴⁶⁴ /

bhūtavetālakaṅkālair⁴⁶⁵ bhairavair bhairavo vṛtaḥ //5//

nanarta narmadātīre dakṣiṇe pāṇḍunandana⁴⁶⁶ /6ab

そして、ガウリーを半身に持つ者は、バイラヴァの姿をとって、〔その〕恐ろしいブータとヴェーターラとカンカーラ（骸骨）たちに囲まれているバイラヴァは、ナルマダー川の岸辺の南方で踊った。パードゥの息子よ。

⁴⁶⁰ N版では samvatsarasyāṃte となっている。

⁴⁶¹ N版では bahusambhārasamvṛtaḥ となっている。

⁴⁶² サトウキビと思われる。

⁴⁶³ 英訳では śarva（シャルヴァ、これもシヴァの異名の1つ）となっているが、C版およびN版において sarva となっているため、「サルヴァ」とした。

⁴⁶⁴ N版では cārddhāṅgasamsthitaḥ となっている。

⁴⁶⁵ N版では bhūtavetālakaṅkālair となっている。

⁴⁶⁶ N版では pāṇḍunandana となっている。

5.3.ch.66.2-4

mātaras tatra rājendra sañjātā narmadātaṭe⁴⁶⁷ /
 umārddhanārīr deveśo vyālayajñopavīṭadhṛk //2//
 uvāca yoginī vṛndam kaṣṭam kaṣṭam aho hara /
 ajeyāḥ sarvadevānām tvatprasādān maheśvara //3//
 tīrtham atra vidhānena prakhyātam vasudhātale /
 evam bhavatu yoginya ity uktvā 'ntaradhāc chivaḥ //4//

そして、母たちはナルマダー川⁴⁶⁸の岸边に集まった。王たちの主よ。[そこには] 蛇を聖紐として付けており、半〔身〕が女性ウマーである神々の主が [いた]。ヨーギニーは言った。「とても苦しいです。苦しいです。ああ、ハラよ。[私たちは] あなたの恩恵ゆえに、全ての神々には打ち負かされません。マヘーシュヴァラよ。地上において、このティールタが規則として有名になるようにして下さい。」シヴァは「そうあれ。ヨーギニーたちよ。」と言って消えた。

5.3.ch.72.40-43

tatra tīrthe tu ye gatvā śuciprayatamānasāḥ /
 pañcamyām⁴⁶⁹ vā caturdāśyām aṣṭam yām śuklakṛṣṇayoḥ //40//
 arcayanti⁴⁷⁰ sadā pārtha nopasarpanti⁴⁷¹ te yamam⁴⁷² /41ab
 dadhnā ca madhunā caiva ghṛtena kṣīrayogataḥ //41cd//
 snāpayanti⁴⁷³ virūpākṣam umādehārdhadhārīṇam /
 kāmāṅgadahanam⁴⁷⁴ devam aghāsuraniṣūdanam //42//

ヨーグルトと蜂蜜とギーと牛乳によって、半身がウマーであり、カーマの体を燃やし、

⁴⁶⁷ C 版では narmadā taṭe (分書) となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮し、N 版の narmadātaṭe を採用した。

⁴⁶⁸ マディヤプラデーシュ州のアマルカントク高地から、西に向かって流れ、アラビア海に注ぐ川。

⁴⁶⁹ N 版では pañcamyām となっている。

⁴⁷⁰ N 版では arcayanti となっている。

⁴⁷¹ N 版では nopasarpanti となっている。

⁴⁷² C 版では mamam となっているが、英訳を参照し、N 版の yamam を採用した。

⁴⁷³ N 版では snāpayanti となっている。

⁴⁷⁴ N 版では kāmāṅgadahanam となっている。

アガ〔という名の〕アスラを殺す者であるヴィルーパークシャ（異形の目を持つ者、シヴァ）神を沐浴せしめる〔べきである〕。

snāpyamānaṁ⁴⁷⁵ ca ye bhaktyā⁴⁷⁶ paśyanti⁴⁷⁷ parameśvaram /
yānti⁴⁷⁸ ca pare loka sarvapāpavivarjite⁴⁷⁹ //43//

そして、バクティを持って、沐浴せしめられているパラメーシュヴァラを見る者たちは、全ての罪から解放されている究極の世界へ行く。

5.3.ch.76.2cd-3

himavaddhuhitā tena gaurī nārāyaṇī nṛpa //2cd//
toṣitā parayā bhaktyā narmadottarake taṭe /
tasya tuṣṭā mahādevī śaṅkarārddhāṅgadhārīṇī⁴⁸⁰ //3//

王よ。その者（パラージャラ）によって、ナーラーヤニーであるヒマーラヤの娘ガウリーは、究極のバクティによって、ナルマダー川の北方の岸辺で崇められた。シャンカラを半身として持つマハーデーヴィーは、彼（パラージャラ）に満足した。

5.3.ch.83.19-25

gandhavāhasuto 'py evaṁ nandinoktaṁ⁴⁸¹ niśamya ca /
prayāto narmadātīram aurvyā dakṣiṇasaṅgamam⁴⁸² //19//
風の神の息子は、このように、ナンディンによって言われたことを聞き、地上の南方の合流点であるナルマダー川の岸辺に行った。
dadhyau sudakṣiṇe devaṁ virūpākṣaṁ triśūlinam /
jaṭāmukutaśamyuktaṁ vyālayajñopavītinam //20//

⁴⁷⁵ N 版では snāpyamānaṁ となっている。

⁴⁷⁶ N 版では bhaktvā となっている。この場合、訳は「そして、崇めてから、沐浴せしめられているパラメーシュヴァラを見る者たちは、全ての罪を取り除く究極の世界へ行く。」となる。

⁴⁷⁷ N 版では paśyaṁti となっている。

⁴⁷⁸ N 版では yānti となっている。

⁴⁷⁹ N 版では sarvapāpavivarjitai となっているが、英訳を参照し、語形変化を考慮して、C 版を採用した。

⁴⁸⁰ N 版では śaṅkarārddhāṅgadhārīṇī となっている。

⁴⁸¹ N 版では nandinoktaṁ となっている。

⁴⁸² N 版では dakṣiṇasaṅgamam となっている。

bhasmopacitasarvāṅgaṃ⁴⁸³ ḍamarusvaranāditam⁴⁸⁴ /

umārddhāṅgaharaṃ⁴⁸⁵ śāṃtaṃ gonāthāsanasamsthitaṃ //21//

供物を与えることにおいて公平なる神であり、不可思議な目を持ち、三叉戟を持ち、編髪を冠として持ち、蛇を聖紐にし、灰を全身に塗り、ダマルー（太鼓）の音を響かせ、ウマーの半身を持ち、寂靜なる者であり、雄牛に座り留まる者を瞑想した。

vatsarāntsubahūn yāvad upāsāṃ cakra⁴⁸⁶ īśvaram /

tāvat tuṣṭo mahādeva ājagāma sahomayā //22//

長い間⁴⁸⁷、神を崇め続けたところ、喜んだマハーデーヴァは、ウマーと共にやってきた。

uvāca madhurāṃ vāṇīm meghagambhīranisvanām⁴⁸⁸ /

sādhū sādhu ity uvāceśaḥ kaṣṭhaṃ vatsa tvayā kṛtaṃ //23//

〔彼は〕雲が発する深い音のする甘い声を発した。「良し。良し。」とイーシャは言った。
「過酷なこと（苦行）がお前によってなされた。息子よ。」

na ca pūrvaṃ tvayā pāpaṃ kṛtaṃ rāvaṇasaṅkṣaye⁴⁸⁹ /

svāmikāryar atas tvaṃ hi siddho 'si mama darśanāt //24//

以前にラーヴァナの完全な抹殺において、お前によっては罪はなされなかった。主人の仕事喜んでなしたお前は、私を拝謁することによってまさに成就者となった。」

hanumāṃś ca haraṃ dr̥ṣṭvā umārddhāṅgaharaṃ⁴⁹⁰ sthitaṃ /

sāṣṭāṅgaṃ⁴⁹¹ praṇato⁴⁹² 'vocaḥ jaya śambho⁴⁹³ namo 'stu te /

jayā 'ndhakavināśāya⁴⁹⁴ jaya gaṅgāśirodhara⁴⁹⁵ //25//

そしてハヌマーンは、ウマーの半身を持つ〔そこに〕立っているハラを見て、彼は八肢〔を投地して〕敬礼して言った。「勝利あれ。シャンプよ。あなたに、敬礼します。勝利あれ。アンダカの殺戮者よ。勝利あれ。ガンガーを頭で支える者よ。」

483 N 版では bhasmopacitasarvāṅgaṃ となっている。

484 言葉の意味が不明である。

485 N 版では umārddhāṅgaharaṃ となっている。

486 C 版では upāsāṅjakra となっているが、英訳を参照し、N 版の upāsāṃ cakra を採用した。

487 意味が不明だったので、英訳を参照し、訳した。

488 N 版では meghagambhīranisvanām となっている。

489 N 版では rāvaṇasaṅkṣaye となっている。

490 N 版では umārddhāṅgaharaṃ となっている。

491 N 版では sāṣṭāṅgaṃ となっている。

492 C 版では praṇayo となっているが、ここでは N 版の praṇato を採用した。

493 N 版では śambho となっている。

494 N 版では 'ndhakavināśāya となっている。

495 N 版では gaṅgāśirodhara となっている。

6.ch.48.27-32

purā devi mayānandapūre⁴⁹⁶ vyākulacetasā /

na natā tvaṃ na me kopam tasmāt tvaṃ kartum arhasi //27//

女神よ。以前、至福の流れの中で心をかき乱された私によって、あなたは敬礼されなかった。そのことで、あなたは私に怒らないでください。

dehārdhadhāriṇī devi sadā tvaṃ śūladhāriṇaḥ /

tadaikasmin nate kasmin na natā tvaṃ vadasva me //28//

女神よ。あなたは常に、三叉戟を持つ者の半身を持つ者である。それゆえ、誰かが敬礼される〔べき〕時、どうしてあなたが敬礼されないことがあるのか？私に話してください。

yas taṃ namati deveśaṃ tena tvaṃ sarvadā natā /

natāyāṃ tvayi deveśo nataḥ syād iti me matiḥ //29//

かのデーヴェーシャを崇める者によって、あなたは常に敬礼される。あなたが敬礼される時、デーヴェーシャは敬礼されるだろうと私は思う。

tathāpi ca prthaktvena mayā tvaṃ tu natā saha /

ekāsanam samārūḍhā tatsamaṃ devi pūjitā //30//

そして、あなたは〔シヴァと〕一緒であっても、別々であっても、私によって敬礼された。女神よ。〔あなたはシヴァと〕1つの座に座することによって同様に信仰される。

tasmāt kuru prasādam me yaḥ puroktaḥ purāriṇā /

so 'stu⁴⁹⁷ vai saphalaḥ sadyo varaḥ putrakṛte mama //31//

それゆえ、私に恩恵を下さい。プラの敵⁴⁹⁸によって以前に言われた〔恩恵、すなわち〕、私が息子をもうけるという恩恵がすぐに実現しますように。

yathā vaṃśadharāḥ putro dīrghāyur dṛḍhavigrahāḥ /

tvatprasādād bhaved devi tathā tvaṃ kartum arhasi //32//

あなたの恩恵から、家系の存続と息子の長寿と堅実な栄華になるように、そのようにして下さい。女神よ。

6.ch.134.18-19

aham puṣpaśaro loke prasiddhaś cāruhāsini /

⁴⁹⁶ N版では mayānamdapūre となっている。

⁴⁹⁷ N版では sostu となっている。これはアヴァグラハ記号を省略しているものと考えられる。

⁴⁹⁸ 辞書によるとヴィシュヌのことである。

viḍambanām⁴⁹⁹ mayā nītā devā api nijaiḥ śaraiḥ //18//

美しい笑顔の女性よ。私は世界において花の矢の神として知られている。神々でさえ、私によって私自身の矢によって、困惑に導かれる。

madbāṇenāhato rudraḥ svaśarīre nitambinīm⁵⁰⁰ /

arddhena dhārayāmāsa tyaktvā lajjāṃ sudūrataḥ //19//

私の矢によって貫かれたルドラは、羞恥心を遠くへと捨て、自身の身体の半身に大きく美しい腰を持つ女性を得た。

6.ch.178.41-45

yasya vrkṣasya puṣpaṃ ca tasya syād dantadhāvanam /

mātuliṅgena⁵⁰¹ tasyās tu mantreṇānena bhaktitaḥ //39//

arghyaṃ dadyāt prayatnena gandhapuṣpākṣatānvitam /

śaṅkarasya⁵⁰² priye devi himācalasute śubhe /

arghyam enaṃ mayā dattaṃ pratigrhṇa namo 'stu te //40//

〔一般の規則では〕花⁵⁰³を持っているその同じ木で歯みがきをするべきである。しかし、彼女（信仰対象の女神）にはこの〔次の〕マントラによって信愛と共にマートゥリング（ザクロの木）によって、香と花と米をともなうアルギヤを捧げるべきである。「シャンカラの愛しき者よ。女神よ。ヒマーラヤの娘よ。輝く者よ。私によってなされたそのアルギヤを受け入れたまえ。あなたに敬礼する。」

tad eva prāśanam kuryāt tataḥ kāyaviśuddhaye /

praharānte⁵⁰⁴ ca sampūjya⁵⁰⁵ ardhanārīśvaram tataḥ //41//

まさにそれから、体の浄化のために、プラハラ⁵⁰⁶が終わる〔毎〕にアルダナーリーシュヴァラを崇め、そして食べ物をなす⁵⁰⁷べきである。

surabhyā pūjayed bhaktyā mantreṇānena pārvati /

vāmam ardhaṃ śarīrasya yā harasya vyavasthitā /

sā me pūjāṃ pragrṇātu tasyai devyai namo 'stu te //42//

499 C版では biḍambanām となっているが、語意を考慮し、N版の viḍambanām を採用した。

500 N版では nitambinīm となっている。

501 N版では mātuliṅgena となっている。

502 N版では śaṅkarasya となっている。

503 前文 38 偈によると、その人のジャーティの花とされる。

504 N版では praharānte となっている。

505 N版では sampūjya となっている。

506 1 プラハラは約 3 時間であり、1 日が 8 プラハラから成っている。

507 食事をするという意味か、食べ物を捧げるという意味かは分からない。

香によって⁵⁰⁸信愛と共にこの〔以下の〕マントラによって崇めるべきである。「パールヴァティーよ。ハラの体の左半分に依拠する者、その者は、私のプージャーを受け入れるべきである。かの女神であるあなたに敬礼する。」

agaruṃ ca tato bhaktyā dhūpaṃ dadyāt tathā śubhe /

naivedye guṇakāṃś caiva nālikerena cārghakam //43//

それから、信愛によって香である伽羅を捧げるべきである。同様に、吉祥なナイヴェーディヤにおいて、グナカ（増やす物）を〔捧げるべきである〕。さらに、まさにココナッツと共にアルガカを〔捧げるべきである〕。

mantreṇānena dātavyaṃ tad eva prāśanaṃ smṛtam /

ardhanārīśvarau yau ca saṃsthitau parameśvarau //44//

arghyo me grhyatām devau syātaṃ sarvasukhapradau /45ab

この〔以下の〕マントラと共に、まさにそのすでに知られている述べられた食べ物が捧げられるべきであろう。「パラメーシュヴァラである 2 人のアルダナーリーシュヴァラよ。私のアルギヤを受け取ってください。2 人の神よ。あなた方は全ての喜びを与える者であれ。」

6.ch.254.85cd-104

evaṃ prasādiṭaḥ śambhur hr̥ṣṭātmā tridaśaiḥ saha //85cd//

このように神々と共に崇められたシャンブは、自身の中で喜んだ。

tīrṇavrataparānandanirbharaḥ⁵⁰⁹ prāha tām umām /

ya imāṃ matstutiṃ bhaktyā paṭhiṣyati tavodgatām /

tasya ceṣṭaviyogas ca na bhaviṣyati pārvati //86//

誓願が成就した大きな喜びに満たされた者（シヴァ）は、かのウマーに言った。「バクティによって、あなたに生じた私へのこの讃歌を唱える者、その者には愛する人からの離別はないだろう。パールヴァティーよ。

janmatrayadhanair yuktaḥ sarvavyādhivivarjitaḥ /

bhuktveha vividhān bhogān ante⁵¹⁰ yāsyati matpuram //87//

〔さらにその者は〕3 回生まれるという富を持ち、全ての障害から解放され、この世で様々な喜びを享受し、最終的に我が地へ行くであろう。」

ity uktvā tām maheśo 'pi svam aṅgaṃ⁵¹¹ pradadau tataḥ /

⁵⁰⁸ 英訳では、with (scents?)となっており、surabhī が香ではない可能性もある。

⁵⁰⁹ N 版では tīrṇavrataparānamdanirbharaḥ となっている。

⁵¹⁰ N 版では ante となっている。

⁵¹¹ N 版では aṅgaṃ となっている。

vaiṣṇavaṃ vāmathāgam sā pratijagrāha pārvatī //88//

と、彼女に言って、それからまさにマヘーシャは、自身の身体、すなわちヴィシュヌに分け与えている左〔半〕身を与えた。かのパールヴァティーは〔それを〕手に入れた。

śarvaṃ kapālahastaṃ ca grīvārdhe garalānvitam /

ruṇḍamālārddhahāraṃ ca sitagauram samantataḥ⁵¹² //89//

〔それは〕シャルヴァであり、カパーラを手にしており、首の半分に毒を持っており、頭のない〔身体の〕ネックレスを半〔身〕に着けており、全体的に白く輝いている〔体〕を〔持っていた〕。

brahmāṇḍakoṭījanakaṃ⁵¹³ jaṭābhir bhūṣitaṃ śiraḥ /

sitadyutikalākhaṇḍaratnabhāsāvabhāsitaṃ⁵¹⁴ //90//

〔さらに〕何千万のブラフマーンダ（宇宙卵）を生み出し、蓬髪によって飾られた頭を〔持ち〕、白く煌めく三日月〔型〕の宝石の美しさに輝いている〔体〕を〔持っていた〕。

svaṇṇābharaṇasaṃyuktaṃ ekato bhujagāṅgadaṃ⁵¹⁵ /

ekataḥ kṛttivasanam anyataḥ paṭṭakūlavat //91//

〔一方の側（女性）に〕、金の装飾品を着け、〔反対側の〕一方（男性）には、蛇の腕輪を〔着けている〕。一方（男性）に、〔ゾウの⁵¹⁶〕皮をまとい、他方（女性）に、絹の衣⁵¹⁷を〔まとっている〕。

matsyavāhanasaṃyuktaṃ anyato vṛṣabhāṅkitaṃ⁵¹⁸ /

ekataḥ pārśadaiḥ sevyam anyataḥ sakhisevitaṃ //92//

〔一方に〕、マツヤヴァーハナ（魚の乗り物）を従えており、他方に、雄牛の旗印を持つ。一方では、パールシャダ（従者）たちに仕えられており、他方では、女性従者につき従われている。

rūpaṃ evaṃvidhaṃ dṛṣṭvā brahmādyā devatāgaṇāḥ /

tuṣṭuvuḥ parayā bhaktyā tejobhūṣitalocanam //93//

このような類の姿を見て、ブラフマーをはじめとする神々の一団は、光り輝いた目を持つ者（シヴァ）を、最高のバクティによって、崇めた。

evam eko bhagavān sarvavyāpakāḥ sarvadehinām /

pitṛvad rakṣako 'si tvaṃ mātā tvaṃ jīvasaṃjñakaḥ //94//

⁵¹² N 版では samantataḥ となっている。

⁵¹³ N 版では brahmāṇḍakoṭījanakaṃ となっている。

⁵¹⁴ C 版では sitadyutikalākhaṇḍaratnabhāsāvabhāsitaṃ となっているが、英訳を参照し、N 版の sitadyutikalākhaṇḍaratnabhāsāvabhāsitaṃ を採用した。

⁵¹⁵ N 版では bhujagāṅgadaṃ となっている。

⁵¹⁶ 英訳を参照し、このように訳した。

⁵¹⁷ 英訳を参照し、このように訳した。本来 kūlavat は furnished with shores という意味である。

⁵¹⁸ N 版では vṛṣabhāṅkitaṃ となっている。

あなた 1 人が吉祥者であり、全ての体の中にいる遍在者である。あなたは父のような守護者である。あなたは母であり、ジーヴァ（生命）という名を持つ者である。

sāksī viśvasya bījaṃ tvaṃ brahmāṇḍavaśakārakaḥ⁵¹⁹ /

utpadyante⁵²⁰ viliyante⁵²¹ tvayi brahmāṇḍakoṭayaḥ⁵²² //95//

あなたは目撃者であり、全宇宙の種であり、ブラフマーンダ（宇宙卵）を制御しようとする者である。何千万ものブラフマーンダは、あなたの中で生じて、壊れていく。

ūrmayaḥ sāgare nityaṃ salile budbudā yathā /

ahaṃ kadācit te netrāt kadācit tava bhālataḥ //96//

kvacit saṅge⁵²³ śivādevyā prādurbhūtvā sṛje jagat /

tavājñākariṇaḥ sarve vayaṃ brahmādayaḥ surāḥ //97//

常に海の波のように、水の泡のように、私⁵²⁴はある時はあなたの目から、ある時はあなたの額から、ある時はシヴァー女神と共に現れ、世界を創る。ブラフマーをはじめとする神々である我々は皆、あなたの命令を遂行する者たちである。

anantavaibhavo⁵²⁵ 'nanto⁵²⁶ 'nantadhāmā⁵²⁷ 'sy anantakaḥ⁵²⁸ /

anantaḥ⁵²⁹ sarvabhaṅgāya⁵³⁰ kuruṣe rūpam adbhutam //98//

〔あなたは〕永遠の力を持つ者であり、永遠である永遠の輝きであり、永遠者であり、永遠であり、全てを壊すために、不可思議な姿になる。

bhavāni tvaṃ bhayaṃ nityaṃ aśivānāṃ pavitrakṛt /

śivānāṃ api dātrī tvaṃ tapasām api tvaṃ phalam //99//

バヴァーニーよ。あなたは、常に不吉なものへの恐れを浄化する。あなたは、吉祥なものを与える者である。あなたはまさに苦行の果である。

yaḥ śivaḥ sa svayaṃ viṣṇur yo viṣṇuḥ sa sadāśivaḥ /

ity abhedamatir jātā svalpā nas tvatprasādataḥ //100//

シヴァである者自身がヴィシュヌである。ヴィシュヌである者はサダーシヴァである。

⁵¹⁹ N 版では brahmāṇḍavaśakārakaḥ となっている。

⁵²⁰ N 版では utpadyante となっている。

⁵²¹ N 版では viliyante となっている。

⁵²² N 版では brahmāṇḍakoṭayaḥ となっている。

⁵²³ N 版では saṅge となっている。

⁵²⁴ この人物が誰であるかは特定できないが、ブラフマーをはじめとする神々の中の 1 名であると予測できる。ブラフマーもしくはヴィシュヌの可能性が高いだろう。

⁵²⁵ N 版では anantavaibhavo となっている。

⁵²⁶ N 版では 'namto となっている。

⁵²⁷ N 版では 'nantadhāmā となっている。

⁵²⁸ N 版では anantakaḥ となっている。

⁵²⁹ N 版では anantaḥ となっている。

⁵³⁰ N 版では sarvabhaṅgāya となっている。

あなた（バヴァーニー）の恩恵によって、我々に、小さいけれども、このような同一であるという理解が生じた。

yat kiñcic ca jagat yasmin dṛśyate śrūyate 'pi vā /

madhye bahiś ca tat sarvaṃ trayam vyāpya sthitā yadā //101//

〔世界の〕内と外で、何であれ世界が見られたり聞かれたりするその三界全体に、〔あなた（バヴァーニー）が〕満ちて、浸透している。

jagatpūjye sureśāni jagadvandye⁵³¹ tathāmbike⁵³² /

prasādaṃ kuru deveśi deveśa prañatā vayam //102//

世界で崇められるべき神々の中の女神よ。世界から尊敬される者よ。アンビカーよ。神々の中の女神よ。恩恵を与えたまえ。神々の中の神よ。我々は敬礼する。

ity uktvā tridaśāḥ sarve hr̥ṣṭā jagmur yathāgatam //103//

このように言って、喜んだ神々は、来た〔時と同じ〕ように帰った。

gālava uvāca //

ガーラヴァは言った。

taddivya rūpam atulaṃ bhuvi ye manuṣyāḥ saṃsārasāgarasamuttaraṇaikapotam /

sañcintayanti⁵³³ manasā hr̥takilbiśās te brahmasvarūpam anuyānti⁵³⁴ vimuktasaṅgāḥ⁵³⁵ //104//

地上において比類ない、かの〔アルダナーリーシュヴァラの〕神聖な姿をしており、輪廻の海を越える1枚のいかだ〔に例えられる〕者を、心の中で人々が念想する、そのような人々は、罪を取り除かれ、執着から離れ、ブラフマーの姿と同一になる。

6.ch.255.7-9

yaḥ śṛṇoti naro bhaktyā vācyamānām imāṃ kathām /

girīśanṛtyasambandhām umādehārddhavarṇitām //7//

brahmaṇaḥ stutisaṃyuktām sa gacchet paramām gatim /8ab

ギリシャの踊りとウマーによって得られた体の半〔身〕とブラフマーの賛辞に関して語られたこの物語を聞く者は、バクティと共に最高の帰趨〔境地〕に達する。

ślokārddham ślokapādaṃ vā samastaṃ ślokaṃ eva vā //8cd//

yaḥ paṭhed avirodhena māyāmānavivarjitaḥ /

sa yāti paramaṃ sthānaṃ yatra gatvā na śocati //9//

⁵³¹ N版では jagadvandye となっている。

⁵³² N版では tathāmbike となっている。

⁵³³ N版では sañcintayanti となっている。

⁵³⁴ N版では anuyānti となっている。

⁵³⁵ N版では vimuktasaṅgāḥ となっている。

シュローカの半分、もしくはシュローカの 4 分の 1、もしくはシュローカ全てを、マーヤーと虚栄心⁵³⁶を捨て、抵抗せずに唱える者は、そこに行けば悲嘆に暮れることのない、最高の地に至る。

6.ch.255.26-28

śaṅkhaś ca dakṣiṇāvarto lakṣmīnārāyaṇātmakaḥ /

tulasī kṛṣṇasāro 'tra yatra dvāravatī śilā /

tatra śrīr vijayo viṣṇur muktir evaṃ catuṣṭayam //26//

ラクシュミーナーラーヤナと同一視される右巻きのほら貝とトゥラスィーとクリシュナサーラとドヴァーラヴァティーという石の〔4 つが〕ある場所には、シュリーとヴィジャヤとヴィシュヌとムクティの 4 つが、同様に(前述の 4 つのもののように)〔ある〕。

lakṣmīnārāyaṇe pūjāṃ vidhātur manuṣya tu /

dadāti puṇyam atulaṃ mukto bhavati tatkaṣaṇāt //27//

〔上記の 4 つが、〕ラクシュミーナーラーヤナに対してプージャーをなす者に、比類ない美徳を与え、即座に解脱する。

cāturmāsye viśeṣeṇa pūjyo lakṣmīyuto hariḥ //28//

チャートウルマースヤにおいては、ラクシュミーと共なるハリが、特に崇められるべきである。

7.1.ch.3.40

arddhāṅgasamsthayā⁵³⁷ vāpi tvadvaktradyānakāmyayā /

tathāpi te jagannātha nānto⁵³⁸ labdho⁵³⁹ maheśvara //40//

あなた（シヴァ）の顔を瞑想するという望みのために、〔あなたの〕半身となったのだが、あなたの目的は得られなかった。ジャガンナータ（世界の主、シヴァ）よ。マヘーシュヴァラよ。

⁵³⁶ 英訳を参照し、このように訳したが、「マーヤーの心を」という訳も可能である。

⁵³⁷ N 版では arddhāṅgasamsthayā となっている。

⁵³⁸ N 版では nānto となっている。

⁵³⁹ C 版、N 版共に labdhvo となっているが、語形変化などを考慮し、labdho とした。

7.1.ch.25.19-20

om namaḥ pañcavaktrāya daśabāhutrinetrine /

śvetam vṛṣabham ārūḍha śvetābharaṇabhūṣita //19//

「オーム。五面十臂と三つ目を持つ者に敬礼する。白い雄牛に乗る者よ。白い装飾で飾られた者よ。

umādehārdhasaṃyukta⁵⁴⁰ namas te sarvamūrtaye /

anenaiva tu mantreṇa⁵⁴¹ pūjāṃ homaṃ ca kārayet //20//

ウマーを半身としている者よ、全ての姿であるあなたに敬礼する。そして、まさにこのマントラによって、プージャーとホーマ（護摩）をなすべきである。」

7.2.ch.9.1-17（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

brahmovāca //

ブラフマーは〔シヴァに〕言った。

yadā sṛṣṭaṃ mayā sarvaṃ trailokyam sacarācaram /

tadā mūrtim imāṃ tyaktvā bhavaḥ sṛṣṭo mayā 'dhunā //1//

pitāmahamahat tvaṃ syāt tathā śighraṃ vidhīyatām /

brahmaṇo vacanaṃ śrutvā viṣṇunā sa promoditaḥ //2//

mahadāścaryaṇake saṃprāpto girim ūrddhani /

na vicāras tvayā kāryaḥ karttavyaṃ brahmabhāṣitam //3//

「私によって、動くものから動かないものまでの三界の全て〔のもの〕が創られた時、私はこの姿を捨て、その時バヴァを創ろう。汝は、ピターマハの偉大さとなるだろう。直ちに、そのように創りなさい。」ブラフマーの言葉を聞き、ヴィシュヌに促されて、非常に不思議な山頂にやってきた。あなたによって思議されるべきではなく、ブラフマーに言われたことをなすべきである。

tathety uktvā śivo devas tatraivāntaradhīyata⁵⁴² /

brahmā yayau meruśṛṅgaṃ manasaḥ śirasi sthitam //4//

「分かりました。」と言って、シヴァ神はそこから消えた。ブラフマーは頭の中のメー
ル山の山頂に心で行った。

tapas tepe prajānātho vedoccāraṇatatparaḥ /

atharvavedoccaraṇaṃ yāvac cakre pitāmahaḥ //5//

⁵⁴⁰ C 版では umādehārdhasaṃyuktaṃ となっているが、英訳を参照し、N 版の umādehārdhasaṃyukta を採用した。

⁵⁴¹ N 版では mantreṇa となっている。

⁵⁴² N 版では tatraivāntaradhīyata となっている。

ヴェーダの朗唱に通曉したピターマハである創造主は、苦行をし、アタルヴァヴェーダを朗誦した。

mukhād rudraḥ samabhavad raudrarūpo bhavāpahaḥ /
arddhanārīnaravapur duṣprekṣyo 'tibhayaṅkaraḥ⁵⁴³ //6//

〔ブラフマーの〕口から、恐ろしい姿をした者であり、破壊から生まれた者であり、見るのが困難な者であり、大きな恐怖を感じさせる者であり、半身が女性である男性の姿のルドラが生まれた。

vibhajātmānam ity uktvā brahmā cāntardadhe⁵⁴⁴ bhayāt /
tathokto 'sau dvidhā stritvaṃ puruṣatvaṃ tathā 'karot //7//

「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、ブラフマーは恐れから消えた。このように言われ、その者は、女性要素と男性要素の2つを創った。

vibheda puruṣatvaṃ ca daśadhā caikadhā punaḥ /
ekādaśaite kathitā rudrās tribhuvaneśvarāḥ //8//

そしてさらに、男性要素を11に分けた。これらの11人はルドラと呼ばれる三界の支配者である。

kṛtvā nāmāni sarveṣāṃ devakārye niyojitāḥ /
vibhajya punar īśāni svātmānaṃ śaṃkarād vibhoḥ //9//
mahādevaniyogena pitāmaham upasthitā /
tām āha bhagavān brahmā dakṣasya duhitā bhava //10//

全てのものに命名し、〔彼らは〕神の仕事を担った。さらにシャンカラ神から自分自身を分けて〔創られた〕イーシャーニー（女性半身）は、偉大な神（シヴァ）の命令により、ピターマハに近づいた。ブラフマー神は彼女に「ダクシャの娘になれ。」と言った。

sāpi tasya niyogena prādur āsīt prajāpateḥ /
niyogād brahmaṇo dakṣo dadau rudrāya tām satīm //11//

彼女も、彼（ブラフマー）の命令により、創造者（ダクシャ）から現れた。ダクシャはブラフマーの命令により、ルドラにかのサティーを与えた。

dākṣiṇ rudro 'pi jagrāha svakīyām eva śūlabhṛt /
atha barhmā babhāṣe taṃ sṛṣṭiṃ kuru satīpate //12//

三叉戟を持つ者であるルドラも、その人自身（ルドラ）であるダクシャの娘を受け入れた。そして、ブラフマーは彼に「創造をせよ。サティーの夫よ。」と言った。

rudra uvāca //

ルドラは言った。

sṛṣṭir mayā na karttavyā karttavyā bhavatā svayam /
pālanam viṣṇunā kāryam saṃhartā 'ham vyavasthitaḥ //13//

⁵⁴³ N版では 'tibhayaṃkaraḥ となっている。

⁵⁴⁴ N版では cāntardadhe となっている。

創造は私によってなされるべきではなく、あなた自身によってなされるべきである。維持はヴィシュヌによってなされるべきである。私は破壊者となる。

sthāṇuvatsaṁsthito yasmāt tasmās sthāṇur bhavāmy aham //14//

柱のようにとどまるが故に、私はスターヌ〔と呼ばれる者〕となるであろう。

rajoṛūpāḥ sattvarūpās tamorūpās ca ye narāḥ /

sarve te bhavatā kāryā guṇatrayavibhāgataḥ //15//

yadā te tāmasaiḥ kārya tadā raudro bhava svayam /

yadā te rājasaiḥ kārya tadā tvam rājaso bhava /

sāttvikais te yadā kārya tadā tvam sāttviko bhava //16//

ラジャスの形や、サットヴァの形、タマスの形の人間たちは皆、あなたによって、グナの3要素から〔創造〕されるべきである。彼らがタマスのなものによって創られる時、自身でルドラのものとなれ。彼らがラジャス的なもの〔によって創られる〕時、汝はラジャス的なものとなれ。彼らがサットヴァ的なもの〔によって創られる〕時、汝はサットヴァ的なものとなれ。

īśvara uvāca //

イーシュヴァラは言った。

ity ājñāpya ca brahmāṇaṁ svayaṁ sṛṣṭyādikarmasu /

grhītvā tāṁ satīṁ rudraḥ kailāsam adhiṣṭhati //17//

そしてこのように、創造などの仕事にブラフマー自身を任命して、ルドラはかのサティーを得て、カイラーサ山に住む〔ようになった〕。

Vāmana-purāṇa :A 版（底本、英訳）

ch.23.35⁵⁴⁵

umāśarīrārdhahara /

半身がウマーであるハラ。

ch.57.11⁵⁴⁶

tatra devavaraṃ śaṃbhum arddhanārīśvaraṃ haram /

dr̥ṣṭvārcya⁵⁴⁷ saṃpūjya pītṛn mahendraṃ cottaraṃ gataḥ //11//

そこで、最高神シャンブであり、アルダナーリーシュヴァラであるハラを見て、ピトリ達を崇め、そして〔プラフラダは〕北のマヘンドラへ行った。

ch.61.7⁵⁴⁸

namasye ca gadāpāṇiṃ namasye ca kuśeśayam /

ardhanārīśvaraṃ devaṃ namasye pāpanāśanam //7//

ガダーパーニ（こん棒を持つ者）に敬礼する。クシェーシャヤ⁵⁴⁹に敬礼する。アルダナーリーシュヴァラ神に敬礼する。パーパナーシャナ（不正を壊す者）に〔敬礼する〕。

ch.63.10cd

ardhanārīśvaraṃ puṇye mātendre dakṣiṇe girau //10cd//

吉祥な山マヘンドラの南においては、アルダナーリーシュヴァラ〔の姿〕を〔している〕。

⁵⁴⁵ 神々や聖仙たちが唱えたシヴァ讃歌の一部である。35 偈と 36 偈の間に挿入されている偈である。

⁵⁴⁶ プラフラダが様々なところで沐浴し苦行する物語の一部である。

⁵⁴⁷ arcya（動詞√arc、崇める）はアルダナーリーシュヴァラに対しての行為か、ピトリ達に対しての行為か、明確ではない。英訳では、ピトリ達に対しての行為ととらえている。

⁵⁴⁸ 唱えることで罪を壊す第二のパーパナーシャナ讃歌の一部である。

⁵⁴⁹ クシャ草に横たわること、水に横たわること、睡蓮などの意味があるが、明確には不明である。

Varāha-purāṇa :B 版（底本）、AITM 版（英訳）

ch.2.13-20（ブラフマー創造神話）

evambhūtasya me devi nābhipadme⁵⁵⁰ caturmukhaḥ /

uttasthau sa mayā proktaḥ prajāḥ sṛja mahāmate //13//

このようになっている私（ヴァラーハ）の臍の蓮の上に四面〔のブラフマー〕が現れ出た。女神よ。マハーマティ（思慮深き者）よ。私は彼（ブラフマー）に「生類を創造せよ」と言った。

evam uktvā tirobhāvaṃ gato 'haṃ so 'pi cintayan /

āste yāvaj jagaddhātri nādhyagacchat tu kiñcana //14//

tāvat tasya mahāroṣo brahmaṇo 'vyaktajanmanaḥ /

sambhūya tena bālaḥ syād eko roṣātmasambhavaḥ //15//

このように言って私は消えた。世界の母よ。彼（ブラフマー）もまさにどのように〔すべきか〕を考えて、かの未顕現から生まれたブラフマーが非常に怒り、それによって〔ブラフマー〕自身の怒りから生まれた一人の男の子が生まれ出るであろう時まで、留まった。

yo rudan vāritas tena brahmaṇāvyaktamūrttinā /

bravīti nāma me dehi tasya rudreti so dadau //16//

泣いている彼はかの未顕現の姿のブラフマーによって〔泣くことを〕止められ、「私に名前を下さい」と言った。それゆえ〔ブラフマーは〕その者にルドラという〔名を〕与えた。

so 'pi tena sṛjasveti prokto lokam imaṃ śubhe /

aśaktaḥ so 'tha salile mamajja tapase dhṛtaḥ //17//

吉祥な女性よ。彼（ルドラ）はまた彼（ブラフマー）によって「この世界を創造せよ」と言われた〔が、しかしルドラには〕不可能だったので、水へ飛び込み、苦行に専念しようとした。

tasmin salilamagne tu punar anyam prajāpatim /

brahmā sasarjja bhūteṣu dakṣiṇāṅguṣṭhataḥ param //18//

しかし彼（ルドラ）が水に沈んでいる間に、ブラフマーは再び、生類たちの間に、他の最高のプラジャーパティ（創造者）を、右の親指から、創った。

vāme caiva tathāṅguṣṭhe tasya patnīm athāsṛjat /

sa tasyām janayāmāsa manuṃ svāyambhuvaṃ prabhuḥ //19//

その後、まさに同様に、左の親指において彼（プラジャーパティ）の妻を創った。かの

⁵⁵⁰ B 版は nāmbhipadme だが、英訳を参照し、nābhipadme とした。

神（プラジャーパティ）は彼女（妻）の中にスヴァーヤンブヴァ・マヌを創り出した。
tasmāt sambhāvitā buddhiḥ prajānāṃ brahmaṇā purā //20//

このように以前に、ブラフマーによる生類の〔創造に関する〕知が得られたのである。

ch.2.42-51（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

dharāṇy uvāca //

ダラニー（大地）は言った。

navadhā sṛṣṭir utpannā brahmaṇo 'vyaktajanmanaḥ /

kathaṃ sā vavṛdhe deva etan me kathayācyuta //42//

未顕現から生まれたブラフマーの9種の創造が起きた。それはどのように神において増えたのか。それを私に語りなさい。不滅の者よ。

varāha uvāca //

ヴァラーハは言った。

prathamam brahmaṇā sṛṣṭā rudrādyās tu tapodhanāḥ /

sanakādayas tataḥ sṛṣṭā marīcyādaya eva ca //43//

初めにルドラを始めとする偉大な苦行者たちがブラフマーによって創造された。それから、サナカなどが、そしてマリーチなどが創られた。

marīcir atris ca tathā āṅgirāḥ pulahaḥ kratuḥ /

pulastyaś ca mahātejāḥ pracetā bhṛgur eva ca /

nārado daśamaś caiva vaśiṣṭhaś ca mahātapāḥ //44//

〔それは〕マリーチ、アトリ、アングiras、プラハ、クラトゥ、プラスティヤ、偉大な輝きを持つプラチエータス、ブリグ、ナーラダと、10番目が偉大な苦行者ヴァシシュタである。

sanakādayo nivṛttyākhye tena dharmme prayojitāḥ /

pravṛttyākhye marīcyādyā muktvaikaṃ nāradaṃ munim //45//

彼（ブラフマー）によって、サナカたちは自制という名の性質を付与され、聖仙ナーラダ1人を除くマリーチなどは活動という名〔の性質を付与された〕。

yo 'sau prajāpatis tvādyo dakṣiṇāṅguṣṭhasambhavaḥ /

tasyādau tatra vaṃśe tu jagad etac carācaram //46//

それが最初のプラジャーパティで、〔ブラフマーの〕右の親指から生まれた者である。そこで、彼（プラジャーパティ）の系譜の最初に、この動くものや動かないものから成る世界が〔生じた〕。

devāś ca dānavāś caiva gandharvvoragapakṣiṇaḥ /

sarvve dakṣasya kanyāsu jātāḥ paramadhārmikāḥ //47//

神やダーナヴァ、ガンダルヴァ、蛇、鳥、という高德なもの全てがダクシャの娘たちから生まれた。

yo 'sau rudreti vikhyātaḥ putraḥ krodhasamudbhavaḥ /

bhrukuṭīkuṭilāt tasya lalāṭāt parameṣṭhinaḥ //48//

かのルドラと呼ばれる息子は、かのパラメーシュティンの眉をしかめた額から、怒りによって生まれた。

arddhanārīnaravapuḥ pracaṇḍo 'tibhayaṅkaraḥ /

vibhajātmānam ity uktvā brahmā cāntardadhe punaḥ //49//

〔それは〕半身が女性である男性の姿をしており、大きく、非常に恐ろしい姿であった。

「〔汝〕自身を分けよ。」と言ってブラフマーは再び消えた。

tathokto 'sau dvidhā strītvam puruṣatvam cakāra saḥ /

bibheda puruṣatvam ca daśadhā caikadhā ca saḥ //50//

彼はそのように言われ、女性要素と男性要素の2つになった。彼は、男性要素を11に分けた。

tatas tv ekādaśa khyātā rudrā brahmasamudbhavāḥ //51//

そこで、11人のルドラはブラフマーから生まれたものとして知られる〔ようになった〕。

Vāyu-purāṇa :Ā 版（底本）、N 版、AITM 版（英訳）

ch.9.67-84（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

evam bhūtāni sṛṣṭāni carāṇi sthāvarāṇi ca /

yadāsyā⁵⁵¹ tāḥ prajāḥ sṛṣṭā na vyavardhanta dhimataḥ //67⁵⁵²//

このように〔ブラフマーによって〕動くものや動かないものという存在が生み出された。彼の思考〔によるもの〕だったにもかかわらず、これらの創造された生類は繁栄しなかった。

athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmano 'srjat /

bhṛguṃ pulastyam pulaham kratum āṅgirasam tathā //68//

marīciṃ dakṣam atrim ca vasiṣṭham caiva mānasam /

nava brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ //69//

teṣāṃ brahmātmakānām vai sarveṣāṃ brahmavādinām /70ab

それから彼は、自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、アンギラス、マリーチ、ダクシヤ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。彼らは 9 人のブラフマーとしてプラーナ聖典に定められている。彼らは皆、ブラフマー自身であり、ヴェーダに関して語れる者である。

tato 'srjat punar brahmā rudraṃ roṣātmasambhavam //70cd//

saṃkalpaṃ caiva dharmam ca pūrveṣāṃ api pūrvajāḥ /71ab

そして、祖先の中の祖先ブラフマーはさらに、自身の怒りから生まれたルドラと、サンカルパとダルマを創った。

agre sasarija vai brahmā mānasān ātmanaḥ samān //71cd//

sanandanam sasanakam vidvāṃsam ca sanātanam /

sanatkumāram ca vibhum sanakam ca sanandanam //72//

na te lokeṣu sarjjante⁵⁵³ nirapekṣāḥ sanātanāḥ /73ab

初めに、ブラフマーは自身に似た心から生まれた息子たち、サナカをともなったサナンダナと博識なサナータナと遍在するサナトクマーラ（とサナカとサナンダナ⁵⁵⁴）を創った。彼らは、世界〔の創造〕に無関心であり、永遠であるので〔創造を〕もたらさない。

sarve te hy āgatajñānā vītarāgā vimatsarāḥ //73cd//

⁵⁵¹ Ā 版では yadā 'sya となっている。これは yadā asya の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N 版を採用した。

⁵⁵² N 版では 9 章 67-77 偈に該当する。

⁵⁵³ Ā では sajante となっているが、英訳を参照し、N 版の sarjjante を採用した。

⁵⁵⁴ サナカとサナンダナは繰り返しになっており、英訳では訳されていないため、省略した。

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokavṛttānukāraṇāt /

hiraṇyagarbho bhagavān parameṣṭhī hy acintayat //74//

tasya roṣāt samutpannaḥ puruṣo 'rkkasamadyutiḥ /

arddhanārīnaravapus tejasā jvalanopamaḥ //75//

彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように、彼らが、世界の〔生産〕活動に無関心であったので、金色の胎児である神パラメーシュティンは熟考した。彼の怒りから人が生まれた。〔その者は〕太陽に等しい輝きをしており、半身が女性である男性の姿であり、炎によって非常に輝くようであった。

sarvaṃ tejomayaṃ jātam ādityasamatejasam /

vibhajātmānam⁵⁵⁵ ity uktvā tatraivāntaradhīyata //76//

「全てが輝いた状態で太陽に等しい輝きを持つ〔汝〕自身を分けよ。」と言って、まさにそこから〔ブラフマーは〕消えた。

evam uktvā dvidhā bhūtaḥ pṛthak strī puruṣaḥ pṛthak /

sa caikādaśadhā jajñe arddham ātmānam īśvaraḥ //77//

このように言われ、〔その者は〕別々に男性と女性の 2 つになった。かのイーシュヴァラは、自身の半分を 11 に分けた。

tenoktās te mahātmānaḥ sarva eva mahātmanā /

jagato bahulībhāvam adhikṛtya hitaiṣiṇaḥ //78//

lokavṛttāntahetor hi prayatadhvam atandritāḥ /

viśvaṃ viśvasya lokasya sthāpanāya hitāya ca //79//

彼ら全ての偉大な魂を持つ者たちは、かの偉大な者⁵⁵⁶に言われた。「世界の繁栄に関して幸福を祈り、世界の一部始終のために、全世界の全ての秩序と恩恵のために、倦むことなく努めなさい。」

evam uktvās tu rurudur dadruvuś ca samantataḥ /

rodanād dravaṇāc⁵⁵⁷ caiva rudrā nāmneti viśrutāḥ //80//

このように言われ、彼らは泣いて四方八方に走り回った。泣いて走ったために〔彼らは〕ルドラという名で知られている。

yair hi vyāptam idaṃ sarvaṃ trailokyaṃ sacarācaram /

teṣāṃ anuttarā⁵⁵⁸ loke sarvalokaparāyaṇāḥ //81//

彼らによって、この動くものや動かないものの全てが三界に満ちた。世界における彼ら

⁵⁵⁵ Ā 版では vibhajā 'tmānam となっている。これは vibhajā ātmānam の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

⁵⁵⁶ シヴァもしくはブラフマーを指していると思われるが、明確には分らない。

⁵⁵⁷ N 版では dravaṇāc となっている。意味はほぼ同じである。

⁵⁵⁸ N 版では anucārā となっている。この場合の訳は「世界における彼らの末裔たちが全世界の維持者となった。」となる。

の長たちが全世界の維持者となった。

naikanāgāyutabalā vikrāntās ca gaṇeśvarāḥ /

tatra yā sā mahābhāgā śaṃkarasyārdhakāyini //82//

prāg uktā tu mayā tubhyaṃ strī svayaṃbhor mukhodgatā /

kāyārdham dakṣiṇaṃ tasyāḥ śuklaṃ vāmaṃ tathā 'sitam //83//

〔彼らが〕何万もの象の力を持つ勇敢なガナの神々である。そこで、かの聖なるシャンカラの半身を持つ者が、私によってあなたに先に述べられた、ブラフマーの口から生じた女である。彼女の体の右半身は白く、左〔半身〕は黒い。

ātmānaṃ vibhajasveti soktā devī svayaṃbhuvā /

sā tu proktā dvidhā bhūtā śuklā kṛṣṇā ca vai dvijāḥ //84//

その女神は、「汝自身を分けよ」とスヴァヤンブー（自生者、ブラフマー）に言われた。そして言われた彼女は、白い者と黒い者の2つになった。再生族の者たちよ。

ch.10.1-17（ブラフマー創造神話）

sūta uvāca //

スータは言った。

evaṃ bhūteṣu lokeṣu brahmaṇā lokakartṛṇā /

yadā tā na pravarttante prajāḥ kenāpi hetunā // 1 //

このように、世界の創造者ブラフマーによって世界〔の生類〕が創られたが、それらの生類はいかなる原因によっても増えなかった。

tamomātrāvṛto brahmā tadāprabhṛti duḥkhitaḥ /

tataḥ sa vidadhe buddhim arthaniścayaḡāminim // 2 //

その時から、タマスの要素に包まれたブラフマーは落胆した。そして彼は目的を解決するために知性を働かせた。

athātmani⁵⁵⁹ samasrākṣīt tamomātrāṃ niyāmikāṃ /

rājasatvaṃ parājitya vartamānaṃ⁵⁶⁰ ca⁵⁶¹ dharmataḥ // 3 //

さて〔ブラフマーは〕自身の中でラジャス性を抑えて、規則正しく機能するものの抑制するタマス〔の要素〕のみを創った。

tapyate tena duḥkhena śokaṃ⁵⁶² cakre jagatpatiḥ /

⁵⁵⁹ Ā 版では athā 'tmāni となっている。これは atha ātmāni の連声を分かりやすく記述したものである。ここでは N 版の表記を採用した。

⁵⁶⁰ N 版では varttamānaṃ となっている。

⁵⁶¹ N 版では sa となっている。その場合、訳は「さて彼は自身の中でラジャス性を抑えて、規則正しく機能するものの抑制するタマス〔の要素〕のみを創った」となる。

tamaś ca vyanudat tasmād rajas tamasaṃ⁵⁶³ āvṛṇot // 4 //

世界の主（ブラフマー）は、その苦しみによって、傷ついて悲嘆にくれた。そしてタマスは取り除かれ、それ故にラジャスはタマスを覆った。

tat tamaḥ pratinuttaṃ vai mithunaṃ sa vyajāyata /

adharmāc caraṇāj⁵⁶⁴ jajñe himsā śokād ajāyata // 5 //

彼（ブラフマー）は、その追い払われたタマスを双子として生んだ。双子はアダルマである足⁵⁶⁵から生まれた。ショーカからヒンサーが生じた。

tatas tasmin samudbhūte mithune caraṇātmani /

tataś ca bhagavān āsīt prītaś caivam aśīśriyat // 6 //

そして、かの双子が〔ブラフマー〕自身の足から生まれた時、神（ブラフマー）は喜ぶと共に〔それらに〕依拠した。

svām tanuṃ sa tato brahmā tām apohad abhāsvarām /

dvidhākarot⁵⁶⁶ sa taṃ deham arddhena puruṣo 'bhavat // 7 //

そこで、かのブラフマーは輝かない自身の体を捨てた。彼はその体を 2 つに分け、〔体の〕半身が男性になった。

arddhena nārī sā tasya śatarūpā vyajāyata /

prākṛtām bhūtadhātrīm tām kāmān vai sṛṣṭavān vibhuḥ // 8 //

彼の半身がシャタルーパーという女性として生まれた。〔その後〕遍在する者（ブラフマー）は生類を支えるかの大地と欲望を創造した。

sā divaṃ pṛthivīm⁵⁶⁷ caiva mahimnā vyāpya dhiṣṭhitā /

brahmaṇaḥ sā tanuḥ pūrvā divaṃ⁵⁶⁸ āvṛtya⁵⁶⁹ tiṣṭhati // 9 //

彼女は偉大さによって天と地に満ちた。ブラフマーのかの以前の体は天を包んでいた。

yā tv ardhāt⁵⁷⁰ sṛjate nārī śatarūpā vyajāyata /

sā devī niyutaṇ taptvā tapaḥ paramaduścaram // 10 //

bhartāraṃ⁵⁷¹ dīptayaśasaṃ puruṣaṃ pratyapadyata /

sa vai svāyaṃbhavaḥ⁵⁷² pūrvam puruṣo manur ucyate // 11 //

⁵⁶² N 版では śokañ となっている。

⁵⁶³ Ā 版では tasam となっているが、英訳を参照し、N 版の tamasaṃ を採用した。

⁵⁶⁴ Ā 版では caraṇāmaj となっているが、英訳を参照し、N 版の caraṇāj を採用した。

⁵⁶⁵ 神のタマス性の表現と考えられる。

⁵⁶⁶ Ā 版では dvidhā 'karot となっている。これは dvidhā akarot の連声を分かりやすく記述したものである。ここでは N 版の表記を採用した。

⁵⁶⁷ N 版では pṛthivīm となっている。

⁵⁶⁸ Ā 版では didam となっているが、英訳を参照し、N 版の divaṃ を採用した。

⁵⁶⁹ N 版では āvṛtṭya となっている。

⁵⁷⁰ N 版では arddhāt となっている。

⁵⁷¹ N 版では bhartāran となっている。

半身から創られた女性であるシャタルーパー女神は、1 億年の間、最高に困難な苦行をし、〔彼女は〕夫として輝く名声の男性を得た。彼こそ最初のスヴァーヤンブヴァという男性マヌであると言われる。

tasyaikasaptatiyugaṃ manvantaram ihocyate /

labdhā tu puruṣaḥ patnīm śatarūpām ayonijām // 12 //

tayā sa ramate sārddham tasmāt⁵⁷³ sā ratir ucyate /

prathamaḥ saṃprayogaḥ sa kalpādaḥ samavartata⁵⁷⁴ // 13 //

その 71 の〔大〕ユガ期をこの世界ではマヌヴァンタラという。男性は、子宮から生まれた者ではないシャタルーパーを妻にし、彼は、彼女と共に楽しんだ。それゆえ彼女はラティと呼ばれる。最初の結合が、カルパの初めに行われた。

virājam asṛjat brahmā so 'bhavat puruṣo virāt /

samrāṇ mānasarūpāt⁵⁷⁵ tu vairājas tu manuḥ smṛtaḥ // 14 //

ブラフマーはヴィラージュを創った。そのヴィラージュは男性になった。支配者の精神的な姿であるために、ヴァイラージャ・マヌと言われる。

sa vairājaḥ prajāśargaḥ sa sarge puruṣo manuḥ /

vairājāt puruṣād vīrāc chaturūpā vyajāyata // 15 //

priyavratottānapādaḥ putrau putravatām varau /

kanye dve ca mahābhāge yābhyām jātāḥ prajāś tv imāḥ // 16 //

その人類創造はヴァイラージャである。創造において、かの男性はマヌになった。力強い男性ヴァイラージャとシャタルーパーは、さらに息子をもうけることを願って、プリヤヴラタとウッターナパーダという 2 人の息子をもうけた。さらに 2 人の吉祥な娘が〔生まれ〕、この 2 人からこれらの生類は生まれた。

devī nāmnā tathākūṭiḥ⁵⁷⁶ prasūtiś caiva te śubhe /

svāyambhuvaḥ⁵⁷⁷ prasūtin tu dakṣāya vyaśṛjat prabhuḥ // 17 //

吉祥な女神たちは、その名をアークーティとプラスーティという。スヴァーヤンブヴァ神（マヌ）はプラスーティをダクシャに与えた。

⁵⁷² N 版では svāyambhuvaḥ となっている。

⁵⁷³ Ā 版では tatmāt となっているが、英訳を参照し、N 版の tasmāt を採用した。

⁵⁷⁴ N 版では samavartata となっている。

⁵⁷⁵ Ā 版では sa samrāt sāsarūpāt となっている。英訳を参照し、N 版を採用したが、Ā 版の場合の訳は「彼は支配者の曲げられた（弓の、お辞儀した）姿であるために、ヴァイラージャ・マヌと言われる。」

⁵⁷⁶ Ā 版では tathā 'kūṭiḥ となっている。これは tathā ākūṭiḥ の連声を分かりやすく記述したものと思われる。ここでは N 版の表記を採用した。

⁵⁷⁷ N 版では svāyambhuvaḥ となっている。

ch.24.141⁵⁷⁸

prahīnaśokair vividhair bhūtaiḥ pariṣṭutāya ca /

naranārīśarīrāya devyāḥ priyakarāya ca //141⁵⁷⁹//

悲しみがない様々な生類によって讃えられる者に、男女の体を持つ者に、女神を喜ばせる者に〔敬礼する〕。

ch.41.36

tatraivomāvanaṃ nāma sarvalokeṣu viśrutam /

ardhanārīnaramrūpaṃ dhṛtavān yatra śaṃkaraḥ //36//

こここそウマーの森と言われる全世界において有名な〔場所〕⁵⁸⁰である。ここでシャンカラはアルダナーリーシュヴァラの姿を取ったのである。

⁵⁷⁸ ヴィシュヌによるシヴァ讃歌の一部である。

⁵⁷⁹ N版では24章138偈となっている。

⁵⁸⁰ 前後の文脈及び英訳とその註釈から意趣すると、この地はルドラとウマーが結婚をした地であり、ルドラの遊び場であり二人がジャンブードゥヴィーパを眺めた地であった。ここはカイラーサ山であり、ヒマーラヤ山脈の南にあり、キンナラの街が多く点在する地であるとされる。

Viṣṇu-purāṇa :N 版（底本）、H 版、AITM 版（英訳）

1.ch.7.1-19ab（アルダナーリーシュヴァラ創造神話）

śrīparāśara⁵⁸¹ uvāca //

吉祥なるパラージャラは言った。

tato 'bhidhyāyatas⁵⁸² tasya jajñire mānasāḥ⁵⁸³ prajāḥ /

taccharīrasamutpannaiḥ kār्याis taiḥ kāraṇaiḥ⁵⁸⁴ saha /

kṣetrajñāḥ samavarttanta gātrebhyas tasya dhīmataḥ //1⁵⁸⁵//

瞑想している彼（ブラフマー）に、その体から生じたかの形と機能を伴った、心からなる生類が生まれた。瞑想している彼（ブラフマー）の四肢から、知田者たちが生まれた。

te sarve samavarttanta ye mayā prāḡ udāhṛtāḥ⁵⁸⁶ /

devādyāḥ sthāvarāntās ca traiguṇyaviṣaye sthitāḥ //2//

彼らは皆、以前に私が言ったように生じた。神々を始めとして動かないものまでがトリグナから成るものの対象である。

evam bhūtāni sṛṣṭāni carāṇi sthāvarāṇi ca //3//

このように〔ブラフマーによって〕動くものや動かないものという存在が創られた。

yadāsyā tāḥ prajāḥ sarvā na vyavardhanta dhīmataḥ /

athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmāno 'sṛjat //4//

この賢者（ブラフマー）の〔創造した〕それら全ての生類が増えなかったので、〔ブラフマーは〕自分に似た心から生まれた他の息子たちを創った。

bhṛguṃ pulastyam pulaham kratum aṅgirasam tathā /

marīciṃ dakṣam atriṃ ca vasiṣṭham⁵⁸⁷ caiva mānasān⁵⁸⁸ //5//

すなわち、心から生まれた、ブリグ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、アングラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァスィシュタを〔創った〕。

nava brahmāṇa ity ete purāṇe niścayaṃ gatāḥ //6//

⁵⁸¹ H 版では parāśara となっている。この場合の訳は「パラージャラは言った」となる。

⁵⁸² 原文（N 版）では tatobhidhyāyatas となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、tato 'bhidhyāyatas とした。

⁵⁸³ H 版では mānasāḥ となっている。

⁵⁸⁴ 原文（N 版）では karaṇaiḥ となっており、この場合、訳は「原因と結果」という意味になる。英訳を参照し、ここでは H 版の kāraṇaiḥ を採用した。

⁵⁸⁵ H 版ではこの偈頌は 2ab となっており、これ以降の偈頌も原文（N 版）と異なっている。

⁵⁸⁶ H 版では udiritāḥ となっている。訳はほぼ同じである。

⁵⁸⁷ H 版では vasiṣṭham となっている。

⁵⁸⁸ H 版では mānasam となっている。

彼らは9人のブラフマーとしてプラナ聖典において定められている。

khyātiṃ bhūtiṃ ca saṃbhūtiṃ kṣamāṃ prītiṃ tathaiva ca /

sannatiṃ ca tathaivorjjāṃ anasūyāṃ tathaiva ca //7//

prasūtiṃ ca tataḥ sṛṣṭvā dadau teṣāṃ mahātmanām /

patnyo bhavadhvam ity uktvā teṣāṃ eva tu dattavān //8//⁵⁸⁹

まさに同様に、キヤーティ、ブーティ、サンブーティ、クシャマー、プリーティ、サンナティ、ウールツジャー、アナスーヤー、プラスーティを創り、「偉大な魂を持つ彼らの妻になれ」と言って、彼女らの創造者（ブラフマー）は〔9人の聖仙に彼女たちを〕与えた。

sanandanādayo ye ca pūrvasṛṣṭās⁵⁹⁰ tu vedhasā /

na te lokeṣv asajjanta nirapekṣāḥ prajāsu te //9//

サナンダナなど、創造者によって以前に創られた彼らは、世界における生類〔の創造〕に無関心で、創造しなかった。

sarve te 'bhyāgatajñānā⁵⁹¹ vītarāgā vimatsarāḥ /

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokasṛṣṭau⁵⁹² mahātmanaḥ //10//

brahmaṇo 'bhūn⁵⁹³ mahān krodhas⁵⁹⁴ trailokyadahanakṣamaḥ /

tasya krodhāt samudbhūtajvālāmālātidīpitam⁵⁹⁵ /

brahmaṇo 'bhūt⁵⁹⁶ tadā sarvaṃ trailokyam akhilaṃ mune //11//

彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬しなかった。このように彼らが世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは、三界を燃やすことが出来るほど大きな怒りを感じた。彼の怒りから、燃える火炎の輪が生じ、三界全てに満ちた。聖仙よ。

bhṛakuṭīkuṭilāt tasya lalāṭāt krodhadīpitāt /

samutpannas tadā rudro madhyāhnārkaśamaprabhaḥ //12//

ardhanārīnaravapuḥ pracaṇḍo 'tīsarīravān /

vibhajātmānam ity uktvā taṃ brahmāntardadhe tataḥ //13//

怒りに燃え、眉をしかめた彼の額から、その時、真昼の太陽に等しい輝きを持つ、半身

⁵⁸⁹ H版では7-8偈が欠如している。

⁵⁹⁰ H版では pūrvam sṛṣṭā となっている。

⁵⁹¹ H版では hy āgatajñānā となっている。訳はほぼ同じである。

⁵⁹² H版では lokasṛṣṭo となっているが、英訳を参照し、N版の lokasṛṣṭau を採用した。

⁵⁹³ 原文（N版）では brahmaṇobhūn となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、brahmaṇo 'bhūn とした。

⁵⁹⁴ H版では mahākrodas となっている。訳はほぼ同じである。

⁵⁹⁵ H版では samudbhūtajvālāmālāvidīpitam となっている。

⁵⁹⁶ 原文（N版）では brahmaṇobhūt となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、brahmaṇo 'bhūt とした。

が女性である男性の姿の、獯猛で大きな体を具えたルドラが生まれた。彼に「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、それからブラフマーは消えた。

tathokto 'sau⁵⁹⁷ dvidhā strītvam⁵⁹⁸ puruṣatvam tathā 'karot /

vibheda⁵⁹⁹ puruṣatvam ca daśadhā caikadhā punaḥ⁶⁰⁰ //14//

このように言われたその者は、女性部分と男性部分の2つを創った。そしてさらに男性部分を11に分けた。

saumyāsaumyais tathā śāntāśāntaiḥ⁶⁰¹ strītvam ca sa prabhuḥ /

vibheda⁶⁰² bahudhā devaḥ svarūpair asitaiḥ sitaiḥ //15//

そしてその神は女性部分を優しい者や粗野な者、穏やかな者、騒がしい者に分けた。さらに神は自身の姿を黒い者や白い者など多様に〔分けた〕。

tato brahmātmāsambhūtam pūrvam svāyambhuvam⁶⁰³ prabhuḥ /

ātmānam eva kṛtavān prajāpālye manuḥ⁶⁰⁴ dvija //16//

それから神は、ブラフマー自身から生まれ、〔ブラフマー〕自身でもある前のスヴァーヤンブヴァをマヌとして〔創造の〕守護〔の仕事〕に任命した。再生族の者よ。

śatarūpām ca tāṃ nārīṃ taponirdhūtakalmaṣām /

svāyambhuvo manur devaḥ patnīve⁶⁰⁵ jagrhe prabhuḥ⁶⁰⁶ //17//

スヴァーヤンブヴァである主マヌ神は、妻として、苦行によって汚れを除去したかの女性シャタルーパーを娶った。

tasmāt tu⁶⁰⁷ puruṣād devī śatarūpā⁶⁰⁸ vyajāyata /

priyavratottānapādaḥ prasūtyākūṭisaṃjñitam //18//

kanyādvayam ca dharmajña rūpaudāryaguṇānvitam /19ab

その男性とシャタルーパー女神は、プリヤヴラタとウッターナパーダ〔という息子〕た

⁵⁹⁷ 原文 (N 版) では tathoktosau となっているが、アヴァグラハ記号の省略と考え、tathokto 'sau とした。

⁵⁹⁸ H 版では stritvam となっている。

⁵⁹⁹ H 版では bibheda となっている。訳はほぼ同じである。

⁶⁰⁰ H 版では ca saḥ となっている。この場合、訳は「そして彼は男性部分を11に分けた」となる。

⁶⁰¹ 原文 (N 版) では tadā śāntā 'śāntaiḥ となっており、H 版では tathā śāntā śāntaiḥ となっている。ここでは平行句である Kūrma-p. 1.11.6ab を参照し、tathā śāntāśāntaiḥ とした。

⁶⁰² H 版では bibheda となっている。訳はほぼ同じである。

⁶⁰³ H 版では sāyambhuvam となっている。

⁶⁰⁴ 原文 (N 版) では manuḥ となっているが、英訳を参照し、H 版の manuḥ を採用した。

⁶⁰⁵ H 版では palnīve となっている。

⁶⁰⁶ H 版では vibhuḥ となっている。訳は同じである。

⁶⁰⁷ H 版では tasmāc ca となっている。訳はほぼ同じである。

⁶⁰⁸ H 版では satarūpā となっている。

ちとプラスーティとアーケーティと呼ばれる美貌と寛大さと徳をそなえた二人の娘たちをもうけた。ダルマを知る者よ。